

---

# 天罰なんて怖くない！

ヒロユキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天罰なんて怖くない！

### 【Nコード】

N7257H

### 【作者名】

ヒロユキ

### 【あらすじ】

田舎の亡き祖父の家で一人暮らしを始めた榊春臣。そんな彼の元にひよんなことから自らを神と名乗る手のひらサイズの少女が現れる。輝く紅髪を持った彼女の名は緋桐乃夜叉媛<sup>ひむろのやしあひ</sup>。神の世界と人間の世界の狭間に入り込んでしまったという彼女を、元の世界にもどす方法を見つけるため、共同生活を始めるのだが。最近の物語

時雨川ゆずりが去り、再びのどかな日常が戻ってきたある日、春臣たちは椿の提案で友人を集めた夜叉媛のためのパーティーを開くことになる。その準備を始める春臣だったが、彼の体には新たな

異変が起こり始め、さらに、杉下家では神の力を狙う不穏な動きが  
……。

## 1 引越し(前書き)

1 2 / 3 ジャンルを「ファンタジー」に変更しました。

## 1 引越し

闇を抜ける感覚があった。

閉じていた目を開けると、揺れるように、細切れに、木漏れ日が差している。僅かに開けた眠たい瞳には、焼きついた光がくるくると螺旋を描いているように見えた。

午後の太陽の穏やかなぬくもりである。

軽トラックの助手席に座るさかきはるおみ榊春臣の体は、まだら模様<sup>さかきはるおみ</sup>に照らされていた。逃げ惑うように、その光は春臣の上を通り過ぎていく。まるで、体が天へと浮遊していくような心地をよさを感じていた春臣は、急に戻ってきたラジオの音声に我に戻った。

それまでノイズとなっていた車内のラジオが、再び、女性の声で交通情報を話し始めたのである。

どうやらバックミラーに見えるトンネルを抜けたためらしい。

春臣は前へとせり出し気味だった体勢を、もぞもぞと身じろぎしながら座りなおす。

それに気がついたのか、隣の運転席にいる男が聞いた。

「ありゃ？ 起きたのか？」

車の進行方向に目をやりながらも春臣の方を一瞥する。地味な灰色の作業服を着たいかつい体つきの男は今度はハンドルを回しながら

「ずいぶん長い間寝ていたな」

と微笑んだ。

「すみません。かなり寝心地が良かったので」

春臣は膝の上に乗せたりリュックを落とさないように抱き寄せて、そう返した。

感覚ではそれほど長い間眠っていたように思えないのだが、そう言われたのだから、そうなのだろう。

「いや、そんなことを謝らなくていいんだよ。怒ってるわけじゃない」

そう穏やかに言ったのは親戚の楠康夫くすのきやすおという男だった。母の弟に当たる人で、春臣にとっては叔父ということになる。確か今年で40歳になったはずで、春臣とは20歳以上も離れていた。気さくでおおらかな人で、時々見せる笑顔はその人柄の良さを感じさせる。

「車の中じゃ、何もすることもないし。ずっとそこに座って起きておけつても難儀な話だしな」

「はあ……でも康夫叔父さんに長時間わざわざ運転してもらっている身で眠っているというのは、人間として配慮に欠けると思います」「いって、いって、そんな他人行儀に。春臣と俺の仲だろうが、いくらでも好きなだけ眠ればいい」

しかし、彼は前方を見ながら眉を動かす。

「まあ、でも眠れるのはここまでだな。この道の先はちつとばかり揺れる」

春臣がフロントガラスの方に視線を向けると、軽トラックは坂道

を上り、ちよつとした山道に差し掛かるところだった。

道の両脇から垂れ下がるように伸びている木々の枝がさらに鬱蒼とその量を増し、ちよつとトンネルのような形を作っていた。

陽が遮られ、車内は薄暗くなる。

それと同時に、道がコンクリートから舗装のされていない砂利道に変わったようで、ガタゴトと不規則に跳ねるように揺れた。

「この道を越えれば、親父の家はもうすぐさね」

康夫がそう告げた。

「しかし、本当にこんなところでよかったのかい？」

目的地の家に到着し、地面の上に降り立った春臣に康夫が腑に落ちなさそうに訊いた。

「いくら家賃がタダだからって、こんな辺鄙<sup>へんび</sup>な場所に住まなくてもなあ。だいたい大学にはここから一時間以上かかるんだろう？ もっと町の近くにもアパートを借りればよかったじゃないか」

春臣は彼の言葉にゆっくり首を振った。この選択をしたのにはもちろん理由がある。

「俺、あんまり人が多いところは苦手なんで、このくらいの場所がちよつどいいんですよ」

すると康夫は意外そうに春臣を見た。

「そんな若いのに、まるで隠居したがるじいさんみたいなことを言うなあ」

そういわれることには慣れていたので、特に不快に思うことも無い。

余裕を見せるように、胸を張ったまま空を見上げる。

「俺は人いきれでむせるような、ごみごみした俗世が嫌いなんですよ。何だか妙に生臭くって、イライラするんです」

「冗談っぽく言いながら自分で苦笑してしまう。康夫もそれを見て微笑み、

「春臣、今のは本格的に世捨て人みたいな台詞だな。まさか、もう人生に疲れてたとか言い出すんじゃないかあるまいな」

と呆れた。

春臣と康夫の目の前には背後の竹林に囲まれるように青瓦で横長の小ぢんまりとした一軒家がある。

今年から大学に通うことになった春臣が住まうことになった家である。

元々は康夫の父、つまり春臣の祖父であるが、その人が生前に住んでいた家だ。

住む人が居なくなり、安く売りに出されていたこの家を祖父が購入したのだという。

その祖父が亡くなったのが今年の一月。長年患ってきたガンが原因だった。



十年前に妻に先立たれ、一人寂しくも老後を過ごしていた祖父は、ある時ふと思い立つたらしく、こののどかな田園風景の残る柵町さくまちに引越してきたのだという。昔から自宅に菜園を作るのが夢だったという祖父はこの家の脇に小さな畑を耕し、ささやかではあるが、ここで半自給自足の暮らしを成り立たせていた。

しかし、それもあまり長くは続かなかった。

祖父の身を病魔が襲ったのは、その生活を始めてから、僅か二年後である。

そして、今はその主を失った家。

そう思うとどこか古びて忘れ去られ、家全体が青く変色したような寂寥感が漂っているように春臣は感じた。祖父の魂はまだ完全に浄化せず、かすかな体温をこの家に残しているのかもしれない。そう思うと同時に、柔らかい風が吹いた。

ふと振り返ると、康夫はすでに隣におらず、玄関先のポーチに入り、鍵を明けようとしていた。春臣が駆け寄ると、彼は誰かが入り込んだ形跡がないか確認した後、ドアに鍵を差し込む。

かちりと封印が解かれ、事もなくドアは開いた。

少々生ぬるく、湿気たような空気が頬に触れる。

すると、康夫はこちらに向き直り、その鍵を大事そうに手渡した。

「ほら、この鍵は今日から春臣が持つんだぞ」

「は、はい」

康夫の予想外に真剣な声に、春臣は緊張した面持ちでどもりなが

らも受け取る。

これが責任の重さというやつだろうか。

手のひらに置かれた鍵からはその本来の重み以上の重圧を感じる気がした。

無くさないようにとすぐにポケットにしまう。

すると、彼は大事な儀式であるかのように、それを見届けると春臣の肩を叩いた。

「今日からお前が、一応この家の主になるわけだ。しっかり気張れ

よ」

「主ですか……」

事実は事実だが、自分にはずいぶん大層な肩書きだな、春臣は思う。

そんな役を全うできるだろうか、と。

しかし、これから始まる一人暮らしに自身に強い渴を入れてここまで来たのだ。

そう考え直す。

実家が名残惜しくならないようにと、両親にはこの家まで送ってくれることも断わっている。

それくらいの重みも背負えるくらいでなければどうする。

そうだ、自分は今日から一人前の大人になるために変わるのだ。

今までは親の庇護下において、太平楽で気楽な生活を送ってきたが、今日からは違う。全ての事柄に自らの責任と決断が伴う生活がこれから待っている。

自信は、まだない。

だが、怖気づくわけにはいかなかった。

「大丈夫。俺なら大丈夫だ」

そう奮い立たせるように自分に言い聞かせて、トラックの方で荷下ろしを始めた康夫の後を追った。

## 2 なぞの老人

荷下ろしは、それほどかからず、夕方には終わった。

たった二人での作業とは言えど、たかだか一人分の荷物であるので大した苦労もなく、難なく終了した。

そこで、康夫が一休みしようと提案し、ダンボールに占領された居間で、春臣とその叔父は淹れたばかりのお茶を啜る。

春臣は荷物から、出発する前に母が持たせてくれた羊かんも少しばかり切り分け、皿に並べた。

「これは美味しいな」

叔父はその羊かんを口に運びながら、嬉々としてそう漏らした。

「何でも、家の近くにある老舗の和菓子屋さんで買ってきたらしいです。時々テレビでも紹介されるくらい人気の品らしくて」

春臣は今朝母が言っていたことをそのまま話した。そして、自分も爪楊枝で一欠けらを口に放り込む。

うん、なるほど確かにおいしい。

和菓子などそれほど興味があるわけではないが、甘すぎず、ほどよい苦味もあり、知らず口の中で解けるように消えていく感覚は、美味と賞賛するに相応しいものだと思った。

こんなことを言うと大げさかもしれないが、これから自分が目標にすべき一人前の人物像とはこんな感じの人間なのかもしれないと、

春臣は考える。

手持ち無沙汰にテレビをつけると、見たことも無いローカルの二ユーエス番組が放送中だった。

レポーターがマイクを片手に農作業中と思しき老人に話しかけている。最近の農作物の出来を訊ねているらしい。

それを見ていると、何を思い出したのか急に隣で見ていた康夫が手を叩いた。

「そつだ、忘れとつた」

あまりに唐突であつたため、むせながら春臣が聞き返す。

「はい？ なんですか？」

「いやね、この町に親父が生きていたころに世話になつた人がいるんだがな、その人のところに挨拶をしにいかねければならないことを思い出してな」

「世話になつた人？」

きよとんとしている春臣はそのことを全く知らなかつた。

「ああ、親父がここに引つ越してきたときに何かと世話をしてくれた人だな。杉下さんという人なんだ」

「へえ、そつだつたんですか」

「そうそう、親父が死んだ後もこの家のことを今日まで管理してもらつていてな。全く頭が上がらないくらいの御仁だぞ。暗くならな  
い内にちよつと挨拶に行こうか。春臣のことも紹介しないといかん  
し」

祖父がそれほどお世話になっているとなれば、自分もこれから何かと厄介になることが多いかもしれないと考え、先ほど食べていた羊かんの一箱を抱え、康夫と共に春臣はトラックに乗り込んだ。今のうちから人間関係の基礎を作っておくことは悪いことではない。

陽が傾いた空の下、一台の軽トラックが田んぼの間を走っていく。電信柱などを除けば、これといった障害物もなく、歩いている人影も皆無だ。物寂しい、田舎道。

そんな道のりを車に揺られること数十分、その杉下という人の家に到着した。

車を降り、その邸宅を一目見た春臣からは思わず、「うへえ」と声が漏れた。

おそらくこの辺りでは有名な地主と言われても驚かないくらい立派な日本家屋が建っている。

「驚いたか？」

にやりと口の端を吊り上げ、康夫が訊く。

「ええ、ずいぶん大きなお宅ですね。俺、こんな家、歴史の教科書でしかみたことありませんよ」

「ハハ、確かに教科書に載ってもおかしくなくらい、歴史のある建物には違いない。俺もはじめて見た時には目を剥いたもんさ」

「お金持ちの方なんですか？」

恐る恐るという感じで春臣が訊く。

「俺も詳しくは知らないが、なんでも杉下家っていうのはこの辺り

じやかなり顔が利く地元の名士って話だ。昔この辺りで権勢を奮っていた武将の一族らしいぞ」

叔父は軽い調子で春臣の緊張を助長させるようなこと言うと、先の中に入って行ってしまった。

慌ててその後を追い、古めかしい門を通ると、すぐ目の前、綺麗に隅々まで手入れが行き届いた庭があった。そこには鯉が泳ぐ池があり、見事に形を整えられた松などがなんとも言えない風情を醸しだしている。

それらはまるで、ここに住んでいるのはただ者ではないぞ、と警告してきているようで、春臣は再び緊張で身震いした。

呼び鈴を鳴らし、玄関の三和土たたきで康夫と共に待っていると、奥の方から在りし日の祖父を彷彿とさせるような、白髪のほっそりとした老人が歩いてきた。

どうやら、その人物こそが祖父が生前に世話になっていたという杉下老人らしい。

長い年月の積み重なりが目に映る形で現れたかのように、老人の顔には深い皺が刻まれている。その表情が叔父の顔を見て、ふっとほころんだ。

「おう、楠君か、そろそろ来ると思うとつたよ」

視覚情報を基に分析すると、相当な高齢者であるように見えるのだが、春臣に彼の言葉が想像以上に明朗で歯切れのいい発音で届いた。

そこからは目で見える以上に、若者のような澁刺はつらつとした生命力を感じる。

「よう来たな。ささ、上がりなさい」

挨拶もそこそこに、その老人は齒の抜けた笑顔で手招きしながら、頭を下げる二人を家の中に案内した。春臣は靴を脱ぐと、叔父と共にその老人の後についていった。

案内されたのは、障子に囲まれた座敷だった。

職人が貼り付けたのだろうか、その障子には貼り付けられた金箔と墨の色で龍の絵が一面に描かれていた。

どこを向くわけでもなくちらちらと見ていると、その龍と目が合っ  
つてしまい、どきりとした。

まるで睨まれているような気がしたのである。どうにも居心地が悪い。

春臣はそんな敵かな雰囲気のある場所にくることは皆無だったのだ、さらに緊張の度合いが増してしまう。すると不安そうな面持ちの春臣を見て慮ったのか、杉下老人が話しかけてきた。

「坊主、こんなところに来るのは初めてか？」

「は、はい。俺の、実家の近くにはこんな立派な家はありませんから」

「そうか、そうか。今ではこんな家屋もその辺の都会じゃとんと見かけんからの。今の若い者には、そりゃあ珍しかろうて」

そして、すっかり髪が薄くなった後頭部の辺りを指でぼりぼりと搔くところ言った。

「なんでも、あの哲夫の孫ということじゃったな」

哲夫というのは、祖父の名前である。



「そうです。榊 春臣と言います」

緊張の面持ちでお辞儀をした。

「春臣、君か」

老人の皺がゆっくりと動く。

「はい。今年で大学に入学しまして、あの祖父の家でこれから一人暮らしを始めることになりました。俺、まだ慣れないことばかりで、その、もしかするとこれから何かとお世話になるかもしれないと思いますので、あの、どうかよろしくお願いします」

なんとかそれだけ言って再びぎこちなく春臣は頭を下げる。それを聞いた杉下老人はふむふむと何度か頷き、

「そうか、なるほど。確かにそう聞いておったよ。哲夫も時々、自慢の孫じゃと話をしておったな。中々頭のいい子じゃとな」

と嬉しそうに話した。

「頭がいいなんて、そんな……俺は」

そう言い掛けた瞬間、今度は杉下老人と目が合った。ぐっと思が詰まる。

なぜか、射竦められるというか、貫かれるような視線で見られた気がして、春臣はたじろいだのだ。

なぜかは分からないが、そう感じた。

「いやいや、謙遜せずともよい。わしはその眼を見たときから分かったよ、一点の曇りなき聡明そうめいそうな眼をしておる」

再び、老人の口が静かに動く。

春臣はそんなことを言われたことは全く初めてのことで、いますぐ自分がどんな目をしているのか鏡で確認したい気持ちに駆られた。

猛烈に買い被られている気がして、冷や汗が垂れる。

すると、白い髭をたくわえた杉下老人の優しそうな顔になった。

「大丈夫じゃ。心配せずとも春臣君なら、一人暮らしもそれほど苦勞せずやっていけるじゃろう」

その言葉は物事を看破する、老成された深みを帯びているように聞こえる。

しかし、春臣はいまいち信用が出来なかった。

自分にそれほど力があるとは思えなかったのである。

本当かよ。適当なこと、言ってないですよ。とつつこみたくなつた。

妙に悟つたような言い方をして、若者をその気にさせるのは年長いた者の特権にも思えた。

それから後は叔父と杉下老人が世間話をはじめた。春臣が口を挟むことのできない、祖父との思い出話や、祖父の家を管理してもらっていたことにもろもろについてである。

いつの間にか時が過ぎ、春臣が出しそびれていた羊かんの箱を手渡すと、そろそろお暇やすみしようということ立ち上がった。杉下老人

はそれを引きとめようとしたが、叔父が早く帰らなければいけないこともあり、丁寧に断わった。

そして玄関まで歩き、いよいよ別れの挨拶をしようというときになって、再び、杉下老人が春臣に話しかけた。

横に伸びた白髭を丸めるようにいじりながら、

「君は……」

と何かを言いかける。

「はい？」

ふいを衝かれて気の抜けた返事をする、何を思ってたか、老人は何の脈絡もなくこんなことを訊いた。

「君は、神様を信じているかね」

あまりの唐突さに、春臣はおいおい、新手の宗教勧誘ですか、と疑いたくなる。しかし、仮にそうだとすればあまりにも直球で滑稽なほどだ。

「神様ですか？」

「そうじゃ、日本には昔から八百万やおよびひゃくまんの神があるというのは知っておるじゃろっ？」

やおよろず？

はて？ なんのことやら。

「ああ、はい、はい」

つい知ったかぶって春臣は肯定の返事をする。

というよりも老人から、当然知っておろうな、という無言のプレッシャーを感じ取ったため、否定の選択肢は取れなかったのだが。

「神を敬い、日々の健康と未来の繁栄を願うことは尊きことじゃ」

杉下老人はまるで今この近くに神がいるかのように僅かに横に視線を向けながらそう言う。

しかし、春臣はそう言われて、目を伏せて辟易した。

尊きこと、か。

そもそも神の存在などどうでもいい春臣にとっては、そんな彼自身の価値観を目の前に突き出されることなど、うんざりするだけなのだ。

長話になれば面倒だな、と心の中で舌打ちする。  
すると、老人が意外なことを口にした。

「君がこれから暮らすというあの家、哲夫のやつが祀っておったぞ」「祀る、何をです?」

「だから、神棚じゃよ。神への祈りを捧げるあの神棚じゃ」

そう言われて、春臣の脳内に神社のミニチュアが思い浮かぶ。確か、あんなものを飾っている家があった。

神棚、と言えばそのことだろう。

「そんなものがあつたんですか？」

先ほど家に入ったときには見当たらなかつた気がする。

それに祖父がそんなものを祀っていたなど、まったく知りもしなかつた。

春臣が知る限り、祖父はそんなことをするような人間には見えなかつた。

もっと、自分の足で道を切り開くことを望むような開拓の生き方を選びそうな人間だつたのである。自らの命が神に握られているなどと誰かから教えられれば、むしろ拳を振りかざし、反駁はんぱくするかもしれない。

そんな祖父だつた。

「ああ、ほれほど高価でもない神棚じゃつたが、熱心に拝んでおつたようだつたの」

そう言われたが、にわかには信じがたい。

「春臣君もそうするがよい。勉学がはかどるように毎日祈ることは善いことじゃからの」

「は、はあ……」

「家に帰つたらさつそく礼拝するといひ。引越してきた報告をするためにもな」

「分かりました。早速、そうしてみます」

そうは言つたものの、これといって春臣は神への信仰心など持ち合わせていない。

当然のことながらこれから毎日欠かさず神への祈りするとは到底思えなかったが、ともかく愛想よくお辞儀をして、その場を後にした。まさかあの老人が毎日春臣の行動を見張るわけではあるまいし、そう答えておくのが一つの礼儀であると思ったのである。

見送りに手を振りながら、春臣と康夫は軽トラックに乗り込み、豪勢な杉木家を後にする。

帰り道の車中の中では康夫が春臣にいろいろと今日のことを話しかけてきたが、春臣はどこか上の空という感じで適当に返事をしながら、頭では先ほどの杉下老人のことが浮かんでいた。

なんだか、妙な老人だったな。

春臣の中にはそんな、苦味にも似た印象が残っていた。

### 3 緋色の幻

祖父の、もとい、一人暮らしの自宅に戻ると、叔父はすぐさま帰りの支度を始めた。

「もっと早く帰る予定だったからなあ」

意外にも杉下家で時間を食ってしまったために叔父はかなり慌てているようだった。

「カミサンにどやされるからなあ」

などとぼやきながら、そそくさと荷物をまとめ、軽トラックに乗り込む。はやく帰らないと晩御飯は抜き、ということだ。春臣はあまり知らないが、どうやらかなりの恐妻らしい。

「一晩くらい泊まっていてもいいんじゃないですか？」

と春臣は引き止めたが、彼は明日は仕事だからと断固として首を振った。さすがにここから仕事場に向かうには遠すぎるのだ。少々残念な気がしたが、仕方ない。

そして準備を済まし、エンジンがかかると、ヘッドライトが夕闇を照らすと、叔父は元気に、

「しっかりやれよ」

と春臣に手を振ってくれた。

「俺も時々は様子を見に来ると思うが、分からないことや困ったこ

とがあれば、町の人たちに聞けばいいからな。もちろんあの杉下さんの家の人も頼っていいぞ」

「はい、今日は一日、ありがとうございました」

春臣はそうお辞儀をして、あっけなく消えていく叔父のトラックに手を振った。

そして、いよいよ、一人になった。

なんとも、体の支えになる杖を失ったような心地である。

家の前にしばらく名残惜しく立ち尽くしていたが、西方の山々に消え行く夕陽の残光を見ると、とても我慢できないほどの寂しさがこみ上げてくるようで、思わず目を逸らし、家の中へと引き返した。

しかし、春臣は玄関の扉を閉めながら、叔父が最後に言っていた言葉を思い出す。

困ったら誰かを頼ればいい。

それを思い出して、とても心強い気持ちになる。

これからは、生活を一人で組み立て、確立していかねければならないが、やはり最初はそれも全てうまくいくわけではないだろう。

春臣だけではなく、それは全ての人に当てはまる事実に違いない。

しかし、そんな時に周囲の人間との繋がりとというのは、ありがたい。

きっと一人暮らしで、いざという時の支えが周囲に構築されているかということも大切なことなのだ。



人はいつでも一人で生きていけるものではない。  
それは間違いない。  
春臣はそれを静かに確信する。

そういえば、と思い出したのは、夕食を平らげ、居間でテレビを見ているときだった。

春臣が鼻<sup>ひそ</sup>肩<sup>かた</sup>しているチームが連続のホームランとヒットを浴び、軽い絶望感に浸りながら、ホームベースを踏む選手を眺めていると、実況中継のアナウンサーが途中で勝利の女神がどうのという表現を使ったのが耳に入った。

そう、女神。神、だ。

杉下老人が帰り際に話していたことである。

「神棚が、どうとかって言ってたな」

確か話ではあの祖父が熱心に毎日拝んでいたらしい。  
祖父の考えも変えてしまうほどに、神に祈るといふことはそれほどすばらしいことなのだろうか。

そう思うと、春臣にうずうずとした興味が湧いた。  
荷物を運び込む時には気がつかなかったのだが、いったい家のどこに設置してあるのだろうか。

野球中継をしているテレビを切ると、立ち上がって、神棚のありかを探した。春臣の中で昔見た、そのイメージが蘇る。

大抵、部屋の天井近くにあるんだよな。

そう推測して、早速捜索に取り掛かる。

しかし、案外すぐには見つからなかった。

一階の居間にはないし、他の台所、風呂場、トイレ（あるとは思えないが）、玄関など見渡したが見当たらなかったのである。

となると、残るは二階だ。

階段の明りをつけ、一步一步上っていく。

ギシギシ。と板が軋む音。

考えてみれば二階にはダンスと勉強机を祖父が寝室に使っていた小部屋に運んだだけで、それ以来足を踏み入れていない。

あの時は重い机を落とさない集中していたせいもあり、よく見ていなかったのだろう。

小部屋でなければ、その向かいにある物置部屋だが、そんな薄暗い場所に神棚を設置するとも思えない。

電気をつけ、部屋に入ると、案の定、勉強机の真向かい側の何も無い壁の上に神棚があった。

「これ、だな」

春臣の視線の先に、見事なお社の模型が壁に吊ってある。知識がないもので、よく分からないが、その神社を模したと思しきミニチュアには文字が書かれた三枚の御札がはめ込まれている。

そしてその手前には、円形の鏡。それから捧げ物だろうか？ なにやらお皿や、花瓶のような置物、何かの木の枝が差し込まれている。

さらに社の上には神の偉大さを示すような注連縄が取り付けられていた。

全体をみると、部屋のそこだけが異空間であるような儼かで神聖な雰囲気漂っている。

やはり神がいる場所だからだろうか。

「とりあえず、礼拝か？」

そう独り言を言って春臣はその場で正座をする。

杉下老人に言われた通りに、ここへ越してきた報告を兼ねて、これからの無事な生活を祈ることにした。

「……ええと」

何度か手を叩くのだっただろうか。逡巡する。

そこで春臣は拝み方をすっかり忘れていることに気がついた。確かそういう作法があったはずだ。

この少年、実はいつも初詣に行くときにいつも親から教えてもらっていたのだが、その度に忘れてしまうのだから、情けないことがある。

適当でいいか、春臣は妥協し、二度手を叩き神棚に向かって拝んだ。

目を瞑り、初めてではあるが真剣に、心の中で神への祈りを捧げる。

そして、数秒後だった。

春臣の体に奇妙な変化が訪れる。

ふいに額に汗が流れたのを感じたのである。  
あれ、今日はそんなに暑かったのだろうか。  
変に思い、拭おうと額に手の甲を当てると、

「冷たい……」

今度はなんと手のひらがずいぶんひんやりと冷たかったのである。  
まさか、と思うが引越し早々、風邪でも引いてしまったのかもしいない。

これは参った。

先が思いやられるな。

苦笑しながら目を開け、立ち上がるうとして、再び違和感に気がつく。

なんだ？

部屋が揺れている気がする。心なしか、部屋の蛍光灯の明りが弱まったようだ。

「あれ？」

そして、なぜか春臣は気持ちの意味もなくすっと落ち込むのが分かった。

家の中にいるのに、まるで深い森の暗がり立ち、周囲で木々がざわめいているような、言葉にしがたい漠然とした恐怖を感じていた。

それは世界中から自分以外の人間が消えてしまったような、絶対

の孤独の間に佇んでいるような、そんな心地である。

畳に肩膝を突きながら、見上げると、今度は神棚の様子がおかしい。

そこだけ、空間が歪んでしまったように、空気が揺らいでいる。ちよつど、夏の日には遠くの道路のアスファルトを見たような、あの感じ。

陽炎だ。家の中に陽炎が立ち上っている。

そして、聞こえてくるのは、

しゃりん、しゃりん、しゃりん。

鈴の音。

しゃりん、しゃりん、しゃりん。

近づいて、遠のいて。

しゃりん、しゃりん、しゃりん。

確かに、耳元に響く。

しゃりん、しゃりん、しゃりん、しゃりん、しゃりん……。

夢でも見ているような薄ぼんやりとした意識の中、春臣は見た。

目の前に蛍のように儚げな光が現れるのを。

そして、次第にその周囲の空間に何かの輪郭が浮かび上がってくる。

それは、人間。

それも少女のようだ。

古く、平安時代を髣髴とさせる、艶やかな色彩の十二単を身に纏い、優美な笑みを湛えている、少女。

薄紅の艶めいた柔らかそうな唇、白い肌の中央にすっと通った鼻筋、袖からは人形のような細かい指先が覗いている。

それだけを見れば普通の人間だが、唯一ただものではないと感じさせ、春臣の目を引く部分があった。

その少女が簪かんざしで纏めた、繊細そうな髪の色だ。

紅あかい。

一目見て、春臣は心の中で、そう呟く。

そう、彼女の髪はまるで消え行く夕陽の光に浸し、染めたように燃え盛る炎のような鮮やかな緋色をしているのである。

しかもその紅の髪は蛍光灯の光を受け、金色こんじきの煌めきを見せていた。

さながら、その髪の毛一本一本に幾ばくもの星の輝きが閉じ込められているようでもある。

春臣はその美しさに思わず、息を呑んだ。

そして、その美しい少女を見つめたまま、気がつかないうちに気を失っていた。

#### 4 幽霊さん？

「う、ううん？」

春臣は唸りながら部屋の畳の上で目を覚ました。いつのまにか、体を丸めるように寝転がっていた。

すぐに目をこすって立ち上がる。

そしてそれと同時に、自分が現在どのような状況で、いったい何が原因で気を失っていたのかのかがすぐさま脳内でフラッシュバックされた。

礼拝。

立ちくらみ。

めまい。

陽炎。

そして、赤い髪の少女。

この部屋で何が起こったのだろうか。

腕を持ち上げるとなんだか肩が重い。ひどく、疲れているようである。

とりあえず、身を起こし、周囲の様子を見渡した。

先ずは、神棚を見上げる。

先ほどのように原因不明の陽炎が揺らめいていることはない。



何も無い、元の状態だった。

と、いうことは。

そこから導き出される事実がある。

それは、最初から何も起こっておらず、つまり全ては自分が見た幻覚だったのかもしれない、ということだ。

春臣はそれを一つの仮説として考えた。

なにしろ、今日は引越しの作業をしていてかなり疲れていた。人間とは往々にして、このように弱っているときにありもしないものを見てしまう可能性が高い。

こめかみのあたりを押さえて俯いた。

疲れている。そうだ、疲れていたのだ。

しかし。

しかしそれにしても、あまりにはっきりとした幻覚を見てしまったものだとぞっとする。

あの少女のように見えた人物は誰であったのだろう。しかも、あの見たことも無いような綺麗な赤髪。

幻覚は自分が作り出してしまうものだろうから、少なくとも自分の過去の記憶がその材料となっている確立は高い。

しかし、覚えが無いのだ。

思い出そうとすればするほど、春臣はあんな人物を過去に見たこととは無いという事実が明白になってくる。

当然だ。見たことがないのだ。

これはいったいどういことだろう。

そう思うと、なんだか気味が悪い。

「おい」

まさか、自分は幽霊でも見てしまったというのだろうか。

あれはどうみても祖父ではなかったから、その昔、この辺りで死んだ少女の霊といったところか？

春臣は顎に手を当てて考えた。

二つ目の仮説である。

「おうい」

だが、彼女は平安時代の貴族の十二単のような着物を着ていた。

それは不可解な点である。

幽霊にしてはかなり時代が古すぎないか、ということだ。そもそも春臣は自分の周囲でそんな昔の霊を見たという話は聞いたことが無い。

よほど、この世への未練が強かったのだろうか。

「おい。おぬし」

だが、やはり春臣はあの赤い髪が気になる。

場合によつては、春臣の目に映った人物は日本人ではないということも考えられた。

「おい、いい加減にせんか！」

「え？」

春臣は呼びかけてきた声に驚いて周囲を見渡す。知らないうちに誰かから声をかけられていたようだ。

しかもこの部屋のどこかから、聞こえた。  
一人暮らしの自分の部屋からである。

消えたと思っていた幽霊はまだこの部屋にいたというのか。

「だ、誰だ！ どこにいる？」

反射的に春臣は立ち上がり、いつ襲い掛かれても抵抗できるようにファイティングポーズで構える。

それで実体のない幽霊に立ち向かえるか分からないが、しないよりはマシだ。

「こつちじゃ、こつち！」

再び何者かの声。

「こつち？」

背後を擦りかえってみると、自分の勉強机の上でなにやら動いているものがある。

眼をこすってよく見ると、なんと、間違いなく先ほどの幻覚で見た赤い髪の少女である。

その長い髪を鈴の飾りがついた簪で束ね、この時代のものとは思えない布を重ねた服装のまま、こちらを見上げて立っている。

しかし、先ほどと違うのは、その大きさ。

あまりにも小さいのである。

見たところ、勉強机から春臣を見上げている少女の背丈はせいぜい十センチがいいところだ。トランプのカードを二つ縦に並べれば

余裕でその影に隠れることができるほどだろう。

春臣が想像していた、幽霊が醸しだす超然的な恐ろしさの欠片も無い姿である。

そして、その少女が机の上でぴょんぴょんと跳ねながら、

「おい、こつちじゃ！」

と叫んでいる。

なんだ、どういうことだ？

まだ自分は夢を見ているというのだろうか。

「全く、早く頭を下げんか！ わしは神じゃぞ！」

しかし、それが春臣にはなんのことだか、さっぱり分からない。春臣に限らず、突然こんな小さな生き物が現れ、神だなんだといわれたところで、冷静な判断のできる人間はいないだろう。

だが、それにはお構いなしに、その少女はさらに尖った声で何やら居丈高にまくしたてる。

「このわしの呼びかけにも答えず、今までうたたね転寝とはどうりょっけんいう料簡じや！」

転寝、ああ、気絶していたことか。

春臣はぐつと腰を下ろし、その少女と同じ目線の高さに合わせて。すると、突然目の前に巨大な顔が出現したのに驚いたのか、彼女はおよよと後ずさった。

その様子から春臣は彼女には自分に対する敵意はないと判断した。

彼女の方がこちらを恐れているようなのである。

少なくとも自分に怨みがあつて化けて出たようには見えない。

「さ、下れ。この無礼者。近う寄りすぎじゃ」

そう放った言葉にもさつきまでの強さはない。

「これは何かの夢なのか？」

頭を抱えた春臣は、迷つた挙句彼女にそう聞いた。

「はあ？ 何をわけの判らぬことを言つておる。全て現実じゃ。わしは……」

「幽霊か？」

彼女が言う前に先を越して春臣が言う。

「何？」

その少女は口元を手で隠したまま怪訝そうに目を瞬かせた。

「大昔から成仏できずにこの世をさま迷っているんだらう？」

春臣はそう訊いた。

これが夢で無いのであれば、おそらく目の前に立っているこの小人は、生者とは思えない。

きつと、とても長い年月を経たことにより、死者としての魂の力が磨り減り、今のように小さな姿になつてしまつたのだらう。

その理屈で考えれば彼女の古風な恰好も納得がいく。

春臣は自身の中で確信した。

「はあ？ わしを誰だと心得るか、わしは……」

「だから幽霊さんだろ？」

少しも臆することなく春臣はそう言った。

「ち、ちがうー！」

彼女は服の袖を握ったまま嫌々をするようにじたばたと上下に手を振った。その憤怒の仕草はどちらかというと、なかなか可愛らしい。服の袖がゆさゆさと揺れる。

「かわいそうになあ、何かの間違いでこんなところに入って来たんだろ」

おそらく先ほど感じた奇妙な感覚は彼女がこの部屋に入り込んでしまったことからの影響だったに違いない。

春臣が考えていることはおおよそんなことだった。

そして、不憫に思った春臣は、自分ではどうすることも出来ないと思いつながら、ともかくこの場所から彼女を移動させてやることを考えを思いつく。

彼女の横に右の手の平を上に向けて差し出す。

「お、おい、何をするつもりじゃ」

驚いていた彼女は近くにあった鉛筆立ての影に隠れた。

「ここに乘ってくれ。大丈夫、握りつぶしたりはしない。ともかく

「ここから出してやるよ」

「そ、それはまことか？」

「嘘じゃねえよ。突然こんな場所にはいりこんで困ってるんだろ、元にした場所に戻してやるよ」

春臣がそう話しかけると、彼女は今度は一回だけ嬉しそうにぴよんと飛び跳ねた。

「それは願っても無いことじゃ。それならばわしの世界まで道案内を頼むぞ」

ずいぶんと笑顔で言われたが、それは一緒に三途の川を渡れという間接的な命令なのだろうか。

春臣の顔が引きつる。

死ねと申されますか。

この若き身で。

冗談じゃない。

さすがに一緒にあの世にまで行くわけにはいかないが、

「あ、あんたの世界への行き方は知らないが、とにかく好きな場所まで連れて行ってやるよ」

とともかく手助けをしたいという意向を示す。

「近くの川でも行けばいいのか？」

「近くの川？ それはいいが、ともかくここがどこなのかを知りたいのじ」

「場所を言えばいいのか？」

春臣はとりあえず、「ここが日本であり、次に県名、市の名前に終町だということ告げた。

すると、彼女は日本という国名には理解を示したが、後はぼかんとした表情で、

「知らん」

とそれだけ。

さらに、

「分からん」

ときたものだ。

まあ、昔の霊ならば、この時代の地名など知っているはずなどないので、当然だろうと春臣は結論付ける。

「ともかく、手の上に乗せてくれるというなら、そうさせてもらおうぞ」

彼女はそう言うのと、とことこと春臣の手のひらの近くまで歩き、直前ではたと立ち止まって、

「本当に、何もせんじやるつな？」

と白い眼で念を押す。

「しないって」

それでようやく警戒を解いたのか、彼女はもぞもぞと動きにくそ



うな着物を着たままで手のひらによじ登った。

#### 4 幽霊さん？（後書き）

少々、終わりが中途半端になってしまいました。すみません。

## 5 続・幽霊さん？

彼女は手のひらの中央辺りまで来るとその場で正座する。

そして、くるりと首を向けると、何か礼を言うのかと思いきや、

「ふう、しかし人の手のひらの上というのはなかなか座り心地が悪いのう。こうふにふにでこぼことしておると、不安定この上ない」

とそんなことをぼやいた。

せつかく彼女に協力してやろうとしている矢先に不満を吐露されるのはあまりいい気持ちはしなかったが、春臣は無視して聞き流すことにした。

しかし、手のひらの上で彼女を見ると、改めてその小ささがわかる。

物語にある一寸法師や親指姫とはおそらくこのくらいスケールの話なのだろう。こんなに小さいと世界の巨大さがしみじみと実感できそうである。

そして、いざ手のひらを持ち上げようとして、はっとした。

「あれ？」

春臣が不思議に感じたのも無理はない。

意外にも幽霊と思っていた彼女はおよそこの大きさの生物が持つにふさわしいだけの重さを備えていたのである。

少々ずしりときた。

「幽霊なのに、重たいんだ」

すると、彼女は振り向き冷たい視線を向けてきた。てつきり重いと云ったことに対して怒っているのかと思いきや、

「お主、人の話を聞けんのか。わしは神であるとさつき申したであらう、そのような靈魂とは違うのじゃ」

「神い？」

春臣はあからさまに胡散臭そうな目つきで彼女を見る。

「左様、わしは神なのじゃ、お主のような人の子が、そう簡単に目に触れることすら出来ぬほどの存在なのだぞ」

「ははあ、なるほど、それでさつきからそんなに偉そうな態度なのか」

春臣は合点がいったと頷く。

長い年月、この世をさ迷ったせいで、過去のことを忘れた彼女は自分のことを神だと勘違いをしているのかもしれない、と思ったのである。

すると彼女は春臣の言葉に顔色を変えて怒り出した。

「ぶ、無礼者！ 神に向かって偉そうとは何たる暴言じゃ。かくなる上は天罰を……」

「はいはい、分かりましたよ。申し訳ありませんでした、神様。以後気をつけます。これで気が済みましたか？」

感情の無い棒読みの台詞を吐く。

「そんな気持ちのこもらぬ上辺だけの謝罪など聞きとらない。その

場にひれ伏し、許しを請え、さすれば、今回限りは見逃してやる。それを拒むというなら、お、お主のようなちっぽけな存在など、わしの小指の先でばいばいのばいじゃぞー！」

自分より明らかに小さな彼女は頬を膨らませ、怒り心頭といったように地団太を踏む。しかし、春臣はそんな彼女に対し、冷静に対応した。

「ちょっと落ち着いてくれよ。そうは言うが、俺が協力しないとあんたはここからどこにもいけないんじゃないのか？ どうやって来たのかも分からないだろう？ 俺の協力なしで一人で帰れるのか？」

「ぐ、ぐう……こ、小癪なことを言う」

すると、彼女は痛いところを衝かれたと、苦い表情をした。春臣としては彼女に対する絶好の武器を得た気持ちで意地悪く笑った。

「なんなら、このまま外に放り出してやってもいいんだぜ。あんたがそれでいいならな。だが、このあたりの夜道は危険だぞ。猪とか出るって言っし、下手すりゃ野犬に襲われるかもな」

「や、野犬？」

彼女の顔色が今度はみるみる青ざめたのが分かる。

「そ、それは御免じゃ。外には出さんでくれ」

その様子があまりにも必死な様子だったので、春臣は言いすぎたかもしれないと反省する。

「ごめん、ごめん。脅かして悪かったよ。そんなことしないって」

だが、そもそも幽霊ならば最初から死んでいるはずで、野犬に襲われたところで問題があるようには思えない。しかし、その点を指摘すれば、激怒することは目に見えている。そのため、その言葉は喉の奥に押し留めた。

「ぐうう、こ、こやつ、童の分際で神を愚弄するなど、無礼千般ぶれいせんぱんじや、ただではすまさんぞ。わしがこんな姿でなければ少しは神力もしんりょく使えように……」

などと彼女はしばらくぶつぶつと言っていたが、春臣はとりあえず、彼女を手に乗せたまま、部屋を出、階段を下りることにする。

どこに当てがあるわけではないが、この家の近くに古い墓でもあるのだろうか。春臣は知らないが、彼女ならそれくらい、靈感（幽霊だけに）というやつで分かるやもしれない。

狭い廊下を進み右手の居間まで来ると、庭に面したガラス戸を開けた。

外はもうすっかり濃い闇である。

遠くの方にちらほらと人がいることを示す民家と外灯の明りが点在しているが、あまりにも頼りない。

軒下に置いてあるサンダルを履く。

すると、手のひらに乗っている彼女は建物の外に出て行くのが分かったようで、

「お、お主、外には出んど、先ほどそう言ったではないか。これはどういづつもりじゃ」

と明らかに怯えた声で言った。手のひらにしがみついてくる。

「いや、家の中にもあんたが元いた場所は分からないと思ったからさ、外に出ようと思って。大丈夫だよ、俺がいるから」

「はあ……」

「それでどうだ？ 何か感じないか？ こつちの方向に行ったらいいとか、インスピレーションみたいなもんをさ」

春臣は彼女を手のひらに乗せたまま、ダウジングをするようにいろいろな方向に向けてみた。

「そんなことを急に言われてもな。というか、もう少し丁寧に扱え、お、落ちてしまつではないか」

悲鳴に視線を向けると、彼女は遠心力のためか、体を左右に大きく揺らしていた。ふらつく手のひらの上では、危うく転がり落ちそうである。春臣は慌てて、手のひらを静止させた。

「ああ、ごめん。つい調子に乗っちゃって」

「調子に乗られて振り落とされてしまつなど、洒落にならんぞ。全く、どうしてこんなことに」

春臣はとりあえず、彼女が安全なように注意しながら、もう数歩だけ前に出た。

すると、近くの草陰からは実家では聞いたことの無いような虫の音がよく聞こえてくる。ふと、やはり遠くに来てしまったのだ、ということを実感し、心細くなった。

その感情から目を逸らすために、彼女に訊いた。

「今度はどうだ？ 何かこの場所のことが分かるか？」

「うづむ、変じゃの。特にこの地がなんらかの霊域というわけでもないようじゃ」

彼女はしゃりと鈴がついた簪を鳴らして首を捻った。

「……」

そしてしばらく沈黙した後、急に彼女が顔を上げる。

「あ！」

「どうした？」

何事か、と春臣は驚く。

「や……」

「や？」

「さむい」

「寒い？」

まさか、幽霊のくせに風邪でもひいたわけじゃないだろうな。

外の温度は春臣の感じる限り、それほど冷たくはない。ましてや、彼女は何枚もの布を纏っているだ、むしろ暑いくらいではないかと思ふ。

妙だ、とは感じたが、すぐさま、

「部屋に入ればいいか？」

と提案する。



「そ、そうしてくれ」

彼女は頷いて応じた。

春臣は彼女を連れて部屋に引き返し、外の空気が入らないよう、ガラス戸を閉めた。カーテンを閉め、ちゃぶ台の前に腰を下ろす。

「どうだ？ これで少しはよくなったか？」

「い、いや、それが、まだ……」

見ると奇妙なことに、先ほどよりも彼女は寒がっているようで、震える身体を止めようと、両腕を掴んでいる。

明らかに様子がおかしい。

「何か温かい物でも飲むか？ お茶ならあるぞ」

と訊くが、彼女は首を振る。

「いや、おそらくそうしたところで無駄じゃ、これはそういう類のもので収まる震えではない」

それから、彼女はまるで高熱に浮かされているように次第に荒い呼吸となり、手のひらの上でぺたりと横たわってしまった。手足を折り曲げ、身体を丸めながら、歯を鳴らしている。

しかも、

「なんだ？ 薄くなってる」

なんと、彼女を形作っている体の輪郭が薄れていき、手のひらが透けて見え始めたのである。

これには春臣も狼狽した。

「おいおい、どういうことだよ。あんた、死ぬのか？」

いや、すでに死んでいる幽霊なら、それはつまるところ、成仏と云ったところだろうが、今の彼女はとも成仏できるような心穏やかな状態には見えない。むしろ、とても苦しんでいるのだ。

とすると、これは何だ？

「た、頼みがある」

震えながら彼女が口を開く。

「なんだ？」

「わしを、先ほどの部屋に、戻してくれないか？」

それは息も絶え絶えで、今わの際を悟った病人の今生最後の願いに聞こえた。どうすることも出来ない春臣はともかくその頼みを聞いてやるうと、消えそうになっている彼女を両手でそっと包み込むように持ち、居間を飛び出て、階段を駆け上った。

扉を乱暴に蹴り開け、彼女が最初に立っていた机の上に寝かせてやる。

「どうだ？ こゝでいいのか？」

と訊くと、やはり苦しそうではあるが、彼女はこくりと頷いた。

そのまま眠りに落ちるように瞳を閉じる。

すると、不思議なことに、どこからともなく、彼女の周りに小さな光が集まり始める。

春臣はその様子に眼を見張った。

「……？」

豆電球よりも遙かにか弱く、小さな光ではあるが、彼女を包み込むとまるで吸い込まれるように横たわった彼女の中に消えていく。そして、それが繰り返されるにつれ、再び彼女に生気が蘇ったのか、ぼんやりとしていた輪郭がくつきりと形を戻し始めた。

こころなしに、彼女のか細くなっていた呼吸も落ち着いてきたようである。体の震えもいつの間にか止まっていた。

「大丈夫か？」

と訊くと、

「ああ、なんとかあったようじゃな」

彼女は横たわったまま、首だけ起こしてそう答えた。

## 6 神様の力

「今のはいつたいなんだったんだ？ 病気か何かか？」

「いや、これは人間がかかるような病ではない。簡単に言つと、わしという存在が、消えかかっていたのじゃ」

「存在が、消える？ 幽霊だから？」

春臣が真顔で訊ねると、彼女は不快そうに額に皺を寄せた。先ほどの勢いを取り戻したようで、ぴよんと立ち上がる。

「……お主、そんなに死にたいのか？」

「はあ？」

「先ほどから何度も言っておるように、わしは幽霊なんぞではない！ 絶対で、人が畏怖すべき高貴な神だと言っておるうが！ その二つの耳は何のためについておる！ このたわけが！」

そう言われても、こんな威厳の欠片も無い小さな彼女では、春臣には何の迫力も実感もない。挙句の果てに、

「もしかして、この家に憑いてる座敷童とかか？ だから、この家から出ようとするとああなっただら」

と、こんなことを言い出す始末だ。

すると、彼女は説明することを諦めたのか、ふうつと深い溜息をつく。

「……もうよい、そんなに信じぬというのなら、やはりここは実力行使じゃな。物分りの悪い手合いには、力の差を見せつけるのが一番じゃ」

「何か手品でも見せるのか？」

「そんなちやちなものではない。ぬしが愚弄したわしがどれほどの神威を持つておる崇高な神であるか身をもって知り、恐れ、慄き、ひれ伏し、命乞いするがよいのじゃ！」

「はあ、左様で」

どうでもいい春臣は椅子に座り、ぱたぱたと片手で顔で扇いだ。

「余裕でいられるのも今のうちじゃ、神力を取り戻したわしの真の実力を見せてくれよう！」

そう力強く啖呵たんかを切った彼女はその気になったようで、指先までかかった袖をまくる。何が起るのかと見ていると、ふいに右手を後ろに持つていった。

その手が後ろ髪を束ねていた鈴付きの太い針のような簪を掴む。

そして、春臣と目が合った彼女が刹那、あやしくにやりと笑うと、ためらいもなく一気にそれを引き抜いた。

しゃりん。

簪の先端についた鈴が揺れ、常闇を照らすような綺麗な音を奏でる。

結われていた彼女の紅蓮の髪が、いともたやすくはらりと解かれ、それがまた光を受けながら、鮮やかな輝きを見せた。

さながら、コマ送りのように。

可憐に揺れた、

それは、緋のうねり。

目の前で見ている春臣には、それが、まるでこの世のものでないような、神聖で、鮮烈な、舞い散る花の美が具現したような、そんな強烈な印象を受けた。

はっと喉を掴まれた様に、息が止まる。

そして、今度は彼女が引き抜いた簪に目がいった。

美しい髪に気を取られてすぐに気がつかなかったが、いつの間にか彼女が引き抜いたはずの簪は、なんと別のものになってしまった。

その名を春臣は知らなかったが、それは神楽鈴と呼ばれ、持ち手と反対の柄の先端を囲むようにいくつもの鈴が段々に取り付けられた神楽舞に使用される道具であった。

そして、彼女はその神楽鈴を両手で支えるように持つと、頭上高くに掲げ、念を込めるように目を閉じる。

その瞬間、ぴりりと春臣の頬の辺りの筋肉が引きつるよう反応した。

なにか、ただならぬことが起きそうな雰囲気である。

「うわ、待て。止める！」

しかし、声で制すも時既に遅し。

精神集中の極みに達した彼女はためらいもなく、空気を袈裟切りで両断する。

「はあっ!」

しゃりりん。

思わず、春臣は両手で目を庇った。

どうなるんだ?

「……」

しかし、何も起こらない。

ふわっとした空気が前髪の辺りを掠めたといったくらいで、何か体に異変があるわけでもないようだ。

しっかり五秒経って、恐る恐る目を開けてみると、そこには神楽鈴を振り下ろしたままの彼女がいる。

「あれ?」

「何だ、何も起こらな……?」

言いかけて、春臣はあることに気づく。

妙だ、どうにも彼女の様子がおかしい。

先ほどよりも一センチほど縮んだような。

「な、な、なにことか!」

どうやら彼女も自身の視線の高さが低くなったのに気がついたのか、右往左往としている。

「あんたが小さくなったのか?」

「まさか、こんなはずでは。おい、これはどういじりいじりじゃ」

完全に我を見失った彼女が判る筈も無いことを訊く。

「そんなもの、こっちが訊きたいところだ」

ただでさえ、この少女の存在が意味不明なのだ。これ以上頭の中に疑問を詰め込んだところでまともに返答できるわけがない。

「うん？ 待てよ。そもそもわしは……」

すると動きを止めた彼女は不思議そうに服の袖を持ち上げて自分の姿をしげしげと見始めた。

「どうした？」

「うつむ、そういうこと、なのか？」

なにやら独り言を言いながら考え込んでいるようだが、春臣には皆目分らない。

そこで少しの沈黙があり、耐え切れず春臣が質問した。

「それで、神様。俺はこれからあんたに何をしてやればいいんだ？」

「お、ようやく神だと信用したようじゃの。わしの力、恐れ入ったか！」

春臣からの呼び方が変わったことに彼女の顔がぱつと花咲くようにほころぶ。

しかし、力の差を見せるなどと大見得切っておきながら、自分が縮んでいたのでは、正直春臣にとって説得力の欠片も無い。

「恐れ入ってないけど、とりあえずはあんたのことを信じることに



するよ。それだけ必死なんだしな」

一生懸命徒競走を走りきった子供を褒めてやるような感覚で春臣は言う。

「む、なんだかわしが人間にとつもなく低く見られておる。蔑みの視線を感じるぞ。ぐぬぬ、この屈辱、どうしてくれよう」

やはりその言い草が気に入らなかったのか、彼女は齒軋りをした。まあ、言葉のとおり、春臣は彼女を上から低く見ているのだが。

「ともかく、あんたはここに居ればさっきみたいなことにはならないうつてのか？」

「そうじゃな。とりあえずは安全のようじゃ。この通りぴんぴんじやからの」

「それで、これからどうする？」

「そうじゃのう、わしやこの状況に対する説明はおいおいすることにして、まずは……」

すると、彼女は意味ありげに流し目で春臣を見る。

「まずは？」

「わしは腹が減っておるぞ」

「それで？」

うんざりするよつに聞くと彼女は、

「何か旨い食べ物を持って来い。話はそれからじゃな」

と召使と相對しているかのように命令する。

まるで、すでにこの家の主の地位は乗っ取ったと言わんばかりの  
厚顔無地こうがんむじっぷりである。

「……」

その横柄な態度に何も言い返せなくなる春臣。

ともかく、そういうわけで春臣は突然自宅に現れた神様の接待を  
することになったのである。

## 7 その名は

「むう、これは天下一品といっても過言ではないほど美味なる食べ物ぞ」

彼女は春臣が小さく食べやすいように刻み皿に山と盛ったそれを、次から次へと口に運びながら、至福の表情で絶賛した。

生まれて初めて食べたのか、そのおいしさに頬が落ちるといった様子だ。

「いったいこれは何という食べ物なのじゃ？」

「羊かんだよ、羊かん。まあ、中に栗が入ってるから栗羊かんだな」

春臣はちゃぶ台の向かい側に座り、自分用に薄く切ったその羊かんをつつきながらそう説明した。

一方先ほどの神様はというと、ちゃぶ台の上に直接座り、一口ごとに大げさと思えるほど驚嘆の声を上げながら、また一欠けら食べた。

「うまい、本当にうまいぞ。人間が持つてくるものなどそれほど期待はしていなかったが、これは今までわしが食べたものの中で、他のものを蹴落とし、一気に上位に上り詰めたな」

「……それはあまりに言い過ぎじゃないか？」

いくら旨くても、こんな和菓子が一番になるなど、神様は普段どんなものを食べているのだろう、と春臣は本気で疑問に思う。

しかし、彼女は持論を曲げるつもりはないらしく、

「いや、こんな旨いものなら毎日食べても飽きん」

断固として首を横に振った。

「まあ、確かになんと云ってもかなり高いからな。母さんが言っただけで、確か一竿が、三千円もするんだぜ。全く信じられねえよ」

そう云った春臣としては、そもそもこれほど高価なものを彼女に差し出すつもりはなかったのだ。

だが、引越したての貧相な冷蔵庫の中身は、悲しいかな、この高級羊かんと少しばかりの調味料を冷却するためだけに使用されていた。

そのため選択の余地なく、昼間の残りのそれに、ためらいながらも包丁を乗せることになったのである。

滅多に口にもすることもない、この高級な和菓子を。

だが、彼女は的を射ていない顔で、

「さんぜんえん？ この世界の通貨価値など分からんから、高いと言われてもわしにはさっぱりじゃがの」

とまた一口放り込んだ。

「ああ、確かにそうか」

言うだけ無駄だったか、と春臣は羊かんと一緒に空しさもかみ締めめる。

そして、もう一度目の前でむしゃむしゃと高級和菓子を食べる彼女を見つめた。

どうにも不思議な状況だ、と手のひらに顎を乗せて考える。

数時間前、突如一人暮らしの榊春臣の家に出現した小さな少女が、自らを神と名乗り、傲慢な態度で食べ物を要求した、この状況である。

しかも、残念なことに、どうやら何かの間違いや、幻覚、夢、催眠術の類ではないらしいという事実が分かっていった。絶望的なほどに現実での出来事なのである。

もはや、間違はなく、引越し早々風邪をひいてしまうという不運よりも、よっぽど厄介な事態に陥っていることは明白だった。

この世界に神様がいるとすれば、いったいどういつつもりで……。あ、そうか、と春臣は思いなおした。

神は目の前にいた。

春臣の自宅で、おいしそうに羊かんを食べていた。

「……」

思考が停止する瞬間を感じる。

これはあれだ、あれ。  
世も末、だ。

「それで、神様。一つ聞いていいかな？」

そこで春臣は質問することにした。

気を取り直し、この少女のことを知ることから始めようと考えた

のである。

「うん、なんじゃ？」

「神様ならさ、あなたにもあるんだろ、名前」

「……名前、じゃと？」

するとなぜか彼女はあれほど嬉しそうだった表情が一変、そのまま硬直したように、ぽとりと羊かんを取り落とす。

思いがけないことに、もしかすると、自分はとても無礼なことを聞いてしまったのか、と後悔する。

「聞いたら何かまずいのか？」

「……」

その質問にも反応を示さず、彼女は羊かんの山を見つめたままだ。安心してしまったように見える。

その場の沈黙が怖いので、仕方なく、春臣は自分の名前の紹介をした。

「ち、ちなみにさ、俺は榊春臣って言うんだ」

「榊、春臣？」

「そう、榊春臣。字、分かるか？ なんなら紙に書いてもいいけど

……」

「いい名じゃな」

てつきり、再び烈火のごとく怒り始めるかもしれないと思っていたが、聞こえてきた彼女の声はとても穏和だった。

なんと表情を見れば、静かに微笑んでさえいる。

「そうか？ 俺、自分の名前がいいなんて言われたのは初めてだな」  
「おぬしのご両親がつけたのかや？」

「ああ、そうだよ。実は俺も結構気に入ってるんだ、この名前」

誇らしげに胸を張ってみせる。

「そうか。それはとても良いことじゃな。その授かりし、名。大事にせよ」

春臣は彼女の穏やかな言動が釈然としない気分だったが、とりあえず頷いた。

「……それはいいが、あんた、いや、神様はどんな名前なんだ？  
教えてくれないのか？」

すると、彼女は今度はひどく困惑した顔になり、

「ええと、それは……」

と口をもごもごと動かす。

「それは？」

「……わ、わしの、名は……ひ、ひばりのやしや緋桐乃夜叉媛、じゃ」

自分の名前を言えばいいだけなのに、彼女は緊張してどもりながら言った。

「ひびりのやしやひめ？」

春臣はひばり鸚鵡返しする。

自分でも言いながら納得するように彼女は頷いた。

「そうじゃ、それが、わしの名じゃ」

それならばと、

「そうか、それなら緋桐乃夜叉媛はさ」

春臣が彼女の名前を言いかけると、

「こら、神の名じゃぞ。そうそう気安く呼ぶでない！」

と彼女は羊かんを一握り、投げつけてきた。

「うわっ」

咄嗟によけたつもりだったが、ぺとりと粘着質のある羊かんが無慈悲にTシャツの上に落ちて転がり、畳に落ちる。

「こ、このやる。この羊かん高いんだぞ！ 食べ物で粗末にするな

よー」

「ふん、そんなことは知らんな」

彼女はぶい、とそっぽを向く。

春臣は深い溜息をついた。

全く、怒ったと思ったら、優しくなり、急におどおどしたと思ったら、今度はまた怒り出す。神様とは、こんな面倒者の集まりなのだろうか、うんざりする。

自分では手に余るな。



せつかく名前を聞き出せたのに、それを呼べないのであれば意味が無い。

「うづん……」

それでは仕方ない、としばらく考えあぐねたところで、春臣が妥協案を出す。

「じゃあ、媛子ってところでいいか？」

「うん？ 媛、子？」

突然のことに彼女は目を瞬かせる。

「このまま神様って呼び続けるのは、なんだか変な緊張があるし、他の神様と区別する意味でもさ」

「媛子、か……」

「ほら、小さくて妖精みたいな神様なんだ。子をつけるのがお似合いだろ。なにより呼びやすいし、覚えやすい」

我ながら良いひらめきだと、心の中で自画自賛した。

「媛子か、なかなか」

見ると、彼女も何やらまんざらでもないような表情だった。

もしかするとそういった愛称で呼ばれる経験が新鮮なのだろうか。春臣には分からないが、たとえ人間から呼ばれたとしても嬉しいのかもしれない。

「いいだろう？」

しかし、春臣が同意を促すと、

「お、お主の都合で勝手に呼び名を決められてたまるか」

と再び視線を逸らす。

自分の呼び名を人間に決められたくない、という神としての断固たるプライドなのか、途端に表情が一変し、それほど強めではないものの、反発の姿勢を示した。

しかし、その少々弱腰の姿勢を好機と見た春臣は、ここで条件を出す。

「まあまあ、俺のことも春臣って呼び捨てでいいからよ」

「交換条件ということか？」

「ああ、それに、俺はあんたに対しては食べ物のもてなしもしたし、消えそうになってるところを助けてやることもしたんだぜ。それくらいのこと、許してくれたっていいじゃないか？ な、神様」

さらにここぞと切り札を出すと、彼女も先ほどの瀕死の状況を思い出したようで、途端に口ごもる。

「どうやらかなり効果があったようだ。」

「むづ、そうじゃなあ……」

彼女の小さな瞳が困ったようにきよろきよろと伏せがちに動き、何か決めたように小さく頷くと、

「確かにお主に助けてもらったことは確かじゃ。それに、神としてはこうして食べ物をもたらした分のお礼もせねばならんしな」

と急に歩み寄りの発言をした。  
だが、春臣にはその意図が簡単に透かし見える。

彼女は「媛子」と呼んでもらえる状況を、自分からそう頼む以外に、恩を返すという必然の義務を口実にして、あたかも自然であるかのように作り出そうとしているのだ。

「じゃあ、媛子って呼んでいいか？」

遠慮がちに勝利を確信した春臣が訊いた。

「ううむ、仕方がない。ならば、特別に許可しよう。言っておくが、本当に特別じゃぞ。わしは多少なりとも、ぬしに助けてもらった恩義があるから仕方がなく、いいか？ 仕方がなく、許可するのじゃからな」

上辺では、自分の本意ではないことを殊更強調しながら、本心ではそう呼んでもらえることを嬉しく感じていることが丸見えな言葉に春臣は思わず、にやついてしまう。

人間を超越した神と言えど、これほどまでに感情が筒抜けに分かると、滑稽に思えてきたのである。

「な、なんじゃ、その顔は。どうして笑っておる」

「なんでもないって。媛子」

春臣がさっそくその名前を使うと、彼女は怒ろうと振り上げた手を止め、胸の内に葛藤を抱えた、複雑な表情を浮かべる。

「そ、そうか」

なんだよ、気に入ってるなら素直に喜べばいいものを。

しかし、素直でない神様もなかなか面白い。

自分はもしかすると、とても奇妙なものを見ているのではないかと思うと、春臣は苦笑を禁じえなかった。

## 8 神の世、人の世

そこで春臣は一度、間を置くように湯のみのお茶を飲み干し、気を取り直すと、媛子に質問した。

「それで、さつき羊かん食べながら話してたが、媛子はこの世界じゃなく、神様の世界からやってきたって話だったよな？」

媛子の頭がぴくりと反応してこちらを見る。

「そうじゃ、わしは神様じゃからな。神の国から来た」

「その神の国ってのは、簡単に人間の世界と行き来できるものなのか？」

春臣はちゃぶ台の上で右手の人差し指と中指を足に見立て、ひよこひよここと歩かせる。

すると、歩いてきた姫子がそれに立ちふさがるように両手を広げた。

「いや、それはそう簡単ともいえぬ。基本的に人間が住んでおる世界と我々が住んでいる世界は全くの別物になるからじゃ」

「別物、ねえ……」

「そもそもが次元の違う話なのじゃ、魚が陸の上で生活できぬように、人間も海の中では生活できぬじゃろう？ 別の世界ではお互い存在することすらとても難しい」

春臣は海の中で溺れている自分を思い浮かべながら頷いた。

「なるほどね。けど、媛子はこの人間の世界にいるじゃないか」

「そうじゃ、それについては今から説明するが、我々には人間の世界にも来ることの出来る特別な状況というものがある」

「……それは何だ？」

「簡単じゃ。我々、神がこちらの世界で使う魂の容れ物があればいいのじゃ。例えばの、神社などの神聖な場所には、神体しんたいと呼ばれる神の魂が宿るものが存在する。それはいわゆる依り代よしろと呼ばれ、神がこちらの世界に来る時の媒体となっておるのじゃ」

「ふうん、依り代か」

魂が宿るなどと言われても、途方もなく確かめようのないことだが、それを肯定しなければ話は先に進まないようなので、春臣はためらいながらも頷いた。

そのまま媛子は続ける。

「まあ、その神体に限らず、この世を作る森羅万象全てのものに神は乗り移ることが出来る。木、岩、山、川、花など、なんでもよい。ちなみに人間などの動物にも魂を宿らせることが可能じゃ」

「はあ……」

「つまり、こちらの世界での体となるものを手に入れて初めて、神は顕現けんげんし、この世界で人々に何らかの干渉をしたり、力を発揮出来るわけじゃな」

と媛子は自慢するように胸を張る。

「なるほど、そういうことか。じゃあ、質問だけど」

「なんじゃ？」

「それなら媛子はいったい何を依り代にこの世に顕現してるわけ？」

すると、彼女は生徒を褒める教師のように、よくぞ聞いたと嬉しそうに手を叩く。

「良い質問じゃ。それなのじゃが、そのことがわしがここに来てしまった理由にも関係しておる」

「うん？」

「実は、わしは今、何かを依り代にしてこの世界に顕現しているわけではないのじゃ」

そう言っつて姫子はタネも仕掛けもないと言い張るように、その場でくるりと身体を回転させてみせる。

「それはまたどういうことだ？ 媛子が特異体質とか？」

春臣には彼女の言葉が何を示すのか、理解できず、質問する。

しかし、彼女は首を振り、

「いや、わしが特別なのではない。実はこの空間が特異なのじゃ」

と想定外のことを言った。

「この空間がだつて？」

「そうじゃ。実はそんなことになっておる理由が、この部屋の中にはあるのじゃが、それが春臣には分かるか？」

その言葉で春臣はあることに気がつく。この場所にあつて、神と関係し、空間に影響を与えているとすれば。

「神棚と関係してるのか！」

そう叫んで勢いよく後ろを振り返る。

「そうじゃ、それがこの空間に通常とは異なる影響を与えておる」  
しかし、春臣には疑問が浮かぶ。

「で、でもさ、確か神棚って神社の小型の模型みたいなものなんだから？ さっきの理論を用いると、それでも神体っていう依り代が必要じゃないのか？ 媛子が依り代なしに、こうして目に見える状態で顕現できている理由にはならない気がするけど」

「おお、またしても良い質問じゃな。確かに春臣の言うとおりじゃ」  
媛子はちゃぶ台の上を春臣の方へ近づいてきた。

「ちょっとわしをあの神棚のところまで連れて行ってくれぬか。おそらくそれで謎が解けるじやろう」

どうやら先ほどのように手のひらに乗せて連れて行けということらしい。春臣は了承して、再び手のひらを上に向け、彼女をそこに乗せてやる。

そして、背後の壁に吊ってある神棚の上で彼女を下ろした。

すると媛子はその神棚を品定めするように、うつむと唸りながら、見渡した。

そして、

「これは、想像以上のことのようにな」

と一言。

「はっ」

「お主はいったいどういふつもりで神棚を設けておるのじゃ？ い



や、あまり知識がないところを考慮すると、これを設けたのは春臣のご家族か？」

「ああ、俺のじいちゃんだよ。ここで一人暮らしをしてる時からこれを祀っていたみたいだ」

「神を祀っておった、とな」

「ああ、媛子が見れば分かるだろ？」

「確かにそうじゃな。しかし、だとしたら、そのお主の祖父はずいぶんいい加減で、ずぼらな性格じゃの。まあ、いい意味では器が広いとも言っべきか。じゃが、わしからしてみればこれは裏切り、安っぽい信仰心の切り売りといったところじゃな」

春臣には彼女の言っている意味が分からない。どうやら媛子が祖父と神棚のことでかなり腹を立てているのは分かるが、そうさせた原因がつかめない。

「どづいことだよ？ こっちにはさっぱりだ」

と訊くと、媛子は腰に手を当て、

「神棚の裏にあるものはなんじゃ？」

と静かに訊ねた。

「裏？」

「社の裏に飾ってあるものじゃ。わしの勘では、それは他の宗教の物。わしでは触れることは出来ん、春臣が取ってくれ」

言われるがままに春臣は神棚の横に回りこみ、社の後ろに手を伸ばした。すると、彼女の指摘どおり、指先が何か、冷たい金属に触れる。

「あ？」

そつと指の間に挟んで取り出してみると、

「十字架？」

どうやら首から提げるためのアクセサリーのようだった。銀色の照りを返す飾りは、紛れもなく十字の形。

それにどういう意味があるのか、春臣でも判る。

「これって、キリスト教の？」

「そうか、やはり他の宗教の品物じゃったのか。もしやと思うが、お主がそこに置いたわけではあるまいな？」

「いや、俺はこんなもの知らないよ。最初から置いてあったみたいだ」

「まあ、それが誰の物であるかは置いておいて、要するにここには違う神々を象徴するもの同士が祀られていたというわけじゃ」

「それ、やっぱりまずいのか？」

春臣は悪い予感がして、ごくりと生唾を飲み込んだ。呆れた溜息と共に彼女は口を開く。

「そりゃそうじゃろ。こんなことはもつてのほかじゃ。双方の神にとって失礼極まりない。そんなことをすれば神と神が互いに圧力を生んでしまうのは眼に見えとる。要するに、この空間に負荷が生じたわけじゃ」

「負荷？」

「それが原因で偶然にも空間が歪んでおったんじゃ」

空間が歪む。

すぐには鵜呑みにしがたい事実だったが、彼女がそこに存在している以上、事実の可能性は高かった。

「それから、春臣。おぬしにも問題があったようじゃ！」

くるりと回転した彼女にずばりと指を差され、春臣は度肝を抜かれる。問題があったと言われて、思い当たることがある。

自分の信仰心の薄さに何か問題があったのかもしれない。

神様などどうでもいい、そんな生半可な気持ちで祈ったからだろうか。

それが間違いだったのだろうか。

しかし、彼女が言ったのはそれとは違うことだった。

「<sup>けが</sup>穢れ、があつたようじゃ」

聞きなれない言葉に春臣は首を捻る。

「穢れ？」

「穢れとは、おぬしの中に潜んでおる内面的な汚れのことじゃ。わしは春臣の中にそれが蓄積しておつたのではないかと考えておるのじゃ」

「魂が汚れてるってことか？」

「まあ、そんなところじゃな」

「俺自身の魂が？」

春臣はなんだが不安になり、無意識に服の上から胸の辺りを掴む。まるで、媛子に自分の魂を見透かされている気がして鳥肌が立ったのである。

しかし、彼女は首を振った。

「いや、別に今お主の魂に問題がないところを見ると、ここが異空間となると同時に消えうせてしまったのかもしれない」

「……そうか」

問題はないと言われ、ほっと胸を撫で下ろす春臣。が、それもつかの間、自分にその穢れとやらがあつたのには違いない。

「そうになると、祈る前までは俺の魂は汚れてたつてことか？」

「いや、そうとも一概に言い切れん。一つは本当にお主自身に原因があつて魂が汚れておつたのか、もしくは、あれ《・・》か」

「あれ？」

「いや、どちらにしても今となつてはどのような穢れであつたか判断できんことじゃ。説明を続けるぞ」

媛子が何やら意味ありげにいったことが気になったが、その場は無視して彼女の先の説明に耳を傾けることにした。

## 9 約束をひとつ

「ともかく、整理すると、春臣の中の穢れがこの空間の負荷という火に、油を注いでしまった可能性が高いというわけじゃ」  
「ふうむ」

理論では理解できるが、全てが目には映らない状態で起こっているため、曖昧あいまい模糊もことした気持ちのまま春臣は頷くしかなかった。

「それでおぬし、こんな状態で礼拝したのじゃろう」

そして、止めを刺すように姫子が言う。

「ああ……」

「おそらくそれが、空間崩壊の引き金となったらしいの」

そういえば、と春臣は思い出す。確かにここで合掌して目を閉じた後に、奇妙な感覚を感じて、気を失ったのだった。

「それで、ここは異空間に？」

「まあ、神の世界と人間の世界が交じり合った場所とでも言えばいいか。その中間地点となっておる。わしが依り代なしに存在できておる、それが証拠じゃ」

「……う、嘘うそだろ？」

「嘘うそではない。まことじゃ」

「で、でも、俺は別になんともないぞ。体が捻じ曲がっているわけでもない」

異空間と聞くと、体がねじ切られるのではないかという、安易な

春臣の妄想に、

「ふふ、そうじゃな」

彼女は春臣を小ばかにするように笑う。

しかし、それには気づかず春臣は続けた。

「そ、それにこの部屋の外は人間の世界なわけだろ。この異空間と普通に行き来できたぞ？」

もつともな疑問だった。

しかし、彼女は何でもないことのように返答する。

「そうじゃな、だがそれに関しては問題ないじゃろう。元々、この空間は人間の世界の一部なのじゃから、行き来出来て当然なのじゃ」

「ああそうか……うん？」

「どうした？」

「ちよつと待てよ。そうなるとおかしいじゃないか」

彼女を説明に、明らかな矛盾があることに春臣は気がついた。

「媛子が言うように、この異空間が人間の世界とも繋がり、神の世界とも繋がっているなら、この部屋を出たとき、媛子はここから消えて、その身の在るべき神の世界に戻ってないとおかしいんじゃないか？」

「おお、またしてもよいところに気がついたの」

春臣にはその褒め言葉が次第に馬鹿にされているように聞こえて気に食わなかったが、話を止めるのも嫌だったので口をはさむことはしなかった。

「確かに先ほどはこの部屋を出ても、わしは人間の世界に残ったままじゃった。だからこそ、神というわしの存在自体に違和感が生じ、わしの存在は消えかけた」

「そうか！ さっきの状態はそういうことだったわけか」

彼女が外に出た途端、急に寒がりだし、体が消滅しそうになったことを思い出す。

「そう、後もう少し、ここに戻ってくるのが遅ければ、完全に消えうせておったの。危ないところじゃ」

「そ、それで、どうして元の世界に戻らなかったんだ？」

「もちろん、そこにも理由がある。わしの姿を見てみよ」

媛子はそう言って、春臣に良く見えるよう近寄ると、両腕を伸ばして着ている服を揺すってみせる。

「あん？ 綺麗な色だな」

率直な感想だ。

「お、春臣もそう思うか？ わしも気に入っておって……って、そうではなくて、この体の小ささのことを言っておるのじゃ」

紛れもなく、人生初の神によるノリツッコミを見ながら、春臣は、

「はあ？ どのくらいのことだ？」

と訊ねる。

「これは本来のわしの大きさではない。実際の背丈は人間とほぼ同じと言ってよい」

「それはこの異空間に来て、背が縮んだってことか？」

原因があるとするれば、それくらいしか思い浮かばなかった。

どうやら、正解だったようで、彼女が手を叩く。

「そうじゃ。どうやらこの異空間、双方の世界の力の均衡がとれておるようで、実は半々ではない。主軸となるものが人間世界となっておる。そのため、わしは本来の力を持たず、このような姿となつたわけじゃ」

「なるほど。そうだな、ずいぶん可愛らしいぜ。でもよ、それでどうして元の世界に戻れないんだ？」

「そうじゃの、その原因の一つは今もいったように、均衡が崩れ、わしの力が微弱になっておること、それに、神の世界から流れ込んでくる存在の力の流れが原因なのじゃが……」

すると、彼女は神棚の社にある階段を上まで登ってみせる。

「分かり易く説明すると、その力の流れを川のようなものだと思っ  
て欲しい」

「川の、流れ」

「今、わしが立っておる場所が神の国だとする」

そして、彼女を階段を降りると、

「そして、ここがこの異空間じゃ」

と説明し、再び階段を上り、



「川、つまり水というものは高い場所から低い場所へ落ちてくる。このように、神の世界から、異空間に、流れに乗っての」

説明しながら階段を降りる。

「じゃが、反対に異空間から神の世界に行こうとすると……」  
「なるほど！ 流れに逆らう形になるわけか！」

春臣は飲み込めたと指を鳴らした。

「そうじゃ、無理に行こうとしても、その力の流れ自体に押し流されてしまうわけじゃ」

媛子は階段の手前で足踏みをしてみせる。

「一方、人間の世界の場合はこの異空間の主軸となっておるから、平地で繋がっておるようなものじゃ、自由に行き来できる」

「そうか、それでようやく全てが理解できたぜ」

「どうやら、ようやくこの状況を分かってもらえたようじゃの」

満足そうに彼女は言うつと、神棚の端まで歩き、再び春臣の手に乗せてくれと頼んだ。

春臣はそれに応じ、元のちゃぶ台まで彼女を戻して、一呼吸。

目を瞑って情報の整理に取り掛かった。

彼女の話した内容の、その真偽についてである。

嘘か、真か。

だが、熟考して春臣が出した結果はどうやら、彼女の話したことは本当のようだというものだった。

どう見ても嘘をついているようにも思えないし、これほど手の込んだ嘘、そうそうつけるとも思えない。

それに話と状況が限りなく符合していることを考慮すると、彼女の話は疑いようが無かった。

しばらくして、結論を春臣は口にする。

「ってことは、媛子は、人間の世界にも行けず、神の世界にも戻れない、どっちつかずの狭間の空間に閉じ込められたってことか」

とても言い辛いが、これが導き出された真実だった。

媛子は、ここから出られない。

逃げられないし、逃げ道など端から、ない。

この、せいぜい七畳ほどの部屋にその身を縛られているのだ。

「う、うむ。そう、なるの。神の世界に戻る方法はない。わしはここを動けぬ」

そう認めた彼女の表情にもどうにか事実を否定したい感情を抑えているように見えた。

それが春臣には申し訳ない。

「俺、俺のせいかな。俺がよく知りもせず、こんな神棚に祈ったりなんかしたから」

そもそも自分の行動がなければ、彼女はこんな場所に閉じ込められることもなかったのだ。

そこには間違いなく、春臣にもこの状況に陥った一端があることを示している。

そう、紛れも無く。

春臣は先ほどの杉下老人とのやり取りを思い出す。

神を信じるか？

イエス、とは思わなかった自分。

こんな事態が予測できるはずもないが、浮ついた気持ちで、誰に迷惑をかけるとも思わず、興味本位で礼拝したのも事実だ。

もしかすると、やはりその態度自体が自分の心の穢れだったのかもしれない。

自分のしたことに責任を負える、一人暮らしをして、そんな一人前の人間を目指すつもりが、出だしから他人に迷惑をかけている。

それも存在すら疑っていた、神、にだ。

「どう、謝つたらいいか……」

しかし、媛子の言葉がそれを遮った。

「いや、これはおぬしだけではない。わしにも、原因があるのじゃ」「媛子にも？」

それがどういふことなのか媛子は語らなかったが、続けてこう言

った。

「ああ、じゃから、そんなに責任を感じてくれるな。これは、不運が重なっただけのことなのじゃ。誰か一人に全ての責任があるわけではない。こうなってしまうたことはな」

詮<sup>せん</sup>無<sup>な</sup>いことじゃ、と彼女は悲しげにしゅんと俯くと、何も言わずに口を結んだ。

そのことにいたたまれなくなった春臣だったが、何が出来るわけでもなく、ただ、立ち尽くしている。

確かに、彼女の言うとおりこれは仕方の無いことだったのかもしれない。

春臣はその考えを肯定した。

その事実是不<sup>な</sup>変わらない。

だけど。

だとすれば、過ぎたことにくよくよするのは建設的な行動とは言えない。

彼女がこのままでは元の世界に戻れないと分かったなら、それはある意味、前進ではないか。

そうなれば、他の方法で元の世界に戻してやればいい。

そうだ、その通り。

それこそが自分の責任だ。

「よし！」

春臣は、そこまで考えて力強く膝を叩いた。

「なんじゃ？」

「そうだと分かったら、ともかく、これから媛子が元の世界に戻る他の方法を見つけようぜ」

「他の方法？」

媛子は虚ろになった瞳で、春臣を仰ぎ見る。

「ああ、それがどのくらいかかるかは分からないけど、見つけるために精一杯の努力をする」

「……」

「それまでは窮屈かもしれないけど、ここにいればいいさ。それでも、いいか？」

すると、その提案に彼女は信じられないものを見たかのように、なぜか目を見開いた。

「ここにおってよいのか？」

その声はまるで許しを請うような、か細い声である。

「ああ、他に行くところなんてないんだろ。まさかと思うが、俺が追い出すとも思ったのか？ 外に出たら消えるんだろ？」

「……いや、なんとすべきか。春臣にとって、わ、わしは厄介ではないか？」

身を縮ませて、所在無げに瞳を伏せた彼女は、自分がここにいることで春臣に迷惑をかけるのではないか、そのことを本気で不安に思っているらしかった。

先ほどまであんなに阿漕あじうな態度だったくせに、打って変わってこの様子とはどういうことだろう。

しかし、こうして雨に濡れた儂げな花を思わせる仕草をされると、春臣もさすがに動揺した。

いくら彼女が自分より遙かに小さい少女であっても、知らず、鼓動が高鳴る。

そんな自分が恥ずかしくなり、春臣は俯いて彼女から視線を逸らすとぶつきらぼうに言った。

「そういう問題じゃねえだろ。こういうときは助けあわねえと。神様の世界じゃ知らないけどよ。人間ってのはそうするもんなんだよ」「人間は、助け合う?」

すると、媛子は窮地を打開する大きなヒントを発見したかのよう  
に、不思議そうに呟いた。

「そう、そういうもんだよ」

「そうか、そういうものか」

その瞬間、彼女が立ち上がったのか、しゃりんと鈴が鳴る。

「ふふ、じゃあ春臣よ。その言葉に甘えて、少しの間、ぬしのところに厄介になるつかの」

「……ああ、了解だ」

今度はためらいなくそう頼んできた媛子に、春臣は二つ返事で引き受けた。

「よろしく頼むぞ。春臣」

「こちらこそ、な」

そして、互いに伸ばしあった手で彼らは握手をする。

媛子は片手で、春臣は指の先。

それは、あまりにも大小の不釣り合いな握手だった。

もし、傍から垣間見ている人がいればどれほどこの二人が奇妙に映っただろう。

しかし、それは紛れもなく、春臣と媛子、二人が交わした一つの約束。

そして同時に、奇想天外な、神と人との共同生活の始まりでもあった。

## 9 約束をひとつ（後書き）

作者のヒロユキです。

ようやく導入部（かな？）が終わりました。

ここから先は小話を書き連ねていく形式にしたいと思っています。読んでもらっている方に説明をしなくてはいけないと思っていたのですが、今回の小説は以前に書いていたものと違い、特にここから先の話の内容を決めていません。

いくつか書こうと思っているエピソードはありますが、基本的にネタを思いついたら書くというスタイルで、気長にやっつけていこうと思っています。

まだまだ未熟者ですが、もしよろしければ読者の方にもそんな感じでお付き合いいただけたらと考えております。



## 10 神を殺した男？

「……踏み潰しそうだ」

皿に取り出ししておいた食べ物全てを平らげた媛子を眺めながら、春臣が耐え切れなくなったようにそう呟いた。

「なんじゃ？」

と怪訝そうに媛子が見つめ返す。

「だから、媛子って小さいだろ。ここで生活するとなると、そのうち間違えて踏み潰しそうだなって」

そんなことを真顔で言う春臣の目には冗談ではない切実さがあった。

それを聞いて大きく溜息をついた媛子は、腕組みをしてこう言う。

「言っておくが、春臣。わしはその辺のむしけらとは違う」

「それは、分かってる。だが、なんといっても小さいだろ。だから、ふとした拍子にぶちっと、さ」

手のひらを上下で重ね合わせて、媛子が挟まれる様を表現した。

「冗談を言っているようだが、全く持って春臣は真面目だった。媛子と春臣が暮らす、ということとはつまり巨人と小人が暮らすようなものなのだ。」

それだけスケールが違うと、やはりいろいろな障害が生まれてくる。

気づかぬうちに踏み潰す。それも一つの大きな問題であると春臣は思ったわけである。

身長差で圧倒的に不利な媛子には日々の生活でそのリスクが常に抱えながら過ごさなくてはならないのだ。

「いやいや、笑い事ではない。」

媛子にとってはまさに生死を分かつ重大な問題である、と春臣は思っている。

「ぶちつと、神を殺すのか？」

ふざけ半分の薄ら笑いを浮かべ、彼女が聞く。

「ああそうか。確かに媛子を踏み潰すとそういうことになるな。神を殺した男、か」

春臣は媛子の言葉にそう言ってうつむ、とまんざらでもない顔をした。

「おい、まさかとは思うが、そんな肩書きに憧れを抱いておるんじゃないかろうな？ 冗談ではないぞ」

それ見て、背筋がざわついたのか、とんでもないことを言つな、と媛子は釘を刺す。

「いや、でもカツコイ感じじゃねえか。人類最大の禁忌って感じだな。神を踏み潰した男か」

「忠告しておくが、わしを踏み潰した上に、そんな肩書きを名乗られては、わしの恨みは尋常ではないぞ」

「どうなるんだ？」

春臣は興味本位で聞いた。

「まずは、おぬしが一生米が食べぬような劣悪な生活をさせてやる。さんざん周囲の人間にこき使われて、ぼろ雑巾のようになったところで、無人島に島流しして、一日中天日干しにしてやるからな。楽に死ぬると思うでないぞ」

「確かに、踏み潰された神様の恨みは怖そうだ。ハハハ……」

どうやら本気らしい彼女の言葉に引きつった笑いをしたあとで、春臣はあることに気がついた。

「ところで、踏み潰されると神様でも死ぬのか？」

「そ、そりゃあ、どうじゃろう」

突然の質問に、彼女は言葉を濁らす。

「うん？」

「向こうの、つまり神の世界では普通、神が怪我や病気で死ぬ、ということはない。じゃが、ここはなんといっても特殊な空間じゃから。わしはこの通り、力を失っておるし、どうなるかは分からん」

媛子は首を捻って答えた。

「じゃ、試してみるか？」

それならば、とにやにやと笑いながら春臣は片足を上げてみせる。神を踏み潰す準備は万端だ。

そして、さらにこう付け加えた。

「いい経験だと思っけどな、いつも神の世界から見下ろしてる人間に踏み潰されるってのも」

「目、目が怖いぞ、春臣。冗談はよすのじゃ」

「ハハ、嘘だよ、そんなことしたりしねえって。なんと言っても、天罰が怖いし」

「無人島で天日干しか？」

「ああ、さすがに干物になるのは勘弁だ」

そう言っって手のひらをひらひらさせると、ごろりと畳みの上に横になる。

春臣は大きく腕を伸ばし、リラックスした様子で欠伸をしていたが、ふと、何かを思いついたようで、また起き上がる。

「ど、どうした？」

不思議そうな彼女を尻目に、春臣は部屋を出て、階段を駆け下りると何かを探し始めたようだった。

そして、しばらくして戻ってきた春臣の手には小さな色紙とペンが握られていた。

「いい考えがある。ここに媛子のサインをくれよ。神を殺した男じやなく、神と友達の男って肩書きもいいだろう？」

息を切らし、階段を駆け上ってきた春臣は何を言うかと思えばこんなことを頼んだ。

さすがにこれには媛子も呆れてしまう。

「……………」

「……………もしもし？」

「……………」

「駄目か？」

「……そんなもの、いったいどこの誰に自慢するんじや……」

そう呟いた彼女の視線が冷たかったことは言うまでもない。

## 11 がぎぞめ

ふと気がつくのと、いつの間にか春臣が持ってきた色紙の上に媛子が素足で乗っていた。

数分前からの寝転んだ体勢のまま、春臣は何事か、と彼女の方に首だけ傾けてみる。

台の上の彼女は重量感のある着物のまま、その両手であるものを抱えあげようと必死でバランスをとっているのだ。

右へ、左へと、見るからに危なっかしい。

さらさらとした紅い髪がそれに合わせて揺れている。

さすがにその状態ではどうにもならないと判断したのか、媛子は春臣に助けを求めてきた。

「は、春臣。ほれ、ちょっとばかり持ち上げるのを手伝ってくれぬか？」

彼女が持っているものは先ほど春臣が持ってきていた黒のサインペンである。

自分の身長以上はあろうというそのペンを彼女は斜めに傾けながら、抱き寄せるように持ち上げようとしている。

春臣は手をついて上半身だけ身を起こす。

「なんだ？ ようやくサインを書いてくれる気になったか？」

「違うわ、ばか者。とにかく持ち上げるのじゃ」

彼女に罵声を浴びせられ、一度は顔をしかめた春臣だったが、大人しくふらついていた彼女のペンを手で押さえてやった。

「ほら、これでいいのか」

「よくやったぞ春臣。ようし、確かこれで文字が書けるんじゃないかな?」

「ああ、そうだけどキャップを取らないと駄目だ」

そう説明すると、媛子からペンを受け取り、先端についた蓋をとってやった。きゅぼん、音がして、ペン特有のなんとも言えない鼻を突く匂いが漂う。

すると、それは背の低い媛子の所にも届いたようで、

「臭い！ 臭いぞ！ この時代の筆はそんなに臭いのか！」

と目を丸くして、鼻をつまんだ。

「大丈夫だよ、すぐに慣れるから。それより、これで何を書くつもりだったんだ?」

訊くと、彼女は鼻をつまんだままの籠もった声で答えた。

「がぎぞめじゃ」

「は? 何だつて?」

「じゃから、書初めなのじゃ。ほら、そのペンを貸してみる」

媛子は少々乱暴に春臣の手からサインペンを奪い取ると、額に皺を寄せたままの表情で、ふらつきながら色紙の左上に歩いていく。

「よう、いしよ。こ、これで、よし」

「書初めって、あれだろ? 新年になって、心機一転っていつ心持ちで書く」

「そ、うじゃな。よつと」

彼女は既に筆で何かを描きながら、返事をした。ずいぶん大変そうである。

そう思いながら春臣は壁に夕方貼り付けたカレンダーを見やった。

「言っておくけど、今は三月の終わりだ」

「そうか」

意外にもその答えは素っ気無い。

「……？」

「……書初めに時期など、関係ないんじゃない。うわ、っと」

すると、そう言いながらペンを払った彼女はその勢いで倒れそうになる。

それに気づいて、春臣が咄嗟に片手で背中を支えてやった。

「あ、す、済まぬ」

「いや、それはいいけど。時期が関係ないって？」

「そうじゃ。わしにとって書初めに時期は無い」

媛子は筆を色紙の上に置き、じりじりと後ずさって直線を描きながら、そう話す。

「新年に限らず、何か新しいことを始めるときに、気合を入れるというか、覚悟を決めるというか。自分の中で決意するための、そう、これは大切な儀式なのじゃ」

「大切な儀式、ねえ」



半眼のまま、春臣は彼女が書いている、いわゆるミミズがのたかったような文字を見ながら呟いた。

同時に、小学校の頃の冬のことが浮かぶ。

新年最初に行われる書道の授業では、全校生徒が揃ってよく書初めが行われたものだ。

春臣としては、あの頃は意味も分からず、ただの退屈な作業しか思っていなかったが、媛子の言うとおり、それはとても大切なことなのかもしれない。

何か、新しいことを始めるときの決意。

彼女がこの場所で、生活を「始める」ための。

よく見ると、そう語った彼女の額には小さな汗の粒が光っていた。不慣れなペンで、しかも自分より大きなものを抱え、悪戦苦闘しながら一画、一画、丹念に筆を走らせている。

春臣は、そんな彼女の一心不乱な書初めを見ながら、何も思わないわけではなかった。

そうして、数分後。

「出来た！」

と媛子が大喜びでその場にへたりこむ。

どうやら、重たいペンを持つことはかなりの重労働だったらしい。喜んだ元気の割りにかなり体力を消耗したようで、肩を上下させて息をしている。

「何て書いたんだ？」

春臣が覗き込むと、そこには二つの漢字があった。

「ひめ、こ？」

なんとその色紙には、春臣が考えた彼女の呼び名が拙くもしつかりと書かれていたのである。

「結局、サインを書いたのか？」

「そ、それは、違う。それはこれからの決意じゃ」

倒れこんだまま彼女は首を振る。

となると、これはどういう意味だろう。

「媛子が、これからの生活を媛子ががんばるってか？ それとも、これからの人生、一生懸命媛子する、とかそういうことか？」

「いやいや、そんな珍妙な使い方をする言葉ではないぞ。もちろんわしの名じゃ。っていうか、ふざけておるじゃろ！」

そう怒られてしまったが、春臣としてはかなり本気の発言だったが、そうなるとこれがどういうことなのか皆自分からない。

「じゃあ、どういう意味なんだ？」

すると、急に彼女は恥ずかしそうに俯く。さらに、口元をもごもごと動かしながら、こう言った。

「お、お主がつけた名とはいえ、それはこれからの生活で使われる名じゃ。心機一転、この世界での名前というわけじゃ。じゃから、それはわしの決意の表れというか。わしの意気込みを表しているわ

けで……」

「ふうん」

「ば、馬鹿にしておるのか？」

春臣が鼻であしらったように聞こえたのか、彼女はぐうぐうと唸った。

「いや、違うよ。いいことだと思っせ」

「そうか？」

「ああ、そう思う。でも自分の名前をこんなに堂々と書き初めて書くやつなんて始めて見たけどな」

「それは馬鹿にしておるんじゃないかなろうな？」

「ようし、俺も書いてみよう」

そう言っただけで春臣は彼女が転がしたペンを握った。

「おい、返事をせんかい！」

そんななかみついてくる媛子は無視して、春臣は自分を取り出した色紙に今度は別の文字を書き始めた。

ふつと息を吸い込むと、一画、一画、力を込めて握った筆を引張っていく。

心に祈るように。

新しい生活の前途の希望を強く願って。

真っ直ぐに、文字を書く。

そして、

「出来た！」

と色紙を持って立ち上がった。

「なんと書いたんじゃ？ 見せてみよ」

今度は媛子が春臣の書いた文字を覗きこんだ。そして、その動きが静止する。

意味が分からないのか、きょとんと立ち尽くしているのだ。

「これは？」

「読めないか？ 『出会い』だ」

「それくらい読めるわ！ どういう意味で書いたのかと訊いておるのじゃ」

「意味、意味かあ」

春臣はそう問われて、目の前の神棚を見ながら逡巡すると、すぐに媛子に向き直り、微笑んだ。

「なんじゃ？」

「媛子との出会いのことだよ。運命だとしても、偶然だとしても、これもまた、新しい生活の始まりだろ。だから、スタートラインの意味を兼ねて。出会い、って書いたんだよ。どうだ？」

てっきり賞賛されるか、と思いきや、

「……フフッ」

それを聞いた媛子が口元に手を当てて、嘲るようにせせら笑った。

「媛子が、俺の文字を見て、わ、笑いやがった」

当然、春臣は腹が立つ。

しかし、彼女の笑いは止まらないようで、

「なんとも歯の浮くようなことを言いよって。まさか、口説き文句じゃあるまいな？ そう言われると、その文字も急に陳腐度が増して見えてくるの。クッククク……」

さらに、身体を揺らして笑う。

「な、なんだとおう！」

こついわれるとさすがに春臣も黙ってはいられない。片膝を立てると、媛子の色紙を指差して言い返した。

「媛子だって、なんだそれ。ミミズがのたくったような字い書いてよ！」

「ああ！ それを言ったな、それを言ったなあ！ わしは神じゃぞ！ 言つていいことと悪いことがあるう。謝れ！ 今すぐ！ とりあえず土下座をするのじゃ！」

しかし、そこですんなり謝る春臣ではない。

「うるせえ！ 誰が謝るかあ！」

と完全対立の構えだ。

「やっぱりぬしは無人島流しじゃ、干物になるがいい。灼熱の太陽に焼かれるがいいわい！」

「嫌だね！　いかだを作つて脱出してやる！　なんでも自分の思つがままだと思つたら大間違いだぞ」

「フン、ぬしのような低劣な脳みその人間にそんな物を作る知恵などあるはずないわい、百歩譲つて笹舟がいいところじゃ」

「な、なんだと、そんなに小さいくせしてよ！　よつぽど笹舟がお似合いな体格してよ！」

「何を言つておる！　神に大きさなど関係ないわ！」

その日、一人暮らしのはずの春臣の自宅からは、こんな具合に、何者かと口論をする声が深夜を回つても聞こえ続けていたらしい。

たまたま近くを通りかかり、その声を聞いた人間も、それがまさか神と人との口げんかだったとは夢にも思つまい。

## 12 隣人さん？

春眠、暁を覚えず。

世の中には春の日の寝心地の良さを表すそんな言葉があるが、榊春臣はある春の日、いつもよりも幾分早く目を覚ました。

一人暮らしを始めた祖父の家の二階。

神棚のある部屋で、むっくりと身を起こした。

僅かに揺れ動くカーテンの隙間からは、生まれたての春の朝陽がちらちらと白い壁を照らしている。

実家にいるならば、いつも目覚まし時計や、母が起こしてくれなければ上手く起きることが出来ないのが常だが、その時は違った。

「ふ、ああ……」

自力で起き上がり、大あくびをしながら、机の上にあった時計を見る。

現在の時刻は午前6時だ。

夜明けの時間である。

その時間帯に起きることは、まさに人間にとって健康的な目覚めそのものではないだろうか。

しかし、春臣が早くに目覚めたのは、何も健康的な理由とは言えない。

その証拠に、春臣はすぐさま掛け布団を払いのけると、勉強机の

上に置いてある『焼きたてクッキー』と丸みを帯びた字で書かれたスチール製の小箱の中を覗く。

「何度確認しても、やっぱり、いるな」

そう呟いて、昨日の出来事が何かの夢幻ゆめまぼろしの類たぐいなかったことを再認識したのである。

「これから、どうするかな……」

と深刻そうな顔をしたまま寝起き早々肩を落とした彼を知るはずもなく、その小箱の中にはすやすやと紅髪の少女が眠っていた。

敷布団の代わりに柔らかかなタオルを敷き詰め、ハンカチをその身に被せて安息の寝息を立てている。

彼女の名は、緋桐乃夜叉媛。

本人曰く、その小さな風貌に関係なく、列記とした神らしい。なんでも、信じがたいことだが、神の世界と人間の世界の間に生まれたという異空間に閉じ込められたということだった。

だが、

「本当にこんな小さくて、神様なのかな」

未だ実感の湧かない春臣は椅子に腰掛け、そんな彼女を見下ろす。

それもそのはずで、春臣の中での神様のイメージはもつと超然的で、偉大な印象が大きかったのである。

地上の誰もがその存在に畏怖し、敬い、崇める。そういうものが、



神だと思っていた。

でも、目の前の少女は、こんなにも小さく、神としての力も使えず、自分の世界に帰ることすら出来ないのだ。

それは、果たして、神と呼べる存在なのだろうか。

「う、ううん……」

春臣がそんなことを考えているとは知らず、媛子は時折身じろぎし、顔の向きを変えた。

すると、その緋色の髪がさらりと白い頬の上にかかり、光を受けて輝く。

それは金色の朝陽にも負けず劣らず、華やかに、煌びやかに見えた。

これには、あまり神として彼女を意識できない春臣でも、素直に美しいと思ってしまう。

この世界のどんな豪華な宝石とも違う、一種の霊的な美であるように感じるのだ。

神だからこそこうして感じるのだろうか。

触れてみたい。

そう思って、つい手を伸ばしかけている自分に気づき、春臣はすぐに引っ込めた。

そんなことをするのは、まずい。

本能がそう感じた。

しばし、無言で彼女を見つめたまま座っていたが、ふと椅子から

立ち上がり、部屋を出る。

朝の空気を吸いに行こうと思いついたのだ。

実家から越してきて初めて迎える朝。

春臣は一階の洗面台で顔を洗い、簡単な身支度を済ませると、抜かりなく玄関の施錠をし、周辺の散歩へと足を踏み出した。

柊町。

それが春臣が越してきたこの町の名前だ。

町の周りを山に囲まれ、のどかな田舎の時間が流れる、人口五人ほどの小さな町である。

なんでも上空から見ると、山に囲まれた町の土地がちょうどカタカナの「コ」の字に見えるらしく、周辺の都市や町ではコの字の町と呼ばれていることで有名だ。

柊町は分かり易く言うと、大きく半分で西地区と東地区に分かれている。

その昔、近くの山に鉾山があったという西地区は人々の生活の基盤となる場所であったのか、特に住宅地や商店などが多く、町として発展している。今でこそ、鉾山は閉鎖され、昔のような活気は失っているが、それでもまだ当時の名残をこの時代に伝えている町並みなのだ。

その一方で、春臣の家のある東地区はというと、西とは違い農業が盛んだったらしく、北の山から流れる楡川にれから水を引き、その土地の多くは水田として利用されている。

山の上から養分を豊富に含んで流れてくるといってその川の恩恵を

受け、作物は毎年のように豊作ということだ。

柗町は西と東で、人々の暮らし方が違う歴史を持つ町なのである。

そんな叔父から聞かされた知識を思い出しながら家を出た春臣は、一度おおあくびをかまし、周囲を田んぼに囲まれたあぜ道を歩いていた。

まだ完全に目が覚めていないのか、意識は未だ眠りの余韻を引き摺っているようだ。

ふと見ると、足元には朝露に湿った草花が重たそうにその身をもたげている。そして、視線を上げた遠く向こうには、朝陽が照らす山々の稜線が望め、その谷間には息で吹けば消え去りそうな薄い霧が漂っていた。

その道は一昨日に叔父が運転する車から見た景色であるはずだが、歩いて見える景色というのはそれとはまた別で、趣も違って見える気がした。

風情があるように思う。

やはり、こんな田舎の道はいいものだ。

まるで自分を圧するようにそそり立つ都会のビル群とは違い、見渡す限り、自然な和みの雰囲気がある。都会のように誰もがぎすぎすとした表情で、我先にと電車の座席取りゲームをしているようなぴりぴりとした空気はない。

春臣は地に足のついた静かな喜びが確かにそこにはあると思った。

ポケットに手をつ突っ込んだ機嫌よく十字に分かれた道を左に曲がる。

すると、どこからともなく軽やかなピアノを弾き鳴らす音が聞こ

えてきた。

最初はこんな朝早くから何事かと驚いたが、どうやらそれは春臣もよく知っているラジオ体操の伴奏で、しかもそれは、すぐ目の前の生垣囲まれた民家から聞こえてくるようだった。

さては、と春臣は察しをつける。

おそらく昨今のエクササイズブームに乗った健康志向の老人が行っている、毎朝の日課に遭遇したに違いないと思ったわけである。

春臣の脳内にどこかで見たような上半身裸で乾布摩擦をする老人が浮かぶ。

しかし、その民家の門前に見えたのは予想とは異なる光景だった。

ラジオから聞こえてくる掛け声の合図に合わせて飛び跳ねているのは意外にも春臣と同じ年頃の少女だったのである。

ラジオ体操など、てっきり小学生と高齢の人のためのものだと勝手に偏見を抱いていた春臣は一瞬戸惑った。

いったいどんな顔をして前を歩けばいいのか、と迷ったのだ。素直に軽く微笑んで小さく会釈すべきだろうか。

逡巡していると、予想外のことが起こった。

なぜかその少女は春臣の顔を一瞬見ると、リズムに合わせて飛び跳ねの運動をしながら近づいて来たのである。

もしかすると、気に障ることもしてしまったのか、と春臣はその場で硬直してしまったが、その少女は飛び跳ねながらこう訊いてきた。

「なあなあ、あんた、向こうの家の人やる」

顎の方向で春臣の家の方向を示している。

「……？ ああ、そうだけど？」

そう答えながら、春臣はその唐突な質問以上に、彼女の口調が気になった。

このイントネーション、言葉の使い方。  
それは紛れも無く大阪弁だ。

ここが大阪だというならそれはそれで納得なのだが  
春臣の情報が正しければここは関西圏ではない。

この土地の人間ではないのだろうか。

しかし、彼女は春臣が感じた違和感など気づいていないようで、  
さらに飛び跳ねながら近づいてくる。

「うち、見とったで。昨日、男の人と車に乗って家の前通ったし」

男の人というと叔父のことに違いない。

リズムに合わせて今度は彼女は手を回し始める。

「あれ、見てたんだ」

「せや。このあたりの人とちゃうし、空き家の方で止まったから、  
もしかしたら越してきた人かもしれへんって思たんや。どや、うちの  
の推理合ってるよな？」

自慢げに彼女は鼻を鳴らし、今度はその場で今度は両手を挙げ、  
大きく深呼吸を始めた。

「ああ、正解だぜ」

春臣が頷くと、彼女はにひひ、と笑う。

「あんたは、この家の人なのか？」

彼女の背後にある表札に目がいき、そう訊いた。

「スウー、せやねん、うちの名前は青山あおやま、ハアー、椿つばき。スウー  
ー、あんたの名前は？ ハアー」

するとなんと喋りにくそうに、彼女は深呼吸をしながら自己紹介をする。

そんなことなら体操をやめてしゃべればいいのに、と春臣は思うが、見ているのもそれなりに面白いのでわざとツッコミは避けた。大人しく、聞かれたことに返答する。

「俺は榊春臣っていうんだ。今年から大学に入学するから、昨日から一人暮らしを始めてる」

「なんやて、ハアー、実はうちも、スウー、今年から大学やねん、ハアー」

それを聞いて、もしかすると、と春臣は彼女に問いかける。

「山を越えた向こうの翌檜あすなろ大学か？」

すると、彼女の顔色が変わった。

「ええ！ 一緒の大学かいな！ びっくり……ごほっ、ごほっ」

ようやく体操が終わったと思いきや、彼女は驚いた拍子に咳き込みだす。落ち着くための深呼吸した後でこうなってしまっただけが無い。

体を折り曲げて咳をする彼女を心配して、春臣は覗き込んで訊いた。

「大丈夫か？ 青山」

「ええよ、ごほっ、ちょっとびっくりしただけや。もう大丈夫」

「そうか」

「でも、驚いたなあ、一緒の大学の人がやったんかあ」

彼女は納得するように数度頷き、

「しかし、それならうちとしては心強いなあ」

と意味ありげなことを言った。

「何が？」

「じつは、あの大学に行く人に一緒の友達がおらへんのや。せやから、そうなる場所で一から友達作らなあかん。それはちょっとしんどいことやで。勇気もいる。でも、ここで同じ大学に入学する人と知り合えとつたら気持ちも楽やろ？」

「ああ、なるほど」

「榊君は、大学に知り合いはおる？」

春臣はすぐに首を振る。

「いや、俺も向こうに知り合いがいるわけじゃないよ。青山の言うとおり、確かに少しでも知り合いがいてくれた方がいいな」

「せやる？　せやる？　家も近いことや、今のうちから仲良うさせ  
てくれな。榊君」  
「ああ、よろしく」

そして、彼女は小首をかしげるようにして、にっこりと笑う。そ  
れはのどかな午後の陽だまりを連想させるふんわりとした笑顔だっ  
た。

そこに初対面の人間と相對している緊張感はない。

青山椿か。

隣人さん、第一号だな。

春臣はそう心の中でカウントした。



### 13 わつといつとびー

すると、何かを思いついたのか、椿は目の前ではしりと両手を合  
わせる。

「せや、ここで会ったのも何かの縁や。いつもの日課も終わったし、  
お近づきのしるしと言ってはなんやけど、この辺りの道案内なんて  
どうや?」

やはりラジオ体操は日課だったのか、と理解をした後に、春臣は  
聞き返す。

「道案内?」

「そうやで。まだこの辺りのことなんて分からんやろ? うちが案内したるで」

その申し出は春臣にとって願っても無いことだった。自宅近くの  
地理を早いうちに把握しておかなければ、いざというときに困る。

特に生活に必要なものを手に入れる手段がない。

春臣にとって今必要なものと言えば食料だ。

なにしろ昨日越していたばかりなので、ろくに食べ物もない。実  
家から持ってきたものは僅かなものだったので、昨日の夜に大方食  
べてしまった。

残り少ない高級羊かんでさえ、意外にも大食いな媛子一人で食べ  
つくされてしまいそうである。

早いうちに食料を調達することは必須事項だった。

「じゃあ、お言葉に甘えてそうさせてもらおうか」  
「よっしゃ、うちにまかしとき。この辺りのことは大抵承知しとる。困ったときはうちに頼りや」

そう言った彼女はちからこぶを見せるように腕を折り曲げてみせる。しかし、今にも折れてしまいそうな白く細い腕はあまりにも頼りなく見えた。

春臣はそれを彼女の愛嬌と受け取ることにした。

「ああ、そうするよ」

「それで、どんなところ行きたい？」

「えっと、とりあえずコンビニはある？」

その質問に彼女の眉がピクリと反応する。

「おっと、それはここが都会と違って不便な田舎やて上から見た発言か？」

「べ、別に違っつて」

「ハハ、単なるジョークや。そんな冷や汗かかんでええよ」

「……さいですか」

「もちろん、コンビニはある。東区と西区に一つずつや。こっからそんなに遠くない」

彼女は川を越えた向こうにある道路の向こうを指差した。道沿いに、商店がぼつぼつと点在しているのが確認できる。

おそらくその付近なのだろう。

「そうか、それなら道案内を頼むよ」

「オッケー」

すると、彼女は最後に一度だけ深呼吸をしてから、鳴り続けたラジオを止め、自宅の方へ駆けて行った。春臣が石垣の門の前から中を覗くと、椿は玄関から上履きのままで膝について廊下に入り、家の中の誰かに何かを喋っていた。

「うん、せやから、ちよつと出てくるな」

そう誰かに告げ、彼女はまた駆け寄ってくる。

「ほんなら、行くとしよか？」

彼女は春臣を先導して歩き始める。

誰かに道を教えるのが楽しいのか、それとも、同じ大学に行ける同年代の自分と知り合えたことが嬉しかったのか、機嫌よく鼻歌を歌っている。元気良く腕まで振っていた。

「先ずは右に曲がるで」

そして、方向をわざわざ指差して春臣に教えた。

「そうか」

「しばらくはこのまま直進や、それで次に舟木さん家の塀が見えてくる」

「……そうか」

「そこは右や、ええか、左やないで」

「……はあ」

「その次に目印になるのが、井上さんの家の手前にある郵便ポストや。そのすぐ横のわき道を曲がる。これはコンビニまでの近道やねん。榊君には特別に教えといたる。その先の橋が……」

「……あのさ、青山。それはうれしいんだが」

春臣は彼女の延々と続きそうな道順の説明にさすがに我慢できなくなり、ついに口を挟んだ。

「なんや？ もう一回最初から話そうか？」

違う、とかぶりを振る。

「いや、逐一説明してくれなくても、一度通れば覚えるから大丈夫だ」

なにしろ、見渡す限り、民家か電柱ほどしか障害物の見えない田園地帯なのだ。店がある方角さえ分かればどうとでも行ける。

しかし、彼女は意外そうに目を丸くした。

「ええ！ 榊君って方向音痴やないの？」

心外だった。

「……おい、何で俺は最初から方向音痴ってことになってるんだよ。なんでそんなに意外そうなんだよ」

「榊君は違うんか？」

「自慢じゃないが生まれてこの方、あの有名な人生の路頭というやつにも迷ったことは無いんだ」

思い切り冗談で言ったのだが、彼女はそのユーモアがわかっているのかいないのか、「ほお、すごいな」と感心した声を出した。

もし分かってそう言っているのなら馬鹿にされているのだろうが、様子を見る限りおそらく後者だった。

「それは失礼なこと言うてしもたな。実はうち、こう見えて方向音痴やねん。せやから案内慣れた道でもこうして言葉にして覚えとかな、時々迷子になんねん」

「何がこう見えてなのか分からないが。そう、なのか……」

こんな分かりやすい道をなあ、という言葉は引っ込める。

「それにしても榊君、ええなあ。方向音痴やないんや。それって超能力とちゃうか？」

榊は手を組み、羨望の眼差しで見つめてきた。

「別にそんな大それたもんじゃねえよ」

「でも、うちにとつたら超能力と一緒にやで。尊敬してまう」

過剰な褒め言葉はとりあえず無視をして、春臣は溜息をつく。

「……っていうか青山、さっきこの辺りのことは任せとけて言っ  
てなかったか？ そんなんじゃ、いざというときに頼りがいがない  
な」

「……ああ、そのこと？ まあ、大した問題やないって」

「そうか？」

「迷ったとしてもなるようになる。そうや、れっといっつとびーや」

「レットイットビー？」

「せや、れっといっつとびー。ビートルズやったっけ？」

そう言われて、春臣もビートルズにそんな曲があることを思い出したが、すぐにどうでもよくなった。

青山のことで他に気になっていることがあったのである。

「そう言えば、さつきから気になってるんだけどさ。その、青山の大阪弁」

「うん？ もしかして嫌いなんか？」

「いや、嫌いなんてことはねえよ。ただ、この辺って皆そんな口調なのか？ つまり、この辺りの方言なのか？」

すると彼女はぶんぶんとう首を振った。

「ああ、そうやないそうやない。実はうちも一年前にこの家に越してきたばかりやねん。そのまえは関西の方に住んどった」

そこで春臣は合点がいく。

「なるほど、だから大阪弁なのか」

「そや、せやから、昨日引越してきたいう榊君と同じ穴のナジムつちゅうやつやな」

「それを言うならムジナだって」

「あれ、そうなんか？ 関西の方とこつちでは言い方が違うんやな。ふむふむ」

「……何で地域特有の言い方があるんだよ。慣用句は全国共通だ」

「いったいどういう解釈をすればそんな結論になるのか。」

「続けざまにツッコミをいれながら、春臣はなるほどな、と心の内で頷いた。」

「まだ出会ってから一時間も経っていないが、彼女という人間が、かなり把握出来た気がしたのである。」

「ずいぶん楽天的でポジティブ、且つ大層な天然素質な性格であることは間違いない。そのため、話せば話すほど、彼女のペースに巻

き込まれていく気が否めないのだ。

でも、春臣は不思議と悪い気はしなかった。  
なんというか、新鮮な気がしたのだ。

春臣の周りでこんな種類の人間に出会ったことがないからだろう。

自分の誤りを指摘されても、椿は特に不快な顔もせず、

「へえ、そりゃ勉強になったわ」

とにこにここと笑っている。

「それから言うておくけど、その言葉はあまりいいイメージがない。  
「こういふときに使う言葉じゃないと思うよ」

さらに春臣がそう補足をするので、

「ほお、そりゃあ親切にどうも」

と彼女は丁寧なぺこりと頭を下げた。

やはり、その動作にも嫌味な所は含まれていない。

「フフ……」

思わず、微笑んでしまう。

「うん？ 榊君、何がおかしいんや？」

「いや、何でもないよ」

納得がいかなさそうに彼女はしていたが、すぐにどうでもよくな

ったのか、すぐに道案内を再開した。

「それじゃ、この道を右やから」

「ああ、分かった」

返事をしながら、引越し早々、自分はどうにも奇妙で興味深い人間に次から次へと会うものだど、内心、不思議な気持ちだった。

謎の老人に始まり、小人の神様、そして、この青山椿だ。

これはもしや、この世を統べる神が結ぶ、何かの縁なのか。

今頃、まだ自宅で眠っているであろう姫子の顔を思い浮かべた。



## 14 雑食性です

「ようやく戻ったか！ おい、春臣！ いったいどこにいったのじゃ！」

コンビニで簡単に朝食分の食料を買い、青山と別れて部屋に戻ってきた春臣に、媛子の怒声が飛んできた。ドアを開けるやいなやピントを食らわされたような衝撃に驚いたのは、言うまでもない。

眠気の成分が未だに残っていた頭が一気に覚醒する。  
何だ？ どうして自分が怒られている？

しばし訳がわからず、呆然と立ち尽くした後で、春臣はすぐに媛子の姿を目で探した。

そして、すぐに肝心の声の主である彼女の姿が部屋に見当たらないことに気がついた。

と、いうことはそこから導き出される答えがある。

おそらくまだクッキーの小箱の中にあるのだろう。

「媛子？」

様子を見ようと無防備に覗きこむと、彼女は持っていた簪を春臣めがけて投げつけてくるところだった。

「う、わっ」

その簪の鋭い切っ先がきらりと光った。  
ひゅん、と頬を掠めて飛んでいく。

「あ、危ねえ！ 目に刺さったらどうしてくれんだ！」

間一髪のところまで避け、尻餅をついた春臣は強く拍動する胸を押さえてそう抗議した。

「そんなことは知らん。とにかく、わしをここに一人置いてどこかに行ったことを謝罪するのじゃ。今すぐ！ 直ちに！」

姿は見えないが、箱の中から未だに怒りに満ちた声が聞こえてくる。

春臣は身を起こしてまた何かされないか、用心しながら覗き込んだ。さすがに相手は神様であるだけに、どんなものを凶器として使ってくるか分からない。

しかし、もう投げるものがないのか、箱の中の彼女は特に攻撃態勢はとっておらず、むすつと腕を組んでいるだけだった。

「な、なんでそんなに怒ってるんだよ。ちょっと散歩に行つてただけだ。たかだか数十分のことだろ？」

春臣にはそれほど激怒する理由が分からない。

「何を言っておる！ 数十分と言えど、わしをこの未知なる空間に置いてけぼりにしたんじゃないぞ。おぬしにはその意味が分かっておるか？ これは罪に等しい！」

「え？」

「おぬしがわしの立場じゃったら、どう思う？ 突然勝手の分からぬ別世界に放り出され、体も縮小し、自分の本来の力を使うことも出来ぬ状態なのだぞ！」

「……」

想像以上に真剣な憤怒の言葉に春臣は言葉を失う。

未知なる空間に置いてけぼり。

そのことを指摘されて、春臣は確かに彼女の言うことも最もだと思いを直した。

なにしろ、彼女はつい昨晚にこの場所に来たばかりなのだ。

何も分らないまま、どうすることも出来ないまま、小さな体になった拳句元の世界に戻ることにすら出来なくなった。

きっとそれはとても恐ろしいことだし、とてつもない焦燥感にも駆られるに違いない。

人であれ、神であれ、狼狽してしまうのは当たり前だろう。

ましてや、媛子としては、春臣が帰ってこなければ、クッキーの小箱から出ることすらむずかしいのだ。

自分が居ないと知り、とても不安だったことは間違いない。

「そ、それは申し訳なかったな」

自分が悪かったことを認め、素直に謝った。  
すると、媛子の顔が少し明るくなる。

「お、罪を認める気になったか？」

「……ああ、ごめん。この世界に来たばかりの媛子のことを考えてみたら、俺のしたことは確かに媛子の言うとおり、罪だな。すまなかった」

「そうか、そうか。よし、ではこのことは水に流してやる。二度とするでないぞ」

「ははあ、有難き幸せでございます」

わざとおおげさにそう言ってやる。神である媛子ならこつして尊敬の念を表せば、機嫌が良くなるに違いないと思ったのだ。

「フッフ、そう言われるとなかなかいい気分じゃの。こつ世の支配者としての優越感に浸れるというか。なあ、春臣よ」

媛子は腰に手を当てて、ふんぞり返って悪役のような台詞を言う。意外と簡単に調子に乗ったので、少々かちんときたが、春臣は持ち前の器の大きさから言い返すことはしなかった。

箱から出してくれという彼女の要望にもすぐに答え、ちゃぶ台の上に乗せてやる。

すると、媛子は春臣が置いたコンビニのレジ袋に興味を示したように、近寄っていく。

「春臣、この包みの中身はなんじゃ？」

小さな指先で、くしゃくしゃと鳴るビニール袋をいじっている。

「俺の朝飯だよ。とりあえずの腹ごなしだ」

「おい、わしも朝餉あさけがまだじゃぞ」

忘れておるわけじゃあるまいな、と媛子は腰に手を当てる。

「ああ、そうだったな。昨日の残りがあるからそれでいいか？」

「残り？」

「羊かんだ。あれ、好きなんだろう？」

「む……確かに、あれは旨いことは旨いが……」

途端、媛子が言いよどむ。

どうやらレジ袋の中身が気になっているようだ。しきりに横目で見ている。

あれだけ羊かんを絶賛していた媛子だ。きっとその味を知ったことで、人間の食べ物に興味が湧いたのだろう。

しかし、春臣にはその前にどうにも気になることがあったのを思い出す。

「なあ、そう言えば、そもそも神様って飯を食べないといけないものなのか？」

「なんじゃ、藪から棒に」

媛子が口先を突き出して訝る。

「藪から棒って、別に話に脈略がないわけじゃないだろ。ただ、神様でも腹が減るものかなあって、単純に思ってたさ」

「……答えてもよいが、どうしてそんなことを聞くのじゃ？」

彼女がそう訊いたのは、おそらく春臣がただ単に素朴な疑問を彼女にぶつただけでなく、その背後に何か隠された意図があることを看破したからだろう。

媛子の目が怪しく光っている。

「おぬし、なぜ気になるのじゃ？」

不敵な笑みを浮かべて言われたので、春臣は隠しても無駄だと思  
い、正直に答えた。

「神である媛子も食事しなくちゃいけないとなると、俺だけじゃな  
く、その分の食料も用意しないとイケない。俺と比べるとかなり少  
ないとはいえ、あんたは意外とよく食べるしな。そうなると当然、  
そこには金がかかる。俺の仕送りから差し引かれることになるんだ」  
「ほう、つまり、わしの答えによっては生活がその分困窮すると  
じゃから訊きたかったのかえ？」

「分かってくれたようだな」  
「仕方ない、では答えよう。まあ、結論から言うと、人間ほど頻繁  
に食料を摂る必要は無い」

これは朗報である。まったく摂取量がゼロではないものの、人間  
と同じ食生活をする必要がないことは有難い。

「へえ、そうなんだ」

とりあえず、朝昼晩という三食を用意しなければならぬという  
最悪の状況は免れた。

「まあ、神と人とは体が違うからの。そもそも我々にとって、食  
べ物は消化するものではなく、吸収するといったほうがよい」

「吸収？」  
「体内でこう、消えてしまうわけじゃ。きれいさっぱりな。全て、  
同化してしまうようなものじゃ」

彼女は身振り手振りでなんとなく説明する。

「はあ、便利な体だな」

「そつじやるつ。どうじゃ羨ましいか？」

そう言つて誇らしげに高笑いしてみせる媛子。

「ああ、そつだな……じゃあ、今日の朝飯はいらんだろ」

しかし、きつぱりとした春臣の言動に驚愕の表情で、凍りついた。

「え、え、なんでじゃあ」

「なんでつて……そんなに食べなくても死なないんだろ？ あんな高級な羊かん、媛子に全部食べさせるなんてもつたないし。その方が経済的だ」

「経済的じゃと！ そんなに金が大事か！？」

「そりゃあ、大事に決まつてるだろ」

すると、彼女は不貞腐れたのか、ふくれっ面になつて座り込んだ。春臣が神を敬う態度を見せないことに怒っているのだろう。

春臣は溜息を吐きながら屈みこむと、まるで子供を諭すように言い聞かせた。

「あのな、媛子。人間の世の中つてのは、金がないと生きていけない厳しい世界なんだ。神の世界じゃどうだったか知らないけど、そここのところ了承してくれ」

媛子はそんなことを教えられたくもないのか、無言でじりじりとして体の方向を春臣から逸らす。

完全に機嫌を損ねたようだ。

まずい、と思つた春臣は語気を和らげ、お願いする形をとつてみた。

「媛子は少しくらい食べなくても大丈夫な神様なんだろう、少し協力してくれ、な？ あ、いや、協力してくれませんか。緋桐乃夜叉媛様」

こう言われると彼女も無視は出来ないのか、ぼつりと言う。

「じゃ、じゃが、このままではわ、わしの心が……」  
「心がなんだ？」

「干からびてしまっくんじゃ。からっからのばさっぱさに。そうじゃ、いつだって食べ物わしの心を豊かに潤すからの。おぬしでもそう思うじゃろっ？」

何を言い出すかと思えば、と春臣は呆れる。どう考えても短絡的で思いつきの反論であることは明白だった。

「心が干からびたわしは悲惨じゃぞ。何をしでかすか分からん。もしかすると、春臣にとんでもない不幸が訪れるやもしれんぞ。最悪、死ぬの。ああ、絶対死ぬ。気の毒じゃあ」

彼女は必死にそう訴えてきたが、そんな脅し文句、力を失っている彼女からされても毛ほども利かない。

「おお、そうか、それは怖いな。後からコップに水を汲んでくるから、それで潤してくれ」

と軽くあしらう。

「それじゃあ、何の足しにもならんぞ！」



彼女はその態度について腹を立てたようで、いやいやをしながら地団太を踏んだ。

さすがにこのままでは怒りが収まりそうにもなかったので、分かったよ、と不承不承頷く。

食べ物の恨みは怖いというし、神に崇られでもしたら、たまったものではない。その上考えてみれば、今朝は春臣は、不慣れな場所に彼女を一人にしてしまったという失態をやらかしている。そこに負い目を感じていないわけではない。

「食べさせてやるから待っててくれ」

しかし、立ち上がり部屋から出ようとすると、媛子が呼び止めた。

「羊かんなのかや？」

視線を向けると、やはり気になるのか、コンビニの袋を掴んでいる。

「その中身の方がいいのか？」

訊くと、彼女は満面の笑みでこくりと頷く。

「どんなものか見てみたいの」

「大したものじゃないぞ。中身はコンビニのパンだ」

「パン、とな。さては洋食というやつじゃな。あの、粉を練りまわして焼いた食べ物じゃろ」

「へえ、意外とこっちの世界の知識もあるんだな」

「まあ。多少伝え聞いた程度じゃが。こっちのことも全く無知というわけではない。それよりもそのパンとやらを見せてくれ。食べ

てみたいぞ」

高鳴る鼓動を抑えきれないといった様子の彼女に、春臣は大人しく袋の中身を見せてやった。

「ほら、これはサンドイッチ。それとこれは、ホットドッグだな。それとサラダ……」

「春臣、春臣、これはなんじゃ？」

しかし突然の声に顔を向けると、彼女は見せていたパンをそつちのけで、買ってきたばかりの缶コーヒーを見ていた。

「触れると熱いんじゃ」

そう言って、何度か少し触れては指を引っ込める。

「面倒くさい神様だ。」

「じゃあ、触るなよ。」

「まあそりゃあ、ホットコーヒーだからな」

「ほっとこーひー、ほっとこーひー？」

彼女は新しく習った言葉を拙くも繰り返す。

「ホットコーヒーだよ」

「して、それはいかなる物じゃ？」

「飲み物だよ、外国の。日本で言うとお茶みたいなもんかな」

「ふうむ、それは飲んでみたいの」

そこで、春臣はある疑問が思い浮かぶ。

「……それはいいが、パンはいいのか？」  
「ええと……」

すると、彼女は少し困った顔になってから、春臣の手元においてあるものに視線を走らせる。

「それはコーヒーを飲んでからでもよいかの？ 二つあるのなら、両方食してみたいぞ」

さらに、彼女の視線は抜かりなくサラダを捉えていた。

「おっと、そっちにあるのは野菜か？ 見たことの無いものもある。それも食べさせるのじゃ」

「つまり、全部か？」

春臣は不服そうに結論を口にする。

「ああ、そうじゃ。全部食べてみたい」

清しいほど明白にそう言って、彼女は頷く。

「はあ……」

どうやら、自分の家に来てしまった神様は不運なことに食欲旺盛な神だったらしい。

これには春臣は肩を落として、財布の残りの金額を考えた。

## 15 微糖、ビター

コーヒを飲んでみたいと所望してきた媛子のため、春臣は台所の食器棚を探っていた。

木製の取っ手を開くと、丁寧に大きさを揃えられた皿やコップが誰かに並べと言われたかのように、綺麗に隊列を組むように整列している。

その食器棚は古いもので、春臣が引越しの際に持ってきたものではなく、祖父が以前から、要するに夫婦で暮らしているときから使っているものだった。

中に入っている食器も全て祖父たちが使用していたものである。

それらは、骨董品店にでも売れば高値がつきそうな深い味わいを感じさせる独特な光を放っていた。

春臣はその食器をどけながら奥へと手を伸ばす。

誰も手入れをしていないせいで少々埃をかぶっていたが、目当てのものは意外にもすぐに見つかった。

「お、これだな」

手にとったのは酒を注ぐためのちょこである。

どうしてそんなものを探していたかというところ、媛子のサイズにあった飲み物の器が他に見当たらなかったためだ。はっきり言うと、それでもまだ大きいほどなのだが、それよりも小さなもので適当なものも見当たらなかった。

ストローで飲ませるといふ手も考えたものの、やはり大きすぎる。彼女は顔を真っ赤にして吸い込もうとした挙句、軽く呼吸困難に陥ることになってしまったのである。

「これでなんとか飲ませるか」

これなら安全だろうと春臣は頷き、媛子の元に戻る。

部屋に戻ると、媛子は春臣が食べやすいように千切ってやったコンビニのパンにおいしそうにかぶりついていた。

「おう、そのちょことやは見つかったのか？」

口の周りにパンの粉をつけながら、そう聞く彼女に神様らしい威厳は微塵もない。むしろあどけないと言っている。

「ああ、見つかった。これなら流し込むだけだから、飲みやすいだろう」

「そうか、さっそく注いでくれ」

嬉しそうに返事をして、食べかけたパンを傍らに置くと、春臣が立っている机の端まで駆けてくる。

「おい、走ると転ぶぞ」

春臣が注意したのも無理は無い。

彼女が来ている服はただでさえ裾が長く、見るからに危なっかしい。

あれでは転ばずに歩く方が難しいだろう。

そして、

「あ、あわ！」

案の定、彼女は裾を踏んづけてつまずいてしまった。

しかも運悪く机の端であったため、彼女はバランスを崩したまま、そこから転げ落ち……。

「っと。危ないな」

しかし、寸でのところで春臣の手が伸び、彼女が机から落ちたところでキャッチすることに成功した。

「た、助かったぞ。春臣」

仰向けに倒れた彼女は目を回したように首をふらふらさせながら起き上がる。

「だから転ぶって言っただろ」

「少々油断しておっただけじゃ、なに、大したことではない」

しかし、注意したにも関わらず、事の重大性に気がついていないのか、再び机の上に降り立った媛子は何事もなかったように泰然とした素振りです。視線はすでにコーヒーマシンに向かっていているようだった。

その態度は春臣の眉をびくりと動かす。

仮にも彼女をこの部屋で保護している者の立場から、黙っておけるわけではない。

「おい、ちゃんと聞いているのか。これは大したことなんだよ！」

今度は自分の怒りが伝わるようにきつぱりとした口調で言う。

「……ん、そうか？」

「媛子の体は今小さいんだからよ。ちよつとしたことで大事故になりかねないぞ。ちゃんと自覚してるんだらうな？」

春臣は缶コーヒーを開け、ほんの少しちよこの中に注いでやりながら、彼女のことを押さえつける様に睨んだ。

「そ、それはまあ。以前通りの自分ではないことくらいわかつてるが」

「今は俺がいたからよかつたものの、もし俺がいないと、どうなつてたことが分かつてるのかよ！」

「うつつむ……返す言葉がないの」

すると、予想以上に怒られたことにショックを受けたのか、彼女はしゅんとしよげてしまった。

もしかすると、以前の力を持っていた自分と比べて無力となつてしまったことを再び痛切に実感し、衝撃を受けているのかもしれない。

少々言い過ぎたか、と春臣は反省する。

「まあ、もういいさ。ほら、これがコーヒーだよ」

優しく言つて、コーヒーを飲むように促す。

「あ、ありがとう」

彼女は両手で抱えるようにしてちよこを持ち、ほんの少し、傾けようとする。春臣は彼女が飲みやすいようにちよこを指で支えてやった。

今度は上手く飲めたようだ。

「どうだ？」

さっそく感想を聞いてみる。

「うむ、なんと云うか……」

「あん？」

「ごほっ、ごほっ。に、にがい」

途端に渋い顔をして、媛子は咳き込む。眩しがるように目をつむり、首を振った。

春臣は缶を持ち上げて表示を見てみた。

微糖、とある。

きつとコーヒーを初めて飲んだ人間にしてみれば、拒絶するには充分事足りる苦味があるはずだ。

「と、とてもではないが、こんなには飲めぬの」

あっさりと残りのコーヒーを断念し、彼女はその場に座り込む。すると、気が抜けたのか、同時にごとりとちよこの中のコーヒーが揺れ、こぼれそうになった。

これまたその一瞬手前で春臣が抑えたが、あぶないところだった。そのままであれば、媛子は頭からコーヒーを被っていただろう。



「ふっ……」  
「す、すまぬ」

これでは一瞬の気も抜けない。

ある意味普通の子供の子守をするより大変かもしれないと、春臣は溜息をつく。

「媛子が小さい《……》ってことがこんなにもいろんな障害を生むとは考えてもいなかった」

それは口から出た春臣の正直な感想だった。

「ああ、わしもそう思うぞ」

これには彼女も同意する。

「昨日は踏み潰すだなんだの言ってたが、こっつ小さい《……》と、それ以上に厄介なことは山のようにあるな」

飲み物を飲むのでさえこんなに苦労をするのであれば、この先、どんなことで苦労するかも分からない。

そう考えるだけでうんざりしそつだったのだ。

「……春臣」

すると突然、彼女が尖った声で名前を呼んだ。

「なんだよ」

訝って聞き返すと、

「先ほどからどうにも気に食わないのじゃが、小さい小さいとうるたすまざるぞ」

どうやら春臣の言動が彼女の癪に障ったようだった。

「でも、事実だろ。背が小さい神様なんだし」

そう言って春臣は彼女の頭を人差し指でぐりぐりと撫でてやる。これはまるで小動物のようで意外と可愛い。何時間でも遊べそうだ。

「や、止めい！ これは本来のわしの大きさではないと以前説明したはずじゃぞ！」

「あれ、そうでしたか？」

「神に対して無礼が過ぎるぞ。やはり死にたいか？」

「滅相もございません、神様」

ふざけていつもより一オクターブ高い声で謝ってやった。力などなくせに、そんな脅しなど痛くもかゆくもない。

すると、彼女はもうどうでもよくなったのか、溜息をつく。

そして、目を細めると意味ありげにこう訊いた。

「もしかすると、お主は気づいておらんのか？」

「……何のことだ？」

「わ、わしの身長じゃ。昨日よりも高くなっておるっつ？」

「え、身長が伸びるのか？」

神も成長するのか、と聞いて驚いた。

「よいから、よく見てみよ」

「う、うーん？」

そう言われて、彼女の顔を近づけてみるが、特に昨日と変わった様子は無い。

相変わらず、手のひらサイズの人形である。

第一、春臣と媛子ではスケールが違い過ぎるので、違いが分からないのだ。

仮に道端の蟻の全長が一ミリ伸びたところで、注意深く見ていないと、その違いに容易に気づける人間などそういないだろう。それと同じことである。

春臣はあることを思い出す。

「って、そういえば、媛子は昨日、むしろ身長が縮んだんじゃないかなっただか？」

神力を見せると意気込み、神楽鈴を力強く振った媛子は、見掛け倒しのその動きで自身の体にその反動を受けていたようだった。

彼女は頷いて、そのことを説明した。

「そうじゃ、どうやらそれはこの異空間で力を使おうとしたかららしい。まあ、自らの存在の力を消耗してしまったわけじゃな。その分、身長が小さくなった」

「へえ……」

「じゃが、今朝起きてみると、わしはあることに気がついた。どうやら昨日すり減らした分のわしの身長が元通りになっておるのじゃ」

背が伸びたことを強調するためか、彼女はその姿で精一杯背伸びしてみせる。きっと大きくなったと言ってもらいたいのだろう。

「なるほど、それはどうしてだ？」

しかし、春臣はそれを軽く無視して話の先を促す。

「う、うむ。つまり、神の世からの存在の力がわしの体内に再び蓄積したというわけじゃな」

「蓄積？」

「そうじゃ。つまりは昨日、ここに初めて来たときのわしの力まで回復したわけじゃ」

「ふうん」

媛子はそのことでさらに何か言いたげだったのだが、春臣には何のことか検討がつかず、適当な相槌を打つ。

すると、媛子は起死回生の逆転満塁ホームランを打った野球選手のような、不可解な勝ち誇った笑みを浮かべた。嫌味なほどの笑みだ。

「分からぬか？」

「何が？」

「そこに、わしが元の世界に戻る可能性が秘められていることに、  
「じゃ」

椿に教えてもらっていた町のホームセンターまで行き、あれこれと生活に必要なものを買い揃えた春臣が自宅の玄関まで戻ってくる  
と腕時計の針は六時を回っていた。

両手に抱えきれない荷物を持っていた春臣は玄関を開け、居間でナメクジのようなすり足で辿り着くと、そこでようやく休息を得た。

そのまま力尽き、畳の上に仰向けに寝転がる。

荷物の袋からはみ出しているフライパンの取っ手を見ながら、一日で買い物できる量ではなかったと今さらながら後悔した。

せめて、数日に分けて買出しに向かうべきだったのだ、と。

疲労困憊とはまさにこのことだろう。

だらしなく放り出された両腕にはまともな力が入らない。それはまるで、伸びきったゴムのようだ。じき、筋肉痛になって軋むように痛みだすことは間違いない。自分の情け無い様に苦笑しながら、なんとか起き上がり、電灯のスイッチを入れる。

そして、テレビのリモコンを探そうとして、はっとした。

いつもならテレビが置いてある台の上に、その空間がぼっかりなくなっているのである。台の上の埃を被っていない露出した真新しい部分だけが、ただ空しく、確かにテレビがあったことを示していた。

これはどういうことか。

「あ、そうか」

と春臣は右手で左手の手の平を叩き、合点がいく。それと同時に、上階から少女の笑い声が聞こえてきた。媛子の笑い声である。

「あいつ、もしかしてずっと見てるのか」

そうばやきながら階段を上がり、部屋のドアを開け放つと、テレビの前でリモコンの上に乗って熱心に見入っている少女の姿があった。

行儀よく座布団の上に座り、興奮しているのか、小刻みにその姿勢のままジャンプしている。

「おい、媛子」

その声で春臣に気がついたようで、媛子はお気楽に手を振った。

「おお、帰ったか春臣。買い物は済んだのかや？」

「ああ、なんとかな。重たすぎて手が吊りそうだが」

春臣はあぐらを掻いて座りながら、おもむろに二の腕辺りを揉み解す。テレビを一瞥して、そして、呆れたように媛子を見た。

「ずいぶん、テレビが気に入ったようだな。下の階からわざわざ持って上がった甲斐があったぜ」

というのも、実は買い物に出かける前、春臣はあることを考えた。それはここに媛子を一人にさせることで、それについては今朝の教訓から、よくないことだと学習していた。

たとえば、媛子にきちんと説明したところで、一人になることに、彼女はまた不安がるかもしれないと危惧したわけである。

そのために春臣が考えた案がこの、テレビだ。  
見ているだけで退屈せず、長時間暇つぶしができ、この人間世界のことを学ぶのにも最適なそれを持つてくることにしたのである。

そして、一石二鳥も三鳥もお得なそれを、彼女は電源を入れると同時に食い入るように見始めた。

まだこの世界の物に免疫のない彼女が、もし、拒絶すればどうしようかと考えていた春臣だったが、それは杞憂に終わった。

『春臣、箱の中に人が!』

というどこかの漫画や小説で聞いたような知性も個性の欠片もない台詞を叫び、飛び跳ね、小躍りしたのである。

喜んでもらって何よりだったが、そんな彼女は神様というよりも、やんちゃ盛りの五歳児にしか見えなかった。

ともかく、そんな好奇心旺盛な手乗り神様に、春臣は簡単にリモコンの使い方を教え、手の届く位置に小さく刻んだ羊かんを置いていると説明したが、すでに彼女は上の空で、空しくなったまま家を出たのだ。

「そんなに楽しいかよ?」

そう訊きながら、ともかく機嫌を損ねることがなかったようで春臣は内心ほっとしている。

「ああ、いつまで見ておつても飽きぬ。人間の世界にはこれほど面白いものがあるとは、思ってもみなかったぞ」

彼女は嬉々として飛び跳ねた。  
そして、

「わしがこれまで見てきたものの中で、他のものを蹴落とし、一氣に一位に上り詰めたな」

とどこかで聞いたような台詞を言う。

たしか、以前は羊かんだっただろうか。

「媛子のランキングはずいぶん安っぱいんだな」

そう皮肉を言うと、媛子はふくれっ面になってふんと鼻を鳴らした。

「新しいものに感受性が高いと申せ、わしはいろいろなものを受け入れる寛大な心を持っておるのじゃ。保守派の神々とは違う」

神にも派閥があるのか、と春臣にはそっちに驚き、

「そ、そうなのか」

とクエスチョンマークの付きそうな曖昧な返事をする。

そして、ふとテレビ画面を見ると、夕方のニュース番組を映していた。どこかの道路で速度違反の車とパトカーがカーチェイス紛いなことをしたらしく、興奮気味の評論家が昨今の交通死亡事故について声を荒げて論じている。

画面が切り替わり、今度はパトカーのけたたましいサイレン音と赤い光が明滅した。



「おお！ 何じゃ、何じゃ！」

すると、彼女が不謹慎極まりない弾んだ声を出す。  
春臣は苦笑いをしながら、これはこれで、後から話をしないといけないかもしれないと心に留めた。

「まあ、テレビもほどほどにな。晩飯にするぞ」

「おお、分かった。して、今日は何があるのじゃ？」

振り向いた彼女に期待たつぷりの視線で見られ、春臣は持ってきたスーパーのレジ袋からそれを取り出すのをためらってしまう。動きが止まる。

「どうしたのじゃ？」

「いや、そんなにうれしそうにされると、少しがっかりされるかなって、思ってたさ」

額に嫌な冷や汗が垂れた。

無理もない。

媛子にと買ってきたものはとても安価なもので、普段はあまり好まれて食べるものではなかったのである。

「うん？ よいから見せてみよ」

促され、仕方なく春臣が袋から取り出したのは、レトルトパックに入れられた、おかゆだった。

温めてから食べるもので、柔らかく、そのまま飲み込め、小さな媛子でも食べ易いと思いきり選んできたものだったが、さすがにこんなものでは、彼女の人間の食べ物に対する熱い期待には応えられなかったらしい。

パックに印字されたおかゆの文字を見て、さすがの彼女にもそれが何であるか判ったらしく、あからさまに落胆した。

「はあ？ わしは病人か？」

「まあまあ、結構俺も考えたんだぞ。小さい媛子でもすぐに食べられるものと思ってな」

「ぬしは何を食べるのじゃ？ もちろん、神がかゆを食べるのじゃから、おぬしもかゆじゃろうな？」

「いや……俺はこっちの弁当があるから」

後ろめたくなりながら、春臣はちらりと袋の中身を見る。少々奮発して豪華な幕の内弁当にしたのだが、この状況において、彼女の前でそれをこれ見よがしに食べるのは、あまりにも酷な話だ。

予想した通り、弁当の単語だけで彼女の怒りを買ったらしい。

「な、なんじゃと！ は、恥を知れ、この愚民が！ いますぐにその弁当をわしに寄越せ、ぬしはかゆで上等じゃ」

そう居丈高に吐き捨てる彼女。

しかし、そこまで言われるとは春臣もさすがに心外だった。

「ちょっと待て、買ってきてもらってその言い方はないんじゃないのか？」

「な、なに？」

「普通ここは気に入らなくても、一先ず礼を言うのが普通だろう？ まさか神様ともあろう者がそんな礼儀すら知らないんじゃないだろうな？」

「そ、それは……」

すると、彼女の言葉が詰まる。

どうやら春臣が思いついた新しい抗戦方法は功を奏したらしい。彼女が振りかざす、「神様」という威厳に満ちた肩書きを、逆に利用するのだ。

「ほら、ありがとうぐらい言えるだろう？」

「あ、あ……」

「ありがとう、だ」

まるで、赤ん坊に言葉を教えるように春臣は教える。もしかしてそれでまた機嫌を悪くするかもしれないと危惧したが、意外にも彼女はしおらしく従った。

「……ありがとう、春臣」

微妙に口元を手で隠し、恥じらいを見せるその表情に、その後褒めてやろうと思っていた言葉が喉の奥に引っ込んだ。

可愛らしい、と思えなくもない。

いや、嘘は言つまい。事実、可愛かった。

いくら小さく、神とはいえ、その姿は人間の少女そのものなのだ。

「これで、よいのか？」

傾けた首で、鈴がなる。

「あ、ああ、分かったよ。弁当もやるから。それに、俺もかゆなんて買ってきて悪かった」

なんとかそれだけ言って、平静を保つことに成功した。

「うむ。もうよいぞ。それでは一緒に食べるとするか」

機嫌を取り直した彼女は笑顔で頷くと、座布団の上から降りた。そして、春臣の足元に近寄ろうとして何かを発見したのか、はたと立ち止まる。

また興味を向くものを見つけたらしい。その視線は春臣の影になるあたりに隠していた箱に注がれている。

「春臣、その後ろにある箱は何じゃ？」

全く目ざとい神様だ。

油断ならないな、と溜息をつく。

「それはケーキだよ。晩飯の後で食べるために買ってきたんだ」

「けーき、ケーキ、とな！」

すると、彼女の目が輝きだす。

「なんだよ、知ってるのか？」

「先ほどテレビでやっておったのじゃ。この春の新作スイーツ特集じゃったか？ ともなく、あんなに色とりどりでうまそうな食べ物を見たことがない」

どうやら、さっそくテレビでの学習の成果が発揮されているらしい。知識が身についたのならそれはいいことである。

しかし、もしかするとあんまりテレビを見せていては、その内にあれが食べたい、これが食べたいと次々に要求され始めるのではないだろうか。

春臣はそんなことを想像して、不安になった。

ただでさえ、使える金は限られている。そうなった場合は厄介だ。

その内、神への情報規制が必要になるかもしれない。もちろん、本気で思っている。

「まあそれは、晩飯を食ってからな」

そう話して、彼女を机の上に乗せ、弁当の蓋を開ける。

「ああ、そうじゃー!」

てつきり、豪華な幕の内弁当の中身に選り好みしているかと思いきや、再び彼女は何かを思いついたようだった。

「今度はなんだ?」

うんざりしながら訊いた。

「その前にすることがあったじゃろっ?」

「することって、ああ、あれ《・・・》か」

春臣もすぐに頷き、彼女を手のひらに乗せ、部屋の隅に出っ張っている柱の一つまで運んだ。

媛子はその柱まで歩いていくと柱に背を向ける形で、ぴたりと張り付いた。

そこで何をするかと言うと、彼女の身長測定である。

これは今朝のこと、彼女が話していたことがきっかけで始まった。媛子曰く、昨日に比べ、彼女の減った分の身長が元に戻り、力が回復しているということは、神の世界からの存在の力が彼女に溜まったという事実を物語っているのだそうだ。

つまり、この存在の力はここが異空間という特殊な空間であって

も、神の体にエネルギーを蓄積させることが出来る「性質」を持っていることが判明したのだ。

それがどうしたと思うかもしれないが、これは、大きな発見である。

要するに、彼女がこの空間に留まっているだけで、神としてのエネルギーが溜まっていき、身長もその分、伸びるといふ真実を示しているからだ。

いずれは、本来の姿と力を取り戻すところまでいけるだろう。そうなれば、後は彼女自身の力で神の国に帰れるというわけである。

それを聞いた春臣は、どうやら永遠に彼女がこの空間に居座らなくともよいらしい、と知り、とても嬉しく思った。

「よかった、よかった」

と彼女と小躍りまでしたのである。

しかし、これで元の世界に戻れるという確証は得たのだが、今度はそれまでにどれくらいの期間を要するのか、という疑問が持ち上がった。

「本来の姿を取り戻すまでに、何十年、何百年もかかるようでは、さすがに時間がかかり過ぎじゃからの」

と彼女は不安げにそう言うのだ。

それで、そのためにはいったい彼女の身長伸び率が一日につきどの程度なのかを調べなくてはならない。そういう結論に至ったわけだ。

身長測定はそのため毎日行うことになったのである。

## 17 神様の身長測定 2

「ほら、もう少しあごを下げろって、朝やったのと同じ体勢でやらないと、実際の身長を測れないだろ」

春臣は、柱に張り付いた彼女の少々上ずった顔を下げるように注意した。正確な測定をするためにはそういった調整は欠かせない。

「まさか、ズルでもしようっていうんじゃないだろうな？」

ありえないとは思うが、一応そう訊いておく。もし仮に、彼女がそれを意図してやっているとしたら、それは小学生レベルのごまかしだ。人知を超えた叡智を持つはずの神がやることではない。

すると、やはりそうではなかったようで、彼女は冷たい目で見返してきた。

「そんな程度の低いことはせんわ。そうすることに意味がないことぐらいわかっとなる。ほれ、これでよいか？」

素直に顎を下げる。

「う、うーん？」

しかし、春臣からは顎を下げたはずの彼女の頭の位置が、僅かに震えて、中々位置が定まらないように見える。

「も、もしかして？」

ちらりと、彼女を足元を見ると、予感的中だ。



媛子は少しでも身長を伸ばそうと、膝を震わせながらも爪先立ちをしていたのである。

「こんな程度の低いことねえ……。まさか、神様がねえ」

怒りを込めて言いながら媛子の頭を押さえつける。

「痛いぞ、春臣。お、おい、単なる冗談ではないか。おぬしはそんなことも分からののか？」

「真面目にやってくれよ。こっちは媛子に真剣に協力してるんだぞ。茶化されちゃ困る」

「す、すまん。おぬしを見ておると、ついからかいたくなつての」「からかいたくなつた？ それはあんたから見れば、俺はただの人間の小坊主かもしれませんがね。言わせてもらおうと……」

「ほれ、じつとしておるぞ。今のうちに早く計ってくれ」

春臣としてはまだ文句を言い足りない気分だったが、おそらくその感情を表情から読み取ったであろう彼女にそう急かされ、渋々なから持っていたペンで彼女の頭の位置を柱に記した。

そのまま真横に線を引き、今朝測った身長とを、顎に手を当てながら見比べる。

「うーむ」

「どつじゃ、伸びておるか？」

結果が待ちきれない、と媛子はくるりと柱を振り返った。

「大きく見積もって、5ミリ、くらいか？」

「5ミリ？ どのくらいじゃ？」

「ええと、ものさしで見てみるよ」

これくらいだ、ともっていたものさしで媛子に指し示した。そして後ろを振り返り、実際の計測結果を見比べ、

「……おお、確かに伸びておるわ」

と喜びの声を上げる。

「半日で5ミリなら、一日で一センチ。媛子の元の身長が150センチほどだと見積もって、今の身長が10センチだから……元に戻るにはあと140日くらいかかるってことか？」

確かに多少時間がかかるものの、途方もない時間というわけではない。五ヶ月弱といったところか。

ともかく彼女は元の世界に戻れる目処がついた、春臣は樂觀的にそう思った。後はその時が来るのを指折り待っていればいい、そう考えた。

しかし、媛子の顔はというと、一瞬華やいだ後で、なぜかはっと息を呑み、静かになった。

「どうした？」

と訊くと、

「どうやら、見落としておることがあったようじゃ」

と深刻な顔つきで春臣を見る。そこから、ただならぬ空気を感じ取った。

「どづいつことだ？」

少しの沈黙の後、彼女はゆっくりと口を開く。

「確かに、わしの身長は半日だけで5ミリ伸びておる。しかし、わしの体は縦だけに伸びるのではない。体積分が増えるわけじゃから、同じ比率で身長が伸びていくわけではない」

最初は何を言っているのか分からなかった春臣だが、すぐに言いたいことを理解した。

分かり易く言うと、つまり、毎日決まった雪の量で少しずつ大きな雪だるまを作るものと考えていけばいい。

最初は全ての雪を使って球の形を作ればいいが、次からはその上に新たに周りを雪で固め、厚みを増やしていく必要がある。

しかし、回が増すにつれ、雪だるまは大きくなり、固めなくてはならない表面の面積は増えていく。

要するにその分だけ、一度に増やせる厚みの量が減っていくわけだ。

それを媛子の体で当てはめると、次第に身長伸び率は下っていく。

大きくなればなるほど、その伸びは、微々たるものになっていく。そう、きつと最終的にはものさしなどでは分からないほど、小さなものに。

「今の状態でさえ、一日1センチであることを考えると、この調子で行けば、とても一年やそこらでは元の体には戻らんじゃろうな」

媛子の声が絶望に染まる。

「しかもただ体が元通りになって終わりではない。その上、わしが神本来の力を取り戻すまでいかなければ、神の国へは帰れぬ」  
「……………」

あまりのことに春臣は二の句が継げなくなった。  
その事実が示す答えに気づいてしまったのである。それが、媛子の口から語られた。

「そうなると下手をすれば、何百年。それまで神の力を使うことを制限され、この狭い空間で生活を送るとなれば……………」

春臣から俯いた彼女が唇を噛んだのが分かる。その事実がよほど身に堪えていると見えた。

この状況に、何も、言えなくなる。

春臣は神ではないし、同じ立場でもない人間で、彼女の本当の気持ちなど到底理解することなど出来ないが、少なくともきつと拷問に近いものなのだろうと察した。

その苦痛は、きつと計り知れないものだ。

「媛、子……………」

そう名前を呼んだ後で、春臣はその先の言葉が浮かんでこないのが分かった。

きつと大丈夫だ、なんて無責任なことはとてもじゃないと言える状況ではないと察知した。

それは、行き詰まりの壁の前で、意味もなくつま先を壁にぶつけるような行為だ。

何の意味も成さない。気休めにすら。

さらに状況を悪化させかねない危険も孕んでいた。唾を飲み込んで、春臣は彼女の顔をのぞきこむ。

沈みきった、媛子の顔。

今、彼女の目に映っているものは、間違いなく、先の見えない闇だ。

落ちていけば戻れない、絶望の谷間だった。

彼女はそこを覗き込んでいる。

そんな媛子に自分は何が出来る？

春臣は自問する。

そこで自分に出来ることはなんだ。

一緒にその絶望の淵を覗き込むことか？

いや、違う。

自分に出来ること、それは、絶望に囚われた彼女が気づいていない「希望」に目を向けさせることだ。

そうだ。それなら自分にも出来る。

かけるべき、言葉が、ある。

「媛子」

今度は覇気を取り戻した自分の声が響いたのが分かった。それが、自信に繋がる。

「このままで、駄目なわけじゃない」

「……？」

「今の方法がうまくいかないなら、違う方法を見つけるまでだ。そうだろう？」

「はる、おみ？」

「今回の方法が結果的に現実的でないと分かっただけで、そこには前進がある。媛子の体に存在の力が溜め込めることが分かったなら、今度はそれを、効率よく促進させる方法を探せばいいんだよ、な？」

それまで、虚ろだった彼女の瞳に元の輝きが戻ってきていた。春臣の言葉はきちんと彼女に届いたようである。

すると、媛子は急に俯いたかと思うと、なにやら服の袖で目元辺りを数回擦ったようだった。

「うん？ どうした？」

「なんでもないぞ。ただ、そう、目にゴミが入ったのじゃ。別に涙が出たとか、そういうことではない」

これほど、分かり易い神様が他にいるのだろうか。春臣はあまりに正直すぎる媛子をいじめようとは思わず、ただ、信じた様に振舞った。

「そうか」

その方が、レディーに対する礼儀だと思っし、なによりこころがほっと温まった。また、元気を取り戻してくれたようだ。

「う、うむ。春臣の言つとおりじゃな。まだ、他の方法などいくらでもある。今回はただ、その中のたった一つが消えただけじゃ。何

の問題もない」

「そうだ、その意気だぞ」

「よし、こうしてはおれぬ。まずは腹ごしらえじゃ」

「え？」

彼女はそう叫ぶと、上に向かって腕を突き出し、とてとてと駆け出して、春臣の背後に回りこんだ。

そして、ケーキが入った箱の前で立ち止まる。

「春臣、さあ、わしにケーキとやらをたべさせるのじゃ」

「それは、弁当食べてからだろ？」

絶対無駄だと分かりながらも、春臣はそう忠告する。すると、やはり彼女は首を振った。

自分の方針は断固として変えるつもりはない、そういうことだろう。

「わしの心が甘いものを求めている。早く食べねば、わしの心が干からび、悲惨なことになってしまうぞ。おぬし、死にたいか？」

そんな安っぽい脅し文句にも騙されてやることにした。

「……分かったよ。好きにしるよ。死にたくないしな」

「うむ。ありがとう、じゃ。春臣」

その教えたばかりの感謝の言葉を聞きながら、春臣は箱の蓋に手を伸ばした。

気がつけば、カレンダーの新たな日付は、春臣がこの町に越してきて一週間経ったことを示していた。

光陰矢のごとしという言葉があるように、時の流れというものは流れ落ちる滝のごとく、無常にして容赦ない速度で全てを過去に変えていく。

野辺に咲く可憐な一輪の花でさえ、その時の流れには成すすべもなく、その美を留め置くことは出来ない。

人を超越し、あらゆる力を掌握して、世界を創り出した神が存在するのであれば、この時間の存在もまた、神が創り出したのである。

我々、人間はその時の奔流に有無を言わず押し流され、瞬く間に過ぎていく日々を僅かな生の息継ぎをしながら暮らしている。

大昔の著名な歌人たちは、そんなゆめまぼろしのような一生の儚さを詩に乗せて詠んだのだ。

嗚呼、さみしいなあ、と。

涙が出るなあ、と。

そう言った類のものを調べようと思えば、きっと枚挙に暇が無いに違いない。

しかし、一方で面白いことに、人間という生き物はあつという間に過ぎていくはずの時間がとても長く感じるということが多々ある。

特に春臣のように、それまで育ててもらっていた親元を初めて離れ、不慣れな見知らぬ土地で暮らし始めたばかりの学生は、である。



そんな彼らにはたった一週間という時間の流れも、全く一ヶ月、二ヶ月にも長く思えるものなのだ。

なにしろ、やる事成す事、初めての体験ということが多いし、それまでは親に任せていたこと全て、自分が突然に引き受けるわけであるから、当然、要領もつかめない。

掃除、洗濯、炊事、買い物、ゴミ出し。

これも数え上げればきりが無い。

しかも、自らの生活を成り立たせるだけで精一杯なのに、追い討ちをかけるように、彼らには新たな場所での人々の出会いが待っている。

それは楽しい反面で、逆に知らない人間に囲まれた自分が、窮屈な思いをすることもあるだろう。

新しい物事の波が大挙して押し寄せ、人は目まぐるしい生活の連続に、途方もなく長い時間を感じてしまうというわけだ。

加えて、そんな学生の場合、ふとしたことで実家のぬくもり、親の優しさを思い出してしまうものだから困りものである。

あくせくと日々を過ごしながら、急に訪れる長く孤独な夜に涙し、望郷の念がふつふつと胸に湧き上がってくることは必然と断言している。

しかし、多くの人間が避けて通れぬその慣れない生活と望郷の病に、この春臣少年もやはりかかっているか、と思いきや、意外とそういうわけでもないらしい。

「ええ？ だから、大丈夫だよ。いって。別に来なくなっただけ」

久しぶりに掛かってきた実家の母からの電話に、素っ気無い返事をしながら、何食わぬ顔で春臣は朝食のジャムを乗せたトーストに齧りついている。

その表情に引越し当初にあった押し込めたような寂しさの影はない。

「はいはい。問題ないよ、ちゃんと飯も食ってるって。それじゃあ、もう行かないといけないからさ。切るよ。分かったから、じゃあね！」

露骨にうっとおしさを声に滲ませながら、春臣は電話の子機を置く。

「まったく、心配しすぎだったの」

すると、そうぼやいてコーヒーを飲んだ春臣の背中越しに、誰かが声をかけてきた。

「おい、春臣。今の電話は誰からじゃったのじゃ？」

振り返ると、そこにはテレビの前に体とは不釣り合いに大きな座布団に腰を下ろしている媛子の姿があった。

突然、この人間の世界に迷い込み、当初は何をするにも悪戦苦闘していた彼女だったが、一週間を過ぎると、さすがに生活にも慣れしてきたようで、今では毎日欠かさず見るといってお決まりのテレビ番組もあるというほど、この世界に馴染んでいる。

あれから身長も日に日に伸び、今では十五センチほどの大きさになっていた。筍、とまでは言えないが、通常では考えられないとんでもない伸びだ。やはり、神であるだけはある。

「おぬしの親からではないのか？」

そんな彼女の声が少し不穏な空気を漂わせている。

「そうだけど？ それがどうした？」

「おぬしは、親に対して普段からあんな口の聞き方をするのか？」

「何だよ、別にいいだろ？」

「今まで大切に育ててもらった親に対して、先ほどの口の聞き方はいかなものか、とわしは忠告したい」

その声の尖り具合に、春臣はいやな予感がして眉をひそめる。

「朝から俺に説教でもしようってか？」

「無論、わしは神じゃからの。育ててもらった親の恩を忘れ、墮落の人生に足を踏み入れようとしておる大ばか者の人間がおれば、それなりに、教え諭し、更生させる義務もあるじゃろっ」

「ほう、俺を大ばか者と？」

「まさか、気づいておらんかったのか？ それにも気づかぬほど、おぬしの脳はすかすかなのか？ 嘆かわしいの」

彼女は大げさに手でぴしゃりと額を打ち、明らかに見下げた態度をとった。

「……比較的寛大な朝の俺で命拾いしたな、機嫌が悪かったら、今頃媛子をその窓から放り出しているところだ」

春臣は左手に開け放った窓を顎でしゃくって示す。そこからは清しい朝の青空が見えた。

「ふむっ、考え方が安直で野蛮じゃの。ますます悲惨じゃ。正々堂々とわしと話しあいでも解決しようとは思わぬのかえ？」

「話しあいでも解決？ 先に喧嘩を売ってきたのはそっちだろ？ そ

の上で平和的解決を望むのは虫がいいんじゃないか？」

「しかし、その前に、母親に対して素っ気無い態度をとっておったおぬしが原因じゃろう？ わしはそれに腹が立った」

むすりとした態度で媛子は鼻をつんと突き上げる。

「自分の親に息子がどう接しようかと、媛子には関係ないだろう？」

「関係あるないの問題ではないぞ。子供が親を大切にせぬという事実をわしは見過ごせぬ」

春臣としては何をそこまでしつこく迫ってくる必要があるのか、甚だ疑問だった。

手鏡を見ながら身だしなみを整える春臣に彼女は依然として厳しい視線を向けてくる。こころなしか、敵意をむき出し、唸っているような気もした。

「ええと、媛子さん？」

すると、彼女は投げつけてくるつもりなのか、傍らに朝食としておいていた羊かんの一欠けらを握った。

さすがに出かける前の服を汚されてはたまらないとその落下範囲に入らぬように後ずさりながら、思い出したことが一つ。

初めてこの家に来た媛子に、名前を訊ねたときだ。

確か彼女は自分の名前を言い渋ったあるとき、春臣が名前を名乗って、彼女は、

『その授かりし、名。大事にせよ』

とそう言った。そう、親からもらった名を大切にしろと、そう言

ったのである。

そこから、媛子が親と子に対する関係に敏感であることが窺えなくもない。

待てよ。そもそも、彼女にもそういう関係が存在するのだろうか？

つまり春臣は、神と神の間に家族としての繋がりがあるのか、疑問に思ったのである。

「あのさ、媛子にも……」

「なんじゃ？」

じりと、媛子が近寄る。

「親がいるのか？」

「親？」

「神様にも親っているのかなって思ってたさ」

「……」

「緋桐乃夜叉媛様でしたっけ？ その名前、つけてくれた親がいるんだろ？」

すると、それがまるで禁句であったかのように、媛子は視線を落とすと、手に持っていた羊かんを口に入れた。

そして突然、態度を翻した。

「もう、その話はよい」

もごもごと口を動かしながら、それだけ言ってくるりと向き直り、再びテレビを見始める。

これには春臣もどうしたことが、と訝った。

「おいおい、そっちが話しを始めたんだろ？　なんだよ、その態度は」

「もうよいと言ったらよい。それよりほれ、もうすぐバスが出る時間なのではないか？」

彼女に言われて時計を見ると、確かにバスの出発までもうあまり時間がない。

「やべっ！」

すると、同時にポケットの中の携帯電話が震えてメールの着信を知らせる。

椿からだった。

おそらく先にバス停で待っているのだろう。慌てて荷物を持ち上げた。

「そ、それじゃあ、俺は行くけど。媛子、留守番頼むな」

「任せておれ。どうせ誰が来てもわしは何ももてなし出来ん、無視をしておけばよいのじゃろ？」

「そんなに偉そうに胸を張られても困るが、まあ、そんな感じだ。

それと、今日からは、何かあったときのことを考えて、俺に連絡出来る手段を覚えておく」

「お、ということももしかすると、電話とやらを使わせてくれるのか？」

彼女の好奇心に満ちた瞳が電話の子機に向けられる。先ほどまでの不機嫌はどこ吹く風、相変わらず、媛子の気分は極端だ。

「これは遠く離れた人間とも会話できるという機械なのじゃろ？」  
「そうだよ。今簡単に使い方を説明するから、ちゃんと一度で理解してくれよ」

春臣はそう言って、先ほどの充電器に差し込んである子機を取り出した。このときのために前もって自分の携帯電話を自宅の固定電話に登録しておいたのである。

そうしておけば、押すべきボタンも少ないため、まだこの世界の機械に慣れていない媛子にもそれほど苦労せず、電話を使える。

考えていた通り、簡単に一度説明しただけで、彼女は使用方法を覚えたようだ。すぐさまでも試してみたいらしく、早速受話器に飛び乗り、少々強引に聞いてくる。

「春臣、試しに掛けてみてもよいか？ よいか？ いや、よいな。かけるぞ」

「ちよっと待て、もう時間がない。いいか？ もしも、何かあったときだけに掛けるだけなんだからな？」

「何かあったとき、何かあったときじゃな。分かったぞ。それでは早く行ってくるがよい」

彼女の瞳は、明らかに何かよからぬことを考えているように爛々と光っていたが、それを注意する時間はない。

「それじゃ、行ってくるな」

立ち上がり、振り向き様にそれだけ言って、階段を駆け下りる。

「おお、留守番はまかせておけ」

媛子の陽気な声を聞きながら、春臣は足をももつれさせながら家

を飛び出した。



バスの座席に座って、春臣は一安心と長く息を吐く。

家から飛び出した時間が間に合うか間に合わないかの瀬戸際であったため、かなり冷や冷やしたが、なんとか発車前のバスにたどり着けた。

大学へ向かうバスは一路線しか走っていないため、一つ便を逃してしまつたら四十分は次便が来ない。乗り遅れてしまうことはそれだけ致命傷になりうるのだ。

「危なかつたなあ、榊君」

隣の席に座った榊がくすくすと笑っている。

「大学始まって早々講義に遅刻とあっては、縁起、悪いからなあ」  
「ああ、全くだよ。今日最初の講義は何だっけ？」

すると、榊はポケットから花柄の手帳を取り出し、ぱらぱらとページをめくり始める。どうやら、今日の日付の箇所を調べているようだ。

そんな彼女を見ながら、春臣は彼女と学科が同じで助かったと実感していた。

数日前に行われた入学式において、春臣と榊は数日振りの再会を果たしたのだが、彼女が春臣と同じ商学部の学生だと知って、それでまた喜んだ。

お互いに全く赤の他人だらけの学科では不安があっただろうが、こうして知り合いがいるというのは、彼女が言ったとおり、心強い。特に春臣の場合、彼女の存在は有難かった。というのも、一人暮

らしを始めて間もなく、家を開けている間は、そこに一人残している神様のことを考えたりと不安要素が多く、重要な話の間でも、気がそれがちなことが多かった。

しかし、それをフォローしてくれる存在がすぐ身近にいるというのは助かっていたのだ。椿は聞きそびれていた話の内容をきちんと覚えていて、後で聞けば話してくれるのだ。

「ああ、商学概論の授業やな」

彼女が指で項目をなぞりながら言う。

「それは危なかったな。あの先生厳しいから、時間遅れるとぐぐぐだ言われるらしいよ」

「そうなんかあ。それは命拾いしたな」

「確かにな」

「まあ、ともかくこれからは寝坊せんように気をつけなな」

ふいに椿が言った言葉がさり気に春臣の耳に入った。

「いや、別に寝坊したわけじゃないよ。たまたま準備に手間取っただけ」

どちらかと言うと、神様が機嫌を損ねていたのだが、春臣はそう説明した。少なくとも寝坊していたわけではない。

しかし、それを聞いて、彼女は不思議そうに目を見開いた。

「ええ！？ 寝坊やないの？」

「違うって、そんなんじゃないよ。っていつかなんでそんなに意外そうなんだよ」

失敬だな、と春臣は首を振った。

「ああそうか、うちの勘違いか。実はうち、こう見えても案外寝坊がちなんや。もしかすると榊君も一緒かなって思ってた……」  
「何がこう見えて、なのかわからないが、そうなのか」

春臣の中では、意外でもなんでもない。むしろイメージどおりだった。おっとりとして、どこか抜けている椿は起床の仕方もルーズに見える。すぐに誘惑に負けて、禁断の二度寝をしまいそうだ。

しかし、そう思われていることを知らない彼女は、きゅっと拳を握ると決意に燃えた眼差しで春臣を見た。

「せやから、お互い、寝坊せんように気をつけような。榊君」  
「だから、俺は寝坊じゃないって」

携帯電話が鳴ったのは、それからすぐのことだった。ポケットの中で着信音を鳴らしながら、震えている。

嫌な予感がした、というのは言うまでもないことで。

画面を見つめて、春臣は舌打ちをする。

自宅の電話からの着信だ。

ということとは、間違いなく、媛子からの電話である。おそろおそろ通話ボタンを押す。

「……はい、もしもし」

「おお！ 春臣か？ 声が聞こえるぞ！ お主の声はつきりとな  
！」

周囲に聞こえるほどの大声で、神様は明らかに電話の前ではしゃいでいた。飛び跳ねる音なのか、妙にがさがさと耳障りなノイズが春臣に聞こえてくる。

「おい、静かにしろ。そんなに大声で話さなくても通じるからよ」「そうなのか！ それは知らなんだ！ やはり遠くにおける人間と話すわけじゃなかの！ それだけ大きな声で話さなくてはならんと思っておったのじゃ！」

そう言う彼女の声はまだ馬鹿でかい。

「分かった、分かったから。よく聞こえてるよ。だからもう少しボリュームを下げてください」

春臣は隣の椿をちらりと様子を窺う。すると、やはり向こうも電話の相手が誰なのか気になっていたようで、目が合ってしまった。彼女が口パクで質問してくる。

『誰なの？』

春臣は答えられないと手で×印を作ると、すぐに窓側に顔を向け、声が漏れないように出来るだけ電話を手で覆った。

「これくらいでいいのかや？」

媛子の声がする。

「そうだ。それくらいで話してもらわないと困る。ただでさえ、バスの中での通話はご法度なんだ」

「そうか、それは済まぬことをしたな」

「それで、何かあったのか？」

「うん？」

「うん？　じゃないって。用が無いのか？」

「いや、用はあったのじゃ。しかし、お主に言うべきことは特に無い」

どう考えても矛盾しているとしたか思えないことを彼女は言う。馬鹿にされているようで少し腹が立つ。

「はあ？　どういふことだよ」

「いや、わしはこの電話がきちんとお主の元にかかるものなのか、それを確認したかったのじゃ。もし、いざという時につながらんとがあれば、それは大問題じゃろう？」

「まあ、それはそうだけど」

言葉ではそう言っているが、きっとそれを口実にただ電話が掛けたかっただけなのだろう。春臣には彼女のはしゃぎ方からそれがなんとなく分かる。

「じゃあ気が済んだか？」

「おお、もちろんじゃ。突然電話して済まなかったの」

彼女はまるで、遊園地のアトラクションで遊んだ後かのように、弾んだ声を出す。

「いいか。もう一度言っておくが、今度から掛けるときは何かあったときにしてくれよ」

「分かっておる。今度からお主に話すべきことがあればいいのじゃな？」

「それは、意味が違ってる気がする……」

ふいに、春臣は服を誰かから引つ張られていることに気がつく。振り返ると椿が小さく首を横に振った。

どうしたことかと周囲を見ると、席に座っている乗客の冷たい視線が春臣に向けられていた。

大方、最近のマナーを知らない若者は、と心中でご立腹なのだろう。

「とにかく、じゃあな。切るぞ」

「おお、わしに」

彼女の返事を聞かないまま、春臣は通話を切った。大きくため息をついて、携帯電話を仕舞う。

媛子にきちんと注意できず、勢いで切ってしまったことが心残りだったが、仕方ない。おそらくまた掛かってくることだろう。

しかし、あのまま車内で話し続ければ、隣に座っている椿にも居心地の悪い空気を感じさせてしまっていた。彼女に授業の時以外でも、これ以上迷惑をかけるわけにはいかない。

「榊君。今の、友達か誰かか？」

だが、そんな思いを知らない彼女は、興味津々に訊いてきた。

「えらい大声やったけど。まるで、電話のことを知らん人みたいやつだな」

意外にも凶星なことを言い当てるので、春臣は少々驚いた。

「も、元々、声量の調節が出来ないやつなんだよ。ほら、いるだろ

？どこにいても声が馬鹿でかいやつ」

「へえ、そうなんかあ」

「そういう人間って自覚があんまりないからさ。ちゃんと注意してやらないといけないよな」

「でも、うちとしてはそんな人がちょっとうらやましい」

彼女は憂鬱そうに口元に指を当てる。

「え？」

「うち、がんばってもあんまり声が出えへんから、昔はようそれで怒られたもんや。声が小さいってな」

「ふうん」

椿は胸元に視線を落とす。

「肺活量やつけ？ きつとそれがないんやな。他の人みたいにはつきりずばずばしゃべられへんのや」

「……でも俺は、それくらいでいいと思うぞ」

「え、ほんま？」

「声がやたら大きかったり、あれこれうるさいことを言ってくる人間よりは、ずっと無害だし、いいことだよ」

彼女と話しながら、特に後者の人間について考えながら、春臣はそう呟いた。

今朝のことを思い出していた。

母からのいらぬお節介、それから、媛子の説教。

そんなもの、今の春臣には必要ないことなのだ。媛子は抜きにして、特に、母親というものは、どうしてそれが分からないのだろう。こっちがうんざりしていることまで、いろいろと世話を焼こうと

してくるのははつきり言って迷惑そのものだった。

元々、そんな親の元から離れ、独り立ちするためにここでの生活を始めたのだ。そこにまでいらぬちよっかいを出されたのでは、不愉快この上ない。

早く自分ひとりでもやっつけていけるところを見せたいのに、母からあれこれ言われている自分は、まるで何も出来ていない子供に逆戻りしたような気持ちになる。

春臣には、それがとても嫌だった。



春臣が危惧した通り、やはり、媛子からの電話は鳴ってきた。

仏頂面した教師が、あれこれととりとめのない、催眠効果抜群の説明を延々と続けている中、媛子からの電話は何度も掛かってきたのだ。

春臣は、その度にわざわざ席を立ち、教室から出て、その応対を迫られている。周囲からは嫌な目で見られてしまっし、椿は心配そうだった。

しかし、まさか春臣が聞くに耐えない下らない要望のために席を立っているとは誰も思わなかっただろう。

その会話の一部を例として挙げるならば、

「いったい何だ？ 何の用だ？」

「むふふ、実はの、今、テレビを見ておったのじゃが。とんでもないものを発見してしまつての！」

「とんでもないもの？」

「そうじゃ！ こんな一大事、お主に報告せぬわけにはいかぬじゃろつて」

「それで、何を見たんだ？」

「ケーキじゃ、ケーキの安売りじゃ、セーるセーる！」

「……切るからな」

「何を言っておる。わしはケーキを食べたくなつたのじゃ！ ああ、体に糖分が足りぬ。このままでは死んでしまつかもしれん」

「朝っぱら羊かん食つてたやつが何を言つてるんだ」

とこんな具合だったり、

「今度は本当に緊急事態か？」  
「何を言う。わしはさつきから緊急事態じゃ」  
「それで、何が緊急事態なんだ？」  
「眠い」  
「はあ？」  
「先ほどからもう眠くて眠くてたまらぬのじゃ。わしの寢床はどこに用意してある？」  
「してねえよ」  
「おい、ではわしはどこで眠ればよいのじゃ？」  
「そんなもの、座布団の上で眠ればいいだろ」  
「そんなことは出来ぬ。わしはちゃんとした寢床で眠りたいのじゃ！ ふかふかのベッドとやらをわしに用意せい！」  
「知ったことか！ 今まで普通に座布団によだれたらして寝てたことがあつたくせに、何がベッドだ」  
「一度でいいからそのようなもので寝てみたい」  
「そんな媛子の願望に付き合ってる暇はないね」

とそんな感じだったりする。

授業の内容がさっぱり春臣の頭の中に入ってこなかったのは、睡眠だけではないことが分かっていただけるだろう。  
いっそのこと電源をオフにしてしまおうかと思つたが、それは止めた。他に大事な用件の電話が入るかもしれないし、もしも、本当に彼女に何か一大事が起きることだつてあるだろう。  
それに、初めてのものに興奮し、何度も試したくなるような心境を春臣は全く理解していないわけでもなかった。

だが、本当に子供のような神様である。精神年齢が低いというか。とても、神だとは思えない。

しかし、子供というものはそうやっているいろいろなものに興味が向

けられる反面、簡単に興味の対象を変えてしまい易いという習性がある。

春臣としてはそう考えて、どうせ、すぐに飽きるだろうと高をくくっていた。

だが、意外にも彼女の興味は粘りを見せていた。

気がつけば、昼食時までに掛かってきた件数は二十件を越えていたのだ。

予想外だった。

「なあ、榊君。その……」

「うん？」

恨めしそうに携帯電話を見つめながら、チャーハンを口に運んでいた春臣は、スプーンを置く。

午前中の講義が終わり、椿と共に昼食をとっている最中だった。

「あんまり人の電話相手のことについて、とやかく言うのはなんやと思うけど。その、何度も電話を掛けてくること、はっきり嫌やっということは言えへんの？」

向かいの席に座った椿はそう言って、プチトマトをおいしそうに頬張る。

「それは、言っているつもりなんだけど。ちょっと事情があるんだ  
「よ」

何しろ、神様だし。

「向こうもきつと暇を持て余してるんだろっからさ。話くらいは」

応じてやるうかと」

「ええ！ 向こうの人、暇やから電話してきてんの？ それはまずあかんやん。はつきり迷惑やっけ言うたらな」

「そ、それはそうなんだけど。まあ、おそろくこんな電話してるのは今日くらいだろうから。別にいいんだよ」

「でも……」

椿は何かまだ言いたげに視線をきよろきよろと動かしているが、

「今日だけ、なんよね」

と確かめるようにそれだけ言った。

「ああ、多分。青山が心配してくれてるのはうれしいけどさ。大丈夫だから」

しかし、そう言ったものの、午後からも媛子からの電話は途切れることはなかった。

一時間にもれなく三度は電話を掛けてくる。

そして、どうにもならないことにだだをこねたり、テレビで得たどうでもいい情報を逐一報告されるのである。

そのため、もうさすがに途中からは春臣も電話には出ないことにした。

要は、彼女の電話に応じるから彼女は掛けてくるのであって、電話に出なければ彼女もそのうち諦めると思ったのである。

第一、これまで緊急事態らしきことがそうそう起こらなかったのだから、多少放っておいても問題はないだろう。媛子にも他人が迷惑をしているということを知ってもらわなければならぬ。

しかし。

春臣は教授の言葉に耳を傾けながら思う。

しかし、それにしても彼女からの電話というのは、本当に自分本位ものばかりだ。自分がこうしたい、ああしたい。これが欲しい、これがいらぬ。

どこまでも、自らのエゴに忠実な言葉で電話をしてくる。

そこに、春臣がどう思っているかなんて考えは全くといていいほどない。神であるから、そんなことは関係ないと言わんばかりの権柄けんぺいずくな態度である。

電話の向こう側の人間に、自分の望みを言うだけなど、完全に間違っている。

そう思うと春臣の中で怒りがたまってきた。

大学の講義も終わり、いよいよ帰宅をしようかという時になって携帯を見ると、不在着信は十件以上もあった。

全て自宅の電話からである。

こんなことなら、彼女に電話の使い方など教えるのではなかった。家に帰ったら、きつく灸を据えておかなければいけない。

そして青山と別れ、自宅の方に戻る道を歩いていると、再び携帯電話が鳴った。

またか。

うんざりしながらも、今度はがつんと言わねばと、春臣は通話ボタンを押す。

「春臣？」

「あいな！ もういい加減にし……」

その声を聞いて、怒鳴りかけた春臣ははっとした。

媛子、じゃない。

「怒ってるの？」

「かあ、さん？ ごめん。違う。母さんのことを怒ってるんじゃないよ。他の奴から何度も電話がきたからイラついてたんだ。それで、またそいつかと」

「そう、お母さんのこと怒ってたんじゃないのね」

「ああ、うん。それで、何か用？」

「今朝のこと……」

母の声が気まずそうに小さくなる。

「え？」

「今朝、あなたになんだか鬱陶しいこといろいろ言ってたかなって。

そう思ってた、謝ろうと思って、電話したの」

「なんだ、そのことか」

そんなことなど、まるで遠い昔のことに忘れていた春臣は、そのとき抱いた腹立ちなどもう思い出せなかった。

そんなこともあったなあ、と思う程度である。

「あんな風に切られちゃったから……そのことは、もう怒ってない？」

しかし、母の声は大げさなほど、深刻そうだった。

「うん、もつどうでもよくなってる。その、こっちこそごめん。母さんの電話、あんな切り方して」

「いいのよ。あなたのこといろいろと心配だったのだけど、あんな風に矢継ぎ早に言ったんじゃない、駄目よね。せっかく一人暮らしを

始めたあなたのことを考えてあげられてなかった」

いつになく、優しく耳に残る母親の声は、春臣をそっと心地よくさせてくれた。それで分かった。母は、自分本位でものを言っていない。

春臣のことを思っ、それが気にかかって、止むに止まれず電話を掛けてきたのだろう。

それに今朝の自分は気づいていなかった。  
そう思うと、少し申し訳なくなる。

「時間を長く感じるものなのよ」

唐突に母は言う。

「へ？」

「あなたが居なくなった家にいると、ね」  
「……」

「以前までは春臣がそこにいて当たり前の生活をしていたから、思わなかったけれど。時間の流れというものは時にこんなにもスローダウンしてしまうものなのね。あなたがいないということが、新鮮で、こんな風に感じるのよ」

母は寂しさを募らせた声でそう囁いた。  
そうだ。

春臣自身も、この一週間何かと新しいことが続き、時間を長く感じていた。しかし、時間の流れを長く感じてしまうのは、何も初めて一人暮らしを始めた春臣だけではない。

実家で暮らしている両親だって、同じなのだ。

息子のいない、新しい生活が始まっている。それまでの馴染んだ空気がどこか北風か何かに飛ばされたように、家の中がひんやりと

感じるのかもしれない。

そこにあるべき、春臣という人間が欠落しているために。

「寂しいのよ。春臣がいないと」

「そうなんだ、分かったよ」

「フフ、私、恋人みたいなこと言ったわね」

春臣が怒っていないことを知り、安心したのか、母はそんなことを言った後で馬鹿みたいねと笑う。

「でも、心配してくれてるのはありがとう」

素直に、春臣はそう言えた。

「そう、それならよかったわ。用件は、特にこれだけなの。変な夕イミングで掛けてごめんなさいね。それじゃあ、また電話するわね」  
「分かった。今度電話が掛かってくるときまでには、さ。何か質問を考えておく」

「質問？」

「一人暮らしは、分からないことだらけだから。母さんに聞くことがあると思うから」

そう言つと、母は受話器の向こうで微笑んだようだった。

「そうね、私に分かることなら何でも答えてあげるわ。簡単なことだしね」

「うん、それじゃあね」

「じゃあね」

そして穏やかに、電話は切れた。



ゆっくりと息を吐き出して、春臣は帰り道を再び歩き出す。

今日は一日中、何かと苛立っていたが、ようやく優しい気持ちになれたようだった。

媛子はどんな顔をして待っているだろう？

きつと途中から電話に出なくなった自分に腹を立てているだろうか。

そうだとしたら、言い返してやろう。

でも、少しだけ感謝をしよう。

親というものは、彼女の言うとおり大切なものだと実感できたのだ。

足が少しだけ駆け足になる。

家まで、もう少しの距離しかなかった。

## 21 神の一葉、花の宴 1 (前書き)

お久しぶりです。作者のヒロユキです。

長い期間更新をしておりますので、続きを待っておられた方がいらっしやいましたら申し訳ありません。元々、この小説はネタを思いついたら書くというお気楽なスタンスで書き始めたものですが、ちよつと間が空きすぎました。これからはこんなことがないよう、最低一週間に一度は更新していきたいと思っております。

## 21 神の一葉、花の宴 1

サクラ、満開。

深夜のテレビ番組のキャスターが先ほどから嬉々として語っているのは、先日家族で出かけたという花見の話題だった。

「なんと言ってもタイミングが良かったですよ」

何度も自慢げにそう繰り返す美人女性キャスターは、まるでこの世の桜を全て独り占めにしてきたかのような饒舌<sup>じょうせつ</sup>ぶりでゲストの元野球監督に語り聞かせている。

「もし、その次の日に行っていれば、あのすばらしさを体験できなかったですね。ほら、先日の大風が吹いた日を覚えてますよね。あの時、桜が散ってしまっ……。ええ、そうなんです。皆さん悔しがってましたよ。私はその前日が花見だったのでまさに絶好の機会だったわけですね」

春臣はそんなテレビを見るでもなく、聞くでもなく、部屋のむき出しになった柱に背中をつけ、本のページを捲<sup>めく</sup>っていた。

テレビ以外は世界が見事に静まり返った、春の宵である。

風を通すために僅かに開けた網戸の向こうからはそよ風をまとう木々の葉擦れの音さえも聞こえない。道路を走る無遠慮なバイクの音も届かなければ、光に舞う羽虫たちの羽音も皆無<sup>な</sup>だ。

皆で口元に指を置いているかのような、しんとした静謐<sup>せいひつ</sup>が立ち込めている。

本の文字を目で追うのに疲れた春臣は、ふいにぼうつと座布団に座っている姫子を見た。テレビを見るのに飽きたのか、それともう眠たいのか、何をするでもなくただ口を開けたまま神棚の方を見上げている。

そして、ときどき思い出したように目をこすっては、やはり何も言わずに黙って座っていた。

春臣も無言のまま本を閉じると傍らに置き、見る者がいないテレビを消すと、神棚を見た。

いったい姫子がどういうつもりでそんなものをみているのか分からないが、思い当たるところはあった。

彼女、いや、緋桐乃夜叉姫（ひとうのやしゃひめ）がこの部屋に閉じ込められる原因となつたのが、この神棚なのだった。

その原因を作つたのは言うまでもなく自分である。

春臣は何も知らなかったとはいえ、自身の礼拝によってこの空間に歪みが生じ、結果的に彼女を閉じ込めてしまうことになってしまったのだ。

ここに越してくる前はいったいどんな一人暮らしになるかと、とかく想像しがちだったが、まさか神と同居をするなど、予想の斜め上、いや、自身が許容できる常識の範疇から大きく逸脱する事態となつている。

今ではそれなりにこの生活も苦ではなくなったが、彼女のこれらの事を思うと、何も分からなかった。

神棚を見つめても、そこに何らかの答えがあるわけでもなく、当然、それが返事をするわけもない。

しかし、春臣の目にはただの木で出来た作り物としか映らないが、神である彼女の目にはこの異空間を作り上げているなんらかの負のエネルギーが見えているのかもしれない。そう思った。

それは今も確かに存在していて、まるで生き物のようにこの空間を蠢うごめいているのかも、しれない。

「榊じゃ！」

すると唐突に彼女が叫んだので、驚いた拍子に春臣は柱に頭をぶつける。

「な、なんだよ」

「榊があるのじゃ」

「俺が、どうかしたのか？」

何度も春臣の名を呼ぶ彼女に不思議そうに聞いた。

「違う、そうではない。榊じゃ」

彼女は振り向くと、なにやら神棚の方を指差している。どうやら彼女が伝えようとしていることは分かりきった春臣の名ではないらしい。

「俺じゃないのか？」

「だから、いっお主と言った。わしが言っておるのは神棚に供えておる榊の枝じゃ」

「榊って、あの枝か？」

視線を向けると、なるほど、彼女が言うように、小さな花瓶（でいいのだろうか？）に木の枝が挿してある。春臣は知らなかったが、それは祖父が死んだ後、家を管理していた杉下老人が供えていたものだった。

「そうじゃ、まさかお主は知らんのか？」  
「ああ」

すると、眉を寄せた春臣のとぼけた顔を見るや、途端に姫子は笑い出した。

「ハハハ、こ、これはどういふことじゃ。お主、なかなか笑わせてくれるの」

春臣はぎよつとして、立ち上がる。

「な、笑いすぎだ」

「こ、これが笑わずにおれるか。お主、自分の苗字にもなっておる木の枝のことを何も知らんとは、これほど滑稽なことがあるものは、腹が割れるわ。ハハハハ」

姫子は抱腹絶倒、座布団の上を転げまわっている。春臣は耳の辺りに血が溜まるようなひりひりとした熱を感じた。

神とはいえ、こんな手のひら小娘に自分の浅学を笑われるとは、恥ずかしいやら悔しいやらで頬の筋肉が引きつったのだ。

「おい、もう笑うなって。その枝がどうしたんだよ」

「ま、まだだめじゃ。わ、笑ってしもつて上手く立てん」

彼女は座布団とぼふぼふと叩いている。

「いい加減にしるよな。神とはいえ、今の弱ったあんたなら首を絞めようと思えば、造作ないことだぞ」

すると、彼女は途端に態度を改める。

「お、おう。分かっておる。ちょっと調子に乗ってみただけじゃ。見逃せ」

そう言った姫子の口の端にまだ笑いの余韻が残っているようだったが、無視して訊ねた。

「それで、突然その榊の枝がどうしたんだよ」

「そうじゃ、お主の名にもなっておる榊の枝じゃがの」

お主の名、という部分を意味ありげに姫子は強調する。

「それはおちよくってるのか、本気で怒らせるつもりなのか？」

「冗談じゃよ。ともかく、その榊じゃ。これは神とつながりが深い木とされておるのをお主は知っておるか？」

「さあな、知らないよ」

春臣は不貞腐れたように返事をする。

「そう怒らんでもよいじゃろう。ほれ、お主は不思議に思ったことはないか？ この榊という文字じゃ」

「あん？」

すると姫子は近くに転がっていた鉛筆を持ち上げる。身長がいくらか伸びたおかげで、それくらいの物を持つことはそれほど苦ではなくなっただけらしい。

彼女は春臣が先ほどまで読んでいた本の裏表紙を捲ると、白紙のページにでかかど「榊」と書いた。

「別にいまさら書いてもらわなくても、いつも見てるから何も思わ

ないよ」

「じゃあ、おぬしは気づいておるのか？」

「何に？」

姫子は神の文字の中央に立ち、真ん中で一本の線を引く。

「こうすると、分かり易いじゃろう」

「あー！」

春臣はようやく彼女が言おうとしていることを理解する。そんなのだ。この文字は「木」と「神」という文字が合体して出来ている。普段は一つの漢字として何気なく書いていたが、分割することにより、別の意味が見えてきた。

「要するに、榊って言うのは、神様の木ってことか？」

「そうじゃ。以前からこの木は神と繋がりが深く、こちらの世界で特別な扱いをされておる。我々としてもとても馴染み深いものじゃ」

試しに春臣は神棚から榊の枝を手に取り、しげしげと眺めてみる。綺麗な楕円形の葉が重なりあい、まるで枝全体が大きな団扇のようにも見えた。

「でも、どうして榊は神と繋がりが深いんだ？ こんな枝をした木、他にもありそうなものだけねど」

「ふむ、確かにそうかもしれない。一度見ただけではおぬしはこの木を特別に扱おうなどとは思わんじゃろうな」

姫子は言いながら腕組をする。

「じゃが、一年中見ておればその不思議に気がつくはずじゃ」



「一年中？」

「大抵の木は、春が来て花を咲かせ、新たな緑が芽吹き、秋になれば紅葉し、冬には枯れゆく。それが自然の摂理というものじゃ。命は始まり、いつかは消えていく」

姫子はそこで言葉を切り、春臣から葉っぱを一枚千切ってもらおうとそれをよく見えるように光にかざした。

「しかしこの木の葉はの、年中緑のままじゃ。こちらの世界では確か『常緑樹』というじゃったかの。ずっと緑のまま、命が途切れることがない。つまり、永遠の命に等しいものであると考えられてきたのじゃ。どうじゃ、これで神に近いことが分かるう？」

「永遠の命、かあ。確かに神に近いというのも頷けるな」

春臣は彼女の説明に納得する。しかし、問題はその事実がどうした、ということだった。まさか彼女は春臣にこんな蘊蓄うんちくを話したかったわけではあるまい。

「それで、この枝がどうしたんだ？」

「おう、そうじゃった。ついつい話が遠回りになっておった」

姫子は頬をぴしゃりと打つと、片手に持った榊の葉を持ち上げて見せた。

「今の説明で神とこの榊の繋がりが深いことは分かったじゃろう？」

「ああ、大体な」

「そこでじゃ、ほれ、この前わしの体に神の世からの存在の力が蓄積するという話をしたじゃろう」

そう言われて春臣は数日前の夜のことを思い出した。それは彼女

の体に一種の存在のエネルギーなるものが溜まり、身長が伸びているという発見があった日のことだ。それで元の世界に戻れると意気込んでいた二人だったが、結局それでは彼女が本来の力を取り戻すには時間がかかりすぎ、現実的ではないという話になったのだ。

「何が言いたいんだ？」

「分からぬか？ 神であるわしの体に力が蓄積するということは、神に近い性質を持ったこの枝にも同じ現象が起こりそうではないか？」

「……！ な、なるほど」

つまり、彼女はその何の変哲もない木の葉にも存在の力が蓄積していると言いたいらしい。加えて彼女はその裏づけとなる事実を指摘する。

「変だとは思わんか。わしがここに来てからもう二週間以上経つておる。毎日手入れをしておるわけでもないただの木の枝が、これほど瑞々しく、生命力を保っておることに、先ほどわしは不思議に思ったのじゃ」

言われてみれば、姫子の言うとおりだった。普通の木の枝なら毎日水を替えてやらないと、すぐに枯れてしまうのだろう。

彼女が言う存在の力が神の枝に乗り移っているのなら、その不思議も頷ける。

「つまり、この異空間の力がその葉に影響を与えておる動かぬ証拠と言えるのじゃ」

「そ、そうになると、どうなるんだ？」

「いいか、聞いて驚くな」

「……それは内容によるな」

姫子はそれらしく咳払いをすると、こう言った。

「要するに、この葉を持っておれば、この部屋を出ても自身の存在の力をすり減らさず、実体を保っていられるというわけじゃ」

「葉っぱに吸収されているエネルギーを代価として使用するってわけか!」

「どっじゃ、驚いたか?」

「ああ、それなりに……」

春臣は肩をすくめて驚いた風に見せる。

するとそれを見て姫子はつまらなそうに鼻を鳴らした。

「全く貧弱なりアクションじゃの」

「驚くなって言われたからさ」

「言い訳は聞きたくないの」

「これほど理になかった言い訳はそうないと思うけれどね」

「まあ、そんなことはよい」

彼女はそんな些事は気にもかけない様子で軽くあしらう。そして、まるで人間に変化したタヌキのように頭の上に榊の葉を乗せて見せた。少々葉が重たそうではあるが、彼女はふらつかないように両端をしっかりと巻き込むように掴んだ。

「早速実験してみるとするか」

「部屋が出るのか?」

「無論じゃ。身を持って実行せねば、わしの理論が正しいか証明できぬからの」

「で、でももし、この前みたいに消えかけたりしたら」

春臣の脳裏に一抹の不安がよぎる。初めて彼女がやってきた夜に、息も絶え絶えになって倒れてしまった彼女のことを忘れたわけではないのだ。自分の手のひらの上でロウソクの火のように、存在が消えかけた姫子。

あの時は本当にどうなるかと肝を冷やしたものだ。今回も同じことが起こらないとは限らない。

しかし、彼女はノープロブレムとてをひらひらとさせた。

「いらぬ心配じゃ。もしそうなれば、春臣がここへ戻してくれるじやろう?」

「え?」

「まさかお主が倒れたわしを見捨てたりはしまい」

姫子が被せた葉の下から信頼に満ちた微笑みを見せた。その幼いながらも美しい表情に春臣は彼女の可憐さを感じずにはいられず、ぶっきらぼうに頷いた。

「それはそうだが、怖くないのか? 前は死にかけたんだぞ」

すると、彼女は真剣な顔つきになり、閉ざされたままの部屋のドアを見つめる。

「危険を冒さずして、真の自由はないぞ春臣。どのみち、ここで手を拱こまいているようでは、前進はあるまい。思いついた方法を片端から試してみなければ、いつまで経ってもここに閉じ込められたままじゃ。危険かどうかは二の次なのじゃ」

ドアを開けてくれ。

決意の込もった張り詰めた声で彼女がそう促した。

「分かった」

春臣がドアノブを回して、部屋と外界との隔たりを押し開ける。

明りのない冷たい廊下の闇がそこから覗き、これから未知なる領域に踏み出そうとしている姫子を静かな緊迫感で、牽制しているかのようだった。

しかし、そんなことで躊躇するような姫子ではない。

むん、と両手で頭の上の葉を掴み直し、部屋と廊下の境目まで歩み寄る。彼女はそこにまるで見えない壁があるかのように、目の前の闇を睨みつけると、目を閉じた。戦に赴く武士にしては、儂く華奢な後ろ姿だが、その内に宿る決意を春臣は感じ取ることが出来た。

「行くぞ、春臣」

「ああ。成功を祈る」

彼女の着物から伸びた白い足先が宙を裂き、別世界への一步を踏み出す。そして、残った片足も、部屋の外へ。

今、彼女は完全に部屋から外へ出たのだ。

「姫子？」

平気なのか、意識を集中しているのか、返事はない。

そのままふらりと倒れてしまいそうで、春臣は手を差し伸べようとしたとき、彼女はようやくやく振り返る。

「は、春臣……」

声が震えている。

「どうした？」

すると、彼女は膝から崩れ落ち、ぺたんと尻餅をついた。力が抜けてしまったのだろうか。やはり葉にエネルギーの消費を肩代わりにするなど無理だったのか。ぐっと暗い予感が背後に迫り来る。

「おい、大丈夫か？」

「……心配いらぬ」

ふっと彼女の顔がほころんで笑った。

「これは、成功じゃ」

まるで見えない鎖をようやくその身から引き剥がしたように、彼女の表情は満ち足りたものだった。

「成功？」

「そうじゃ、この葉を身につけておれば、わしは外の世界に出て、平気のようじゃ」

「ほ、本当か？」

春臣はほつと安堵の声を出す。

「ああ。じゃが、この葉に閉じ込められた力も無尽蔵ではない。時々はこの部屋に戻り、また力を蓄えさせねばならぬじゃろうがな」  
「で、でも、とりあえずは平気なんだろう？」  
「うむ。この通り、ピンピンしておる」

どうやら、彼女が尻餅をついてしまったのは一か八かの賭けが成

功し、緊張が緩んでしまったかららしい。すぐに嬉しそうに榊の葉に頬ずりを始める。

「こやつがわしに自由を与えてくれたのじゃ。かわいいのう、これは天の救いじゃ」

たかがそんな一枚の葉に大げさな。

春臣は苦笑を禁じえなかったが、彼女の喜びに水を差すのは不粹な気がしたので、素直に「そうだな」と同感した。

## 22 神の一葉、花の宴 2

姫子は神の葉を足元に絨毯のように敷き、その上にとてんと座っていた。生き物の気配が皆無な夜の縁際で、初めてじっくりと眺める外の景色を堪能しているようである。

と言つても、周囲の林は闇に沈んでおり、目に映るものと言えば庭にある枯れた木ぐらいだった。水が蒸発し干からびてしまったように、その木の幹は乾いてひび割れている。知識のない春臣には何の木かさえ分らない。

一度だけ、遠くのあぜ道を原付自転車が通り抜け、姫子が物珍しそうに目を向けていた。

「せつかくの祝いの夜じゃというのに、世の中は静かじゃのう」

「そりゃ、もう深夜だし。皆眠ってるのさ」

春臣はそう言った後で大あくびをする。時計の針は日付を越えたところだ。夜更かしは翌日の講義の大敵だが、もう少しだけ彼女に付き合つてやることにした。

窓に寄りかかり、裸足の足を片方だけ縁側からぶらぶらとぶらつかせ、読みかけの本のページを開いている。

「空には月も出ておらぬ。せつかくの春の宵じゃというのに」

「残念だな。満月でも拝めれば、中々いい気分になれるだろうに」

姫子はしんみりとした物憂げ顔で空を仰ぐ。

「何か飲みたいのう」

「喉が渴いてるのか」

「そりゃ、あんな賭けをした後じゃしの。心を落ち着きたいのじゃ」



「いいぜ。何が飲みたいんだ？」

春臣は冷蔵庫から何かを持ってこようと腰を上げる。確か1リットルほどのコーラがあったはずだ。以前それを飲んだ姫子は炭酸飲料の刺激的な喉越しが珍しいらしく、かなり気に入っていたのだ。てつきり、それを頼むのだろうと思っていたが、彼女から出た注文は予想と違うものだった。

「酒じゃ」

「は？」

「酒が飲みたいのう」

まるで詩を詠むように彼女は言う。

「酒って、俺はまだ未成年だ。そんなものあるわけないだろう？ それとも、買って来いつてののか？」

すると彼女は空を見上げたまま、ちらりと横目で春臣を見た。

「とぼけたことを」

「はあ？」

「むふん、わしは知っておるのじゃぞ」

「な、何のことだ？」

春臣は心の内を透かし見られているようで、動揺する。というのも、もちろん心当たりがあるからだ。

姫子が薄ら笑いを浮かべ、春臣の凶星を言い当てる。

「お主の叔父の、ほれ、楠と申したか？ あの男がビールとやらを持ってきておつたのを知っておるのじゃ」

やはり、すっかり聞かれていたのか。  
春臣は唸りながら俯いた。

数日前のことだ。一人暮らしをしている自分の様子を見に来たという叔父は、なぜか話しをするついでに缶ビールを1ケース抱えて玄關に現れた。

『なあに、気が向いたら何度か来ようと思うから、買い忘れることがないようにあらかじめここに置いておくのさ』

と言いながら、早速一缶のタブを開けた叔父は、春臣も勝手に飲んでもいいから、と強引に冷蔵庫にビールを放り込んだのだ。もちろん、これは明白なことだが、毎日仕事のある叔父がビールケースを用意するほど頻繁に訪れるはずはない。

つまりは、もうすぐ成人する春臣に大人の味に慣れさせたいという遠まわしの計らいがあるのだろう。

と、こういうわけで現在、この家の冷蔵庫では春臣が充分泥酔できるだけのたっぷりビールが貯蔵されているわけである。

春臣は、やりとりがずつと階下で行われていたため、姫子には聞かれていないと思っていたのだが、さすがは神だ。全く侮れない。

「そんなに酒が欲しいのか？」

まるで問題児を前にしているような目つきで見ると、彼女は口を尖らせた。

「こんなときぐらい、わがママを聞いてくれてもよいのではないのか？」

「何寝ぼけたこと言ってるんだよ。いつだってわがママ三昧じゃね

えか」

「細かいことは気にするな、じゃぞ。さもなれば神の世に戻ったとき、お主に天罰を下す」

「ったく、調子のいい神様だ」

しづしづながら承諾した春臣だったが、こんな日くらい酒を飲ませても悪くはないだろうと思っていた。祝い酒という趣向は別に嫌いではない。

いつものように、彼女専用のちょこに、今日は泡が盛るビールを注いでやる。

「おう、これがビールというものが」

姫子が待ちきれず、感嘆の声を上げる。

「泡に顔を突っ込むなよ」

「分かっておる。わしはそんなみっともないことはせん」

そして、ちょこを持ち上げると、榊の葉の上で春臣を見上げた。どこか寂しげな顔つきで、何か言いたげである。春臣は春臣でグラスに注いだコーラに口をつけようとしているところだった。

「どうした？」

「その、乾杯をせぬか？ わしが外に出られた記念すべき夜じゃ」

「……それもそうだな」

春臣は彼女の申し出を快諾する。

小さくカツン、と音がして、

「乾杯」

「乾杯じゃ」

二人分の声が重なった。

いつになく嬉しそうな彼女の顔を見ながら春臣はコーラを口に含む。じわりとした炭酸の刺激が喉を通り越していった。

伸ばした足がひんやりとした地面に触れ、思わず引っ込める。あぐらをかいて座りなおし、もう一度コーラを飲んだ。

ぶはっ。

姫子が至福の表情でよこのビールを飲み干し、それを見て何も言わず、再びビールを注いでやる。

彼女の頬に心なしか、赤みが差してきたようだ。どうやら酔いが回ってきたらしい。

「旨いのう。酒はやはりいい。神の世であっても、人の世であっても、酒は旨い」

ふいに何気なく彼女が口にした言葉が春臣の心の水面を震わせた。

神の世、か。

今日は彼女が部屋を出ることができ、新たな発見があった。これは素直に嬉しい出来事だ。

そうすると、春臣の思いが夜を越えていくように、ずっと時間を飛び越えていく。

きっとこれからも、こんな小さな前進を繰り返して、彼女は元の力を取り戻していくのだろうか。

そして、いつの日か。遠くない未来、彼女はきつと神の世に戻って行くのだろう。

間違いない。それは、間違いないことなのだ。

それは嬉しいことのはずなのに。

なぜか、それを思っただけで春臣は胸の奥が微かな寂しさを感じた。

なんだろう、これは。

紛らわすように、春臣は訊いた。

「……寒くないか、姫子」

「ああ、大丈夫じゃ」

酔っているのか、恍惚とした彼女は頬にビールの泡がついているのに気がついていないようだ。

「……うむ。やはり、必要じゃな」

と突然独り言を言う。

「何がだ？」

春臣の問いに答えることもない彼女は、ちょこを置き、立ち上がると、重そうな服の袖の辺りから、何かをそつと抜き出した。

しゃりりん、と鳴った。

いつかの神楽鈴だ。

「今こそ、わしの力も使えるじやろう」

ぐい、と口元を拭う。

「力？」

「まあ、見ておれ」

そう言っつていつかと同じように自信満々に鈴を頭に掲げると、まるで天をかき回すように、揺り動かし始めた。

すると、陽炎が立ち上るように彼女の周囲の空気が波打ち始める。彼女の赤い髪が風もないのにそよいでいた。

鈴の音に隠れるように、彼女は聞き取れないほどの声で何かを囁いている。

ほどなく、春臣の鼻先にそつと触るものがあつた。

「うん？」

その小さなものを指を摘んでみると、なんと、花びらだ。

いったいどこから舞い落ちてきたのかと、空を仰ぎ見て、あつと息を呑んだ。

桜だ。

紛れもない、桜だ。

庭の枯れ木に、桜の花が咲いていたのだ。

まるで、春臣たちを見下ろすかのように、縦横に枝を張り巡らせ、幾千もの薄紅の花弁を身にまとった大木がせせり立っている。

春の夜に桜あり。

全てが、この言葉だけで芸術となつてしまひそうな風景だ。

春臣が生きてきた中でも、これほど立派な満開の桜を眺めたことが果たしてあつただらうか。

その見事さは有無を言わせず鳥肌が立つほどで、微風に吹かれて舞い降りる花弁は僅かな光さえ放っているようだった。

「ひ、め」……」

「どつじゃ、なかなかのものじゃろう？」

彼女は自身の仕事に満足しているようだ。うっとりとして桜を眺めている。

「すごい、な。申し訳ないけど、俺にはそれくらいしか言えない…

…」

「それだけでも、今は十分じゃ」

春臣は再び、それを見上げ目が離せなくなるのを感じた。

「姫子は、やっぱり神様なんだな」

「そうじゃ、わしは神様じゃ。今日はこの榊の葉で力を使うことが出来たが、普段のわしなら、これくらいのこと造作ないことじゃ」

そう言っただけで彼女は再び酒を飲み始める。夜桜を眺めながら、贅沢なものだ。

しかしまさか、彼女のおかげで、こんな夜に花見が出来るとは予想もしていなかったことだ。

考えてみれば、当分家族とも花見などしていない。誰かと一緒に花を見る機会もなかった気がする。そのせいか、春臣は痛く感動した。

久しぶりに見るその桜は木全体が夜を包み込むように淡く、薄く、優しさに溢れていて、どっしりとしている。

文句なしの、お花見だな。春臣は胸中で呟く。

「忘れねえよ」

「何がじゃ？」

「姫子と見た、この夜の桜だよ」

「……春臣？」

不思議そうに首を傾げる彼女を見ることもなく、春臣は静かに香りを吸い込むように目を閉じた。

「絶対な……」

短い言葉が宙に消えていった。

そして、物言わぬ春の夜はひっそりと更けていく。



### 23 つばき、憂鬱フォンコール 1（前書き）

作者のヒロユキです。

今回はいつもとやり方を変えまして、春臣視点ではなく、椿から見た物語の内容となっています。そのため、いろいろと試行錯誤をした結果、文体がいつもと変わっております。これは椿らしさを物語に反映するための試みでして、これで彼女の良さというものが一番引き出せるのではないかと考えました。物語の途中で書き方を変えるところは如何なものだろうか、と思ったのですが、自分なりに考えた結果です。

物語の前に、少々堅苦しいことを言っしまいました。少しでもお楽しみいただければ幸いです。

講義がいつも通り時間目一杯で終わると、うちはとりあえず板書を写しただけのノートを閉じます。ズボンからお腹がはみ出した太つちよの教授がマイクを置いて、台から降りました。それを合図に部屋の中がざわつき始めます。

午前中の講義はこれで終わりでした。

うちはちょうどお腹がぺこぺこな空き具合で、これから向かう学食でのランチにいやがうえにも期待がかかります。

ぐう、と鳴いて昼食を催促するお腹に、もう少しだけ気張りや、と励ましました。

こう見えてもうちはなかなか優柔不断な人間で、メニューはいつもは何にしようかと迷うのですが、今日は最初から決めていきます。同じ学部の友人、朋ちゃんが食べていたオムライスです。あのふわふわとろとろのたまごがなんとも魅力的で、出来立ての湯気が立ち、あのケチャップの匂いもなんとも言えず食欲をそそります。

お値段も学食なので、お手ごろの300円。お財布にも優しいなと、一石で二鳥、ということでしょう。

そういうわけで、うちのー押しランチに大決定なのです。

うちは隣に座っている榊君の様子を見ました。

彼は自宅近くの空き家に近頃越してきた大学生の男の子です。実家から離れ、一人暮らしをしているそうで、独立心に溢れている元気はつらつとした野心家かと思いきや、意外とぐうたらなんびりさんです。いつも睡眠不足なのか、講義の間はよく居眠りばかりして、うちのノートを見ます。

今日は珍しく手に顎をついて教授が話すのを退屈そうに眺めていましたが、残念ながら手元のノートは真っ白でした。無造作にシャーペンが転がされていて、歪な曲線を描いています。

「なあなあ、榊君」

うちは服に皺が寄った彼の肩を揺すりました。今日は友達と一緒にランチを食べるので、その旨を彼に伝えようとしたのです。

しかし、彼は一瞬驚いた顔をした後で何かに気づいたようで、ポケットから携帯電話を取り出しました。

「悪い、ちょっと電話みたいだ」

そう断りを入れて立ち上がり、背を向けてなにやら電話の向こう側と話し始めます。

うちはその様子を見ながらははん、とこっそり頷きました。

どうやら、例の人物らしいのです。

というのも、彼の元には決まった人物から頻繁に電話がかかります。

うちはまだ榊君と知り合って間もないのですが、今や、この人物から電話に出たときの彼の反応を見ているだけでその電話相手を察知できるようになりました。

なぜか、うざったくあしらうように話していながら、どこことなく仲が良さそうで、彼の声の調子からそれが分かります。

いったい相手が誰なのかは分かりませんが、妙に怪しいものです。うちの女の勘というやつもぴくりと反応しているわけです。

どうやら電話の相手は僅かに漏れる声から察するに女性の模様。

この町に榊君が越してきてまだ数週間、まさかと思いますが、もうこの大学で彼女が出来ていると思いませんし、お近づきになっている女性がいるとしたら、かなりの割合で同じ講義を取っているうちが気がつかないはずはありません。

地元に残っている恋人なのでしょうか。

それとも単純に仲の良い女友達なのでしょうか。

全くうちの勘違いということもありますが、どうにも気になります。

名探偵気取りで顎に手を当てて考えてみたりします。

むふん。

といつても、ポーズだけなので、意味はありません。

しばらくすると、話は終わったようで彼が携帯をジーンズの後ろポケットに入れました。申し訳なさそうに、うちに小さく頭を下げます。

「ああ、ごめん青山。それで、何か用？」

「今日はうち、友達とお昼食べる約束あるんや。せやから、それを言おうと思って」

彼は頭をくしゃりと触ります。

「そうか。それなら今日は別々だな。俺も友達と食べるし。午後からの講義はあるか？」

「うん、必修の講義やから榊君もおるやん」

「ああそうだったか」

彼は至極面倒臭そうに席に座り、荷物をカバンに入れるといそいそと立ち上がりました。背を向けて

「うんじゃ、また後で」

「……あ、あのな……榊君」

「うん？」

そこでうちは思わず、彼を呼び止めてしまいます。

咄嗟に彼に電話の相手について聞こうと思ったのですが、勇気がなく、どうにもその先の言葉が出てきません。つい、言いよんどんでごまかしてしまいました。

「な、なんでもないねん。ほな、後でな」

「そうか……？ それじゃあ」

不思議な顔をしたまま手を振って、榊君はそのまま教室を出て行きました。

それを見ていると、チクリと後悔の痛みを感じました。

うちは何をしているのでしょうか。電話の相手が誰かぐらい、きっぱり聞いたらいいのです。ここぞというところで踏みとどまってしまいました。情けないことです。

しかし、今はそんなことを考えている時間はありません。後悔ならお昼の後でも、可能です。

その前に、おいしいオムライスがうちの到着を待っているのです。頭のスイッチは赤信号から青信号に切り替わります。

しかし、すぐに忘れ物がないか確認した後で、あるものに気がつきました。

「あ、榊君の……」

なんと、彼の携帯電話が椅子の上にぽつんと残されていたのです。

## 24 つばき、憂鬱フォンコール 2

うちはしばらくそのまま、ランチのオムライスのことをすっかり失念しまして、呆然と榊君の携帯電話を見つめておりました。

メタリックな黒いボディでつやつやと光る、近未来の車を連想させるような携帯電話です。

そして、これがあの、人の秘密を溜め込むことで有名な機械です。人には他人に知られたくないいくつもの隠し事、秘密があります。が、これだけ世界に普及し、いつでも持ち歩け、お財布に次いで個人情報情報の漏洩の危険のある代物はそうそうあるものではありません。自分の情報はもちろんのこと、家族、友人関係まで知ることができ、充分悪事に利用できます。大変危険な物と言えます。

それはさておき、うちは一応常識人です。

この場合、行うべき処置としては誰かに持ち去られてしまう前に携帯電話を安全に保護し、速やかに持ち主に返すこと。それが常識です。うちの良心だって、それが一番だと申しております。なのになぜなぜ、それをためらっているうちがいました。

どうしてかと申しますと。

つまり、今、うちがその携帯のボタンとちよちよいといじれば、榊君がつい今しがた通話していた人物の情報が得られるわけです。その気になれば、ものの五秒もかからないでしょう。リモコンでテレビを点けることに匹敵する手軽さです。

その絶好のチャンスのうちには有しているわけです。これを逃せば、チャンスは時の気まぐれ、いつ機会が巡ってくるか定かではありません。

ただボタンを押す。それだけならば、特に証拠も残りませんし、彼に悟られることもありません。

彼がいつも誰と電話をしているのか、うちはずっと気になっていました。彼はいつもはぐらかすばかりでこちらの我慢も限界があります。当然、知りたいという好奇心が沸き立ちます。うちとしては延々とご飯をおあずけにされた犬の気分でした。

このため、うちにはその行為を正当化できる理由があると思われ  
ます。

しかし、その誘惑に駆られながらも、うちは必死で抵抗しました。さすがにそれは人としてあかんこと、榊君の信頼を裏切る行為です。たとえ、彼が気がつかず、そのまま事無く過ぎ去ったとしても、うちは十字架を背負い坂を上る奴隷のごとき、死ぬまでの長き苦痛を味わいながら生きることでしょう。

と、これはあまりにも大げさかもしれませんが、隠し事は後味のいい行為ではありません。そんなことをしてしまえば、ランチの味もまずくなるというものです。

よっしゃ。

うちは決心します。

自分の良心に従って、榊君にお届けすることにしました。決心が鈍らないように、即、行動です。

しかし、後ろを振り返ってはつとします。もちろん、彼の姿はもう影も形もありません。彼の話から推測するに、食堂に向かったのでしょうか、昼時の込み合う食堂内ではお互いどこにいるのか、きつと分かりません。

頼みの綱である連絡手段の携帯電話はうちの手の中にあるので、それも使えないとなると、出会えるであろう天の運命にかけるか、午後の講義の時に返すしかありません。

その前に榊君本人が無くした事に気づき、取り戻しにきてもらえればいいのですが、うちとしても、それまでここで待つというわけにもいきません。

どうしようかと腕組みし、思案している内に予想外のことが起こりました。

携帯電話が着信をしたのです。緑色の光が点滅し、振動が低い唸り声で持ち主である榊君を呼んでいます。

あ、あかん。どないしょ。

しかも、突然の事態に驚いたうちは、あるうことか、電話を取り落としそうになり、手の上で少々お手玉した後、その拍子に通話ボタンを押してしまいました。プツリ、と僅かな接続音がしました。全くなんたる失態でしょうか。

「おーい、春臣か？」

間髪入れず、受話口から女性の声が聞こえます。こうなると後には引けません。意を決したうちは、何を思ったか、咄嗟に声を低くして返事をしました。

「も、もしもし」

「春臣か？」

「そ、そうや」

「今の話の続きじゃがな、言い忘れたことがあったの……」

今の話の続き？

うちはその言葉にピンとききました。

そうです。この人物こそが彼、榊君の親しげに話している謎の女



性らしいのです。なんという不運でしょうか。うちとしてはこんなにも唐突で、虚を衝かれた出会い方をしたいとは望んでいませんでした。

しかも声だけ。

その上、血迷ったうちが榊君の振りをしているという、異常な状況です。

この世に神様がいたら、なんと酷なことをなさるのでしょうか。うちの日ごろの行いが悪いのでしょうか。出来ることならば是非、異議申し立てをしたいと思います。

「……うん？ お主、本当に春臣か？」

すると、早くも電話の向こう側はうちの声の違和感に気がついたようです。

「そ、そやけど。どないした？」

必死に冷静を装いますが、その女性は言葉に疑いの色を濃く漂わせます。

「ずいぶん、声が高くなったのじゃな。それに、話し方も変わったような」

そこでうちははっとします。そうや、うちは生粋の大阪弁。榊君なら、標準語で話さないとあきません。すぐさま、脳内の小人がスイッチを切り替えます。

「そうか？ そんなことはないと思っけど」

「……？ まあ、よいか」

女性はそう言ってとりあえず溜飲を下げたようでした。

「話の続きって何のことだよ？」

「そうじゃそうじゃ、お主に言い忘れたことがあったの。お願いがあるのじゃ」

「お願いって？」

「ほれ、今日は水曜日、三丁目の洋菓子店の特売日じゃろっ？」  
「ケーキの特売！」

これにはうちも黙っておけません。女子たるもの、甘いものには目がないものです。そんな耳よりな情報は聞き逃せません。

うちは即断即答します。

「買う！」

「へ？」

「絶対、買いに行く！」

「あ、た、頼むぞ……しかし、今日は妙に聞き分けがよいの。気持ちが悪い」

女性の声が明らかに受話器を遠ざけたようで、小さくなります。

「心配しないで待っていて欲しい」

「そうか、それじゃあ、楽しみに待っておるぞ」

それで通話は切れました。

ここまで来れば、もう後戻りは出来ません。榊君に成りすましてしまった以上、目的を果たさなければなりません。もちろん、ケーキを買いに行くのです。

しかし、そこでうちは妙なことに気がつきました。着信相手は「

自宅」とあります。

そうなのです。そうでなければ榊君に三丁目の洋菓子屋のお遣いを頼むはありますがありません。

「榊君、一人暮らしやっつて言つとつたのに……」

これは由々しき事態です。事態はうちが思う以上に進展していたようです。

同棲です。榊君はうちが思っている以上に大人な人なのかもしれません。一人暮らしの家から女性から電話が掛かってくるなどそれくらいしか思いつきません。

声の様子ではかなり若い女の人の風でしたので、まさか母親ではないでしょう。

そうなると、やはり導き出されるのは……同棲。

女性と、同棲。

うちが男の人と、同棲……。

とても想像なんてできません。それだけでほっぺが熱くなりました。却下です。

しかし、それにしても妙だったのは、その女性の話し方です。うちも大阪弁を指摘されましたが、彼女の話し方は現代人ではないというか、平安時代の貴族のような、とても古風なものでした。女性で語尾に「ぞ」「や」「じゃ」をつける人物など、うちは生まれてこの方お目にかかったことがありません。

いったい榊君と同棲しているらしいこの女性は何者なのでしょう。ますます興味が湧いてきました。

「おーい」

すると、急に背後から声をかけられました。

「ふへ？」

「それ、俺の携帯だよな」

気の抜けた返事をし、振り返ると、榊君が立っていました。うちは立て続けに起こる想定外の事態に、思わずどぎまぎしてしまいました。呂律がうまく回りません。

「あ、ああ。せやねん。榊君が落としてたから、渡しに行こうと思ててん」

「その割には大事そうに握ってさ、中身を覗こうとしてたようにも見えただけど」

「ちゃ、ちゃうねん。これはそうやないねん。別に着信履歴を見ようとか、そんなこと……」

うちは掘った墓穴を咄嗟にごまかそうと口の中でもごもごとしてしまいます。

「はあ？」

「と、とにかく返すわ。大事なもんは落としたりあかん。ええか？ ちゃんとポケットに入れておくんや」

「ああ。分かったよ。拾ってくれてサンキューな」

「礼はいらへんよ。これくらい大したことやない」

うちは首をぶんぶんと振ります。でも、そこでふいに名案を思いつきます。

「せや、ついでといったらなんやけど。榊君にお願いがあるんや」「お願い？」「

「今日、榊君の家に行ってもええか？」  
「お、俺の家に？」

彼の表情が一瞬歪み、動揺するのが手に取るように分かりました。うちは内心にやりと笑います。

当然です。誰か女性と同棲しているなら、他の女を家にあげたくないに決まっています。

「ど、どうして？ 突然……」

うちはここぞとばかりに寂しげな表情でいじけた風に言いました。

「え、駄目やの？ つれへんなあ。別にそんな長居するつもりはないって。近所やし、ほんのちよつと家にあげてくれるだけでええねん」

「ほんの少し？」

「そうや、ほんのちよつぴりや。榊君がどんなところで生活してんのか知りたいんや。それとも、うちが行ったらそんなに迷惑なん？」

「……そんなことは、ないけど。まあ、いいよ」

この返答は意外です。

もし同棲相手がいるとすると、それを知られまいと頑なに拒み続けるに違いないと思っただのですが、彼はそうではないようです。秘密を隠し通す自信があるのか、それとも、この機会にうちに紹介するつもりなのかもしれません。

それならそうで、うちも覚悟を決めます。

「ほんなら、今日、午後の授業が終わったらな」

「ああ、分かったよ」

彼は携帯電話を見つめながら、どこか思案顔のまま了解しました。

まだ見ぬ榊君の同棲相手。

その顔をうちは想像しながら、落ち着かない胸の内を軽い微笑みで隠し榊君の脇をすり抜けて、待ち遠しいランチに直行することになります。

## 25 潜入！ 探偵つばき

大学からの帰り道、うちと榊君は停留場を二つ分早めに降りると、町の中にある洋菓子屋に顔をのぞかせていました。

「ぱぷり」というお名前のその店は、入り口のプランターで綺麗なパンジーの花が咲いていて、青や赤や黄色の風車がからからと音を立てているメルヘンチックな所でした。

掲示用のブラックボードに可愛らしくクレヨンで書かれた文字は「本日特売」のシンプル且つ素敵なフレーズです。

「っで、どうしてケーキを買おうと？」

しかし、抜かりなく全てのケーキをショーケースからじろじろと眺めているうちに、わざわざそんなことをしなくても、と榊君は半分不思議そうに、半分不服そうな顔をしています。

「何でって。せっかく榊君の家に行くんやで。お土産くらい持っていかな。気の利かん奴やと思われたあないやろ。それくらいの配慮が行き届いてこそ、大人な女性や」

うちはそんな彼に頬を膨らませます。

「いや、その家主である俺が無理しなくていいって言うてるんだよ。わざわざちよつと寄るくらいで大げさだつて」

「ええからええから。ほら、榊君はどんなケーキがお好みなんや？ モンブランか？ チーズケーキか？ スタンダードなショートケーキもええで」

「……青山と同じものでいいよ」

うちの問いかけに榊君はケーキをちらりとも見ずに、素っ気無く返します。

「もっ……」

こうなれば、八つ当たりのつもりでこれでもかと並べられたケーキたちを凝視してやります。近づき過ぎて、ガラスケースに頭をぶつけてしまいました。

うちはそれをさすりながら、先ほどからの榊君の態度を思い返しました。家に行ってもいいか、という話をしてから彼は妙に神経質になったようなのです。

いつもの彼らしくなく、うちにはその態度が冷たく感じます。

これはやはり、うちの予想が的中しているせいなのでしょう。きっと今の彼の脳内では、うちと一緒に食べるケーキなど眼中になく、うっかり、うちが自宅で鉢合わせてしまうかもしれない同棲相手のことしか浮かんでいないに違いありません。

きつと間違いありません。

そのことをどう隠そうか、ごまかそうかと、考えを必死にまとめている状況なのでしょう。

全く持って、うちにそのことを秘密にしていた罰なのです。報いなのです。

身から出たわさびなのです。

しかし、どうしてなのでしょう。うちはそのことを思うと、何か胸の内側がちくりとされるような、そんな痛みを感じています。何かの気のせいだと思って、うちはぱっと目に入ったケーキを選びました。

余計なことを考えていたせいで、スイーツの選考に注意を向けら



れませんでした。閃きでフルーツのたつぷり乗せられたタルトを指差します。

「じゃあ、これを三つ」

すると背後で無関心に突っ立っていた榊君が顔を出してきました。

「三つって、一人分多いだろ。人数は数えられるよな」

「これはこれでええの。榊君は口出さんとして！」

つい口調が荒くなってしまいました。それに驚いたのか、彼は目を瞬かせます。

「う、まあ青山のお金で買うことだから別にいいけど。青山意外と大食いなのか？」

「そんなこと、ないもん」

「……なんて言うか、朝の講義の後から青山変だぞ。何か怒ってる？」

「もうええって、さっさと行こ」

苛立った声を抑えることも出来ず、うちは代金をさっさと財布から支払うと、ケーキを受け取り、訝しげな榊君を置いて店を出ました。後ろからついてくる彼を振り返ることもせず、一人ずんずんと風を切るように歩いていきます。

ああ、そうだったんや。

その時になって、うちはようやくあることに思いつきます。

うちはただ、榊君に怒っていたのです。

榊君と一緒に住んでいる誰かがいると知って。

それは、まだ知り合って数週間とはいえ、他の人と同棲しているなんてことをうちに黙っていることへの怒りでした。

本当に、これでもそれなりに仲良くなれたと思っていたのに、うちと榊君はまだそんな話をするほどの間柄ではないということでしょうか。

所詮、その程度の人間なのでしょうか。

そもそもこの事実は隠し続けるべきことでしょうか。第一、近所に住んでいれば遅かれ早かれ気づかれることです。

そして、それ以上に、うちは自分自身にも腹が立っていたのです。こんな重要なことにうちは今まで少しも気がつかなかった。自分に怒っていたのです。

ほんまにうちの目は節穴やった。

でも、こんなことで榊君に八つ当たりをするというのはお門違いというやつです。うちが勝手に思い込んで、榊君とはそういうことでも話せるようになったと勘違いしていたのです。

榊君はうちを普通の話友達くらいと捉えているのでしよう。暇なとき、気が合うから話しをする。それくらいです。暇なそれならそれで、うちは友達としての態度で望まなありません。

それに、まだ榊君が誰かと同棲しているという決定的な証拠を掴んでいるわけではありません。

全部うちの勘違いだとしたら、ほんまにうちはアホです。自分で勝手に想像して、怒って、八つ当たりして、いろいろ余計なことを考えて、もう何をしているのでしょうか？

榊君にあらぬ疑いをかけ、不愉快な思いをさせてしまったことを謝らないといけません。

「あ、青山。先に行くなよ」

すると、後ろから彼が追いついてきました。

「……榊君……」

うちは何を言えればいいのか、彼の名前を口に出したただけでした。

「さっきの言葉、怒ってるなら謝るよ。その、冗談のつもりだったんだ」

さっきの言葉というのは、うちに大食いやなどと言ったことでしょうか。

「……冗談でも、女の子は嫌やねんで、そういうこと」

「そう、だよな。分かってたつもりだけど。ごめん」

榊君はそれ以上言い訳をせず、素直に謝ってくれました。うちが怒っていたのはそこではないのですけれど、榊君は彼なりに考えて、うちに謝罪をしてくれたようです。

そう思うと、やっぱり何か重要な秘密をずっと隠し続けるような人には見えませんでした。

彼はそんなに意地悪な人間にはとても思えないのです。

「ええよ。うちもしょうもないことで怒ってしもた」

複雑な心境のまま、うちは彼の謝罪を受け入れました。これで一応、仲直りということでしょう。

今度は二人で道を歩き出します。

彼の家まではそれほど遠くないはずです。うちはこう見えても方向音痴なので絶対の確信が持てないのですが、きつと五分もかからないでしょう。

なんとなく歩きながら、うちは先ほどの続きを考えます。

しかし、彼が意地悪な人間ではないとすれば、そこには、話したくても話せないような状況があるかもしれません。

彼が誰かと一緒に暮らしているとして、それをうちに話せない理由です。

こういうとき、一番恐ろしいのが、その誰かに口外するなどと脅されている状況です。どこかテレビで見たように、人殺しの犯人が彼の家に行ってきて、ここで匿<sup>かくま</sup>えと脅しているのです。

そうだとしたら、何としても彼の異変に気がつき、すぐさま警察に通報をしなければなりません。

いえ、そうしてしまうと犯人をかえって刺激して榊君を人質にとり、立てこもり籠城などやらかしてしまうかもしれません。

ありえない空想がうちの脳内を駆け巡ります。

そうこう考えているうちに、榊君の自宅の前まで来ていました。

彼の家を前にして、うちは密かに気合を入れます。何があるうとなかろうと、彼の家に入るのはこれが初めてです。

そういう意味でも緊張は波のように何度も何度も打ち寄せてきます。しぼんではふくらみしぼんでは膨らみます。

すると、榊君はうちを戸口で待って置くようにと、告げるとそのままそそくさと自分だけ中に入ってしまいました。

少々散らかっているということなので、簡単に掃除をしているという事です。やっぱりそういうところは男の子らしいのです。うちのお兄ちゃんもよく部屋を散らかしてお母さんに怒られています。

た。男の子は往々にして大雑把なところがあるようです。  
しばらくして玄関が開きました。

「青山、入っていいよ」

中から榊君の声が聞こえます。うちは恐る恐るのっそりと足を踏み入れました。

「お、おじゃまします」

それだけなのに、声に変に上ずってしまいます。足元には一人分の靴がありました。ちらりと確認しましたが、他の人のものは下駄箱には入っていないようです。

「靴脱いだらこっちだよ」

通路の先の手前の襖ふすまが開き、そこから榊君が顔を出します。どうやらそこが居間になっているようです。

うちはそこに向かう途中で入念に足元をチェックします。もしかすると、どこかに同居人の証拠が残っているしれません。長い髪の毛でも拾ってやろうと目を皿にして歩きましたが、残念ながらそんなものはありませんでした。

「なんだ？　がっかりした顔して」

部屋に入ると榊君が訊きました。

「う、ううん。ちゃうねん。なんかイメージと違うなあって思って。もっと男の子っぽい家やと思ってたから」

彼は居間のテーブルの横に座っています。正面がガラス戸になっていて、その向こうに散りかけの立派な桜の木がありました。

「青山がどんな家を想像してたのかは知らないが、こんなもんじゃないか？ まあ、そもそもここは俺の死んだじいちゃんの家だし」「え、おじいさん死んでもたん？」

うちはさらりと告げられた死の報告にどきりしました。

「ああ、数ヶ月前にはな。知らないか？ じいちゃんここでずっと一人暮らししてたんだけどな」

記憶の糸を探り出します。そうすると思い当たる場面が浮かんできました。

「ああ、そうや。いつつもこの家の前を通ったら声かけてもろたわ。優しそうな人やったな。白い髭生やしてた」

「きつとその人だよ。俺のじいちゃん」

「そうか、あのおじいちゃん、死んでもたんか」

うちはちよつと悲しくなつて顔を俯かせました。最近は見かけないため、忘れていましたが、いつも元気に畑仕事をしていた老人のことが目に浮かんでセンチメンタルになったのです。

すると、榊君は机に手を置いてこう言います。

「それで、今は俺が代わりに住まわせてもらってるってことだ。早く一人暮らしをして、親から自立したくてさ」

「自立？」

「そうそう。だって今まで親に何から何までまかせつきりだったからさ。社会に出ても自分ひとりやっていける自信をつけたかった

のさ。じいちゃんみたいに半自給自足とまでは出来なくても、それを目標にさ。がんばろうって思ってたんだ」

自信をつけるために一人暮らし。

榊君の言葉には簡単には揺るがない決心の力強さが籠もっていました。彼は自分のためにここで一人暮らしを始めているのです。

うちはその言葉で確信しました。

彼は本当にここで一人暮らしをしているに違いありません。彼の目標ある暮らし方にはこの家にいるのは一人で一杯なのです。うちには、もう一人入るだけの余裕は無いように思いました。

「やっぱりせやねんな。うちが勘違いしとったわ」

彼がこの家で同棲しているなんて妄想もいいところです。

なーんや。思い違いか。

………つて、いやいや。

途端に、脳内の自分からつつこみが入ります。そうです。それでも説明できないことがあるのです。

それでは、あの電話の声の主は何者だったのでしょうか。ケーキを買ってきてくれと頼んできたあの人物です。

彼がこの家で他人と暮らしていないとなると、その人物の影がふわふわと漂います。

これはいったいどういうことでしょう。

ミステリーです。ひどく混乱してきました。

「青山？ 頭が痛いのか？」

頭を抱え込んでいるうちに心配したのか、榊君が声をかけてきます。

その時、ふいにうちの視界に何かがきらりと光りました。何でしょう。机の端で細長いものが落ちています。

「赤い、毛？」

「どうした、青山？」

「榊君、この家で猫でも飼ってんの？」

「いや、そんなことはないけど」

首を傾げる彼にその赤い毛を見せたときでした。彼の表情がさつと青ざめたのが分かりました。こころなしか、小さく「げっ」と呟いたようです。明らかに異常な反応でした。

「も、もしかしたら、野良猫が家の中に入ってきたときかもしれない」

「野良猫がおんの？」

「あ、ああ。裏の林があるだろう？ あのとりに猫が住み着いているんだよ」

どうにも嘘くさい話に聞こえます。榊君の眉が妙に動いていて、何かを隠そうと焦っているかのようでした。

これには、うちの中でまたふつつつと疑惑の念が沸きあがります。すると、今度は頭上あたりで何かの物音がしました。ごとり、と何かが倒れる音です。

「あれ、今変な音が……」

「……大したことじゃないって。それよりさ、せっかく買ってきたんだろ？」

「え？」



「ケーキだよ、ケーキ。食べようぜ」

さつきはあれほど興味を示していなかったケーキを彼は指差して言います。まるで、上手く注意を逸らそうとしているようです。いつものうちならそれで騙されるかもしれませんが、今日は違います。その手には乗りません。

うちは榊君が誰かと同棲しているのか、それをどうしても確かめなければなりません。そこであることを思いつきました。

ケーキを食べるなら、と榊君に頼みごとをします。

「じゃあ、申し訳ないけど、お茶を用意してくれへん？」

「飲み物が欲しいのか？」

「ケーキと言ったら紅茶に決まっとるやろ？ えっと、なかったら何でもええけど」

「そっか、紅茶があるよ。すぐにお湯沸かしてくるから、ここに居てくれ」

「了解やで」

榊君はちらちらと不審げにうちを見ながらも居間を出て行きました。

すぐに隣の台所の方から蛇口を捻る音が聞こえてきます。

こうなれば、チャンスは今しかありません。

うちは拳を握ります。

先ほど物音が聞こえた二階に上がってみるのです。もしかすると誰かが隠れているのかもしれない。

うちの好奇心はもう止められませんでした。

出来るだけ音を立てないように立ち上がるとそっと廊下に出、階段を目指します。

抜き足、差し足……。

「青山、ミルクは入れるか？」

台所から榊君の声です。

「あ、お願いするわ」

身体を静止させて、首だけ後ろに向けて返事をします。

「……りょーかい」

適当な彼の声が返ってくるや否や、うちはもう階段を駆け上ります。ここまで来れば、榊君も追いつけません。一思いに二階まで辿り着くと、物置らしき扉の横、目に付いた小部屋に繋がるドアを開け放ちます。

「ど、どばーん！」

しかし、ドアを開けた後でうちはその場で立ちすくみます。

目の前にあるのはいたって普通の勉強部屋でした。

人が隠れられそうなスペースはありません。これはいったいどういうことでしょうか。風を通すために開けられた窓からは平和的な鳥たちのさえずりが聞こえてきます。

「……あ、あれ？」

拍子抜けしたうちはそのままフリーズをしてしまったのですが、一拍置いて、何者かの叫び声が響きました。

「は、は、春臣！ 曲者じゃー！ 踏み潰されるー！」

うちの足元です。視線を落とすと、見逃していた小人が机の柱の影に隠れています。

そうです。小人なのです。

とても小さくきらきらと赤い髪の毛をした女の子がひいひい言いながらふるふると震えています。その少女が叫び声をあげていました。

「話が違つてはないか！ 誰も二階には来ないと言つたはずじゃぞ、春臣！」

うちは目の錯覚を疑いました。軽く昏睡状態の手招き、めまいを感じます。

「な、な、な、なんやー!？」

「誰か助けてくれ。こ、殺されるー!！」

二人の乙女の悲鳴が一人暮らしの榊君の家に容赦なく響き渡ります。

尻餅をついたうちの背後から急にどたばたと階段を駆け上がる音が聞こえたと思えば、榊君でした。惨状を見るや否や、真っ青な顔をして額を手で覆い隠しています。

「最悪だ」

そして、長いため息を吐き出しました。

## 26 終結！ 春臣の秘密

「……っと、まあ、そういう経緯で姫子はここにいるわけだよ」

一階の居間に座らされたうちは榊君から小人さんに関する話を一通り聞かされました。にわかには信じがたい話ですが、それによると、この小人さんはこの世界とは違う場所からやってきた神様ということで、いろいろあってこちらの世界に来てしまった、だから、榊君があれこれ世話をしているということでした。

難しい話をたくさんされて、少々混乱をしていますが、大雑把にまとめるとそういう感じらしいのです。

うちもうちで、榊君には事の次第を全て打ち明けました。彼の電話を拾い、不躰ぶしつげにも勝手に出てしまった次第についてです。

「ふうん」

それを聞いた後で、彼は大した反応もなく頷きました。

「もしかして、榊君、気づいてた？」

「そりゃ、気づかない方が変だろ。突然家に来たいって言い出したり、ケーキを三人分買ったたり。まさか電話に出ていたとは思ってもみなかったけどな」

「ほんまごめんな」

「いや、それはもういいよ。落としていった俺にも問題があるし。そんなことよりさ、信じてくれるか？」

「何を？」

「ほら、そこにいる神様の話だ」

彼は机の上に座っている小さな少女をあごで差しました。

「信じるもなにも、実際に目の前に神様がおるやん。嘘やって思う方がむずかしいで」

うちが当然に思っていることを言つと、榊君はほつと胸を撫で下ろしたようです。

「少々あつけらかんとし過ぎるのも、どうかと思っけど。そうか、信じてくれるのか」

「でも、うちの知らんところでそんなことがあつたんやね」

そう言つてケーキを頬張ります。正直、実際ここで何があつたのか、ちんぷんかんぷんなところも多いのですが、こうなればいろいろと不明瞭なところをケーキの甘さでごまかしてしましましょう。

「ま、まあな。こつという事情だから他の人間に話せなくてよ」

榊君が目を向けた先には先ほどの小人、もとい神様が小さく欠けたケーキを口に運んでいます。葉っぱの上に座り、自分の話だと分かっているのか、いないのか、食べ物にご執心です。こちらの話にほとんど耳を傾けていないように見えます。

「うち、構へんのに。むしろ話して欲しかったな。榊君に秘密にされて、いろいろ考え込んだんよ」

「話分かる人間かどうかその辺を判断しないといけないからな。それに、必要以上に他人に知られるとまずい。青山の場合、まだ知り合つて少しだし、突飛な話についてこられるかどうか不安だったし……」

「大丈夫やつて、むずかしい話なんて全然分からんよ」

平気平気、とうちは首を振ります。

「……それはそれで問題なんだけどな。っていうか、それは今までの俺の懇切丁寧な話が無駄になった気がする。出来れば発言撤回してくれ」

彼が切実な表情でそう言ってくるると同時にうちは名前を呼ばれました。

「青山椿、と申したか？」

「は、はい…」

机の上でくつろいでいた神様がこちらを向いて座っていました。むんと顎を突き出し、腕を組んでお偉い女王然としています。艶やかな赤い髪が机の上にはらはらとこぼれ、宝石のように光を放っていました。

「わしは神じゃぞ」

「はい」

「お主、何か申すことはないのか？」

「ほっぺにクリームがついとります。あの、とてもおいしそうです」

はっと神様は赤面した後で、口元のクリームをふき取ると、恥ずかしげに俯き加減で聞いてきました。

「むっ、そういうことではない。初めて神を見て、何か思わぬか？」

「ごう、神々しさというか、その威厳というか」

「小さくてかわいいお人形さんみたいやで」

「そ、それだけか？」

がっかりした様子で、神様は肩を落とします。

「それなら神様、頼みごとがあります」

しかし、うちの次なる言葉を聞いて、なぜか、神様は目を輝かせました。待っていましたと言わんばかりに顔中に喜びを充満させています。まるで、ようやくかまって貰えた子犬のようです。尻尾を振ってるみたいです。

「なんじゃ、言うてみよ。内容によってはわしが叶えてやらんこともないぞ。何しろ、わしは神じゃからの」

「はい。じゃあ、姫子ちゃんって呼んでも良いですか？」

「はあ？」

すると、再びあからさまに神様は落胆します。何かいけないことだったのでしょうか。

「だって、榊君は姫子って呼んでるでしょう。うちだって名前前で呼んでみたいもん」

正当な理由だと思っていたのですが、神様にとっては違うようです。神様は再び顔を真っ赤にして地団太を踏みます。足元の葉っぱがぐしゃぐしゃになっていました。

「神に向かって呼び捨てなど。ぶ、無礼千般じゃ。春臣、人間とはこのように軽薄な連中ばかりなのか！」

「え、うち、そんな変なこと言った？」

「まあまあ」

榊君が両手で制しながら仲裁に入ります。

「姫子は今は本来の姿じゃないんだし。神様って感じじゃないんだよ。その辺りを自覚しろって」

「そうやで。うち姫子ちゃんと普通の友達になりたいもん」

そう言つと、神様はきつと鋭い目つきで睨んできます。

「お主にその呼び名を許した覚えはない！」

「でも、榊君は……」

うちが食い下がると神様は口をへ字に結びます。

「春臣にはいろいろと世話になつたしの。その呼び名を特別に許しておるのじゃ。しかし、お主のようなどこの馬の骨とも知れぬ輩からその名で呼ばれるなど、真つ平ごめんじゃ」

「ええ！ うちの顔、そんなにごつごつしてへんで」

「………そういう意味ではない。ともかく、お主に姫子などとは呼ばせぬ」

どうやら神様はかなり頑固な人のようです。しかし、それで引き下がるうちではありません。一筋縄ではいかない相手には譲歩という手段をとってみます。

「じゃあ、どう呼んだらええの？」

「う、うむ。そうじゃの」

神様はたちまち思案顔で天井を見上げます。どうやらその考えはなかったようです。

顎に指を置いて、しばらく唸っていたと思ったら突然こう言いま



した。

「緋桐様じゃ」

「ひざりさま？」

うちは素っ頓狂な声を出してしまいます。

「おい、姫子。様付けはやりすぎじゃないのか？ 対等じゃないぞ」

榊君が横からそう苦々しげに耳打ちをしました。しかし、神様は両腕を上下にゆっさゆっさと揺すり、ご立腹のようです。

「ええい、うるさい。神なのじゃから人間はこれくらいの敬意を払って然るべきじゃろう。当然のことじゃ」

「だからってそれは……」

「そうじゃ、春臣。ここはこの椿とやらを信者第一号ということにせぬか？」

すると、また思いつき顔で神様は指を立てます。

「し、信者？」

「そうじゃ。新たな宗教、緋桐教の誕生じゃ。この娘を先鞭せんべんとして迎え、続々と信者を増やしていく計画じゃ。そこでわしが生ける神として光臨し、教祖はお主となる。それで信者からのお布施は食べ物ということにすれば、これからずっと食い物には困ら……」

すると、そう言いかけた姫子ちゃんに榊君からの鋭いつっこみ、もとい、小さくでこピンが決まります。

「痛っ！ な、なにをするか」

「馬鹿も休み休み言えつての。俺の友達を勝手に信者にしてんじやねえよ。そもそもそんな思いつきで宗教なんて言いだすな」

「ば、馬鹿じゃと。神に向かってなんたる口の聞き方か。これは万死に値するぞ。天罰じゃ、天罰じゃあ！」

神様がきいきいと飛び跳ねます。

「ああもう、好き勝手ほざいてるよ」

うざったく榊君は手で払いながら、ちらりと何かに視線を落としました。

「そうだ。言っておくが、今姫子が旨そうに食ってたケーキ。俺が買ってきたもんじゃないんだぞ」

「へ、それはどういうことじゃ？」

彼が意味ありげに目配せをしてきて、そこでうちは思い切り手を挙げました。

「うちです。うちが買ってきました」

「お、お主が？」

「ほれ、好物を食わしてもらったんだ。青山にはそれなりの恩義があんだぜ」

「……」

「少しの願いくらいは聞いてやってもいいんじゃないか？ どうなんだ、神様」

「あ、あつ……」

榊君に痛いところを衝かれた神様はまるで糸を失った操り人形のようにぺたんとその場に座り込んでしまいました。

観念したように、ちらりとケーキが乗っていたお皿を見てから、神様は口を開きます。

「……好きに呼ぶがよい」  
「え？」

大きなため息をつくとき、神様は続けて言いました。

「わしのごことはお主が好きのように呼ぶがいい。その、ケーキ旨かつたぞ。ありがとう」

「ほんま？」

「本当じゃ」

「ほんまにほんま？」

「しつこい。前言撤回して欲しいのか？」

おっと。それはうちの望むところではありません。慌てて首を振ります。

「じゃあ、これからよろしくな。姫子ちゃん」

「むう、姫子ちゃんか……」

「うちら、友達になるな。こんな小さな友達がおるなんて結構自慢になるし」

しかし、そこですかさず神様が口を挟んできました。

「言うておくけど、青山。姫子のごことは他言無用だぞ。周囲にばれるといるいと厄介なことになると思うからな」

「……それは残念やな。友達が神様なんてなかなか自慢できることやないで」

「そうだな。そんなことをしたら、どこかに頭をぶつけたと思われ

るのがオチだな」

彼はそう言っただけ苦笑しましたが、うちはそれがどついう意味なのか、よく分かりませんでした。彼は時々むずかしいことを言います。けれど、うちはそんなことよりも、せっかく知り合いになれた姫子ちゃんとしてみたいことがありました。

「ほづら、姫子ちゃん。握手しよ」

「握手？」

「せやで。友達なら握手せな」

そう言っただけ、その装束から伸びた白くか細い手を指先で包みます。姫子ちゃんがうちを見上げて、小さな水晶のような瞳が不思議そうに瞬きをしました。

「へへへ……これで仲良しやね」

「これで仲良し、か？」

いまいち揺すぶられている姫子ちゃんの顔が腑に落ちていないように見えたのはきつと気のせいでしょう。

ともかく、今日出来た新しい友達を前に、そう思うことにしました。

## 26 終結！ 春臣の秘密（後書き）

作者のヒロユキです。

今回は執筆にかなりくたびれました。慣れない文体というのはしつくりこないことが多くて何度も書き直しました。なんだか妙にしつこい文章な気がして、読んでもらった方もくたびれたのではないかと、心配しています。

もしよろしければ、文章の評価などしてもらえれば幸いです。お読みいただきありがとうございます。

27 Rainy holiday (前書き)

作者のヒロユキです。

今回は雨の休日をテーマに、それが持つ独特な低血圧感を書いてみました。これは今までにないほどにゆるく、正直どうでもいい話です。

その点をご了承(するほどのこと?)の上、お読みください。

## 27 Rainy holiday

風が邪魔な雲を追い払ったように、文句なしの快晴だった前日の天気から一変、今日は空がブラインドを下ろしたような、黒い雨雲が広がっていた。

明け方から降り出した雨は、地面を叩く強さを保ったまま、庭のくぼみにいくつもの水たまりを作っている。無防備に足を突っ込んでしまえば、ずぶぬれは間違いないだろう。

まるでこの雨空は、天気的神さまが『人間たちよ、今日一日は外に出るでない』と命令しているようにも思えた。

テレビの降水確率を観れば、どこか逃げ場の無い絶望感を漂わせる100パーセント。

暇を持て余している春臣は、座布団を枕代わりに朝から代わり映えのしない外の景色をちらりと眺めた。

全く、せつかくの休日だというのにこの様だ。

そして、傍らに置いた湯気の立つコーヒーを啜ると、読みかけの漫画のページを捲った。最近読み始めた野球漫画だ。雨の中、ずぶぬれの主人公ががむしゃらにバットの素振りをしている。ライバルチームに勝つための練習だということだが、それで風邪をひき、チームに迷惑をかけることになれば、とんだ身勝手な行為だろう。

雨の日は無理をせず、大人しく家にいるに限るのだ。

春臣は漫画を読みながら、まるでそれがこの世の一つの真理であるかのように心の中で呟いた。

「それ、これがフじゃ」

すると、近くから姫子の弾んだ声が聞こえた。春臣は無意識に目を向ける。彼女は真横の卓上に乗っており、幾重かに重ねられた着物の上から紐を通し、背中に榊の葉を括り付けていた。

それは彼女が外の世界で存在するのに不可欠なもので、解けてしまえば彼女の命にも関わる事態になってしまう要の葉である。

しかし、彼女はそれを忘れているのか、危うく紐が解けてしまいそうなほど、ゆさゆさと身体を動かし、机の端から端へと歩き回っている。

テーブルの上にはばらばらに裏返されたトランプが散らばっており、今また姫子は着物の裾を払いながら小走りで移動し、一枚のトランプの上に立った。

「よし、確かこれもフじゃ」

そして自信ありげによいしょと捲ると、確かに裏返ったカードはスペードの7。

「あ、あかん。そこも取られてしもたか」

すると、彼女の向かいに座っている椿は、してやられたと額をぴしゃりと手のひらで打った。

どうやら二人はトランプの神経衰弱に興じているようである。退屈な雨の日の気ままな暇つぶしということだろう。さりげなくそれぞれが取ったカードの山を見ると、姫子が十ペアほど、椿はまだ二ペアほど。すでにかかなりの差があるようである。



「ふっ、この程度か、椿。所詮、神と人とは歴然な力の差があるようじゃ。ほれ、そろそろ降参してはどうじゃ？」

優位な立場の姫子は、挑戦的に言い放つ。きっと全てのトランプが表にされた時には、さらにその口調は高圧的になっていることだろうと、春臣は思う。なぜなら姫子はこの手の勝負で対戦相手に手加減をするなどという情けを知らないのだ。

「む、うちはまだまだ負けへんで。逆境こそがうちに真の強さを与えてくれるんや。ここからが勝負どころやで」

しかし、椿はそう返すと、腕まくりをしてまだ戦意があることを見せた。

「諦めの悪いやつじゃのう。仕方ない、完膚かんぷなきまでに叩き潰してくれるわ」

冷酷なほどに抑揚の無い言葉で姫子はすぐ右の一枚を捲った。裏返るカードは、ハートの13。姫子の長い眉がぴくりと動く。

「外せえ、外せえ……」

怨霊のような椿の音が響く中、彼女は緩慢な動きで、迷う事無く、左斜め後方の一枚の数歩前で歩みを止める。そして、カードに手を触れるのかと思いきや、片手の手の平を口元まで持ってきたかと思うと、ふっと軽く息を吹きかけた。

すると、見えない手が伏せられたカードを持ち上げるようにそれが宙で回転し、くるりと腹を見せて寝そべる。

「嘘や……は、ハートの13」

目を何度も擦った後で椿が奇跡が起こったかのようにそう言った。

「ば、ばたんきゅーや」

机上に倒れ伏し、椿が降参の言葉を口にするまで、ものの五分もかからなかった。

姫子の側には厚みのあるトランプの山が築かれており、彼女は王座に座る王女のようにその上に腰掛け、勝者の笑みを湛えている。

春臣はしばし漫画のことを忘れて、その勝負を見ていたのだが、ほとんど椿が手を動かさないまま、姫子が机の上を走り回っていた印象しかなかった。予想していたとはいえ、ここまでコテンパンにするとは、神様も酷なものだ。

「口ほどにもないやつじゃ。豆腐のほうがよっぽど歯ごたえがあるぞ」

さらなる姫子の言葉に椿は恨めしそうに机の端に顎を寄せ、ため息をついた。

「姫子ちゃんにこんなに圧勝されるなんて、さっきルール教えたばっかやのに」

「そんなことは関係ないぞ」

ふふんと姫子は鼻をならす。

「お主とは基本的な能力に差があるのじゃ」

「の、能力の差？」

「わしは一度でも表にされたカードの九割は即座に暗記できる。同

じカードを捲るといふ単純なルールの上で重要になるのは、何戦を戦い抜いてきたかという経験ではなく、ただ瞬間的に数と配置をどこまで記憶できるかという能力じゃろう」

神経衰弱の本質はすでに見抜いたと姫子はカードの王座から飛び降りる。胸元に括った紐を微調整し、さて、と言うと居間の時計を見上げた。

祖父が使っていたその古い八ト時計は、木の葉を模した振り子が揺れ、細かく木目が掘り込まれた丁寧な作りの一品で、一時間ごとに鳥のさえずりが聞こえる機能は故障してしまっていたが、時刻を示す針は狂うことなく動き続けている。

「いつの間にか、昼の一時か」

彼女は目を細めながら長針を読む。朝から薄暗いだけの外の様子は、こうしてたまに時刻を確認しなければ、時間の経過を忘れさせる。

春臣もそれを確認してから、もうそんな時間かと思った後で、まだそんな時間かと思った。

そう言えば、昼食も食べていない。家の中に居て、ろくに活動していないせいかな、腹の減りも鈍足なようだ。

「二人とも、何か食べるか？」

春臣は聞きながら、脳内で冷蔵庫の中身を確認する。しかし、大した戦力にならないものしかないような気がした。スーパーで購入したポテトサラダの余りと、料理本を見ながら悪戦苦闘して作った肉じゃがだ。

少々豪華な猫のえさといったところか。春臣は自嘲気味にそう思

う。

「……インスタントのラーメンでもいいか？」

残された選択肢を口にすると、姫子は案の定渋った。

「うつむ。もっと食欲をそそるものはないのか？」

「残念ながら、ない」

「では用意して来い」

ほぼ即答で姫子が言い返す。

「無理言つなよ。こんな天気じゃ、外に出る気分も失せるんだよ」

やる気のない春臣は、脱力した半眼でそう言った。昼飯のために服を濡らすのはわずらわしかった。

すると、弾けるように立ち上がったのは椿だ。

「よっしゃ、ここはうちに任しとき」

ぼんと胸を叩く。

「青山、何か案があるのか？」

春臣が訊くと、彼女は部屋の隅に置いていた自身のリュックからいくつかの布に包まれた弁当箱を取り出した。机の上にひょいとならべ、へへえ、と笑ってみせる。

「椿、なんじゃそれは」

興味津々の姫子は早速その包みを解こうと、よじ登ろうとしていた。

「サンドイツチやで。今日の朝、早起きして作ったんや」

「作ったって……これ、一人で食うには多すぎないか？」

包みは全部で三つあり、彼女の胃袋に納まるには明らかに充分すぎるほどの量だ。

「ちやうちやう、皆で食べようと思たんや」

「皆で？」

「ほんまは今日、皆でピクニックに行こうと思ってたから、これを準備したんよ」

「ピクニックって、この雨だぞ」

素っ頓狂なことを言い始めた椿に、春臣は窓の外を指差しながら言う。

「そつやんなあ、サンドイツチよりもてるてる坊主をぎょうさん作らなあかんかったわ。失敗やわ」

「いや、仮にそうしたとしてもそう思い通りに解決しねえよ。天気予報を見れば分かるだろ、降水確率は100パーセントだ」

雨だというのに、朝早くから椿が来たわけはこういうことだったのか。春臣はそう思って、肩を落とした。

「……それで重そうなりユックを持ってきていたのか」

「えへへ、コーヒーもあるで」

そう言って、彼女は魔法瓶を取り出す。その蓋を外すと、香ばし

い匂いが辺りに漂った。

「ほら、柗君も座りいな」

「……そうだな。せつかく青山が作ってきてくれたんだ。有難く食べさせてもらうか」

座布団に座ると、椿はすぐに弁当箱の包みを解いて、三人の前に一つずつ置いた。小さな姫子に一人分の弁当箱は、明らかに多すぎるが、彼女は嬉しそうに鼻歌を歌っている。飲み物が全員に行き渡ると、椿が音頭をとった。

「ほな、食べようか」

ぱらぱらと拍手が起こり、少しの遅めの小さな昼食会が始まった。春臣は、弁当箱の蓋を開ける。いったいどんなものだろうと、半ば恐る恐る中身を覗いたのだが、至って内容はシンプルだ。

柔らかそうな食パンに、新鮮そうなレタスとたまご、ベーコンなどが挟まっている。見るからにおいしそうである。

「おお、うまそうじゃのう」

きゃいきゃいと姫子のはしゃいだ。

「い、意外だ」

「何がやの？ 柗君」

つい、口元からこぼれた言葉を椿は聞き逃さなかったようだ。追求の矢が間髪入れず、飛んでくる。

「えっと、青山のことだから、もっと珍妙な具を入れてるのかと思

つてたけど」

「ちんみょうな、具？」

「たこやきとか、納豆とか、イナゴの佃煮とかさあ。そういう類だ  
「よ

「な、なんやのそれ、うちはそんなもん入れたりせんで」

全くもって心外だ、と椿は怒ってしまったようで、ぷいっとそっ  
ぼを向く。これは迂闊うかつな発言をしてしまったと、ばつが悪くなり、  
春臣はすぐに謝った。

「ごめん。ちょっとした単なる冗談だよ」

「さっきの目えは、マジやったと思うけど」

春臣はさらに批難の追い討ちをかけられてはたまらんと、すぐに  
サンドイッチを口に入れる。

「ああ、旨い。すごくうまい。こんなサンドイッチ人生で初めてだ。  
いやあ、おいしいもの食べると心が豊かになるよねえ」

我ながら白々しいものだ、と苦笑しながらも、口に押し込みなが  
らの棒読みの絶賛。しかし、これは……。春臣の手が止まる。

「もう、そうやってごまかすんやね」

「そうじゃないよ。本当においしいって。これならいくらでもいけ  
る気がする」

「うむ、まことに美味なるぞ。椿」

姫子はサンドイッチの端から齧りついている。

「ほ、ほんま？」

椿は目を丸くする。

「本当だって」

「本当じゃ」

もちろん、春臣たちの言葉に偽りはなかった。それを聞いた椿も一切れを手に取り、ぱくりと一口。

「……おいしい」

「じゃろ？」

しかし、なぜか椿は浮かない表情で頷く。

「どうした？」

「……こんなおいしいんなら、外で食べたかったなあ」

「……」

「ピクニック行きたいなあ」

「ああ、残念だよな。でも、この雨だし」

「うーん。てるてる坊主、今から百個作ったら間に合わんやろか？」

そう言ってさりげに横目で姫子と春臣を見る。すかさず春臣は、彼女から次の言葉が出る前に牽制した。

「言うておくが、やるなら一人で頼む」



27 Rainy holiday (後書き)

いかがでしょうか。

読者の方が口々に「どうでもいい」とこぼしている様子が目に浮かぶようです。

すいません、この話、まだ続きます。

## 28 ニートな神様（前書き）

作者のヒロユキです。

とんでもないことを発見してしまったので、ご報告いたします。

一ヶ月の投稿間隔が開いていたためか、作者の方がいろいろと忘れていたことがあり、「媛子」という名前がいつの間にか変換ミスされ、今まで「姫子」となっていました。

なんとなく違和感を感じていたのですが、改めて以前の内容を読み愕然。作者がキャラクターの名前を間違えるなど、言語道断ですよ。すみません。これからはないように心がけます。

28 二トトな神様

「そう言えば……」

昼食が済み、くつろいでいると椿が小首を傾げながら言う。

「媛子ちゃんって、神様やんなあ」

「それがどうしたのじゃ、椿」

媛子は神の葉を丸め、クッションの要領で腰掛けている。椿に首を向けた。

「ほんなら質問があるんやけど」

「質問？」

「神様って、仕事あるん？」

「……ああ、あるが？」

「媛子ちゃんの仕事は何なん？」

途端に咳き込む媛子。

「なんや、媛子ちゃん風邪かあ？」

「いや、何かをごまかしてるんじゃ」

春臣が訝しげに言う。

以前から思っていたが、彼女は何かと謎がある。

それなりに事情があるのだろうが、時折、未だ自分に隠し事をしているような様子を垣間見せるのが、春臣にはどうにも気になる。

隙あらば、うまく聞き出せないものだろうか、と考えているので

ある。

すると春臣の疑わしげな声に、媛子は目を側めて睨んだ。

「余計な勘繰りをするでない、春臣」

「ほう、それなら聞かせてもらおうか。媛子はどれほど崇高で、高尚な仕事を受け持っているんだ。そんなこと、今まで知らなかったしな」

「そ、それは、じゃの。仕事の内容は神によって違うが、この世に作物を実らせたり、命を生み出したり、土地を守ったりと様々なことを……」

「そうじゃなくて、媛子は？」

「わ、わしか、それは、その……」

「どうした、仕事があるんじゃないか。歯切れが悪いな」

いつもの強気な彼女らしくない弱気な表情は、先ほどの漫画に見たような縦線が入っている。

やはり、聞かれては困ることのようだ。

「……お主らには言っておらんかったが、わしは、その、まだ新しい神なのじゃ」

「新しい神？」

「そうじゃ、生まれてからそれほど長い時間が経っておらん。いつても神の世と人の世では時の流れが違うから、おぬしらからすれば短くはないじゃろうかの」

「新しい神だと、どうなんだ？」

「じゃから、まあ、その、大した仕事は任せてもらえぬのじゃ」

ため息交じりに指先をいじりながらそう言う様子は、かなり気を落としているようだった。どうやら、何かの虚言ではなく、真実であるらしい。彼女の表情がそれを物語っている。

普段からあれほど神であることを誇っている彼女なのだから、神の世で大した活躍が出来ていないことを人間に知られることは、情けないのだろう。

彼女が言葉を詰まらせたのは、単純にその事実を知られることが嫌だったようだ。

「……」

春臣と椿は余計なことを追求してしまったものだと、互いに不安げな顔を見合わせ、再び視線を落とす。

かけるべき言葉を探していると、椿が口を開いた。

「そうか、じゃあ、媛子ちゃんは今時の言葉で、いわゆる、定職に就いていないグータラ生活中的の神様ニートやね」

配慮の欠片もない無邪気な指摘に、春臣はおいおいとつつこみを入れる。

「それ、何のフォローにもなってねえよ。むしろ、マイナス効果じゃないか！」

「わ、わしがニート、神様ニート……」

すると、目が点になった媛子がうわ言のようにそう繰り返し始める。その視線は明らかに焦点を失っており、ショックで朦朧としているようだ。さすがにこれはまずい。

「ち、違うだろ。別に媛子は神として仕事をしたくないわけじゃないし、やる気はあるだろ？」

「それはそうじゃが」

「神様としての力だつてあるじゃないか。この前は花を咲かせてくれただろ。あれ、すごく綺麗だったし、媛子は神様として立派だよ」

春臣はつい先日夜の事を振り返りながら、陶然とした心地を思い出す。春の桜がくれた奇跡のような美しさはまだ彼の胸に深く刻まれている。

すると、それを聞いた椿が両手を合わせて目を輝かせた。

「え、ほんまなん、それ。お花を咲かせるなんて魔法みたいやん」「そ、そうか。春臣、それほど良かったか？」

見上げた彼女の虚ろな瞳に再び光が灯った。

「ああ、媛子ってすごいんだなつて。本気で思ったよ」

「わしが、すごい。神として、すごい……」

すると、椿がそこでぱちんと指を鳴らした。

「ほんならや、うちにええ考えがある」

「いい考え？」

春臣は咄嗟に身構える。頼むから、余計なことだけは言わないでくれ、と胸中で懇願した。

「なんじゃ？」

「お花屋さんや。姫子ちゃんが花咲かせられるんやったら、ここを媛子ちゃんのお花屋さんにしたらええんちゃう？ それなら二ートやないし、神様が働いてる花屋なんて、そうざらにないでえ」

とん、と机を叩き自ら名案やと言つてのけた彼女だったが、二人

の反応は冷めたものだった。

「それは、どうかな」

と春臣は首を捻り、

「……ううん、あまり、現実的ではないのじゃ」

と媛子は言葉を濁らせる。

「ええ！ 絶対ええ考えやと思うのに」

「そもそも、わしは本来の力を失っておる状態、花を咲かせるのに  
もかなりの力を要するのじゃ。榊の葉に蓄えられている力も大量に  
消費してしまう」

彼女は椅子にしている榊の葉をぼむんと叩く。すると、続けて春  
臣が根本的な問題点を指摘した。

「それ以前に、媛子のことは周囲に知られるのはまずい。こんな小  
さな神様が店をやっているなんてことが広まれば、大騒ぎになるぞ」  
「ああ、確かにそうかあ」

椿はそう言っつて、ずず、とコーヒーを啜る。

「絶対名案やと思ったのに」

「……椿、他に名案は浮かばぬのか？」

不貞腐れ、机に伏せようとしている彼女の動きが、その一言で止  
まった。

「へ？」

これには、春臣も何を言いだすのかと卓上の小人を見たのである。

「なんだ、神様の就職活動か？」

「茶化すな、春臣。わしは純粹に神らしく人のためになれることを模索しておるのじゃ」

「人のためにねえ……」

「椿の言うとおり、このまま怠惰な生活を続けておつては、ニートと呼ばれても仕方あるまい。神と云えど、その定義は当てはまるのではないかと思うのじゃ。じゃから、神として人に出来ることを考えようではないか」

普段、人である春臣の都合を無視してわがままだらけの彼女が言うには、少々説得力に欠けるが、本当にそう思ってくれたならうれしくないわけではない。

「やる気はあるんだな」

「もちろんじゃ。ということで、椿、何か名案はないかや？」

再度、媛子は問いかける。

椿は顔を上げ、何も言わずにしばらく窓の外、降りしきる雨を眺めていたが、途端にこう口走った。

「……ゴキブリ……」

「は、どこに？」

慌てて周囲を春臣の目が搜索する。

「ちやうちやう、ゴキブリはおらんって。今のはアイデアが浮かん



だ効果音や」

「効果音って、史上最悪にも程があるよ」

これには、もはや、呆れる感情も通りこしてしまふ。

「青山のセンスには言葉もないな」

「そんな、褒めても何もでてこんで」

へへえ、と頬の辺りを指で掻きながら青山が照れる。それを見て、もはや文字通り、言葉も無い春臣はしばし沈黙した。

「……なんだ、この空気」

すると、今までの二人の会話が分からなかったのか、媛子が訊いた。

「なんじゃ、その、「ごきぶりとは？」

「ああ、そうか。ゴキブリなんて、媛子は知らないよな」

「おう、ほんなら教えたる」

「正直、知らないほうが幸せだと思っけど」

春臣の心配をよそに、椿は勢い込んで説明を始める。

「ゴキブリってのはな、別名、黒き翼を持つ、俊敏なる六本足の悪魔、とも呼ばれてんねや」

「それはあまりにも情報の誇張じゃないか？」

そのぼやきは無視される。すでに椿と媛子は机の上で向かい合い、真面目に話し込み始めているのだ。春臣は会話に置いてけぼりにされていた。

「あ、悪魔じゃと。それは、穢けがれが意思を持ったようなものか？」  
「うーん、よく知らんけど、そんなもんなんかな。とにかくこんな雨がたくさんふるような梅雨の季節になると、家のどこからか、そいつがしのびよってくるんや」  
「忍び寄るじゃと、そやつは気配を消せるのか？」  
「そうや、いろんな小さい隙間に入り込めるからなあ」  
「隙間にしのびこむとは、中々やりおる。それで、そいつはどんなことをしてくるのじゃ？」

そこで、椿は一瞬黙る。別にゴキブリはただ家の中に出てくるだけで、特に何をするわけでもないからだ。

しかし、そんな奴らにも目的があるとすれば、  
椿は考えた。

「そうや、分かったで。そいつらはほんまに最低なんや。うちらがその悪魔に気づいて、驚き、慌ててんのをにやにや笑ってんねん。それが奴らの目的や、人間を怖がらすのが楽しいて、しょうがないんやろな」

「おい、青山」

さすがに事が過ぎるので、春臣は口を挟む。

「さすがにいき過ぎだ。それじゃ、正しいゴキブリの説明になつてねえよ」

「何を言うてんねん。これは間違いなく真実やで。やつらは人を笑うのが趣味の悪魔やねん」

口を尖らす彼女の目は反論の炎に燃えている。しかし、春臣はそれを軽くあしらった。彼女の言うこと全てに取り合っているのは、時

間がいくらあっても足りなくなる。

「はいはい、分かった分かった」

「春臣、それではゴキブリとはどんなものなのじゃ？」

媛子がぐるりと視線を向ける。

「あん？ ただの虫だよ。これくらいの黒っぽいな。雨が降って湿っぽくなるとどこから出て来るんだよな」

指で大体の大きさを示すと、彼女はその程度か、と腕を組む。しかし、彼女のサイズで本物と相對せば、笑っていられないだろうことは明白だった。

「で、なんでゴキブリの話になったんだっけ？」

「そうや、そのゴキブリ退治を媛子ちゃんがやったらどうやるかって思ったんや」

「ゴキブリ退治を？」

また突拍子もないことを、とため息を吐く。

「だって、その媛子ちゃんの小ささを生かすんなら、いろんな物の隙間に入って、ゴキブリを倒すのにそのサイズの体はもってこいやろ？」

「そうだけだよ、でも……」

「確かに、それは言えておるの」

意外にも、媛子は椿の案に肯定的なようで、春臣は驚く。

「おいおい」

「普通の人間なら入れぬところへもわしは入れる。この体が役に立つのじゃの?」

「そうや」

「人を脅かす悪い虫がおるのならば、確かに神であるわしがやらねばな」

「そうそう、その意気やで」

「よし、ゴキブリを成敗じゃ」

「がんばりや、媛子ちゃん」

両手の拳を握り、力強くそう頷いた椿の後ろで春臣がすかさずつかむ。

「媛子にトラウマ作るだけだから止めとけ」

## 29 媛子の悩み（前書き）

作者のヒロユキです。

お読みになる前に注意というか、今回は少々シリアスな展開となっておりますので、ギャグなどは期待なさらないでください。

## 29 媛子の悩み

いつものように夕食が終わると、春臣は食器を落とさないように重ね、台所の流しに向かう。

食事の後片付けをするためだ。

服が汚れないように、壁際にかけてある母から譲り受けたエプロンをかける。男がするには少々不釣り合いな花柄の刺繍が入っているが、春臣はエプロンとしての機能は充分だと思っていた。何しろポケットの数が多し。ちょっとした小道具な常に入れたままで動け、重宝しているのだ。

蛇口をひねる。水が食器を叩き、舞った飛沫がステンレスの流しを濡らす。袖をまくり、スポンジに洗剤をつけ、泡立てた。

さあ、食器を洗う準備は整った。

親の保護下にいるときは、まさか自分が流しの前に立って、食器を洗うような人間になれるとは思ってもみなかった。

母がキッチンで無言で食器を洗っている背中を見つめながら、退屈そうな仕事だな、としか認識していなかったのだ。

しかし、今は違う。

一人暮らしなので、もちろん、しなくてはならないという理由はあるが、それ以上に自分の手によって汚れが取れ、綺麗に白い光沢を放つ食器を見ると、なかなか気持ちがいいものである。

鼻歌を歌いながら、さあ一枚目、と茶碗を手を取ったとき、背後から名前を呼ばれた。

「……春臣」

突然のことに、手元が狂った春臣は危うく皿を取り落とすところだった。

「な、なんだ。媛子かよ」

振り返ると、廊下と台所の段差の手前で媛子が柵の葉を体に縛った状態で立っていた。

「驚かすなよ」

「す、すまぬ。そういうつもりはなかったのじゃ」

謝罪の声に、なぜかいつものような元気がないことに春臣は気づく。まるで、母親に花瓶を割ったことを隠している子供のような所在無げな声だ。

「なんだ？ 心配事でもあるのか？」

咄嗟にそう訊いた。

「え、なんでじゃ？」

「憂鬱を絵に描いたような顔してる」

そう言つと、彼女は頭を振って見せる。赤い髪がさらさらと揺れた。

「そんなことはないぞ。わしはいつも通りじゃ」

「いつも通りなら、飯を食った後に台所になんて来ないだろ」

「う……うむ。そうじゃの」

痛いところを衝かれ、彼女はしかめっ面になる。どうやら、自分に何か言いたいことがあるらしい。春臣に心当たりはないが、とりあえずありえそうなことを訊いてみる。

「面白いテレビをやってないのか？」

「そうではない」

「まだ腹が減ってるのか？」

「違う」

「病気か？ 熱が出るのか？」

「……いや、わしは元気じゃ」

彼女は短い返答だけで、一向に目的が判然としない。

「じゃあ、なんだよ」

「……」

「媛子、言わなきゃ分からないぞ」

媛子がその言葉にぴくりと反応する。どうやらようやく観念したようだった。思いつめたようにゆっくりと話し始める。

「……わしは……」

「うん？」

「わしは、お主に謝らなくてはいかん」

これには驚いた。彼女の顔は間違いなく物を壊したとか、そんな些細な謝罪の雰囲気ではなく、それよりずっと深刻な空気だったためだ。

「謝ることがあるのか？」

「今日の昼間のことじゃ」



昼間、というと椿と遊んでいたころのことだろう。

春臣は作業の手を止め、一旦媛子との会話に専念することにした。廊下の隅に立っている彼女を抱え、居間の机の前に座らせる。それから、ちよこを用意し、コーラを注いでやった。媛子がぼそりと礼を言った。

机に肘をついた春臣が訊く。

「それで、昼間に何かあったっけ？」

「ほれ、わしの神としての仕事のことを話しておったことじゃ」

「……そういえば、ゴキブリを捕まえるだの話してたな」

ゴキブリの話をした後も、椿と媛子はしばらく話し込んでいたが、結局、目ぼしい仕事は案出されず、暗礁に乗り上げた会話はいつの間にか神経衰弱にシフトしていつていた。

「わしは、あの後もそのことを考えておったのじゃ」

「神としてできることをか？」

春臣は目を丸くする。

確かに、突然何かをすることに積極的になった彼女には驚嘆していたが、まさか、これほどまでに本気で考えていたとは思っていなかった。

「椿の言うことが身に染みたのじゃ。確かにわしはだらしく、怠惰に日々を暮らしておる。春臣に世話になっておる身でありながら、わがままばかりじゃ」

「まあ、確かにそうかもな」

「じゃから、わしは考えた。お主が家を空けている昼の間でも、何かわしに出来る仕事があれば、やっておきたいのじゃ」

「俺が大学に行っている間か」

確かに、一人暮らしをしている以上、家に居ない間の家事は何一つ出来ない。媛子に手伝いをしてもらえるのなら、うれしい。しかし、そこには問題が山積している。

「でも、媛子のその体で出来ることはないと思うんだよ。無理をさせるのもまずいと思うし」

特に媛子の場合、二階の部屋の外では常に榊の葉を体に触れさせていなければ命さえも危ない身。そんな彼女が自分の居ない間に、家の中を走り回るのは気が気ではないのだ。

家に帰ってきたら、床に榊の葉だけが一枚落ちていたなどという結果になつては、笑えない。

「気持ちは有難いけど……」

「だめじゃだめじゃ」

彼女は首を振る。

「わしは、神なのじゃ。人間たちから少しでも頼りにされる存在でなければならん」

その譲らない頑固な態度にため息をつく。

第一、昼の間で椿と議論が大方尽くされているのだ。無理なことが分かつているのに、面倒な神様だ。

「媛子、こっちは心配してるんだよ。分かっているんだろ、自分の体のこと。媛子は……」

「そんなこと、お主に言われるまでもなく分かっているわ!!」

突然、彼女が春臣の言葉を遮ってそう声を荒げた。悲鳴にも似たその声が、耳の奥に響く。

「思えば、わしは、わしはあ、春臣に頼ってばかりじゃ」

「落ち着けよ。頼るって、今の媛子じゃ仕方ないことだろ？」

「しかし、わしは神じゃ。神なら人に助けられてばかりでは、いかんのじゃ。なぜなら、神は常に人間に、何かを与える存在でなければならん。それでこそ、神と人が共に繁栄できる世になるのじゃ。神とは、そうあるべき。なのに、なのに……わしは、何も出来ておらぬ。それが、情けないのじゃ」

思いつめた表情で、歯を食いしばるようにして言葉を紡ぎだす媛子。その口元はわずかばかり、震えている。

一度も口をつけていないコーラの水面が揺れたように見えた。

「春臣には、いろいろ世話になった。不幸な偶然とはいえ、この家に急に転がりこんだわしを助け、外に放り出すことなく、ここに住まわせてくれた。こんな厄介もののわしを。いつもわがままばかりのわしを」

「だから落ち着けよ、媛子。おおげさなんだよ。忘れたのか？ 媛子をきちんと神の世に送り返してやるって、その日まで面倒見ることだ、約束したじゃないか。俺がやっていることは、ただ、当然のことだ」

そうだ。自分には彼女を元の世界に戻す方法を見つけるといいう重大な役目がある。春臣は半ば、自分に言い聞かせるように、そう説明した。これは当たり前のことなのである。

しかし、彼女の気持ちは収まらないらしい。

「じゃが、わしはそれに驕っておつたのじゃ。自分にとって安心できる場所が確保されたことで、大切なことを見失つておつた」

「……」

「こんな、頼ってばかりの生活では、神の世でも、仕事を任されな  
いのも、然るべきことじゃ。神、失格じゃ。わしは、わしは……春  
臣、お主の役に立ちたい」

いつになく健気な発言をした彼女は、潤んだ瞳で春臣を見上げた。  
そこには、いつも自分が欲しいものばかり要求する、傲慢な神の気  
配はない。

ただ本心から、神として、そして、春臣に助けられた者として、  
純粹に恩返しを決意している少女の顔だった。おそらく、今の彼女  
なら多少の命の危険など全く厭わないだろう。

ほろり、と彼女の眼からこぼれた涙が、白い頬を伝って口元まで  
綺麗な曲線を描く。しかし、彼女は凜然として、それを拭おうとも  
しない。

「春臣、それでもだめか？」

そんな彼女に、春臣は否定の返答は出来なかった。

なにより、彼女が自分の役に立ちたいなどと言ってくれたことが、  
嬉しかったのだ。彼女が元の身長であれば、その可愛らしさに危う  
く抱きしめていたかもしれない。

「いいよ。媛子が好きな仕事をすればいい」

「ほ、本当か？」

「ただし、条件がある」

春臣は背筋を伸ばし、目を閉じてそう宣言した。

「条件？」

「絶対に、自分ができること以上に無理はしないことだ」

「無理はしない……」

「条件はそれだけ、約束してくれるか？」

「うむ。約束じゃ」

ふふふ、と媛子が花のように笑う。

「さて、俺は食器を洗わないとな」

その後、落ち着いてコーラをうれしそうに飲んでいる彼女を身ながら、春臣は腰を上げる。

すると、媛子は食器洗いという仕事に興味を持ったのが、「わたしも行く」とぴよんと立ち上がった。

「見学希望か？」

「そうじゃ、わしに出来る仕事を見つけるには、どんな仕事があるのかをまず知らんとな」

「確かに、そうだな」

春臣は頷いて、エプロンをかけると、たくさんのポケットの中で胸元についたそれに姫子を入れる。

「おおう、快適なポケットじゃのう」

中で彼女がはしゃいだ。

「だろう？ 母さんのエプロンだ」

春臣はスポンジを持つ。皿を一枚とっては擦りつけ、リズミカルに汚れを落としていく。無駄な時間を省くために、練習した成果だ。そして、すべての皿が泡まみれになると、今度は水で洗い流す。

この瞬間が一番、心地いい。

白い皿の美しさに惚れ惚れする感じた。

しかし、それを見ながら、媛子はずぶやく。

「ううむ、なんだかこれは、退屈そうなお仕事じゃの。これはあまりやりたくない」

「しよっぱなから、やる気ないのな」

しかし、昔の自分と全く同じ感想に、春臣は苦笑してしまう。  
怪訝そうに媛子が見上げた。

「何がそんなにおかしいのじゃ？」

「……いつかやってみれば分かるさ」

「うん？」

「皿洗いの楽しみってやつにさ」

30 がんばりましたので。

「ただいま」

大学から戻った春臣が玄関の扉を開けると、すぐに上階から媛子の返事が聞こえた。

「おう、よつやく帰ったか！」

まるで帰宅を今か今かと心待ちにしていたような、嬉しそうな声である。姿は見えずとも、春臣はそれが分かった。

「あん？ やけに機嫌がいいな」

靴を脱ぎながら考える。

彼女の感情は声や表情に出やすい。上機嫌なことは間違いないだろう。

何かいいことでもあったのだろうか。

いや。すぐに心中で首を振った。

この家の中に一日中居て、すぐにでも春臣に報告したくなるような吉事があったならば、彼女は真っ先に電話を掛けてくるはずだ。それが、彼女に電話の掛け方を教えてからの常だった。

それが授業中であれ、食事中であれ、見境なく掛けてくるのだから、全く困ったものである。

だが、今回はその例ではない。そうとなれば、これはいったいどういった事情だろう。

しかし、春臣の推理は媛子からの催促で、停止を余儀なくされる。

「はるおみー、上じゃ、早く来い。部屋にすれば驚くぞ」

「分かった分かった、今行くから」

どうやら彼女は自分に見せたいものがあるらしい。大人しく従い、階段を上る。短い通路、勉強部屋の前で立ち止まった。心構えのために、ノックする。

「入るぞ？」

「おう、入るがよい入るがよい」

ドアノブを回す。押し開いたドアの隙間から、部屋の明りがこぼれ……。

ちゃぶ台に、媛子が座っていた。

「…………？」

首をめぐらし、部屋の中を瞬時に確認する。が、特に、彼女が何か持っているわけでも、部屋にありえないものが置いてあるわけでもない。

「どつじゃ、春臣」

しかし、媛子は満面の笑みで春臣を見上げている。

「どつじゃって、何が？」

「な、気がつかぬのか？」

「気がつくって…………うーん」



春臣はその場にしゃがみこむ。彼女の視線になれば何かいつもとの相違点を見つけられるかもしれないと思ったのだ。そして、ふと思う。

「あれ、何だか部屋が綺麗になって……」

「そうじゃ！」

「うわっ」

言いかけていきなり媛子が飛び跳ねたので、春臣は驚いて尻餅をついてしまう。

「わしが、このわしが、部屋を綺麗にしたのじゃぞ！」

「……媛子が？」

すると、彼女は肯定の意味で激しく首を縦に振る。

「うむ。いつも埃が舞い、小汚いばかりの部屋じゃったが、わしの力によってこの通りじゃ」

「余計な形容が癪に障るが、そうなのか」

確かに彼女の言葉の通り、いつも部屋の隅に溜まっていた埃は消えうせ、ところどころ汚れがあった畳も本来の艶を取り戻しているようだ。机の横で崩れかかっていた専門書や教科書の類も綺麗に整頓されている。どれも申し分なく片付いていた。

「ぶつむ」

春臣は低い体勢で周囲を見渡す。

すると、卓上の媛子が嬉々として飛び跳ねた。

「どつじやどつじや？ 何か言いたいことは無いかの？ あ、別にわしは、この部屋の掃除くらいどつつてことないのじや。何しろ神じやからの。ちょちょいと小手先捻ればこの通りなのじや。しかしのお主がこの部屋を見て、何かわしに言いたいことがあれば、その、何と言つか、感想があれば聞いてやるつぞ。な、なければなくてもよいが……いや、あるはずじや、あるはずじやろう？」

くるくると表情を変えながら、目をそわそわきよろきよろと動かす挙動不審の神様は、見ていて面白い。春臣はついにやついてしま

う。  
要するに褒めてもらいたいわけだな。それならそうと、素直に言えればいいものを。

「いや、本当にすごいな、媛子は。そんな小さな体でありながらこの広い部屋をこんなに綺麗に片付けちまうなんて、さすが神様だな」

春臣が言つと、媛子の顔がぱつと輝く。まるで喜びを発散させるようだ。

「そ、そうであろう？ わしは神様じやからの。のう、わしは役に立っておるか？」

「ああ、感謝してるよ。早速思いついた仕事をしてくれたわけだな。でも、その体で大変じやなかったか？」

彼女はノープロブレムじやと指を振る。

「部屋の掃除を自力でするのは大変じやが、榊の葉の力を借りて、少々神力にて物を動かしたり、汚れをふき取ればこの通りじや。大したことはない。うむうむ。わしが役にたったか……春臣は正直でよろしい」

「ははは、なるほどね。神の力を使ったわけか」

それで彼女より重たいものが移動している説明がつく。そう言えば、姫子が息を吹きかけるだけでトランプを動かしていたことがあったが、あれの応用といったところか。

神の力は花を咲かせるだけではないようだ。  
となると。

春臣はあることに思い当たる。

「そうだ、媛子。その力で自分の身長を伸ばすことは出来ないのか？」

褒めてもらったのがかなり嬉しかったのか、彼女は笑みを湛えて陶然としていたが、春臣の問いに振り返る。

「……身長を、伸ばす？」

「そうだよ。それが出来ればこの生活が少しでも楽になるじゃないか」

彼女の体は日に日に少しずつ成長し、今では二十五センチほどになっっていたが、最近ではその伸び代にも限界が見え始めていた。

だが、ここで身長を少しでも伸ばすことができれば、日常の自由度が増える。日々彼女が遭遇するいろいろな危険も少しは緩和されるはずだ。上手くいけばそれで彼女の本来の姿を取り戻すことも可能である。

「なあ、出来るんだろ？」

「で、出来ぬわけではないぞ」

彼女の様子はどうやらそのことを既に思いついていた顔だ。その

言葉には影の部分を感じる。

「え、じゃあ、なんでやらないんだ？」

気になって問う。

「じゃからの。自らの身長を伸ばす、自分の姿を変化させるということはそれなりに高度な技術なわけじゃ」

「高度な技術だと、媛子じゃできないことなのか？」

「そ、そうは言っておらん」

プライドを傷つけられたのか、彼女はふくれっ面になる。

「じゃあ、何でだ？」

すると、媛子は忌々しそうに榊の葉を摘んで説明する。

「高度な技術には当然、それ相応の力を消費する。つまり、力の消費量は高度さに比例して増えるのじゃ。しかしの、わしの体に貼り付けておるこの榊の葉は……」

「そうか榊の葉の限界量があるのか」

「うむ。その通りじゃ。わしは本来の力を取り戻せてはおらぬ身。

この葉による供給があつてこそ、神力を使用できる。しかし、姿を変える力を使用するには、この葉では到底間に合わぬのじゃ」

「どうしても？ 使う葉を増やせば……」

「いや、葉を複数枚同時に使用することも不可能なのじゃ」

彼女の声が手で払うように、春臣の案を却下する。それが理解できない。

「どうして？」

「つまりの、この世界でわしが葉を使って力を使用するとき、葉とわしの間には一本の線のようなものが通っておるようなのじゃ。ほれ、電話の回線、のようなものと思えばよい」

「ああ、分かる」

「簡単な話、わしはその回線をつなぐプラグを一つしか持っておらぬということじゃ」

「……なるほどな」

はあ、と春臣は大きなため息をつく。せつかく彼女を救ういい方法があったと思ったのに、あつという間に希望は霧散した。儂いものだ。

「そう、都合よくはいかないか」

「そうじゃのう、元の姿に戻るには、また違う方法を探さねばな」

少々残念そうに媛子は俯く。

春臣は綺麗になった部屋に寝転びながら、神棚を見つめた。いつもと変わらず、それはこの部屋に異質な厳格さを漂わせている。掃除をしているわけでもないのに、いつも汚れていないようだ。もしや、埃さえもその場所に落ちないよう、敬意を払ってるというのか。まったく。

あの神棚がなければ、姫子がこの世界に来てしまうこともなかったのに。

自分があの日、あんな神棚を拝まなければ、彼女がこの世界に縛りつけられ、悶々とすることもなかった。

春臣には、いつもと変わらないあの佇まいの社がなんとも忌々しいものに映った。

いっそ、消えてくれて、何かも戻してやればいいのに。

「春臣、何か不穏な目をしておるぞ」

気付かないうちに、目つきが険呑けんどんなものになっていたらしい。机から降りた媛子が顔を覗き込んでいる。

「え、ああ」

「神棚、か？」

「まあな。あんなものがなければよかったのって思うんだけど。今さらどうなることでもないよな」

「春臣は、そう思うのか？」

これは意外な言葉だった。それはまるで、自分は違うと言いたげな……。

「思わないのか？ あんなものがなければ……」

「確かに、このような歯がゆい事態にはならなかったかも」

その声は澄んでいて、まるで全てを受け入れているかのような諦め、いや、むしろつつすら喜びすら混じっているような感じだ。

「しかしの、わしはこう思うのじゃ」

「うん？」

「あれがなければ、わしとお主は出会うことはなかった。お互い住む世界が違う身じゃ。こんな異常事態でも発生しなければ、わしとお主は間違いなく一生関わりあいになることがなかった」

春臣は上半身を起こした。彼女が少々恥ずかしそうにしているのが見えたのだ。両手の指を絡ませ、ぼつりぼつりと話している。

「そう思えばの。一概にあれが、悪いものとも言えぬと思うのじゃ。神の世界の外、人間の世界において、お主のような人間に会えるなどと、以前のわしは夢にも思っておらんかった」

「それはこつちも同じだよ。実家を出て、一人暮らしを始めようとしたその矢先に、神様と同居することになるなんて、ありえないの十乗だ」

言いながら春臣は改めてその異常さ、奇跡の確率を思う。媛子が部屋の隅を指差した。

「そうじゃ、あれを見よ」

「なんだよ」

視線を上げると、そこには一ヶ月ほど前に書いた書初めが画びょうで壁に留めてあった。媛子の拙い文字と、自分の妙に力の籠もった文字。二つ並んでいる。

「おぬしの文字。で、あ、い、じゃの」

彼女がゆっくりと発音し、春臣もそれを理解し、頷いた。

世界にはそれはもうおびただしい人間が生活を営んでいるわけだが、その真つ只中、一人一人の人間は僅かなスペースの中で、たまに近くにいた人間と寄り添い、関わりあい生きている。

きつとどれだけ努力しようとも、この世のすべての人と知り合うには人生はあまりにも短いし、その中で、家族や親友、恋人のように深い付き合いをしようと思えば、もつとむずかしい。

しかしだからこそ、自分が生きて、誰かと、限られた人と出会う

というのは、それほど意味の濃いものなのだ。

春臣はそれをゆっくりと飲み込むように感じる事が出来た。

「神から見ても、この世は本当に不思議なものじゃ」

媛子は詩を詠むように言う。

「万物流転し、日々、何か生まれ変わっておる。昨日あったはずのものが、今日にはない。今日当たり前に受け入れられていたことが、明日には忌避される。物も人も価値も知識も、偏ひとへに同じ。そんなことが日常茶飯事じゃ」

「うん、そうだな」

「わしは……」

言いかけて止まる。

どうした、と春臣は首を向けた。

「そのように変わり、移ろいゆくこの世界で、お主と出会えたことを嬉しくおもっておるぞ」

そして、首を傾げるようにして微笑む。春臣にはそれがあまりにも優美に、そして愛らしく映り、思わず目を逸らす。

「あ、ああ」

「お主はどうじゃ？」

「……そりゃ、もちろん。神様と出会えるなんて、普通に暮らしてりやないからな。嬉しいさ」

言いながらも、気恥ずかしさに頬が紅潮するのが熱で分かる。喉が渴きそうだ。



いったい何なのだろう、この感じは。

まるで、恋人が会話をしているような雰囲気である。そのままイチャつきそうな、そんな感じ。

冷静になるために首を振る。

「どうしたのじゃ?」

「いや、なんでもない」

一呼吸置いて、

「……それでなのじゃがな」

急に媛子が改まったように言い出す。

「その、わしはこうして仕事を、おぬしのために部屋を綺麗にしたわけじゃが、これからも出来る範囲で家を掃除していこうと考えておる。しかしの……」

「しかし?」

「仕事には、それなりの報酬というものがあるじゃろう?」

すると、彼女の口の端が小生意気ににやりと吊りあがる。どうやら、部屋を掃除したのはそれも目的の一部だったらしい。

「報酬、ね。でも媛子は俺のためにやってくれたんだろ?」

「もちろんそれもある。わしの思いからすれば九割はおぬしのためじゃ」

彼女は否定しない。

「しかしの、わしとてこの世界で生活しておる者。郷に入らば郷に

従え。仕事をすれば報酬をもらえるのがこの世界の常ならば、わたしもその例外ではないと言いたいんじゃないのじゃ」

「ご高説賜り光栄ですね、神様」

なんと都合のよい慣用句の解釈か。どちらかと言えば、マイナス面の強いその言葉を逆手に取るとは。

やはり結局、神様は見返りを求めるわけだ。

しかし考えてみると、掃除を仕事と媛子は言っているが、それは正確には家事であり、家事は大半が報酬に結びつくとは言えないものである。媛子はおそらくそれを知らないのだろう。

冷静に考えれば、春臣には反論できる余地がある。が、何も言わず、彼女を眺めていた。

「ふふ、もつと崇め奉れ、そして、この神にうまい食べ物を献上せよ」

「いつも媛子は食べ物だな。太るぞ」

からかいながらも、春臣の言葉には嫌味な棘はない。

それは正直、春臣が本当に彼女に感謝していたためだ。彼女の意識が変わったことは、何にせよ、これからの生活が少しでも楽になるということ。それは間違いなく目標への一つの前進と言っているだろう。それを喜んでいる。

しかし、媛子は口を尖らせていた。

「そんなことはない。前にも言わなかったかの？ 食べ物は消化されるわけではないのじゃ。じゃから太る問題はない。それから補足するに、食べ物わしの心に潤いを与えるすばらしきものじゃ」

「へいへい」

「そうじゃのう、今日はアイスクリームが食べたい気分じゃ。イチゴの入ったやつじゃのう」  
「……仕方ないな。仕事の報酬だ」

春臣は息を吐きながら片膝について立ち上がった。

「今から近くのコンビニにも行ってくるから、ちょっと待ってるよ」  
「ああ！」

すると、媛子が呼び止めるような声を出す。首を向けると、彼女は足元で服の裾を握っていた。

少し揺すぶるが、口元を結んだまま頑固にも放さない。話を聞け、ということだろう。

「何だ？」

「わ、わしも連れて行ってはくれぬか？」

「媛子を、外に？」

春臣は言葉を失いかけた。

「無理ではないじゃろう？」

「……まあ、そうだけど」

「じゃあ、良いではないか」

突如、そんなことを頼んできた彼女に春臣は驚いていたのだが、その後の言葉にさらに二の句が継げなくなる。

「よし、これからお主と夜のデートじゃな！」

### 31 デートで神様？

媛子を入れるためのポケットがついた上着を羽織りながら、春臣は澄ました顔で机に正座している彼女を見た。

先ほどの発言のその先を話すことなく、黙って春臣に服に忍ばされるのを泰然と待っている。

「分かってるのか？ その意味」

彼女はくいと頭を上げ、ぽかんとして解せない顔だ。

「意味、とな？ わしはおぬしのその言葉が示すところが分からぬ。

何の話じゃ」

「何のつて、さ、さっき媛子が言った事だよ」

そのものずばりで言ってやってもよかったのだが、どうにも小恥ずかしく、そう指摘した。服の袖に手を通す。

「わしが先ほど言った事？ はて、何と言ったかの？」

彼女はとぼけているのか、本気なのか、釈然としない態度で首を傾げる。

もしかすると。

春臣は思う。

この神様はその意味をきちんと理解していて、自分のこの当惑の反応を楽しんでいるのだろうか、と。

こうして、自分の発言が思い出せない振りをして、春臣にそれを言わせたいわけだ。

もしそうならば思う壺だが、このまま何も言わないわけにもいかない。

「……で、デートだよ。デート」

なるべく表情を見せないように俯く。

「おう、そう言ったかもしれない」

「媛子、俺とデートするって、意味分かってるよな」

「ううむ。理論は」

媛子は額に皺を寄せる。

「理論って、仰々しいな」

「なあに、ただ男女が二人でどこかに出かけるといっやつじやろう？ 遊園地に行ったり、レストランに行ったり、ショッピングをしたり……」

「認識は間違っていないけど」

しかし、そこには大抵恋愛感情というものが付随しているわけである。それほどお気軽なこととも言えないのだが。

しかし、媛子は相変わらずきょとんとしていた。

「お主とコンビニまで出かけるといっのも、そういう部類に入るのではないか？ まあ、わしはこの通りきちんとした姿ではなく、お主のポケットに入れられた状態ではある。しかし、それはデートと呼んでも差し支えないのではないじゃろうか」

「うーん」

「違うか？」

「……まあ、いいけど」

どうやら、やはり媛子はきちんと言葉の意味を理解していないようだった。

春臣はふつと息を吐く。

いきなり大胆なことを言い出したと思っただが、そこはまだこの世に慣れていない神様の発言と見るべきだったようだ。断片的な情報だけでデートの表面面だけを知っているらしい。

「何か隠しておるのか？」

「いや、別に」

「なら、問題ないの。それでは出発じゃ」

外はまだ完全に陽が沈んでいない夕暮れ時だった。斜陽が家々の瓦を照らし、小金色の輝きを見せている。見上げると一つ、クジラのような雲が浮かんでいて、優雅な空の散歩をしているようだった。

春臣は一応自宅の鍵を閉める。椿が話していたのだが、この辺りは空き巣などの被害など起こったことがないらしく、ご近所はこぞってノーロック派だということだが、用心に越したことはない。

そこで、ふと縁側のガラス戸を施錠していたか確認していないことに気付いたのだが、右ポケットの媛子のはしゃぎ声が覆いかぶさってきた。

「春臣！　これが家の外か！　こちらから見るのは初めてじゃ」

「そうだよ。でも、別に二階からでも見れるだろ？」

「何を言うか、全然別じゃ。空に出る月を望遠鏡で眺めるのと、実際に宇宙船で向かうのでは全く違うじゃろっ」

何かテレビを見た影響なのか、彼女は熱っぽく語る。

「まあ、それも一理あるか」

実際にはそれとこれではまた違う話だとは思つが、そういうことにした。

首肯して、ポケットに収まっている媛子に目を落とす。何かと飛び跳ねている彼女が、そのまま落ちてしまわないかと気になったのだ。

「言っておくけど、周りに人がいるときは静かにしてるんだぞ。ほら、この中で小さくなって」

すると、教えようとする春臣の指を媛子は払いのける。

「神に指図するでない。それくらい心得ておる。今はただ外の景色に興味津々なだけじゃ」

左様ですか。

まあ分かっているのなら、問題はない。春臣は歩き出す。

今日は朝からずっと講義続きだったので、ノートをとった肩が重い。散歩はその分、気分転換になりそうだった。軽く口笛を吹く。

しばらくすれば、すぐ横手に椿の家が見えてきた。春臣は指差す。

「ほら、あそこが青山の家だよ」

「……椿の家か、うむ」

媛子はポケットからひよっこり顔を出して、その家を眺める。ま

るで品定めをしているようだ。

「わしらの家に比べると幾分か立派じゃの」

「まあな。家族で住んでるんだから当然だよ。俺たちの家は俺と小さな媛子しかないんだから、あれで充分だって」

しかし、なぜか媛子は不服そうな顔で椿の家を眺めている。

「椿のくせに、神より大きな家に住むとは、生意気な」

「生意気って、そういう問題じゃないだろう」

「ときに春臣は、大工仕事など出来ぬのか？」

「さりげに俺の家を増築させる計画を企てたな？」

「なあに、心配するな、わしが保証する。おぬしは大工に向いておる」

「これほど説得力のない神のお告げは初めてだよ」

呆れて半眼で媛子を見る。

「でも、そうになると、媛子は広くなった分、部屋の掃除が大変になるぞ」

「む、確かに言えておるの。よし、やはり、お主は大工仕事は向いておらんかったようじゃ。転落死の相が出ておる。辞表書け」

春臣の顔が能面のように無表情になる。彼女の発言はいつも適当で、都合のいいところが多いが、そんなことばかりしていると神としての品位を落とすことに繋がるとは思わないのだろうか。そもそも神とは本来こういうものなのだろうか。

媛子と話していると、春臣の中での神のイメージが揺らいでいるのが分かる。



「もう、さっさと行ってさっさと帰るぞ」

少々面倒になった春臣はくるりと進むべき方向に向き直り、足早に進み始める。たかがコンビニにアイスを買に行くだけなのだ。余計な時間は取りたくない。

すると、媛子は不満の声を出す。

「ええ！」

「なんだよ。普通に歩いていれば、風景を観察できるだろ？」

「まあ、そうじゃな」

「それに、あんまり媛子と喋ってるのを周りの誰かに見つかったら面倒だろ」

いくら周囲に人の姿が見えないとはいえ、傍から見れば春臣は独り言を喋っているようなものなのだ。誰が見ても挙動不審極まりない。最近は何かと物騒なニュースがテレビで流れていることもあるし、下手をすれば通報されることもあるかもしれない。

もちろん、笑い事ではない。

媛子を連れ歩くことで近所に妙な噂を立てられてしまえば、まだ一人暮らしを始めたばかりの春臣としては、近所の人間に心の壁を作られ、隔絶された存在ともなりうる。

「しかし……」

媛子はまだ何かを言いたいようだ。

「何だよ」

聞くと、彼女は眉を曇らせた。

「わしはこうして初めて家の外に出たのじゃぞ。もう少しゆっくり歩いて楽しませてくれてもよいではないか」  
「……」

これには春臣、閉じ込められていた彼女の気持ち理解できた。姫子は別にひきこもりたくて自分の家にいるのではないのだ。一ヶ月、春臣は自由に外出できたが、彼女は違う。異空間の呪縛によって、二階の部屋から出ることすら、つい数日前まで叶わなかったのだ。

春臣は牢屋に入れられたことはないが、ずっと同じ場所に留まらなくてはいけないことは精神的に到底楽と呼べるものではないだろう。

いつも代わり映えない景色に嫌気が差し、鬱屈とした気分逃げ出したくもなかったかもしれない。それを考えれば、彼女が外に出られた喜びっぷりも分かる気がする。

「そうか、ごめんな。媛子の気持ちを考えてなかったよ」

謝罪すると、彼女は素直に頷いてくれた。

「分かってくれればいいのじゃ。春臣は物分りが良くて助かるぞ」  
「はあ、さいで……」  
「それに、わしには他の理由もあるしの」  
「他の理由？」

するとなぜか声を小さくし、頬を染めるところささめく。

「……折角のデートなのじゃぞ。お主と一緒に外を歩いておるのに、すぐに終わってはつまらぬではないか」  
「なっ！」

何を言い出すんだ、と春臣は言いたかった。どういつつもりだ、とも言いたかった。

でも、言葉が詰まって、代わりに咳き込んだ。

媛子が驚いてポケットから身を乗り出した。

「大丈夫か？ 春臣」

「平気、だよ。心配するな」

動揺をつよがりの言葉で隠し、春臣は前進した。

同時に、田んぼに沿って並べられた頼りない電柱に明かりが点く。まるで、ふらついて足元を見誤るなよ、と言われているようだった。

試されていたのだろうか、と春臣は前を見据えながら思う。

媛子が自らの台詞に、どのように反応するのかを。

目を遠くの山にやりながら、媛子の言葉の真意を探した。彼女の言葉にどれほどの本気がある？ 何かの冗談か？ 自分は遊ばれているのか？

頭の中を疑問が駆け巡る。

視界が混乱でじんわりとぼやけた。

神でも、人を好きになることがあるのか？

彼女が、自分を好きになることが？

息を吸い込んだ。吐いた。

いや、今は止める。

春臣の心の奥から思考を静止する声が響く。考えるな、考えるな。深く考えるんじゃない。何かの間違いだ。彼女はそもそもデートの意味を理解していなかったんだぞ。だから、ありえない。彼女の

言葉に深い意味なんてない。

でも。

でも、意味を知らない振りだったら……。あれが演技だったら？  
馬鹿な。

重みのある右ポケットが意識を引き戻す。春臣ははっとする。媛  
子が引つ張っているのか？

もぞもぞと動くものを見ようと……。……。

「え？」

すると。

なぜか、

途端に視界が暗転する。

振動と、刹那の鈍痛。

春臣は何が起こったのか、分からなかった。

気がつけば、自分は尻餅をつき、目の前に自転車が倒れている。

その少し後方で、少年が倒れていた。見たところ、春臣と同年代  
の少年のようだ。しゅっとした細い顔つきで、茶髪。英語のロゴが  
入ったデニム地のキャップ。それが瞬間、目に映る。

そうか、ぶつかったのか。

脳の思考が停止していてそれが分かるのに時間がかかった。

「大丈夫ですか？」

春臣は起き上がり、すぐさまその少年を助け起こす。

「あ、ああ」

彼は立ち上がりながら、体についた埃を払った。

「すみません。俺が余所見してて」

「いや、大したことないって」

「怪我はないですか？」

「ハツハア、大丈夫って。俺はこんなときのために頑丈な体をしてんだよ」

彼は快活に笑って、袖をまくり力こぶをみせた。どうやら、本当に怪我はないようだ。春臣は彼の身体を観察をする。

「どうした、ふらついてたみたいだけど。何か悩んでたのか？」

妙に明るい少年は肩を掴んでそう聞いてくる。

春臣はため息を吐く。今はそちらに注意を向けてはダメな気がした。

適当に答える。

「いや、ちょっとぼうつとしてたんですよ」

それでふいに視線が下を向いて、春臣の目が道に落ちた紙袋を捉えた。もしかして、この少年の自転車から落ちたのだろうか。

「あの、あれ」

春臣が示すと、彼は「うん？」と目を向け、

「ああ、弟たちへの土産だ。いっけね」

彼は駆け寄り、それを拾い上げる。

「ごめんなさい。中身、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫、大丈夫。少しくらいつぶれてても、問題ないって」

彼は親指を立て、それから、颯爽と自転車に飛び乗った。そして、ハンドルとブレーキに異常がないことを確認すると、

「それじゃ、前に気をつけなよ」

と春臣の返事を聞く前にペダルに足をかけ、そのまま走り去ってしまった。

呆然と立ち尽くす春臣。

が、すぐに右ポケットが動いているのを感じ、我に戻る。

「媛子！」

もしかすると、転んだときにつぶしてしまっていたのではないかと嫌な予感がよぎったが、彼女は健在だった。

「春臣、じゃから危ないと引っ張ったのに」

ポケットから顔を出し、ぷはーと息を吐き出す。どつちら、ぶつかる寸前、自分を引っ張ったのは彼女だったらしい。

「媛子も怪我ないか？」

このときはかりは周囲のことを気にせず、春臣は自分のポケットを覗き込んで訊ねる。

「わしは大丈夫じゃ。お主は？」

「俺はこれくらいなんでもないよ。それより媛子が無事でよかった。マジで神様を踏み潰したら洒落にならないよな」

ほっと胸を撫で下ろした。

「大げさじゃな。わしはお主に潰されると思ったたら、力を使ってその場から逃げておる」

「そうか。でも、本当によかった」

すると、媛子が怪訝そうに目を細める。自転車で走り去った少年の方角を見つめ、

「しかし、今の少年」

と呟いたのだ。これは意外だった。

「今の人がどうかしたのか？」

「いや、ちよつと感じたのじゃ」

彼女の眼光が鋭く光る。並々ならぬ気配だ。

「……何を？」

神がそう言うのだから、何かただならぬことに違いない。もしかすると、何か彼に良くないものでもとり憑いていたのだろうか、と春臣は身構える。

しかし、彼女が言ったのは、

「な、ん、甘、い、お、菓、子、の、匂、い、じ、ゃ」



### 32 闇夜の侵入者 1

コンビニで目当ての物を購入した後は、春臣たちは特に寄り道もせず、帰宅することになった。

というのも、媛子が春臣の体調を心配したためで、

「気分が優れぬのであれば、最初に言うておけばよいのに。無理をするから人にぶつかることになるのじゃぞ」

ということだ。

彼女に余計な心配を与えた春臣としては、申し訳ない一方で、胸中において、その体調不良の原因は媛子にあるのだけれどとぼやいていた。

それはさておき。

こうして、媛子の初めてのデート(?)が終わったわけである。

春臣は未だ胸の内でざわめく腑に落ちない思いを抱えたままだったが、とりあえず、何事もなく終わったことに安心していた。

媛子の自分への感情に対する答えは保留することにしたのである。今無理に彼女に問い詰める必要もないと思ったし、春臣自身、いろいろと考えをまとめる必要があると思ったのだ。

急を要することではないから、どんと構えていよう。

そして、それよりも先に彼女が自らの世界に帰れる方法を模索するほうに優先が向けるべきなのである。春臣は拳を握る。

と、意識を逸らす努力をしているのだが、やはりそこは現実。上手くはいかない。

自宅の居間では、媛子が買ってきたばかりのアイスを口に運んでいる。その様子をちらちらと眺めながら春臣は落ち着かなかった。

「うむ、旨いのう」

何の屈託もなく言う彼女の無邪気な表情に、春臣は軽く動揺しないでもなかつたが、視線を逸らし、話題を探した。

買ってきたソフトクリームを口に入れる。ひんやりとした舌触りが自分の熱を吸い取っていくようだった。沈黙が訪れ、手持ち無沙汰に思いついたことを言う。

「そう言えば、さっきぶつかつた人」

自転車に乗っていた少年のことだ。

「なんじゃ？」

「いや、姫子がお菓子の匂いがしたって……」

「そうじゃな。確かに匂いがしたぞ」

「俺は何も感じなかつたけどな」

やはりあの時は気が動転していたせいなのか、匂いに対する感覚が鈍くなっていたのかもしれない。

しかし、そのもう一方でもう一つの可能性もある。媛子が特殊な存在であることだ。

「神様つて、鼻がいいのか？」

「……また藪から棒な質問じゃの」

彼女の目つきが胡乱になる。

「別に脈略がないわけじゃないだろう」

「いや、そうじゃが、なんだかお主……」

その視線が鋭く刺さる気がした。

「無理に話題を取り繕っておらぬか？」

凶星を衝かれ、一瞬目の前が暗くなりかける。

「そ、そうじゃないよ。じゃあ、媛子は他に話したいことがあるのか？」

「そうじゃのう……初めてのデートの感想とかはどうじゃ？」

思わぬことに顔からソフトクリームに突っ込んでしまいそうになった。寸でのところで避けたが、変に思われたかもしれない。慌てて春臣は指を立て、逆に質問した。

「そうだ。媛子は他に服が欲しくないのか？」

「おい、わしの質問に答えておらぬぞ」

「この前さ、大学で青山が話してたんだよ。媛子のことだ。着物以外のものは持ってないのかって」

少々反則気味に強引に話を変えると、媛子は齒噛みをしたが、少しして唸りながら答えた。

「そうじゃのう。神の世界におれば服の替えもあり、着替えもできたが、まあ、この世界に来てしまえばそんなことは出来ぬの」

「服、汚れないのか？」

「汚れないわけではないが、基本的にわしは神じゃからの。この衣服ももちろん神の力によつて作られており、汚れはすべて自動的に浄化されるのじゃ。じゃから、それほど着替えの必要はない」

媛子は服の裾を持ち上げながら、見てみよと春臣に示した。顔を近づけてみると、遠目にはよく分からなかったが、見えるか見えな  
いかの瀬戸際、小さな金色の粒子がゆっくりと立ち上っていた。ど  
うやらそれが彼女の言う「浄化」ということらしかった。

「へえ、そういうものなのか」

「じゃが、春臣。おぬしの言う他の服というのは？」

「青山がな、小さい頃から持っていた着せ替え人形の服があるから、  
媛子に着させてみたらどうかって、さ」

「着せ替え、人形？」

そうか。彼女にはただでさえこの世界の知識が乏しい。春臣はそ  
う思っ  
てきちんと説明すべきかと思っ  
たが、面倒になり、

「ともかく、媛子サイズの服があるってことだよ」

と結論だけを言った。

「ほう、なるほど」

「で、もしよければ青山が作るってさ」

「作る、とな。椿はそんなことが出来るのか？」

媛子が目を見張った。神からしてみれば珍しいことなのだろうか。  
春臣は講義中に隣で椿が自慢げに話していたことを思い出す。そ  
のせいで講義の内容はいつも以上に入っ  
て来なかったが、まあ、い  
い眠気覚ましにはなった。

「なんでも、昔から裁縫が好きで、いろんな物を作るらしいぞ。ぬ  
いぐるみだったり、服だったりな」

「……何！ となると椿は神か！」

媛子は頓狂な声を出す。

そんな馬鹿な。どうしたらそんな結論になるんだ。

「とういか、神はそっちだろう!」

「は、そうじゃった。取り乱してしまっただか」

「それはまた尋常じゃない取り乱し方だな。自分の地位を忘れるなよ」

「しかし、それは耳寄りな情報というやつじゃな。どれ、春臣。その椿の手並みを拝見しようということ、一着、服を縫ってもらえぬか?」

「どんな服でもいいのか?」

「わしも神とはいえ、この世界の衣服に興味がないわけではない。

どんなものでも構わぬぞ。わしに似合うのであればの」

彼女はそう言って、くるりとその場で回転した。

承知いたしました。春臣はそれを見て仰々しく頭を下げ、想像を試みた。

他の服を着た媛子か。

あまりイメージが湧かないが、もちろん見てみたいという気持ちもある。明日辺りに青山に頼んでおくか。

「そう言えば、服の汚れで思い出したのじゃがな」

「うん?」

「今日、部屋を掃除しておって見つけたのじゃがな」

すると急に媛子が真面目な顔で言うので、春臣は体勢を整えた。彼女が部屋の隅を指差す。

「その小箱に見つけたものが入っておる。見てくれ」

彼女が言つとおり、部屋の隅に小物入れのための引き出しが引き抜かれた状態で置かれている。彼女が妙な調子で言うので、もしかすると、ねずみか何かの死骸かもしれないと持ったが、実際は違つた。

「これ、は……」

小箱の中に入っていたのは、いつか見たロザリオだ。小さな珠が繋いであり、その先端に十字架クロスの飾り。春臣はそれを手にとって改めて眺めてみる。手に乗せてみた。白く輝くそれは神への祈りが込められた無垢なる光の結晶にも思える。

媛子がここにやってきた夜。神棚の裏に隠されていたものだ。確か、話ではこの首飾りがこの異空間を作り上げる原因にもなったのだっけ。

「すっかり忘れてたけど。この部屋に転がってたんだな」

「そうじゃ、本の中に挟まっておったぞ。わしは素手では触れられぬから、力で移動させたのじゃ」

「いったい誰のものだったんだろう？」

「お主の祖父ではなかったのか？」

「じいちゃんはクリスチャンじゃないよ」

否定する。

春臣は昔の祖父を思い出した。そもそも宗教に興味のない人間だったと思つた。

しかし、それは祖母と一緒に暮らしているころの祖父であり、ここに来てから何かに感化され、神というものに興味が出たのかもしれない。

れない。

この部屋にある神棚がそれを象徴している。

が、その上で、他の宗教にも手を出すようなことはしないのではないか、と春臣は思う。祖父はそんないい加減な人間ではない。

と、いうことは。

導かれる答えは他人の所有物という考えだ。

「この町にじいちゃんやんの友達がいる、その人がクリスチャンだったとか？ その人がここに来てこれを忘れていったのかも」

「春臣、そうじゃとして、神棚の裏にそれが置かれていた理由には繋がらぬと思うぞ。まるで見つからぬようにそれを隠す意図があったようじゃ」

「うづん、言われてみればな」

忘れて帰ったのであれば、もっと分かりやすいところに置かれていたはずだ。神棚の裏など、そこに何らかの意図がないという方が不自然である。

「どづいつことだろう……」

春臣に恐ろしい予感が閃く。

「まさか、異空間を作り上げるために、仕組まれていたんじゃ！」

媛子は目を細めてすぐさま否定する。

「いや、そうではないと思うぞ。このような異常な状況、意図して生み出せるものではない。神であるわしが言うのじゃ、信頼せよ。

異空間が作られたこと、それがあの場所にあったことは別の話じ

ゃ」

そうになると、考えれば考えるほど分からない。春臣としてはもはやお手上げだった。奇妙な場所に、奇妙な置かれ方をしているロザリオ。そう思うと、触れているだけでずしりと重みが増すような、気持ちの悪いものに見えてくる。春臣は小箱にそれを戻した。

「この話は止めにしないか？ これ以上頭の中をかき回されても答えなんて出ないって。特に今日はな」

「どうして今日は、なのじゃ？」

「それは、媛子が……」

言いかけて、口を塞いだ。

媛子とデートをしたことに混乱しているなどとは言いたくなかった。

「ともかく、風呂に入ってくる。姫子はテレビでも観てるよ」

すぐさまごまかして、ソフトクリームの残りを平らげた。



## 32 闇夜の侵入者 1 (後書き)

作者のヒロユキです。

最近、この物語を書いてきて、やはり、コメディというジャンル分けは不適切であったのではないかと思いはじめました。

ちょっとシリアスな要素が多い気がします。近いうちにジャンルをファンタジーに変更するかもしれませんので、読者の方にご報告しておきます。

### 33 闇夜の侵入者 2

突然、耳を引っ張られる痛みに、春臣は目を覚ました。

「なんだ？」

そう呻いて目を開けると、周囲は暗闇である。ということはまだ朝ではないということだ。上半身を布団から起こし、枕もとの時計を見ると、蛍光色で光る針は午前一時を示している。

「夜中、だよな」

自分を起こした物の正体を確かめるため、電灯の紐に手を伸ばしかけた。と、聞こえてくる声に気がつく。

「春臣、はーるーおーみ、明かりをつけるでない」

足元、薄暗くて判然としないが、媛子がいるようだ。僅かな月明かりが次第に彼女の輪郭を映し出す。目が慣れてきた。

どうやら彼女は自力でベッドである缶の箱から抜け出したらしい。最近では微弱ながら力を使えるようになったため、少しなら宙を安全に浮遊できるということらしかった。

が、春臣は困ったように腕を組む。

表向きには移動範囲も広がり、利便性があるのだが、それによって真夜中に悪さをするようになっては、とてもじゃないが看過できない。

「寝込みを襲うとは、媛子も卑怯だな。俺の耳を引きちぎろうとしたのか？」

中腰になり、枕もとの媛子と視線を合わせた。

「違うわ、馬鹿者。少し静かにせんか」

口元に指を置く彼女は、どうにもそわそわとしている。

「静かに？ どうして？ それに、こんな夜中に俺を起こして何の用だよ。明かりを点けるとダメなのか？」

「じゃから、静かにせよ。何か、悪い予感がするのじゃ」

「悪い予感？」

春臣は目を擦る。さすがに神である媛子のその発言は聞き捨てならない。人間では感じることの出来ない、不思議な力を神が感知しているのだとすれば、下手に逆らわず、言う通りにするべきだろう。

が、彼女はその先の詳しい説明はせず、耳元に手を当てた。周囲の物音に耳をそばだてている。表情がふと、固くなった。

「やはり」

「何が、やはりなんだ？」

「家に、誰かが侵入してある」

「……！」

緊張が走った。深呼吸をし、肩ひざをつく。春臣ももつと慎重に耳を澄ませた。すると、彼女の言う通り、階下から謎の物音が聞こえてきた。猫やねずみではない。

誰かが歩き回っている！

「強盗か？」

「何じゃ？ それは物盗りのことか？」

「そういうもんだ」

「この家にか？」

「そう考えるのが妥当だろう。普通なら、家に入るときは玄関のチャイムを鳴らすのが常識だ」

「……じゃとすれば、その強盗とやら、ハズレの家を選んだの」

「どうして？」

「ここには春臣の貧相な財産しかない」

「……」

確かに全く持ってその通りなのだが、この状況で言われると突っ込めばいいのか迷ってしまった。

しかし、それにしても強盗だとすれば、どうやってこの家に入ってきたというのだ。戸締りはきちんとしているはず……。

「近所の椿の家ならば少しはマシなものがあるように」

すると、彼女のふいの言葉を弾みに春臣の思考の足跡が蘇る。

椿が言っていたことだ。この辺りは空き巣などの犯罪が起こったことがない。近所は皆ノーロック派ということ。

そして、今日の午後、媛子と外出した際、縁側のガラス戸を施錠したか確認していなかったという事実に行きつく。

「しまった……」

なんとというミスだろう。

いつもならば、そんなことはしないのに。

全く、媛子がデートなんて言い出すから。

が、今はそんなことを後悔している暇はない。

「春臣。どうする?」

媛子の真剣な顔。

春臣は閉口した後で、思考をめぐらした。どうすればいい。ここに留まっただけでも、遅かれ早かれ、強盗はやってくるだろう。

「春臣、良い事を思いついたぞ。電話じゃ、電話で助けを呼べばいい。テレビを見た。ええと、ひやく、とーばんじゃ」

「そうか。ナイスアイデ……」

言いかけて、その提案の盲点に気がついた。

「ダメだ」

「どうしてじゃ?」

「この部屋の電話の子機の使用状況はこの部屋の真下、誰かがいる居間の親機のディスプレイ画面に表示されるんだ。俺が通話しているらば、すぐにバレる」

「う……そうか。それでは無理じゃな」

不運なことに、携帯電話も階下で充電器に繋がっぱなしだった。

これで連絡の手段は絶たれた。春臣たちは孤立無援だ。

と、すれば、こちらから打って出るか。武器になるものを持って、強盗を返り討ちにしてやろうという計画である。

しかし、それにはかなりのリスクが伴う。乱闘になれば自分が無傷で済むという可能性は極端に薄くなるだろう。下手をすれば大怪我だ。

されに、相手は堂々と民家に侵入してきている人間だ。それなりに武器となるものを所持していると考えていい。さらに言えば、相手の人数も分からない。四五人もうようよしていれば、到底春臣は太刀打ちできない状況だ。

春臣たちの状況は限りなく不利である。冗談ではなく、殺されてしまう可能性だってある。

が、ここで待っていても、事態が好転することはない。

「春臣？」

「媛子、媛子はここにいてくれ」

「な、なんでじゃ？」

男なら腹をくくれ。きっと祖父ならそう言うだろう。

「俺が下に様子を見てくる。危険だと思っから媛子はここにいてくれ」

「一人で行く気か？」

「ちよつと様子を見に行くだけだ。心配するなよ」

「何を言うておる。心配じゃ。わしも連れて行け」

彼女はいやいやと首を振る。

「それは有難いが、正直、今の媛子じゃ何も出来ないだろう？ 強盗を撃退できるか？」

「そ、それは出来ぬ」

「だろ？ だから、大人しくここにいてくれ。媛子を危ない目に会わせるわけにはいかないんだ」

不純物のない透明な瞳で春臣は彼女に訴えかけた。手の平は間違  
いなく汗ばんでいる。怖くないと言えは嘘になるが、このまま逃げ  
出せる状況でもない。

ならば、自分で自分に湯を入れるのだ。

「春臣……」

「俺は冗談ではなく、本気で頼んでるんだ。この家の主は俺。敵が  
侵入してきたら立ち向かうのが、俺の役目だ」

感情を抑えるためか、彼女は口元を服の袖で隠す。その様子には  
戸惑いと逡巡の影があった。

しばらくしてから、口を開いた。

「……ならぬ」

「何でだ？」

「よいから、机の上の榊の葉を取れ」

「え？」

すると。

しゅるり。

媛子は服の袖から長い紐を無造作に手繰り、取り出した。それが  
彼女の手に絡み、ぴんと張る。

「確かに、わしは神として本来の力を使えん。家に侵入した無法者  
を捕らえることは無理じゃ」

しゃりん。

今度は逆の袖から、彼女愛用の神楽鈴を取り出す。それが力強く鳴った。

「しかし、そやつがお主を攻撃をしてきたとき、一、二度は攻撃を防ぐことぐらいは出来る」

そう言う彼女の顔つきは強く引き絞られた弓のような瀬戸際の覚悟があった。くっと結んだ口元は血色がよく、つややかである。

「ほ、本当か？」

春臣は彼女に榊の葉を手渡す。そうになると、かなり心強い。

すると、彼女は手馴れた様子で、葉を背中に立てかけ、紐を回し、胸元で強く結ぶ。

きゅるり。

「ひばりのやまづめ緋桐乃夜叉媛は、お主とともに行く！」



### 34 闇夜の侵入者 3

「もしもの時は、俺に構わず逃げろよ」

物音を立てず、部屋の戸を開けながら、春臣は胸元のポケットに入った媛子に注意した。

「その気になればここからでも逃げられるんだろ？」

夕方、自転車とぶつかったとき、彼女がそう言っていたのを思い出したのだ。

「そうではあるが、神が人の子よりも早く逃げるといふのは、神として沽券に関わる話じゃ。そう簡単に尻尾を巻くつもりはない」

彼女はしゃりしゃりと鈴を鳴らしながら、白目で春臣を睨んだ。

やはり、彼女の神としてのプライドは高い。しかし、春臣はその言葉に心強さを感じる一方で、

「ちょっと音を立てるな。下に響くだろ」

と注意しているように、不安に思う気持ちもあつた。媛子はこの世界における空気の読み方をまだ知らない。彼女を連れて行くことで、自分に不利な状況になるのならば、意味がないのだ。

「とにかく、なるべく静かにしてくれ」

指で彼女の頭をポケットに押し込み（彼女は何をすると憤慨した）、小足で壁に背中をつけて、階段に歩み寄った。

神経が張り詰めているせいか、いつもは気にならない板が軋む音も余計に大きく聞こえる。中腰になり、細目で階段の最上段から、下を覗いた。自宅がまるで戦場にもなった気分だった。

「あれ？」

小さく、春臣が驚く。

「どうしたのじゃ？」

ポケットの端に手をかけ、媛子がよじ登っていた。彼女の目に階下の居間から漏れる電灯の明かりが映る。

「強盗さん、明かりなんて点けてるぜ」

「何を言うておる。今は夜じゃぞ。明かりを点けねば、周囲が見えぬではないか」

媛子が奇異の眼差しを春臣に向ける。

「いや、もちろんそれはそうだよ。だけど、相手は人の家に勝手にしのびこんでる立場の人間だぜ。明かりなんて不用意につけたら、住民に気付かれるかもしれないじゃないか」

もし自分が強盗ならば、住民からの抵抗は出来る限り防ぎたい事態だ。後で脅して縛るなりするにしても、侵入を先に気付かれ、防御の体制をとられては後々面倒である。そのため、バレないように注意を払い、迅速に住民の自由を奪い、速やかに目的を達成することがベストであると思うが、今回はどうにも違う。

春臣は頭を捻る。

どう見ても、無用心すぎる強盗だ。

先ほどだって、春臣は気がつかなかったものの、媛子に不審な物音を気づかれているし、部屋の明かりまで点けている。さらに先ほどから、居間でごそごそと動いているだけで、一向に移動する気配がない。

やる気があるのか、とすら疑ってしまう。これではあまりに杜撰ずさんだ。

「春臣、止まれ」

階段に足を下ろそうとして、媛子が静止を促した。

「何だ？」

「なにやら声が聞こえる」

「まさか、複数犯か」

春臣が足を戻す。これは想定していないことだった。もしかすると、ここにいる自分をどう処分するかを話し合っているのかもしれない。そう思っただけ身震いする。

が、媛子は簡単に否定した。

「いや、一人のようじゃ」

「は？　じゃあ独り言か？」

春臣は心底拍子抜けする。独り言、なんだよそれ。住民に声を聞かれたら、一発でバレるだろうが。本来ならば、携帯で通報されて終わりだろうが。

呆れて頭を掻き毟った。

強盗、お前、絶対やる気ないだろ。

「何か悩んでおるようじゃ。見つからない、と」

「どうやら相当お馬鹿さんらしいからな。探し物なら自分の家でやれってんだ」

ずいぶんと緊張感が緩みそうになるものの、用心して、音を立てないように階段を下りる。廊下をすり足で進み、細い明かりが漏れている居間の襖を指した。

ここまで来ると、媛子が言っていたように何者かの声も聞こえた。ぼそぼそとつぶやいている。本当に独り言のようだ。

強盗なんて大胆なことをするわりに、ずいぶん内向的な人間である。

春臣はそつと襖の前に立ち、隙間から中を覗こうとした。媛子もぞもぞとポケットにもぐりこむのが分かる。乱闘になったときの準備をしているのだろう。

が、そのときだった。

「くそ、本当にあいつらどこに仕舞ったんだ！」

強盗が苛立った声を出し、畳を不機嫌に歩いてくる音が聞こえた。襖の前で硬直する春臣。

まずい。どうやら相手は春臣たちの方へ向かってきているようである。逃げるか、とも思ったが、すぐさま隠れられそうな場所もない。いったいどうする。

しかし、もう無駄だった。

襖が誰かによって開けられる。

「うわっ！」

突然飛び込んできた眩しい光に春臣は目を細める。侵入者が目の前に立っていた。

「なんだ！」

これは相手が叫んだ。どうやら男で間違いないようだ。目の前に人がいたのが予想外であったのか、驚いている。

「お前、いったいどこから……」

入ってきたんだ！ そう怒鳴ってやりたかった。しかし、

「あんた、誰だ？ ここで何やってる！」

先に言ったのは男だった。

それはまるでとんかちで頭を殴られたかのような衝撃だった。人に家に忍び込んでおいて、何をぬけぬけとそんなことを。

「それは、こっちのセリフだ！！」

怒鳴りながら目を開けて、相手の姿をしっかりと見る。ふざけるんじゃない。しかし、さらに罵声をぶつけてやるうと思った口が開いたままで塞がらなくなった。

なんと、彼は春臣と面識があったのである。

「なんで、何で？」

「あ、あんた……」

ポケットの中でびくりと媛子が震えた。彼女にも彼の正体が分か

ったのだろう。

「ええと、何で？」

上手く呂律が回らなくなった春臣は、夢を見ているような気分になる。

目の前の男は間違いなく、夕方、自転車に乗り、自分とぶつかった少年だったのだ。

### 35 ロザリオの真実（前書き）

作者のヒロユキです。

以前申し上げていたことですが、作品のジャンルを「ファンタジー」に変更しました。

キーワードのタグには「コメディ」がありますので、検索には支障ないかと。一応ご報告しておきます。

### 35 ロザリオの真実

「じいちゃんの知り合い？」

春臣は眉をひそめながら、不審の念を表した。

ちゃぶ台の向こう、春臣と向かい合っているのは勝手に家に忍び込んでいた少年だった。目をきよるきよるとさせながら居心地悪そうに座っている。

彼は先ほど、春臣と鉢合わせになり、とても驚いていたようだったが、春臣が以前ここに住んでいた老人の孫だと知ると、途端に静かになった。

自ら、暮野木犀くれのもくせいと名乗り、以前までここで春臣の祖父と付き合いがあったのだと言う。

しかし、春臣にはそれが真実であるのか、疑いの視線で見ている知り合いであろうが、他人の家に忍び込み怪しげなことをしていた人物だ。敵意はないようだが、気はまだ許せない。

「だから、嘘じゃねえよ」

彼は肩をすくめる。

「いろいろと世話になってたんだよ」

面倒くさそうに言って、目を伏せる。

「世話になってた、ねえ」

「あんたは知らなくて当然だろ。ここにいなかったんだから」



「まあ、そうだけど。それを証明できるか？」  
「じいさん本人がいないんじゃない、無理だろ」  
「……」

確かに、今さら確かめようのないことだった。

「でも、本当なのか？」

「うん？」

「その、じいさんが死んじまってたっていうのは」

春臣は、静かに頷く。

どうやらこの暮野という少年は、春臣の祖父が死んでいたという事実を今の今まで知らなかったということだった。数ヶ月前からこの家が空き家になっていたということは知っていたそうだが、てっきりどこかへ引っ越したと思っていたそうだった。

そういえばと春臣は思い出す。

椿も祖父のことを知っていたが、祖父が死んだことは知らなかったことだ。

考えてみれば、祖父は息を引き取る少し前までここから遠い実家の近くの病院に入院し、ここには一度も戻らなかったのだ。そのため、この辺りの人々はその事実を知らない人間が多いのだろう。

その点を考慮すれば、この暮野という少年が言っていることは真実のようだった。

何よりもこの肩を落とした落胆ぶりは演技のようには見えない。

「残念だな。全く知らなかったぜ。弟たちにきちんと話しかかないとな」

「弟？」

「ああ、俺の弟。まだ小学生で、双子なんだが、よくあんたのじいさんには遊び相手になってもらってたんだぜ」

「へえ……」

初耳だった。祖父がここで生活していたころのことなど詳しく知らないのです、つい、春臣は身を乗り出す。しかし、ポケットの中の媛子が身じろぎし、それを見られてしまっではまずいと、慌てて座りなおした。

木犀は懐かしむように話す。

「あのじいさん、手先が器用だったからよ。竹とんぼとか、独樂じゆくとか、パズルなんて作ってくれたこともあつたぜ」

「じいちゃん、そんなことを」

「弟たちは今でもそれで遊んでる。気に入ってたんだ」

「……思えば、俺もそんな経験あるな」

彼の言う通り、祖父が手先が器用で、その上、物作りに対する熱意はすばらしく、実家の倉には春臣が幼い頃に作ってもらった綺麗に色づけされた木馬が眠っていたりするのだ。

「よくあれに乗って遊んだっけ」

ふいに鼻元に古い木の匂いが蘇った気がした。

「少しは信用してくれたか？」

ため息をつくように、彼が訊いてきた。いい加減疑われてうんざりしているようだ。

「ああ、もう疑ってないよ」

「それは朗報だ」

「でも、弟さんたちに話すんだらう？　じいちゃんが死んだこと」

「うん。もちろんそのつもりだが、まあ、ショックを受けるだらうな。一時期なんて毎日遊びに行つてたくらいだから」

「そうなんだ。心苦しいんじゃないか？」

「問題ねえよ。弟たちだつてどうしようもないことにいじけるような奴らじゃないからな」

「たくましいんだな」

春臣がつぶやくと、木犀があつと口を開けた。何かを弾みに思い出したようだった。

「どうした？」

「今思い出したが、前に一度言つてたな。わしにも俺ぐらいの孫がいるつて」

春臣の目が大きく見開かれる。

「え、俺のことを話してた？」

「ああ」

「な、なんて言つてた？」

すると、木犀は目を細め、天井を眺めながら言う。

「確か」

「確か？」

「あいつは俺に比べて、まだまだひよっこだつて」

「……」

春臣はむっとして、閉口する。確かに、男としてまだまだけど。まあ、祖父らしい辛口な一言だった。

「はあ、それじゃあ、そろそろ話しを戻そうか？」

春臣は机の上に肘をつく。意外にも祖父の話に花が咲いてしまったので、重要なことを忘れるところだった。

「どの辺りまで？」

「あんたが、なんで、俺の家に、忍び込んでいたのか、ってことだ」「ああ！なるほど」

どうやら、彼は当初の目的をすっかり失念していたようだった。それだ、と春臣の顔を指差す。

「で、どうなのよ」

「実は探し物をした。以前、ここに来たとき、弟たちがあるものをここに隠したらしいってことを最近知ってた。それを取りに来ただけ。昼間に来たらさ、人の気配がないし、見事鍵がかかって」

それは当然だろう。春臣はいつも施錠には気を遣っている。

「空き家だったってことを思い出してさ。で、ご近所の方に聞いたんだけど。この家を管理しているのが、杉下さんらしいって聞いてな」

「ああ、以前まではな」

春臣はここへ最初に引越してきた日のことを思い出す。康夫か

らそのことを説明されて、あの杉下老人の家に向かったのだ。春臣は杉下老人が漂わせていた妙な気配は今でも思い出すことが出来る。しかし、その一方で、どこの近所に聞いたのだから知らないが、どうやら春臣がここに引越してきたという事実を知らない人間もいるらしかった。

考えてみれば友人となった青山椿以外の人間とは、道で出会えば挨拶をする程度なため、当然と言えば当然なのだろう。

今度からはきちんと名を名乗って挨拶をしなくては。近所付き合いは大切だ。

ふと見ると、木犀が表情を曇らせているのが見えた。

「どうかしたのか？」

「いや、あの杉下家っていうからよ。なんだか嫌でさ」

「何が？」

「ああそうか。まだここに来て一ヶ月だったな。知らなくて当然だろう」

「というと？」

春臣はそう訊いた。あの老人に関するのなら聞いておきたい。すると、彼は声をひそめながらこう言った。

「あの杉下家つてのはこの辺りじゃ、あんまりいい噂を聞かないんだよ。この地域のことを裏で牛耳ってるって」

「……！」

「昔から権力のある一族なんだよ。お偉い武将の家系だかなんだか知らないがな」

これはそれなりにショックな事実だった。祖父が懇意にしていた老人の一家が、そんな黒い噂がある一族だったとは。

「知らなかった」

「まあ、それはいいさ。おいおい耳に入ると思うし。でも、ぺらぺら喋るなよ」

「あ、ああ」

動悸を抑えながら、頷いた。

「とにかく、それを聞いた俺はわざわざ事情を話しに杉下家に出向くつもりはなかった。小さな貸しでも、作ると何されるか分からなかったし」

「まさか、だからこんな強盗紛いなことを？」

春臣は今度は呆れた声を出した。なんて行儀の悪いことだろう。

「まあな。昼間に忍び込んでたら、近所に見つかるとかもしれないし、真夜中ならこの辺り、出歩く人間はいないからな。それで、ちよいと家の周りを回ってたら、縁側の戸が開いてたんだ」

それは間違いなく春臣の落ち度だった。よりによってこんなときに鍵をかけ忘れるとは。

しかし、謎はそれだけでは終わらない。

「じゃあ、あんたが、強盗紛いなことまでして探してたものって何なんだ？」

「そのこと、ええと、あれだよあれ」

困ったように指を差されるが、春臣には分かるはずもない。残念

だが、それだけは自力で思い出してもらうほかない。  
と、彼が歓喜の声を上げる。

「そう、そうだ。ロザリオ！」

「……ロザリオ？」

戦慄が走った。それと同時に、悪寒もする。

まさか、この人物からそんな言葉を聞くことになるなんて、予想外も甚だしことだった。ずしりとめりこむようなあの感触が手のひらに蘇って、春臣はズボンの裾をぐつと掴む。

すると、媛子がポケットの中で皮膚を小突いてきた。

分かってる。分かってるったら。

今はびっくりしているだけだ。

「ロザリオだ。どうやら弟どもが家から持ち出したらしくってさ。

この家に遊んでで隠してたらしいんだよ。宝探しごっこか言っ  
な  
な

「……」

「ほら、ロザリオって綺麗な首飾りだし、いかにも宝物っぽいだろ  
？」

すると、呆然としている春臣に気がついたのか、木犀が目の前で  
手のひらを上下させる。

「おーい、起きてるか？」

「あんたの、ものだったんだな」

「は？」

「ちよっと待っていてくれ」

春臣はすぐさま、二階に上がり、媛子が見つけていたロザリオを小箱から引つ張り出してきた。待っていた木犀にそれを見せ付ける。

「これか？　このことか？」

大切な確認の作業だったが、結果は一目瞭然だった。案の定、木犀は手を叩いて春臣の手からロザリオを受け取ったのだ。

「おお！　まさにこれだ。すまねえな。見つけててくれたのか」

喜び乱舞する木犀の傍らで、複雑な思いで春臣はあぐらをかいて座った。

これで、間違いない。あまりにも、体中の力が抜けてしまうような真実。

こんな、こんな理由だったのか。

あの場所に、ロザリオがあった理由。

事実は小説より奇なり、とは言うが、まさか、子供のいたずらだったなんて。

その無邪気な行いによって、拳銃には弾が込められたのだ。

そして、引き金を引いたのは、自分。

そのせいで、媛子は……。考えると、腹の底から行き場のない怒りがこみ上げてきた。

「これ、実は死んだばあさんの形見だよ。ばあさんカトリック教徒



で、これを後生大事に持ってたんだ。それが無くなって家は大騒ぎだったんだが、まあ、見つかってよかったぜ」  
「そうか、よかったな」

彼の言葉が、まともに耳に入ってこないことを感じていた。耳元でテレビの砂嵐が聞こえているかのように、うざったく思える。そんなことはどうでもよかった。

「なんだ？ 腑に落ちないって顔してるな」

「うん、いや、ちよつとな」

徐に、春臣はその場から立ち上がった。

「ごめん。ちよつとここに居てくれ。トイレに行ってくる」

「あ、ああ」

それだけ言って、勢いよくばたんと戸を閉めた。

まるで、今聞いたことすべてを、拒絶するかのように。

### 36 春臣の苛立ち

トイレの中に入り、声が外に漏れていないことを確かめ、春臣は鍵を閉めた。気持ちを落ち着けようと、一度深呼吸をする。

それから、ポケットの中で小さく動く物体を指で小さくつついた。

「聞いてたか？」

ワンテンポ置いて、

「……うむ」

媛子が返事をした。

「その、何ていうか、大丈夫か？」

「大丈夫じゃが？」

彼女の声は意外にも平然としたものだった。怒りが籠もっているわけでもなければ、失望に沈んだか細い声でもない。

自分との温度差に気がついたが、春臣は話をつづけた。

「まさか、子供がおいていたんてな」

目を閉じながら言う。

その暗闇の中で、椅子を踏み台にし、神棚の裏にロザリオを隠す子供の姿が浮かんでくる。きゃいきゃいという無邪気な笑い声まで聞こえてきそうだった。

「そうじゃな。まあ、そういうこともあるつよ」

相変わらず、彼女は行ったことのない外国の地の天気予報を聞くように、あっさりと受け流した。

「冷静なんだな」

思わず、そう指摘した。

「いまさら、どういう過程を経て、あの結果になっていたかを知ったところで、意味のないことじゃろうが」

「それも、そうだが」

けれど、やはり、複雑な気持ちだった。納得のいかない気持ちだった。押し込んだはずのやりきれなさがこの混乱に乗じて顔を出している。

媛子がこうしてここにいる事態を招いた一つの原因があつて、それがこんなにも単純で、仕方のないことで、いや、仕方がないわけではないが、それをどうにか、どうにかして防げなかったのか、と春臣は思うのだ。

「くそ……」

「春臣」

「分かつてる。今さら、この状況を何もなかった頃に戻せるなんて思っていないさ」

春臣は唇を噛んだ。

でも、なんで。なんでこんなにイライラしてるんだ。

春臣の内なる声が叫んでいる。

こんな、ことがなければ、媛子はいまでも不自由なく神の世界で暮らしていたんだ。

そして、やはり思い出すのは、そのきっかけをつくったのは自分という覆しがたい、事実。くそ。くそ。くそ。

俺は媛子を。媛子のことを……。

春臣ははっとして、我に帰る。

なんだ？ この感覚。

気持ちが揺らいでるな。

「はるおみ」

すると、まるでどこか春風が吹き込んだように、穏やかな声が聞こえた。

「え？」

「本当に、おぬしは優しい男じゃの」

彼女は目を閉じていた。

「俺が、優しい？」

よく分からない。自分の中にあるのはそんな穏やかな気持ちではなく、それとは正反対のもの。荒々しく尖って、ぶつかって傷つけている負の刃なのだ。

しかし彼女は言葉が理解できていない春臣を見ながら、続ける。

「わしの今までの不自由や苦勞を慮って、苛立っておるのじゃろう？」

「それは、まあそうだよ」

「でも、それはおぬしがそこまで気に病む必要のないことじゃ」  
「え？」

彼女はぼんと胸を叩く。

「わしは神じゃぞ、馬鹿にするな。小さくてもそれくらいの苦勞は背負えるのじゃ」

「媛子……」

「それに、もう言ったであろう？ わしはお主に出会えてよかったと。そう思っておると。数ある人生の中の出会い、その只中でお主とめぐり会えたことは幸福なことなのじゃ」

小さな手がそつと服を掴み、たつぷりと頬ずりを始める。言葉のいらぬ、その彼女の愛らしい仕草が、春臣の胸に何かをそつと宿らせた。不穩がすつと消えていく。

「……媛子がそう言うんなら。よかった」

春臣は、わだかまりなく自然にそう言えたことに気がついた。

「どつじゃ、落ち着いたか？」

「ああ、ごめん。取り乱したりなんかしてさ」

「謝るな、春臣。正直に言えば、わしだって本当のところ動揺しておる」

「そう、なのか？ 分からなかったな」

そうは見えない。彼女はいつもどおりに見える。

「なに、おぬしがわしより先にその気持ちやを代弁してくれたからの

……」

それに対し、彼女はこう囁いたが春臣の耳には届かなかった。

「何か言ったか？」

「ううん、なんでもないぞ」

春臣はこめかみの辺りを指で掻きながら、手持ち無沙汰になり、話を切り上げた。

「そっか。それじゃあ、そろそろ戻るか。暮野ってやつも、俺が戻らなくて困ってるかもしれないし」

「あ、それじゃが」

途端、媛子が言って、春臣は動作を止める。

「何だ？」

「あの男。もうロザリオなどというものはどうでもいいのじゃが。少々、問題がある」

「問題が？」

「眠っておるわしらをこんな真夜中に起こしたことじゃ」

「……ふむ」

言われてみれば、今はもうすでに深夜の二時を回っていた。

「他人の静かで安らかなる睡眠を妨げることはそれなりに罪なことじゃ。悲しいかな、それは神として、そう易々と看過できぬ事態での」

彼女はいかにも心外といった様子で、わざとらしくため息をつく。

「……はあ」

「そこでじゃ、春臣」

媛子の顔はすでに何かよからぬことを企んでいるようで、いやらしい笑みを浮かべていた。神楽鈴を一闪、振り下ろして、こう言い放つ。

「わしは神として、奴に天罰を下そうと思っ！」

### 37 お菓子な信者（前書き）

作者のヒロユキです。

今回でようやく暮野木犀編が終わりました。な、長かった。椿編よりも、疲れました。どうして、こう、計算しているものよりも長くなってしまったのでしょうか。書いても書いても終わりが見えませんでした。

まあ、それはさておき、暮野木犀完結編です。ごゆっくりどうぞ。



### 37 お菓子な信者

居間に戻ってくると、暮野木犀は座布団を枕代わりに頭を乗せ、ふてぶてしく横たわっていた。

これには春臣としても、かちんと来た。人の家に、それもこんな夜中に上がりこんでいながら、この傍若無人の態度はどうしたものかと拳が硬くなる思いだった。

彼は春臣が入ってきてても構わず、まるで我が家であるかのように、寝転んだまま手を振る。お願いだ、正座くらいしろ。

「おう、戻ってきたか。体調が悪そうだったが、大丈夫か？」

「ああ、問題ないよ。どうやらいつものことらしいからな」

「いつものこと？」

木犀が机の向こうで首だけを回転させ、こちらを見る。

「ああ、実はこの家さ。出るんだよ」

「でる？ まさか幽霊とかベタなこと言っつんじゃないだろうな。俺はそれくらいじゃびびらねえよ」

「……違うよ」

襖を閉めながらおもむろに言った。あぐらをかいて春臣は座る。

「じゃあ、何が出るっというんだ？」

「そりゃあ……」

少し間を置き、

「神様さ」

「かみさま？」

意味が分かっていないのか、木犀はおうむ返しをした。

「神様だよ」

「髪様か？ 神、おまえは髪に敬称つけるのか？ おおげさだな。大丈夫だって、まだまだ禿げないから」

余計な心配をするな。それから、素直に文字を解釈してくれ、どうしたらそんなひねくれた言葉になる！ 脳内文字変換ソフトが壊れてるのだろうか。

よっぼどそう叫んでやろうかと思ったが思いとどまった。

すでに作戦は遂行中だ。黙っていなくては。

すると、ポケットの中の媛子が息を吸うのが分かる。

「暮野木犀」

「あん？」

「暮野木犀」

「……なんだよ」

どこかから響いてくる声に、木犀は春臣を指さして「お前か」と聞くが、首を振って否定した。彼は眉間に影をつくり、怪訝そうだった。

「これがかの有名な、髪様か？」

「神様だ。イントネーションが違う」

「暮野木犀！」

リアクションの薄い木犀にしびれを切らしたのか、媛子がぴしゃりと言う。

「は、はい！」

「わしが見えるか？」

迫らず、焦らず、超然と媛子が語りかける。やはりこういうときの彼女はなんと言っても神様だ。言葉だけで自然と人間を従えさせるような、そんな高貴な威厳を感じさせた。

「い、いえ。あのう、どちらに？」

「わしはこの家に住まう神なのじゃ。頭が高い！ とりあえず土下座しろ」

「は？」

彼は困惑し、きよろきよろと神の姿を探していたが、やがて素直に、綺麗な土下座した。春臣は目が点になる。

世の中には物事を信じ易い人間はごまんというと思うが、彼はその中でも筋金入りなのだろうか。普通、正体不明の声から命じられたことを、迷いなくこんなにもすぐに実行しようとは思わない。それを見て、媛子も滑稽だと思っただらしく、くっくと小さく笑っている。

「暮野木犀」

「な、何ゆえ、私の名をご存知なのでしょう？」

彼は律儀に額を畳みの上につけるほどまで、土下座をしながら聞いた。

「わしは神じゃ。人の名など、一目見たただけでお見通しじゃ」

「は、ははあ。ほ、本物かよ」

「どうやら、木犀は哀れにも、本気で信じたようだ。媛子が声を低くし、再び威厳たつぷりに言う。」

「わしはこの家に鎮座しておる、緋桐乃夜叉媛と言う名の神じゃ。」

「わしはこの家に住まう者の守護という役目を負つておる。それはそれは尊き、また賢き偉い神なのじゃ」

「は、ははあ」

「お主のような人の子など、小指の先で地平線の向こうじゃぞ。分かつたらわしに逆らわず、言うことを聞くのじゃ」

「わ、分かりました」

「ふむ、中々に聞き分けはよいのう」

媛子は笑いを堪えているようだ。小刻みな震えが胸元の辺りから伝わってくる。

「有難き幸せでございます」

あぐらをかいたまま二人の会話を聞き、春臣はいつたい今自分の目の前で起こっている状況は、いつたい何なのだろうと、馬鹿らしくなった。

そもそも何で木犀は、こんなにも僕台詞しせが上手いんだろうか。その点も気になるところである。

「木犀よ。お主は罪を犯した。こんな真夜中に不届きにもわしらの家に侵入し、この俗世をさ迷う哀れな子羊、榊春臣を無意味に恐怖に慄かせた」

「そんなに慄いてねえよ」

春臣がつぶやく。

「しっ、静かにするのじゃ。お、オホン。木犀よ、どう思う？ それ人は人として、あつてはならぬ行為ではないか？」

「仰られるとおりでございます。髪様」

「これ、神様じゃ。か、み、さ、ま。言いくいのか？」

「はい、普段『かみさま』などという言葉を使用しないため、少々不慣れなのでございます」

そんなことを大真面目に言う木犀に春臣はつんのめる思いだった。いやいや、むしろ、髪様のほうが不慣れだろうが。

「では、お主には特別に緋桐様、と呼ぶことを許そう、以後、わしのことはそう呼ぶがよい」

「よ、よろしいのですか？ ひ、緋桐様」

「お主は緋桐教、最初の信者じゃ。わしがじきじきに任命しようぞ。言うておくが、これはとても名誉なことじゃ。一生の誇りとするがよい」

「ははあ、有難き幸せでございます。緋桐様」

「……」

そのやり取りに、春臣は呆れて口が開いたままになってしまった。またしても媛子の悪い癖である。新しく知り合った人間を自分の信者にしようとするのだ。

椿のときも確かそうだった。

無理やりやめさせてもいいが、このまま事の成り行きを観察するのも面白いため、そのまま傍観することにした。

「して、木犀よ。お主は菓子好きか？」

媛子が話を変える。突然、神の口から菓子などという単語が飛び出

したために、木犀は驚いたようだ。

「お菓子、ですか？」

「左様、おぬしからはなんとかくわも芳しき甘い砂糖菓子の匂いが漂ってくる。相当な甘党と見た。わしの鼻はごまかせぬぞ」

「は、さすが緋桐様。なんでもお見通しなのですな」

「そうであろう、そうであろう。もっと褒めよ、あが崇めよ」

「しかしお言葉ながら、わたしは特に甘党というわけではございません」

彼は額を畳みに擦りつけながら首を振る。ざりざり。

「なに、では何ゆえ菓子の匂いがするのじゃ？」

「はい、実は私、町の小さな製菓工場でアルバイトをしておりますて、きつとそこでの作業中、匂いがうつってしまったのでしよう」

「な、なんと。そういうわけであったか。とんだ早とちりであったの」

媛子が驚嘆の声を出す。おそらく彼女のことだから、彼に頼んで菓子でも貢がせようとしたのだらう。しかし、その目論見は失敗したようので、春臣はうすら笑う。

が、木犀は媛子が何を求めているのか察知したようで、こう言うてきた。

「緋桐様、緋桐様。もしかして、お菓子がお好きなのですか？」

「お、おお、その通りじゃ。人間界の食べ物ではあれが一番上手いのう。特にチョコレートなるものは天下一品に値するぞ」

「それでしたら、私、お力になれると思われませう」

それを聞いて彼女がポケットの中で飛び跳ねる。

「なに、それはどういうことじゃ？」

「はい。その製菓工場に勤めておりますと、時々、製品とならなかつた不良品のお菓子が出てきます。じつは私はそれを時々、弟たちに分け与えるためにもらってくるのですが、もしよろしければ、緋桐様にお持ちいたしましょうか」

「そ、そんなことがあるのか!？」

春臣には聞き覚えがあつた。

いわゆる、ワケあり商品というやつだろうか。最近はそのようなものがブームになっているという話を聞いたことがあつたのだ。不良品などは、多くは捨てられてしまう商品であるため、販売者も捨てるよりは欲しい人間に売ったりあげたりする方が、お得なのだろう。

「そんなことがあるのです。緋桐様に献上するものでございますので、綺麗な製品が最上とは思われますが、そちらのお菓子でも、味は製品のものと同色がないということでございます。その証拠に、我が弟たちはいつもそれを喜んで食べております」

「な、なんということか。お主は神か！」

「失礼ですが、神は緋桐様のほうであるかと存じますが」

木犀が春臣の代わりに冷静なツッコミをみせた。

「は、しまった。つい取り乱してしまった」

どうやら、媛子はお菓子の妄想に放心していたようだ。ほっぺたをつねっている。

それにしても、この神様、取り乱すのは趣味なのだろうか。春臣は思う。

「緋桐様さえよろしければ、次に製菓工場でそれをもたらした際には、こちらのお宅へ一部をお持ちいたしましょう」

木犀が恭しく提案すると、媛子は喜びの声を上げた。

「それはまことか。木犀、おぬしは中々によい男じゃのう。さすがわしが信者一号に任命しただけはある。ならば、その菓子をわしに持つてくるがよい、いつでもよいが、なるべく早くせよ」

「ははあ」

すりすり、すりすり、木犀がまたしても畳に額をこすりつける。

尻を高く上げ、地面を這うカタツムリのようなようだった。傍から見れば無様なこと、この上ない。

「では、<sup>おもて</sup>面を上げよ、木犀」

「はい！」

「今日はもう帰ってよい。天罰を下すか迷っておったが、菓子のでそれは帳消しじゃ。よいか、以後、同じ過ちを犯すでないぞ」

「恩情あるお言葉、心より感謝いたします。この木犀、緋桐様のお言葉を胸に刻みつけておくことにしました」

そして、大仰にも彼は深々とお辞儀をすると、ゆっくりと後ずさり、縁側のガラス戸を開け、再び丁寧に一礼し、去っていった。足音が小さくなり、消える。

と、突然に媛子が噴出<sup>ふきた</sup>して笑った。

「く、くく、くっ、ワツハツハツハ」

「ふふ、ふ、ハハハハハ」



堪える理由がなくなった春臣も同じように、風船が破裂するかのごとく突発的に笑い始める。抱腹絶倒。身体を捻らせながら、春臣は寝転んだ。笑いの連鎖が後から後から押し寄せて、おかしくておかしくて、なかなか終わってくれなかった。

時計の針はもう二時半。

こんな時間に、これほどの大笑いをしたのはきつと生まれて初めてだった。

世界中の人、ごめんなさい。こんな時間に、こんなにおかしくてごめんなさい。

春臣は心のなかで連呼する。

でも、それくらい馬鹿馬鹿しいことだった。

面白すぎて、アホらしくて、春臣は目頭につっすら涙が出ているのを感じて拭った。

「ハハハハハ……」

「フフフフフ……」

そうしてどれくらい経ったか、ひとしきり二人で笑った後で、春臣は座りなおした。

「まさか、こんなに上手いくとはのう」

「ああ、暮野の奴、あそこまで本気で信じるとは思わなかった」

そして、そう言ったきり、なぜか言葉が続かなくなった。あれだけ笑った後の反動なのか、息をするだけで精一杯な気がした。充分時間が経過して、春臣はようやく言葉を紡ぎだす。

「はあ、はあ、ああ疲れた」

「……」

「ああ、もうこんな時間だ。明日は寝坊必至だな」

「……」

「そうだ、聞いてなかったけど。明日の朝飯、晩飯の残りでもいいか？」

「……」

「……おい、さっきから少しは返事しろよ」

そしてふと媛子を見て、春臣は息を止めた。彼女は自分のポケットの中で、すやすやと小さく寝息を立てていたのだ。

「う、ううん……」

服を布団だと思っっているのか、ぐいぐいと引っ張っている。そんな彼女を見て、春臣は小さくため息を吐いた。

「ったく。世話のかかる神様だぜ。いったいいつの間に寝たのやら  
まあ、いいか。春臣はゆっくりと彼女を起こさないよう、階段を  
上がる。

「今日はいろんなことがあったしな。疲れるのも無理ないだろう」  
部屋に入り、いつもの場所に彼女を寝かせる。そして自身も敷いていた布団の中に入り込んだ。電灯の明かりを消し、ゆっくりと溶けるように睡魔に誘われていった。こうして、二人の一日が終わる。

しばらくして、カーテンの隙間から月の光がのぞき、柔らかく、横たわった二人を照らし出す。

すると、眠ったままの媛子の顔が、ひっそりと微笑んだ。

### 37 お菓子な信者（後書き）

忘れておりましたが、作品の評価をしてくださった方、ありがとうございます。  
この場を借りてお礼申し上げます。

38 番外編 椿と双子 1 (前書き)

作者のヒロユキです。今回は番外編です。

一応申し上げておきますが、今回は媛子や春臣は出てきません。椿が主人公ですので、その点をよろしく願います。

うーん。  
ううーん。

思わず、背伸びしちゃいます。

お日様の光とは、どうしてこんなにも気持ちいいのでしょうか。  
どうしてこんなにも幸せな気分になるのでしょうか。

いつまでも、いつまでも、こうしてごろごろしていたい気分です。  
ふわりと香るのは爽やかな野辺の緑。

頬の辺りをくすぐっているのは、多分、柔らかいホトノケノザなのでしょう。

耳を澄ませば、のどかな鳥の声。

遠くから、からころころから、小気味いい川の音も聞こえてきます。

ああもつ、寝返りうってみよ。  
ごろり。

ああ、もっかいいい気持ちや。

でも。ええ加減、起きひんとあかんかなあ。

そろそろ目を開けてみましょ。

いえ、それはダメや。

そこにはきつと辛い現実が待ち受けているのです。

だって、うち、目を開けても開けへんでも、緊急事態だからなのです。

こんなものきなことをしていて緊急事態？  
読者の方はそう思うかもしれませんが。

でも、緊急事態だからこそ、うちはこうしているしかないのです。  
れっといつとびー。

ビートルズは歌います。

なすがままに。あるがままに。

そうなのです。こういふときは空から見守ってくれてる神に祈る  
しかありません。

だって、うち。

迷子なんやもん。

そもそもの発端については、ここで言及したところで、あまり意  
味がないというか、むしろとても情けないように思われます。

なぜなら、うち自身がちょっととした思いつきで、家を出る際、

「今日は、未知なる領域に足を踏み入れても、なんだか迷わへん気  
がする！」

と、そこはかとなく信憑性の欠片もない直感に、我が身をゆだね  
てしまっただけだからなのです。

例えば、誰かに誘拐されて、見知らぬ土地に下ろされたり、UF  
Oに連れ去られて、脳内の記憶データをごっそり抜き去られたとか  
いうのであれば、まだ申し開きのしようがありますが、残念なこと  
に今回の例はそれらに該当しません。

ただ、事実だけを申せば、自分から進んで知らない道を歩き、頼まれてもないのに、方向を見失い、途方に暮れた上で、のんびんだらりとその場に寝転がっているのです。

「ごめんなさい。」

「うちはあかん子です。」

「お母さん、もう一度おはぎ食べたかった。」

「お父さん、いびきうるさいとか言っでごめんな。」

「うちに内蔵されている残念な方位磁石は、ぐるぐると回転するばかりで、同じ道を何度も何度も通っています。ああ、もう帰れません。」

「そこで、うちはふと重要なことを思い出します。」

「せや。榊君、貸してた授業のノートを返してもらってないわ。」

「明日そのノート要るのに。」

「どうないししよう……あ。」

「帰られへんねやつたら、そもそも返してもらえんか。」

「ああ、よかった。安心や。」

「こっん。」

「ふわっ！」

「うちは額に何か当たった痛みを感じました。これにはさすがに驚いて目を開けます。寝転がっていた草の上に何やらT字型の棒が落ちていました。」

「なんや、これ？」



一応、噛み付かれないかを確認してから（必要なんやで）、うちはそれを手に取りました。とても軽くて、プロペラのような作りをしています。

「ああ！ これ知ってる」

思い当たる映像が浮かび、うちは指を鳴らします。

「竹とんびや！」

「……竹とんぼだよ」

背後から幽霊のような声が聞こえて、うちは「ひゃあ！」と驚きました。振り返ると、誰かの影がそこに、うちを見下ろして立っています。

小学生くらいの男の子で、くりくりとした目をしています。呆れた目をしたまま、しゃがみこんできました。

「お姉ちゃん、まさかのボケっぷりだね。いわゆる、全米が震撼つてやつだねえ」

「あ、あう……」

「どうしたの？ 恥ずかしすぎて声も出ない？」

「に、に、に……」

「んじん？」

「人間やあ……！」

うちはそう叫ぶと興奮のあまり、その子に抱きついてしまいました。うれしさのあまりさらにすりすりと頬ずりしてしまいます。

ああ、これが人のぬくもり。これが、うちがこの数時間求めていた、生あるものの肌触りです。

「な、なああ！　ちよつとちよつとお！」

男の子はうちの腕から抜け出そうとじたばたしています。

「に、兄ちゃん、大丈夫！？」

叫び声が聞こえました。

顔を上げると、どこにいたのか、もう一人目の前に少年がいたようです。小さな影が覗き込んでいます。

「も、もう一人おったんかあ」

「いいから、放せえ！」

「もがいても逃がさへんでえ。もうこんなところで一人ぼっちはごめんや」

「あ、あんた変態かよ。お、弟、た、助けてくれ」

「助けるって、ど、どうやって」

「あ、こつちの子も逃がさんでえ。とりや！」

「う、うわあ、足つかまれたあ！」

「何！　弟、ここは俺が抑える。お前だけでも逃げろ！」

「え、ええ？」

「な、そうはさせへんでえ！　うちのパワーなめんといてや！！」

「ああ、もうどうなってるのー！！？」

しばらくして、ようやく落ち着きを取り戻したうちとその男の子達は、向かい合って座ることになりました。先ほどの騒動のことはとりあえずお互い忘れることにして、初対面同士、礼儀正しく自己紹介です。おそらく、これが本来の対人関係における、よりよい関係を作り上げるための正しい順序なのでしょう。

それはええことです。

しかし、うちは思います。

これはいったいどういうことなのでしょう？

うちの前には先ほど共に騒動を起こした二人の男の子が座っているのですが、どう見ても、どの角度から眺めても、同一人物にしか見えないのです。まるで鏡で合わせたように瓜二つなのです。

うちにはその謎がさっぱり分かりません。忍者です。きっと分身の術なのです。

しばらくじっと二人を凝視し、座っていると、向かって右手の分身がおもむろに口を開きました。

「……………えっと、とりあえず、俺が暮野金犀くれのきんせい」

「はあ……………」

「それとこっちが弟の……………」  
「暮野銀犀くれのぎんせいです」

もう片方の分身が頭を下げます。

「はあ……」

うちの前で同じ顔した子が同じ顔をした子の紹介をしています。  
これはなんたることやねん。

しかも、金星と金星？

名前まで同じとは、いよいよ分身の術という考えに信憑性が生まれてきます。

すると、また右側の分身が言います。

「あおう、分かっていると思うけど、俺たち……」

「忍者？」

「何で!？」

そう絶叫して、男の子の目が点になります。

「だって、そんなに顔がそっくりで、名前も同じじゃん。同じ人が分身してるとしか思えへんて」

「いつの時代の話？ この現代に忍者なんていないって。それに、俺たちは列記とした『双子』だから」

「双子？」

ああなるほど、とうちは合点承知しました。しかし、男の子は胡乱な目つきです。

「普通、そっちを先に思いつくでしょう」

「えっへん、その発想がなかっただけや」

「……はいはい。あと、それから俺の名前は金犀で、弟が銀犀。濁点がついてるから、一応違いはあるよ」

濁点。濁った点です。文字の上についている小さな点々のことでしょうか。

うちは目の前の少年を指差しました。

「銀犀君？」

「違う、金犀」

今度は隣の男の子を指差してみます。

「金犀君？」

「僕、銀犀なんだけど」

「ややこしいなあ、因数分解よりややこしいわ」

「まあ、もうどっちでもいいよ。いちいち説明するのも面倒だし」

銀犀君はもううちの相手に疲れてしまったのか、その場にござりと寝転がります。口をへの字に曲げ、ふんと鼻息を出します。

すると、隣の金犀君が頭を下げました。

「それで、お姉ちゃんの名前は？」

「うち？　うちは青山椿。大学生や。よろしくな」

うちは手を差し出し、金犀君がそれに応じます。

「あ、よろしく。それで、お姉ちゃんはここで何をしてたの？」

それを聞かれてうちははっとします。周りを見渡し、再び愕然としました。

そこは周囲を林に囲まれた丘の上の野原です。前方は少々開けた斜面となっていて、そこから視界一杯に広がった我が愛しき町、

柘町が一望できます。家々の屋根、道路を横断する自転車、上流から豊かな水を運び流れる楡川。全てがミニチュアサイズで、なんと綺麗なんでしょう。

しかし、それだけの視覚情報がありながら、ここがいったい町のどの辺りなのか、よく分かりません。ただ、高いところであるらしいのは判ります。

思い返せば数時間前、自宅を出たうちは、とりあえずと目に付いた山の頂上を目指して、普段は近づくことのない林の中の道を進んでいきました。

登山道などという看板がいくつか見え、その度に分かれ道があり、そこでうちは何を思ったか転がっていた枝を立てて倒し、倒れた方へと迷うことなく進んでいきました。ざくざくと。ずいずいと。この広い宇宙の中で、わが道を、ぐいぐいと進みました。

しかし、今考えてみれば、看板どおりの道を進んでいれば今頃は山頂にたどり着いていたかもしれません。全ては、自分は迷うはずがないという、ふわふわした綿菓子のような脆い妄想に洗脳されていたせいなのです。

ああ、どうして今日に限って、そんな妄想に取り付かれてしまったのでしょうか。不甲斐ない話です。

「あ、あの、青山さん？」

気がつけば、金犀君が肩を叩いています。

「へ、ああ」

「ここで何してたのって聞いたんだけど」

「そ、そのことか」

「はい」

金犀君のきらきらした邪気のない純真な瞳が見つめています。うちは一瞬、その無垢なる眩しさに、正直に迷子になったことを白状するべきかと考えましたが、それはそれ、やはり、うちにもプライドというものがあります。

さすがに無様な真実は言えません。

うちはすぐさま頭をフル回転させた上で、それに代わるクールで知的な理由を思いつきました。

「それはもちろん……」

「もちろん？」

「光合成や！」

「へえ……葉緑体があるんですね」

金犀君は思いのほか、さらりと受け流しました。場の空気の流れが一瞬、滞ったように感じたのはきつと気のせいでしょう。

「じゃあ、金犀君はここで何してるん？」

「あの、金犀は俺なんだけど」

「え？」

「ふざけてやってます？」

寝転がった彼が起き上がります。少々ご立腹なのか、眉毛に急な傾斜がついていました。

「そんなことないって。うちはいつでも大真面目や、ええと」

「金犀です」

「せやせや。金犀君やね」

うちが名前を確認し、満足に頷いていると、隣の銀犀君がにこりと笑いました。それが不機嫌そうな金犀君と対照的に目に入り、うちは変わった双子やなと思いました。顔はそっくりでも、中身の部分で特徴が違うようです。

銀犀君が前方に広がる景色を指差しました。

「ここは僕達の秘密の遊び場なんだよね。ほら、いい眺めでしょう？」

「銀犀、それを言ったら秘密にならないだろう？」

「はう！ ご、ごめんお兄ちゃん」

銀犀君はすばやく口を塞ぎますが、生憎とすでにうちの耳には入った後でした。時は金なり（作者による訂正：時既に遅し）。にやにやと微笑んでしまいたいのですが、ぐっと堪えます。

「へえ、ここは秘密の場所なんかあ。秘密かあ、へへ。秘密やねんなあ、ふふ」

「お姉ちゃん、そんな嬉しそうに連呼されると誰かが聞いちゃうよ」「構わないよ。大した秘密でもないし」

金犀君が手をひらひらとさせます。しかし、大したことがなくてもうちは感動していません。秘密の場所なら、偶然、口笛を吹きながら歩いたところで、そうそうたどり着ける場所ではないはず。それをうちは「小枝の気分次第」という、あまりにも安定性に欠ける『勘』で探り当ててしまったのですから、それなりにすごい、という計算になります。

「この場所は二人が見つけたん？」



訊くと、銀犀君が首を振ります。

「うづん、おじいさんに教えてもらったんだ」

「二人の？」

「違うよ。知り合いのおじいさん。ほら、この竹とんぼもその人に作ってもらったんだ」

ふふ、と笑いながら彼は竹とんぼをうちの目の前に突き出し、指の先でくるくると回転させてみせました。

「すごく手先が器用な人なんだよ」

「へえ、こんな場所を知ってて、竹とんぼまで作れるなんて、それはすごいやん。是非ともお会いしたいわ」

しかし、うちが感嘆の声を出すと、途端に、二人の表情がどんよりと曇ります。これはどうしたことでしょう。

うちは所在無げに交互に二人の顔を見比べます。

「実は、この前聞いたんだけど。そのじいさん、死んじゃったんだって」

銀犀君が憂鬱そうに、ぼそりと言いました。

「し、死んだ？」

「うん。実際に亡くなったのは、もう数ヶ月以上前。僕らはおじいさんが引越したものと思ってたけど、ずっと病院にいたんだよね」

銀犀君が隣の金犀君に話しかけます。

「まあ、変だとは思ってたよ。あのじいさんが俺たちに何も言わず

に引越すなんてことはないと思ってたし。近いうちにどこに行つたのか調べようとは思ってたんだけど、その矢先に聞いちゃまって…

「……」

「お、お姉ちゃんまでそんな悲しい顔しないで」

「どうやら、うちの顔は気付かないうちに銀犀君に心配されるほど暗くなっていたようです。しかし、びっくりしたのですから当然でしょう。」

なにしろ、榊君の家におったおじいさんも死んでしまったということを知ったばかりでした。こう立て続けに死という言葉を知ると嫌が上にも、胸の中に黒雲のようなもやもやが広がります。なんとか笑おうとしますが、しんみりとした気持ちはうまく出て行ってくれません。

「ああ、もう！ 辛気臭い話は嫌いなんだ。これで終わり！」

「びしゃりと言って、金犀君がぴよんと立ち上がります。そして、俯いているうちをちらりと見てから、こう言いました。」

「銀犀、ついでだ。そのお姉ちゃんもあそこへ連れてくぞ」「あそこ？」

すると、彼は鼻を擦って笑います。

「秘密の場所その二ー」

#### 40 番外編 椿と双子 3 (前書き)

どうも、作者のヒロユキです。

今回で番外編の完結です。椿と双子の兄弟のちよつと変わったお話も終わりです(今回もちよつと長かったな)。

正直、今かなりのスピードで書いたので、もしかすると文章におかしな点が多くあるかもしれせん。一応確認しましたが。

もし変だと思えば、遠慮なく作者の方へご指摘お願いします。それでは、ごゆっくりどうぞ。

その後、うちは二人の後に行儀良くついて行くことにしました。ここより他に秘密の場所があるというのなら、うちの知的こーきしんが黙ってはいません。むくむくと大きくなる筈のように、この世界の未知を求めて伸び上がります。

林に分け入り前方を歩く二人は、後ろを振り返ることなく黙々と進んでいきました。

うちのように落ちていた枝を拾って転がすこともなく、ほとんど道とは言えない、獣道を歩いています。

そして、そこを抜けたかと思うと、大きな岩がごろごろとした斜面が見えました。

どうやらどんだん山の頂上の方へに向かっていているようです。眼下に広がる町並みがじんわりと霞み、人々が奏でる騒音も消えていきました。

「着いた！」

金犀君がそう言ったのは、そこからさらに林の中を進み、地面にちよつとしたくぼみ（谷というには少し小さいんや）がある空間までたどり着いたときでした。

うちらはそのくぼみの円周の外に立っていて、そこからくぼみの中を覗きこんでいる恰好です。

「ほらお姉ちゃん、あれ」

銀犀君が指差した先は、くぼみの一箇所でした。ちよつとした大

きな岩が折り重なるように転がっていて、その隙間、洞窟のよ  
うなものが見えます。なんでしょう？ 狐さんの棲家でしょうか。

「あれがなんやの？」

「まあ、見てなよ」

「ふふ、びつくりするぜ」

二人は怪しげな笑みを浮かべ、何かを待つようにその場に座り込  
んでしまいます。

うちはここのごとく秘密にするほどのことやねんと思っ  
てしまいましたが、判断を下すにはまだ時期尚早とい  
うことらしいです。黙って体育座りをしました。

しばらくそのままです、五分くらいたったときでしょう  
か。耳元に風の流を感じました。

くぼみの方へ向かって、まるで吸い込まれていくよ  
うな感じです。

「ほらほら、来たみたいだよ」

「来た？ 何が？」

「お姉ちゃん、さっきのあの場所を見て」

うちはその言葉に応じて目を向けます。すると、その洞窟らしき  
ものの周囲で風に戯れる木の葉があります。ちりちりはら  
らくるくると、舞い踊っています。

「な、何が始まるんや？」

そう口走ったときでした。どこからか狼のような咆哮が  
聞こえたと思うと、その洞窟からどっと突風が吹き出  
してきました。まるで誰かがケーキの口ウソクを吹き消  
したかのようです。

無防備なうちは、それを顔にまともに受けてしまいます。

「う、うぶっ」

風で髪がなびき、うちは飛ばされないように地面の草を掴みます。しかし、その風はものの見事、数秒で収まってしました。

「と、止まった？」

まるで、泥棒のような逃げ足の速さです。顔を上げると、二人の少年の同じ顔がありました。二人とも、見分けのつかない同じ笑みを浮かべています。

「どうだ、びっくりしたでしょう？ ここ、こつやって時々突風が吹き抜けるんだぜ」

左の子が言います。

「不思議でしょ？ どういう原理でこうなるのか知らないけれど、おじいさんは洞窟の奥にでも熱い温泉があるんじゃないかって言うてた」

これは右の子です。

「は、はあ、驚いたわあ」

「秘密って言うてたわけが分かったでしょ？ ねえ、楽しかった？」

右の子が白い歯を見せ、顔をほころばせて聞いてきます。

「うん、びっくりしたけどな。楽しかったよ」

それはうちの本心でした。

偶然迷子になって途方に暮れた後で、こんな体験が出来るなんてすばらしいことで文句ありません。うちはそれをきちんと表現しようと彼に笑って見せます。

「どつやらこれで、姉ちゃんの元気も最初の頃まで戻ったみたいだな」

隣でその会話を聞いていた子が、満足げに言いました。

「えっ？」

まさか、そのために、うちをここへ？

うちがさつき、おじいさんが死んだ話を聞いて、暗くなったから……。

「ほら、そろそろ立ってよ。もう帰らないと」

目の前にいた子がそっと右手を差し出してくれます。うちは喜んでその手を取りました。

「ありがとうございます。金犀君」

すると、男の子ががっくりと肩を落とします。

「あの、僕は銀犀です」

「ふわ、元来た道や！」

迷子になって早数時間、うちはようやく見覚えのある道に再び戻ってきていました。感動の再会ということですよ。ふと見ると、「登山口ここから」の看板があります。

ああ、さつきは無視したってごめんなあ。

「ほら、お姉ちゃん、そんな看板なんて眺めてないで、もう帰るよ。日が暮れちゃう」

金犀君はすでに道をずんずんと進んでいます。弟の銀犀君がうちの手を引っ張ってくれました。

うちらは十分ほどで山道をおりて、道路を歩き始めます。

空はいい感じに夕焼け小焼けでした。

山に沈む太陽に向けて、三羽の鳥たちが飛んでいきます。どの鳥も光を受けてきらきらと輝いていました。

それはまるで、UFOのようで、

「UFOやー！」

とうちがふざけて言うと、二人は白けた目で見つめてきました。

「非科学的だよ」

金犀君がむっと口を突き出します。

「じゃあ、神様！」

「もつと非科学的だよ。神様なんて、この世にはいないって」

「そんなことないもん。うちは……」



神様の友達がおる。

そう言いかけて口を抑えます。榊君から口止めされていたの思  
い出しました。

媛子ちゃんのごことは簡単に人に話したらあかんです。

「どうしたの？」

「なんでもない」

「はあ？」

「男子禁制。乙女の秘密やで」

そう言って、うちは二人にウインクしてみせました。

「おーい、金犀、銀犀！」

すると、道の向こうから、自転車を引きながら歩いてくる人がい  
ました。二人のことを呼んでいます。太陽を背に長い影が伸びてい  
て、うちからよく見えませんが、背の高い男の人のように見えます。

「あ、お兄ちゃん！」

気付いた銀犀君が手を振りました。

「お兄ちゃん？」

「うん、僕らのお兄ちゃん。木犀っていうんだ」

「もくせい？」

きんせい、ぎんせい、もくせい。

三人の名前が目の前に並び、ミキサーの中で踊っています。

似たような名前ばかりで、うちの頭はすっかり混乱してしまいま

した。すると、なぜか昔、理科の教科書で読んだ呪文が呼んでもないのよみがえりました。

「す、すいきんちかもくどってんかいめい？」

歩いてきた少年が自転車のスタンドを下ろし、帽子を取りました。弟たちを見た後で、その中央に立っているうちに目が行きます。

「あれ？ えっと、ど、どちらさま？」

「うちは、青山椿っていいいます」

ぺこりと頭を下げると、額に皺を寄せながら、怪訝な目で彼はうちを見ました。そして、救いを求めるように傍らの兄弟に目を向けます。そして、手招きすると屈みこみ、男三人でなにやら秘密会議を始めました。でも、残念ながら声が大きく、内容がただ漏れでした。

「おい、お前ら、誰だこの美人さんはよ」

「たまたま遊んでたら見つけたんだよ」

「見つけた？」

「なんだか暇そうだったからいままで一緒に遊んでたんだ」

「俺は見かけたことがないようだが、どこに住んでる人だ？」

「さあ、どこなんだろうね」

「たぶん、迷子なんだよ。極度の天然さんみたいだし」

「ま、迷子？」

「うん、たぶんそれが一番しっくりくる、かな」

「あの、うち、迷子なんかじゃありません！」

聞こえてきた会話の一部にうちが反論すると、彼ら三人がびくり

と振り返ります。二人の兄だという背の高い少年が立ち上がりました。

「言っていないですよ。そんなこと」

「女性に恥をかかせるようなことを言うなんて、最低や」

うちはぶつくりと膨れてやります。凶星を衝かれて本心ではあたふたとしていましたが、その動揺をすこしでも 見せたら負けです。

「ほら、怒つちまったぞ。お前らのせいだ。謝れ」

うちの言葉に焦ったのか、双子のお兄さんが無理やり二人の頭に手を置き、押さえ込みます。ぐいい。すると、金犀君と銀犀君は不自然な恰好で、前のめりに謝罪の体勢になりました。

「ええ！ ほとんど事実を述べたまでだ」

と金犀君が不平を漏らし、

「い、ごめんなさい。お姉ちゃん」

と銀犀君は素直に謝ります。

その謝罪の態度がこれまたはつきりと違っていて、うちはおかしくなってしまう。こんなにそっくりな顔をしていて、行動も発言もてんでばらばらです。

本当に不思議な双子です。

「ふふふふ。もう、許したげるよ」

うちは言いました。あんまり怒って人をいじめるのは好きではあ

りません。迷子になっていたのは事実なのですから。それに、考えてみれば、二人はうちの命の恩人でもあるのです。

彼らに見つけてもらえていなければ、今頃、お腹をぐうぐう鳴らして、あの野原をさ迷っていたことでしょう。それはとても恐ろしいことです。

それを思えば、うちとしてはむしろ彼らに何かしてあげなければいけないように思いました。そうです。これではあれです。恩を仇で返すというやつです。

しかし、なんということでしょう。自分の両手を見つめて、呆然としました。

な、何も持ってへんやん。

「弟たちが迷惑をかけてすいません。それじゃあ、俺たちはもう帰りますんで。ほら、お前ら青山さんにちゃんと挨拶しとけ」

「ちょ、ちよつと待って」

お別れの挨拶をしようとした双子のお兄さんを制して、うちは頭を捻ります。何か、何も持っていないうちにも金犀君たちに何かできることがないでしょうか。

「うーん、うーん」

「お姉ちゃん？」

次の瞬間でした。うちの脳内にいなずまがピカリと閃光を放ちます。名案の予感。先ほども思い出した、理科の呪文です。

「すいきんちかもくどってんかいめい！」

手を振り上げて、うちは高らかにそう三人に叫びました。すると、

面白いように、三人ともぽかんと口を開けます。まるで、何のことやらさっぱり、と言いたげです。当然です、この呪文にどんな効力があるのか、うちも、分かりません。でも、何か言わないと。

口が勝手に開いていました。

「これは、神様の呪文です」

「神様の？」

「そうです。幸運を呼ぶ、神様の呪文です。金犀君たちは、これできっと素晴らしい神様からのパワーを得ました。きっと、きっと良いことがあります」

「うっわ、胡散くさ」

金犀君はしらけムードです。

「お、お兄ちゃん」

「ええよ。別に信じてくれんでも。でも、きっと二人にいいことがある。ちゃんと天国から、おじいさんも見守っとるよ」

「おじいさんが？」

うちは頷きました。どうしてなのか分かりませんが、何だか、それが当たっている気がしたのです。もしかすると、神様が今この場に、おじいさんと呼んできてくれたのかもしれない。不思議とうちの心は安らいでいるようでした。

「ほんならな。金犀君、銀犀君。また遊ぼうな」

そしてうちは振り返りつつ、手を振ります。赤い夕陽が目染みするようで、つい目を閉じかけてしまいましたが、その向こうで、お兄さんに連れられて歩く二人の顔が見えた気がしました。

「じゃあね、不思議なお姉ちゃん」  
「ばいばい、変なお姉ちゃん」

瓜二つの少年の笑顔はどちらもそっくりでした。

#### 40 番外編 椿と双子 3 (後書き)

次回からは、通常通り、媛子と春臣の話に戻ります。

物語が次のパートに入り、新キャラクターも何人が登場し、いろいろと新展開になる、「予定」です。

どうなるのか、作者も分かりませんが、お読みいただければ幸いです。

#### 41 千両様とさつき（前書き）

どうも、作者のヒロユキです。

ええ、今日はまず皆様へ感謝の言葉を。

この作品もいつしか40話を越え、総PV数も三万を突破いたしました。こんな僕が書いた小説を毎度お読みいただき、ありがとうございます。

これからも一層気を引き締め、まだまだお話しを続けていく所存です。

こんな僕から読者の方へ出来ることは小説を書くことぐらいしかありませんが、そんなときこそこの呪文、

「すいきんちかもくどってんかいめい！」

読者の皆様に、幸あらんことを。

（意味が分からない方は番外編を読んでみてくださいね）

それでは、また。



## 41 千両様とさつき

柞町の北東。

小さく細いくつももの川が交わる、榆川の上流、その近くの森。人々が古くから踏み鳴らしてきた林道のそばに、その神社があった。

この柞の地を守る神、くしなみせんりょうのかみ櫛那美千両神が祀られる、千両神社である。

古びた赤い鳥居をくぐり、短くも、大きな石段の道が上がった先にある。禍々しきものから社殿を守るように、森の木々がその周囲を囲っており、神聖で侵されざる雰囲気があった。

境内は綺麗に清掃されている。参道の入り口には門番である丸っこい狛犬が二体置かれ、その先の参道には、等間隔を置いて石灯籠が並んでいた。

神への祈りを捧げる拜殿も立派な創りであり、綺麗で繊細な装飾が施されている。

そこに漂う凜とした独特な霊気は、参拝する者の心を自然と浄化させる力を持っているようにも思えた。

しかし。

穏やかな五月の陽光が差し込むその神社に、人影は、ない。

境内には、少々時期ハズレな鶯の声がこだまする。それがなんとも、間が抜けていた。

人々が参拝に押しかけ、四六時中騒がしいのも考え物だが、逆に

誰一人として神社を訪れないというものも、寂しいものである。これではせつかくの拝殿も、どこか汚れが目立ち、寂れているようだった。

と、静かだった境内に、何者かの声がした。

「うーむ。今日も相変わらず参拝者は皆無か」

それは若い女の声のようだったが、口から発せられたというよりも、洞窟の中から聞こえているような、妙な反響を持ったものだった。まるで空間に浸透していくようで、周囲の景色と同化する声音である。

「全く、いつものことではあるが、面白くない話であるな。これでもわらわはこの土地を守る氏神ぞ」

その不満に満ちた独り言は、空しくも空気に消えていく。

「昔は村の人間があれば毎日のように拝みに来ておったというのに。千両様、千両様と、かまびすしいばかりであったのに」

ここで大きなため息。

「今では一日に一人か二人、よぼよぼのじいさんかばあさんが拝みに来るのみか。無様なものであるのう。わらわの力もずいぶんと衰えてしまった」

すると、声は急に小さくなり、まるで周囲の様子を窺っているように沈黙した。

そして、しばらくしてから、

「おーい。おーい」

誰かを呼び始める。

「さつきー。さつきはおらんのかー！」

その声に誰からも返事はない。

「分かっておるぞー。仕事は済んだのであろう？ 気配は先ほどから感じておる」

「……」

「わらわの独り言などいつまで聞いておってもつまらぬであろう？」

「……」

「……ちっ、どこに行きおった。あの不良巫女めが」

「誰が不良巫女ですか！」

すると、抗議の声が拝殿の裏から上がる。人影がそこからすつと姿を現した。巫女服の少女だ。真っ白な小袖に鮮やかな緋袴を着ている。

彼女は仏頂面で拝殿へと階段を上がった。そして、その先の寶銭箱の傍ら、台に置かれている花瓶に顔を近づけると、腰に手を当て、眉を吊り上げる。

その花瓶には木の枝が差し込まれていて、ぎざぎざとした葉と葉の間から、美しい赤い実がいくつも顔を出している。神社の神木、千両の木の枝だった。

「私のどこが不良巫女よ？ 聞き捨てならないわ」

巫女服の少女はそう声を張り上げた。他でもない、目の前の木の枝に、である。

すると、なんとということか。

「このわらわに乱暴な言葉を惜しげもなく使うところであるう」

木の枝が、そう答えたのである。

「はあ？ 私の言葉のどこが乱暴ですって！ 神の魂が宿っているとはいえ、このほっそい枝、へし折ってあげましょうか！」

少女はそう叫んで花瓶を手で高く持ち上げ、揺すぶった。今にもそれを叩き壊さん勢いである。

千両の枝が悲鳴を上げた。

「おおおう、げに恐ろしい娘だの。野蛮さが口元からこぼれ出ている。顔を近づけるな。汚れた魂がわらわを毒すかもしれないぬであるう」  
「すいませんねえ。それでもこの神社を管理している巫女なもので休みの日にこうして一日中千両様の愚痴を聞いてると、心が自然と毒されるんですう」

彼女はまるで怒りを発散させているかのように、半笑いだ。

「何を言つておる。わらわの声を聞けるといっただけでも、人の心は清らかに澄んだ湖のごとく、無駄なものがなくなるくらいにすつきりするはず」

「自意識過剰ですね。私だって一応年頃の女の子なんですよ」

彼女は気が済んだのか、ごとりと花瓶を元の場所に戻すと、くるりと反転し、ポニーテールにまとめた髪を寂しげに一撫でして、た

め息を吐く。なんとも傷心の面持ちである。

「だからなんなのだ？」

「こんな休みの日くらい、同じ年頃の男の子とあまーいランデブーとしゃれ込みたい気分なのに、なんでこんな寂れた神社の掃除なんて、毎週毎週させられなくちゃいけないんですよ？ その上、神様の愚痴を一日中聞かされたりすりゃ、そりゃあ心も毒されて、精神が崩壊します」

瞳を潤ませた少女は指で涙を拭う仕草を見せる。その悲しげな表情はなかなか絵になっていて、同情を誘った。

すると、神の魂が宿った千両の枝が反論気味に言う。

「うつむ、そうであるが、お主がこの神社で代々巫女を務めてきた『選ばれし一族の人間』ということは分かっておるであろう？」  
「なんです？ これはわらわが定めた運命であるぞ、逃れられぬ、とか神の特権を振りかざす気ですか？」

少女が一層悲愴な声を出す。ばたばたと地団太を踏んだ。

「別にわらわはさつきの運命に関わっておらぬ、さつきの運命はさつきが作り上げていくものであるぞ」

「うがあ！ 来たよ。ここに来て神の放任主義宣言です。お前は自由だとか言われながら、神に散々こき使われた上で、どうとでもなれとぼろ雑巾のように道端に捨てられるんだ。そのときにはもう、身も心も荒れ果て、とてもお嫁になんていけない」

大げさすぎるさつきの落胆ぶりには、さすがに千両の枝に宿る神も呆れたようだ。

「そんなことまでするつもりはない。わらわは別にさつきのことを奴隷と思っておるわけではない」

「選ばれし一族、でしょ？ 私がここにいるのは。つまり、神の声が聞こえる存在だからですよ」

それに神の声が答える。

「そうじゃ、瀬戸さつき。おぬしの一族は代々優秀なシャーマンを生み出してきた一族なのじゃ。神の声が聞こえ、神に力を貸し、神と共にあり、時に、神力の顕現のその媒体ともなりえる貴重な人間なのじゃ」

「つまり神様の道具ですね」

意地悪のつもりか、彼女はここぞとばかりににやつきながら言う。千両神はさすがにたじろいだ。

「心が痛い言い方をするな。わらわはさつきに力を貸してもらいたいだけなのだ」

「でも、そこにわたしの意志は反映されてますか？」

「むっ」

神は言葉に詰まる。答えはほぼ否だった。自分が日ごろ、彼女をあごで使っていると言える状況がそこにはある。

この巫女、瀬戸さつきは幼い頃より、自身の意思とは無関係に神社に連れてこられ、この千両神と引き合わされてからというもの、千両神の言う通りに仕事をさせられている事実がある。

それはシャーマンとしての彼女の能力を向上させるためもあったし、自分がこの世界で自由に動けない分、自由に動ける彼女に直接意思を伝え、働いてもらいたかったという面もある。

そんな彼女も以前までは従順で、千両神の言うことには二つ返事で了解したが、ここ数年は違う。

彼女の中で思春期特有の様々な願望が溢れ、神の言葉に束縛されることに嫌悪を示すようになった。

小さな頃から彼女と付き合いがある千両神は、これは一種の親に大して向けられる反抗期と同種のものであると考えていた。

さつきは髪をいじりながら抗議する。

「こうして千両様と話をするだけで自分の人生が無為に過ぎていくのが分かります。かけがいのない私の人生が、です。世のミュージシャンは青春を謳歌せよと高らかに歌っている。町では私と同年代の友達は自由奔放に遊びまわっているというのに。わたしはこんな神社で拝殿の掃除。しくしく……」

「あ、お、さ、さつき」

今度は嘘泣きではなさそうに見え、千両神は慌てる。どうにか彼女の顔を上げさせたいが、実体を持っていないため、ただ千両の枝から見つめることしか出来ない。

「な、泣くことはないじゃろう？」

「あります!」

「へ?」

「今朝だって、ご神木である森の奥の千両の木の前に呼び出されたと思ったら、周辺の草むしりよ。歳頃の女の子がすること!？」

むっつ、と彼女は口元に深い皺を寄せる。

「それはさつきの偏見である? 草むしりぐらい誰だってする」

「偏見でもなんでも、こんなことはもう嫌なの。ああ、もう死んでしまいたい」

さつきはよよと袖で目頭を押さえる。さすがに千両神も気の毒になるが、残念ながらそれは出来ない相談なのだ。

「それはならんぞ。さつきが居なくなれば、わらわはさらに力を失ってしまう」

悲しげに、千両神はそう言った。

力を失う。

それは千両神社の参拝客の減少に大きく関わっている。というのも。

神とは太古より、常に絶大な力を持ち、大いなる権力を持って人々の生活に計り知れない影響を与えきた。しかし、その一方で、人々に祈りを捧げられ、敬われ、感謝されてこそ、神としての力を維持できるという側面があるのである。

神は人々からその大きな存在を認められてこそ、巨大な力を持ち、その力を維持し、また人々に力を還元し、繁栄させることが出来るのだ。

しかし、反対に人が神を崇めなければ、必然的に神はその力を失っていく。

数十年前ならまだしも、時代が移り変わり、積極的に神を敬おうという人々の熱は次第に冷めていつている。千両神社もその例外ではない。

この神社に祀られている櫛那美千両神も、力を失っている一柱の神なのだ。



そして、そんな千両神に力を貸し与えてくれる存在が、さつきのようなシャーマン。特殊な力を受け継ぐ瀬戸家の人間がある程度傍にいなければ、神としてこの世に繋ぎとめられている鎖が脆くなり、千両神が神の世に戻らなければならなくなるのだ。

千両神としては、そのため、さつきを出来るだけ傍にさせなければならぬ。

もし、さつきがいなくなり、神の世に戻るということになればこの土地を守れなくなる。

そうなれば、人々に大きな悪影響が出るという悲惨な結果になりうるのだ。

「まだ、この土地からわらわはいなくなるわけにはいかん。さつきの気持ちも分かるが、その、済まぬ」

「謝ったって許すわけにはいかないです」

「すまぬ。本当に申し訳ないと思っておるぞ。じゃから、機嫌を直してくれ、さつき」

すると、さつきは顔を上げ、心底困っている千両の枝を見た。そして、満足そうに笑う。

「……ふふ、わかってるって、千両様。ちょっと意地悪言ってみたくなっただけですよ」

「そ、そうなのか？」

「わたし、これでも千両様のこと大好きですから。神様と友達なんて、家族以外の人間に言えないけれど。でも素敵なことでしょう？」

神に対する愛情を恥じらいもせず、口にするさつき。

しかし、千両神は同時に、彼女の内に潜む悲しみの影があることをすでに看破していた。

いくら毎日ではないといえど、思春期の貴重な一日をほとんど誰とも会わずに過ごすというのは退屈なものである。

それに、昔からこのさつきには他の子供達とあまり遊ばせず、いつも千両神に付き添わせてきた。好きなこともさせず、舞いの修行や、巫女としての礼儀作法など、そんな様々な知識も次々に教え込んだ。その積み重ねが彼女の心に不和を呼んでいる。

こういうときの神の目というものは本当に厄介じゃの。気付きたくないものまで、何もかも見通せてしまう。

しかし、だからこそ、千両神は出来るだけの愛情を込めて彼女に語りかける。

「さつき。わらわもお前がわが子のようにかわいくてならぬ」

妙に照れくさいが、これでさつきが少しでも元気なれるのであれば、神としての役目を少しでも果たせたことになるだろう。

「あ、それでなのだがの、さつき……」

すると、急に千両神は沈黙する。息を止めたようで、さつきは目を瞬いた。

「どうしたんです？」

「穢れし者が無遠慮にも境内に入ってきたようだの」

「え？」

さつきが振り返ると、拝殿の外、参道をゆったりと歩いてくる男の姿があった。さつきはそれを確認するや否や、表情を固くして口元に力を入れ、彼の名を呼んだ。

「おはようございます。杉下隆二様。」

41 千両様とさつき（後書き）

そう言えば、次回から媛子と春臣の話に戻るっていったのに、今回登場してませんね。

すみません。次回も出ないと思います。

## 42 招かれざる客（前書き）

1 / 2 2 文章の最後の辺り、異空間に対する説明を補足しました。

## 42 招かれざる客

「おはようございます。杉下隆二さん」

拝殿からさつきが呼びかけると、男は僅かに首を上げ、分かるか分からないかほどの小さな会釈をした。神経質そうな細面は白い太陽の光を浴び、青ざめた死神のようである。杉下隆二、地元で黒い噂のある杉下家の次男だった。

「おや、おはよう、千両神社の巫女さん。休みの日だったのに、朝からご苦労なことだね。掃除かい？ 神社の管理っているいろと大変なんだ。僕には分からないけれど」

「そうですね。管理の大変さはやってみないと分かりません。隆二さんも一度やってみたらどうですか？」

さつきは拝殿に上がってくる彼を冷たく睨みながら、訊いた。さつきは幼い頃より掃除を実践してきたので、朝飯前だが、初めての人間にはきつと大変なはずだ。

すると、杉下隆二がふっと笑う。

「嫌だよ。僕がこんな寂れた神社の掃除なんて」

「……寂れていようが、神へ敬意を払い、神の御前を綺麗に保つことは、尊き行いだと私は思いますぞ？」

さつきは真横を通り過ぎる隆二に挑戦的に言い放つ。しかし、隆二は顔色を変えることなく、首もとのネクタイの位置を直すだけだった。

そして、賽銭箱の前でこう言う。

「千両様だかなんだか知らないけれど。そんな見えもしない存在に手を合わせるなんて、昔から人間ってのは、本当にしょうもないことをして時間を浪費してたんだね」

この不躰な言葉にはさすがにさつきはこぶしを強く握り、湧き上がる怒りをぶつけそうになった。

「な、神の御前で、そんなことを……」  
「ならん。さつき」

静かに千両神の言葉がさつきの脳内に伝わってくる。シャーマンとしての能力がある彼女には、隆二には聞こえなくても、千両神の声が聞こえるのだ。

「でも、私……」  
「でももへったくれもない」

隆二はさつきがひそひそと話しているのに気がついたのか、訝しげに振り返った。

「何だ？ 寂しすぎて独り言を言う癖があるのかな？」  
「あおう、神社に何か御用なんでしょうか？」

彼女が露骨に怒りの籠もった声で訊くと、彼は瞳だけで笑うという気色の悪いことをしてみせる。

「いや、別に大した用はないよ。じいさんから頼まれてね。わしの代わりに参拝しておいてくれということだよ。こんな神社のね。ああ、それから、ついでにあんたの様子も見ておいてくれ、とさ」  
「……！」

「何度も言ってるから分かってるよね。この神社がこんなになっても潰れないのは、僕達杉下家のおかげだってこと。じいさんが毎年この神社に寄付してるお金のこと、ちゃんと分かってるよね？」

「う、くう」

「分かつたら返事だよ？ それくらい出来るでしょ？」

隆二の口調は穏便でありながら、上から見下す強者の威圧が含まれていた。決定的に覆しがたい上下関係を、さつきに確認させているのだな。千両神は思う。

「わ、分かってます」

「町長選挙はまだもう少し先だけど、場合によっては君にも強力してもらおう必要があるからね」

「はい」

「言うまでもないことだけど、杉下家はこの地域に大きな影響力がある。その影響力を維持するために町長をうちの人間から出すことは不可欠の条件。だけれど、いくら杉下家の影響力があっても当選できるだけの票を全て集めることは出来ない。この地域ではまだ、周囲の人々に影響力を持っている古くからの一族はいくつかあるんだ。彼らを杉下家になびかせることができれば、杉下家の町長候補つまり僕の父さんだけ、父さんは町長に当選確実。でも、なびかなければ危険だ」

「……」

耳障りなだけの彼の演説をさつきも千両神も聞きたくなかった。俯いたままのさつきは、彼の黒く光沢のある靴を見て、話のあいだ、それを出来るだけかわいそうに踏んづけてやるイメージを膨らませることにした。

隆二の話は途切れる事無く続く。



「そんなときに頼れるのがここの神様。そういつた古くからの一族の人間は信仰心が厚くて助かるよ。未だにここに参拝してきてる祖父さん祖母さんがいるんだろ？　そこで代々シャーマンとしてこの神社に仕えているあんたの出番だ。そつとその老人たちの耳元で神のお告げを囁けばいい。『杉下家の言うことに従った方がいい』とね」

「は、はあ」

「別に杉下家に票を入れるなんて直接的なことを言わなくていい。ただそれだけでいいんだ。それで純粋なじいさんばあさんは神のお告げに感謝し、従うことだろうよ。そして、杉下家が権力を握る。穏便で誰も傷つかず、争うことがない理想的な話だろう？　そうじゃないか？」

「はあ」

いいながら、さつきは胸中で、虚空にワンツーパーンチをお見舞いしている。お前らが権力を握ってそれでいいなんて、そんなことを思ってるのはあんただけだろうが。

隆二はさつきからの反応が気が抜けたように曖昧なことに分かっていたが、構わずまだ続ける。

「その大きな布石のためにじいさんはこの神社に寄付をしている。それでもしも時の保険に、神様にちよつと一言つぶやいてもらう。神様を道具にするのは少々心苦しいけれど、こんな神社の神だもの。僕達に神社を残してもらえてるだけでも有難いと思ってくれなくちゃね」

「話は、それで終わりですか？」

さつきは怒鳴り散らしてやりたい気持ちをぐつとこらえながら、なんとかそれだけ言い切った。

隆二の死神面しにがみじは感情をうつさない。

「そんな怖い顔しないでよ。さつきちゃん」

こんな台詞を棒読みで言う。

「お話しが終わりなら私は仕事に戻ります。まだ拝殿の床掃除がこれからですから」

「分かったよ、もう帰るって。それじゃあね、バイバイ。お仕事さちんとかんばってね。それで、もしもの時は頼むよ」

隆二は契約書の項目を確認させるようにはつきりとした声で言うと、意外にもあっさり、大あくびをかましながら帰っていった。きつと町で仕事があるのだろうか。

この町を裏で牛耳っている杉下家の人間は毎度その家族あるいは彼らに繋がりつながりの深い人間を町長にし、地域の実権を握っている。そのため、彼らの周囲にいる人間は苦勞すこともなくいろいろな仕事を任せてもらえる。無職などとは縁がない一族だ。

全く、さつきにも千両神にとっても彼らは目の毒以外の何者でなかった。

すると、彼の姿が消えた途端、さつきは悲鳴を上げるながら髪を掻き毟る。

「な、な、なんなのよあいつ!! 心の底から消し去ってやりたいわ!!」

「さつき、落ち着け」

千両神はなだめたが、彼女の怒りが簡単に収まるわけもないことは明白だった。

「千両様だって、あんなことまで言われて我慢できるの！！ 神への信仰心があるかないかは個人の自由でも、神を自分たちの利権のために利用するなんて、精神が一部の隙もなく腐ってるわ！！」

握った拳を震わせながら、彼女は落ち着きなくその場を行ったり来たりする。すると、拝殿にばたばたと埃が舞った。

「わらわもそう思う。出来ればきつい天罰でも下してやりたいところではあるのだ。だがの、下手に奴らに手を下すのも危険なことだ。やつらがこの神社の存亡を担っておるとなると、迂闊にそんなことも出来ぬ。以前よりは劣っておるといつてもわらわの神力もそれなりでの、うっかりやりすぎて一族が弱体化してしまうと、ここへの寄付も止まる。それは困るであろう？」

「う、確かにそうだけれど」

足音が止む。さつきの目は少々埃を被った千両の枝を見ていた。

千両神の指摘は最もなことだったのだ。

「だから、今は落ち着け。もうこれは数十年間続いておること。さつきの母親も経験した辛苦なのだ。まだ誰もその役目を命じられておらぬだけ幸いか。せめて、昔どおり、この神社が復興できればいいのじゃが、それも、この現状では無理かもしれぬの。今は甘んじるしかない」

「千両様……わたし、悔しい。あんなの、間違ってる」

「そうだな。このことは近いうちにお前の母にも申しておこう。とにかく、もうこの話は終わりだ」

千両神は場の不快な空気を断ち切るようにきっぱりと言った。このまま杉下家の人間のことについて悪口を言い合ったところで、な

んら解決策も講じようがない。泥沼を棒の先でいじくっているようなものだ。

それに、千両神にはさつきに先ほど、言いかけたことがあった。

「実は、さつきに一つ頼みたいことがある」

彼女の顔がさつと緊張する。

「頼みたいことですか？」

「ああ、大切なことじゃ。この土地を鎮守する神としてその役目を果たさねばならぬ」

「何かあったんです？」

「ここ一ヶ月ほどのこと。この柵の地のある場所に、妙な空間が生じておる。この世でもあの世でもない、異空間じゃ」

異空間という響きに馴染みがないのか、さつきは困惑しているようだった。それもそうだろう、と千両神は思う。

彼女でさえも、このような事態はほぼ初めてと言っているのだ。

異空間とは、この世と神の世、または別世界の間で空間に生じるゆがみであり、世界の各地で稀に発生している。大抵は、人や物に影響を与えることはなく、海の中で時折できる渦のようなもので、一定時間を経過すると消えてしまうのが常だ。中には有害な部類もあり、別世界の入り口となって吸い込まれてしまうものも存在するが、様子を見る限り、今回の異空間によって人々が悪影響を与えている様子はない。そのため、千両神としては、じきに消えるものと無視していた。

しかし、彼女はさつきにそこまで説明した後で、口調に緊迫感を混ぜる。

「だがの、その異空間の周辺に、妙な気の塊がある。かなり小さい

ものだが、ここ数日で動きが活発になっておるようだ。何者かは分からぬが、この地に仇なす者かもしれん」

「私にそれを調べよ、と？」

「そうだ。わらわはここ動けぬ。従ってそやつの正体が見破れぬのだ。動けるさつきにその調査を頼みたい。悪しき者であれば、わらわが追い払おう」

「はい」

「またお前に仕事を頼んですまぬな。それで、礼と言ってはなんだが、この仕事が終われば、二週間さつきの自由に町で遊んでくるがよい」

すると、彼女は信じられないといった表情で神の枝を見つめた。それもそのはずで、これまでは二週間も長い間、彼女が休みをもらえたことは皆無と言ってもいいほどののだ。

「そんなに休みをもらってもいいんです？」

「構わん。たまにゆっくり羽を伸ばしてこい。その間、わらわのことは気にせんでもいいぞ」

あんな顔をされた後で、さつきの気持ちを無視するわけにもいかんしの。神はこっそり呟く。

「……………ありがとう」

すると、彼女の顔が素直に明るく微笑んだ。それを見て千両神もまた、木の枝の身でありながら、そっと笑った。自分の娘同然の彼女が喜ぶことは、やはり自分のことのようにうれしい。

しかし、それもつかの間、さつきが元の真剣な表情に戻り、質問した。

「それで、そのとある場所ってどこですか？」

「うむ。それが重要じゃの」

「重要、なのね」

「驚くなよ。その場所はというのは」

千両神がそつと住所を言つと、数瞬前の笑顔はどこへやら、彼女はたちまち顔色を失つた。

「そこ、って。まさか、あの人の……」

言いかけるが、呂律が上手く回っていない。しかし、当然だろうと、千両神は思う。

なぜならそこは、彼女にとって聞き覚えのある場所だったのだから。

### 43 春臣と開かずのとびら

「なんだこりゃ？」

春臣は居間の前でそう放心気味に呟いた。

それは、久しぶりの買い物で、近くのホームセンターに向かい、切らしていた日用雑貨をいろいろと物色した後、行動範囲を広げてくれる相棒を見つけるため自転車屋を覗き、媛子の好物を購入するために和菓子屋の暖簾をくぐって、かさばる荷物を両手に抱え、そう言えばトイレットペーパーを買い忘れていたと、肉体、精神共に疲労を倍化させるような余計な忘れ物を思い出した上で、ようやく自宅に戻ってきた休日のことだった。

玄関で靴を脱ぎ、廊下を進み、疲れた体にささやかな休息を与えるため、台所でお茶でも淹れ一服しようと考えていると、ふいに居間の襖にあるものに目が行き、その見覚えのない貼り紙に呆気にとられると共に困惑の声を出したのである。

『準備中、榊君立ち入り禁止。やで』

そう女性らしい丸っこい文字で書かれたその禁止事項は、まさに警告の意味を示すように、濃い赤のマジックで書かれている。文字の周りにはとげとげしい外枠が囲っており、疲れた春臣の目に不快な刺激を与えた。

どうやら、居間に置かれていたスーパーのチラシの裏を使用して書かれたようで、うっすら反対側の文字が透けて見えた。貧相な即席感がたっぷりである。

これはいったいどうしたことかと、じっと立ち止まりまじまじと

文面を何度も読み直した春臣だったが、すぐにあることに気がついた。

「禁止。やで。やで？」

自分には馴染みの薄い言語表現。

方言という地域色満載な表現が文に含まれていたために、犯人の推定にはおよそ、三秒もかからなかった。

青山椿である。

彼女は春臣の大学の友人で、近所に住んでいる関西弁の少女だ。つい数週間前までは、大学で一緒に講義を受ける程度の仲だったが、最近では違う。ひょんなことから春臣の家に居候している神、緋桐乃夜叉媛の存在を知ってから言うもの、頻繁に自宅に遊びに来るようになったのだ。

しかし、家の主である春臣の留守中に、勝手に侵入し、こんな妙な貼り紙をするとはどういった見か。

「青山のやつ……」

春臣はそうばやくと、今しがた買ってきたばかりの商品が入った袋を台所に無造作に放り投げ、すぐさま振り返り、抗議のノックをした。

自分の家で自分以外の人間から自分の行動範囲を限定されるなど、あつてはならないことのような気がした。法律にだって、きつと違反している。

「おい、青山。いるんだろ？」

人の家に勝手に上がりこみやがって。

そう罵ってやろうと、春臣は襖をノックで揺さぶる。



すると、薄っぺらな隔たりを通り越して、すぐさま居間の中から二人分のひそひそ声が漏れてきた。

「おい、椿、春臣が帰ってきたぞ」

「榊君？ 計算外やったな。もつとゆっくりしてくると思っと思ったのに」

どうやら媛子も一緒のようである。ただならぬそわそわとした空気に黒い疑念がわらわらと塊を作った。自分に内緒で、女二人がよからぬことでもたくらんでいたのかもしれない。

そうになると、なおさら黙っておけない。

「媛子、青山、今すぐここを開ける」

「榊君、ダメや！」

一思いに中へ踏み入ろうと、襖の取っ手に手をかけるが、それを力かけたまま途中でがくと引っかかる。物で固定されているわけではない。内側から誰かが押さえているのだ。犯人は明白である。

「青山、何をしてるのか知らないけれど、事情を話してもらおうか？」

襖越しに春臣は訊いた。

「ふ、ふぐう……あ、あかんって。すぐに終わるから榊君はそこで待ってなさい」

力が相殺されている襖はぎしぎしと不穏な音を立てている。正反対方向の力がかかり、悲鳴を上げるようだ。やめろ、やめてくれえ。しかし、春臣は構わず、引っ張り続けた。

「家主である俺に命令か。青山は偉いんだな。何を企んでる？」

「何も企んでへんよ。榊君、手を離しなさい」

「何でお前が俺に命令するんだよ」

「命令やない。お願いや。ともかく榊君は入ったらあかん！」

いつになく彼女の真剣な怒気の籠もった声に、春臣は一瞬気圧されるが、そこで折れるわけにもいかない。彼女にこれほど簡単に言い負かされるなど、プライドが許さない。到底甘んじることなど出来ないのだ。

頭を使え。

作戦変更である。

「媛子！ そこにいるんだろ？」

「は、春臣」

突然呼びかけられ、驚いたのか、彼女の声が上がってる。

「ここで何をしてる？ 悪さが過ぎると、今後の食後のデザートにいろいろと悪影響が及ぶぞ」

「き、汚い。媛子ちゃんにスイーツの話を振るなんて」

卑怯やで、榊君。青山が咆える。

「汚いも卑怯もあるか。何の説明もなしに、家に帰ったら居間を勝手に占拠してる青山に言われたくない」

「か、勝手やないもん。家に住んでる媛子ちゃんに了承はとってます」

「俺に話を通ってなければ、無意味だ、そんなもん」

「せやかて、榊君はそのとき家におらへんかったもん。そうなれば

自動的にこの家で地位が高いのは媛子ちゃんや。最高責任者には了解を得ました」

「屁理屈こねるんじゃないやねえよ。ああ、もう、時間の無駄だ。とりあえず、ここを開ける！」

「嫌や。断固として断わる！」

「ふうん、こうなりや力比べだな、青山。男と女ではすでに勝負はあつたと思うが」

「な、それは男女差別やで。女やからってなめたらあかん！」

「**宣戦布告。**

そう受け取った春臣は、もはや一部の遠慮なくふすまの取っ手に体重をかけ、無理やりこじ開けようと試みた。

「あ、あ、あかん」

青山の声だ。どうやら、踏ん張っている手に力が入らなくなっているのだろう。無理もない、あんな華奢な腕にこちらの体重を支えるだけの力はないはずだ。

彼女の抵抗空しく襖の戸に少しづつ隙間が開き始める。

「よし、後もうひとふん張り……」

そう勝利を確信した瞬間だった。

「**春臣！**！」

媛子の声が甲高く響いた。すると、神から発せられた不思議な力が春臣に作用したのか、思わず、取っ手から手が離れる。それはまるで、催眠が解けたように、体から要らぬ力が抜けたようだった。

「媛子？」

「春臣、その、いま、わしは……」

「な、何だよ、急に」

たじろいだのには理由がある。切迫した困惑の感情を彼女の言葉のニュアンスから感じ取ったのだ。一時的に部屋への侵入を優先目的から除外する。

「どうした？」

ややあつて、恥じらうように彼女が答えた。

「その、わしは……着替えをしておるのじゃ」

途端に、春臣は言葉にならないもやもやが口元に殺到するのを感じる。頬が熱くなり、確認する必要すらなく、自分がみるみる赤面していくのが分かった。

「なんだよ、それ」

湧き上がる羞恥の念と、自身の行動の変態性に気付いた後、落胆し力なく俯いた。

頼むから。頼むから、そういうことは先に言え。

#### 44 媛子のファッションショー

高級栗羊かんと金文字で印字された縦長の箱の上で、媛子が胸を張りゆつくりと足を踏み出す。足元には榊の葉が長く敷き詰められ、レッドカーペットならぬ、グリーンカーペットというわけだ。

中央辺りまで歩くと、スケートのジャンプのように空中でぐるりと回転する。

すると、ドレスの裾を飾る柔らかなフリルがふわりと舞った。

薔薇の花から染め取ったような真紅の衣装だ。腰元に結ばれた黒いラインの入ったリボンが愛らしい。

異国のお姫様のような、高貴な身分を感じさせるドレスだった。

「うちの家にあった人形の衣装をそのまま持ってきたんや。サイズもそんなに変わらんからぴったりやったで」

椿が説明する。どうやら、数週間前に頼んでいた媛子の普段着のことで今日はここへ来ていたらしい。買い物に行った春臣が帰ってくるのを見計らい驚かせるために居間を占拠し、持ってきた服を選んでいたということだった。

「ふふん」

媛子は得意げにその場で再び一回転すると、春臣の前でドレスの裾を持ち上げ、片足を下げると、軽く会釈をしてみせる。

なんだ？ なかなか堂に入っていやがる。

「どつじゃ？ 春臣。なかなか似合っておるっ？」

自慢の紅髪を手で掬い上げ、ぱつと散らしながら、彼女は不敵な笑みを浮かべる。

「ふうん、まあ、似合ってるんじゃないか？」

春臣は少し上から見下ろして、中途半端な感想を述べた。  
すると、彼女は不快そうに眉を動かす。

「まあ、とは何じゃ。わしは曖昧な表現は好かん。似合っておるなら似合っておる、とても似合っておるならとても似合っておると、はつきり断言せんか」

「コメントの選択例が肯定的なものしかないことが気に掛かるが、ぱつと見るととても似合ってる」

「ううん？ おい春臣、また引っかかりのある言い方をしおって。ぱつと見た感想などいらん。じっくり見た感想を申せ」

じっくりねえ。

春臣は顎に手を当てる。

まるでお人形のような可憐な彼女のたたずまいに、特に文句はないのだが。

「いやね、媛子のその言葉遣いがイメージを壊すんだよな」

ため息交じりに言う。

「言葉遣い？」

「お嬢様は『わし』なんて一人称使わないし」

すると、隣の椿が妙に納得したように頷く。

「せやな、百歩譲って『わて』までが許容範囲や」

「青山、俺には青山のその歪んだ価値基準がすでに許容の範囲外だ」

もはや彼女のとんちんかん言動には慣れっこであるため、春臣はさらりと突っ込み、軽く受け流す。

「な、ならば、言葉遣いを直せば良いのか？」

媛子が眉間に皺を寄せ、顔を上げた。

「うん、まあ」

頷くと、彼女は首を捻った。彼女のこの世に関する少ない知識の中から、お嬢様のプレートが貼られた引き出しを引っ張りだしているようだ。

「わ、わたし？ わたくし？」

「うん。それで？」

「私に、このドレスは似合っておるじゃろ？」

「……じゃ、じゃ」

「お、おう。そうじゃな」

咳払い。そして、ためらいつつ、媛子が口を開く。

「あの、わたくし……私に、このドレスは似合っておりますか？」

途端、春臣ははっとした。

ふいに、恥ずかしそうに上目遣いでそう訊いてきた彼女と目が合ったのだ。

いつものわがままな彼女とは違う、なよやかで淑やかな雰囲気、

その彼女の表情に、目が奪われた。

な、なんだよ。これ。

それは甘い意識の揺らぎで、立ちくらみのように、視界のフレイムが滲んだ。

言葉が喉に詰まるのが分かる。返答できず、途切れ途切れの音が口から漏れた。

「あ、あ、その……」

と、唐突に拍手の音が、その間合いに割って入る。椿だ。

「めっちゃめっちゃかわいい。満点、満点やで媛子ちゃん。ほんまにどこかの国のお姫様みたいや」

彼女は手のひらをぱちんと目の前で合わせ、感極まるといった具合で目を潤ませている。

415

「そうか？ 本当か？ たまにはこんな服を着てみるのもよいの」

「……」

「どうした？ 春臣。感想はないのか？」

すると、気を良くした媛子から再び感想を催促される。

「い、いや、似合ってるよ」

冷静を装ったつもりだが、無意識に春臣の目は泳いでいた。それを見て、何かを確信したのか、彼女はふふんと鼻を鳴らす。

「ようやく素直になりおったの。そんなにわしのドレス姿が気に入ったか？」



「うるせえ」

「しかしの、これで喜んでおってはまだまだじゃ」

「え、どういう意味だ？」

椿、次の物を。媛子がそう指示を出す。

「はいよー」

元気な返事と共に、がさがたと音を立てながら、椿はちゃぶ台の下から紙袋を取り出した。

「げっ、まさか他にもあるのか？」

「何を言うてんの？ まさか最初の着物とこのドレスだけで生活させるわけにはいかんやろ」

「ま、まあ、いつもの着物はさておき、こんなドレス、普段着ではないからな」

「せやろ？ じゃあ、そういうことやから……」

すると、無言のまま、椿は笑ったまま手で春臣を払う仕草をする。横を見れば、媛子も同じ動作だ。圧倒的にのけ者にされている空気を感ずる。

「ここから出る、と？」

「当たり前やん。それとも、榊君は媛子ちゃんの着替えまで見たいん？」

椿が腰に手を当て、呆れたように言う。

「ば、馬鹿。そんなわけないだろ」

「見損なうぞ、春臣。わしにそれほど軽蔑されたいのか？」

「分かった。出るって、出ますよ。だからそんなに冷たい目で俺を見るな！」

そう逃げるように言って立ち上がり、部屋から出ると、春臣はその場であぐらを掻き、どすんと座る。

しかし、考えてみれば、媛子のファッションショーを見せられている立場の自分が、なぜわざわざ廊下で待たねばならないのか。そんな一抹の疑問を抱かなくてもなかったが、反論すればまたしても蔑みの視線を向けられる気がして、とりあえず、腹の底に押し込む。それにしても、女性から部屋から閉め出されるとは、なんとも男として空しい。

廊下に立たされる生徒はこんな気持ちなのだろうか。とか思ってみる。

「な、こ、これは、青山の趣味なのか？」

しばらくして部屋に入るなり、春臣はぎよつとして彼女の肩を叩いて訊いた。目の前で物珍しそうに自らの服装を観察している媛子は、どうやらそれがどういった意味合いの衣装であるのかあまり知らないようだ。

「趣味？ まあ、うちの裁縫は趣味やけど……あ、上手やから褒めてくれてんの？」

椿は一瞬きよとんとしたが、すぐに表情をほころばせる。しかし、残念ながら春臣が言いたいことはそうではない。

「いや、確かに上手だけど。そっちのことじゃなくって。世の中にごまんとある服の中から、どうして、こんな服を作ろうと思ったの

かつていう作製動機を訊いてるんだ」

「え、だってかわええやん」

あっけらかんと答える椿。

「そ、そうかもしれないけどさ……」

春臣は彼女を問い詰めながら、ちらりと媛子の方へ視線を向ける。

白と黒というシンプルな二色で統一されたその仕事着は、とてもそれとは思えないほどのキュートさを振り撒いている。首元、袖口には花柄のレースがあしらわれ、ふんわりと腰元で結ばれたエプロンはシックな黒の背景もあってか、本来の用途を忘れるほどに、上品さを醸しだしていた。

それは、見紛うことのない、完全なるメイド服だった。

媛子はと言うと、先ほどのようにくると回転することもなく、頭につけられたカチューシャが気になるようで、しきりにいじっている。

「でも、本当に、純粹にそれだけが理由なのか？」

「うーん、それだけが理由かって聞かれたら、それだけやないけど」

椿は言葉を濁らす。

「それだけじゃない？」

「うん、せやねん。実は榊君から媛子ちゃんの服のことを頼まれたときに、うちのお母さんに相談したんやけど、男の子には最近こういう服が受けんねんって言われて……」

さもありません、春臣は頷く。

「はあ、なるほど、そういうことか。いったいどうやって青山が母親に相談したのか、なんとなく推測できるところだが、つまり、青山の母親は入念にここ数年の流行を鑑みた上で、男が一番好むと想定した、いわゆる勝負服を作らせた」と

「勝負服？ ああ、せやつたなあ。そんなこと言われた気がする。好きな人を落とすにはこれが一番や、とか、椿なら似合うから大丈夫、頑張りや、とか」

やはりな。春臣は心の中で頷く。

きつと彼女は自分が着て、男の子に見せるための服、という前提を置いて母親に相談を持ちかけたのだろう。

そうなれば、彼女の母親が勘違いしてしまうのも頷ける。

媛子のことを母親に話さなかったのは良かったが、その結果が、このメイド服か。

確かに可愛らしいことは否定しないが、正直、アドバイスの方向性が間違っていていやしないだろうか。春臣は恐ろしい予感に悪寒がする。

彼女の母親についてである。

今回は本来の目的が媛子が着る服だったからよかったものの、もし椿が本気の相談をしていたら、椿がこの恰好になっていたのか。椿の母さん。

いくら流行っているからといって、自分の娘のこの姿をさせるのは、いかななものか。しかも、どうにも先ほどから反応が無頓着な椿を見て、さらに不安になる。

『彼女なら親から言われると、何の羞恥も抱かず、平気で作ってし

まうかもしれない』

ということだ。

メイド姿の、青山か。悪くないかもしれないけど。見てみたい、かも？

春臣は否、と首を振る。

妙な妄想をするな。思考の道筋を元に戻せ。

第一、自分は他に着るものがない媛子の普段着を作って欲しいと頼んだのだ。

だが、これはどう見ても普段着ではない。それに完全に本来の用途を逸脱し、明らかに可愛らしさを演出するという別の意図が結びついた産物だ。

春臣は隣の椿を見る。うれしそうに腕を伸ばした彼女は媛子の服の皺を丁寧に調べていた。

そんな彼女に額に意識を集中させ、テレパシーを送ろうと試みる。こんなものを作られたら、着ている間、媛子を変に意識しちゃうだろ。非常に困る。

と、媛子からの怒りの言葉が聞こえた。

「春臣、どうした。先ほどからずっと椿の方ばかり見て、わしの方をよく見んか」

「ああ、はいはい」

「返事は一回じゃ。投げやりに言うでない。あんまりそんな適当な様子じゃと、天罰を下すぞ」

媛子はきつと春臣を睨みつける。せつかくの衣装だが、そんな怒

った顔をされると映えない。  
ともかく、こんな服を彼女に着させるないように、妨害しなくては。

「またよからぬことを思っておらんか？」

「そ、そんなわけないだろ？」

「ふむ、ならばよし。して、メイドとやらが着るといふこの服じゃが。おぬしはどう思う？」

「……そうだな。とりあえず、お茶を運んできてくれ」

「は？ 何を命令しておる」

媛子の頬がぴくりと引きつる。感想を求めて、代わりに顎でしゃくられ、指図されたのだ。そんな反応になるのも無理はない。しかし、構わず肩を回しながら春臣は続けた。

「実はさっき買い物行ってきて疲れてるんだ。メイドさん、お茶が飲みたいなあ。台所行ってお茶作ってきてよ」

「む、無理難題を申すな。わしのこの体でどうやって茶を作れと？ それに、なぜそんなことをわしに命令する」

「あれ、そのメイドという肩書きが示すものを知らないのか？」

わざとらしく、春臣は言う。

「メイドが示すもの？」

「青山、教えてやってよ。この神様にさあ」

「あ、ええと。あんなあ、媛子ちゃん。メイドいうんはな、家で掃除とか洗濯とか、いろんな家事仕事をする女の使用者のことを言うんや」

「は、はあ？ 使用者？」

媛子があんぐりと口を開ける。

その驚いた反応。してやったり、と春臣は追い討ちをかけた。

「まあ、そういうことだよ。その服着てんだからさ。自動的に媛子はメイド。俺の言うことに従って、お茶持ってきてくれよ」

「い、嫌に決まっておろう」

「なら、さっさとその服を脱ぐんだな。その服を着ている限り、その主従関係は続くらしいぞ」

すると、彼女は春臣の言葉に怒り心頭したのか、三白眼で高圧的な眼光を向けてくる。

「ほう、なるほど。分かった、わしはこんな服などもう着ぬ。お主がそういう態度で臨むのならば、金輪際、絶対じゃ！」

しかし、そんな言葉を投げつけられても、春臣は上手くいったと心中ほっと胸を撫で下ろしていた。これで彼女はメイドの服などもう着ることなどないだろう。いくらこれほど小さい媛子とさえど、同居している人間に日ごろからこんな恰好されるのはいろいろとまずい気がした。

「ええ、そんな媛子ちゃん。せつかく徹夜して作ったのに」

すると、椿が嘆きの声を上げる。

「ふん。椿から言われても嫌なものは嫌じゃ。春臣が態度を改めない限り、わしはどうあってもこの服を着ぬことに決めた」

断固とした決意を漲らせ媛子が言つと、今度は彼女は春臣を振り返る。

「榊君、最低や。なんで媛子ちゃんにこんな意地悪なこと言うん？」

しまった、と思ったのは、その時になってだった。考えてみれば、媛子にその服を着させないということは、彼女が苦労して作ってくれた服をゴミにするというわけで、それはすなわち、媛子だけでなく榊からも攻撃を受けて仕方ない状況を作ってしまうことである。

「あ、いや。その……」

返答に困りながら、急な思いつきで馬鹿なことをしてしまったものだと、自身を罵りたくなる。

「うちが作った服、そんなに気にいらへんかった？」

榊はそう言いながら、すでに目頭に涙が溜まっている。今にも泣きそうだ。

春臣の脳内に小学生の頃、ちよっかいを出しすぎて、女の子を泣かせてしまった後味の悪い記憶が蘇る。まずいまずい。肺の中から水分が抜き取られたような、乾いた息が漏れてくる。

ここで彼女を泣かせてしまうのは計算にはない。

ああ、天啓はないのか。起死回生の天啓は。

ごくり、と唾を飲み込み、意を決して口を開く。

「あ、だから……。俺も思うからだよ」

「な、なんやの？」

「青山の方が、青山の母さんが言うように、その服、似合っと思っから。だから……」

「え？」



「はあ、何を言っておる春臣！」

すると、彼女の顔が一気に華やいたのとは逆転して、媛子が発する負のオーラが倍化した。

しかし、今さら後には退けない。ただ服をもらっているだけの媛子はさておき、せつかくこんな小さなものを苦勞して作ってくれた椿の気持ちを無下にするわけにはいかないのだ。

汗顔の至りではあるが、とにかく言葉を続ける。

「着るなら、媛子よりも青山の方が似合ってると思うんだ」

「そうなん？　うち、こういう服着たことないから。似合う、そうかなあ？」

最初は困惑気味だったが、彼女は機嫌を直したようで、春臣はほっとする。女性を泣かせてしまうという失態は、トラウマを作るほど、罪悪感を感じさせるものなのだ。

しかし、冷たい目はまだ自分を見ていた。

「春臣。どうやらわしに完全に喧嘩を売ったようじゃな」

おっと、こっちの処理が済んでいなかったか。

「何だよ、そうじゃないって。その服は、だよ。さっきのドレスは似合ってたし、他にもあるんだろ？　そっちを着させてやってくれよ」

「うん、ええで」

「いまいち、納得がいかぬが、まあよいか」

媛子が溜飲を下げてくれたようで、春臣はどっと嫌な冷や汗を掻

く。

ただ、良かれと思って媛子の服を作ってもらったのに、なぜこんな人殺しの裁判のような殺伐とした空気にならなければならぬのだ。

いつそ泣いてしまおうかと思ったが、廊下に閉め出されたうえで一人でぐすぐすやるというのも、惨めの極みだと思ったので、止む無く春臣は、そのやりきれなさを腹の底に押し込めることにした。

## 45 邂逅 1 (前書き)

こんばんわ。作者のヒロユキです。

今日はクリスマスイブですね……はい。特にネタもないんですけどね。

なんだか、部屋が寒いのでヒーターの温度を一度上げてみました。それから上着も一枚、脱いでみました。

………すみません。なぜだか、言わずにはいられなかったのです。

チリチリチリ……。

斜陽によって車輪の影が、ぐつと楯円に引き伸ばされている。不快感のない、耳障りのいい回転音がしていた。

町から少し離れた川沿いの道を、春臣は買ったばかりの自転車を押して歩いている。

柘町の北から支流を束ね、その流れを作っている、楡川があった。町の東区を通り、田畑に豊かな潤いをもたらしてくれるその川は、春臣の目の前で悠然とカーブを描き、下流へ穏やかに過ぎていく。

五月の澄んだ空の下、光を湛えた水面は静まることなく、ざわめき、揺れていた。

「……ふう、やはりたまには外の空気も吸わねばな」

長い深呼吸と共に、春臣の上着のポケットから顔を出した媛子が言った。周囲に人の気配がないのを確認して、ようやく這い出してきたのだ。

「そうだなあ。せっかく新しい服を手に入れたんだ。確かに出かけなけりや損だよな」

しみじみと頷いて、春臣は彼女の頭をつい、指で撫でた。彼女はいやいやをして手を払うが、小さい彼女はその見慣れぬ服装のせい、かすいぶんと愛らしい。

「その服、作ってよかったわ。媛子ちゃんも気に入ってくれたみたいで」

すると、腰をかがめた青山が背後からそう言って微笑んだ。

遡ること一時間ほど前。

春臣にとって鬱屈この上ない糾弾紛いなファッションショーも終わった後のことだった。

机の上には着終えた服が散乱しており、その白熱ぶりというか、戦いの余韻というか、言葉にならない激しさを伝えていた。

さすがに疲れを覚えた春臣たちは穏やかな午後のぬくもりに、目的もなくごろりと寝転がり、無抵抗に安らぎあるまどろみの中へ誘われていた。

だが、しばらくして、媛子が突然に立ち上がった。

「せっかく新しい服を手に入れたのじゃ。気分が良い。町へ出かけるぞ」

そして元気よく跳びはね、誰の意見を聞くこともなく、すぐに榊の葉を背中にくくりつけると、遠慮なく春臣の頬を残った葉でぶつたのだ。

それはさほどの痛みのない、かすかすとした微々たる攻撃ではあったが、心地よい睡魔の手招きを妨害するには充分たる破壊力があった。

止む無く春臣は起き上がり、彼女をちゃぶ台に乗せる。ふざけたことを言うな、俺は疲れているんだ、と目を擦りながらふがふがと舌が回らない口で抗議した。

しかし、それで彼女が黙るのならば、この世はもつと住みやすい快適全自動で、天国のような場所になっているに違いない。

当然のことのように、彼女は断固として意思を曲げることはなく、

いつもそうであるように、てんじょうてんげゆいがどくそん天上天下唯我独尊とわがままを垂れ流した。

それはつまるところ、愛用の神楽鈴を振り回し、「天罰が下る、天罰が下る」と癪癢を起こしたわけである。

こうなれば仕方ない、そうなる手がつけられない。彼女の言うことに従うほかなかった。

軽く舌打ちながら春臣は徐に立ち上がる。

そして、ふいに先ほどの外出で買い忘れていたトイレットペーパーのことを思い出し、購入するかどうかと決めかねていた自転車のパンフレットも台所の買い物袋から取り出した。

彼女を連れ出すのならば、他にも目的がないわけでもない。どうせなら、それらの用事も済ませてしまおう。

簡単に身支度をすると、そばの壁を背もたれに、船をこいでいた椿を起こした。散歩に行くと言げると、彼女もついて行きたいということだった。

春臣としては有難いことである。

複数の人間で歩いていけば、媛子と二人で話している最中も、周りからみて不審がられる危険性が低まるのだ。

大きく背伸びした椿は元の着物姿に戻っている媛子を見てこう言った。

「ほんなら、お出かけの服を選ばなな」

「もちろん、そのつもりじゃ」

おおいに媛子は頷くと、迷うことなく一つの服を指差した。

「媛子ちゃんと言ったら神様、神様と言ったら神社、神社と言ったら巫女さんや」

連想ゲームのように椿は歩きながら言う。

「せやったら、その巫女さんの衣装を媛子ちゃんが気に入ることは間違いないで。うちの選択眼に狂いはなかった」

媛子が着ているのは確かに縁起物を表す紅白の巫女服である。シンプルな色の組み合わせがすっきりとしていて良く、これまでの着物のように、幾重にも布がかぶさった重量感がないので、ずいぶん身軽に見えた。心なしか、彼女の身長も伸びたような気がする。

「しかし、青山もがんばるよな。あれだけ服も持ってきたり作ったりしたわけだろ？ 媛子の寸法を取りに来てから一、二週間。その間で用意できるとはとても思えん」

「ああ、これは友達と一緒に作ったんや。人形の服を作るゆつてな」  
彼女はそう言って、大学の友人の数名の名前を挙げる。どうやらそれなりに大人数で取り組んだらしい。彼女の友人が協力してくれたことは有難いが……しかし。

まさか、人形ではなく神様の服を作らされていたとは夢にも思っていないだろうな、と滑稽に思った。

「へえ、そうなんだ。ハハハ」

「何がおかしいん？」

「ううん。ちよっとね」

それから、媛子の方へ視線を落とす。

「とはいえ、考えてみれば、神が巫女の服を着るのはどうなのかな？」

「うん、なんじゃ春臣」

彼女が怪訝そうに顔を上げる。

「巫女つてのはだいたい神にかす傳く人間のことだろう？」

先ほどのメイドではないが、神と巫女との間には完全なる上下関係があるように思う。この世において最も高貴なる存在の神に対し、舞いを奉納したり、神社の運営に携わり、それらの補助的な仕事を任せられる女性というイメージが、春臣にはあった。

それを言つと、彼女は首肯する。

「確かにそうじゃのう。じゃが、それ以上に巫女とは重要な人間じゃ」

「重要？」

「春臣の言う通り、そういつた仕事も巫女の役目じゃ。しかしの、巫女にはそれとは別の役目もある。前にも申したことがあるじゃろう、神の依り代の話じゃ」

「依り代、ええと、この世における神の魂の容れ物か」

春臣は彼女が話していたことを記憶の倉庫から引つ張り出した。

本来、神とはこの世に存在するのではなく、神の世で暮らしているものだ。その神がこの世になんらかの干渉を行う際、つまり、人々に意思や行動を示す時に、その魂が乗り移るための容器が必要になる。それが、依り代である。

「ふむ。よく覚えておつたの」

「ええ、うち、よく分からのやけど」

隣で聞き耳を立てていた椿が困惑しているが、媛子は、



「どうせ、椿に話しても理解できぬじゃろうが」

と一蹴した。何もそこまで直接に言わなくても、と思うが、

「まあ、それもそか」

彼女はあっさりと納得してしまう。全く、椿も椿である。  
ともかく、春臣は話を戻す。

「で、神の依り代がどうかしたのか？」

「言つたであろう？ 依り代とはこの世の森羅万象どんなものでも成り代わることが出来る。もちろん、人においても同じことが言える」

「人が依り代に？」

「そうじゃ、今ではどうかは知らぬが、その昔、巫女は神の依り代となる役目を負うておつた。通常の人間でも、もちろん可能じゃが、巫女は他の人間とは違う性質を持っていた。電氣を通し易い水や金属のようなもの、元々の素質として神との同調率が高いのじゃ」

媛子がしゃりんと鈴を鳴らして、先端を春臣に向けた。

「ふうん、にわかには信じがたいけど、神が憑依し易いつてことか」

「ほれ、他にも聞いたことはないか？ イタコやら、シャーマンなどという言葉じゃ」

「ああ、占い師みたいな怪しげな人間のことだろう？ 神のお告げを口にしたり、いろいろと呪いをする」

「まあ、一般に普及しておる知識としてはそんなものが妥当か。しかし、彼らもまた巫女と同じものじゃ」

「俺は以前からそういう胡散臭いものは信じてなかつたけど、実際

にそういう人たちも神の依り代となつてたつてたつてことか？」

訊くと、媛子は事もなく頷いた。

「今のわしのよくな特殊な場合でない限り、神はこの世で人々に意思を伝える『口』を持たぬ。それゆえ、神にとって巫女や、それに代わる人間はなくてはならぬ重要な存在じゃ。神社などの靈域において、人々が崇める神は彼らに乗り移り、世のためにあれこれと指しを与えた」

「うん」

「人々にとつても、神の言葉を授けてくれる巫女は特別な存在じゃ。この世にいない神が人として姿を現すのが、その巫女じゃからの。その状況において、人々には神と巫女が等号で結ばれるうる高貴な存在であると言える」

「巫女、イコール、神か。なるほど」

じゃから、わしがこの服を着ても、一概に間違いであるとは言えぬ。媛子は言う。

「昔はそのような立場の人間が強い権力を持っていたこともある。神の声を聞けるわけじゃからの。人々も恐れる存在となつたのじゃ」

彼女はここで言葉を切り、ガードレール下を流れる楡川を眺めた。春臣も首を向ける。

枝から千切れた木の葉がその流れの中、あちらへこちらへと翻弄されている。あれが人々が乗った船だとすれば、その船長として人々を導いたのは、神と繋がる力を持つ、巫女なのだろう。

媛子がしばらくしてつづけた。

「じゃからただの神の召使という考えは一方向からの見え方に過ぎ

ぬ。巫女は神からも共存すべき欠かすこと出来ない存在であり、一般人からも特別視される存在であったのじゃ。まあ、といっても、それは大昔の話じゃがな」

「神様と同調することで、権力をほしいままにしていた巫女もいるのか……でも、代わりに体を神に乗っ取られるわけだろう？ いい気持ちはしなさそうだな」

「うーむ、そうか？」

媛子はぴんと来ていないようだが、春臣としては他人に体を好き勝手に使われるというのは想像するだけで総毛だつてしまいそうだ。

「……媛子は、人間を依り代にしたことはあるのか？」

ふと思いついて、訊く。すると、なぜか彼女の表情が一瞬暗くなつた。

「ん、わしか、わしはそんな経験はない。土地を守るであるとか、この世に何か仕事を与えてもらつておるのであれば、その必要もあるのじやろうが……」

「あ、ああ。そうか」

春臣はふいに彼女が仕事を与えてもらったことがないという話を思い出した。彼女は周囲に仕事を任せられるほどの神として認められていないのだ。踏み込んではいけないデリケートな領域に首を突っ込んだ気がして、春臣は心の中で後ずさる。

依り代についてはそのまま深く言及せず、巫女のことを考えることにした。

「巫女つてどうなんだろうな」

「うん？」

「どついつ気分なんだろうな。神に仕えることって。神に体に乗っ取られたり、いくら権力があっても、周囲から恐れられ一目置かれたり、孤独そうだよなあ。それでもうれいことなのかな？」

「うーむ。それはわしにも分らんが」

彼女が首を捻ると、遠くから椿の声が出た。

「おーい、榊君、媛子ちゃん」

彼女は道路脇に立っていた。排水の流れる側溝を越えた先、木々が生い茂る林の入り口で宝物でも見つけたのか、大きく手を振っている。

先ほどから会話の蚊帳の外にされ、退屈だったのか、気付けばそんな場所にいたのだ。

傍まで自転車を押して行くと、彼女は笑いながら林の奥を指差してこう言った。

「ここや、この前この辺りで、うちが迷子になったんや」

唐突な話に、春臣は面食らう。

「はあ？」

「何の話をしておるのじゃ、こやつは」

どう考えてもその歳で迷子は笑えない。

と、ふいに道の向こうから小さくエンジン音が聞こえてきた。目を向けると、川の上流の下り坂から誰かが原付に乗ってやってくる。白い土煙がタイヤの後から巻き上がっていた。

春臣は通行の邪魔にならないよう、自転車を道の端へと寄せる。

原付か。よく見かけるな。

聞いた話によると、この辺りの道は狭いものが多いためか、移動手段として自動車よりもこんなバイクが重宝されているのだそうである。大抵の民家には最低一台の原付か、バイク、自転車などが置かれているというところで、道で行き交うことは頻繁だ。だから、それは何の変哲もない風景である。

しかし、その原付を駆る不釣合いな人物の姿を見て、春臣は瞠目した。

「巫女さん、だ……」

すると、媛子がひゅっとポケットの中に収まる。他人の姿を警戒したのだろう。

用心にするに越したことはないが、さすがに相手の移動速度を考えると、小さな媛子が見えるはずもない。一瞬で通り過ぎてしまいうに違いない。

しかし、予想に反して原付がスピードを緩めた。ブレーキをかけ、春臣の手前で止まる。

どうしたことかと思っていると、巫女姿の女性はヘルメットを取り、そっと笑い、会釈をした。

「どうも、こんにちわ」

「どうも、こんにちわ」

「……ああ、どうも」

春臣は突然のことに驚いたが、すぐに軽くお辞儀をする。

「どうしたんや？」

すると、突然の他人の出現に驚いたのが、青山が駆け寄ってきた。そして、立っている少女の服装を上から下へ、眺めてから、目を丸くした。

「ああ、もしかして……」

口走って春臣の腕を掴み、ぐっと引き寄せると、物珍しそうに目の前の少女を指差した。

「わあ、榊君。本物の巫女さんやで！」

「大きな声で言わなくても分かるって」

すると、にこやかだった巫女の少女の表情が一瞬、僅かに険しくなったように見えた。マスコット人形を前にしているような、椿の言動を無礼に思ったのだろうか。

彼女を刺激しないように、春臣は極力穏やかな声で訊ねた。

「ええと、何か用ですか？」

「いえ、人の姿が見えたので、挨拶をしておこうかと」

「挨拶、ですか？」

「はい。私、向こうの森の中にある千両神社で巫女を務めている者で、瀬戸さつきといいます」

彼女は再び頭を下げた。春臣は、その丁寧な挙措に物腰の柔らかそうな印象を受ける。やはり巫女だけはあつて、日ごろから人々への礼儀は鍛練しているのだろう。

そう思ってから聞きなれない神社の名前を春臣は鸚鵡返しする。

「ええと、千両神社、ですか？」

「ご存知、ありません？」

「すみません。最近ここに越してきたばかりで、土地勘がなくて…青山は知ってるか？」

真横に首を向けると、彼女は静かにふるふると首を振った。

「ううん、うちもよう知らんわ」

「まあ、なんとなくそんな気はしたが。えっと、この辺りでは有名な神社なんですか？」

春臣の言葉に、瀬戸さつきと名乗った巫女は苦笑気味に口元に手を当てた。

「まあ、有名と言えば有名ですが、昔ほど知名度はないかもしれませんがね。もう年に一度の収穫を祝うお祭りも行われなくなりましたし。神社に足を運んでくれる人もほとんどいません」

「そ、そうなんですか」

「でも、どうしてそんなことに？」

すると、さつきは顔に影を作り、少し悲しい笑みを浮かべた。しまった。深く話を聞くべきではなかっただろうか、春臣は少し

後悔する。

「ほら、やっぱりこの辺り田舎ですし。若者は大きな街に出て、人口もどんどん減ってるんですよ。そうになると自然に伝統を受け継ぐという風潮も薄れて行って、今では見事に寂れてしまってます」

予想していたことではあったが、実際そう聞くと、気の毒な感情が先回りし、どう返答すればいいのか迷ってしまった。  
「つい、

「それは……残念な話ですね」

と何の慰みにもならないことを言ってしまう。

すると、場が沈黙した。先ほどまで達者に喋っていた青山も寂しそうに俯いている。やむを得ず、再び口を開いた。

「自己紹介、まだでしたね。僕は榊春臣って言います」

「榊、さん？」

「ええ、この四月から近くの翌檜大学に通っていて、祖父が住んでいた家で暮らしてます」

「へえ、大学生の方なんですか」

話題が変わったためか、さつきの表情がふっと和らいだ。

「うちは青山椿。うちも榊君と同じ大学の学生やで。学部もいっしょやもんな。な？」

すると、それに便乗してか、椿もはしゃいだ声を出す。腕を組んだまま、春臣の顔を覗きこんできた。突然彼女が近くに出現し、少しドキリとってしまう。



「あ、ああ」

すると、さつきの目がきらりと光った。

「あのう、初対面でこんなことを聞くのは不躰かもしれませんが」  
「え？」

「お二人は付き合っただけですか？」

そのストレートな問いに、春臣は弁解のしようがないほど赤面してたじろいだ。すぐさま椿の腕からすり抜け、首をちぎれるほど横に振った。

「な、ち、違うよ。ただの友達さ、な、青山」

「へへえ、さつきちゃんにはそう見えるん？」

「青山、へらへらするな。今すぐ、明白に明確に明瞭に否定しろ！  
勘違いされるから」

「お友達、なんですか？」

疑わしそくに、さつきはじろじろと春臣たちを見る。まるで、春臣と青山の間にある見えない、ふわふわとした人間関係の糸を観察しようとしているようだ。

「その割にはスキンシップが過剰のような」

「元々、青山は他人に触れることに抵抗心がないんだよ。他人を人形とか、ぬいぐるみの類だと思ってるんだ」

春臣がジョークでかわそうとすると、椿は髪を指に絡ませ、不機嫌な顔になる。

「なんやの。うちは神君を人形なんて思うとらんで。そんなものよ  
り、もつともつと特別な存在や」

「や、やつぱり……」

それを聞いたさつきは何かを確信して唾を飲み込む。これには、  
春臣も緊急事態だと弁解体勢を整えた。場の空気を変えようと思っ  
て自己紹介をしたが、それは勘違いという予想外の展開で裏目に出  
ることになった。

頭を抱えながら、青山に注意をする。

「青山、勘違いを誘発する発言は慎め。瀬戸さん、違います。全身  
全霊で否定します」

「で、でも、その自転車……」

彼女は震えた指でまるで幽霊でも見たかのように、春臣の傍らを  
指し示す。

「これが？」

「い、言わなくても分かります。二人乗りですね」

彼女はそう言ってこくりと頷いた。

「は？」

そして何を思ったのか、さつきは見る見る真っ赤になり、恥らう  
ように口元を手で覆った。

「ドラマや漫画で見たことがあります。男の人が自転車をこいで、  
女の人が荷台に乗って、後ろから、その手を回して、坂道を下って  
……あ、そ、それ以上はとて言えません」

この少女はいったい何を言っているのだ。

「あのう、別に二人乗りなんてしませんけど。危ないですし」「でも、恋人同士なら、誰もが一度は通る道なんですよね？」

どこの国の常識だよ。これは明らかにドラマや漫画の見過ぎが引き起こす過剰で甘美なご都合主義の妄想の類であった。現実でそうあることはない。

春臣は猛烈に突っ込みたくなるが、相手は初対面の女性。そこはぐっと堪える。

「だとしたら、申し訳ないです」

すると、急に彼女が謝ったのでどうしたのかと思う。

「何がですか？」

「うちの神社は縁結びの神様は祀ってないんです。主に五穀豊穡、商売繁盛の神です」

「だから、付き合っていないって！」

「ああ、デートの途中ですよ。すいません。これでお邪魔虫は退散しますから」

先ほどの落ち着いた様子とは異なり、ばたばたと何度も何度も頭を下げる。

どうやら、かなり思い込みが激しい性分らしい。春臣の否定の言葉も届いていないようだ。

これでは、あれだ。自分が向かうべき方向を一度見定めたら一直線、後を振り返らない猪である。

「あ、あの。瀬戸さん……」

再び呼びかける春臣の声も無視して、彼女は原付に颯爽と跳び乗った。その身のこなしの軽やかさ、いや、逃げ足の速さというべきか、それは巫女には思えないほどである。

黒髪のポニーテールが夕陽にくるりとなって跳ね上がる。

「それでは、ごゆっくりお散歩を……」  
「だから、違いますって！」

春臣は最後の望みをかけて、手で×のマークを作るが、時既に遅し。

エンジンがかかり、無常にも、原付は走り出してしまふ。夕闇に長い影を従えて、追いつがる暇もなく、彼女の姿は道の向こうへと消えていった。

「ほんならなあー！ さつきちゃん」

それに対し、椿は無邪気に道の真ん中まで駆け出し、手を振った。こちらの心情を全く無視した楽しげな行動に春臣は長くため息を吐く。これはきつく灸を据えておかねば。

これはきつく灸を据えておかねば。

「青山」

「うん。なんや？」

「なぜあんなことをした」

「何の話？」

何かをイタズラな心に従い、意図してとぼけているのか、それとも、にくたらしき天然のおとぼけをかましているのか、彼女は不思議そうにこちらを見つめる。

これを春臣は彼女からの宣戦布告ととった。

いいだろう、しかと謝罪の言葉を聞くまで自らが犯した罪を思い知らせてやる。

腕組みをして、彼女を睨む。

「青山のせいで、瀬戸さんに妙な勘違いされたる」

「勘違い？ 勘違いって？」

「ははあ、まだとぼけるか。」

「俺と、青山が付き合ってるって思われたことだ！」

「ああ、そっちかあ」

「そっちもこっちもねえ。青山がきちんと否定してくれないからこっちなったんだぞ！」

「……しかし」

誰かの声が割って入る。

「え？」

「勘違いされて、まんざらでもない顔をしておったように、わしからは見えなかな」

いつの間にか媛子がポケットから顔を出している。片眉をぴくりと痙攣させ、どうやらご立腹のようだ。

「そんなわけないだろう」

「お主、わしという神がいながら、あのにやついた顔はなんじゃ！」

「何の話だ。地味に痛いから、殴るなって」

そんな様子を見て、椿は他人事のようにくすくすと笑う。

「ふふふ、榊君はもてもてやな」

「……どこがだよ。この殴打という名の非友好的な触れ合いから、どうしてそんな事が言える！」

「先ほどの、千両神社と言ったか？ お主、その神社の巫女の娘にも鼻の下を伸ばしておったのではないじゃろうの！」

「ば、馬鹿言つなよ。変に邪推するなって……」

否定しかけて、言葉が止まる。

待てよ。神社……。

途端、稲妻に打たれたと言ったら大げさだが、それに匹敵するひらめきが脳内で起こった。

「なんじゃ？ 急に黙るとは。それは黙認と取ってよいのかの？」

「ちよつと待て。いい事を思いついた」

「ほほお、さては、わしを言いくるめるだけの理想的な言い逃れを思いついたのか？」

嫌味のこもった彼女の言葉に、春臣は静かに首を振る。

「違う、神社だよ」

「神社？」

媛子が中途半端に口を開けた。

「そう、神社」

「だからなんだというのじゃ？」

「そこには神様がいるじゃないか」

「……！」

彼女が身体を硬直させたのが分かった。自分が言っている意味が分かったのだろう。

それとは対照的に、椿は「1+1」が分かった小学生のようなことを言った。

「そうやなあ。なにしろ神社やからなあ」

「そう、神社だよ」

自分の中でこれまでにない強い確信が生まれていることに春臣は気付いていた。これが、媛子を元の世界に戻すための大きな足がかりとなるに違いない。

餅は餅屋だ。

神のことは神に聞けばいい。

「媛子、神社にも神様はいるんだろ？ その神様に頼めば、媛子を元の世界に戻すための手助けをしてくれるんじゃないのか？」

「……」

「どうして今まで思いつかなかったんだろ。媛子が外に出られるんなら、そういう方法もあったのに。神様に助けを求める。絶対そうだ。それがいい!」

「……」

「なあ、媛子!」

しかし、喜んで跳ね回るべき彼女から春臣に届いたのは、ただならぬ殺気がこもった声だった。

「ならぬ」

その一言である。

「なんだよ。うれしくないのか? 元の世界に戻るための方法が見つかるかもしれないんだぞ?」

「ダメじゃ」

再びの否。

間髪いれずそう答える彼女の表情には、取り付く島のない拒絶の意思が宿っていた。

春臣の宙を掴んだ拳が力を失ってだらりと垂れる。意味が分からない。

なぜ。

なぜ彼女は頑固にも、首を縦に振ろうとしないのだ。

「どうしたんだよ。不貞腐れんかって」

「不貞腐れてなどおらぬ!」

「じゃあ、どうして? 行くだけでも行ってみようぜ」

「うるさい!」



「なっ……」

「うるさいうるさい！ 絶対に……絶対に、ならぬと言ったらならぬのじゃ！」

ついに堪忍袋の緒が切れたのか、今度はすさまじい剣幕で、そう言い放った。

びりびりと、鼓膜が揺れるのが分かるほどの音量だ。

春臣には即座に理解する。

これ以上、彼女に何を言っても無駄だ。

その瞬間、春臣は彼女と自分の間に越えられず、且つ、衝き崩せない一枚の鉄壁がそりたったのを感じた。それは、分厚く、ひんやりとしていて、呼びかけても向こうから応答があることはない。

ただ、空しく春臣の声がじんわりとこだまするだけで、壁は空しく音を跳ね返すのみだ。

ゆっくりと息を吸い込んでみる。

彼女が自分の案を良しとしないのであれば、当然、神社に赴くわけにはいかなかった。

「……媛子」

青山も目を伏せ、俯いている。

「……媛子ちゃん」

すると、二人の驚きの表情に、媛子も言い過ぎを自覚したのか、急に勢いを失って、ポケットの中につずくまってしまう。

「……突然、怒鳴ってしまいましたすまぬ。じゃが、今はどうしても、そこへ行きたくないのじゃ」

声は弱弱しいが、そこからでも彼女の断固とした意思が読み取れた。

「そんなに、か？」

「うむ」

「どうしても、か？」

「……うむ」

決まりだな。

「そうか、媛子がそう言うんなら、無理にとは言わないよ」

「春臣、済まぬ」

「もういいって、でも、その代わりに、今回は約束してくれ」

「約束？」

「ああ」

春臣は頷く。

「媛子が、一人で抱え込んで、どうにも出来ない悩みがあるのなら。今でなくていい。いつか必ず、話してくれ」

「春臣……」

「いいか、約束だからな」

「う、分かった。努力はする」

渋々ながらも了承してくれた彼女に春臣は笑いかける。たとえ、今でなくても、きちんと説明してくれる約束を取り付けたのだ。

僅かでも前進である。

帰るか、と話しかけながら、ゆっくりときびすを返した。上流に向かつて歩いていった足を反転する。

川の流れに従って、春臣たちは歩き出した。

新品の自転車が再び規則的な音を奏で始める。

しかし、神社には向かわなかつたものの、そこにいるかもしれない神のことを、春臣は諦めたわけではなかった。

キーになるのは、あの巫女さんだな。

春臣は考える。

きっと彼女なら神社の神に対する詳しい話を誰よりも知っているに違いない。そして、媛子という神が存在している以上、その神社にもおそらく、きっと神がいる。

うまくいけば、媛子への協力を頼められる。

今度、近いうちに神社に祀られている神様について聞いてみよう。ついでに、椿と自分が付き合っているなどという誤解も解かないといけないし。

そう、来週の休日にも。

心中でそう一人ごちた春臣だったが、その後、彼女とは三日と経たぬうちに再び会うことになる。

それも、思いもよらぬ形で。

しかし、このときの春臣の心中で、そんなことは、微塵にも思っていないはずがない。

#### 48 さつきと哲夫（前書き）

読者の皆様、新年あけましておめでとうございます。  
作者のヒロユキでございます。

作者と致しましては、本年も、小説の熟達に向けて一層、精進していく所存です。

どうか今年も、この未熟者の作り話に、なにとぞお付き合い下さいますよう、読者の方にはお願い申し上げます。

あまり前置きで長々と話しても、「冗長でございますので、どうぞ、本文の方へお進みください。

#### 48 さつきと哲夫

春臣たちと別れた後、さつきは一人で千両神から指示された場所へと向かっていた。

つい数分前の春臣たちとのやり取りはすでに念頭になく、自らが成すべき目的だけを意識している。

山々の影が遠く、西の町並を覆い始めていた。傍らを流れる川の流れが綺麗だ。

川沿いの家々では明かりが灯り始めている。人々はもう家路につき頃なのだろう。

しかし、さつきはまだ帰るわけにはいかなかった。口元に力を入れて、前を見据える。

これから、向かう場所。

あの老人が暮らしていた家。

さつきは心の中で念じて、ぐつと奥歯を強く噛んだ。

半年ほど前のことを思い出していた。

あれは、いつもと変わらない、秋の日のこと。

ちようど今と同じ黄昏時に神社に訪れた人物がいた。

さつきは拝殿の中を箒でごみを追い出す最中で、その老人の姿を見て、はっと身構えた。

農作業でもしていたのか、泥にまみれた作業服を着た、見覚えのない白髪の老人である。

このとき、さつきは千両神社で巫女の仕事をしようになって、もうかれこれ十年近くの月日が流れていた。

そのため、良く分かってのことなのだが、この神社を訪れる人間というのは、ほとんどが常連客だ。彼らの多くは近所に住む、かなり高齢の老人たちで、いつだって、今にも倒れそうになりながら、杖を突いてやって来てくれる。

さつきはそんなお得意様同然の老人たちに毎度恭しく挨拶をし、拝殿へと招き入れるのが、大きな仕事となっていた。

たまには、そこでお茶の一杯でも差出し、和やかな雰囲気の中で、長々と続く老人たちの昔話に相槌を打つのも多々ある。それが、日常で、変わることのない日々のサイクルだった。

だから、このとき、その見慣れぬ老人を目にして、さつきがぎよつとしたのは言うまでもない。

いったい誰だろう。

しかも、こんな時間に。

さつきはそう思いながら、箒を動かしていた手を止めた。

もちろん、いくらこれほど寂れた神社でも、ごく稀に観光客がやって来ることもある。だが、そういう人間は大抵、鬱蒼と茂る木々の中に囲まれた、神秘的な場所の不思議な引力に引き寄せられ、やってくる、というよりは、ほとんど迷い込んでくるのである。

しかし、この老人を迷い観光客と決め付けるには、かなり根拠に乏しい。なぜなら、彼が観光客であるというならば、こんな風に着古された作業服などに身を包んでいるはずはないからだ。

静かに、どこか鼻歌を歌うように参道を歩いている老人は、物珍しそうに、苔むした燈籠の中をのぞきこんでみたり、わざわざしゃがみこんで、参道に埋め込んである石を触ってみたりしていた。

それに、迷っているとしたら、こんな風に余裕しゃくしゃくとはいかないはずだわ。

遠目からさつきはふうん、と唸る。

しばらくしてから、とりあえず駆け寄り、挨拶を試みることにした。

「どうも、こんにちわ」

すると、老人は木立に向けていた目を徐にさつきに向ける。ゆったりとしたその行動は、突然真横に立ったさつきにも動じることのない冷静さに満ちていた。

目を合わせようとして、びくりと肩の筋肉が痙攣する。

細い体躯に似合わぬ、鋭い眼光にさつきは射竦められたのだ。

「やあ、お嬢さん。ここが千両神社かね」

訊ねられ、はっと我に帰って頷く。簡単に自己紹介をすると、老人は柔和な笑みを浮かべた。

「若いのに、ずいぶんしっかりしているのだな。わしの孫にも見せてやりたいものだ」

「……お孫さんがいらっしゃるんですか？」

「ああ、君と同じくらいの歳頃だが」

物思いに耽るように老人は目を細め、それから、拝殿へとつかつかと歩み寄った。

「これが社殿、というものかね？」

「はい。こちらが拝殿になります」  
「拝殿？」

まるで、初めてそういう言葉を聞いたかのように、老人は眉をひそめた。

妙な引っかけりをさつきは覚える。どうやら彼は拝殿を知らないようだ。

「社殿、というものかね？」という推定の意味が含まれた言葉からも、この老人にはあまりに神社の知識がないことが窺える。

普段、神社に来ることがないのだろうか。それならば、とさつきは簡単な神社の知識を披露することにした。

「拝殿は、簡単に申しますと、参拝客の方が礼拝を行う場所です。ほら、よく賽銭箱が置いてあって、手を叩いて大きな紐付きの鐘を鳴らす、あの場所です」

老人が大きく頷いて、楽しそうに手を叩いた。

「では、神はそこにいるのかね？」  
「は？」

「賽銭箱の前で、どのどいつは幾ら入れたなどと勘定しているのではないのかね？」

「冗談で言っているのか、本気で言っているのか、老人は何かを試すようにさつきを覗きこんだ。

その瞳がさつきとは違い、優しく丸くなっている。

「冗談、なのかしら。」

そう思うと、さつきから笑みがこぼれる。



「ふふ、そこには神はいらっしゃいませんよ。大抵の神社では本殿があつて、その中にご神体として祀られています」

「今度は本殿だと？ それはどこに？」

すると、老人の足が好奇心に駆られるように拝殿の後ろに回り込む。

そこには、神社の正面から見える森とは違い、黒々とした木々が重なる暗がりの森への入り口があつた。いったいどこから持ち込まれたのか、およそ車一台分はありそうな大岩が二つ、行く手を阻むように、入り口を囲んでおり、重々しい注連縄が巻かれている。

老人は、岩の手前に立つて、興味深そうに石の表面を見ていた。放っておけば、そのまま奥に入って行きそうな空気だ。

「あ、ちょっと待ってください」

さつきが制す。

「この神社には、本殿がないんです」

「本殿がないとはどういうことだ。何者かに火を放たれ、焼かれたのか？」

首だけ振り返り、老人は正義感に満ちた凜々しい眼差しになる。放火魔がいるのならば、わしがとっちめてやると言わんばかりだ。

「そんな物騒なことじゃありませんよ。始めからないんです」

「……それは神がない、ということか？」

さらに彼の表情が険しくなる。

これに対し、さつきは胸を張って否定した。

「いいえ、神様はちゃんといいます!」

もちろん、以前からからさつきと千両神との交流はあったし、この町を守る偉い神だという認識があった。

大昔から人々を見守り支えてきた者として、幼い頃から尊敬していたし、さつきにとって第二の母とも呼べる優しき存在だった。

だから、他人が神がいるか否か、どう考えているかは別として、訊かれれば、さつきは迷うことなくそう言うことに決めている。

「土地を守り、人々の安寧を願う、すばらしき神様です」

「ふうむ、そうか」

すると、老人が驚きに満ちたような、感服したような、そんなため息をつく。

「神は、いるのか」

「この先の森の奥ですよ。うちの神社は千両の木を神が宿る神木として祀っているんです。」

木が神の依り代ですから、この神社には本殿がありません」

説明すると、ぼつとしていた老人が今度は無邪気に笑う。

「木が、神とな。面白い。ならば、見せてもらえるかな?」

「だ、ダメです」

さつきは首を振る。

それは出来ない相談だった。

注連縄をかけてある岩と岩の間には細く道が山に向かって伸びている。

先にあるのは、選ばれたものだけが入ることを許される、真の霊域なのだ。代々巫女を務めてきた瀬戸家の人間ならば、まだ入ることを許されるが、一般人にそれをさせるわけにはいかない。

そもそも、素性も分からない、どこか怪しい老人だ。

「申し訳ないですけど、一般の方は立ち入り禁止なんです」

「なんだ、神には会えないのか？」

老人はまるで、約束していた友人に会えないかのような気軽さで少し怒ったような顔をした。

「せっかく、確かめてやろうと思ったのに」

「確かめる、ですか？」

さつきが訊く。

「ああ、本当にこの世に神はいるのか、ということを、この目でな」

顎の上の白髭を撫でながら、老人は薄く笑う。石の上に手を当て、念じるように目を閉じた。

「はあ……」

「実は、ある人物の薦めでな、神に関することをいろいろと吹き込まれて困っているんだ」

「吹き込まれて？」

「君は、杉下、という老人のことを知っているか？」

杉下の、名。

ぐっと腹の底からひんやりとした感じが広がる感覚がした。さつきは腕の筋肉が硬直した気がした。

時折、神社を訪れ、あの嫌らしい睨みでさつきをなめる男の顔が浮かぶ。

「知っているんだな？」

「……はい」

自分でも分かる。その声は紛れもなく、震えていた。

老人はそこから何かを感じ取ったのか、

「やはり、彼の評判はあまりよくないらしいな」

とぼつりと言う。

「……え？」

驚き、目を瞬かせるさつき。

「わしはな、半年ほど前にここへ引越してきたばかりの人間だ。楠哲夫と言う。よろしく、お嬢さん」

そう言って、老人は手を差し出してきた。

## 49 不在の家（前書き）

作者のヒロユキです。

どうも、年が明けても相変わらずの男です。

この作品もなんだかんだで、もうすぐ五十話ですね。

やはり相変わらずのノープランで書いておりますゆえ、自分自身が気がつかない矛盾点がないかと不安です。不安で不安で、夜も眠れません……すいません、嘘をつきました。

ええ、僕自身も少しずつ読み直してみようと思いますが、読者の方で、ここは直したほうがいいと思われる箇所がございましたら、なんなりとお申し付けください（ストーリー以外のことでもいいです）。以上、作者からのお願いでした。

## 49 不在の家

ようやく背後を竹林に囲まれた、青瓦の一軒家を見つけ、さつきは庭に原付を止める。

久しぶりに見るその家は、楠老人がかつて耕していた畑の姿もなく、雑草が生い茂り、寂然としていた。日陰の中にぽつんと佇むその一軒家は、主を失い、どこか湿っぽく人目を避けているようにも見える。

以前には、ここを通ると声をかけられたものだが。

さつきはまだ、あの老人の土まみれの笑顔を覚えている。昨日のことのように、はつきりと。

ぐっと胸にこみ上げる物悲しさを目を閉じることで記憶の奥に押しやり、すっと懐に差し入れてある扇子に触れた。

それは神社を出る直前、千両神から持たされたもので、特別な神の力を持つ扇子だった。

数時間前のことである。

『その異空間の近くに潜んでおる者の正体は先ほども述べたように、はつきりと分らん。とはいえ、力をそれほど持つておるようにも見えん。とてもさつきに害を成すとは思えぬ。が、油断は禁物じゃ。思わぬ攻撃に会うやもしれぬ』

千両神は緊張を滲ませた声で、これが単なるお遣いでないことを暗に示した。そして、自身の魂の枝が飾ってある花瓶が置かれた台

の引き出しを見ると話す。

そこは普段は他の者に触れられないように、しっかりと施錠してあり、さつきが持たされている鍵でしか開かない。

鍵を開け、取っ手を掴み引つ張ってみると、小さな長方形の木箱が入っていた。

どこか見覚えのあるものだと思い、蓋を開けると、中に入っていたのがその扇子である。

ぱらりと開くと、眩いばかりの豪華な金箔が貼られ、扇面の右下には千両の枝の絵がまるでそこにあるかのように繊細に描かれていた。

相当に高価なものであることは一目瞭然で、軽く扇ぐと、仄かに甘い花の匂いが立ち、心を落ち着けてくれる。

『知っておるじゃそう？ さつきの祖母の扇子だ』

千両神が説明した。

『これは、わらわの神力が込められておる。使い方は以前説明しておるはずじゃ』

それに頷いたさつきに対し、

『よいか、これはもしもの時に使うのじゃ。さつきの身に何か予期せぬ危機が訪れたとき、お主を守ってくれる。じゃから、むやみやたらと使うものではない。神の力は軽率に扱うべきものではないことは肝に銘じておるはずじゃ、分かるの？』

神はそう念を押したのである。

「……千両様」

さつきは手の中でその扇子をぎゅっと握り締めると、力を溜めるように息を止める。

そうすると、心に勇気が湧く気がした。

今朝は少々千両神に意地悪なことを言ってしまったが、さつきの本心では彼女を、かの神を、尊敬して止まない。なぜなら、千両神はさつきの良き友人であり、先生であり、人生の相談相手であり、第二の母であり、土地を守る偉い神であるのだ。

それに、いったいこの世界でどれほど、さつきのように直に神に仕えている人間がいるのか、というと、きつとほとんどいない。

瀬戸家に生まれた人間として、選ばれた人間として、さつきはそれを誇りに思っている。

千両神のような素晴らしい神の役に立てるのであれば、それは紛れもない喜びなのだ。

雑草が無遠慮に伸び放題の庭からぐるりと回りこみ、さつきは意を決して、玄関に立つ。

話では、この家の辺りで、不審な気配を千両神は感じているという。

人間であるさつきではあまり感じることは出来ないが、なるほど、この家の内部には他の場所とは違う異質な重力があるようだった。ざらつくやすりが肌に触れているような、ひりひりとした痛みのようなものを感じる。

この中に、何かあるのは間違いなさそうね。

ドアノブに手をかける。



しかし。

ガチャガチャ。

当然のことながら、鍵がかかっていた。

あーあ。こつという事態を想定してなかったなあ。

すると、

「あ、ちよつと。そこの巫女さん」

背後で自転車のブレーキ音が聞こえて、さつきは振り返る。

そこには、自転車のスタンドを下ろし、こちらを見ている一人の少年の姿があった。

「はい？」

「もしかして、この家に用事なの？」

まさか、他人から声をかけられるなどは予想をしていなかった  
ので、咄嗟に対応できない。

「え、えつと」

と言葉を濁し、手をわたわたと振る。

「実は俺も用事があるんだよ」

彼は自転車のかごからなにやら袋に包まれたものを取り出すと、  
こつちに歩いてくる。さつきに疑問が浮かんだ。

「この家、ですか？ 空き家ですよね？」

その問いに少年は不思議そうな顔をしたと思うと、すぐに相好を崩した。

「以前まではな」

「以前？ では、今は？」

「人が住んでる。俺と同じ年の男だよ」

全くの初耳だった。

「前までここに住んでたじいさんの孫だったよ」

「……！ あの人のお孫さんですか」

楠老人が亡くなったことは杉下家の人間から伝え聞いていたが、まさか、そのお孫さんが住んでいるとは。

「近くの大学に通ってるらしいぜ。ほら、山の向こうの翌檜大学だ。名前は榊、榊春臣、だったかな？」

「……」

少年の言葉に混乱しながらも、さつきは今の話から重要な部分を抜き出した。

さかき。それが住人の名前。

そして、それが脳の奥で何かに引っかかった。

「あ！」

指を鳴らす。

榊春臣だ。つい数十分前に会話をした少年である。青山と言う名

の少女と一緒に歩いていた。

「何だ？ 知ってるのか？」

さつきは激しく頷く。

まさか、あの少年がここに住んでいるとは、考えもしていなかったことだ。挨拶ついでに少しはなしをしたが、こんな偶然に出くわしていたのだ。彼への興味が湧き、さつきの足が初対面の少年の方へ踏み出している。

「榊の知り合いさんか」

「あ、し、知り合いって言うほどじゃありません。少し話した程度で」

さつき会ったばかりということとは咄嗟に告げなかった。居場所を伝えれば彼がそこに向かってしまう可能性がある。さつきとしては、彼をもう少し引きとめ、詳しく話を聞きたかった。

「へえ、でもこんな美人さんとお話しをする仲とは、榊ってやつも隅には置けないな」

すると、少年はさつきの顔を眺めてそう言う。突然の美人発言に狼狽した。

「あ、な、私が美人なんて、と、とんでもないです」

「そうか、充分綺麗だと思うけど？」

彼はにやにやと笑う。気を取り直すために咳払いをしてさつきは質問した。

「あなたは、その榊さんとは親しいんです?」  
「親しい?」

彼は苦笑して手を横に振った。

「ちょっと彼とは一騒動あってさ。今日はその、お詫びみたいなもんさ」

手に持っている袋を持ち上げ、さつきに見せる。そこには色とりどりにパック詰めされた駄菓子が見えた。おおよそ、この年代の少年が持つには不釣り合いの子供っぽい代物である。

「お、お菓子ですか?」

少年は少し返答に困った顔をしてから、頷いた。

「そう、まあ、なんとというか、菓子が好きらしくてよ。持ってきてやったんだ」

「男性なのに、珍しいですね」

「ともかく俺もそんなに親しいわけじゃない。一度しか会ってないし」

「はあ」

彼はさつきの横をすり抜けると玄関に立ち、そのままノックした。こんこんという優しいものではなく、どこか現金を催促に来た借金取りのように無遠慮なものだ。

「おい、榊! 居るのか?」

一度しか会っていない人間に対し、少々横柄過ぎる呼びかけでは

ないか、とさつきは思わないでもなかったが、注意はしなかった。

「不在ですよ。鍵もかかっていますし」

それに、彼はデート中なのだ。

「せっかく来たっていうのに、困ったやつだな」

ふんと鼻から息を出し、小石を蹴った彼の前で、さつきはふうむと首を捻る。先ほど出会った榊少年との会話を思い出していたのだ。確か、この四月から大学に通っていると聞いていた。

それを考えると、千両神が言っていた、「一月ほど前から」という異空間の表れの時期と符号する。

これは偶然と言えるだろうか。いや、限りなく怪しい。今回の異変に彼が何らかの関わりを持っていると思っただけでもないだろう。

しかし、さつきの方が、あの老人のお孫さんかあ。

さつきはぼんやりと彼の姿を思い出す。ちよつと頼りなさそうにも見えただけ。

とにかく、今は家の内部への潜入はさておき、この家に住んでいるという榊春臣という人物の情報を集めなくてはならない。さつきは頭のスイッチを切り替える。

「あの、もう少しお話しをお聞きしてもよろしいですか？」

口をむつと突き出し、なにやら小声で文句を言っているらしい少年に話しかけた。

「話って？」

「榊さんのことです。それから、この家について」

「ああ、それくらい問題ないよ。俺に分かることならなんなりとどうせ不在なら出直すつもりだし、用事もないしな」

「ありがとうございます」

さつきは骨の内側まで叩き込まれた礼儀作法にのっとり、丁寧に腰を折って頭を下げる。顔を上げると、少年が手を差し出してきていた。

「俺は暮野木犀って言うんだ。君は？」

「私は、瀬戸さつきです」

握手に応じながら、さつきも自己紹介をする。

「巫女さん？」

暮野木犀の目がさつきの服装に向いた。

「向こうの森の中の千両神社で。まあ、まだまだ私なんてほんのひよっこですけど」

「へえ、千両神社か。まだあるんだ。俺、子供の頃に行ったきりだから、その名前も忘れてたなあ」

そう言われて、苦い味を感じる。千両神社が人々の記憶から薄れているのは紛れもない事実だったが、それをこうして人の口から聞くことは、やはり耐え難いことだった。

と、木犀も発言がまずいと思ったのか、

「あ、ごめん。失礼なこと言っちゃったな。俺、そういうことに気が回らなくてさ」

「いえ、良いんです。千両神社が無くなってないことの方が、奇跡みたいな話ですから」

「高校生？」

暗い空気を察したのか、木犀が話題を変える。

「はい。三年生で、受験生ですね」

「へえ、ちなみに俺は浪人生。受験に失敗した哀れな男さ」

彼は試験に落ちたことなど屁にも思っていないのか、へらへらと笑う。

「でも、ってことは年もほとんど違わないよね。だったら、敬語なんて使わなくていいよ」

「そ、そうですか、で、では」

「だめだめ、それじゃ敬語じゃん」

「あ、すいません。人と話すときはこうなっちゃう癖なんです」

「……まあ、いいや。ここで立って話すのも面倒だし、少し川沿いの辺りまで歩かない？」

それは願ってもないことだった。このまま家の前で話し込んでいれば、散歩、もとい、デートを終えた榊少年が戻ってこないとも限らない。

彼と今ここで鉢合わせになるのは、まずい。ある程度、敵地に乗り込む心の準備だっている。それに、彼についてはまだ情報収集を優先すべきだ。了解の返事をする。

「はい、喜んで」

しかし、目の前の木犀と目が合った瞬間、あることが頭に浮かん

だ。

さつきと、目の前の少年が並んで川沿いの堤防を歩いている姿を想像してしまったのだ。先ほどの春臣と椿の様子が重なり合う。

それってまるで、デート？　まるで恋人同士じゃない。頬が一気に加熱される。

無理もない。これまでの彼女の人生経験の中で、一番に無縁だったのは、色恋事だったのだ。

同年代の女子が好きな男子の話で盛り上がり、付き合ったり離れたりをしている間、彼女はずっと神社で老人たちの終わりなき昔話に耳を傾けていた。それゆえに、彼女は異性に対し、かなりの偏った考えや、地に足のついていないふわふわとしたロマンチックな恋愛を想像するだけに留まっていたのである。

それゆえの、初心な反応なのだ。

さつきは額に薄っすらと汗を掻き始めた。

「……」

今まで、男の人とそんなことをした経験なんてないし。ど、どうしよう。

すると、そんなさつきを木犀が怪訝そうに見つめてきた。

「あ、何か？」

ただでさえドキドキしているのに、言葉が躓きそうになる。

「肩にゴミがついてるぜ」



彼が笑って、さつきの肩に手を伸ばす。

「えっ！」

咄嗟のことに驚いた体が防衛本能を見せた。

すつと胸元に伸びた手で扇子を抜き取り、さつきは反射的に木犀の頬を殴っていたのである。自身でも驚くほどの、目に留まらぬ早業だった。

「あ……」

そして、嫌な沈黙の後、木犀が悲鳴を上げた。

## 50 神様の家？（前書き）

作者のヒロユキです。

ついに大きな節目の五十話目です。

最近読んでくれる人が増えているようで、筆者としてとてもうれしいです。今日は少しおいしいものでも食べようかと画策しております。

## 50 神様の家？

「本当に、本当に申し訳なかったです」

さつきは木犀の赤くなつた頬を見ながら、何度も頭を下げる。

「いや、もういいよ。考えてみればこっちも悪いから。ゴミを取るためとはいえ、いきなり女の人に触ろうとしたんだ。デリカシーがなかったよ」

彼はさつきに気を遣わせまいと思っているのか、痛みが滲む張れた細長い扇子の跡を手で覆い隠し、無事なことを示すためか、優しく微笑んだ。

二人がいるのは、春臣たちが散歩をしていた川の上流から、数キロ下つた広い河川敷が広がる堤防の斜面だった。

そこにはコンクリートで作られた階段があり、二人は段差に並んで腰掛けている。太陽の光が夜の藍色に負け始め、山並みが見渡す限り、紫色に霞み始めている頃だ。

先ほどまで川辺で遊んでいた少年たちの姿も消え、きつと自宅で夕飯でも食べているのだろう。

すると、木犀が背後の段差に寄りかかるように身体を逸らせ、空を仰ぎながら言う。

「だから、おあいこだよ。もう謝らなくたっていいって。ただでさえ瀬戸さんからは榊の家の前からここに来るまでずっと謝られてばかりだから、俺にはむしろ恐縮だよ」

「そう、ですか？」

しかし、そう言われても、さつきの申し訳ないと思う気持ちはまだわだかまっている。普段から礼儀を重んじている瀬戸家の人間としては、他人を、それも初対面の人間を殴ることなど言語道断だ。きつと千両神に知られれば、厳しく叱られることだろう。だが、木犀はくつくと何がおかしいのか笑っている。

「なんだかこつちも謝らなくちゃいけない気がしてさ。俺って謝られ慣れてないし、どつちかと言えば、謝る側の人間なんだ」  
「謝る側の人間？」

できるならば、将来、そんな専門職には就きたくない。

「俺って細かい失敗が多いんだよ。小さい頃から、そうだったな。大雑把だし、注意力がないし、妙な勘違いをすることもあるし。バイト先でも、学校でも、家に帰っても。きつと受験の時もそうだったんだ」

普通の人と言えば、なんともネガティブな発言だが、彼はそれを少しも鬱屈とした雰囲気を作らずに言つてのける。まるで、決まりきった方程式の解き方を解説するかのごとく簡単に、だ。さつきはその裏に隠された、彼の底抜けの明るさを感じ取る。

「その度に周りの人間に謝つてばかりだ。せつかくいろいろと世話してもらってるのに、ダメだよなあ」

苦笑交じりに言つて、「そうだ」と傍らに置いていた袋を引つ張つてくる。そして、中身を取り出した。先ほど、榊少年に渡すと言つていたお菓子だ。

「これ、変な話だけど、謝られ過ぎたお返しに」

指先で摘んで、さつきに差し出してくる。

「え、良いんですか？」

「いいよ、別に。バイト先に行けば、余った菓子なんて毎回もらえるし、榊にはまた今度持つて行くことにする」

だから、ほら。

彼にさらに勧められ、断わる理由もないさつきは礼を言って受け取る。「ロングチョコバー」ととりりと溶けたような文字が並んだパッケージで、いかにも駄菓子といった感じだ。

こんなものを食べるなんて何年ぶりかしら。

さつきは久方ぶりの子供っぽい食べ物に新鮮な感動を覚えた。

これまではずっと、老人たちと付き合って和菓子ばかり食べていた気がする。

「むっ、こいつはかなり旨いぞ」

袋を破いて一口食べて、さっくりとした食感を味わっていると、隣の木犀はスナック菓子を頬張っていた。なんとも香ばしい匂いがする。

「おいしそうですね」

つい、口走ってしまっ。

「食べる？」

「あ、ええと……」

「遠慮せずに食べてよ」

彼にそう言われ、仕方なく手を伸ばす。すばやくスナックを口に入れ飲み込みながら、彼に食いしん坊と思われなかったか、それだけ不安だった。

「どう?」

「あ、おいしいです」

しかし、本当のところ、味などろくに感じていなかった。気恥ずかしさを覆い隠すだけで精一杯だったのだ。

これは、違うのよ。久しぶりにスナック菓子の匂いを嗅いでしまったから、つい、魅力を感じてしまったに過ぎないのよ。そうよ、絶対そう。

ああ、もう、どうしておいしそうだななんて、言ってしまったんだろ、私、馬鹿?

頭の中で小さなさつきがじたばたと身悶えていた。

すると、早くもスナックを食べ終わった彼がさつきを眺めて言う。

「それで、聞きたいことがあるんじゃないか?」

「は、そうでした」

自分のとんだ失態のせいで本来の目的をすっかり忘れていた。

とりあえず手元のチョコバーをすぐさま平らげ、さつきは気を取り直して質問する。

「榊さんって、どんな人なんですか?」

「どんな人? うーん、普通じゃないか? 悪いやつには見えな

「ただし、冷静で真面目なイメージがだな」  
「普通、ですか」

さつきは脳内で先ほどの榊少年を思い浮かべる。

確かに、外見も特に遊んでいるようでもなく、落ち着いた実直そうな顔をしていた。一緒にいた青山という少女との関係から見ても、仲は良好に見え、話をした印象も温厚そうである。

それに、さつきに彼女との関係を指摘されると、慌てふためき案外可愛らしい一面もあるようだった。

「あ、そういえば」

ふいに、木犀が何かを思い出したようだった。急にイタズラっ子のように鼻をこする。

「あいつ、結構ドジなんだよ」

「ドジ、ですか？」

「思い出してみれば、榊のやつ、俺と初めて会ったとき自転車に乗ってた俺とぶつかったんだ」

「事故ですか？」

そうならば、洒落にならない。しかし、彼にはさつきの不安に思う気持ちは伝わらなかったようだ。冗談をしゃべるように、半笑いである。

「あのときばかりは俺の失敗じゃあないぞ。榊のやつ、意識がなかったのか、足元が覚束なくていきなり道の端を走ってた俺の前に飛び出してきたんだ」

「……！」

瞬間、さつきの中に弾かれたような衝撃が走る。

「榊さん、その時、正気でした？」

「う、うーん。倒れた後は助けてくれたし、きちんと謝罪もしてくれたから、問題はなかったけど。ふらついてた時は、ちよつと異常だったかな。何かショックなことでもあったのかもかもしれない」

しかし、さつきは木犀の推測を胸中において否定し、自分の推理を構築させる。

その事故が榊自身に問題があり引き起こされたのではなく、そこに第三者の手が加わっていたのではないかという、仮定を立てたのだ。

おそらくは、何者かによる憑依。

つまり、生き物ではなく、実体を持たない靈魂のようなものが彼の中に侵入し、精神を同調させ、内側から操ろうとしていたのかもしれない。

彼が住んでいる家によからぬものがあるとすれば、充分に考えられる仮説だった。

もしそうだとすれば、事は一刻を争う事態だ。彼の中から早急にその靈魂を抜き取らなければならない。放置すれば、死にも至る可能性がある。

しかし、さつきはその考えに行き着くと同時に、違和感を感じる。なぜなら、先ほど出会った春臣からはそんな異常な気配を感じなかったのだ。何か得体の知れないものが彼にとり憑いていたのだとすれば、もっと日常の動作にも悪影響を受けているはずである。

じゃあ、勘違い？



しかし、さつきの中で全ての疑問が消えているわけではない。あの家の中に危険を感じるものが存在しているのは疑いようのない真実である。

さらなる不審点を聞き出してみなくては。

「他に、おかしいことはなかったですか？」

「他、かあ」

「木犀さんはあの家の中に入られたんですね。そこでおかしいことには気がつきませんでした？」

「うーん」

「あることには、あつたけど」

これはまた、好都合な展開だ。さつきは目を輝かせて訊く。

「本当です？ だったら話してくれませんか？」

しかし、彼は突然眉根を寄せ、疑惑の念を表情に示す。

「でも、そんなに必死になるなんて、いったいどういう事情があるんだ？ さつきさんは榊のことを調べようとしている理由は何なんだ？」

「あ、えっと。その……」

思わず言葉に窮した。どうやら調子に乗りすぎたようだ。

普通、大した面識のない人間のことを、あれこれを聞き出そうとすれば、周りから不審な目で見られたとても不思議ではない。その認識を忘れていた。

彼が疑うのも無理はないことだ。

「答えられない、のか？」

情報の核心に迫っていながら、つい、はやる気持ちでフライングをしてしまったもどかしさに、手の中で食べ終わったお菓子の袋を、くしゃりと握りしめる。

「大事な、ことなんです。もしかすると、榊さんの身に何か悪いことが……」

「悪いこと？ それはどんな？」

「ええと……」

まさか、千両神から聞いたことをそのまま話すわけにはいかない。神だの異空間だのという胡散臭い説明を聞いて、人が先ず疑うのは話している人間が正気かどうかだ。

さつきは咄嗟に言い訳を考えた。

「実は私、風水をかじってまして。それで、榊さんの家、とても運氣が悪そうなんです」

「な、何？」

彼は驚いたようで、一瞬顔の動きが止まる。

「ほ、ほら、あの家って、周りを竹林に囲まれて、あまり陽が当たってなさそうでしょう？ そういう場所って、陰の気のたまり場と なっていることがよくあるんです」

もっともらしいことを言って、さつきは彼の目を見る。もしも、彼に風水の知識があれば、いい加減なことを言うなと切り返してくる可能性があるが、様子を見る限り、そうには見えない。

「へえ……」

と感心したように目を丸くしている。どうやら、上手くいったようだ。

なかば、人を騙していることをへの良心の痛みを感じつつ、

「ですから、浅学ながら、そのことでアドバイスをしたいと思っていました。そのために、家の中や榊さん本人に不運の兆候がないかと調べたかったです」

こう理由をまとめた。

さつきは息を吞んで彼の次の一声に意識を向ける。ここで嘘をつけ、と不審の念を強くされると、もはや交渉決裂だろう。彼からの情報は得られないし、榊少年に怪しい人間がいると告げられ、警戒される危険もある。

さあ、彼の返答は信用か疑惑か。

しかし、意外なことに彼は笑った。

「ハハハ、だったら大丈夫だ」

大きな口を開けて、何がおかしいのか、身体を揺さぶりながらの大笑だ。さつきは耳も目も疑った。

「何がですか？」

しっかりと息を吸ってから、彼は言う。

「あの家には、あの場所を守ってる神様がいるんだ」

「神様!？」

「そう、緋桐様だよ」

木犀はふふんと自慢げに鼻を鳴らした。

## 51 カミノカミ(前書き)

どうも、すいません。昨日活動報告で更新すると言っておきながら、出来ませんでした。申し訳ないです。

さて、ご報告があります。先日、この作品の総PV数が5万を突破していることが判明しました。まさかこれほど読まれるとは、想像していなかったので、少々驚いています。読者の皆様、ありがとうございます。

まだまだ頑張つて書き続けていこうと思うので、これからもお付き合いをお願いします。

## 51 カミノカミ

それにしてもなあ。

春臣は夕食の蕎麦を咀嚼し、つるりと飲み込みながら思う。

それにしても、どうしたものかなあ。

この胸の内で灰色に煙り、曖昧模糊として、それでいて空虚で、砂漠のように漠然とし、どちらに傾くか定かではない、天秤のような気持ちがある。

その不安定すぎる感情の根底でぼやけた影が一つ。

今、春臣の目の前におわせられる、緋桐乃夜叉媛である。

彼女は机の上に座り、専用の小さな器に、同じく小さな爪楊枝のような箸を入れ（最近自身にちょうどいい大きさの食器を作ったようだ）、興味深そうな顔で口を結び、テレビを見ている。

長寿のバラエティ番組だ。芸能人が壇上に並んで座り、お題にあわせて赤裸々なトークを繰り広げている。男性の司会者がゲストの苦労話に耳を傾け、ぼろぼろと涙を流していた。

媛子はそのな彼らを見ながら、思い出したように蕎麦を啜り、飲み物に口をつける。そんな彼女に特筆すべき普段との相違点はない。

しかし。蕎麦を箸で摘む。

最近、彼女の様子が、大きく変化してきていることに、春臣は気付いている。中でも自分に対する態度だ。

いきなり、

『お主と夜のデートじゃ』

とか、言い出したり、

『本当に、お主は優しい男じゃの』

とか、遠い目をして頬ずりしてみたり。

今日だって、瀬戸さつきと言う少女に、春臣と椿が付き合っていると勘違いされたことに関しても、妙な反応を示していた。

あれではまるで、彼女が嫉妬していたようで……。

まさか、な。

春臣はお茶を啜る。

だが、彼女が時折見せる言葉や表情の奥に、これまでとは別種の、一種独特な人間らしさを感じるのとは否定できない。そして、その正体が何であるのか、春臣は未だ把握しきれていなかった。

ずるるり。

少々多めに蕎麦を飲み込みながら、考える。

だから、なんとかして、彼女が自分をどう思っているのかを、調べたい。調べなければ。

彼女の中での自分の認識が、ただの都合のいい世話人ではなく、いかなる存在へとシフトしているのか。

神が、人を好きになることがあるのか？

春臣への、恋愛感情があるのか？

あのデート（もどき）の際に抱いたあの疑問、その真実を確かめたい。

だが、それを問い詰めるために、直接的な質問を投げかけることは控えたかった。なぜならば、ただでさえ春臣には、他人に比べて恋愛経験値が少ない。

悲しいかな。これまでの人生で、彼は恋仲になるほどの女性とめぐり合ったことがなかったのである。もちろん、近づくとうちに恋に落ち、想いを寄せた女性は幾人もいるが、余裕ぶってクールを気取りたいがために、想いを告げるといって、恋への肝心の第一歩を踏み出したこともない。

なんともみっともない話ではあるが、それが真実であり、紛れもなく春臣が色恋事に対し、常人以上に控えめな人間であることを示している。

そして、その自身の性質によく気がついているがゆえ、春臣はいつだって恋とか愛とかへの直進ルートを選ぶことはない。湯のみの中のお茶が熱いのか、冷たいのか、もしくは程よい加減なのか、それを舌先で確かめるように、石橋を叩いて渡る用心を忘れない。

そう、何事もいきなり足を踏み出すことは危険だ。遠回りでも、地道な確認作業が必要なのである。

うむ。

春臣は誰に向かうでもなく、自分に対して頷いた。

その判断に異論はない。

しかし、だとすればこの場合、遠回りな確認作業とは、どんなものがあるのだろうか。

どうすれば、一番分かり易く、明確に彼女の気持ちを判断できる？

「うーむ」

それに、もし、もしも仮に、彼女が自分のことを好きだったら、どうすればいいのだ？



春臣の思考が思わぬところに飛んだ。  
今まで想定していなかった、自分の仮定が的中した後のことである。

「いったい、どう反応すればいいのだろう。自分も好きだと答えるか？」

「おいおいちょっと待て。落ち着け。自分は彼女を好きなのか？」

「ずる、り。」

吸い上げた蕎麦が途中で不自然に止まる。むせ返らなかったのは、幸運なことだろう。

「ええい、細かい事を悩んでいても答えなど出ない。男は実行あるのみ。」

春臣は強引に舵を切る。

とにかく、話題をそれとなく恋愛方面にもって行こう。

「いいか、落ち着け。あくまでさりげなく、だ。」

箸を置いて、春臣は口を開く。

「あ、あのさ。媛子」

「……うん、なんじゃ？」

テレビのトーク番組から我に帰ったのか、彼女は一瞬遅れて反応する。

「ええと、か、か、神」

神でもやはり恋愛をするのか、そう訊ねたかった。しかし、不慣れな緊張でもった春臣に、彼女は予想外な反応を見せる。

「髪？ わしの髪か？」

そう言つて、紅の前髪をひと撫でする。ちゅるりと彼女の口に吸い込まれた蕎麦の、幾万分の一の細い線のまとまりが、艶めいて揺れる。

「……え、ええと。そ、そだよ。媛子の髪つて、その、綺麗だよな」

無惨にも、心がへし折られる音を聞きながら、春臣は返した。  
全くもつて、不覚である。

神と、髪。

その同音語を彼女に勘違いされた上、春臣も空気に流された返事をしてしまった。これでは、せつかくの確認作業が台無しではないか。心中で軽く舌打ちをする。

しかし、結果としては悪くないかもしれない。春臣の中で、別の情報が読み込まれた。

いつだったか、何を読んだのか、好きな異性から容姿を褒められるということは、女性にとって嬉しいことだと聞いたことがある。

そう、この質問で上手く彼女の反応を引き出せれば、求めるべき疑問の答えにたどり着けるかもしれない。特に直接的ではないし、春臣にとって理想的な問いかけだと言える。

それに考えてみれば、彼女の髪については以前から気になっていたことではあるし、この際質問しておいても、なんら問題は生じないだろう。

「髪、か？」

「そう、なんて言うの？ 緋色とか、茜っていうのかな。そんな色の髪なんて生まれてから見たことないし。もしかして神様って全員そんな髪をしているのか？」

以前から、彼女には話を聞いているが、どうにも神と人間は、姿形に大差はないが、体質的に異なる点が多くあるらしい。髪の色もその一つであるのかもしれないと思ったわけである。

しかし、彼女は首を振る。

「いや、そうではないぞ。神の世界広しと言えど、このような髪の色はわしだけじゃ。まあ、わしが知る限りの範囲ではあるが」

媛子は片手でさらりと髪を散らばらせる。

「そうなのか。へえ……」

「しかし、お主も中々目の付け所がよいの。わしのこの艶やかな髪に魅了されたか？」

人差し指の先を春臣に向かってくるくると回しながら、彼女は言う。

「べ、別に魅了されたわけじゃない。ただ気になったから訊いただけだ」

本当は違うことを訊こうとしていたのだが。唐突な言語事故による、不測の事態だったのだが。

すると、媛子は長髪の先の辺りを掴むと春臣に見せるように持ち上げる。

「仕方ない、では、特別に分けてやるか、お主も困った奴じゃの」  
意味が分からず、首を捻った。

「ちょっと待て、分けるってなんだ？」

「うん？ お主にわしの髪を一房、切り取って与えてやるうかという提案じゃ」

これはいったいどういう趣向なのだろうか。春臣には少なくとも、頭を千切って与えるアンパンマンとは違うように感じた。しばしの沈黙の後、少ない知識に基づき、ようやく搾り出した見解を述べた。

「俺が、そんなものをコレクションにするとでも思っているのか？」

春臣が言うと、彼女は口元を引きつらせて後ずさる。

「コレクション、集めるのか？ わしがいないところでこっそり取り出して眺めるのか？ 矯めつ眇めつ、ため息つきつつ眺めるのか！ きしよい。きしよいぞ、春臣！ 不潔じゃ！」

そして、

近寄るなあ！

彼女はいつもの鈴を取り出して、「たあ、たあ」と振り回す。が、しかし、それはとんでもない誤解である。断言しておくが、別に春臣は変態なのではない。

「あいな、違うって。俺はそうすること以外に、髪の毛を持っておくことへの意味を訊ねたいんだ」

すると、きよとんとして彼女は首を曲げる。

「意味、あるであろう？ お守り代わりじゃ」

「お守り？」

「そうじゃ、古より、髪には人を邪悪から守る神聖な力があるのじや。特に女性の髪というものには不思議な力があり、数本持ち歩くだけでも充分にそのご利益に与れるぞ。さらに、神の髪ならそのご利益は計り知れぬな。それを特別にわけてやろうかと言っておるのじゃ」

しかし、それに対し、素っ気無く春臣は返す。

「別に、いらない」

さすがにそんなものを後生大事に持っているのは、なんとも女々しい気がしたのである。すると、彼女は態度を一変させ、ぎりぎりと歯噛みして罵った。

「ば、馬鹿にしておるのかあ！」

「してないよ。怒るなって」

どうどう。両手で彼女を制すと、少しだけ怒りが収まったのか、不機嫌そうに一度蕎麦を啜る。そして、これまでの会話を噛み砕くように飲み込んだ後で、しらけた目で春臣を見た。

「だいたいどうして今、髪の話など始めた？」

始めたのはそっちだろうという言葉は飲み込み、

「それは、ただ……純粹に髪の色が気になったただだよ」

「本当にそれだけか？」

「え？」

「ほんとうに、それだけなのか？」

「それだけ、だけど……」

意外にもしつこい追及に、思わず蕎麦に伸ばす手が止まった。視線が一点に定まらず、春臣の動揺が浮き彫りになる。

彼女はもしかすると、自分の心を読めるのではないのか、というぞっとする予感に気がついたのだ。

そして、次なる発言により、その考えは一気に信憑性を増す。

「本当は違うことを聞こうとしたのではないか？」

へし折られた心が、ブルドーザーに轢かれ、木っ端微塵になったようだった。全ては砂塵と化し、茫漠たる虚無の宇宙へと吸い込まれていく。

こうなればもはや、修復は不能だ。廃品回収に出すしかない。いたいこの先、何を問い詰められるのかは分からないが、そのどれに対しても、まともに返答できる自信がなかった。

「……ええと」

「……」

「その……」

これでは、ダメだ。彼女の反応を確かめる以前に、自分が彼女から反応を試されている。

すると、媛子が鈴を鳴らして、何かを思いついたように怪しく微笑んだ。

「頭の髪ではなく、木から作られた紙じゃろう？」

「はい？」

「じゃから、髪ではなく、紙じゃ」

口元を隠すために飲みかけたお茶を吹き出すかと思った。

髪と紙。

またしても、同音語だ。

「紙のコップでジュースを飲みたいと申そうとしたのじゃろう？」

「はあ？」

「もしくは、紙の入れ物に入った食後のケーキを食べたいと申すつもりではないか？」

「……」

全く、この神ときたら。

そう思つて、春臣は言葉が失つた。まさか、自分の発言をいよいよに弄ばれた結果、彼女の目的のために利用されてしまうとは。

媛子は物知り顔で、目配せをしてくる。

「いつもはわしからねだるから、自分から話をするのが恥ずかしかったのであろう？ まったく仕方ない奴じゃの」

恥をかかされたままではたまらないと、即座に春臣も反撃する。

「それは媛子が食べただけだろう？ だいたい、どこに『紙』から始める周りくどい説明をする必要があるんだよ」

「それは、お主が素直でないからじゃ」

「それは素直じゃないんじゃない。ただのひねくれ者だ」

「だいたい、素直じゃないのは、そっちもだろう。」

「まったく、春臣は食いしん坊じゃの」

湯のみに手を伸ばしながら、彼女は子供に向かう母親のような台詞を言う。

「ほれ、ケーキを持ってこんか」

しかし、春臣はそれを見ながら、あることに気がつく。

「……今の媛子は、色気より食い気って感じだよな」

「うん？ 何か申したか？」

「いや、なんでもない」

作戦は見事に失敗だが、まあ、いいか。

春臣は思う。

今は、まだ、このままでも。何気ない、彼女との生活を送るだけでも。



## 51 カミノカミ（後書き）

今回は、久々に媛子たちの話です。

元々はこんなどうでもいい話を入れるつもりはなかったんですけど、さすがに主人公たちが長い間ほったらかしというのは申し訳なくて書きました。

本当に急ごしらえで作ったので、オチが思い浮かばず、悶々としていました。でも、何とか書ききったぜ。がんばりました。

## 52 決意のさつき

その日、木犀と別れて帰宅したさつきは、出迎えた祖父に素っ気無く返事をしただけで、腑に落ちない気持ちを抱えたまま重たい足を引き摺り、二階に向かった。

階段を上り、一番手前の自分の部屋にもぐりこむ。白い壁紙に必要最低限の家具が置かれた殺風景な室内で、唯一その空間に和みを与えているクマのキャラクターのクッションに俯けで倒れこむ。

ばふり、と空気が押し出され、埃が舞い上がったのが分かった。親に見つかれば叱られそうな行為だが、今のさつきは、それがどうでもいいと思えるほどに疲れていた。いや、正しくは麻痺と言うべきか。それとも、疲労と混乱が濃縮された脳内麻酔の効果とも言うべきか。

とにかく、さつきの脳内の小人がクエスチョンマークを抱えたまま走り回り、体の各所のコントロールが一時的におろそかになっているような気がしていた。

「ぶわっ……」

さつきはクッションにうずめていた顔を横に向け、クロールをすすめるように息をした。新鮮な空気が肺に入り込み、少しだけ、意識が明晰になる。

すると、同時に先ほど木犀少年から聞いた話が蘇ってきた。

「何が、緋桐様よ」

彼が話していたこと。

「緋桐様って何よ」

神様だなんて。

あの時、あの後、彼が嬉しそうに語っていた言葉……。

『信じてもらえるか分からないけれど、本当なんだ。姿は見えないけどよ、どこかから声がしてさ、俺の事を言い当てたりして、いやあ、神様ってやっぱりいるんだね』

あまりのことに、さつきはしばらく言葉を失ってしまった。

あの場所に現れたもの正体は、カミサマ!?

違う。違う、そんなはずない。

さつきは心の中で強くその結論を拒絶する。

なぜなら、あの千両神がいる。彼女が柊の地を見張っている限り、勝手にこの地へ他の場所から「神」が侵入してくることは出来ない。ほぼ不可能と言ってもいいほどだ。

いくら、以前に比べて力の衰えた神とはいえ、土地に住まう神たちを管理し、統率できないほど衰弱しているわけでもない。それが出来るからこそその産土神うぶすながみなのである。

だとすれば、木犀少年が話していることがおかしいことになるのだ。

千両神の言う「正体不明の何か」が、彼の言う神なのであれば、勝手に出入りできないこの土地に気付かれずに入ってきた相当な力を持った神ということになる。しかし、仮にそうだとしても、千両神ならば、柊町に居座る巨大な力にいつまでも気付かないということはない。

それに、千両神も言っていたではないか。侵入者の力は弱く、危

害を加えるほどではないと。

おそらく神が正体を見破れないのは、異空間なるものの力がその何者かに作用し、都合のいいフィルターとなり、神の眼をたまたま妨害しているのだろう。

となれば、そんな弱小な存在、恐れるに足らなかった。神と言うにも、当然値しない。

「だったら、どうすればいいんだろ？」

さつきはクッションの上でもぞもぞと動きながら考える。クマの鼻がさつきの耳で押しつぶされていた。

「千両様に危険はありませんって、報告する？」

いやいや。

さつきは首を振る。

まだ納得が出来ない。まだその未知なるものとの接触をしていないのだ。

さらに、さつきの胸の内に滞ったなんともいえない不快感がある。さつきにはこれが苛立ちの一種であることに気がついていた。

あの木犀少年のすごいだろ、と自慢げに笑った顔。あれを思い出すと、むーっと腕を振り上げて暴れたくなるような、いても立ってもいられない衝動に駆られる。

千両様ではない、正体不明の存在。

そんな存在が、神様と呼ばれて、こうして人に受け入れられている。どこから現れたかもしれない、そんな奇妙奇天烈なものを。

「おかしいわ、絶対におかしい！」

クマのクッションの耳をさつきはぐつと握りつぶす。

本当にすごい神様っていうのは、どこからともなく中途半端な現れ方などしないのだ。

そうよ。本当の神様っていうのは、千両様みたいな神様のことを言うんだから。古くから同じ土地を守り、人々の平和を見つめてきた、偉大な神。

千両神を尊敬するさつきは、断じてそんな存在を許すわけにはいかなかった。

もしもこの土地に災いをもたらしてきたというのなら、尚更放ってはおけない。

神様への報告はまた今度だ。

さつきは決意する。

私が、私が、そんなやつは追い払ってみせる。千両神が直接手を下す必要すらないわ。

いくら普通の人間の私でも、大丈夫よ。

するり。

さつきは胸元から細長い物を取り出す。パラリと開くと、神々しい金箔が光った。

「私には神の扇子がある」

この力があれば、追い払うことなどわけもない。

そして、千両様に私は褒めてもらうのよ。

でも。

そこで問題に気がついた。

あの紳少年である。

もしも、彼が「その存在」とグルだった場合、一人であの家の中に侵入するには危険があった。そうでなくても、あの家に居座る彼という住人は、さつきの任務の邪魔に可能性が高い。

いくらあの人の孫だからとって、余計なことをされては困る。彼には大人しくしてもらい、さつきが調査をし易い状況を作る必要があった。

そう。どうにかして、彼の弱みを握るべきだ。

でも、どうやって彼の弱みを知るのだ。その方法がなければ、さつきの計画は絵に書いたもちだ。

「うーん……」

だが、一度しか会っていないし、彼の弱点など判るはずも無い。

「はあ……」

さつきは重いため息をつく。

やはり、無茶はするまいか。

自分はただ調査だけに徹し、千両様に報告した後で、協力を仰ぐ。

そう考えてから、さつきの目にある物が映った。机の横、本棚の文庫本である。それらは、さつきの恋に対する貧弱な知識を少しでも補おうと、彼女が買い集めた恋愛小説の山であった。

「あ、そうか」

良い事を閃いた。

あるではないか。彼の弱点が。

今日出会った時に、さつきは知ったではないか。

「あの人に……」

少々卑怯な気もするが、これを利用しない手はない。なによりも、この土地を守るために、千両神にもっと認められる巫女となるためののだ。

さつきはそう決意すると、疲れた身をベッドに横たえ、夕飯までの短い眠りについた。

一方、その頃。

千両神社において。

「うーむ」

社殿の背後。

地元の人間たちからかつて恐れられた神聖なる領域。その森の奥。小さな祠の中に植わった大きな千両の木がある。

普通の人には聞こえない、不思議な神の声がそこから聞こえてきていた。

「やはり、さつきに頼まず、わらわ自身が調査に向かふべきであつただろうか」

この地の守り神、千両神の声である。

「あの子にはまだまだこういう類のお遣いは難しいかもしれんし」

姿は見えずとも、祠の辺りから聞こえてくる。

「しかしとはいえ、あまり神社を留守にするのもまずい。それにわらわは特に静の者、植物と繋がり深い神じゃ。植物の体では思うように動けぬし、動く者たちへ乗り移るのは不得手であるからなあ」

短いため息をついた。

「まあ、さつきに乗り移るといふ手もあるが、しかし、あの子にそれをさせるのは気が引けるのう」

しばらくの沈黙の後で。

「まあ、不安じゃがしばらく様子を見るか。何も問題が起こらなければ良いが」

そう呟くと、風のない森に不自然な木々のざわめきが起こり、しばらくして、何もなかったかのように静まり返った。



### 53 嵐の予兆

翌日の夕方。

帰宅していた春臣は、二階の勉強部屋でペンを回しながら、小難しい専門書を読んでいた。

それは大学で出されたレポートのためで、明後日までに提出をしなければならぬ。その思わぬ厄介さに頭を悩ませていたのだ。

高校までは、ただひたすらにやれと言われた問題だけを解いていけばよかったが、こうして自分で文献を調べ、その上で自己流の解釈を加えた文章を書かねばならないとなれば、かの有名な「読書感想文」に匹敵する面倒臭さだ。いや、それを軽く凌駕すると言っている。

先ほどから、レポート用紙に数行の文章を書き進めてみたが、早々に手詰まりを感じている。

さらに、期限が迫っているというただならぬ緊張感からか、春臣の憂鬱な気分にはさらに拍車がかかっていた。

「うーん……」

うなりながら頭をむしり、カップのコーヒーに口をつける。すると、ほろ苦さと濃厚な香りが脳内を満たし、気持ちをリラックスさせた。

少し、気分を変えるべきだろうか。ゆっくりと背伸びをする。

「春臣！」

だが、残念なことに、気分転換はしばし持ち越されそうだ。

「春臣！ 椅子に座って何をのんきにしておる！」

あの厄介者が昼寝から目覚めたらしい。

春臣は首を回し、足元から叫んでいる小人を見下ろす。

「のんきに見えたのなら心外だな。これでも俺はかなり切羽詰っている方だ。今ならいくつも連載を抱える漫画家の苦労が分かる気がする」

すると彼女はぶすりとした表情になった。

「漫画家の苦労など知らぬ。それよりも神の苦労を知れ」

「一日中部屋でぐうたらしてる神様のどこに苦労があるんだ？」

にやにやしながら言い返す。

「何を言う。神には常に多くの浅からぬ憂いがあるのじゃ。なにしろ、日々、この世で住まう人間たちを見下ろし、誰に天罰を下そうかと目移りしてしまうのじゃからのう」

「なんだよそれ、今の媛子には関係ない話じゃないか。それに、楽しそうな顔して言うな。全然憂いてないだろ！」

「まあ、確かに。わしは仕事を任されておる神ではないし。この世に対する知識も薄弱じゃ。じゃが、今は目の前に絶好の『人間』がおる。天罰を下せなくもない」

彼女は怪しく笑ってぺろりと舌を出す。

「冗談はよせ」

「ふふふ。それより春臣、『あれ』がないぞ」

と、いきなり媛子が代名詞を使うので、春臣には何のことだかさっぱり分からない。彼女にしてみれば、それだけで察しろと聞いたのだから、超能力者じゃあるまいし、簡単には不可能だ。

「あれ、とはなんでございましょうか、神様」

とりあえず丁寧に春臣は訊ねる。

「何、とな？」

すると、彼女は目線で神棚の辺りを示す。

「榊の葉に決まっておるじゃろう？」

「へ？」

春臣がつられて見上げると、確かに、今まで枝にたくさん茂っていた葉が一枚残らず、無くなっている。つい数日前まではいまだ青々と花瓶に入れてあったのに。

「ま、まさか……」

春臣は唾を飲み込む。

「媛子が全部食べたのか!？」

「真顔でそんなことを聞くな！ わしはそのへんの草食動物ではない」

気を取り直して、春臣は訊いた。

「じゃあ、どうして？」

「ほれ、昨日居間で……」

そう言われて思い出す。椿が媛子にいろいろな衣装を着せるために、居間の机の上に榊の葉を散らばらせていたのだ。

今思えば、あれはおそらく安全策をとったのだろうと春臣は思った。

何しろ、着替えている最中では媛子はいつものように葉を身に纏うことが出来ない。葉が体に触れていないと彼女は外の世界で身体を保つことが難しいことを考えると、代わりに、足元に葉を敷き詰めることにしたのである。

春臣は合点がいった。

確か、それなりの量だったはずだが、ここから千切っていたのか。

「掃除してないから、あの部屋にほったらかしのままだよな」

「じゃから、さっさと持ってこぬか。あのまま放置しておれば、葉が枯れ、使い物にならなくなってしまっ」

「……はいはい」

いつもながらの命令に、不服ながらも了解して、春臣は椅子を立つ。

レポート作製の途中ではあるが、自分以外にそれを取りにいける人間もいないので、仕方がない。

だが、春臣はため息をつく。

彼女が生活出来るのはこの不思議な異空間が存在しているおかげだが、こうして葉の力を借りなければ外にも出ることさえままなら

ないとは、大いに面倒なことだ。

いったいいつまでこんな状態が続くのか分からないが、なんとかでも早急に打破する必要があるだろうと思う。

しかし、残念なことに、今のところこれといった実現性の高い案はない。

その事実になんか暗澹とした心持ちになりながらも、春臣はドアのところまで振り返り、

「それじゃ、取ってくるから、大人しくしてろよ」

と娘に向かうように軽く手を振った。

「わしは子供ではない。それくらい待っておる」

案の定彼女が口を尖らせ、それを見て苦笑する。それからドアを閉め、階段を下りながら再び真剣に考えた。

彼女を元の世界に戻す、その方法についてである。

「千両神社、か……」

昨日耳に挟んだ有力な情報を、彼は呟く。

まったくの偶然ではあったが、その神社で巫女をしている瀬戸さつきという少女に出会えたことは幸運だった。

なぜなら、彼女の助力を得られれば、媛子を救うための何らかの対策を取れるかもしれない、そう思いついたからである。

千両神社に祀られている神。その神と接触できるのならば、媛子を元の世界に戻してやることも容易なのではないか、と。

おそらくそれが現時点における最善の方法であると春臣は捉えていた。

なぜか、媛子が神社に向かうことを嫌がっていたことが気がかりではあるものの、今は四の五の言っているときではない。なんとしても近いうちに神社を訪問すべきだ。

春臣はそう考えながら居間に入ると、まず光を遮断していたカーテンを開けた。すると、昨日のままの衣服と葉っぱが散らばった部屋の底面が露わになる。

「……にしても、こんなにあるとはな」

両手で掴めるほどだと思っていたが、榊の葉は春臣の想像以上に多く、掻き集めても持ちきれない量だった。

少々対処に迷った拳句、着ていたパーカーのポケットに少し突っ込むことにする。

そして、ポケットがちょうど一杯になった時。  
ピンポン。

玄關の呼び鈴が鳴った。

「客か？」

珍しいな、と思った時、聞き覚えのある声がする。

「榊君、うちやうち。遊びに来たで」

「……青山か」

春臣は袋に詰めようとしていた葉を机に戻し、少し俯いて、腰に手をつく。

毎度毎度、よく遊びに来るやつだ。

春臣の記憶が正しければ、彼女にも自分と同様にレポートが課されているはずで、それを明後日までに仕上げなければいけない状況

のはずである。

のんきに人の家に遊びに来る暇があるのかよ。  
そう思いながらも、

「今行くよ」

と返事をしてから居間を出て、廊下を進んで下駄箱の辺りまで行く。すると、今度は催促するようにドアがノックされた。

「榊君、もう入ってもええ？」

どこかそわそわとした椿の声は、何か待ちきれない気持ちを隠しているように聞こえる。

一瞬、何事かと春臣は戸惑ったが、とりあえず了解した。

「うん……いいけど？」

「じゃあ、お邪魔しまーす」

そして、ドアを開けて入ってきた青山の姿を見た次の瞬間、春臣は彼女の背後に立っていた意外な人物に呆気にとられた。

「あ、あれ？」

「どうも」

彼女は一日前と同じ綺麗なお辞儀をし、玄関口に立っていた。白と赤の巫女の服装に長いポニーテールの彼女はきりりと引き締まった印象を与えた。

「えっと……瀬戸、さん？」

春臣が名前を口にすると、彼女は再び頭を下げる。春臣はつい今しがたさつきのことを考えていただけに、突然の登場に驚いた。なぜ、彼女がここに？

「ほら、お先にどうぞ、さつきちゃん」

「はい」

「どうして、瀬戸さんが？」

春臣が不思議そうに訊くと、青山が嬉しそうに答えた。

「実はな、偶然にも講義が終わった後、大学の門の近くでばったり会ったんや」

「大学、で？」

さつきはそれに頷いている。

「それで、さつきちゃんが神君と話しがしたいって言うもんやから、こうして連れてきたっていうことや。簡単に言うと、そんな感じ」

椿は自信満々に説明するが、春臣はその偶然という言葉に違和感を覚えた。

なぜなら、春臣が知っている限り、あの翌檜大学の近くに高校生（春臣は、彼女の昨日の話ぶりからして少なくとも大学生ではないと判断していた）がそうそう来るとは思えなかったのである。

街中ならまだしも、広い敷地を持った大学が立地しているのは、中心地をかなり離れた山中であり、特別な用事でもなければ訪れることはまずない。

仮に彼女が大学の見学に訪れていたとしても、昨日の今日で彼女に会うなどという奇遇なことがあるのだろうか。



その上、さつきは春臣に話があると言っている。

ここから導き出される結論としては、椿とさつきの出会いは偶然ではなく、最初から彼女が春臣に話があり、そのために、彼女に話していた大学の校門で春臣が椿を待っていたと考えるのが自然だ。

通常であれば、こう考えるのだろうが、椿は偶然という奇跡を信じきっているようで、瞳を輝かせている。

まあ、それはさておき。

瀬戸さつきが自分にどんな用があるかは別として、向こうから来てくれるとは、春臣には願ってもないことだった。

「いいよ、入って」

笑顔で対応する。彼女にはいろいろと質問したいことがあった。

「どうぞ、中に入って」

「すみません。お邪魔します」

しかし、彼女がそう言って、春臣が招きいれようと背を向けかけたときだった。

入り口の段差に足をかけたさつきの目つきが急に険しくなつたと思つと、いきなりすばやく一歩後退する。

そして、音もなく背後に立っていた椿の前に片腕を突き出すと、ぐっと彼女をドアに押さえつけ、動きを封じた。

「じつとして！」

「え、さつきちゃん？」

突然のことで、椿は目を瞬かせている。

「お、おい！」

思わぬ事態に、春臣も上手く声が出ず、対処法の判断もつかないままで、棒立ちになってしまふ。

「いったい、何が起きているんだ？」

疑問を脳で認知するのに精一杯で、指先まで麻痺してしまったように体が動かない。

そしてふいに、動揺した春臣とさつきの目が宙で交わる。

すると、先ほどまでの微笑はどこへやら、物言わぬ石像のような冷たい視線で、彼女は冷たくこう言う。

「榊さん……あなたの彼女さんに危害を加えられなくなかったら、大人しく私の言うことを聞いてください」

### 53 嵐の予兆（後書き）

どうも、ヒロユキです。

読んでくれている方は分かると思いますが、最近、更新のペースがかなり乱れています。前に公言したとおり、最低一週間に一度は更新しようと思っっていますが、忙しくなったので、当分の間以前よりも、ゆっくりしたペースで書いていこうと考えています。

具体的には、五日か六日くらいの間隔の更新になろうかと思えます。以上、作者からの報告でした。

## 54 悪しき者

「ど、どういう、ことだ？」

目の奥がずんと沈むような、そんな衝撃の後、春臣はようやく声を出した。掌が汗ばみ、眉間の辺りが、妙に熱くなった気がする。この状況が示す意味とはなんなのか。さつきの敵意に満ちた行動が、なぜ自分たちに向けられているのか。

春臣は思考を巡らせるが、少しも理解が出来ない。第一、昨日会ったばかりの人間から、これほど非友好的な接触をされるとは、誰が予想できるだろう。

そんな春臣の混乱をよそに、

「動かないでください。わ、私、武器を持っていますよ」

と、さつきは服の隙間を指差す素振りを見せる。

どうやら、冗談ではないようだ。春臣の中の僅かな希望的観測はすぐに潰えてしまう。

「金でも欲しいのか？」

一番可能性が高そうな安直な理由を訊いてみた。

「お金？」

すると、ドアに押さえつけられたままで、椿が能天気なことを言う。

「さつきちゃん、せやったら諦めなあ、榊君金欠やし」

「青山、お願いだから黙っててくれ」

「静かにしてください！ 私は本気ですよ！」

椿の言葉で、場の空気が緩みかけたのを感じ取ったのか、さつきが声を張り上げる。

しかし、春臣はすでに椿の気の抜けた発言で、冷静さを取り戻していた。

「何が本気なのか、事情を説明してもらえるか？ こっちは何がなんだかさっぱりなんだよ」

「と、とにかく私の言うことを訊いてそれに従ってもらいたいんです。それさえ守ってもらえれば、何も危害は加えません。青山さんも無傷で返します」

「おいおい、声が震えているぞ。そんな悪党みたいな台詞、言い慣れてないなら無理するなよ」

主導権を握らせまいと、春臣は彼女に揺さぶりをかける。

「礼儀正しく正々堂々と話合いで解決しないか？ それに、そもそも青山は俺の彼女じゃない」

と、さつきの目が点になる。

「彼女じゃない？」

「第一、誰がそれにイエスって言ったんだ？」

「あれ、言いませんでしたか？」

彼女の問いに、青山は嬉しそうに首を振る。春臣も同様の反応だ。

「私を騙したんですね!？」

「違う、瀬戸さんが勝手に勘違いしてただけだ」

「……あ、あ」

先ほどまでの気迫はどこへやら、さつきがの顔が一気に上気する。

「でも、ともかく、青山さんに何かあれば、榊さんは困るはずですよ」

「まあ、それは間違いない。青山は大事な友人だからな」

それを聞いて青山が微笑み、小さく拍手をする。

「でしたら、そこをどいて、私に道を開けてください」

すると、彼女は椿が弱点として使えるところを確認したようで、再び自信を取り戻したようだった。高圧的に命令する。

しかし、僅かに後ずさりながらも、春臣は視線を外さない。

「何を考えているのかは知らないけれど、血迷ったことはしない方がいい。今なら笑い話で終わらせてやるからさ」

しかし、彼女は無常にも首を振った。

「いえ、さつきも言った通り、私は本気です」

「じゃあ、要求はなんだよ？ 言っておくが金はないぞ。認めたくはないが、それでも一人暮らしの学生だ。期待しない方がいい」

「生憎ですが、私はお金に困っているわけではありません」

「じゃあ、何を……」

すると、彼女は戸口に立ったまま、目を閉じる。そして、しばらくしてふうつと深呼吸をしたと思うと、目を開けた。

「二階ですね」

「え？」

これには、さすがにたじろいだ。

彼女がいつたい何を念じたのかは分からないが、ずばりと媛子がいる二階を口走ったのだ。まさかとは思うが、巫女である彼女は媛子の発する神秘的な力のオーラに気付いたのかもしれない。

「間違いない。妙な気を感じる」

彼女の言葉にいよいよ確信がこもる。

「おい、ちょっと」

「二階に上がらせてもらいます。邪魔をしないでください」

人質はどうでもよくなったのか、さつきは椿を押さえていた腕を放し、足袋のまま春臣の脇をすり抜けて真っ直ぐに階段を目指す。春臣は逡巡するが、その場に座り込んだ椿の無事を確認した後で、慌てて彼女を追った。

さすがに部外者に媛子の存在を知られるわけにはいかない。追いついて肩を掴んだ。

「なんなんだあんたは。いつたい何をするつもりだ？」

問いかけに振り向いた彼女の目は冷徹そのものだった。

「ご心配なく、私は神から命じられて、悪しき者をこの地から追出すために、この家に来ただけですから」

「悪しき者？ 神から命じられた？」

思わぬ発言に、春臣は面食らうが、彼女は続けて恬然と説明をする。

「この家には、一月ほど前から、妙な気配があると神は申ししています」

「神って、千両神社のか？」

「ええ、私には神の言葉が分かるのです。千両神に選ばれし、特別な血を受け継いだ一族の巫女ですから」

「巫女……」

「そして、この家に潜むものは、柘町に突然現れ、自らを神と名乗り、この地を乗っ取るうと企んでいるのです」

あまりにも突飛な話に、春臣は両手でどつどつと制した。

「待て待て待て。いったいどこからそんな情報を？ それも神が言ったのか？」

「榊さん、暮野さんをご存知ですか？ 私は彼から話を窺いました」

「な、何だと……」

「この家には神がいると、そう仰ってました。かわいそうに、暮野さんはあるはずのないまやかさに騙されていたのです」

心臓が急に縮まった気がした。

もちろん、春臣は彼を知っている。記憶が一気に巻き戻された。

数週間前の真夜中に不法侵入してきた少年の名だ。そしてあの日、弟たちが隠したというロザリオを取り戻しに来たという彼に、春臣と媛子は協力して、あるイタズラを彼に仕掛けた。

媛子が姿なき神を演じ、彼を騙したのである。それは他愛もない遊びのほずで、その後には特に問題もないと思っていた。

でも、まさか彼がそれを他の人間に話し、それを信じた巫女がこ



「こにやってくる」と誰が予測できるだろう。

「そ、それは、違うんだ」

「違う？ 何がです？ もしかして榊さん、あなたも騙されているのですか？」

ふいにさつきの目元に哀れみの影が差す。それはまるで、真実を知るのは彼女一人で、春臣たちはいい按配に詐欺師に引っかかった被害者としから見られていないようだった。

「この家にいるのは、我々人間に仇なす者です」

ひどく断定的に、彼女は言う。

「ふざけるな。俺は騙されてなんかいない！」

当然のことながら、春臣は反駁した。

神である媛子の存在は本物だと、心から信じていたからだ。

それにもしも、彼女が人々に害を成す存在であれば、春臣が今まで無事なはずがない。

しかし、彼女は冷たい眼差しのままだ。

「そうですね。まあその如何に関わらず、私はこの家に潜む悪鬼の類を追放する方針は変わりませんが」

そう突き放すように言って、彼女は春臣の手を振り払い、迷うことなく階段を上っていく。

おそらく、彼女はそのまま二階の部屋のドアを開けてしまっただろう。

それをさせるわけにはいかない。

咄嗟に判断した春臣は、一気に階段を駆け上がり、ドアの前に仁王立ちで立ちふさがった。

「止まれ！」

「邪魔をしないでください。大丈夫です。すぐに済みますから」

さつきの言葉は、まるでロボットが発しているかのようだった。扉の向こうにいるのは紛れもない敵、そう信じて意思に揺るぎはない。

しかし、春臣は威嚇するように両手を広げた。

「残念ながら、俺の本能はあんたを通しちゃいけないって言ってる。ここを簡単にどくわけにはいかない」

「まさか、榊さんは悪しき者の存在を知った上で、かばおうとしてるんですか？」

彼女は怖気が走ると言わんばかりに口元を手で塞ぐ。

「悪しき者なんかじゃない。あいつは、本当に神様なんだ！」

すると、言い争う声が聞こえたのか、中から媛子の声が聞こえる。

「春臣、何かあったのか？ どうしたのじゃ？」

「悪しき者の、声？」

さつきがはっと身構えた。

「媛子、静かにしてる。そこを動くなよ！」

「榊さん、やはりあなたも騙されているんですね？ 可愛いそうに」

「違っつてさつきも言ったはずだ。残念だけど、媛子をあんに差

し出すわけにはいかない。帰ってくれないか？」

あくまで、穏便に、懇願するように、春臣は頭を下げた。女性を相手に、無用な争いはしたくなかったのだ。

だが、春臣が思う以上に、彼女の意思は固く、強情だった。

「嫌です。いきなり人の家に現れるような得たいの知れない存在が、神様なはずがない！ 人を騙していいはずがないんです！」

どうやら、我慢も限界にきたようだった。

「何度言ってもだめか？ 媛子は神なんだ」

「私が真に神と認めるのはこの地を統べる千両様のような存在だけです」

「どうやら、ずいぶんとその神様に心酔してるようだな。まあ、それはあんたの勝手だ。だが、いくら神の命令とはいえ、こればかりはおいそれとは従えない」

「そうですか、仕方ありませんね。あなたがこれでもどかないというのなら……」

彼女は言葉を切り、すっと胸元から扇子を取り出して春臣の鼻先に突き出す。

「私は神の力を持って、あなたを倒します！」

#### 54 悪しき者（後書き）

はい、どうも。ヒロユキです。

さつき編もそろそろ佳境です。話がどんどんシリアスになっていきます。でも、よく考えてみれば、以前はコメディ作品として投稿していたはずが、今ではこの有様ですね。まともなお笑い担当は椿ぐらいしかいません。

どうしてなのか、僕の作品はいつでも書けば書くほど真面目で、シリアスなものになっていくのです。といっても、別になんか暗い性格というわけでもないのです。大抵のお笑い番組は欠かさず観るほど、笑うことが好きです。

なのに、なぜだ。なぜなんだ。こういう感じのお話しが好きな神様に憑かれているのかもしれない。

はっ！ あとがきなのに、ついこんなに書いてしまいました（話が長い、悪い癖です）。これ、怒られたりするのかな。えっと、長々とすいませんでした。

## 55 無謀の少年

春臣はぬくもりのない汗が頬を伝うのを感じた。

「神の力で、倒す？」

今しがた、自分の耳に届いた言葉が嘘か真か確認するために訊ねると、彼女はふんと鼻を鳴らす。

「そうですよ。さっき、武器を持っていると言いましたよね。これがそれです」

すつと伸ばした扇子の先を片手だけで器用に開くと、その先端を春臣の首の辺りに向けた。まるで、首をはねてやると示すかのようで、笑えない。

「にわかには、信じがたいな」

ちらりと扇を見てから、あごを引きつつ言う。

「まあ普通の人にはそう見えても仕方ありません。この状態ではただの扇子ですから。でも、これは千両神によって特殊な念が込められた神聖な扇子には違いありません。巫女である私がこれを使えば、ほんの仮初ではありますが、本物の神の力を使用することが出来ます」

「本当に、本物か？」

疑いの視線で見つめると、背後から明らかにいつもとは違う、怯えた神の声が聞こえた。

「は、春臣、逃げるのじゃ。そやつ持っているものは、偽物ではないぞ」

「媛子、分かるのか？」

驚いて肩越しに確認する。

「幾ら力をうしなっておつても、神力が伝わってくる感覚は鈍らん。扉越しでも、ただならぬ空気の重さを感じる」

まるで大洪水が目前に迫っているかのように、彼女の声には余裕がない。春臣にはこれといって武器になりそうなものとは思えないが、見た目だけで判断すると痛い目を見そうだ。

だが、本当に？

すると、さつきがふわりと扇で口元を隠す。それはまるで、その下に潜む、不敵な笑みを隠すようだった。

「榊さん」

「何だよ」

「千両様の力を甘く見ない方があなたのためですよ」

彼女はやんわりと警告する。

「これは神から聞いた一つの昔話ですが、千両神はその昔、この地域の村々を襲っていた山賊たちを追い出すために、ある時、山賊たちが潜む山に向かって大風を吹かせたんです」

言いながら、自慢げにひらりと扇で宙を扇いだ。

「その威力たるや凄まじく、幾千もの矢が突き立つかごとく木々は粉々になぎ倒され、巨人が暴れまわったかのごとく大岩が転がる音が一日村中に響き渡り、大風が過ぎ去った後は、山には何も残らなかったと言われています」

「へえ、そりやまたずいぶん乱暴で物騒な神様だ」

皮肉たっぷりの目で春臣が言うと、彼女がさっと険呑な目つきに変わる。

「言葉に気をつけてくださいね。私は神の力をもつてすれば、人間一人どうこうするなど、あまりに容易いことだと言いたいのです」  
「……もしかして、それに匹敵するほどの力が、その扇にはあるっ  
てののか？」

春臣は眉間に皺をよせ、冗談はやめると言いたくなる。彼女の話したことが真実かどうかはさておき、山一つを吹き飛ばす威力がある代物をここで使うのはあまりにも危険だ。

すると、彼女は目を細めて笑った。

「まさか、いくらなんでも真の神の力には遠く及びません。が」  
「それなりに威力はあると？」  
「はい。人一人ぐらいは軽く吹き飛ばせるでしょうね」

それはまるでたんぽぽの綿毛を前にしているかのような軽い口ぶり  
りで、春臣は狼狽した。どうやら、この自信満々の様子に嘘はない  
ようである。

「おいおい、ふざけるなよ。そんなもん、マジで使うのか？」  
「ええ、あなたがそこをどかないのであれば」

さつきが事も無げに言って、顎でドアを示した。  
しかし、春臣にはこの場を動くつもりなど毛頭ない。  
春臣の脳裏にあったのは、唯一つ。以前彼女と交わした約束だった。

媛子が神の世まで無事に帰れるように、それまで自分が面倒をみる。その彼女が危険にさらされようとしているのだ。

俺が彼女を守らなくて、誰が守るんだよ。

息を止めながら、春臣はぐっと両足に力を込める。目の前の少女を通してしまうことは、その約束の破棄に相違なかった。

こんなことで動じてられない。

しかし、同時に膝の辺りが震えだしているのを感じている。もしも、彼女が言う神の力が本物であり、彼女が本気で自分を倒すつもりならば、間違いなく春臣は無傷では済まないだろう。

その恐怖はじわじわと春臣の体に染み渡っていた。

「春臣、いいから逃げるのじゃ、お主、本当にどうなるのかわからんのじゃぞー!」

そして、恐怖を煽り立てるような媛子の言葉が聞こえる。

でも。

春臣は了解できない。小声で却下する。

「……出来るかよ、んなこと」

そして、喉の奥が急速に乾くのを感じながら、頭をフル回転させた。

くそつ。どうにかこの状況打開する策はないのか。



このままでは本当に媛子が危ない。しかし、現状で話しを続けても、この少女は了解するほど、融通が利くとも思えなかった。

さらに悪いことに、彼女はどうかやら本気で春臣を排除しようとしている。彼女が持つ神の扇は、単なる脅しではなく、前進の兆しのない話し合いに痺れを切らした彼女の最後の切り札に見えた。

このまま春臣が彼女の説得に応じなければ、攻撃されるのは時間の問題と置いていいだろう。

そして、彼女に神の力を振るわれれば、間違いなく春臣などひとたまりもないに違いない。なにしろ、それに対抗する術など春臣は持っていない。

神と人では、どう考えても圧倒的に春臣は無力だ。

じゃあ、どうする！？

脳内の自分が急かす。

このままでは、春臣が取れる選択肢は二つだった。

彼女の要求を大人しく呑み、媛子を差し出すか。

それとも、断固として意思を貫き通した結果、彼女に倒され、媛子を奪われるか。

それだけ、だ。

恐ろしいことに、浮かんだ結末の映像はどちらも同じだった。

「どっつ、したら……」

しかし、ふいに何かが指先に触れ、

「あっ！」

春臣が叫ぶ。

そうか、その手があった。名案を閃いた瞬間だった。

だが、それを言葉にする前に、突然さつきと春臣の間に割り込んできた人間がいた。

青山椿である。

「二人とも、ストップや！」

そう叫び、いつものふんわりとした笑顔はどこへやら、真面目な顔で春臣たちを交互に睨んだ。どうやら、一触即発で向かい合っているのに、止むに止まれず飛び込んできたらしい。

「榊君、さつきちゃん。そない睨みあわんと仲良うしよ。喧嘩したって、なんもええことないで」

いいことは何も無い。

それは確かに彼女の言う通りだ。

しかし、それでもさつきの態度は軟化する様子はない。即座に首を振る。

「すいませんが、青山さん。さつきから言っている通り、それは無理な話です」

「なんでや？」

「その部屋の中にいる、化け物を見逃すことは出来ません」

すると、眉を引きつらせ、めずらしく椿は真剣に怒った顔を見せ

る。

「化け物やない。媛子ちゃんは神様やって!」

さつきがぎょつとして後ずさった。

「あ、あなたまで洗脳を?」

「洗脳ちゃう、真実や! そのことは今度説明する。せやから、今日のところは、帰ってくれへんか?」

「嫌です。断固として断わります。その間にその何者かがこの土地で何か悪さをするかもしれません」

「そんなこと、絶対になんや! 媛子ちゃんは」

必死に言い返そうとした彼女を春臣は抑える。

「無理だよ、どうやらとことんまでやりあつつもりらしい」

春臣としては、この程度で帰るようでは、ここまでおおげさなこととはしないだろうと踏んでいた。

さつきは椿を人質として利用する(結果的には失敗だが)という周到な計画まで立てていたのだ。神からの命令らしいが、それだけ使命感に燃えているという証拠だろう。今さら引き下がるはずがない。

「そんなあ」

「青山、下ってる。俺は瀬戸と決着をつける」

春臣は彼女の手を掴みさつきの視線上から離す右脇に引っ張った。

「け、決着って、柗君?」

彼女の黒い瞳が大きくなる。

「春臣、何を言っておる？ わしの話聞いておったのか？」

背後からは媛子のくぐもった声が。そして、さつきの顔が半分意外そうに、半分悲しそうに歪んだ。

「まさか本当に私に倒されたいとは、予想外の答えですね。榊さんなら何が賢明な判断かくらい理解できると思いましたが」

「悪いね、逃げ出したいの山々なんだけど。媛子のこととなると、立ち向かわなきゃいけない時があんだよ」

すると、強く芯のある春臣の声にさつきが瞠目して呟く。

「……あなたは、どうしてそんなに？ もしかして……」

その続きが何であるかは問題ではない。

さつきは春臣の真剣な表情に、決意の固さを知ったようだった。きつと彼女が言う悪しき者に自らの身を危険に晒してこれほど肩入れをする人間などいるはずがない、そう思っていたのだらう。

「別に变だと思ってくれて構わない」

春臣はそう言って一拍置き、

「……瀬戸さん、決着をつけるために、勝負をしよう」

極めて明確に、春臣は提案する。

「勝負、ですか？」

彼女がきよとんとした。

「ああ、対一、邪魔の入らない真剣勝負だ。ルールは簡単。あんたがその扇で俺を攻撃し、俺がそれを凌げなければ、媛子のは好きにしてもらって構わない。でも、もしも俺が攻撃を凌げたなら……」

「凌げたなら？」

「文句を言わず、媛子は諦めて帰ってもらおう」

さつきの扇を握む手に力が入ったようだ。僅かに扇の骨が軋む音が聞こえる。

「なるほど、面白いですね。私に挑戦ですか」

どうやらかなりの好感触だ。

これは春臣が予想した通りの反応だった。

「受けるのか？」

確認すると彼女は間髪いれずに了解する。

「ええ、もちろん受けてたちます。千両様の力が負けるはずなどありませんから。でも、私としてはむしろ、あなたに訊ねたいのです」

真っ直ぐ真摯な彼女の眼差しが春臣を見つめる。何のことか分からず、首を傾げた。

「本当に、本当にいいんですね？ 言っておきますが、私は手を抜

きませんよ」

なんだ、そんなことか。

「ああ、男に二言はない！」

春臣はきつぱりとたたきつけるように言い放った。

「春臣！ お前！」

すると、またしても扉の向こうで媛子が叫んだが、聞こえない振りをして無視した。

「外に出よう、ここじゃ勝負は出来ないだろう？」

「そうですね、ここで部屋ごと吹き飛ばすのもいいと思ったのですが。まあ、家の裏辺りが人目につかなくていいんじゃないでしょうか？」

「じゃあ、そうしよう。先に行っていてくれ」

春臣が指示すると、さつきは身を翻し階段に向けて歩き出す。と、すれ違い様、彼女は一つ釘を刺した。

「どうするつもりか知りませんが、半端な小細工で神の力に勝てるとか、そんな浅ましいことを思わないでくださいね」

目を合わせずに、春臣は冷静に返す。

「……ああ、分かってるよ」

そして、彼女が階段を下りていき、足音が遠ざかると、椿がすぐ

に泣きそうな顔をして振り向いた。

「な、何で勝負するやなんてこと言ったん？ なあ、榊君？」

「媛子を差し出さないなら、ここは俺が行くしかないだろ？ 話し合いで分かってくれそうにもなかったし」

「じゃが、それではお主が危険な目にあうではないか！」

すると、それまで静かにしていたはずの媛子が再び叫ぶ。

「大丈夫だよ、なんとかかしてみせる」

あっさりと春臣は答えるが、

「なんとかかしてみせる、じゃと？ たわけたことを」

ついに、彼女の怒りは頂点に達したようだった。

どん、とドアが軋む。

おそらく彼女が向こう側が叩いたのだろつが、あの小さな体で、音がするほど力を込められるとは春臣たちには到底考えられなかった。

「お主、もう少し頭の良い奴かと思っておったが、とんでもない大うつけ者じゃの。神の力を前になんとかなるなど、そんな楽観的な物言いが出来るとは！ 神の力は自然の力じゃ。天災によって日々、人々がどれだけ命を落としておるか、それをお主は知っておるのじやろつ？」

怒らせるつもりもなく、春臣は自身の認識のレベルを告げる。

「もちろん、それくらいのもんだったって承知してる」

「だったら、なぜ!!」

その詰問に対し、

「……意地、かな」

まるで、そよ風が通り過ぎたように、春臣は静かに、穏やかに答えた。

「意地じゃと?」

「ああ、あの世のじいちゃんに笑われたくないからだよ」

これは、嘘偽りのない、春臣の本心だった。

「俺がこんなことで簡単に引き下がり、大切な媛子を危険に晒したなんてことになれば、絶対に馬鹿にされる」

「……春臣」

「だからこそ、俺は簡単に負けるわけにはいかない」

「……」

「というわけで、ちょっと行って来る。青山は……」

振り返るうとして、彼女が春臣の腕にしがみついてきたのに気がついた。

「ああ、やま?」

「うち、嫌や。榊君に何かあったら、うちはどうすればいいん?」

いやいやをするように、彼女は揺さぶってくる。

困った奴だ。こう思いながらも、そんな少女の雨模様の気持ちに、安心させるための微笑を作った。



「大丈夫だつて、さすがに瀬戸のやつも俺を殺しはしないだろうし、俺だつて何も考えてないわけじゃない……でも」  
「でも？」

不安げな椿に、春臣は最悪の事態を想定した対処方法を、ゆっくりと告げる。

「もしもの時は青山、媛子連れて逃げてくれ」

「春臣?!」

「え、そんなんうち……できひん」

突然の頼みごとに、椿の瞳が色を失う。当然だろう、それではまるで春臣を見捨てると言っているようなものなのだ。しかし、それを承知で春臣は深刻ぶらずに首を振った。

「いいか？ これは本当にもしも、万が一のことだ。だから、おそらくそんなことにはならないと思う。必ず戻ってくるから、媛子がここを出ないように見張つてくれ」

「え、せやけど」

「頼む。友人としてお願いだ。俺を信用してくれ」

春臣が頭を下げ彼女の顔をのぞきこむと、もう無駄だと思ったのか、しぶしぶながら椿は頷いた。

「……うん、分かった」

そして、ようやく歩き出そうとするど、

「春臣……行くな」

今度は追いつがるような媛子の声がした。それは高貴な神である、彼女らしくないなんとも弱弱しい懇願だった。まるで後ろ髪を引かれるようで、胸が締め付けられたが、もちろん、春臣の考えは変わらない。

「残念ながら、神様の命令だとしても、それは聞けない。俺はあの巫女さんみたいに忠実な下僕ってわけじゃないんだ」  
「……！」

すると、一気に火がついたように小さな神がわめく。

「この、強情者があ！ たわけ者があ！！」  
「何とでも言え。そんな罵り、戻ってきたらいくらでも聞いてやるよ」

それだけ言い残して、春臣は階段を下っていった。

## 56 秘策、あり

いったいどういうつもりなの？

さつきは一足先に家の裏手で待ちながら、疑問を心中で呟いた。神の力は普通の人間なんかじゃ到底太刀打ちできないって言うのに。

舌打ちをしながら、扇子を広げる。神の扇は今日も変わらずに永遠とも思える美しさのまま、光を放っていた。さつきはそれをじっと見つめ、呼吸を落ち着けている。

これがあれば、人間一人くらいならば、軽く吹き飛ばせる。それは間違いない。

けれど、それとは別に、さつきの中で湧き上がる不安があった。それが、先ほどの榊少年の目だった。

いったい、あの不思議な力に満ちた瞳は何だったのだろうか。

そこには、不安に怯えているようで、くじけない、真っ直ぐ貫くような力強さと、さらに、神に抗う術をすでに発見しているかのよくな自負に満ちた鋭さがあった。

もちろん、人間が神の力に抵抗できるはずなど、あるわけがない。それは間違いない。人の力でどう足掻こうとも、全ては押し流され、消えていくのが運命なのだ。

あれだけ話してそれを理解していないと言うの？

しかし、とはいえ、さつきは彼を消そうなどという物騒な考えは微塵もない。あくまで正しき行いをするため、邪魔者を懲らしめる

だけなのだ。それ以上の考えはない。

そこでふと思いつ。

もしかすると、彼はさつきが土壇場において、自分に情けを見せ  
てくれることを期待しているのかもしれない。それは、勝負の中止

さつきだつて正直に言えば、本来の目的とは違う『一般人』をこ  
の事態に巻き込んでいいのか、と問われれば迷いなく首を縦に振る  
ことは出来ない。無関係な人々を傷つけることに、全く躊躇がない  
のではないのだ。

でも、それはそれ。

彼には何度も確認した。これでいいのか。危険がある。戦つても  
いいのか。そう、何度も。

そもそも考えてみれば、この勝負は彼の方から挑んできたのだ。

ならば、なにも遠慮することはない。

自分の持てる力を彼にぶつけるだけだ。

ざりり。

日陰の湿っぽい砂がざらついた音を立てる。

間違いない、彼がやってきたのだ。

振り返れば、家の角からポケットに手をつ込んだままの少年が  
一歩一歩歩いてきていた。その顔つきには一部の油断もなく、今な  
ら背後から近づいても動きを悟られてしまうような、そんな近寄り  
がたい気迫が漂っていた。

「さあ、始めようか」

影まで足を踏み入れた少年が淀みなく言う。

「ええ、準備はいいんですね？」

さつきの確認に彼はすぐに頷いた。

「うん。さつさと始めて、さつさと終わらせよう」

その、あまりにもあつさりとした口調にさつきは肩透かしを喰らった。そして、すぐに怒りが湧いてくる。

さつさと、って。

今から神と人間との真剣な勝負が行われようとしているというに、彼は学校の掃除でも始めるかような退屈そうな態度なのである。

やはり、神の力を見くびっているのだろうか。

それとも、この能天気な態度で挑発しているのか？

さつきは気がつく。もしかすると、こうして内面に揺さぶりをかけようというのが彼の魂胆なのかもしれない。

だとしたら、このまま怒りを表にすれば、相手の思っ壺だ。さつきはぐっと押さえ込んで前を見た。

「力の加減の仕方が少し分かりません。場合によっては、骨の二、三本は折れるかもしれませんよ」

「ハハ、大丈夫だ。もしそうなくても瀬戸さんにやられたとは誰にも話さないよ。年甲斐もなく崖から飛び降りて、着地に失敗したとでも言っさ」

「はあ……」

自分がしたのはその心配ではないのだが。

「でも、そんな口が叩けるのなら、覚悟はもう決まっていると思っ  
ていいですね」

「当たり前さ、この期に及んで四の五の言つつもりはない。それに、  
俺にはこの勝負に勝つ自信があるからね」

ぎりり、とさつきの強く噛んだ奥歯が軋む。

この挑戦的な態度。やはり、自分を挑発しているのか。

しかし、さつきとしてはその手には乗るつもりはない。こちらに  
は絶対なる神の力が存在するのだ。何も恐れることはない。

むしろ、彼の動揺を誘ってみることにする。

「へえ、何を根拠に言っているのか分かりませんが。榊さん、自意  
識過剰って言われたりしません？」

が、彼は相変わらず、涼しげな顔だ。

「うん？ 別に俺は普段から自分を過剰に評価しているとは思わな  
いけど？」

「だとしたら、気に入りませんか。その並々ならぬ落ち着きはどこ  
から来ているんですか？」

「簡単なことさ。俺はただ、君が繰り出す神の風を凌ぐことが出来  
るという確信があるんだよ」

秘策あり、ということか？

「……神の風を凌げる自信？ 人間の身で？ まさか、奇跡でも起  
こそうっていうことですか？」

「奇跡……八八、神様ならともかく、人間の俺にそんなことは簡単  
には起こせないよ。俺が考えているのは、地に足のついた、もっと  
現実的な方法さ」

神に勝つ確実な方法、だと？  
その瞬間、さつきの中を何か鋭い物が駆け抜けた。同時に、堪えきれない衝動が拳を震わせる。

「ならば、もう無駄話は必要ありませんね。お望みどおり、さつきと終わらせてあげましょう」

さつきは大きく足を開き、ぐつと袖をまくる。ふつと息を吐き、目一杯吸って、意識を扇に向けた。

過去に千両神から教えてもらった感覚を思い出す。神の力を引き出すための、精密な作業だ。

それを言葉で全て説明すると非常に難解であるが、簡単に言えば、普段さつきの内面を形作っている人間としての『型』を抜き取り、その狭間に千両神の力を注ぎこむことによって、超人的なエネルギーの放出を人の体で可能にさせる方法なのである。

さつきは、目を閉じると、そつと内なる自我の奥深くに降りていく。精神を一時的に自身から乖離させ、神と同調する準備に取り掛かるためだ。

ぐつと肩に重力がかかり、すり抜けるように意識が遠のく。ぬるま湯に浸かったような心地がして、一気に体中に水が駆け巡ったような清涼感が溢れた。

千両様。

さつきは彼女を呼んだ。

千両様。

すると、右手に持っている扇からじわじわと不可解な感覚が伝わってくる。それは温かく穏やかで、さつきの胸に伝わり、溜まったかと思うと、やがて拍動に混じり、全身へと流れていく。

これが、神と一体になるあの感じ。

やはり、不慣れではあるが、背後からずっと支えられているような、そんな心強さを胸の中で感じる。

よし、これで全ては整った。

目を開ける。

自分に残された使命はただ、力の放出だけだった。

何者も逆らえない絶対の神の力。

それを目の前に立っている少年にたたきつけるのだ。

ぱらり。

扇が開かれる。

そして、さつきの唇が動いた。

「聞け、野を駆き時を遊ぶ風の神よ。我は巫、かななぎあまね遍く世を統べ、柊の地の守護を司りし、神の代理なり。我の求めに応え、ここへ集え」

すると、僅かながらさつきの耳元でひゅんひゅんと何かが飛び交う音が始めた。

大気がさつきと呼応し始めている。よし、理想的な状態だ。

「我に仇なす者、其を打ち滅ぼさんと、今こそ剛力の瞬風を見せよ」

さつきはそこまで唱えると、すっと顔の前で両の手を交叉するよ



うに体勢を整える。そして、すぐに扇を下ろすと、横一閃、扇で宙を薙いだ。

「咆える！ 神の風よ！」

さつきの目の前に幾線もの風の束が結集される。

それは、一人が丸々納まるほどの巨大な鞠玉のよう。横に伸びたり斜めに歪んだり形を整えているが、すぐにまとまり、凄まじい轟音を撒き散らす一体の獣と化す。

びりびりと大気が振動するのを肌で感じ、まもなく超自然の力が場を掌握するのが、分かった。

そして、何の前触れなく、鞠玉が一気に突進を開始する。目の前にある者全てを跳ね除ける、巨大な力の塊。

空間に大きな溝を作りながら、轟然と、迫る。

これでどうだと、少年を見た。

それを目前にして、仁王立ちをしている少年を。微動だにしない、その少年を。

さあ、これでも、避けることが出来るっていつの？

と、思うが、彼は動かない。

まさか、逃げないのか？

立ち向かうというのか？

疑問が、脳内に殺到する。

「どうして？」

と、ようやく、彼は動いた。

パーカーに入れていた手をすばやく引き抜く。そして、その豪速の風の球に向けて、何かを投げつけた。

「え……」

途端に、光が、炸裂した。何かの小爆発して鼓膜が揺れ、視界が揺れ、光が放た、いや……吸い込まれている!?

「きゃあ!」

爆発の影響で、さつきは後ろ様に倒れた。

いったい、何が起こったのか、分からなかった。ただ、彼が風とぶつかる直前に何かをポケットから取り出して……。

「さ、柷さん?」

濛々と立ち上る土煙の中、さつきは呼びかける。

無事、なのだろうか。

あんな爆発を目の前で喰らったりしたら、とても無傷とは思えない。冷たいものが後頭部を撫でる。

そもそも、この爆発何なのか。さつきにはそれが分からなかった。

「柷さん!」

返事はない。

しかし、立ち込めていた土煙が、しだい薄れ始めて、その中に佇む一つの影がぼんやりと浮かんできた。

まさか。

駆け寄って、確認して、さつきは言葉を失った。

「そ、んな。嘘……」

「ハハ、こんなもんかな」

た。  
榊春臣が、突如現れた光の壁の向こうに、青ざめた顔で立っ

## 57 決着、そして

しばらくして、春臣の前で光を保ったままだった眩い壁が音もなく消え去り、それを構成していた常緑の葉が結び目を解くように、上から順にばらばらと落ちた。足元で小さな山になる。

そのどれもが、一日ほったらかしにされているとは思えないほど、瑞々しく新しく見えた。

さつきが、呆気にとられたまま、腰を落とし、その一枚を手に取り、

それが何であるかを見て、手が震えている。

「これは、まさか、榊の葉？」

言ったきり絶句し、その場にへたり込んだ。

と、同時に、春臣が全てを解き明かすために口を開く。

「そう、これが俺の秘策だったわけさ。昨日、媛子たちが使ったもんだが、まさかこれが役に立つとはな」

「役に立つって、榊さん……？」

彼女はまだ事態が飲み込めていないのか、青い顔で口をぱくぱくとさせながら訊ねる。

「何だ、知らないのか？ 榊の葉には、『神の力を吸収する』作用があるんだぜ」

「え、な、今、何と？」

さつきの虚ろな双眸そらめいがこれ以上ないほどに見開かれる。

「だから、神の力を吸収できるんだ。少し聞きかじった程度だが、正確には、存在の力。神の力の動力源、一つのエネルギーだな。ともかく、それを一定量蓄えられる。おれはそれを以前から知っていた。あんたが悪しき者って呼んでた媛子が発見したんだよ」

「うそ、うそよ、こんなことあるわけ……」

「だが、今ここで無傷で立っている俺が何よりの証拠だろう？」

自分が作り物ではないことを見せるように、春臣はその場で飛び跳ねて見せた。すると、彼女はさらに顔色を失い、力なく俯く。

「榊の葉は、神の風を『飲み込んだ』んだ」

「……うそ……」

人はショッキングな出来事に耐えられないと、感情がショートし、意識が薄らぐそうだが、今の彼女はまさにそうだった。まるで明日、日本が海に沈むと告げられたかのような深刻な顔つきで、同じ言葉を繰り返し、肩を震わせている。

今の彼女にどんな言葉をかけても耳に入らないだろうと思いつながらも、春臣は話す。

「確かに、あんたの言う通り、人と神では力の差がありすぎる。普通に考えれば、圧倒的非力で俺の負けだ。まぐれで凌げることなどありえないだろう。だが、俺はポケットの中の榊の葉に気がついた」

「……」  
「神の力に対し、自分が立ち向かうのではなく、神の葉で対抗することにしたんだ。目には目を歯には歯を、だな」

彼女は相変わらず意気消沈し、項を垂れている。春臣の話を知っているのか、こちらを見ようとしてもしない。だが構わず、春臣は続け

た。

「さつきも言ったが、この榊の葉って神の力を吸収する、言わばスポンジみたいなものだ。二階の部屋、つまり異空間の中では神の世の存在の力を吸い、瑞々しい生命力を保っているが、今日は一日中部屋の外で、いい感じに力が抜けていた。そこへ向かってきたあなたの力はちょうどいい栄養分になったってわけさ。空っぽのスポンジは水をよく吸う、だろ？」

「……」

「正直なところ、上手くいくかどうか絶対の自信はなかったが、読みは外れてなかったようだな」

「……」

「どうだ、反論はあるか？」

たっぷりとした沈黙の後、さつきがようやく口を開いた。

「……ありませんよ」

立ち消えそうな、か細い声。

思わず手を差し出してやりたくなるが、その前に、大事な確認がある。これを終えずじて、勝負は無事に済んだとは言いがたい。

「なら、俺の勝ちだよな。というわけで、約束どおり媛子には手を出さず、帰ってもらえるか？」

またしても、彼女は無言だ。崩れた正座の姿勢で、地面を見つめている。

「申し訳ないが、返事くらいしてくれよ？」

それを聞かない限り、安心が出来ない。  
すると、彼女は何かを拒絶するように震えながらつぶやく。

「予想、してませんでした」

「……負けることを、か？」

「はい……私、私、このまま帰って、千両様に顔向けできません」

突然の、嗚咽するような切れ切れの言葉に、今度は春臣の方が沈黙する番だった。

「この程度の使命も失敗するようでは、巫女、失格です」

「……」

「私は、何も出来ない、馬鹿な」

「んなわけねえよ！」

春臣の声が割って入る。

「え、でも、でも……」

ようやく顔を上げた彼女の瞳は大粒の涙が揺れている。ちょっと押しすれば、ぼろぼろとこぼれてしまいそうだ。

しかし、春臣は彼女に、その先を言わせたくなかった。なぜなら、勝負を仕掛けた者として、彼女を自己卑下のトンネルから救い出すのは、当然の役目だと思っていたのである。

彼女の肩を掴んで首を振る。彼女に自信を失わせることが、この勝負の目的ではないのだ。

「あなたは十分に勇敢だった。神様の言葉に従って、襲ってくるかもしれない悪者を追い出そうとしたんだろ？」

「あ……はい」

彼女の声が少しだけ冷静を取り戻す。どうやらいい傾向だ。穏やかな喋り口を意識しながら続けた。

「媛子から少し話を聞いたが、巫女って思ったより大変なんだな。神様のためにこんな危険を冒さなけりゃいけないなんて」

「危険……ですか」

「そうだけ。だが、ちょっと気負いすぎな感じもあるな。やることに視野が狭くなってるって言うか。まあ、俺も偉そうに言える人間じゃないけどな」

「……はあ」

「加えて言うなら、今回は特に、瀬戸さんの前提が間違ってる。ここにはそもそも悪しきものなんていないんだよ」

すると、決壊寸前だった彼女の表情がくつと引き締まる。涙を拭い、春臣に迫って激しく否定した。

「います！ あなたたちは騙されてるんです！」

「まだそんなことを言うのか。だから、それは瀬戸さんの勘違いだ。俺の目を見る、洗脳されてるように見えるか？」

「わ、私は勘違いなんて」

「俺と椿が付き合ってるって勘違いしてたのはどこの誰だったっけ？」

間髪入れない指摘に、さつきは思わず閉口した。

「う、むっつ」

事実だから、反論しようがないのだろう。しかし、泣きかけている巫女の少女に対し、意地悪な言葉だったかもしれない。すぐに、



空気を変えるために軽く笑ってみせる。

「今からきちんと説明するからさ、ちゃんと最初から話を聞いてくれるか？」

そう訊ねると、彼女の目が迷っているように右往左往した。

「……断わりたいのは山々です」

「なるほど」

「……でも」

「でも？」

「……負けた立場上、反論は出来ませんね。分かりました、事情を窺いましょう」

渋々ながらも了承してくれた彼女に、ほっと胸を撫で下ろす。どうやらこれで、全て丸く収まりそうだ。一時はどうなることかと本当に胃が縮み上がる思いだったが、もう、嵐は去ったようだ。風が止み、雨が上がり、水たまりが空をうつし、陽の光が差し込む。なんとかこのまま、雨降って地固まる、といきたい。

「はーるーおーみー!!」

しかし。

「なっ!」

そうは問屋が卸さない。

「媛子!?!」

「え?」

二人で振り返ると、そこには青山とその腕の中で暴れまわる媛子の姿があった。

二人で振り返ると、そこには青山とその腕の中で暴れまわる媛子の姿があつた。神様はどうやらかなり憤慨しているらしく、暴れ牛よろしく、両腕両足、それから頭、もれなく髪までもむちやくちやに振り乱していた。

「青山、部屋から媛子を出さなつて言つたらう！」

白い目で睨むと彼女は媛子を押さえつけながら、苦笑いをした。

「ああ、榊君すまんなあ。媛子ちゃんが部屋から出さへんかつたら天罰を下すつてわめいてしてもて。でも、榊君、無事でよかつたわ」

眉を下ろし、安堵した彼女とは対照的に、媛子は未だに猛獣のよくな勢いを失っていない。

すると隣のさつきが、「ひっ」と短い悲鳴を上げる。

「もしかして、さつき部屋で叫んでいたのは、その生き物？」

と、小人神様を指差した。

「む、小娘！ わしをただの生き物扱いじゃと！ 聞き捨てならぬ成敗じゃ！」

暴れながらも媛子はそう叫んで、びしりと神楽鈴を取り出す。どうやらこのまま傍観していれば、場が再び険悪化してしまいそうだ。また対決が勃発してはまずいと判断した春臣は暴れ牛、もとい、暴れ神を声で止めに入る。

「媛子、少し静かにしろ」

「ううう、う」

それでも無礼を許せないのか、媛子はぎりぎり歯軋りをしていく。その隙に、春臣は手短かに説明した。

「とりあえず、紹介すると、神の世界からやってきた緋桐乃夜叉媛様。一応こんななりだが、若い神様だ」

しかし、これだけでは疑いは晴れなかったらしく、さつきの目がまじまじと小さな神を凝視する。

「う、嘘ですよ！ 神様がそんな小人の姿で、しかも、こっちの世界に顕現してるなんて」

なによりも神のことを知っている巫女なら、そう驚くのも無理もないだろう。

春臣は深いため息をつく。

「ああ、だからこれには聞くも涙語るも涙のとてつもなく深い事情があつてだな」

「そんなことより、貴様！！」

と、乱暴な台詞で叫んだ媛子が、椿の腕からいきなり春臣の頭に跳びかかってきた。思わぬことに身をかわそうとしたが、さすがに彼女を地面に落とすわけにもいかず、止む無く手でキャッチする。

すると、背に括りつけた榊の葉をクッションに軟着陸を果たした彼女は、敵の本拠地へ乗り込んで内側から一気呵成に陣形を突き崩す兵士のごとく、春臣の腕を登り、あつという間に後頭部から頭の

上にしがみつく。

そして、いつもの神楽鈴を持ち、容赦なく春臣の頭皮を叩いた（おそらくあえて狙っているのだろう）。

「馬鹿！ アホ！ このろくのでなしの、低脳男が！」

神様だというのに、有難さの欠片もない、ずいぶんな言葉である。

「な、やめる。せつかく勝負に勝ったのに、褒めてくれてもいいだろう？」

「うるさい、だまれ！ 腑抜け、間抜け、甲斐性なしの、こんこんちきが！」

「……散々な言われようだな。勘弁してくれよ」

痛みを耐えながら、春臣は懇願するが、彼女は手を休めない。

「戦いに無事じゃったら、幾らでも罵れといったのはそっちじゃぞ！」

と、そう言ってきた。

「あれ、そんなこと言ったっけ？」

言ったような、言わなかったような。春臣は先ほどまでの発言を回想する。

しかし、どちらにしても頭皮への殴打は許可していない。

そう言い返そうとして口を開きかけると、打撃攻撃が急に弱まった。

もしかして、テレパシーが通じたのかと思うが、生憎春臣はエスパーではない。

では、この事態はなんだ。春臣からは彼女の様子が見えないので、何があったのか分からない。

「おい、どうした？」

と訊くと、

「この、馬鹿者があ。お主、無事じゃったからよかったものを。本気で心配させよって」

搾り出すような、彼女の声が出た。

これにはさすがに、血の気が引いた。罪悪感がこみ上げ、喉がつかえる。

「……媛子」

彼女は……おそらく、いや、推測するまでもなく、泣いていたのだ。

「お前が、お前が戻ってこなければ、わしは、わしは、どうすればいいんじゃない」

「……そ、そんな」

おおげさな、という言葉は出なかった。笑ってごまかせる空気は皆無である。

「この家に、一人にさせるつもりじゃったのか？ それはわしを見捨てるつもりじゃったのか？ 神の世に、お前が帰してくれるのではなかったのか？ どういうつもりじゃ！ このうつけ者……！」

とめる暇もなく、溢れ来る言葉の猛攻は続く。そこには、人の姿をした少女である以前に、神である彼女の先天的な威圧も加わっているのか、春臣は気圧されたように、何も言えずにたじろいだ。

椿もさつきも、同じように言葉を継げず、呆然としている。

ただ、この場で媛子一人だけが、頭上の絶対の位置から、怒りの矛先をがむしやらに春臣に向けていた。返す言葉がない。いや、あったとしても今の彼女には言い返せないだろう。

「天罰じゃ、天罰じゃ、春臣など、タンスの隅で小指をぶつけられたい！！」

「……」

そして、

最後に、

彼女の一番の本音が聞こえた。

「わしはまだ……春臣のそばにいたいんじゃないのじゃ」

打撃は、すでに止んでいた。

しかし、その弱弱しくも、強<sup>したた</sup>かで、吐き出すような切ない響きに、

春臣は力が抜けて倒れてしまっかと思っただ。

どうしていいかわからず、ただ、

「媛子、ごめん」

それだけ、口にした。

我ながら情けないほどに、か弱く女々しい謝罪だと思う。

だが、こうなったのは彼女の気持ちを、自分に置いてけぼりにされた気持ちを、理解していなかった自分が悪い。自業自得だ。

「うっ、うっ……」

言葉にならない呻きの後、彼女はなにやらもぞもぞと動いていた。袖で拭いてるのか。なんとなく、察する。

「本当に、ごめん」

祈るように謝罪しながら、今なら彼女に、二三度天罰を与えられても文句は言えないな。そう、思った。



「なるほど、そういうわけが……」

ちやぶ台の前に座ったさつきがごとりと湯のみを置く。

「だいたい事情は分かりました」

乾坤一擲の大勝負の後、事態の説明に応じてくれた彼女を、春臣たちは自宅の居間に招いていた。

勝負に勝った春臣の求めに応じ、臨戦態勢を解いた彼女に、緋桐乃夜叉媛や、異空間にまつわるこれまでの経緯を最初から説明をしていたのである。かれこれ、もう三十分ほど経っただろうか。

いつぞやのように、全てを話すのには時間がかかるため、重要な部分だけをかいつまんで説明したが、どうやら彼女はそれで理解をしてくれたようだった。さすがに巫女だけはあって、神に対する知識はそれなりにあるらしく、逆に春臣が説明できない部分を彼女が補足してくれたりもした。

そうしているうちに、彼女の中から敵意の熱は消え去ってしまったようだった。今は、数十分前の戦士のような凛々しさはどこへやら、一転して、穏やかな表情を浮かべている。

とはいえ、媛子が置かれている状況が、耳にした事のない特異な事例だったためか、興味深げに頷きつつ、机に出していた和菓子には手もつけないで、落ち着かないのかお茶だけを三杯もお代わりしていた。

「もう一杯、いただけますか？」

そしてこれで、四杯目だ。

「いいよいいよ。いくらでも飲んでくれ」

湯のみを受け取って立ち上がりながら、春臣はそっと彼女の方を窺うと、物憂げにため息をつきながら、すでに庭に目を向けている。どうやら、これまでの出来事と照らし合わせながら、状況の整理に取り掛かっているらしい。

しばらくはそっとしておいた方がいいだろう。

春臣は台所に向かい、コンロの火にやかんをかける。急須の中のお茶はすでに空っぽなので、新しいものを沸かさなければならぬ。

「はあ……」

しかし。骨が折れたものだ。

「榊君？」

声がして振り返ると、背後に立っていたのは椿だった。

「お菓子のお代わりは、ある？」

先ほどの騒動が終わった後で、この少女だけは能天気だ。

「冷蔵庫の中」

と指で示す。

「おお、おおきに」

礼を言つて、椿はいそいそと冷蔵庫のドアを開け、羊かんの箱を取り出している。そんな彼女を見ていた。ふいに、以前、媛子のことを彼女に説明したのを思い出す。

あれは中々に、まさしく骨折り損という名に相応しい徒労で、彼女は春臣の説明を聞いた後で、全然分らない、という内容の事をぬけぬけと言つたのである。

一年しか歳が変わらないというのに、同じ話（彼女の場合は端折つている）を聞いたさつきとは大違いだな。と春臣は思う。可能なら今からでも慰謝料を頂きたいものだ。

しかし、そんな春臣の気持ちも知らず、鼻歌を歌いながら羊かんを刻む彼女は、いつでも楽しそうだ。

「あんまり甘い物食つてると、太るぞ」

横目で彼女を見ながら言つと、

「ええもん。むしろうちはもう少し太つた方がいいって、母さん言うてたし」

と多めに羊かんを切っている。

「ああ、確かに。体型的に、青山は少し痩せ気味だよな」

春臣はちらりと彼女を頭から爪先までを流し見る。痩せすぎという分類ではないにしても、もっとご飯を食べてもいい気がする。

「せやねん。それに、もっと大きいしたいところもあるし」

「大きくしたい？ 身長か？」  
「えっと、な、なんでもない」

するとなぜか頬を赤らめ、自身の胸元に目を落とす。そして、慌てたように切り終えた羊かんを皿に移し始めた。

まあ、そんな彼女はさておき。

お代わりと言えば、思い浮かぶあの神様はどうしたのだろう。  
考えてみれば、先ほどから説明を春臣に任せたままで、彼女は何も話していない。

「それは媛子の分も入ってるのか？」

「え、ううん」

彼女は首をふる。

「媛子ちゃん、さっきからお菓子食べてへんもん」

「そりやまたどうして？」

彼女が好物を目の前にして、手を出そうとしないとは、天変地異の前触れかもしれない（神様であるだけに、なんとなく洒落にならない）。

椿が咎めるような目つきで春臣を見る。

「そらあ……榊君が胸に手え当てて考えてみたらどうなん？」

「あ、ああ、なるほどね」

気まずい汗が垂れた。やはり先ほど彼女を泣かせてしまった罪は重いようだ。必死に謝る春臣を一応許してくれた媛子だったが、やはり、大うつけ者が出す食べ物など食べるか、という無言の怒りの

表れなのだろうか。

「もっとしつかり謝罪をしないとだめか？」

つぶやきつつ居間に戻ると、相変わらずさつきは窓の外を眺めており、少し離れたちやぶ台の上で、媛子は椿が言ったように、羊かみを前にして黙然と考えに耽っているようだった。両者の間に友好的ないし非友好的な会話が交わされた形跡はない。

意識的にお互いが避けていたのではないのだったが、つい数十分前までは、敵同士だったのだ。この空間に横たわる沈黙には怖いものがある。

とりあえず、媛子は後回しにして、

「瀬戸さん？」

向かいの少女に声をかけた。

「あ、はい」

「それで、さっきのことなんだけど」

「……そうですね」

「俺の拙い説明だったが、いろいろと複雑な事情を理解してもらえたと思う。まあ、あれだけで全部そちらさんが納得したとは思っていないけど、少なくとも媛子は、この町を乗っ取るうだの、人々を脅かそうだなんて、そんな大それたことをするやつじゃないんだ」

これには素直に巫女服の少女は頷いた。

「はい。どうやらそのようですね。こうしてじっくりお話しを聞かせてもらって分かりました。それに、どうやら夜叉媛様からは、神

独特のオーラを感じます」

「そうか、理解してくれてうれしいよ。でも、神のオーラか。へえ……」

ぼつつと彼女を、その小さき様を見て、感心のため息をつく。やはり彼女は列記とした神であるらしい。

すると、さつきが上半身を前に倒し、いきなり土下座の体勢になった。

「え？」

止める間もなく彼女が口を開く。

「先ほどまでは取り乱していましたので、それに気がつかず、榊さんには、本当にとんでもないことをしてしまいました」

「いや、もう済んだ事だ。気にするなよ」

しかし、彼女は依然として、頭を下げたままだ。

「ダメです。ここで一度、けじめの意味も兼ねて、私の非礼を詫びさせてください。神の御前に仕える巫女たるもの、関係のない人々に危害を加えることは断じて許されません。真に申し訳ありませんでした」

さつきがあまりに真剣に謝罪をするので、春臣はどう声をかけていいのか分からなくなる。完全にひるんだというか、わたわたとしてしまい、思わず、隣の椿に目でSOSを出した。

彼女はそれに目配せで応じ、何をするのか、土下座したままの彼女の肩を優しく叩く。

「さつきちゃん、大丈夫やで」

「へ？」

「誰にでも失敗はある。皆、同じや」

「でも、私は……」

「うちの方が、よっぽどさつきちゃんよりも失敗するで。方向音痴やし、おっちょこちよいやし、お寝坊さんやし……」

指を折りながら、彼女は自身の短所を愉快気にしゃべる。おそらく、何の抵抗も感じずに、自然とこういうことが出来るのは彼女の良い所であり、特技なのだろう。

「は、はあ」

すると、さつきは軽く頷きながら、椿の話に耳をかたむけは始めた。どうやら、後は彼女に任せておいて良さそうである。

さて。

くるりと向き直り、ちゃぶ台の上の媛子を見る。

今度はこっちか。

59 一難去りて 1 (後書き)

終わりが中途半端になってしまいました。明日続きを載せます。



今度はこっちか。

傍によると、考えごとをしているらしい媛子は何かを呟いた。

「……土地神、か」

それは小さな声だったが、春臣は聞き漏らさない。

「千両様のことか？」

訊ねると彼女は大いに驚き、俯かせていた顔をビクリと上げる。

「あ、ああ……そうじゃ」

どうやら自分が話しかけたことで我に帰ったらしい。それほど集中して思考に没頭していたのだろう。

だが、幸運なことに、様子を見ると、彼女はもう春臣のことを怒っていないようだった。問いかけに素直に頷いてくれる辺り、不満な感情は水に流してくれたと見ていいだろう。

「羊かん、早く食べとけよ」

「そうじゃの。埃をかぶってしまったら風味が落ちる」

彼女は皿にすつと手を伸ばした。

「それで、やっぱり、気になるのか？」

おいしそうに媛子が羊かんを食べ始めたのを見て、頃合いを見計

らい、春臣はさりげなく訊いた。

「な、なんじゃ？」

彼女の手が止まる。

「今言つてたろ。土地神がどうのって」

「……ああ」

「それで？」

「やはり、土地神くらい力を持っておれば、わしの存在にも気付いてしまうものかと思つてな」

「……それつてすごいことなのか？」

春臣は身を乗り出す。土地神の力の程度については、気になつていたことなのだ。

「そりゃあの。少なくともわしの数百倍の力は持つておる。それくらいでなければ、土地神に選ばれることはない」

「やっぱり」

「何がじゃ？」

不審げな媛子には返事をせず、春臣は背後の少女を振り返つた。

「瀬戸さん」

彼女は椿ともう仲良くなつたのか、謝罪していた真剣さも失せ、無邪気に二人で笑いあつていた。女の子同士繋がるものがあつたのだらう、とそんな感想を頭の中に浮かべつつ、

「ちよつといいかな？」

と問いかける。

「はい？」

「その、土地神、千両様のことなんだけど」

くつと彼女の顔つきが引き締まる。

「何でしょうか？」

自らが仕える神に対する質問だからだろうか。先ほどのような敵意はないが、喋り方にどこか硬質的な響きがある。

素直に対応してくれるか分からないが、春臣は正座して座りなおし、彼女の目を見つめた。

「頼みがあるんだ」

「こういうときは言葉だけでなく、態度でも気持ちを伝える方がいい。」

「頼み？」

「ああ、媛子を千両様の力で神の世に戻せないか？」

「おい、春臣、勝手に頼むな」

すると、媛子が横から不服そうに口を挟む。しかし、今は彼女の気持ちなどいちいち考えていられない。春臣に必要な言葉は、目の前の巫女からの可能か否か、いずれかの答えだ。

「事情はさつき説明したと思うが、俺は彼女を無事に元の世界に戻してやりたい」

「……分かります」

「土地神様は、普通の神様よりも大きな力を持っているんだろう？  
だったら、そういうことも可能なんじゃないか？」

「……」

「ど、どうかな？ 無理か？」

春臣は生唾を飲み込み、その先を待つ。

そして、ゆっくりと彼女が告げた答えは、

「それでしたら、可能かと思われませう」

イエス。

「出来る、のか？」

あまりにも簡単な答えに、一瞬耳を疑うが、彼女は極めて冷静なものだ。

「はい。絶対とは言いませんが、千両様の力ならそれくらいは造作ないかと」

心臓が強く波打つ。

「な、なら……」

しかしそこで伸ばしかけた手は、宙を掻いた。  
再び、待ったをかけられたのだ。

「春臣、昨日言ったことを忘れたのか？」

ざくりと胸を貫く、冷然たる、神の言葉だ。

「え？」

「わしは、土地神の神社に赴く気はない、ということじゃ」

春臣の中に、昨日押さえていたはずの静かな失望が蘇る。彼女と自分との間に感じた、あの冷たい壁がまたしても目の前を覆った気がした。

しかし、今はこのまま引き下がるという手はない。この期に及んで、彼女に自分が手にしかけている良案を吹き消してほしくはなかったのだ。

「気は変わらないのか？　今まで一番手ごたえのある情報だぞ。それを無視するのか？」

と彼女に詰め寄る。

媛子は眉間に皺を寄せた。

「別に、絶対いかぬとは言っておらん。今は、まだその時ではないと言っておるのじゃ」

「じゃあ、今はどんなときなんだ？　何を待ってる？　神の世に帰りたいんじゃないのか？」

言葉を続けながら、春臣は、自身の中の失望が怒りに変わっていきるのが分かった。

頑なに彼女が神社を拒み続ける理由は何なのか、自分に隠そうとしていることはいったい何なのか。

うやむやにされるだけ、というのはあまりに、納得がいかない。すつきりしない。釈然としない。

そもそも。

そもそも、この神様はいつたい春臣が誰のために、これほど真剣に、様々な方法を模索してきたと思っっているのだろうか。

春臣がこれまで媛子をこの家に置いていたのは、行き場所のない彼女を見捨てるつもりがなかったからだ。事故とはいえ、異空間を作ってしまった責任を感じていたからだ。

なにより、彼女に、安心できる元の生活に戻って欲しかったからだ。心から、そう願っていたからだ。

なのに、何なのだ、この状況は。

まるで、自分だけが必死になっているようで、馬鹿みただった。いい阿呆だ。

これまでに行った媛子のための行動に、嫌気が差してくる。もはや、怒りは止められなかった。

しかし、神は無言だった。

口を閉ざし、言い返してくる気配もない。

自分なんかに話すことは何もない、ということか？

「今度はだんまりか？」

詰め寄ることで彼女を圧迫しようとした。しかし、そんな春臣を、椿が止めに入る。

「榊君、媛子ちゃんをいじめたらあかんで。昨日はもう追求せんで約束したやないの」

ぐいと、手を引つ張られる。

「だ、だが……」

春臣は食い下がるが、彼女は断固として首を振る。

「約束は約束や。それを破るなんて、男らしくないで……」

まさか、椿からそんなことを言われるとは思わず、頭を揺さぶられた思いだった。

「媛子ちゃんかて、昨日、悩んでることがあつたら自分から話すつて約束したやないの。な、せやろ、媛子ちゃん」

「あ、ああ」

彼女は頷く。

「……」

春臣は口を閉ざす。

残念だが、それは認めざるを得ない事実だった。確かに昨日、彼女が話してくれるまで待つと公言している。

「それに榊さん」

ふいに、さつきが名前を呼ぶ。

「そんなに焦らなくても、千両様はどこかへ行ったりしません。じ

「つくりお二人で話し合われる時間は充分にあるかと思えます」  
「……そう、だな」

長い息を吐いて、肩から力を抜く。

「どうやら、自分はかなり大人気ないことをしてしまったようだった。自覚すると共に、感情の沸騰が次第に収まっていく。それと平行し、脳内の思考速度が平常に戻っていた。」

「彼らの言う通り、自分の行動は道理に合っていない。そう気付いた。」

「それに、今の春臣のような追及をしたところで、媛子が態度を軟化させ、口を開いてくれる事態は到底見込めない。ただ、お互いに見合い、対立の関係を作ってしまうだけだろう。」

「少し、性急すぎたか。」

「……すまん、媛子」

「自分が悪いと、素直に謝る。」

「いや、何も言えないわしの方が悪いのじゃ。本当に、春臣の気持ちが無下にするつもりは微塵もないことは分かって欲しい」

「彼女は肩を動かし大きく深呼吸した後で、」

「必ず、近いうちに話す。それまで待っていてくれ」

「と申し訳なさそうに目を伏せた。」

「彼女にこう言われたのなら、春臣としては、もう何も出来なかった。ただ、彼女を信頼する他ない。」



「なら、待っている」

そう答えた春臣を、さつきがじっと見つめていた。

## 61 本当の気持ち

靴を履き、玄関端に出ると、ひんやりとした夜気が頬に触れた。いつの間にか夜か、と思う反面。

ようやく夜か、と待ちくたびれた気持ちの方が強いことに春臣は気がついた。

今日一日、特にこの二、三時間の出来事が、春臣にはまるで半日分の出来事にも思っていたのである。

未知なる神の力との戦いは、表面では隠しているものの、生身の人間である春臣に相当な緊張をもたらし、それが今は体内に溶けてどろどろとした疲労物質と化していた。肩が重いこと、この上ない、さらに、もうすぐ提出期限が迫っているレポートのことを思い、気持ちが悪く。

さつきは春臣の家から数歩歩いた草むらで立ち止まった。くるりと身体を反転させる。

「見送り、ここまででいいです」

「ああ、分かった」

あの後、春臣と媛子の口げんかの後だが、話し合いに今日はこれ以上の進展は見込めないとして、春臣たちはこれからに向けた会議を一度打ち切ることになったのだ。それからしばらくの間、適当にくつろいだ後、時間も時間だということ、さつきを家に帰そう、という運びとなったわけである。

春臣は別れの意味で、軽く手を上げた。

しかし、何はともあれ、この少女からの誤解が解けて本当に良かったと思う。もしも、春臣の計画が失敗し、こんな計り知れない力を持った巫女を敵に回したままだったら、と思うと寒気がした。結果的には媛子の存在を知る人間をまた増やしてしまったわけだが、まあ、その程度で終われたのだから、上出来としておくべきだ。すると、さつきがまたぺこりと頭を下げる。

「あの、重ねてお詫び申し上げます。本当に、申し訳ありませんでした」

何かと思えば、またしても謝罪だった。

「なんだよ。もういいからさ」

ここで先ほどの続きをされても困る。

「青山に言われたんだろ。誰にでも失敗はあるって。だから、もういいんだよ」

「……確かに、言われました」

春臣は空を仰いぎながら話す。

「巫女だろうが、老人だろうが、小学生だろうが、弁護士だろうが、福沢諭吉だろうが、マザーテレサだろうが、みんなそうなんだよ。生きている以上、誰だって過ちを犯す。だろ？」

「は、はい。そうですね」

「それに神様だって、例外とは言えないしな」

「え？」

彼女の瞳が驚きに瞬いた。

「だって、あの媛子だって、しょっちゅう失敗してるぜ。この前なんて、急にわしは間違っておった、とか言い出して、部屋を掃除し始めたりしたし」

「は、はあ」

「土地神様……千両様だって、完璧ってわけじゃないんだろっ？」

自身が仕える神に話が及ぶとは思っていなかったのか、一瞬きよとんとするが、彼女はしばらくして微笑した。

「そうですね。ふふふ」

どうやら思い当たる節があつたらしい。

近くに神様がいると、お互い苦労しますね、とは、春臣が心中で呟いた言葉。

「でさ、そんな神様を、媛子を見てるとき、思うんだよ。失敗して後悔したり、悲しくてしょげてたり、楽しくてはしゃいでたり、してるさ」

さつきが首を傾げる。

「何をです？」

「神様も先の分からない未来を、必死に生きてるんだなって」

春臣の中で、媛子との思い出が、くるくると思い出される。

テレビを見て、飛び跳ねていた彼女。

部屋を掃除し、褒めてくれとねだった彼女。

春臣のことを優しいと言った彼女。  
春臣をポカポカ殴り、涙を袖で拭っていた彼女。

しかしそれは、春臣の中のもともとの認識、神が全知全能、ありとあらゆる者を超越した絶対の存在なら、あんな風に人間らしい姿を見せたりはしないだろう。

そう、この世のすべてを熟知し、これから発生するすべての事態を計算できれば、神に、『感情の表出』はほぼないに違いない。

だって、全て分かっていることなのだから。  
全て、見えているのだから。

何事にも無関心で、何事にも、無感動。

ベルトコンベアーに乗って流れゆく現実をただ、眺めているだけ。  
それは、生気のない、人形のような、神様だ。

でも、実際は違う。

媛子には豊かな感情表現があるのだ。

泣いたり、怒ったり、笑ったり、驚いたり、安心したり、不安になったり、優しかったり……。

ちよつと偉そうなときもあるけれど、春臣はそれが、人間らしいと思う。

だから。

だから、神様も、人間も、必死に生きてると思う。

故に、春臣は彼女の世話を焼きたくなるのかもしれない。  
それを話した後で、

「ちよつとわがままなのは面倒だがな」

春臣は鼻を搔きながらへへ、と笑う。

「……」

すると、春臣の顔を呆然と見つめているさつきに気がついた。

「どうした？ 俺の顔に何かついてるか？」

「い、いえ。榊さんの話、よく分かりました。本当にありがとうございます。」

意外にもあつさりと首を振り、一礼した彼女は手を振る。春臣も振り返した。

「ああ、それじゃ。また今度神社にも行くと思うから」

それだけ告げて、きびすを返す。

玄関を開けかけて振り返ると、まださつきがいた。

彼女はまだ数歩先の夕闇の中に佇んだままだったのだ。家路を急ぐ様子もなく、固まったように動かない。そして、あるうことが、その両目はまだ春臣を捉えていた。

「……どうした？」

引き返して訊ねると、彼女はすいません、と頭を下げる。

「一つだけ、聞きたいことが」

やっぱりか。

「謝らなくてもいいけど。何？」

「榊さんは、その、緋桐乃夜叉媛様をどう思ってたらっしゃるんですか？」

思わぬ質問に、疑問符が浮かぶ。

「どうって？」

「……ストレートには申しあげにくいんですが」

小動物のように、もごもごと中途半端に口を動かしながら彼女は言う。

そんなに恥ずかしいことなのだろうか。春臣には何のことだが、皆目検討がつかない。

「何だよ？」

「……あ、あの方のことを、好いているのか、ということですよ」

虚を衝かれた。

「は？」

開いた口が塞がらない。

「……俺が、媛子、を？」

言いながら、頬がじわじわ温かくなるのが分かる。

「はい」

春臣は急に怖くなった。自分の普段の態度に、媛子を意識してい

るような、そんな特別な種類の振る舞いが含まれていただろうか、脳内がパニックになったのである。

「ど、どう、どうして、そんなことを？」

くそ、呂律が回らない。

「あの、今日お二方のやり取りを見させていただきまして、その、どこか、様子が小説で読んだような気がしまして」「小説？」

しょうせつ？ ノベル？

いや、英語に訳してどうする！

「私、今まで人を好きになって、恋をして、告白もしたことないんですけど、なんだか、直感したんです」

「俺が……媛子を好きだった？」

「はい、おそらく……夜叉媛様の方も」

そして、ダブルパンチ、だった。

目の焦点が合わない。はつきりさつきを捉えられない。唾を飲み込むと、喉が妙な音を立てた。

「媛子、も……」

これには、もはや、絶句しかなかった。

この少女は全く、最後の最後まで、予想外なことをしてくれる。

しかし、重要なのは事実確認だ。

その考えが、かろうじて春臣を正常に保つ。



「本当にか？ほんとに、そう見えたか？」  
「え、ええ。私にはそう見えましたが」

春臣に肩を揺すぶられながらも、即座に首肯するさつき。そして、続けて興味深い見解を彼女は述べた。

「私の勝手な考えですけど、もしかして、あの方が千両様に会いたがらないのは、そこで戻る目処めどがついて、榊さんと離れ離れになるのが、嫌なのでは？」

「え？」

ガクン、と春臣の視界がぶれた気がした。

そうか。そうなのか。

肩が小刻みに震えているのが分かる。

どうして、今までその可能性に思いあたらなかったのだろう。

彼女は、自分と一緒にいたかった。ただ、それだけ。

だから、神社に向かいたくなかった。行けば、神の世界に戻れる可能性が高いことを、『知っていた』から。

そうなれば、無条件で、自分とは『別れる』ことになるから。

だって、春臣は彼女を神の世に戻すと『約束』したのだから。事あるごとに、それを口にしてきたのだから。

いや、口にしてしまっていた。馬鹿みたいに。何度も。なんども。

だから彼女は、それを素直に『撤回したい』と言えなかったのだ。

春臣は呆然とする。

本当に単純で、明快で、容易に想像がつくことだった。

「こんなこと、だったのか？」

そんなことも知らず、自分は、彼女を問い詰めて……。

「榊さん、だとしたら、今日の言葉も」

さらに彼女は説明を重ねる。

「今日の、言葉？」

「榊さんのそばにいたい、っていう言葉ですよ」

彼女が先ほど、泣きながら零した言葉だ。

「！」

まるで、答え合わせをしているような鮮やかさで、春臣の脳内でピースが嵌っていく。

「そう、か」

「だから、夜叉媛様は、本当に榊さんのことを……」

その先を、彼女は口にはしなかった。

答えは自分で出せという巫女からの粋な計らいなのか、単に、その先を口にすることが恥ずかしかっただけだったのか。

それはそれでどちらでもよかったが、彼女の言ったこと全てが事実だとすれば、劇的に状況が変わると思った。

何も言えないでいる春臣に、さつきはお辞儀をする。

「あの、それでは……これだ」  
「あ、ああ、またな」

彼女の姿が闇に消えていく。  
見送った春臣の手は、すぐに垂れていた。

彼女を単に神の世に帰せばいい。  
安全な居場所に返せばいい。

それだけのはずの目的が春臣の中で瓦解し始めているのに気がつ  
いた。

彼女が、自分と離れたがらないのであれば、その目的をどうする  
のか、考えなくてはならないだろう。

目的の見直しだ。

そう、目的の、見直し。

このまま、彼女の気持ちを尊重し、この家に、住まわせる、のか  
……？

そうになると、いろいろと問題も生じてくるだろう。

魂が抜けるように、春臣の体から気力が消滅する。当たり前だ、  
それは今まで向かってきた方向とまるで逆のことなのである。

今これ以上、考えても、今はきつと結論など、出せないだろう。  
夕食を食って、風呂に入って、今日は早めに寝よう。分からない  
ことがあるときは、すぐに眠るのが一番だ。

春臣は自分に言い聞かせる。

ともかく、このまま、彼女を神の世に帰すのは、まずい。

鉛のようなため息をついた。

「ったく、とんでもない置き土産をくれたな、あの巫女さんは」

一難去ってまた一難とはよく言ったものだ。

そして。

もう一つ。

「……俺は、あいつが、あいつが……好き、なのか」

言葉にすることで、春臣の中のもやもやが少しずつ、その形を現  
していくようだった。

まだ、本当の気持ちは分からない。

けれど、本当の気持ちは、春臣が見出すべきなのだ。

「見つけなくちゃな」

妙に温かい風が、春臣の頬を撫でていった。

## 61 本当の気持ち（後書き）

どうも、ヒロユキです。今回でようやく長かった『瀬戸さつき編』も終了です（これは軽く長編並みでは？ マジで疲れた）。

このお話では当初さつきの視点を織り交ぜながら、彼女なりの巫女という存在と、彼女が見た春臣と夜叉媛、というものを念頭に置いて描いてみようと考えていました。

結果的にどういふ感じに仕上がったのか作者としては実感し辛いですが、読者の方からここまでの感想を聞かせてもらえるとうれしいです。よろしくお願いします。

さて、ここから先はまた新しい物語ということになります。作者としては、目下、またしても新しいキャラクターを作ろうと計画中のございます。予定ですが、この先からは一つの大きなクライマックスに向けての準備の話になろうかと思えます。

とりあえず、次の話は久しぶりに番外編ということになるかと。

## 62 番外編 サイクルランデブー 1 (前書き)

お久しぶりでございます。作者のヒロユキです。

他の作品の執筆をしておりましたので、二週間くらいお休みさせてもらっていました。続きをお待ちいただいていた方がいらっしやれば申し訳ありません。

さて、今回は番外編。さつきさんのお話です。特に物語の本筋とは関わりないと思いますが、少しでもお楽しみいただければ嬉しいです。

すっかり陽も暮れ始めて、誰もいない田舎道を歩きながら、さつきは大きなため息をついた。

榊少年の自宅からの帰り道、さつきを待ち受けていたのは、どうにも置き場所のない重苦しい疲労感と、風に舞う埃にも似た、何者にも抗うことの出来ない虚脱感だった。

おそらくだが、昨日の倍以上の疲れがあるのではないだろうか。春臣たちの前では無意識に気を張っていたのだろうが、そこから開放されてみると、急に自分という存在がすっぽり縮んでしまったような印象だった。さつきという入れ物の中に、干からびた魂が転がっている、そんな感じである。

それもそうか。さつきは思う。

自分が神に代わり、町を守ろうと奮起し、榊少年の家に突入した方がいいが、結果はみるも無惨な敗北だった。神の力に慢心していたさつきの、完敗だったのだ。

いや、その方がよかったのか。思い直す。

もしも、あのまま彼を倒し、二階の部屋にいた緋桐乃夜叉媛まで倒そうとしていれば、それは取り返しのつかないことだった。

すべては浅はかな自分の勘違い、思い込み、根拠に乏しき、ただの妄想。巫女として恥ずべき、軽率さだった。

千両様にも母にも相談せずに決めてしまったさつきが悪い。

「わたし、やっぱり馬鹿」

ふいに泣き出しそうな感情が溢れてきて、風景が滲んだ。陽を受けた川辺のきらめきが、光のあぶくとなって瞳に映る。

しかし、さつきは首を振った。

ここで落ち込んでいてどうする。

あれほど榊さんたちに励まされたじゃない。

『誰でも皆、過ちは犯すものだ』

そう、言われたじゃない。

常識で考えれば、さつきの失敗は笑って許してくれるレベルではなかったはずなのに、彼らは容易く手を差し伸べてくれた。

つまりさつきは、それだけのチャンスをもらえたのだ、と捉えるべきだろう。この過ちをプラスの力に変えるための。

彼らの気持ちを応えるには、くよくよしている場合ではない。涙を拭う。

そう。

さつきには成すべき使命がある。

いつか、あの千両神社を復興させるのだ。

今の寂れた、眠っているような神社ではなく、人々が集い、活気溢れる声に満ちた神社に、である。

それが、いつか夢見る、千両神社の理想の姿。

まだ、それには程遠いのが現状だが。

しかし、それ以外にさつきの中で気に留めていることがある。榊少年と、あの緋桐乃夜叉媛という神様との関係である。

聞いた話が全て本当なのだとすれば（榊少年の必死さからしてそうに違いないが）、もはや奇跡を通り越して、神の思し召しともと



れる不思議な偶然の連鎖が、あの小さな家で起こったことになる。

神と人が一緒に暮らしているなんて。

やはり何度考えてみても、整理がつかない、不思議な出来事である。しかもその状態がもう一ヶ月も続いているというのだから、さらに現実味がない。

本来であれば、出会はずもない、縁もゆかりもない一般人と神なのだ。

よく共同生活が成り立っているものだ、と感心すらしてしまう。

もしも仮に、千両神が緋桐乃夜叉媛のように、この世に現れたらとさつきは想像してみる。

そして、千両様と、一緒に生活している自分を想像する。  
ダメだな。

さつきは首を振った。

神と共に暮らすというのは、やはり奇妙な違和感を禁じえない。神は神として、永遠に触れられない崇高な存在であり、さつきはそれでこそ、神に仕えようという気持ちが沸くのだ。

でも、彼らはそのさつきの認識の範疇を越えた、例外中の例外。そう、異常の中の異常。

しかし、だからこそなのだろうか。

神少年と、緋桐乃夜叉媛との間に結ばれた信頼の関係は。

昔、さつきはそれを本で読んだことがあった。異常な体験と一緒に過ごした男女は接近しやすいという話である。確かに、ドラマ映画の中での恋愛というものはよく異常な状態でうまれる。

戦場であったり、逃亡中であつたり、どちらか不治の病に侵されていたり……。

喧嘩ばかりしていたようにも見えたが、それは仲がいいという証拠なのだ、さつきは見ていた。

つまりあれは、さつきに言わせれば、お互いがお互いの思いあつているが故の、不器用な言葉と、棘のある声なのである。

当事者達はもちろん、本気で喧嘩し、やりきつて、意思のぶつ合いの中でそれ以外、何も感じないかもしれない。

しかし、その心情の奥に潜むのは、本心をぶつけられるだけの相手に対する信頼感と、相手に自分を受け入れて欲しいという、一つの願望なのだ。

さつきは、そんな彼女たちを見て、羨ましかった。

いつか自分もあんな風に、本来の自分を見せ付けてしまえる相手にめぐり合えるのだろうか、考えてしまうのだ。

少しだけ、恋人と二人でどこかへ出かける。そんな自分を想像してみるが、これがどうにも現実離れしていて、しつくり来ない。自分の顔にも相手の顔にもモザイクがかかったようにもやややとしていて、ちぐはぐで、異質な感じが拭えなかった。

皆、最初はこんな風に思えるものなのだろうか。それとも、今のさつきの思考力が疲労のために、低下しているせいなのか。

そう考えて、川に架かる短い石橋を渡ろうとしたときだった。

「！」

ふいに眩暈を感じ、さつきはその場にうずくまってしまった。急に吐き気がし、胸に何かがつつかえた心地がする。

ああ、そうか。さつきは理解した。

この重石のような疲労感には、通常とは異なる「別の意味」があったのだ。

というのも、これは神の力を使用した際の、反動なのである。

神の力とは本来、人間とは相容れないもの。いくらかき混ぜても混ざり合わない水と油のようなもので、通常、生身の人間が使用することは出来ない。

それは巫女であるさつきであれ、不可能なことなのである。だからこそ、千両神の扇子を使用するのであって、これによって初めて力の発動が可能になる。

しかし、それでもやはり、神の力を使うことは、違和が生じる。

それは小さな入れ物に大きな荷物を詰めるようなもので、当然、「入れ物」の方に大きな負荷がかかることは避けられない。

その負荷の影響が、力の発動後の「体調の異変」になのだ。

これは千両神にも何度か言われたことだった。

命に別状があるものではないが、しばらくの間は激しい運動が来ず、体が極端に疲弊しやすくなる。

もちろん、以前訓練した際も同じようなことが起こった。さつきの場合であると、力を使った数時間後に起こることが多い。

間違いないな。これは反動だ。

「まいったなあ。体調が戻るまで、少し時間がかかりそう」

おそらく、回復を待っている内に日が暮れてしまっただろう。橋の欄干を背もたれにさつきは座り込む。

もし誰かが通りかかれば、少々不審がられるかもしれないが、ま

あ仕方ない。

少しの間、眠ってしよう。

そう思って目を閉じかけたとき、目の前で自転車のブレーキ音が聞こえた。

「あれ」

男性の声だ。

「確か、瀬戸さんだっけ？」

名前を呼ばれて、さつきははっと身を起こす。

すると、そこには、昨日であったばかりの少年の姿があった。

暮野木犀である。

彼は、自転車から降りてさつきのそばまで来た。外灯の光の下、知り合いを見つけた彼が嬉しそうに微笑んでいるのが分かる。

「こんなところでどうしたんだよ」

まだ二回目の対面だというのに、木犀はやはり親友と話しているかのような気軽さだ。

「いえ、少し体調が悪くて」

そう答えると、彼は顔をしかめる。

「おいおい大丈夫か？ 病院に、連れて行けばいいか？」

「それには及びません。しばらくここでじっとしていれば治りますから」

さつきは彼に気を遣わせまいと遠慮したが、彼はさらに心配そうな顔つきになり、そっとしゃがみこんでさつきの顔を覗き込む。

「貧血かな？」

「ええと、そんな感じですよ」

まさか、神の力を使った反動です、などとは言えない。すると木犀は、周囲に首を巡らし、

「うーん……」

と何か悩んだ素振りの後で、背後の自転車を振り返った。

「よし！」

小気味よく、パン、と手を叩く。

「はい？」

「後ろ、乗れよ」

### 63 番外編 サイクルランデブー 2

「後ろ、乗れよ」

その提案に、さつきは目を丸くした。

「はい？」

「だから、自転車に乗つけてやるって」

彼はさらりと言つてのける。

いや、それは分かるのだが……。

「え、え、え、そんな」

あまりにも唐突な展開にさつきは見るも無様に、たじろいでしま  
う。

当たり前だ。それは誰が何と言おうと、自転車の二人乗りという  
やつだ。まごうことなき、純然たる、真正正銘の、二人乗りだ。

それが一般人にどう理解されているかは、この場合無視すること  
にして、さつきの常識ではそれは特別な状況を表す。

つまり、恋仲となった男女が、一人乗りの自転車に同乗するとい  
う圧倒的不安定走行によって、転倒し擦りむいて怪我をするかもし  
れないという安いリスクのもと、一種の低次元なスリルを味わい、  
その上で互いの絆を深め、さらに、二人の関係を周囲の人々にこれ  
でもかと思せ付ける赤面必至の行いであり……まあ、総じて、何の  
免疫もないさつきには、到底耐えられない至難、あるいは極難の行

動なのである。

しかも、相手は昨日会ったばかりの少年ときた。

いくらなんでも、心の準備というものが要だろう。最低、二三年ぐらい経ってから、頃合いを見計らうべきだ。断じて、そつだ。異論は認めない。

彼にはどうやら、さつきのような恥じらいというものが無いらしい。

一方、木犀はそんなさつきの心情など一片も知る由もない。

「怖がらなくても大丈夫だよ。振り落したりしないから」

「いえ、わ、わたしは」

ここは丁重にお断りをしなくては、と手刀を横に振るが、木犀は首を傾げる。

「動けないのか？ それなら、背負ってやろうか？」

とさらに思いがけない提案をしてくる。

歳の近い異性に背負ってもらうなど、さつきの中では二人乗りよりもさらにハードルが高い。

「いえ、そうじゃなくて」

両手を振って拒否する。

「だったら？」

「ふ、二人乗りは、危ないですし」

苦し紛れに当たり前のことを言ってみる。

「なんだ。瀬戸さんって真面目なんだなあ」

彼は半笑いだ。

「大丈夫だよ。誰かに見つかったても注意されれば降りればいいし、俺が無理やりに乗せたって言うから。それに、事情を説明すれば、大抵の人は分かってくれるって」

「そ、そうですね、あの……」

「まだ何かあるのか？」

「あ、あう……」

素直に二人乗りが恥ずかしいのだと言えたら、どんなにかいいだろう。

だが、初心なさつきの乙女心はそれを口にするこことさえ、ためらっている。

二人乗りはさつきが思う以上に一般的なことなのかもしれない、そう思うと、自身の無知を晒すことになるのではないかと恐れているのだ。

どうすべきか悩んでいると、彼は痺れを切らしたのか、

「問題ないな。ほら、手を取ってやるよ」

とさつきを引き上げてくれた。

「そら、早く。もう陽が暮れちまう」



もはや抗う術は残されていないようだった。この期に及んで、大した理由も言えず、ああだこうだとごねていては、彼にもさすがに妙な奴だと思われてしまっただろう。

それも、できれば避けたい状況だった。

「は、はい」

さつきは返事をしながら、必死に脳内で自分の選択を正当化する。

これは仕方のない不可避の成り行きだったのだ。

正確には病気でないとはいえ、今のさつきは一般人の目からすれば、おそらく病人の顔つきなのだろう。自分では確認することは出来ないが、少なくとも、彼はそう思っている。

だからこそ、彼としては常識から考えて、病人をこのような人気のない場所に放置しておくことは、断じて許されるべきことではないと考えているに違いない。さつきもその考えには当然同意する。仮に彼と反対の立場でもそうだっただろう。

故に、彼は自分を助けるために、止むを得ず、さつきを自転車に乗せるのである。

これは列記とした病人の保護であり、何ら社会的に不自然なことではない。

当然の、成り行きである。

それに、そもそも、さつきは出会ったばかりの彼に好意を抱いているわけではないし、木犀においてもそれは同様と言えよう。つまるところ、この状況で、自転車の荷台にさつきを乗せることには、救出以外の意味など、生じ得ない。

だから、これは断じて、そういうアレではない。そう、断じてそういうわけではないのである。

ここまで考えて、さつきはすつと息を吸い込み、荷台の部分に腰をかける。ギシ、と自転車が軋んだ。

「あつ」

と、声を上げる。

荷台に乗ることが、これほどまでに不安定な乗り心地なのかとさつきは驚いたのである。

そうか、背もたれがない。

さつきは進行方向に対して垂直、つまり横を向いて座っているわけで、従って、背後に何も支えとなるものがないのだ。

周囲を見回しても、自転車にはそれほど掴まる部分などはないし、となると……。

「しっかり掴まって」

すると、僅かに振り返りつつ、木犀が言う。

「え？」

「俺に掴まってないと、さすがに落っこちるぜ。ま、瀬戸さんが一輪車に乗ったまま綱渡りできるくらいに、バランス感覚に自信があるって言うなら、話は別だが」

「む、無理です」

無論、さつきは曲芸師ではない。

だが、それは必然的に、木犀の腰に手を回さなければならぬ、ということだ。ごくりと唾の飲み込む。

「じゃ、じゃあ失礼して」

「いちいちそんなこと言わなくても。瀬戸さんは大げさだな」

彼は無神経にも笑う。

こっちは初めての体験で、緊張しているというのに。

しかしながら、ゆっくりと彼の体に手を回し、手が解けないように、ぎゅっと結ぶ。

これである程度の安定性は確保されたとみていいだろう。

「家は、千両神社の近く？」

木犀が訊く。

「ええ、森の入り口を通り過ぎた辺りです」

「そうか。大方の位置は把握した。じゃ、出発」

彼がゆっくりとペダルを踏み込む。

ふわりと、体が宙に浮かんだ感覚がして、ゆっくりと自転車がスピードを上げる。

そっと、体が風に馴染む、感覚。

車輪から伝わる、振動の波。

危うくて、怖くて、つい、まわしている腕に力を入れる。

と、さつきの頬が、木犀の背中に触れた。

当たり前だけれど、人のぬくもりがあった。それを感じて、さつきはほっと安心するが、もっとドキドキするものだと思っていた分、これは意外だった。

なんというか、ぬくもりに守られているというか、とても心強い

気がした。

振り返れば、先ほどまでいた橋はいまや遠い闇の向こうに溶けている。

彼に会っていなければ、今でも自分はあの寂しい場所にたった一人、座り込んでいたのかと思うと、なぜか今さらながら、さつきはぞっとした。身震いすらしてしまうのである。

彼に、感謝をしなければいけないな。

背中に寄りかかりながら、そう思った。

急に彼がブレーキをかけたと思ったら、そこは森の入り口だった。千両神社に続く森の入り口である。

さつきの自宅はここからさらに道を下った先にある。それは森の入り口とは違う方向の道であり、つまり、その分かれ道の前で彼は止まった。

じっとしたままの木犀を見ながら、さつきは、もしかして思った。

彼はおそらく、久しぶりにここを訪れたせいで、どちらがどちらの道であったのか、忘れてしまっているのだ。

「じつ、左の道です」

さつきが言う。

しかし、それを聞いていないのか、木犀は黙って森の入り口を見つめていた。もちろん今は暗闇で、森と道の区別もつかないようなただただ黒一色の空間である。

だが、彼はそこを神妙な面持ちで見つめているのだ。

「どうか、しましたか？」

「確かこの先だよな。神社って」

彼は首を動かさない。

「ええ」

「そうか、小さな頃を思い出すな。時々友達とここへ来て、境内ま

で入って遊んだっけ」

「どうやら、彼は昔を懐かしんでいるようだった。さつきは彼が昨日も同じようなことを話していたことを思い出す。

「そうか、彼は幼い頃、ここへ来ていたのか。」

「だとすれば。」

「だとすれば、昔の自分とも出会っていたのかも知れない。幼い頃、母に連れられて神社に来ていたさつきとも。」

「そう思うと、さつきはふいに、彼に親近感が生まれた。」

「ちよつと、いいかな」

「はい？」

「彼が自転車を降りる。」

「なんです？」

「訊くと、彼は目の前で手を合わせて笑う。」

「神様に挨拶しておこうと思って」

「千両様に？」

「ああ、昔神社で遊ばせてもらって、世話になったのに、それっきり行ってなかったんだ。神様だって、悲しいだろうよ」

「さつきははつとして何も言えなかった。通りがかりでも、何年ぶりだろうと、千両神に挨拶をしてくれる彼に驚き、すぐに嬉しくなって、胸が温かくなったのである。」

「目を閉じて、彼は祈っている。」

「何を思っているのかは、さつきには知れない。何しろ、さつきは

全能の存在ではないのだ。

「瀬戸さん、どう思う?」

しばらくして、祈りを終えた彼が訊く。

「え?」

「神様のことだよ」

彼の瞳は優しげだ。

「千両様が?」

「どう、思ってるかなって」

どう答えるべきかと逡巡し、さつきは視線を森に向けた。すると、妙に柔らかい風が森の奥から吹いてきて、木々の梢を揺らし、まるで囁いているような音を立てた。

巫女であるさつきにはもちろん、それ《・・・》が何であるのか、すぐに理解できた。

森に向かって小さく頷く。

そして、舞い降りてきた一枚の葉を手に取り、木犀に手渡した。

「喜んでくれてますよ。今度、また遊びに来てくれって」

すると、彼は不思議そうな顔をしたままそれを受け取り、さつきを見、森を見上げた。

「そっか。招待されたとあらば、行かないわけにはいかないな」

「千両神社にですか?」

さつきはぽかんと口を開けた。

「ああ、週末にでも遊びに行くさ。瀬戸さんもいるんだろう？」

「ええ……はい」

本当は、榊少年の家の件が済み、報告を終えたら、休みがもらえることになっているのだが、こうなれば、もてなさないわけにはいかないだろう。すぐに頷いた。

木犀が、にやりと微笑む。

「なら決定。こんな美人の巫女さんまでいる神社なら、一日いたっていいと思うし」

「え、私は美人じゃ」

驚いて、わたわたと首を振る。

すると、彼はさつきの反応を面白がるように笑いつつ喋った。

「ハッハッハ、とりあえず、週末の予定は決まったな」

どうやら、彼は少し意地悪な人間らしい。さつきはむっと口を突き出す。

だが、実際のところ、褒められて悪い気はしないのも事実だ。

今まで自分の周囲に、そんなことをさらりと言ってくれるような異性などいなかったのだから。胸が予想外の高鳴りをしている。

薄暗闇でさつきの頬の色が彼にあまり見えないのは、救いだった。

再び自転車に二人乗りし、先を急ぐ。

さつきの家まで、あともう少しというところまで来ていた。

そこでさつきは、背中の方こう側、木犀に訊いた。



「あの、暮野さん」

「えっ？」

急に話しかけられ驚いたのか、彼の体がびくりと動き、さつきはドキリとする。

「あ、あのう、その、二人乗りの運転、慣れているみたいですからね」  
「ど」

そこで一呼吸を入れ、さつきはためらいつつ、訊ねる。

「もしかして、こういうことは、よくされているんですか？」

彼は果たして、どう答えるのだろう。その答えに、さつきは大方の予想をつけながらも、一方で、自身が何かの期待を込めているのに無意識に気がついている。

と、彼が言葉を紡ぐために息を吸ったのが分かった。  
彼から帰ってきた返事は、

「ああ、よくあるよ」

だった。

まあ、そうか。

なんとなく、もしかすると、ありえなくはない、と予想していたが、それが見事、難なく、すっかりの中し、さつきはなんだかがっかりした気持ちになった。

なんだ、自分は特別ではなかったのか。

とため息すらつきたくなる、心地。

やっぱり、これくらいのこと、彼らにとっては日常茶飯事なのだろうか。

しかし、彼は先を続けて、

「弟を乗せてさ」

と言った。

「お、弟？」

「ああ、話さなかったか？ 俺、双子の弟がいるんだ。金犀と銀犀」  
「へえ……」

もくせい、きんせい、ぎんせい、なんとなく、太陽系の惑星のようだ。さつきは一瞬、のんびりとそんなことを思い浮かべたが、すぐ、

「でも、それ以外の人は？」

と訊く。

「そうだなあ、特にないな」

彼は少し考えて、

「多分、弟たち以外だと、瀬戸さんが初めてじゃないかな？ 自転車の後ろに乗せるの」

一瞬、息が詰まる。

「初めて、ですか」

「うん」

そう言われて、ときめいたような気がしたのはなぜなのか。さつきには分からなかった。

「私も、です。乗せてもらうの」

そつと、回している手に力を込める。

出来れば彼のことをもっと知りたい、そう思い始めていた。

## 64 番外編 サイクルランデブー 3 (後書き)

これで、番外編は終了です。

次回からは新章になり、新しい登場人物も現れ、ひと波乱ある予定です。

また長い話になると思いますが、読者の方もどうか気軽な気持ちでお付き合いいただけるとうれしいです。

## 65 蒼髪の女商人（前書き）

どうも、ヒロユキです。

今回から新章ということ、心機一転張り切っていこうと思います。物語は五月を過ぎ、六月。雨の滴るブルーな季節ですね。というわけで、ということもありませんが、今回登場しているのは、青い髪のキャラクターです。さてさて、この人物がどのように物語をかき回してくれるのか！

それでは、また。

## 65 蒼髪の女商人

数時間前から、小雨が降り続けている。

そのせいで、山の斜面に群生する草花はたつぷりと水滴を乗せており、皆しつとりと頭を垂れている。

険しい山道が続いていた。

右手は、まるで天から手が伸びてきて、山の斜面をこつそりと掬いとっていったかのような、切り立った断崖である。山道は崖の端を縫うように細々と山の頂上へと伸びているが、場所が場所であるだけに、人が踏み入った形跡はあまりなく、草が生い茂り、ほぼ獣道と化している。

しかし、そこを行く、何者かの影が一つ。

時代錯誤も甚だしい、江戸時代を彷彿とさせる旅装束に身を包んだ人物が、菅笠すげかさ（円錐状の帽子のようなもの）から山頂を見上げ、鼻歌交じりに登ってきている。

足を滑らせてしまえば、一卷の終わりという危険を孕んだ道ながら、その人物は、まるで散歩に来たかのように軽い調子で歩いていた。

明らかに肩に食い込む、重そうな荷物を背負っているが、それすら気に留めない軽い身のこなしである。

さては、長きに渡る厳しい鍛錬を積んだ屈強な山男かと思いきや、身を包む服から時折分かる曲線的な体軀は、男のそれではない。どうやら女のようなものである。

しかし、そうだとしたとしても人間の女性とは思えない点があっ

た。

人のようでないその身のこなしも一つだが、特筆すべきは、腰まで伸びた長く蒼い髪。

光沢を放ち、艶やかな色を見せる細い髪は人工的に手を加えたとは思えない、青く澄み渡る空の色を写し取ったがごとく自然な色合いだ。

もしや、人間ではなく、この土地に自給自足で住まう仙人か、ともみえるが、早合点はよくない。

なぜなら、すぐに、

「〜」

その者の懐から携帯電話の呼び出し音が聞こえてきた。

「お、携帯ちゃんかあ」

時雨川ゆずりは弾んだ声で白装束の胸元から自分呼び出しているしくれかわ小型通話機器を取り出すと、感心したように頷く。

「ほお、こんな山道を歩いても電波が通じるとは、すごい世の中になったもんだねえ」

と一人ごち、一つ深呼吸をして息を止めると、すぐにボタンを押す。

「はい、どーもー！ 毎度お馴染み、いつでもどこでも全国出張、激安価格で品質保証、商売繁盛無病息災、恋愛成就に心願成就、古

今東西不思議なお守り、各種もろもろ取り扱い、日本一の護符商人、おまもり時雨川は「こちらでござい！」

相手に一切の隙を見せないまくし立てるような息継ぎなしの自己紹介で、ゆずりは満足げに微笑む。

よし、今回も嘔まなかつたぜ。

しかし、その勢いに気圧されたのか、電話の向こう側は一言も発することなく、沈黙してしまったようだった。その上、呼吸の音さえ聞こえない気もする。

「あ、あとう」

しまった、やり過ぎだったか。

もしや、ゆずりの勢いに驚愕し、卒倒してしまったのか？

と思うのも、ゆずりには前科があるのだ。以前、誤って間違い電話を掛けてきた人間がゆずりのマシンガンな挨拶を聞き、受話器の向こう側で気絶してしまったことがあるほどなのである。

ゆずりは冷や汗を掻くが、しばらくしてから、やっと老人の声で返事があつた。

「ああ、もしもし」

ほっと胸を撫で下ろす。

「そうです。お守りをこそ所望で？」

話を聞くに、どつやら間違い電話というわけではないらしい。

「はい、はあ……で、出張？」



しかも、どうやら久しぶりの仕事の依頼のようだ。ゆずりはそれを聞いてうきうきしてくる。

「それで、どちらまでお伺いしましょう?」

思わず、その場で足踏みをしながら訊ねると、相手から指定されたのは、ゆずりにとって聞き覚えのない場所だった。

「はあ、市の、柘町?」

すると、ゆずりの自信のない声色を聞いて、不安に思ったらしい依頼主が可能かどうか聞き返してくる。

「いえ、もちろん、出張させていただきました。ご都合の良い日はございますか?」

ゆずりは調子よく返答する。基本的にゆずりはご飯がないところであれば、どこへでも行けるのだ。

「それでは、明後日に」

電話を切った。

そして、懐に仕舞うや否や、

「ようし、これで久しぶりにまともな飯にありつけるぞ!」

と高らかに拳を天に突き上げた。すると、それと一緒にふわりと長い蒼髪が舞い上がる。空気はじっとりとした水分を含んでいるが、不思議なことにその髪はとても軽そうだ。

「さてさて、のろのろとろしているわけにはいかないよ。いざ  
行かん、我が未踏の地。おいしい食べ物がこの時雨川を呼んでいる  
ぜー！」

そう叫んで、蒼い髪を翻し、飛ぶように山道を降りていく。

すると、どこかで置いていくなと止めるように、フクロウが、  
—  
声鳴いた。

## 66 春臣の頼み事

「でも、ほんまにすごい映画やったな、榊君」

揺れるバスの車内。

隣の席の榊が興奮冷めやらぬ様子で春臣に語っている。先ほど二人で見たアクション映画の主人公をまね、彼女はどう見てもぎこちないパンチを宙に繰り出している。

どう見ても貧弱すぎる勢いのない動きは、子供に避けられてしまいそうだ。

笑うの堪え、春臣は窓の外へ目を向ける。

窓の向こうはすっかり闇だ。

すっかり見えなくなった夜道をバスのヘッドライトが照らし、掻き分けるように突き進んでいる。

車内には榊と春臣以外の客は見られず、榊が喋っている以外はバスのエンジンが低く響いているのみである。

「榊君！」

ぼつっとしていると、榊にひじで小突かれた。

「何だよ」

「話、聞いてんの？　うちが今何を聞いたか分かる？」

「どうやら何か話を振られていたようである。」

春臣は逡巡して、

「ああ、確かに主役はあの俳優が適役だったよ」

と適当に答える。

すると、案の定は答えはかみ合っていないかったようで、彼女はむすりと頬を膨らませる。

「そうやのうて、最後の敵。とどめ刺されてほぼ死んでなのに、昔話とかぺらぺら喋りすぎちゃうか、って聞いたんや」

ああ、そういうことか。

「……別にいいんじゃないか？」

春臣は答える。

「どうせ、フィクションだし。シナリオ上、リアリティが損なわれるのは当然だよ」

「まあ、せやな。やっぱりそこは突っ込んだらあかんか」

とはいえ、あれは確かに興ざめだったことは事実だった。映画のクライマックス、主人公にとどめを刺された悪役が、今さら自身の激動の人生を振り返り始めるなど、もつと事前に思う存分回想しておいてほしかったものだ、心内で春臣は舌打ちしていたのだ。

まあ、フィクションだけでも。

「でも、それはさておき。車に仕掛けられた時限爆弾が爆発するとこなんか、迫力満点やったな」

椿は今でも脳内でめくるめく壮絶戦闘シーンが再生されているらしく、弾んだ声で語っている。

「敵に追い詰められてビルから飛び降りるシーンとか、うち、驚いて呼吸停止や」

春臣をそれを聞いて、噴出した。いくらなんでも、停止はまずい。

「ハハハ、驚きすぎだよ」

しかし、彼女は笑われたのにも気に留めず、

「今の気分なら、ブルースリーにも勝てるで」

などと自信満々に言っただけ。

「……何を根拠もなく」

春臣は呆れて半眼になった。

だが、なぜか彼女はしたり顔でにやっっている。

「根拠はなくても否定は出来へんやろ？」

「うん？」

少し考えて、

「……ああ、確かにそうだな」

彼女の言う通り、既に亡くなっている人間に勝てるかどうかなど、この世では実証不可能だ。

神様の力で蘇らせてもらうとかならともかく、さすがにそんなことは出来ないのだから、彼女の話は肯定も出来ない代わりに、当然、

否定も出来ない。それ以前の問題である。

まあ、だから何だ、という話ではあるが。

「でも、ほんまに奢ってくれてよかったの？ 榊君」

ふいに、彼女は眉をひそめて聞いてきた。

「え？」

「いくら、いつもノート見せてるお礼や言っても、見たかった映画にまで連れてってくれるなんて、大そうなことをせんでも」

「そうか？」

春臣は首を傾げる。

彼女はこう話した。

「それに、元々、榊君は昼ごはん奢ってくれることもあるやん。それで貸し借りはなしなんちゃうん？」

「ああ、言われてみればそうかもな」

「せやから、なんかあるんちゃうんかと」

春臣は一瞬口ごもる。

確かに彼女の指摘どおり、数時間前、講義終わりの彼女を捉まえ、映画代をおごり、彼女が見たがっていた映画を見せてやったのには、きちんとした理由がある。

これは後日に話そうと思っていたのだが。

春臣は再び窓の外に目をやりつつ、椿に話す。

「この前のこと。覚えてるだろ」

「この前？」

「瀬戸さんが、俺の家にやってきたときのことだ」

「ああ」

彼女は合点がいったようで、大きく首を上下させるのが窓に映る。二週間前のあの唐突過ぎる巫女の襲来は、春臣と媛子に大きな衝撃を与えた事件だった。

春臣は未だによくあれほどの騒動で、誰にも被害がなかったものだ、奇跡のように思うこともあった。

「それが、どうしたん？」

彼女はきょとんとしている。

「青山、危険な目にあつたじゃないか。そのお詫びだよ」

「……まさか、さつきちゃんに、人質にされかかったこと？」

「まあ、な。俺もいろいろ心配もかけたし」

春臣は自分がさつきと対決すると告げた時の彼女の不安げな表情を今でも覚えている。無事であつたとはいえ、そこには紛れもなく、迷惑をかけた彼女に対する罪悪感がわだかまっていたのだ。

「あれは本来、榊君のせいやあらへんのに」

納得がいかなさそうに彼女は眉根を寄せた。

「そうかもしれない。でもな、青山は元々、あの場に関係のない人間だっただろ？」

「へ？」

春臣は説明する。

「あの騒動は、巫女である瀬戸と、あの家に住む俺と、神様である媛子がいれば決着のつく話だったんだ。青山はそれにたまたま運悪く巻き込まれたんだよ。たとえ俺に非がないとしても、多少筋違いかもしれないけれど、せめて、これくらいはと思つてな」

「え、え？」

「話しておくべきだとは思つたんだが、楽しい映画を観る前や後に、嫌なことを思い出させるかな、つて考えて、また今度説明を……」

急に隣が静かになつたので、不審に思つて振り向くと、彼女は陰呑な顔つきで春臣を睨んでいた。

「そんなことはどうでもええ」

「ど、どうした？ 怒つてるのか？」

意味が分からず、春臣はうろたえた。何か気に障るようなことを言つてしまつただろうか。

「榊君の馬鹿！ うちが関係ないつて、どういふことや？」

「いや、だつてさ」

「だつてもへちまもない！」

ぴしゃりと言われ、春臣は口を噤む。椿の目は真剣だった。映画の悪役のように敵意をむき出しにし、隙あらば殴つてきそうである。

「榊君は、なんでうちのことを仲間はずれにするん？ うちは、確かに、神様でもないし、巫女さんでもない。榊君みたいに、媛子ちゃんと一緒に暮らしてないかもしれへんけど、うちは、榊君の友達やろ」



「……あ」  
「そうや、友達なんやから、関係ないとか、そんなないんや。榊君が困つとつたら、助けに行くし、問題を抱えてんねやつたら、話聞いたげる。運悪く巻き込まれたからお詫びなんて、そんな他人行儀なことせんでええんや！」

返す言葉がなく、春臣はまたしても黙す。

しばらくつんとした彼女と申し訳なさそうな顔をした春臣が隣同士に座ったまま、沈黙が流れた。緊張で、眉間の辺りがピリピリとしている。

「その、すまん」

ようやく、声を出した。

「反省した？」

「ああ……もうしないよ」

「それならよし」

彼女はむすりとしたまま頷く。

とりあえず、怒りの矛は下ろされたようだ。が、場の空気は間違はなく危うげなものになってしまっていた。うう、気まずい。

「……でも、青山もたまには良いこと言っただな……ハハハ」

春臣としては場を和ませようと、ちょっとした冗談のつもりでそう言った。

しかし、

「！」

今度は呆れたと言わんばかりに椿は目を丸くした後、

「榊君なんて……もう知らん！」

と、とそつぽを向いてしまった。

さすがにこの真剣なムードでの茶化しはまずかったか。全く格好がつかない春臣は心底困って頭を掻く。どうにか謝意を伝えなければ。

「青山……ええと、あのな」

「……」

「俺があまりにも馬鹿な上に阿呆で、救いようのない無神経で、先天性の唐変木で、これまで気付いていなかったことがあったから、今、言う」

「……」

「あのとき、青山がいてくれてよかった。すげえ感謝してる」

しばしの沈黙。

と、衝撃。

「ぐっ！」

彼女はふいをついて後ろ向きそのまま春臣のみぞおちを殴ってきたのである。

意外にも鋭いパンチで、息が詰まった。

「……」

春臣は腹を押さえる。

それは当然、ブルースリーを倒せるほどではないものの、少なくとも、春臣の心に、ずしりと、重く、響いた。

「これで、チャラにしたる……」

彼女がぼそりと言った。

バスを降りてからだだった。春臣たちはお互いの自宅までの共通の道を歩いていった。

春臣が考えごとをしていると、

「でも、あのヒロインのことやけど」

と椿がつぶやいた。

「なんだ、まだ映画のことを考えてたのか」

てつきり春臣は、先ほどのバスの中で話題の波は過ぎ去ったものだと思っていた。

しかし、彼女は意外そうに片方の眉を動かした。

「当たり前やん。一度映画観たら、四日後の朝まではそれでパンパンや」

「ふーん」

そうなのか。

まあ、あくまで彼女の常識である。そして、その常識は往々にし

て春臣の常識と食い違うものだ。

「それでヒロインが何だった？」

春臣は話を戻す。

「あの女の人、最初は主人公の味方やったのに、途中で敵のスパイやっただけじゃん」

「ああ、うん。あれはなかなか意外で秀逸な展開だったな。で、それが？」

「どついう気持ちなんやろって思ってな」

急に彼女は声のトーンを落とした。

「は？」

何を言うつもりなのだろうか。

「だってほら、ずっと主人公を騙してたわけやろ。ボスの命令やいうても」

「まあ、そうだな」

「秘密を隠し続けるのって、辛いことやと思うで」

「……え」

「うちやったら、とてもやないけど耐えられへんもん。ましてや、その相手が好きな人やったら……」

そう言われて春臣が咄嗟に思い浮かんだのは、媛子のことだった。

瀬戸さつきとの一件からもう約二週間が経つが、春臣に対して、彼女は未だに何かを隠し続けているのではないかと思うような態度に加えて、神社に行きたがらないという問題を解消できていない。

きつと彼女もそんな風に苦しんでいるのだろうかと思い、春臣は鬱屈とした気持ちに駆られる。

どうにか、今の現状を打開したいものだ。

「青山、ちょっといいか？」

そこで、春臣は彼女の肩を抑える。

「へ？」

「バスの中で言ってたこと。友達なら、困ったら助けてくれたりするんだよな」

「うん。助けたるで」

彼女は迷いなく首を縦に振る。

良かった。

春臣はすつと息を吐き、

「だったら、一つ頼みごとがある」

「榊君の頼みごと？ 何なん？」

「それは……」

「それは？」

「さ、裁縫を教えて欲しいんだ」

## 66 春臣の頼み事（後書き）

どうも。作者です。

書きながら思ったのですが、春臣と椿は案外いちゃいちゃしていると思う。一緒に飯食って、映画見に行つて、付き合っていると思われるても、無理はない。主人公、自重しなさい、と思う。

でも、他に春臣といつても一緒にいるキャラクターを作っていないので、こういう状況になつても仕方ないだけねど。

初期の頃に、もう一人くらい男のキャラクターを作っておけばよかったと、今さらながら、悔やまれる。

以上、作者の一言でした。（すいません、読み流してください）

## 67 緋桐守り 1 (前書き)

どうも、ヒロユキです。

ちよっと今回は急いで推敲したので、少々おかしなところがあるかもしれませんが。

それから、中途半端に終わってます。すいません。ちょうどいい切りどころがなかったので、こんな感じになったんです。出来るだけ早く続きを載せようと思ってます。

夕飯を食べ終わると、時計の針は七時半を指すところだった。

春臣はさつさと食器を流しに運び終わると、外へ出かける支度をする。これから椿の自宅へと向かうのだが、持っていくものは多くない。

必要なものは数日前に買い終えていて、その全てを春臣は椿に預けていたのだ。

唯一、今日使う予定の植物図鑑をカバンに入れ、準備万端。

「ようし、これでいいな」

しかし、意気揚々と玄関まで行くと、そこで待ったがかけられた。媛子に呼び止められたのだ。

「春臣、今日も行くのか？」

振り返ると、いつの間に来たのか、彼女は隣に立っていた。いつもならば、夕食後はテレビのゴールデンタイムとなるため、彼女は部屋に籠もってそれを見ているのだが、最近は違った。さつきとの一件があつてからというもの、彼女は常に何かを憂いたような表情で、始終影が深くなっているような印象がある。

「あ、ああ。言つたら？　今回は青山と一緒にレポートを書き上げなくちゃならないんだ」

春臣が言った。

こうして夜に外出するのは今日で四日目だったが、媛子には本当



の理由を隠し、こう説明している。

「少し長引きそうだから、後、五日ぐらいだな」

「それまで、こうして夜に出かけるのか？」

俯き加減の彼女は先ほどから何かを不安に思っているようだった。

「大丈夫だって、戸締りはきちんとしているから、前みたいに変な奴は入ってこないよ」

てつきり春臣は彼女が木犀が侵入してきた夜ことを思い出し、また同じことがあるのではないかと、危惧しているのではないかと思っていたが、

「いや、そういうことではなく」

と、彼女は言う。

「そうじゃない？　じゃあ、どういうことだ？」

「……なに、大したことではないんじゃないか？」

媛子はもごもごと口を動かした。

「は？」

「椿の家でやらずとも、ここでやればいいのではないかと思うのじや」

「そ、それは」

確かに、彼女の言うことには一理ある。わざわざ媛子を一人家に残して椿の家だけでレポートをする理由はないのである。

それが、単なるレポートならば。

「それはだな」

春臣は咄嗟に理由を考える。

「ほ、ほら、女性に毎回ご足労願うというのは、紳士的じゃないだろ」

苦し紛れに答えた。媛子の目が一瞬、思考のためか、泳いだ。家と家のごくごく近所なので、もしかすると説得力に欠けるのか、と思われたが、

「……そうか」

と、彼女は特に食い下がることはなかった。

いつもならばもう少し反論してきそうものだが、やはり、元気がないように見える。

「今日は気分が悪いのか？」

「そうではない。気に、するな」  
「……」

何かの感情を押し殺したような媛子に、春臣はなんとなくいたたまれず、彼女の頭を指で撫でる。

「二時間ぐらいですぐ戻ってくるからさ。不安なら電話をしてくれ」  
「分かった、すまぬ。もうよいのじゃ。ほれ、早く行かんか。椿を待たせておるんじゃない？」

すると、彼女はゆっくりと向きを変え、居間のほうへ歩いていった。春臣にはその姿がいつもの数倍小さく、なんとも寂しげに見える。胸の中で、尖った何かがささっているような、得も言われぬ不快感があった。

何も言わずに立ち上がる。

そして、玄関をあけると、

「あ……」

外では六月の雨が、静かに、しとしとと降り始めていた。今年も、この季節がやってきたか。

暗い雨を不吉に感じながら、春臣は傘を差し、歩き出した。

椿の家に着き、呼び鈴を鳴らすと、パタパタと足音が聞こえ、椿が顔を出した。

「時間通りやん」

と嬉しそうに手を引き、自室に連れて行く。廊下ですれ違った彼女の家族に春臣は挨拶をするが、皆一様にニコニコしていて、彼女の一家特有の明るさがにじみ出ているようだった。

階段を上がる。

彼女の部屋に春臣が入るのはもう四回目だった。最初こそ女性の部屋に入ることと男として抵抗もあったのだが、今では慣れてしまっていた。

毎度最初は緊張するのだが、しばらくいると平気になってしまう。

というより、もしかすると、仕事に集中してしまつたために女性の部屋にすることを意識しなくなるのかもしれない。

いつも通りに彼女が用意してくれた座布団にあぐらをかいて座ると、彼女は準備がよく、仕上がり途中の作品を出してきた。

「ええと、どこまでやってたっけ？」

「まだまだ最初のとこやん。とりあえず袋の形にまではしたけど」

春臣が彼女から受け取つたのは、数日前から制作に取り掛かっているお手製のお守りである。親指の先ほどのごくごく小さなもので、どちらかと言えば、お守りというよりも携帯のストラップのようだった。

春臣はそれを掌に乗せ、完成度合いをじっくりと観察する。

とはいえ、まだまだ形を整えた程度だ。飾りも何もついていない。なんとも寂しく、ため息をつく。

椿に言わせれば、それはほとんど数時間あればできてしまうものらしく、それに何日もかかりそうな春臣はさすがに遅すぎると自覚していたのだ。

しかし、春臣の言い分としては、

「青山が最初からお守りに取り掛かせてくれれば、今頃は出来てたはずなんだよ」

と、いうわけなのである。

数日前に彼女に裁縫を習いたいと話し、協力してくれるところまで漕ぎ付けたのはいいものの、さっそくお守りに取り掛かるつもりを春臣を、彼女は良しとしなかった。

裁縫の基本的な縫い方を練習しなさいと、雑巾縫いをさせられたのである。雑巾たくさん、ちくちく縫わされたのである。

半ば、彼女に利用されている感が否めなかったのは言うまでもない。

だから、そう春臣が不平を言うと、彼女は三白眼になった。

「そうは言っても、基本が出来てへんかったら、めちゃくちゃになるんや。焦って出来栄の悪いもんプレゼントされたら、媛子ちゃんなら天罰や言うて怒るで」

そんなやたらに天罰を落とされても困るし、春臣は渋々彼女に従うことにする。

「わかったよ。仕方ないな」

「それで、一応確認なんやけど」

「何だ？」

「このお守りは後は刺繍が入って、中に榊の葉を入れるんやったな？」

「ああ、そうだ」

春臣は頷く。

数日前から彼女に裁縫を教えてもらってわざわざお守りを作っているのには、もちろん大事な理由があった。

彼女が言ったように、このお守りの中に榊の葉を入れて媛子に持たせるのである。そうすることで、これまで部屋の外に出るときにわざわざ体に葉を括り付けなければいけなかった手間が多いに省けることになる。紐を通して首から提げる形にすれば、着脱に三秒もかからない、便利品になるのだ。

春臣はそれを以前から作るうと考えていたのである。

「そつだ、刺繡で思い出した。見せるものがあつたんだよ」

春臣は指を鳴らし、持ってきたカバンから分厚い植物図鑑を取り出した。付箋がしてある一ページを開き、椿に見せる。

「これだよ、これ」

一枚の写真を指を差すと、彼女は珍しそうにため息をつく。

「へえ、これが緋桐ひきとうなんかあ」

カラーの写真で、鮮やかな色の花が写っている。円錐状の花がいくつも咲いており、なんと言ってもその生き生きとした赤色は見る者の心を動かす力があつた。

実は今日、春臣は大学の図書館に行き、この植物のことを調べていたのだ。これは緋桐乃夜叉媛という名前の一部ともなっている花なのだが、春臣はそのことを媛子から聞いたことがあつただけで、実際に調べて実在することを確かめたのは初めてだつた。

「確かに媛子ちゃんの髪の色とそっくりやなあ」

彼女はへえ、と口を開く。

「ああ、本当に綺麗な花だ」

「それで、榊君はこの花をお守りに刺繡したいんやな」

「初めてだし、少し難しいかもしれないけどな」

「大丈夫、うちがついとる」

「おう、頼りにしてるよ」

そう言って、春臣は早速作業に取り掛かる。無駄話をしている時

間はあまりない。出来るだけ早く完成させて、媛子を驚かせてやりたいという気持ちがあったのだ。

「ああ、頼りにしてるよ」

そう言っつて、春臣は早速作業に取り掛かる。無駄話をしている時間はあまりない。出来るだけ早く完成させて、媛子を驚かせてやりたいという気持ちがあったのだ。

分からない箇所や、自信のない箇所を椿に尋ねつつ、地道にこつこつと春臣は針を通す。

ちなみに、現在指先には三つの絆創膏が貼られているが、みんな名誉の負傷である。

「それで、榊君なあ」

ベッドに寝転がり、完全にくつろいで漫画を開いていた椿が話しかけてきた。

「うん？」

春臣は針を布に通しつつ聞いた。

「あれから媛子ちゃんとは、やっぱり上手いかへんのん？」

「……まあ、な」

重いため息をつく。

瀬戸さつきとの一件があつて、すでに、二週間近くが経つが、春臣と媛子との関係はギクシャクとしていた。

彼女が神社に向かいたくない理由については、保留にすると約束



をしてあるが、春臣としては、さつきに言われたことが頭にあり、どうしても彼女を意識してしまうし、彼女は彼女で、春臣に対していつまでも口を閉ざすわけにもいかず、どうすればいいのかと、決めかねているようだった。

このために、一緒に居ても上手くかみ合わず、ちぐはぐの気持ちのまま顔を合わせ話をして、どこか両者とも上の空、という状況なのである。

何も血相を変えて、現状を打破しなければならぬわけでもないが、春臣はすでに何度か椿に相談を持ちかけていた。

もちろん、彼女にはさつきから言われたことも隠していない。つまり、春臣と媛子が恋人のように見えたという話である。

彼女はそれを聞いて最初こそ驚いたものの、確かに仲ええしな、と案外あっさりと納得してくれた。友人として、それは相談に乗らなな、と。

春臣は続きを話す。

「俺としては、媛子の決心がつくまでゆっくり待つからと言ってあるが、相当悩んでるみたいだな」

彼女は起き上がり、ベッドの上に座りなおす。

「やっぱり榊君と一緒にいたいんかな」

「さあな、それについては恥ずかしくてストレートには聞きにくいから……」

そこで一度言葉を止め、

「でも、自惚れるつもりはないけど、少なくともそれも『一つの理由』なんだと、思う。だから、ここの生活が気に入ってるなら、今

すぐ向こうの世界に帰らなくてもいいと言っただけだ……」

「けど？」

「やっぱりあいつは、何かに焦ってるみたいだ。きつと考えているより早くに俺が『神社に行く』っていう方法を思いついたことで、いろいろなことに整理がつかないのかもな。こうなった以上、自身で何らかの決断を下さないといけないことは不可避の事実だ。それが、ここに居座るのか、神の世に戻るか、という選択なのか、あるいは、それに加えて別の話もあるのか、いずれにせよ、な」

「別の話？」

「ああ、別に秘密にしていることだっただけもあるだろうよ」

春臣がこう言ったのにはもちろん、根拠がある。

というのも、以前から媛子は春臣たちに対して、まだ何か秘密を隠しているような素振りがあつたが、それが今回のことに関係しているのでは、と思っていたのだ。

特に、神社に行きたくないと拒絶した時の彼女の態度は、以前、春臣が彼女に親の事を聞いて、一方的に話を打ち切られたときと、態度が似ている。

春臣の考えでは、それらの拒絶の先は一つに繋がっており、その先にある、彼女が頑なに閉じている心の扉に通じているのではないかと推測していた。

神の世に戻るか否かという問題以前に、彼女はそれを自分に話すべきかどうか、悩んでいることだっただけで充分に考えうるのである。

数週間前、さつきに媛子がここに残りたがっているのでは、と言われた時には、そのことで頭が一杯になったが、時を置くうちに、このような考えが浮かんできたのだ。

「でも、あいつも変わったよな」

春臣は一度そこで手を止めて、天井を眺める。椿が目を丸くした。

「え？」

「いやなに、以前までのあいっなら、話さないの一点張りで態度変えなかっただろうが、媛子もここに来た当時と今ではいろいろと変わったと思うんだよ。現にきちんと理由を話してくれるって言うてるしな。パラダイムシフトっていうと大げさだけど、価値観の变革があつたんだな。俺に対する態度も以前のような、有無を言わせない横柄さは少しずつなくなってるし。むしろ、その、愛情のようなものを、感じる時だって……」

「愛情のようなもの？」

分からない、と春臣は首を振る。

「でも、一つ確かなことは、以前の彼女ならこんなこと、悩みもしないで切り捨ててただろうと思んだ」

「……そう」

椿は、少し微笑んで、すぐに表情を固く戻す。

「じゃあ、榊君は、どうなん？」

唐突に聞かれて、春臣は面食らう。

彼女の真っ直ぐな澄んだ瞳が春臣を見つめていた。

「媛子ちゃんが榊君に打ち解けてきているのは分かる。でも、榊君の気持ちはどうなん？ 前に比べて変わった？ 媛子ちゃんのこと、好きなん？」

ふいを衝かれてドキリとした。

「俺の気持ち？」

「うん」

それは全く考えていないことではなかったものの、いざ、口に出そうとすると、難しい。

「……俺だって、媛子のことは嫌いじゃない。わがままだけど、悪いやつじゃないし。時々、無償にかわいいって思うこともある、けど。でも、好きかって言われると、霧がかかったみたいなんだよ。まるではっきりしない。俺もそのことについては結論を出すべきなんだろうな」

「男らしいないな」

椿は口をへの字に曲げ、腕を組む。

「そ、そうは言っても仕方ねえだろ。分からないんだから」

彼女から視線を逸らし、春臣は再びお守りに目を向けた。

「でも、今考えていることには、あいつには安全な場所に帰ってほしい」

「へ？」

「今の状況が長引くと、このまま周りに秘密にしておくわけにもいかねえだろう。現に青山と瀬戸にばれてるし、遅かれ早かれ親にもばれるだろうな。それも問題だ。それに、外の世界に出ればいつ何時消えちまうかもしれない危険な体のままここに置いておくのも、難しい」

「……」

「そして、何よりあの小さな体だ。このところずっと身長伸びもどん詰まりって感じだし、どうやら現状ではあれ以上の伸びは見込めそうもないみたいだ。つまりだな、この世界はあいつが暮らすにはリスクがでかすぎんだよ」

「そっか、そやな」

「まあ、絶対に無理ってわけじゃないけれど、元の世界に戻るべきなんじゃないか、と思ってる。無理強いはしない、けど……うん、ごめん、何を言ってるのかな。中途半端な考えだよな」

春臣は言葉を無くす。明確な指針を示せない不甲斐なさが、喉元を占領したようだった。

「青山は……どう思う？」

視線を上げる。彼女は急に問いかけられ、きょとんとしていた。

「え、うち？　うちは……媛子ちゃんがこっちに残りたい言うんなら、それでええと思っただけ……榊君の言うことも分かる。せやから、その……うーん、うちもよう分からん」

「そっか、だよな。だからこそ、今すぐ無理に全部に結論を出す必要はない。瀬戸さんも言ってた。俺たちにはお互いを分かり合う時間が必要だ」

春臣は作りかけのお守りに目を落とす。

「こいつは、だからさ、それを示すためでもあるんだよ」「どっぴいこと？」

「このお守りはな。もちろん媛子を守るためでもあるが、それ以前に、これは『使われるべきもの』だ。あいつが混乱した現状で、すぐに神の世に戻れば不必要になるが、俺が作ったものをすぐにゴミ

にしたいと思うほど、あいつも無神経な奴じゃない」

言いながら、春臣は布に針を通す。すると、驚くほど、すっと滑らかに針が通った気がした。

「今のあいつなら、これを使わなくちゃならないと思ってくれると思う。それでこっちの世界に少しでも留まらなくてはならない理由に、その口実なるなら、一番いいと思うんだ」

## 69 焔の記憶

目に映るものは、黄金の空。

ここは、世界の始まりなのか。  
それとも、終わりなのか。

もしくは、そのどちらでもない、  
虚無と混沌の海なのか。

体がひとところに留まることなく、  
ただたゆたっている心地がする。

揺れる波が打ち寄せ、  
乾かすことなく、  
頬を濡らす。

目に映るは、あの、高き空。  
美しすぎる、黄昏の空。

自分は、いつかあそこに行けるのか。  
それを、自分は許されるのか？

それを思うと、いつだって胸が苦しくなる。

恐怖と、焦燥。

怒りと、諦め。

悲しみと、孤独。

いつの間にか、  
声を、出していた。  
声を出して泣いていた。

それが自分だと分かる。  
耳に、その声がかろうじて届いている。

世界は、生きていた。  
世界を、生きていた。  
揺れている、自分。

意識が鮮明になり、  
鳴り響く自分の声が、  
空で弾けた。

燃えている。  
そこは、海ではなかった。  
全てを溶かしつくすような、  
鮮やかな深紅。

それが、体を覆っていた。

緋桐乃夜叉媛ははっと身を起こした。  
どうやら、転寝をしていたようである。

また、あの夢、か。



夜叉媛は顔を俯け、額の汗を拭う。

と、

自分の姿を見て、一瞬言葉を失った。

目に飛び込んできたのは、赤。

「！」

途端に、先ほどの夢がフラッシュバックした。体を覆う、あの、

一面の、無垢なる焰……。

茫漠たる心もとなさと共に、押さえようのない悲しみが蘇る。

が、

しかし、それは違った。

以前に椿に作ってもらった、ドレスという着物だったのである。

何でも元々日本ではない外国の服だということ、珍しいものだと

夜叉媛はかなり気に入っていた。

なのに、それで思い出してしまうだなんて。

「……」

夜叉媛は絶句する。

そのことは、もう忘れようと決意したではないか。前向きに生きると、決めたではなかったのか。

肩にかかる自らの髪を、一束、手で掴む。

「これは、わしの誇りのはずじゃ。誇りの色のはずじゃ」

しかし、そう言った声はあまりにも力なく、儂げだった。

心がとても、寂しかった。

この世界に来て、色々楽しい物を発見したが、最近はそのどれもが夜叉媛に対してこぞって背を向けたように、何をしても楽しくない。満たされない。

詮無いこと。

いつか全ては、こうなると、分かりきっていたことだったはず。けれど。

それは当初、夜叉媛にとって、良かれと思って選択していたことだった。それが、こうして心の枷かせになってしまふなどとは。

少し、この世と交わりすぎたのか。

原因はそこじゃな。

見上げた時計の針はもう十一時を示していた。静かな夜は深まる一方だ。

夜叉媛をいつも気遣ってくれる優しい少年の姿は、傍にはない。いつもは気づかないそのぬくもりがない寂しさを夜叉媛は、今、ひしひしと感じていていた。

不覚なものじゃな。

この世に舞い落ちて、あのような人間のことをこんなにも強く想っている。

自分はこれからどうすればいいのか。答えはまだ見つからない。彼と離れたくはない。

しかし、

その選択は、

彼を『傷つけてしまふ』かも、しれない。

それに、それ以前に、自分は今、彼に……。

いや、もう止めよう。夜叉媛は思考を中止する。

これ以上考えていても、名案は浮かびそうもない。しかし、我ながら、この世界に来てずいぶん弱気になったものだ。情けないことだ。

ばかり、とその場に仰向けに寝転がる。無造作に転がした手足が重かった。

するとふいに、

「ただいまー！」

階下から聞き慣れた少年の声が聞こえた。

「はる、おみ」

待ちに待った、この家の主の帰宅だった。

## 69 焔の記憶（後書き）

どうも、作者です。

今回は物語始まって以来、初の夜叉媛視点ということ、かなり注意して書きました。元々彼女の話を書くつもりはなかったのですが、どうしてもストーリーの進行上、重要且つ、避けては通れない道でしたので、まあ、仕方ないかな、と。いかがでしたでしょうか。

またしても内容が少し短いので、近いうちに続きを更新しますね。それでは。

「おーい、媛子」

春臣は玄関に靴をいい加減に脱ぎ捨てると、そのまま騒々しく二階へと駆け上った。

普段の春臣であれば、媛子が既に眠っていることなどを考慮して、極力静かにするものだが、今日ばかりはその配慮はすっかり失念していた。

苦勞して完成させたものを一刻も早く彼女に見せたいという一心で、遠慮もなくドアを開け放った。

「あれ？」

しかし、肝心の彼女の姿がそこにはなかった。

いつもならば、テレビの前で座布団に寝転がり、神様らしい威厳もない上、だらしなくよだれを垂らして眠っていたりするのだが、今日はその例ではないらしい。

春臣は他の可能性を模索する。

部屋の外か？ いや、夜は一人で危ない部屋の外に出るとは思えない。

ではどうしたのか。

と、ふいに足元から失踪者の小さな呻き声が聞こえてきた。

「は、る、おみー！」

はっとして見下ろすと、彼女が服の一部を春臣の足に踏まれ、そこから抜け出そうとしたばたもがいている最中だった。

「媛子！」

寒気と共に一気に血の気が引き、慌てて春臣は彼女を両手でかかえ上げる。

「大丈夫か！」

「う、うむ。かろうじて、圧迫死は免れたようじゃ」

最悪の事態を思い浮かべ、急増していた心拍数が次第に落ち着きを取り戻していく。

「そうか、肝が冷えたよ」

部屋に入るときはやはり細心の注意が必要なようだ。

「それよりも、春臣。ずいぶんと慌てて家に入ってきたようじゃが、何かあったのか？」

眉を動かしつつ、媛子が訊ねる。

ああ、大事なことを忘れていたと、春臣は人差し指を立てた。

「実は、自信作を媛子に早く見てもらいたくてさ」

「自信作？ それは、レポートが完成したということなのか？」

彼女は瞳を輝かせる。

「ならば、もうこれ以上、夜は出かけぬということか？」

「ええと、そうなんだが」

すると、彼女は興奮した様子で、春臣の手の中で両手を叩いた。

「真か！」

その様子に少々疑問を感じながらも、春臣は続きを話す。

「けど、レポートをやっていたわけじゃないんだ」

「へ？」

言葉を失った彼女を机の上を下ろすと、ポケットに入れていた例の物が入っている包みを取り出した。

「媛子を驚かせようと思ってさ、プレゼントを作ってたんだ」

「ぶれ、ぜんと？」

「これだよ、これ」

春臣は包みを解く。

そこから取り出したのは、ちょうど媛子に似合うように調節された、藤色の御守りだった。先端に紐がかけてあり、簡単に首に欠けるようになっていた。

唾然としている媛子を前に、春臣は早速、お手製の御守りを彼女にかけてやる。

「こ、これは」

「このお守りには榊の葉が入ってる。これがあれば、外に出るのも以前より簡単になるぞ。いちいち葉を装着する手間が省ける」

「こ、これを作ってくれておったのか……春臣」

「あ、ああ」

照れくささを目線を逸らして軽減させながら、春臣は言う。

「それにこの縫っておる絵柄は、もしや、緋桐の花……」

「そ、そうそう。緋桐乃夜叉媛の、緋桐だよ。名前と同じ花だし、媛子の綺麗な髪の色と同じ花だしな」

「綺麗な、髪」

すると、彼女ははっとして、自身の髪に視線を向けた。

「わしの、色、自慢の髪……」

どこか神妙な様子に春臣は少し不安になる。もしや、気に入らなかったのだろうか。

「何かおかしいか？」

「まさか、何を言っておる！ わしのために、作ってくれたのじゃろっ？」

「ああ、そうだけ」

「では……」

彼女はなぜかそこで言いよどみ、一拍置いて、

「……わしのことを、『避けておった』のでは、ないのじゃな」

「はあ？」

何を唐突に。春臣は目を丸くする。

「どうして俺がそんなことを」

「……」

「あのな、するわけないだろ。理由もな、しに……」

呆れて返す春臣の言葉が、彼女を見て、失速し、立ち止まった。



あまりのことに、視線が硬直していた。  
なぜなら、

こちらを見上げている媛子の両目には、  
今にも溢れんばかりの大粒の涙が光っていたのである。

「ど、どうした？」

「そ、それは、真か？」

頼りない声が震えている。

春臣には意味が分からない。

「おいおい、そもそも避ける理由がないって」

それが引き金になったのか、彼女がゆっくりと息を吸う。  
そして、

「ああ、あああ

崩れ落ちるように、

「あああああ

泣き始めた。

「あああ、つく、あああ

「ひめこ……？」

「わしは、わしはあ、つく、ああああ

まるで母親を見失った子供のように、彼女は、声を上げて泣いた。  
時折聞こえる、悲痛な嗚咽。

泣きじゃくる彼女を前に、春臣は一瞬頭を殴られたような衝撃が走った。

何が起こってる？

どうして、彼女が泣いている？

俺は、大馬鹿者なのか？

また媛子を泣かせてしまったのか？

目を覚ませ。春臣は首を振った。

すぐに、彼女に対して配慮が必要と気づき、近くに水分をふき取る物がないのを確認して、服の袖を引っ張ると、それですっぽりと掌を覆い、彼女に向けた。

「ほら、とにかくこれで涙を拭いてくれ」

「は、はるおみ、わ、わしはあ」

嗚咽交じりに話すために、ろくな言葉になっていない。

「いいから、喋らなくていいよ」

「う、うむ……」

すると、彼女はしゃくりあげながら、ようやくなんとか了解すると、春臣の服の袖で、涙で濡れた顔を拭く。じんわりと彼女の温かい涙が染みてきて、指先でそれを感じた。

春臣は、腕をそのまま、椅子に座る。そこで、ようやく答えを見出した。

簡単なことだった。

「俺が、最近椿の家に行っていたからか？」

彼女がぐしっ、と鼻をかんだ音がした。

「わしは……」

「うん、ゆっくり」

「うう……お主の言う通りじゃ、わしは、お主が、何も言わぬわしのことを嫌いになって、それで、この家に居たくなくて、椿の家に毎晩行って、おるのかと」

「……そうだったのか」

「わしは、お主に、っく、見捨てられておるのかもしれんと思いはじめておった」

「そんなわけ」

「ああ、そうじゃの」

言葉はすぐに彼女に遮られた。

「お主はわしのことをきちんと気遣ってくれておったし。でも、でももしも、そうじゃとしたらと思うと、怖かったのじゃ」

申し訳なくなり、春臣は肩を落とす。

「……そうか、ごめんな。俺が謝らないと」

「いや、よいのじゃ。わしの方にも問題があるし、お主は、結局わしのためにこのお守りを作ってくれておったのじゃろう？」

「ああ、予想以上に時間がかかったけどな」

「そんなもの関係ない。むしろわしは、感謝せねばならん」

先ほどまでと打って変わって、優しい声で彼女は言う。

「え」

「春臣、ありがとう。わしは、とてもうれしい。これは大事にせねばな」

それは、一片の偽りのない、素直な感謝の言葉だ。

春臣はそれだけで満足だった。それまでの苦労も彼女が喜んでくれさえすれば、掃いて捨てるゴミくずに過ぎない。

何より彼女が、大事にしてくれる、と宣言してくれたのだ。当初の予定からすれば、文句なしの結果ではないだろうか。当初すると、

「お、春臣、これは」

と、彼女が何かを発見する。

「へ？」

「怪我をしておるではないか！」

しまった、と春臣は思う。服の袖から覗いた指に絆創膏が貼ってあったのだ。

「これを縫うのに、怪我をしたのか？」

彼女の顔がみるみる真っ青になる。

「た、大したことじゃない。俺が不器用だっただけだ」

しかし、そう弁解するも空しく、既に悲しみのスイッチが入っている彼女は早くもしゃくりあげている。

「わ、わしの、ために」

「わああ、もう泣くなよ」

無茶を承知で言ったのだが、予想外にも、彼女の動きが止まった。

「……分かった、泣かぬ」

見ると、彼女は泣き出す寸前で、呼吸を止め、涙を抑えているのである。

「お主にこれ以上気を遣わせるのは、申し訳ない」

「……んなことねえよ」

しかし、春臣が首を振った後で、

「でも、その代わりに……」

媛子が言う。

「代わりに？」

「もう少し、このままでもよいか？」

なるほど、それが目的か。

幸せそうに指先にもたれかかる彼女のわがままを、まさか断われるはずもなく、

「了解」

と春臣は答えていた。

71 内なる闇 1

ちりん、ちりん、ちりん、ちりん、ちりん。

鈴の音が聞こえている。

ちりん、ちりん、ちりん。

下駄の鼻緒についた鈴だ。

ちりん、ちりん、ちりん。

前日までの雨に濡れた地に、染み入るがごとく、

ちりん、ちりん、ちりん。

しっとりとした大気を揺らしつつ、

ちりん、ちりん、ちりん。

しずしずと、鳴っている。

ちりん、ちりん、ちりん。

その音が、やがて、

ちりりん……。

立ち止まる。

蒼髪を湿った風になびかせ、時雨川ゆずりは立派に構えられた門を見上げていた。

「ふへえ、ずいぶん豪華なお宅みたいだね」

感心の声を上げ、門の表札を確認する。

「すぎ、した、だよ。住所もこの辺りだし、きつと間違いはないっしょ」

そう一人ごちた後、周囲を見回し、軽く身なりを整える。これだけ豪華な邸宅を構える人間が今回の客なのだ。失礼のないように振舞わなければ。

上手くいけば、お得意さんとなって、がっぽりと儲かるかもしれない。ふふふ。

そんな下心を持ちつつ、ゆずりは口元の黄な粉を払う。

実は、先ほど立ち寄った古い和菓子屋で、わらびもちをご馳走になつたばかりだったのだ。

ゆずりは大した金額を財布の中に持ち合わせていなかったため、店内に入っても無駄遣いはすまいとショーケース眺めるだけに留めておいたのだが、そこで、店の気のいい婦人に声をかけられたのである。

「あんだ、おかしな格好した娘さんだねえ。それに、その髪、染めてるのかい？」

彼女がそう聞いたのも無理はない。

ゆずりはただでさえ人の目を引く白装束を着ている上、加えて、この長い蒼髪である。日本広しと言えど、このような珍妙な出で立ちの人間はそうそういないだろう。

一般人からすれば注目するなという方が無理な話だ。

ゆずりは慣れた調子で、適当に修行の旅をしていると答えて、実は金がないと話した。

すると、彼女は気の毒そうな顔になり、

『なら、そこに座って食べてきなよ』

と言ってくれたのだ。迫り来る空腹に勝てるような堅固な意思を持ち合わせていないゆずりはその言葉に甘えてわらびもちを<sup>ご</sup>馳走になったのである。

いやいや、そのもちのおいしかったこと。尋常じゃない。

ゆずりはそれはもう旨いものには目がないが、特にそのわらびもちはこれまで口にしてきた中でも文句なく三本の指に入るだろう。ああ、美味。すごぶる、美味。

と、いつまでもそんな甘い回想をしている場合ではない。ゆずりは気持ちを切り替える。

服装の最終チェックを終えると、

「ごめんくーださい」

門をくぐった。



通された部屋は、外観と同等に豪華な雰囲気の和室だった。ゆずりは荷物を下ろすと、落ち着きなくもじもじと正座をしていた。普段は家の中でゆっくりすることのないゆずりとしては、こうして他人の家にお邪魔することはいつまで経っても慣れない。まるで靴の中にゴミが入りこんだような不快な感じがあるのだ。適当に鼻歌を歌って緊張をごまかす。

「ふう、はーやく来ないかなあ」

しかし、部屋で待つように言われて、早十分。この家に住むという依頼主は未だ姿を現さない。

先ほどわらびもちを食べたばかりだというのに、もう既におなかが減ってきたような気もする。

いったいいつまで待たせるつもりなのだろう。

退屈なゆずりはがさごそと背負っていたリュックの中を漁る。何か口に入れれそうなものはないかと探そうと思ったのだ。

しかし、すぐに異変に気がつき、手が止まった。

「あー！」

ぱっかりと真っ二つに割れたゆずり特製の木片のお守りを見つけたのだ。

これはどうしたのだ。

ゆずりは息を吞んで、しばらく放心した後、思考を働かせる。割れた断面をゆっくりと指でなぞった。真っ直ぐに綺麗に割れている点からして、移動中何かの拍子に、というわけではないようだ。

とすれば、どういうことだ？

他の可能性と言えば、あることにはあるが、だが、まさか……。

「……」

そのまま無言でゆずりはお守りを見つめていた。

「もしかして、危険なところに来ちゃったかな？」

ぼつりと言ったとき、ゆずりは全身の神経に電気が走ったような感じがした。

ひんやりとした汗が頬を伝う。

なんだ？

「お待たせしたな、申し訳ない」

聞こえてきたのは、老人の深みのある声だ。

「あ……」

慌てて振り返ると、そこにいたのはかなり高齢と思しき白髪の老人だった。貫禄のある袴姿で、ゆずりをじっと見つめたかと思うと、しばらくして入ってきた襖を閉めた。

ゆずりはただならぬ気配を感じ、目を合わせまいと、正座のまま軽く頭を下げる。

「し、時雨川ゆずりという者です。どうも。この度は私めのお守りをご所望頂き、あ、ありがとうございます」

思わず、声が上がってしまった。

しかし、老人は気にした様子もなく目の前にあぐらをかいて座ったようである。

「うむ、遠路はるばるご苦労じゃったの」

「いえいえ、自分の店を持っていないもので、どこへでも飛んでいけるとというのが一番の売りなんですよ」

ゆつくりと呼吸を整えながら、老人を見た。何か飲み込まれてしまふような恐怖があつたが、どうやら気を張っていれば平気なようだ。

「それで、呼ばればどこへでもお守りを売りに行くと？」

「はい、けつたいな商売なんです」

ゆずりは媚びるように体勢を低く保ち、掌を揉む。

老人は僅かに口元の髭を動かし、言う。

「うむ、確かにこのう。このご時勢に、自分の足を使って売り歩くとは、ずいぶんと酔狂な人間もおるものだとわしも聞いた時には驚いたものだ。だが、それで果たして生計が立つのかね？」

「えへえ、ま、そこそこですかね」

ゆずりはやはり掌をもみながら、頭を下げる。

実際のところは、かなり生活に困窮しているのだが、商売がうまくいっていないなどと答えると、相手に悪い印象を与えてしまいかねない。

だからこそ、謙遜しているような言い方でごまかす。

そして、タイミングを計り、ゆずりはじつと老人の顔を窺った。

先ほどのお守りが割れていた原因はどうやらこの老人からの何らかの影響があつたものと推測される。

ゆずりの脳内では、商売の話を進めることはもちろん優先すべきことだったが、その前に、この老人が発する奇妙な気配の正体を見

極めることも同等に、重要事項だった。

現段階でゆずりにはその原因に心当たりがあったが、断定するにはまだ時期尚早である。いったいこの人物がどのような人間なのか、もう少し話をしながら判断しなくては。

すると、老人が思い出したように手を叩く。

「おっと、済まぬな。客人に茶も出しておらんかったの。今すぐに持ってこさせよう。時雨川さん、和菓子は好きかね？」

「え、もらえるのですか？」

きよとんとしてゆずりは聞き返す。

「何、それくらいは客人に対する礼儀というものじゃろっ？」

「はあ、でも、私は客人というわけでも……」

「構わぬ、遠慮することはない。もし、食事がまだならば、用意も出来るが？」

「え？」

「腹は満腹か？」

「い、いえ、頂きます！」

思わぬ申し出に、それまでの思考が吹き飛び、ゆずりは即答した。そんなゆずりを見て、老人は目元に皺を寄せる。

「ほっほ、よほど腹が減っておると見える。食事をする暇もないほどに商売に精を出しとるといふことかい？」

「あ、ええと。その……へへ」

「まあよい。では早速だが、自慢の御守りとやらを見せてもらえるかな」

老人がゆずりの荷物に目をやる。

「はい。では、どのようなお守りをご希望で？」

「そうだな」

すると、彼は何かを考えるような顔をして、顎鬚をざわりと撫でた後、

「まあ、あるだけの商品を見せてくれないか？」

と言った。

「全て、で？」

「そう、全部出してくれ」

妙だ、と咄嗟とつにゆずりは思う。

なぜなら、大抵の客というものは、こんなお守りの買い方をしないからだ。

お守りにはそれぞれ違った効果があるため、本来であれば、自分が求めている効果にあった商品を求めるとというのが通常である。店を起こす人間ならば商売繁盛の御守りだろうし、子供が受験ならば合格祈願という具合にだ。

しかし、では、全て見せるとはどういうことなのか。ゆずりにはいまいち老人の意図が掴めない。

どこか試されているような気配も感じる。

しかし、そこで渋って客の機嫌を損ねるのも不本意なので、荷物から商品を取り出した。

一般的なお守りを一通り並べた後で、ゆずりは自身特製のお守りを取り出す。

「ほう」

すると、老人が珍しそうな声を出した。

おそらく、このような形の御守りは見たことがなかったのだろう。

一見すれば、単なる木片だ。

このお守りはいつもゆずりが自分で作製している。神の力の宿った特殊な木から幹を削り取り、そこに直接文字を掘り込んであるのだ。そのため、神社などで目にするお守りとは一味違う。幹から削り取った木片はどれも形がいびつで、曲がっていたり、反り返っていたり、稲妻のような形をしているものもあつたりと、一つとして同じものはない。

およそ、大昔のお守りはこんな感じであつたのではないか、と思われるような代物だ。

「木片のお守りとは、これは見たことがないのう」

「はい、それは特別製で、私が特別な念を込めて作っておりますので」

ゆずりは自信を持って説明した。

客が興味を持ったということは、購入までは後もう一押しだろう。危険そうな人物とはいえ、自分の客には変わりない。ゆずりの中の商人の血が無条件で騒ぎだした。

「一先ずこれだけで、一般的な効果を持つものは一通りあります」

しかし、

「……そうか、一般的なものか」

なぜか、老人の目が悲しげに伏せられる。

「はい、そうですが」

何か気に入らなかったのだろうか。

「あの、いったいどのようなお守りをお求めで？」

「う、ううむ」

「場合によってはオーダーメイドも承りますが？」

すると、老人の瞳が怪しく光った。

「それは、わしの好みのお守りを作ってもらえるということか？」

「は、はい。ですから、ご要望があれば」

「実はな、わしは普通のお守りには興味がないのだよ」

「は？」

ゆずりは老人の言葉に面食らった。いったいどういう意味だ？

「確かに、全国を旅しながらいろいろお守り売り歩いている商売人とだけあって、この辺りでは見かけぬ珍しいお守りを扱ってられるようじゃが、一般的な効果を持つものだけでは他のお守りと同じじゃろう」

「いえ、効果は抜群です。それは保証しますが」

「わしが欲しておるのはそういうことではない。特別な効果のお守りはないのかな？」

「特別な効果のお守りですか？」

ゆずりは身構える。何か嫌な予感がしたのだ。

「た、例えば？」

「そうじゃの、ほんの思いつきじゃが……」

すると、宙に向けられていた老人の目が、ぎょろりと動き、ゆずりを見た。

「『神の力』を使役できるものとか」

途端、

何かが、空間を引き裂いて、ゆずりの背中に爪を立てたような気がした。

耳の辺りに、薄気味悪い生暖かい空気を感じて、全身が総毛立つ。

なるほどな、オーケイ。

怖気を押さえ込みながら、ゆずりは納得する。

やはり、予想は外れていなかった。

この違和感の正体は『穢れ』か。



71 内なる闇 1 (後書き)

はい、どうも。作者です。

今回はようやくゆずりさんが出てきました。

と、思ったら、ずいぶん久しぶりな人も出てます。読んでくれれば誰かは分かると思いますが、杉下老人です。実は約70話ぶりの登場なんです。

話にはちよくちよく出てきているようですが、登場はまだ二回目。そのため、ずいぶん控え室で待たされていたストレスのせいか、威圧感が半端じゃない。きつとゆずりが気圧されていたものの正体は、僕への殺気なんだと思う。たぶん。

## 72 内なる闇 2 (前書き)

4/22 急遽修正。最初の部分に新たな文章を追加しました(プラス全体修正)。すいません、書くべき部分を飛ばして話を進めていました。

「神の力を、使役する、お守りですか？」

突然の息苦しさにも持ち直して、ゆずりは聞き返す。首の付け根の辺りが、ひりつくような痛みがあった。おそらく、これは穢れの影響だろう。

「そうじゃ」

老人はゆるぎなく頷いた。

「……さすがに存じ上げませんね」

「本当か？」

「はい、いくら日本中を旅する商人と云えど、神の力を自由に操るお守りなど、ついぞ耳にしたことはありません」

おかしいのう、いかにも不思議そうに老人は首をひねる。

「しかしのう。わしはこう聞いておるのじゃ」

「はい？」

「人智を超えた、不思議な術を操るお守り商人がおるとな。そうそ  
う、身なりもちょうど時雨川さんのような人物でのう……」

「そう言われましても」

「知らぬものは知らぬと？」

さつきは頷く。

「はい」

「いやいや、そんなはずはないじゃろう？ のう、時雨川さん」

老人の白っぽく濁りかけた瞳が、急に欲望の光を放ち、ゆずりを見る。それは、獲物を前に舌なめずりをする獣のようだった。咄嗟にゆずりは目を逸らす。

「わしはどうしても、なんとしても、その力のあるお守りが欲しい」  
「……」  
「そのためにはのう、金に糸目はつけまいと思っておる」

それはまるでゆずりにすがり付いてくるような声で、胃の底を震わす異様な恐怖感を与えてきた。無視をすれば、そのまま老人が幽霊となって呪い殺されてしまいそうである。この様子ならば、何をされるか分かったものではない。

仕方ない。  
じゃあ、自分が知る事実を話すか？

いやいや。胸中で首を振った。  
こんなことで屈するゆずりではない。これでも伊達に何年もお守り商人をしていないのだ。  
ふっと息を吐き、

「おい、じいさん」  
と睨みつける。

すると、突然のゆずりの乱暴な口調に驚いたのか、老人は表情を凍りつかせた。

「な！」  
「神の力を使役するお守りなんて、どこでそんな話を聞いたのかし

らないが、年取ってもうるくしてんじやないのかい？」  
「なんじゃと？」

ゆずりは面倒くさそうにため息をつく。

「あのさ、お守り商人なんて稀有けつな商売してるとき、時々妙な奴らに出会うんだよ」

「……妙な奴とな」

「ああ、何かを勘違いしている奴らにな」

言いながら、人差し指でこめかみの辺りをつついてみせる。

「……」

と、老人は深く息を吸い込んで目を閉じる。

てつきりそこで老人が憤慨するかもしれないと踏んでいたゆずりは、少々意表を衝かれた。

さすがに高齢者ともなると人生経験が豊富なのか、老人は自らの内に怒りを押さえ込み、落ち着き払う術を確立しているようだ。いきり立って言い返すこともなく、ゆっくりと目を開け、ゆずりを見つめる。

どうやらゆずりがどうするつもりなのか、様子を窺っているようだ。どうせなら怒鳴り声を挙げ、さっさと自分を追い出してくれての方がよかったのだが。

まあ、仕方ない。

「じいさん。ここでちょっと面白い話をしようか」

ゆずりは指を立てて薄く笑うと、正座を崩し、あぐらをかく。

老人は少し躊躇した後、

「……話してみなさい」

と促す。

「なに、短い話だよ。あるところに猟師がいた。そいつは毎日毎日山に行き、シカを狩ってそれを売ったり自分で食べて生活をしてた。半自給自足の生活って言えばいいのかな。そして、その猟師には飼い犬がいた。毎日世話していて、とても懐いている。猟の手伝いもしてくれる賢い犬だ」

「ふうむ」

「ところがあるとき、その犬はその主人が持つ猟銃を使ってみたくなった。何しろ、これがあれば獲物を一発でしとめることの出来る便利な道具だ。自分に使えるものなら、試してみたい。だから、ある晩、犬は主人が寝静まった後、その銃を取り出し、自分で使えるかどうかいじってみた。しかし、中々上手くいかない。当然だ、銃は犬が使うものじゃあない」

ここで一呼吸入れる。

「そうこうしているうちに、偶然込められていた弾が発射され、犬は足に大怪我をした」

「……」

「どうだい、この話をどう思う？」

訊くと、老人は奇妙な表情を浮かべる。

それは怒っているわけではなく、まるで、ゆずりを哀れんでいるかのようにだった。

「なるほどの、よく分かった。実に面白い話だ」

「神の力を使役するなんて、馬鹿げている」

「ふふ、こりゃあ失敬。妙なことを頼んですまんかったの。さっきの言葉は老いぼれの妄言と思って聞き流してくれ」

「……」

「では、お守りはお返しすることにしよう。どれもわしのような者には相応しくないお守りばかりのようなのでな。すまないが、お引取り願えるか？」

「もちろんです」

そしてゆずりは頷き、好都合と言わんばかりのとびきりの嘘をつく。

「私としましても、次の予定が入っておりますので」

すると、老人は薄く笑い、今度は部屋の奥に向かって言った。

「おい、客人はお帰りだそうだ。お送りしてあげなさい」

どうやら老人はゆずりをここからつまみ出すご予定らしい。

ならばその前に、出されたお茶だけでも飲んでおくか。ゆずりは、手を止め、ひゅいと湯のみの中の温かいほうじ茶を喉に流し込む。

と、

一刻も早く自分を追い払いたいのか、わざわざ老人は並べていたお守りの一部を集めはじめた。そして、それをゆずりに手渡す。

「ひっ」

ゆずりは短く悲鳴を上げた。

老人の顔が突然近くに来たからだ。彼が耳元で小さく言う。

「お前、このわしに喧嘩を売ったこと、その内後悔することになるぞ」

ゆずりは少々驚いたものの、構わず無視して荷物を積めた。

こちらとしては、あのまま神の力を使役するというお守りのことをあれこれと追及され、得体の知れない穢れの塊である老人と一緒にこのまま時間を過ごすなど、考えたくもなかった。縁を切って逃げるのが一番だ。

昔の偉人はこう言っている。君子、危うきに近寄らず。

「残念じゃの、もう少し面白い話を聞かせてくれるなら、上手い飯も食わせてやるのに」

老人が白い歯を見せ、不吉に笑う。

しかし、ゆずりはかぶりを振ると、

「いや、もういいさじいさん。あんまり長居して、帰りづらくなったら事だからな」

そう言っって荷物を持ち上げ、立ち上がった。

門を出てから、ゆずりは来た時と同じようにゆっくりとその邸宅を眺めた。

あれからほんのひと時しか経っていないというに、がらりと印象が変わってしまったような気がする。屋根の黒い瓦のせいなのか、まるで、巨大なカラスが翼を広げているようにも見えた。

同時に、ゆずりには老人のあの不気味な瞳がどこかから見ているような恐怖を感じ、背筋が寒くなった。



まったく、遠くからわざわざ出向いたつてのに、ろくな客じゃな  
かったな。

いったいどうして、老人にあんな化物けがれが取り付いているのか、原  
因は分からないが、  
ともかく。うん。

ここからは離れたほうがいい。

ちりん、ちりん。

足を踏み出すたびに、急かすように鈴が鳴った。

ちりん、ちりん、ちりん。

と、

そこで、ゆずりのお腹がくう、と鳴る。

ああ、そうだった。

大事なことを忘れていた。

ゆずりは額を押さえた。

結局お守りは一枚も売れなかったので、依然、所持金は雀の涙で  
ある。

「今夜の晩御飯、どうしよう」

## 72 内なる闇 2 (後書き)

どうも。ヒロユキです。

最近、話がずっとシリアスだな、と実感している今日この頃。さすがにタグに「コメディ」「ほのぼの」などつけている以上、もしかして、万が一、それを目当てに読みに来る方がいるかもしれないという可能性に思い当たり、これはまずいと焦ってみた。なので、次回はほのぼの路線。春臣と媛子が仲良く公園で遊ぶ話です。

うん？ あれ、こう書くと、今までの話とのギャップからか、ほのぼのというより幼稚な話になった気がするのは僕だけなのか？

### 73 雨後の公園（前書き）

作者からの報告です。

前回の部分で、一部、話の内容を飛ばしている部分がありました。

そのため、修正をしています。もし読まれていない方がいらつしやれば、再読されることをお勧めします。

### 73 雨後の公園

のどかだな。

日曜の昼下がりに、自宅からさほど離れていない公園で、錆びた鉄棒に寄りかかりながら、榊春臣はそう思った。

梅雨という恨めしき湿っぽい季節のせいもあって、ここ最近ばかりの日々だったが、今日は久しぶりに雲の切れ間から太陽がその顔をのぞかせている。それはまるで目の前を遮る邪魔者の隙を窺うように、太陽はどこか控えめな様子で、じんわりと大地を温めていた。

公園内には、近所の子供達なのだろう、数人の少年たちが滑り台の周囲を駆け回っている。よく見ると、互いに叫びながら泥団子を投げ合っていた。

不幸にも戦場の舞台に選ばれた滑り台は、少年たちが投げつけた泥によって無惨にも泥にまみれ、汚れていた。しかし、心地よい陽光を浴びているそれは、心なしか、歴戦を勝ち抜いた勇者のようにも見える。遊具は汚れてなんぼ、と胸を張っているようだった。

のどかだな。

春臣は思う。

日常にありふれた、穏やかな午後だ。

だが。

だが、一体あの中の何人の子供が、こんな普通の公園に現在、「神様」がいるなどという事実が気がつくことができるだろうか。鉄棒に身を預けて、ぼんやりと佇む少年のシャツのポケットに、この世界に異質な存在がいることを。

おそろくは、ゼロだ。  
いや、間違いなくゼロだ。

今のところは、だが。  
と、

「春臣！！ あれは、どういものじゃ！？」

シャツのポケットからその神様が顔を出した。

「あんまり騒ぐなよ」

春臣は極力小声で注意する。

「外に出るときは、周りに気づかれるとまずいってことを理解して  
るよな」

「無論じゃ、お主に言われるまでもなく分かっておる」

彼女は春臣の忠告に一瞬、むっと口を尖らすが、しかし、久しぶりに外へ出てうれしくてしょうがないのか、

「しかし、それでも気になってしまふのが好奇心というものじゃろ  
？ じゃろ？」

と、すぐに満面の笑みに戻る。

それを見て春臣は、複数の感情の入り混じった息を吐いた。

あまりはしゃがれるのも困るが、最近は鳴りを潜めていた彼女本来の明るさが戻ってきたことに、正直ほっとしていたのだ。彼女の胸元の、春臣お手製のお守りに目が行く。

数日前の夜。

つまり、春臣が自作のお守りを媛子に渡したあの晩のことだが、その後、泣き止んだ媛子に春臣は再び今後のことについて話し合いをしようとして申し出た。言い出すならば、このタイミングが一番だと思っただのである。

もしかすると、未来のことについて話すことに彼女が抵抗感を示すかと春臣は懸念していたが、彼女としてもここのままうじうじしているのが嫌だったようで、すぐに了解してくれた。

そして、その話し合いの結果、一つの結論にたどりついたのだけ  
れど

「春臣、何をぼうつとしておる！」

いきなり彼女が服を引っ張った。

「え？」

「ほれ、あの鎖に繋がれた板は何じゃ？」

ポケットの縁に乗り出しながら、媛子は指差した。視線を向ける。すると、幼い頃によく遊んだ懐かしい遊具が目映った。

「何だ、ブランコか」

「ぶらんこ？」

「あの板の上に乗って、前後に揺らして遊ぶんだよ」

「……あの板に？」

すると、彼女は急に真面目な顔になり、

「あれで遊ぶ……ふむ、なるほどのう」

と、少し思案して、

「人間はまことに、単純な生き物のようじゃ」

そう言った。

「はい？」

「ただ板に乗って揺れるだけで楽しいとはの」

「……」

春臣は半眼になった。彼女の明るさが戻ったはいいものの、いつもの神としての上から視線も引き連れて戻ってきたらしい。

「どうした？」

「確かに言葉で説明するとなんとも味気ないが、実際にやってみると案外楽しいもんだぜ。俺も昔は友達とよく遊んだもんだ。乗りながら思い切り靴を飛ばしてさ。案外気持ちいいよ」

すると、今度はふっと媛子が噴き出すのが分かった。

「ふふふ、靴を飛ばす？ お主、阿呆なのか？」

「あ、阿呆？」

「そんなことをしたら板から下りれなくなるではないか。靴を履いて歩く人間には自殺行為のようなものじゃの。くっくっく」

彼女は口の端を吊り上げて意地悪く笑っている。

「片足で飛び跳ねて靴を取りに行くから問題ないんだよ。そうやって皆遊んでたんだ」

「わざわざか？」

「そう、わざわざだ。まあ、馬鹿にするなら馬鹿にすればいい」

そこで、春臣はブランコの方を向いたまま、横目で媛子を見、

「けど……あの楽しみをやってもないのに否定するのは、もったいないと思うがな」

と、酷く残念がるように言ってやった。

「でも、神様がするには、少し幼稚すぎるかな？」

「……」

媛子が急に俯く。どうやら、何か考えがあるのだろうか。

春臣はなんだか嫌な予感がした。少しムキになってしまったのは失敗だったかもしれない。

「そのくらい楽しいとな？」

「まあ、な」

「本当じゃな」

「……ああ」

「よし。じゃあ、わしもやってみたい」

やっぱりな、と春臣は肩を落として脱力する。

「お主、わしを乗せたままやってくれぬか？」

「おいおい、つまり俺に大学生にもなって、ブランコをしると？」

もう一度ブランコに目をやる。丁寧にピンクのペンキで塗られたその遊具は、どう考えても子供サイズであり、乗るとすればかな



り恥ずかしい。

しかし、彼女はそんなことはお構いなしに、

「何じゃ？　言うことが聞けぬのか？　でないとなしが不機嫌になるぞ」

といったものがまま攻撃を開始した。

「……」

「ああ、まずいのう、このままでは大声を出して喚いてしまつかもしれん。ああ、どうしたらいいのじゃ、困ったのう」

結局、春臣が折れた。

「ちっ……分かったよ。一度だけだぞ」

渋谷ベンチから立ち上がると、ブランコに向かう。

どうして、こんな休みの日の公園で、一人寂しく（一応媛子はいるが、傍からみれば間違いない）一人ブランコをこがなくてはならないのか。甚だ疑問で、心底恥ずかしかったが、まあ、たまには童心に帰ってみるといってもいいのかもしれない。

春臣は諦めて鎖を握り、板に足を乗せた。ぐらりと揺れる。

「お、おお、不安定そうじゃが大丈夫か？」

媛子が不安そうにこちらを見上げる。

「問題ないよ。ちゃんと持ってるから」

そう言って、もう片方の足も乗せると、身体を揺らし、少しづつ

反動で振り幅を大きくする。

きいきいと金属の音がし、ゆっくりと視界がスライドし始めた。徐々に、頬に当たる風が強さを増す。媛子が小さく悲鳴を上げた。

「おい、春臣、お、落ちるぞ」

「平気だって、その内慣れるよ」

春臣は調子に乗って、さらに高くこぐ。

と、

そこで、たまたま視線が滑り台の方へ向いた。

あれ、と思う。

そこに、子供達がいなかったのだ。つい先ほどまで、元気に遊んでいたというのに、今や泥だらけの滑り台が空しく佇んでいるだけだ。

「あ……」

もしかすると、ぶつぶつと独り言を言いながらブランコをこいでいる自分を頭のおかしい不審者と思い、帰ってしまったのだろうか。あの白熱の戦いが途中で終わるとすれば、考えられる可能性は、それくらいだ。

春臣は、自分の声のポリウムに後悔した。

媛子と話すうちに、気づけばそれなりの大きさの声になっていたのだ。

「春臣、なかなか楽しいものじゃの！」

すると、ブランコの揺れにも慣れてきたのか、媛子が嬉しそうにはしゃぐ。

「あ、ああ」

「何じゃ？ 元気がないぞ」

「気にするな。世間の目の厳しさを俺が知っただけだ」

「はあ？」

こうなったら、ヤケだ。もっとこいでやる。

「おう、まだ行けるのか」

「もちろんだ」

春臣はしっかりと鎖を持ち、さらに足元に力を込めた。

スピードを増すブランコに対し、視界に映る景色は次第に曖昧さを増し、揺れる残像だけになっていく。そのタイミングで媛子が、

「では春臣、そろそろではないか？」

と訊いてきた。

「何が？」

「靴を飛ばすのじゃろう？」

「え？」

「そうやって遊ぶのではなかったのか？」

この神様は何を言い出すのだ。

「あんな、それは子供の頃の話で」

「やってみると良い！」

有無を言わせない命令口調。

「……」

まあ、いいか。どうせ誰もいないし。春臣はブランコを揺らしながら器用に片方の靴を爪先に引っ掛けるように脱がすと、

「それっ！」

タイミング見計らい、靴を蹴り飛ばした。

「おお！」

媛子が歓声を上げる。

靴が大きく円を描いて、宙にふわりと飛んだ。

そして、公園の入り口付近にバウンドしつつ、落ちる。

春臣は目を見張った。

少なくとも自身の記憶では、あれほど遠くに飛ばしたことはない。

おそらく、新記録だろう。

知らず、不思議な高揚感に満たされ、無意識に、

「やったー！」

と叫んでいた。

これなら、もう片方も飛ばしてみるか。靴を脱ぎかけ

「あのう、榊さん？」

「へ？」

急に呼びかけられ、横を振り向くと、そこに立っていたのは私服姿の瀬戸さつきだった。

「お、お待たせして申し訳ありません。えっと、服を選ぶのに手間取ってしまって」

「あ、あ、あ……」

開いた口が塞がらない。

「それで……あの、何をしていたらっしゃるんですか？」

「あ、こ、これは」

頬が沸騰したように熱くなるのを感じると同時に、すぐさま、ブランコのスピードを落とす。

「その、媛子が……」

やれって言ったんですよ。

「春臣、勝手に責任転嫁するでない」

「な！ そっちがブランコに乗れって言ったんだろ？」

見ると、彼女は春臣が動揺しているのを面白がっているのか、さらりと嘘をつく。

「そんなことは忘れた」

「お、お前……」

「あのう、榊さん？」

この思わぬ状況に、顔に困惑の感情を浮かばせてさつきはおどおどしている。

「ああ、もう。下らん言い訳は耳障りじゃ!」

そこで媛子は断ち切るようにそう吐き捨てる。さつきを見て、

「済まぬが、ちょっと巫女の娘」

「は、はい」

「春臣の靴を持ってきてやってくれぬか？」

と、頼んだ。

「お、おい。それは俺が」

「あんな距離まで飛ばして、自分で取りに行けるとでも言うのか？」  
「ぐ、ぐう」

春臣は返す言葉がない。

公園の出入り口付近まで飛ばすという、これまでの最高記録をたたき出したわけだから、どう考えても、片足とびではたどり着くまで持久力が持たないだろう。我ながら、浅ましいことをしたものだ。

「榊さん、いいですよ。持ってきます」

そして、快く応じてくれた彼女に、

「ええと、あの………すいません」

ただ謝り、春臣は所在無げにぐったりと項垂れるしかなかった。

### 73 雨後の公園（後書き）

うう、作者です……。

本当は昨日更新しようとしていたのですが、何だか文章に納得がい  
かずに何度も書き直しました。どうしても集中力を持って出来な  
かったので、ちょっと今回のところはいつも以上に下手かもしれま  
せん。

というか、最近気づいたのですが、僕は三人称の文章よりも、一人  
称の文章の方が向いている気がする。いまさらですが。

「突然呼び出したりして、ごめんね」

春臣は軽く頭を下げた。

「そっちにもいろいろ予定があるだろうに」

公園の隅にあったベンチにさつきと二人で並んで座っている。先ほどの子供たちが立ち去ってしまったので、辺りは静かで話し易い。心地よい風も吹いていて、木立の影がさわさわと揺れていた。

春臣が顔を上げると、さつきは以前と変わらぬ礼儀正しさがにじみ出たような落ち着いた笑みで首を振っていた。

「いえ、私としても近いうちに連絡を取りたかったので、別に構いませんよ」

迷惑でなかったようで、春臣はほっとした。

「でも、待ち合わせはこんな場所でもよかったの？」

「え？」

「瀬戸さんは神社の近くに住んでるんだろう？　ここは俺の家からは近いけど、神社とは逆方向だよ」

この場所を指定してきたのは彼女だったが、普通であれば、どちらかの自宅に行けば済む話であるので、春臣は不思議に思っていた。すると彼女はなぜか少しはにかみながら俯くと、



「いえ、今日は町に用事があるので、ちょうどよかったです」  
そう言った。

「町に用事？」

「ええ、少し……」

春臣はなんだか妙な気持ちになる。巫女の彼女が町に遊びに行くなど、あまり上手く想像できなかったためか、そうか、巫女さんだつて普通の人なんだよな、となんだかしみじみと思った。

「それより、お話しに結論は出ましたか？」

「ああ、うん」

すぐに頷く。

今日、彼女をこの公園に呼び出したのには、他でもない、その話をするだったのだ。

数週間前、巫女である彼女と対決し、危うくも勝利を得た春臣たちだったが、その後、媛子を元の世界に戻す方法を示してくれた彼女に、その選択肢を選ぶかどうか、答えを告げなくてはならなかった。

「で、結論は……？」

彼女の問いに、春臣と媛子は目を合わせて頷きあつ。

「ああ、もちろん」

「それでは……」

「しばらく、現状維持だ」

たっぷりと息を止めた後で、春臣はそう告げた。

「……現状、維持……」

彼女は春臣の言葉をおうむ返しし、一瞬、驚いたように上半身をさつと後ろに引いたが、すぐに安心したような表情になる。

「そうですか」

「ああ、俺たちもあれからいろいろあつてさ。どうすべきか真剣に悩んだんだが……結果はそういうことだ。いましばらく、媛子を俺の家で預かる」

言葉で二人の意思を明確にしながら、春臣自身も自分に言い聞かせるように言った。

はつきりと言えば、結論から逃げた、と後ろ指差されるような答えだろう。

だが、それでも春臣が一番優先したのは、何より、お守りを作っていたころから考えていた、「媛子となるべく一緒にいること」だった。

だからこそ、誰に何と言われようと、春臣はそれで、最良且つ、理想的な結論にたどり着けたと確信していた。

「巫女の娘よ、これを見よ」

すると、ポケットの中の媛子がさつきを呼んだ。目を向ける。彼女は胸元のお守りを手に持って突き出していた。

「あ……」

「何です、それ？」

さつきが覗き込む。

「お守りじゃ」

「お守り？」

「そうじゃ、春臣がわしのために作ってくれたのじゃ、これはすいぞ。これがあれば、人間の世界におっても怖くないのじゃ！」

正直、不器用な自分が作ったお守りを自慢されるのは中々に面映かったが、そう誇らしげに語る様子は、見ていてかなりうれしいものだ。

「はあ……」

「はあ、ではない。巫女の娘、これは大変なことなのじゃ」

媛子はそこで語気を強めて語る。

「お守りだけではなく、この世に来てからというもの、わしは、春臣に世話になりっぱなしじゃ。そもその原因に春臣が責任を感じ、わしを神の世に戻してくれると約束してくれたというものの、わしは、その春臣の優しさに甘えて過ぎておった」

お守りを両手で抱きしめながら、彼女の声は弱弱しく細くなった。

「わしは春臣に借りを作りすぎたのじゃ」

「借りを？」

「そうじゃ、だからわしは、何としても春臣に少しでも恩返しをせねばならんと思ったわけじゃ。分かるの？」

「はい」

媛子はぼんと胸を叩く。

「だから、神の世に戻るのはまた今度ということにする。恩を返し終わってからでも、帰るのには遅くないと思つての。これが、二人で話し合つて決めたことなのじゃ」

そう言い切る様子はなかなか勇ましく、春臣には彼のの神様らしい力強さがあるように思えた。

「……巫女の娘、どうじゃ？」

媛子がす、とさつきを見つめる。

「そうですか。分かりました」

すると、あっさりと了承し、さつきは微笑んだ。

「それだけ、か？」

「はい。私は別に、榊さんたちが出した結論にとやかく言つつもりはありませんよ」

彼女はベンチに座つたまま背伸びするようにぐつと両足を前に伸ばす。

「榊さんたちが何か町にとって悪いことをしようとしているなら話は別ですが、あなたたちはそんな人たちじゃないですし、私としてもあんな無礼なことをしてしまつた以上、夜叉媛様がこの世界に残ることに文句を言える立場にはありません。私も榊さんたちには借りがあるんです」

「……あのときのことはもう気にしなくていいのに。瀬戸さんだつて、この町を守りたくて行動してたわけだから」

しかし、彼女は頑なに首を振る。

「ですが、失敗は失敗です。それを全くの無にしてまっでは前進はありませんよ」

「……前進か。瀬戸さんがそういうなら、まあいいけど。それで、肝心の神社の神様はどう言ってた？」

春臣が訊く。実はそれが一番気になっていたことだった。

「いったいどんな神様なのか検討もつかないが、この土地を守っているくらいだ、相当な権力と力を持っているだろう。さつきが良くても、神が首を縦に振らなければ、意味がない。」

「ああ、それなら問題ありません。千両様も私と同意見です。事情を話したら、問題がないならば放っておくって」

「え？」

「そんなもの、なのか？」

春臣は呆気にとられる。

「ずいぶんアバウトな神様だな」

さつきは口元に手を置いて苦笑した。

「ふふ、神様って案外そういうものだって言っていましたよ」

「へえ」

「あ、でも。力をむやみに使ったことはしっかり怒られましたか…」

「…」

そう言って頂垂れる様子は、かなりこっぴどく叱られたようだった。

「でも、アバウトって言えば、媛子も似たようなものだよね」

「何じゃ？ 春臣、わしが適当じゃと？」

「違うのかよ。いっつもメリハリのない生活してるくせに」

すると、痛いところを衝かれたのが気に食わないのか、彼女は服の袖から神楽鈴を取り出して、しゃりんと春臣の鼻に向ける。

「失礼はそれくらいにしておけ。その気になれば今のわしなら、お主の髪の毛に火をつけることも可能じゃぞ。その歳で禿頭になりたいか？」

「是非遠慮させてください」

即答した。

「ふむ、賢明な判断じゃ」

媛子が満足した顔になると、隣のさつきが笑う。

「ふふふ、やっぱり仲がよろしいですね」

「なんじゃ？ そう見えるか？」

「はい、とつても」

さつきにちらりと目配せをされたような気がして、春臣は途端に咳き込んだ。

「う……ごほんごほん」

「どうした、春臣？」

「いや、なんでもない」

ちよつと、動揺しただけだ。

「でも、思ったよりお話しが早く済んでよかったです。私これから用事がありますので」

「ああ、町に行くんだっけ」

すると、彼女は携帯を取り出し、メールを打ち始める。

「そうです、暮野さんに誘われて一緒に買い物……」

「暮野？ ああ、知り合いなんだっけ？」

以前そんな話を聞いたきがするが、しかし、一緒に出掛けるほど仲がよかったとは知らなかった。

「はい、この間は神社に遊びに来てくれました」

「へえ」

暮野の話をする彼女はなんとも嬉しそうだ。

「だから、今日は私が暮野さんに付き合つことなつてて」

「なるほど、デートか」

と、

「え？」

その一言に、彼女の時間が止まった気がした。

「つまりデートであろう？」

いつの間にか春臣の肩によじ登っていた神が、二白眼でさつきを眺めていた。

「え、そうなの？」

「え、え、ち、違います」

彼女はわたわたと両手を振る。

「何を言う。男女と一緒に町を出歩くということはそういうものなのじゃろう？ わしも春臣と一緒にデートをしたことがある。さつきもお主が来る前まではデートじゃった」

おいおい、初耳だ。

「そうだったのか、俺は聞いてなかったがな」

とぼやく春臣の前でさつきはぶるぶると首を振っていた。

「違う、違うわ、さつき。これは全然普通のことよ。普通のこと。ただ二人で一緒に買い物に行くだけじゃない。そうよ、大丈夫」

しかし、それに追い討ちをかけるように媛子が言う。

「だから、それがデートじゃ。お主も分かっておるから、そのための服を選ぶのに時間がかかったのではないのか？」

「そ、そんなこと……」



さつきの顔が一気に赤くなる。言葉が覚束なくなり、額に汗が滲んでいる。

これではパニックになるのは時間の問題だろう。仕方ない。ここは手助けしてやるか。

春臣はわざとらしく手を叩く。

「ねえ、瀬戸さん。暮野にもう行くなってメールしたんだよね。じゃあ、そろそろ行ったほうがいいんじゃない？」

「あ、はい。そうでした」

これは渡りに船とぴよんとベンチから立ち上がるさつき。

「あの、それでは榊さん」

「うん、じゃあまたね」

簡単に別れの挨拶を済ませ、そのまま小走りで公園の出口に向かっていく。

「お、おい、巫女の娘！ 待たぬか」

しかし、媛子の引きとめの言葉もむなしく、彼女は遠ざかっていき、道路を渡っていった先で視界から消えた。

「……おい、春臣」

ゆっくりと息を吐いて、媛子が不機嫌そうに言った。

「文句は受け入れ拒否」

春臣はそっぽを向く。

「もう少しあの小娘をいじめてみたかったのにおう」

「……悪趣味な神様だな」

「何を言うか、過ちではあるが、一度はお主に怪我をさせようとした娘じゃぞ」

「え!？」

一瞬、心臓が強く脈打った。

「おい、ま、まさか媛子、あのときのこと、まだ根に持ってるのか?」

てつきり春臣は、媛子がさつきの過ちをとっくに許しているものだと思っていたが、違ったのか?

盲点を衝かれた気持ちだった。

確かにあの時は、彼女にとって本気で命を取られるかどうかという修羅場だったわけで、それと同じく春臣や、椿も同じような危機に直面した。

よく考えてみれば、そんな行為をいとも簡単に春臣は許しているわけで、普通なら警察を呼ぶほどの大騒ぎになっていても不思議ではない。だが

「ふふふ」

彼女がいつの間にか真剣な春臣の表情を見て笑っていた。

「な、何だよ」

「冗談じゃ。そんなわけなからう」

「え?」

唾然とした。

と同時に、自分の考えが単なる杞憂だったことへの急激な脱力感に襲われる。

「冗談かよ。驚かせるなよ」

「なに、わしはこれでも、あやつのことを気に入っておるのじゃ」

「へえ、そうなのか？」

そりゃまた初耳だ。

「わしは巫女に傳かすかれたことはないが、この世ではあのようによく働く巫女も少なくなっておるようじゃ。神よりも自分たちの生活で手一杯な人間がこの世には多く増えておるのじゃろうな。悲しい話じゃ」

「……」

なんとなく、春臣は言葉に窮する。神が人から忘れられようとしている、そんな事実の気配を感じてしまったからだだった。

「じゃから、あの娘のような貴重な存在を絶やしてはならんとわしは常々思つものじゃ」

「……そうだな」

言つて、ベンチから立ち上がる。

「じゃ、俺たちも帰るか」

ともかくこれで、片付けるべき問題は終わったのだ。しんみりとした空気は今は遠慮願いたい。

「そっじゃのっ……あ、春臣」

媛子がシャツを引っ張る。

「何だ？」

「その、少しだけ遠回りをして帰らぬか？」

彼女は恥らうように、上目遣いで訊く。

「え？」

「ならぬか？」

「……」

もしかすると、さつきが暮野とデートをしていることに何らかの  
対抗心を燃やしたのかもしれない。

全く、面白い神様だ。

春臣はその申し出を断られるはずもなく、軽く頷き、

「……いや、じゃあ、遠回りしようか」

と、来たときとは反対の出口から公園を出ることにした。

## 75 行き倒れ商人

ここは、春臣とさつきが別れた公園から、さほど遠くない森の中。太陽の光がきらめく町中とは違い、未だ渴ききつていない地面と、木々から漂う清涼な空気に満たされた静かな遊歩道である。

その道を行く二人の少年の姿があった。

「はあ……兄ちゃん、どこ行くのさ」

「あん？ どこでもいいだろ銀犀。家に兄貴がいないんじゃない一緒に遊べねえし、だから折角の休みに家でごろごろするのももったいないしな」

先頭を歩く少年、双子の兄の暮野金犀は暇で持て余している力を発散させるように、のしのしと身体を大きく動かして道を歩いている。その後ろをついていく弟の銀犀は、乗り気ではないのか、少し背中を丸め、とぼとぼとした足取りだ。

「でも、だからって、あてもなく道歩いてても都合よく面白いものなんてないって」

「馬鹿言え、それで家でぐうたらしてて面白いことがあるか？ あのな、行動せずに何かを得られるなんて、甘っちょろいこと考えてるんじゃないよ」

「別に、そんな」

「ほら、誰かが歌ってたぞ、『幸せは歩いてこない、だから歩いてゆくん』って。面白いことだって同じようなもんだ。自分が欲し、行動することによって初めて発生しうることなんだよ」

それを聞きながら、双子の弟はポケットに入れていたあめ玉を口に放り込み、ため息をつく。

「……ふうん。じゃあお兄ちゃん、『幸せの青い鳥』って知ってる？」  
「あん？　なんだそりゃ？」  
「……」

三白眼で金犀を見つめる銀犀。

「まあ、お兄ちゃんの言いたいことは分かったよ。でも、そうだと  
して、どうして僕まで一緒に行かないといけないわけさ」

すると、金犀は痛いところを指摘されたようで、一瞬口ごもった。

「……それは、あれだ、ほら。二人寄ればナントカの知恵って」  
「それを言うなら三人寄れば文殊の知恵。言葉は間違ってるし、こ  
の場合、用法もいまいち合ってるとは思えないよ」  
「ぐっ……」

「無駄に歩くのも疲れたし、僕、もう帰るからね」

そう言った銀犀はぷいっときびすを返すと、金犀を一人置いて去  
っていくようにする。

しかし、さすがにこんな風に呆れられては兄の面子は保てないと、  
金犀は咄嗟に彼の手を掴んだ。

面倒くさそうに振り返る弟に両手を合わせて懇願する。

「もう少しだけだからさ。もうちょっとだけ」  
「ええ！　さっきもそう言われた気がするけど？」  
「そんな気がするだけだ。大丈夫、もう少し行けば面白いことがある。  
保証する」

何を根拠に、と言いたげな銀犀。

「仕方ないな、あと少しだけだよ」

「ああ、分かっている。心配するな」

しかし、そこで一步踏み出したとき、金犀の足が止まった。

「うん、どうしたの？」

「い、いや、それが……」

少年がゆっくり足元を指差す。

「こ、これ……」

「う、わ……」

二人の少年の表情が一気に青ざめる。

「わーーーーー!!」

それと時を同じくして。

近くで悲鳴が上がったのを春臣は聞き逃さなかった。

「何だ？」

公園からの散歩道、たまには変わった道でも歩こうかと、森林浴がてら山にのんびり向かって歩いていたら春臣と媛子だったが、その途中で出くわした、不自然な叫び声に表情を強張らせる。

「媛子、今の聞いたか？」

「ああ、子供の声のようじゃったが」

彼女が林の奥に向かう前方の曲がり角の先を指差す。

「向こうのほうじゃな」

春臣はどうすべきか周囲を確認しながら逡巡するが、自分以外に他の通行人がいない上、もしものことを考えれば無視するわけにもいかなかった。

「何かの事故かもしれない。様子を見に行ってみるか」  
「うむ」

媛子が了解したのを見て、春臣はすぐさま走りだした。

角を曲がると、そこは右手の斜面の木々がしな垂れかかるような形で影を作り、少々薄暗くなった細道に出る。

道の先に、黒っぽい二つの影が見えた。小柄なそれから想像するに、どうやら子供のようだが（おそらく先ほどの悲鳴の主だろう）、それより目を引くのは、彼らの足元に横たわる、モノ。

春臣たちからの距離でははっきりと捉えることができないが、少なくとも春臣には、「人」に見えた。

倒れている、「人」だ。

「おーい！」

駆け寄りながら少年たちに春臣は声をかけた。



「何か、あったのか？」

すると、一人の少年がこちらに手を振り替えしてきた。どうやら小学生ほどの歳頃らしい。

「すみません、手を貸してください」

「人が、人が倒れてて……」

パニックになっているのか、二人とも声が上ずっている。

しかし、春臣もとても嫌な胸騒ぎを感じ、冷静ではなかった。

近づくにつれ、はつきりと人の形になる横たわったモノが、ドラマや映画で体験するような非現実的な冷たさを背筋に感じさせる。

最悪の事態を予感しながらも、少年たちの隣まで走り寄り、荷物を背負ったまま俯けに倒れている人物の姿を見て、

途端、息を呑んだ。

それは何も、その人物がすでに手遅れだったからではない。

「あ、青い髪……」

ぎょっとした。

おそらく女性であろうと思われるが、頭からかなり長く伸びた髪の色は、日本人の黒髪とは似ても似つかない、青。

その異質さに春臣は驚いたのである。

外国人か、と逡巡するが、いや、春臣はそんな髪の色をした外国人に出くわしたことはない。

普通ならかつらかそれに類似するものも考えるかもしれないが、そうとは思えない自然な髪質な上、倒れているのに、さほど乱れもない点からしても、その可能性は否定された。

と、その時、

「そ、蒼髪、じゃ……」

ポケットの中の媛子がおびえたように呟いたのを聞き逃さなかった。

「？」

何か知っているのか、と春臣は咄嗟に思うが、今はこの人物の安否を確認するほうが先だった。

「二人とも下がって」

少年たちを遠ざけると、春臣は腰を落とす。その人物の肩を軽く叩き、

「大丈夫ですか？」

と声をかけた。

「……」

反応はない。

意識がないのだろうか。

だとすればまずい。こういうときの応急処置など春臣はまるで知らなかった。学校での勉強はこういう時に限って当てにならないものだ。

とはいえ、呼吸の確認しなくては。

春臣は女性の反対側の肩と腕を押さえると、手前に引つ張り、身体を反転させた。多少荷物がつぶされたが、今は構わない。

さらりと柔らかい髪がこぼれ、露わになったその人物の顔をのぞきこむ。

「……やっぱり女性か」

顔つきからは、大抵どこの地域の人間か推測できるが、その女性は間違いなくアジア人、いや、ほぼ日本人と断定してもいいほどの顔つきをしていた。

髪の色とその顔がそぐわないのが気に掛かるが……。それでも、かなりの美人である。

と、今はそんなことを確認している場合ではない。

邪魔な思考を脳の奥に押しやりつつ、春臣は口元に手をかざす。

「ん……？」

「どうですか？」

背後から少年の一人が聞いてきた。

「……なんとか息はあるみたいだ」

「ふう、良かった」

「まずは安心ということだ。春臣は力が抜け、その場に尻餅をつく。」

「とりあえず、この人の意識が戻るまで、安全な場所に移動させることが出来ればいいんだけど」

「じゃあ、一先ず救急車を呼んだほうがいいですよね」

春臣は頷く。

「ああ、携帯はあるか？」

「はい、お父さんたちがもしもの時に持っておけて渡してくれたのが。ここで役に立ってよかった」

二人の少年の片方が頷いた。

ポケットから携帯を取り出し、早速ボタンを押している。もう一人の方はというと、腰をかがめ、不思議そうに女性を眺めていた。

落ち着いてきた春臣は、彼らを交互に見て、ふうむ、と顎を撫でる。

先ほどはよく見ていなかったが、どうやら彼らは双子のようだった。しかし、普通ならそれで何の不思議もないことだが、春臣は妙な引っかかりを感じる。

その顔に、どこか見覚えがあるような気がするのだ。さて、どこで出会ったのか。

「あかさ」

と、

訊ねようとした瞬間。

グイッ。

春臣は何者かに手首をつかまれた。

「うわっ！」

驚いて振り向くと、手を掴んでいたのは、目の前で横たわっていた女性だった。

意識が戻ったのか？

「だ、大丈夫ですか？」

訊くと、彼女は春臣を見、僅かに顎を動かして、囁くような声で何かを言っている。

「……かが……った」

「え、何です？」

耳を近づける。

「お腹……減った」

そして、彼女がそう言い終わるか言い終わらないうちに、ぐう、と盛大に彼女の腹の虫が鳴いた。

## 76 神の力、再び

「いやー、助かったよ少年」

「ご満悦の表情で、両方の頬をあめ玉で膨らませながら、その女性は金犀たちに礼を言った。

「こういう空腹の時は糖分を口に含むだけでも胃の腑が満たされるんだねえ」

「よかつたら全部食べてもらっても構いませんよ。家には腐るほどあるんで」

弟の銀犀がポケットから残りの菓子を出しながら言った。ガムやら小さなスナック菓子やらが彼女に差し込まれる。

「おお、本当に？　じゃあ遠慮せずにもらっちゃおっかなあ」

すると、子供のように目を輝かせながら、彼女はそれを受け取って、次々と新たにお菓子の袋を開けていく。どうやら超がつくほど、彼女は空腹だったようだ。

春臣たちは、先ほどからこの女性が倒れていた場所で座り込み、食料を与えるという応急処置を施してきたのだが、言葉もろくに話せなかった先ほどより、かなり元気を取り戻してきたように見えた。頃合いを見計らい、

「とりあえず、動けるようにはなりましたか？」

と春臣が訊く。

しかし、彼女はスナックをポリポリと齧りながら、

「うん、もうちょっと待って。今エネルギー充填中だからさあ」とじれったそうに言った。その様子はまるで駄々っ子のようで、半ば呆れる。

「……そうですか」

春臣は気を取り直し、質問する。

「もう一度確認しますが、お名前は時雨川さんでしたっけ？」

「うん。時雨川ゆずりだよ、少年」

「で、どうして倒れてたんですしたっけ？」

「ああ、それにはいろいろと事情があつてね。まあ、早い話、お恥ずかしながらお財布が底をついちゃってさ」

彼女は笑えない話を笑いながら言う。

「にっちもさっちもいなくなつて、森の中においしそうなお肉でも落ちてないかなつて、探してたら見事に」  
「行き倒れたつてわけですね」

ため息交じりに春臣が続けた。

「そこを、たまたま通りかかった暮野少年たちが見つけたと」  
「うん、そうみたいだね」

彼女が答えて、ちらりと春臣は隣の少年たちを見る。

瓜二つの双子、暮野金犀と銀犀だ。

先ほど見たとき、春臣は妙に見覚えのある子供だと思ったのだが、

彼らが名前を名乗ったことで全て合点がいった。

暮野、つまり、春臣が以前関わりを持ったことのある、暮野木犀の弟たちである。彼らに確認すると、やはり、そうだということだった。先ほど、さつきと木犀の話をしたばかりだったので、春臣はこんな奇遇もあるものだと思議に思っていた。

春臣は視線をゆずりに戻し、質問を続ける。

「じゃあ、家はどちらに？」

「家？」

「この町に住んでるんですか？」

「うんにゃ」

ゆずりは首を振った。

「とうとう？」

「この町には住んでないよ。今はたまたまこの町にビジネスで来たんだよ」

そんな白装束で？

思わず言いたくなかった。

春臣からすれば、彼女の出で立ちはどう見ても商談に望むための服装には思えない。

「どんなビジネスですか？」

「ああ、お守りだよ」

「お守り、を？」

「そう、それを全国津々浦々売り歩いてるんだよ」

なるほど、それならばその格好も頷けるが



しかし、果たしてこのご時勢、そんな商売が儲かるのだろうか？  
と、

そこまで思っただ、はっとした。

そもそも儲かっているなら、こんな道端で空腹に耐えかね、行き倒れるなどということはあるまい。この先の見えない不況の時代、彼女も苦勞しているのだろう。

「ん？ どうした、少年？」

すると、彼女は無言で向けられている春臣の視線を不思議に思ったのか、首を傾げる。

「あ、いえ、ちょっとそのお守りを見てみたいなあ、なんて思っ  
て」「アハ、何だそういうこと。いいよ、三人とも命の恩人だしね。そ  
れくらいお安い御用さ」

彼女は快く了承し、背負っていたリュックを下ろすと、チャック  
を開け閉めし、ポケットをまさぐりはじめた。

しかし、

「あれ、確かここにいくつかサンプルを入れてたはずなんだけどな  
あ」

と、どつちやら見つからないようだ。

「倒れた拍子にどこかに落としたのかな？ もったいないことした  
なあ」

「あのおう」

「うん？」

そこで手を挙げたのは銀犀だった。

「それって、もしかして、あそこに見えるのがそれじゃないんですか？」

見ると、彼が指差した十メートルほど先の茂みに、小さな封筒が落ちている。

「おお、あれだよあれ、申し訳ないけど取ってきてくれない？」  
「はい」

彼は素直に了解すると、茂みの方へ向かっていく。春臣はそれを目で追いながら、ふいにあることを思い出し、ゆずりの肩を叩く。

「あの、さっきからお聞きしたかったんですけど」  
「何だい？ 榊少年だったっけ？」

軽く頷き、

「時雨川さんは、日本人なんですか？」

と訊いた。

「ほほお、よく聞かれる質問だねえ」  
「その髪って人工の物じゃないですよね」  
「うん、そうだよ。本物の私の毛」

彼女は頭を揺すってはらはらと長い髪を散らす。すると、まるで宝石のように、青い線がきらめきながら宙になびいた。

「化学薬品も使っていないし、何もいじっていないよ」

「まさか、生まれたときからそんな色を？」

「ふふふ、そんなまさかあ」

彼女はいたずらっぽく笑う。

「え、じゃあいったい」

さらに問いかけようとして、言葉が途中で止まる。

唐突に腹の底を震わすような地響きが、その場の全員に襲い掛かってきたのだ。

「なんだ！？」

弾かれたように春臣は背後を振り返った。

すると、細道の斜め上方、ここ数日間降り続いた雨で地盤が緩んでいたのか、斜面の一部の土砂が轟音と共に崩れ落ちているところだった。赤黒い土の流れが、木々も草も岩も問答無用に巻き込み、凄まじい振動を引き起こしながら、道へ突進してきている。

一見、それは春臣たちがいる場所に危険を及ぼさないように見えだが、

問題は前方の茂み、

「銀犀え！」

彼がいる場所へその土砂が猛烈に迫っていることだ。

危ない！

春臣は咄嗟にそう思うが、体が動かない。金縛りにあっているわ

けでもないのに、足が踏み出すことをためらったのだ。

それは単に、向かってくる土砂に恐怖しているだけでない。本能的に、もはや、暮野銀犀への救助が手遅れであることを、体が察知していたためだった。

怒涛の勢いで迫り来る自然の奔流には、人間のような優しさも、容赦も、躊躇もない。ただひたすらに力が傾く方向へと駆け抜けていくだけ。

この距離では、銀犀を助けようと駆け出したところで、彼を救い出すことはおろか、その場にたどり着くことすら出来ないだろう。そのあまりに無謀な状況に、春臣の体は動けなかったのだ。

だがしかし、  
放っておけば銀犀は間違いなく土砂に埋まり、押しつぶされてしまふ。  
そしてその先に待ち受ける結末は、誰もが目を覆う、最悪の事態。

でも、

どうする？

どうすればいい？

道の先で立ちすくみ、成す術もなく土砂崩れを見上げる少年を春臣の目が捉える。

目の前で起こっている現象の、おそらく半分も把握できていないであろう、その表情を。

でも、

もう、

すべてが、

遅すぎるのだ。

その刹那。

「ちっ、仕方ねえ」

と、

誰かが、ぼそりと言った。

隣で立ち上がった時雨川ゆずりだった。

彼女は、俊敏な動きでぱっと後ろ足を引き、背負っていた荷物を乱暴に背後に投げ飛ばすと、駆け出すのかと思いきや、懐から紙飛行機を取り出し、それに向かってこう叫んだ。

「さつと飛んでけ、カミ飛行機！ ひゅんと風舞え、カマイタチ！

リンと鳴らせよ、時の音！ アオヒノワシノミニョト 蒼日鷲命よ聞こし召せ！」

そして、ぐつと振りかぶると、腕をしならせながら、手に持っている紙飛行機を思い切り前方へ投げた。

すると、それは目に留まらぬ速さで、さながら空から滑空する鷹のごとく、あつと言う間に銀犀の所まで飛び行くと、彼の周りで、くるりと一回転する。

途端に、何の前触れもなく強風がどつと吹きつけ、猛然と迫る土砂にもろにぶつかったように感じた。

そして次の瞬間に巻き起こる爆風と、粉塵。

春臣は思わず目を庇う。

あまりにもいろいろなことがその瞬間に発生したことで、目の前で起こっていることに正確に認識できていたのか、よく分からず、混乱していた。

が、物音が止み、ともかく、目を開ける。  
そして、その目を睜った。

土砂が、銀犀の目の前で、まるで凍り付いてしまったように、固まっていた。なぜかそこだけ、時が止まっていたのだ。

「え」

言葉を失う。

「そ、んな」

どうということなのか、全く検討がつかなかったが、とにかく、銀犀が逃げるチャンスが出来たようだ。

「少年！ こっちへ走れ！」

そこで時雨川ゆずりが張りのある声で叫ぶ。

「早く！」

しかし、あまりのことに腰を抜かしたのか、彼は逃げるところか、その場でへなへなと座り込んでしまう。

ゆずりの様子から、土砂崩れの勢いが止まっているのはほんの一時的な作用だと察知した春臣は駆け出そうとするが、その前に、

「くそ、あの馬鹿！」

そう毒づいて、兄の金犀が走り出していた。  
うずくまっている彼に近寄り、手を取ると、ぐっと引いて立ち上

がらせる。

「走れ！」

そして、強引にも彼を安全地帯まで引つ張ることに成功したとき、ピシリ、とガラスにヒビが入るような音が耳に響き、次の瞬間には、土砂が今しがた少年二人が居た場所を見事に飲み込んでいた。濛々《もうもう》と土ぼこりが舞い上がる。

正に、間一髪の出来事だった。

「……」

春臣は呼吸が止まったかと思った。走ってもいないのに、気づけば荒い呼吸になっている。

「た、助かった」

とへたり込む双子の少年を見て、春臣は自分の隣に目を向けようとじ

瞬間、凍りつく。

ひゅんと耳元を何かが掠めたかと思うと、先ほどの紙飛行機が、どこから舞い戻り、隣の女性の手に戻るところだったのだ。

そして、春臣の目が、彼女を捉え、そのまま凝視した。

これは、この感じは。

春臣の肌が感じているのは、彼女からのただならぬ超然たる気配。

今のは……間違いないな。

巫女の瀬戸さつきが以前、春臣に対して使った力と同種のモノ。  
すなわち、神の力。

そう思ったとき、ふと、こちらを見たゆずりと目が合う。彼女は春臣を見て、怪しく微笑んだ。それはまるで、人間ではない異形の者の笑みのようで、春臣は額に脂汗が滲むのが分かった。

何者だ、この女性<sup>ヒト</sup>。



77 不審の商人（前書き）

どうも、ヒロユキです。

今回はちょっと内容が長くなったので分割します。  
残りの部分は明日か明後日更新するかと。

## 77 不審の商人

「大丈夫だったかい？ 少年」

一瞬前の不気味な笑みなどまるでなかったかのように、ゆずりは母親のような優しい表情になり、肩で息をしている二人の少年に声をかけた。

「う、うん」

尻餅をついた状態で、息も絶え絶えに銀犀が感謝を述べる。

「助かったよ、お兄ちゃん。それにお姉ちゃん」

金犀の方はというと、呼吸を落ち着けることも面倒なのか、すぐさま立ち上がり訝しげにゆずりを見た。

「それより、い、今のは一体なんだよ？ まさか、魔法でも使ったのか？」

真相を知りたくて、いてもたってもいられない様子である。

彼女は緩慢な動きで首を横に振った。

「私は何もしていないって。お守りの力が君たちを救ったんだ」  
「お守りが？」

金犀が目丸くする。

「そうさ、お守りに宿ってる神様が災いから君たちを助けたんだ。

私よりもお守りの神様に感謝した方がいい。それより、怪我はないかい？」

「う、うん。それは大丈夫だけど……お守りって、さっきの紙飛行機のこと？」

「ああそうさ」

「なあ、それ、見せてくれよ！」

すると、少年たちは直前まで命の危機にあつたことも忘れ、興奮気味に無邪気に飛びはね、ゆずりに群がろうとする。ちよつと待ちなよ、と彼女は苦笑いだ。傍から見れば、少し歳が離れた姉弟が戯れているような、そんな微笑ましい光景だろう。

しかしその一方で、春臣はその様子を離れた場所から呆然と眺めていた。

とてもではないが、少年たちのように、好奇心に目を輝かせながら彼女に近づくことは出来なかったのだ。

体が、今しがた彼女に感じた尋常ではない力の存在に恐怖している。

彼女は、紛れもなく一般人ではない。春臣は今はその認識していた。

神の力を使用できる、特殊な人間なのだろう。

春臣は思う。

瀬戸さつきと並ぶ……いや、それ以上の力を持っているのだろうか？ 神には一つの山を消滅させるほどの力があるとさつきは言うていたが、もし彼女も相応の力があるとすれば、それは脅威だ。

どうする？ どうする？

ぐるぐると考えが巡る。

ふいに、シャツを掴まれているのに気がついた。

「春臣」

僅かに聞き取れる声で、媛子が囁きかけているのである。

「今の内に帰るのじゃ」

「え？」

いきなりのことで、戸惑う。

「よいから帰るぞ」

「どういうことだ？ あの人のこと、何か知ってるのか？」

媛子の様子が妙に必死なのを見て、春臣は先ほどの彼女の不審な挙動を思い出していた。倒れた時雨川ゆずりを見て、驚いたような素振りを見せたことだ。

「説明しておる暇はない」

警戒するように媛子はゆずりを一瞥し、

「とにかく、あの娘から離れ」

「え、お姉ちゃん、それ何？」

と、そこで金犀の高い声が割って入ってきた。春臣が目を向けると、時雨川ゆずりは少年たちの前で、何かを取り出して見せているところだった。

「これもお守りさ。君たちが安全に家まで帰れるようにするための」

自慢げにそう説明しているが、よく見れば、それはお守りとは思えないただの二枚の鳥の羽で、白と茶が混じったまだら模様をしている。春臣は妙に思い、眉を寄せた。

彼女はそれをくるくると指で弄んで回し、二人に差し出すのかと思いきや、

「  
」

なにやら口元で一言か二言、囁いた後、ためらいもなく二人の頭のとっぺんにぶすりと差した。

「な!  
」

春臣はあまりのことに喫驚<sup>オドロキ</sup>する。

すると、それまで騒いでいたのが嘘のように、双子が静かになった。ぶらりと両手を下げ、視線が宙を漂い、瞳が色を失う。それはまるで病人のような、気力の欠片もない半分死んでいるような様だった。

「時雨川さん、今、何を？」

思わず、春臣が震える声で訊いた。

「しっ!  
」

しかし、彼女は答えを返すことなく、春臣を口元に指を置いて制し、無言のまま俯いた二人になにやら言葉をかけ始めた。

「いいかい？ 君たちはここで何も危険な目に会っていない。道で行き倒れた私を助けた後、その無事を見届けてそのまま家に帰った

んだ」

ゆずりが春臣の背後の道を指す。

「さあ、行きなさい」

すると、彼らは返事もせず、くるりとその方向へ身体を向け、歩き出した。

何と、ゆずりの命令を聞いている！

「おいおい、ちょっと！」

「榊少年だっけ、そこをどいてあげてよ。二人は帰るんだ」

彼女は春臣の方を向きもしないで淡々と指示した。

しかし、そんなことで引き下がる春臣ではない。ぐ、と口元に力を入れると、こう言い返した。

「彼らに何をした！」

「別に何も。特別、害になるようなことはしていないよ。ただし、ちよつと脳内の情報を改ざんさせてもらった。さっきの力を見てしまった記憶を消したのさ」

「記憶を、消しただと？」

春臣に戦慄が走る。

「そんなことが簡単に？」

「そう、私には出来るんだよ。こついうことが」

「ふ、ふざけるなよ」

「大丈夫だよ、榊少年。家まで戻れば彼らは普通に戻る。記憶が少し修正されているが、別に後遺症も何も残らない。綺麗さっぱり、

常人に戻る。命の恩人に、恩を仇で返すようなことはしないさ」  
「……怪しい話だな」

春臣は半信半疑だ。

真実かどうかはさておき、彼女は何のためらいもなく少年たちに怪しげな術をかけたのだ。他人を騙すことに、何の抵抗感も有していない、ということも十分に考えられる。

そこで春臣は、近づいてきた銀犀を止めようと、手を伸ばした。本当に記憶を無くしているのか、確かめようとしたのである。  
ゆずりの声が飛んでくる。

「おっと、今の彼らには何をしたらって無駄だよ」  
「は？」

すると、銀犀の肩に触れるか、触れないか、のところで春臣の手が止まった。体が硬直したのが分かった。まるで金縛りにあったようである。

「！」

その隙に、暮野少年たちは春臣の脇を通り、遠ざかっていく。

「おい、おい！！」  
「だから心配しなくても大丈夫だよ。保証するからさあ」

彼女はため息をつき、やはり平然とした様子だ。

「私はあの子たちの記憶の一部を無くすことが出来れば十分。それ以上のことをしても、何のメリットもないし」

春臣は、動かない体のまま、顔だけを動かし彼女を睨みつける。

「あんた、何者だよ」

「おおこわ、そんな目で見ないでよ」

言葉とは裏腹に、彼女は驚いてはいるようには見えない。さらさらと髪を揺らしつつ、余裕の表情を浮かべていた。

「質問に答えてくれ」

「何さ、さっき答えたでしょう？ ただのしがないお守り商人だつて」

「……じゃあ質問を変える。今の人が人に見られちゃまずい力だったなら、俺の記憶も消すのか？」

「うんにゃ、少なくとも今はそんな余計なことをするつもりはないよ」

これは意外だった。

「それは、どうして？」

「だって少年、君には聞きたいことがあるんだもの」「はっ」「はっ」

すると、す、と彼女は春臣のシャツのポケットを指差す。

「そこにはさあ、一体、何がいるんだい？」



## 78 仕組まれていた罫

「そこには、何がいるんだい？」

突然射抜かれるようにゆずりから指差され、春臣は絶句した。

視界の色がいきなり反転し、まとも息が吸えなくなるような錯覚を覚える。

まさか、

彼女には、

媛子のことかばれているのか？

咄嗟に、まだ自由に動く左手でポケットを庇った。

すると、彼女は春臣のそんな拳動を眺め、あざ笑うかのように言う。

「隠そうとしたって無駄だよ。時雨川には分かるんだ。人ならざる者の気配が、ね」

こうなるともう間違いない。彼女は媛子に気がついていて。緊張が身体を走った。

すると、不敵な笑みを浮かべながら、じりじりと彼女が歩み寄ってきた。何をされるか分からない恐怖が指先から震えになる。

「　　と」

その瞬間、紐が解けたように春臣の体が自由になった。どうやら、金縛りの効果が切れたようだ。数歩後ずさった。

これは好機。

逃げるなら今だ。

しかし、そう思い、振り返りつつ背後に走ろうとしたときだった。

ザリツ。

何か硬い物を踏み、春臣は足を滑らせた。

「え？」

ガクンと、体がバランスを失う。

首を向けた先、視界の端で捉えたのは、先ほどゆずりが放り投げた荷物から転がってきた、お守りらしき木の板だった。

春臣の足が見事その上に乗っかっている。

不覚だった。よりによってこんな場所に落ちていたとは。

「くっ」

そう考えているうちにも、ぐんぐんと地面が近づいている。

まずい、まずい、まずい。

ぐるぐると思考が回転するが、いまさら打開策などあるわけが無い。

と、

「春臣！」

声が響いた。

媛子が、叫んだのか？ よく分からない。

しかし、耳元でその声が聞こえ、春臣の防衛本能がぎりぎりで作動した。

咄嗟に手を地面につけたのだ。  
しかしその瞬間、

「！」

妙な感覚に襲われた。

ぐっと肋骨を上から押さえ込まれ、両足が引っ張られたような、  
奇妙な感覚だ。

視界が青紫の中に覆われに、見たことのない文字が、浮かぶ。  
— つ、二つ、いや、幾百もの文字だ。

そして、  
そして、

白い閃光の炸裂の後で、後頭部に焼け付くような痛みが走った。

「ああっ！！」

肺が押しつぶされるような感覚。

「少年！」

再びの叫び。これは、誰の声だ？

わから、な、い……。

確認することなく、春臣の意識は消滅する。

何が起った。

時雨川ゆずりは混乱した。

目の前の少年が足を滑らし、仰向けに倒れた時のこと。

彼が身を守ろうと地面に手をついた瞬間、いきなり火花のようなものが飛び散り、

「バリッ！」

と何かが破れたような、奇妙な音が聞こえたのだ。

それは決して甲高いわけでもないのに、思わず耳を塞ぎたくなる、ガラスを引っかいた時のような寒気を感じさせる音だった。

これはどういうことだ？

ポケットの中身についてさらに追求しようとしていた言葉が、喉奥にことごとく引っ込んでしまう。

春臣はそのまま一言も発することなく、気絶してしまったのか、身動きもせず両手を投げ出し、倒れている。

一瞬、状況が分からず唖然と立ち尽くすが、すぐに我に戻り、ゆずりは春臣に駆け寄った。

「少年、おい、少年！」

ゆずりは片膝をつく、頬を叩きながら春臣の上半身を抱き起す。しかし、彼はすっかり気を失っているようで、首がぐたりと垂れた。

「くそ、一体何が」

予想外の事態に、ゆずりはすぐさま状況を確認する。

彼の傍に散らばっているのは、自分の荷物からばら撒かれた無数のお守りだ。

その中の何かに、少年の体が反応をしたのだろうか？ いや、お

かしい。

普通の人間が触れて、このように過剰な反応を引き起こすような危険なものを、ゆずりは持っていないはずだった。

すると、

「春臣！」

いきなり第三者の声が聞こえ、ゆずりは驚いて目を向ける。

すると、少年のポケットから何者かが顔を出していた。目にまぶ飛び込んできたのは、その鮮やかな緋色の髪色。

ゆずりははっとする。

小柄な少女が、もぞもぞとポケットから這い出し、春臣の顔をのぞきこんでいるのだ。

「あ、あんた」

声をかけると、彼女はびくりと身体を震わせ、苦々しげにゆずりを見上げると、

「わしは故あってこの男に世話になっておるもの、神の世から来た者じゃ」

と威嚇気味にそう言った。

「女、時雨川と言ったか？ こつ言えはお主には通じるじやろつ？」

「……神の世の……」

「ともかく、今は詳しい説明は後にする。春臣に何が起ったのじや？」

ゆずりは彼女の正体に興味を持ったが、彼女の言う通り、今はそんな場合ではない。

「……あ、ああ」

数度頷く。

「少年は特に外傷を受けたようには見えない。ただ気を失っただけだろう。しかし、今の閃光の正体は、おそらくだが、彼の体になんらかの異常な神的反応があったのだと思う」

「ふ、ふむ」

「状況的には、私のお守りに反応したと見るのが妥当だが、普通の人間が、そんなものに反応して気を失うとは思えない」

「となると、何じゃ？」

少女は明らかに焦っている様子で急かす。気を失っている少年のことが心配でならないのだろう。

「それを今調べてる……と」

「どうした？」

「こ、これは」

春臣の後頭部に目が留まった。

「嘘だろ、どうして、こんな」

「何じゃ？」

歪な黒い模様で縁取られた長方形の札が春臣の首にぴったりと張り付いていたのである。

「こいつは、古い呪符だ！」

「呪符、じゃと？」

少女が怪訝そうに眉をひそめる。ゆずりはすぐに頷いた。

呪符とは、悪鬼や悪魔といった邪悪な力から人々を守ったり、幸福、幸運を運んでくれる道具で、昔から人々の中で大切にされてきた物である。

そして、本来それは人間にとって害になるようなものではなく、心強い助けとなり得る重要なアイテムで、ゆずりが商売として扱っているお守り、護符もその仲間に属すると言えた。

しかし、今、ゆずりが目になっているこの呪符は少々性質が違った。

「……どうやら、こいつには特殊な仕掛けがしてあるな」

「仕掛け？ う、何じゃ、このおぞましい気は」

小人の少女にもその正体が分かったようだ。

「これは……穢れか？」

「ああ、どうやらな」

ゆずりは不快な気持ちになり、眉間を押さえる。

「おそらくこの呪符にはあらかじめ、悪しき魂のようなものが封じられていた。それを他人が触ると、封印が解かれ、乗り移るように仕組まれていたみたいだな。しかし……どうしてこんなものが、こんな場所に」

「お前、本当に心当たりはないのか！」

少女は冷静さを失っているようで、語気を強めて追求してくる。ゆずりは力なく首を振った。

「あいにく時雨川は、こんな物騒なものは扱わない性質たちでね。こんな、まるで呪いを具現化したかのような、気持ちの悪いもの……」  
嫌な予感がし、汗が額を伝う。

「でも、どこかで紛れ込んだのか？」

いや、そんな馬鹿なことが……。

しかしその途端、ゆずりはあることに思い当たり、顔色を失う。

「ま、さか」

「どうしたのじゃー！」

ゆずりの中で過去の記憶がフラッシュバックしていた。

数日前、穢れに憑かれた老人とのやり取りの中で交わされた会話、行動。あの老人が、去り際に、ゆずりのお守りに『触れた』こと。そして、あの言葉。

『このわしに喧嘩を売ったこと、その内後悔することになるぞ』  
なるほどな。

ゆずりには合点がいった。

この呪符を仕込んだのは……。

「あの、くそじじいかー！」



## 79 目覚めない少年（前書き）

どうも、ヒロユキです。

ちよつと更新が遅れてしまいましたね。今まで約五日間隔だったの  
で、そのペースが乱れてしまい、少しショックです（もし、「まだ  
かー？」と待っていた方がいらっしやいましたらすいません）。  
こういう時、週刊雑誌の漫画家さんとかって締め切り大変だよな  
って思います。

## 79 目覚めない少年

目を瞑り、意識を集中させながら、ゆずりは正座をしていた。横たわった春臣の後頭部にある呪符を、優しく持ち上げるように触れつつ、何事かを呟いている。

「……っと、これくらいでいいか」

そしてしばらくすると、肩ひざを立て、手の甲で額の汗を拭った。作業を開始して、十分ほど。

ようやくそれで春臣の呪符に組み込まれていた妨害の力を分解することが出来たのである。

ふう、これでやっと一息つけるな。

安堵の思いでゆずりは足を崩す。

それはゆずりにとって、別段難儀な作業とも言えないものだったが、人の命がかかっているだけあって、やはり気を抜けるものではなかった。はふん、と緊張が押し固められたようなため息をつく。

目の前の少年は未だ意識の闇の中で、目を覚ます気配はない。おそらく、当分の間は目覚めないだろうというのが、ゆずりの見解だった。

すると、肩に乗り、固唾を吞んでゆずりの動きを見ていた小さな少女が訊いてきた。

「お主、これで春臣は助かるのじゃな？」

その深刻そうな青い顔からは、不安の気配を色濃く感じ取ることが出来る。

ゆずりは首を振った。

「いや、今は応急処置を済ませただけだ。私のお守りを上から貼り付けて、呪符の効果を一先ず封じ込めただけに過ぎない」

「ふ、ふむ。ではどうする？」

「そうだね、この呪符を安全に剥がし取るには、さらにこの呪符の性質をよく調べる必要があるな」

「しかし、それでは時間がかかるのではないのか？」

少女は不満そうだ。

「まあ、そうだろう。でもだからといって呪符を強引に剥ぎ取ってしまうと、少年の魂まで一緒に抜き取られてしまいかねない。どういう意味か分かるだろ？ ゆえに、今は落ち着いて対処するべきだ」

ゆずりは明らかに焦っている彼女を宥めるように言う。呪符や護符に関してはプロフェッショナルであるゆずりから見れば、現時点で何よりも優先されるべきなのはミスを犯さないための慎重さであり、リスクを負った性急さではないのだ。

その考えが伝わったのか、少女は春臣を見ながらゆっくりと頷いた。

「そうか。分かった。では、きちんとした手順を踏めば、春臣は助かるのか？」

その言葉には大いに頷く。

「もちろんさ。私はこれでもお守り商人。こんなかび臭い呪符の処理なんて、お茶の子さいさいだぜ」

すると、少女はようやくほっと胸を撫で下ろしたようで、強張っ

ていた表情を緩める。小さいせいもあってか、力の抜けた彼女は  
いふんと可愛らしく見えた。思わず、頬を突いてみたい衝動に駆ら  
れるが、とはいえ、今はそんな場合でもない。

ゆずりはパン、と一度手を叩くと、

「じゃあ一先ず、少年を安全な場所まで運ぼうか」

と提案する。

「安全な場所？」

「いつまでもこんな場所で少年を寝転がしておくわけにはいかない  
だろ？ 少年の家はどこだい？」

そう訊くと、

「ああ、それならば問題ない。わしが案内する」

と彼女は答えた。

だが、その後で、急に険しい目つきになって睨んでくる。

「それは良いが、お主。時雨川ゆずりよ」

「なんだい？」

「どんな客は知らんが、とんでもない土産をもらってきたものじゃ  
の」

どうやらそのことにはとことん呆れられていたようで、ゆずりは  
苦笑した。

「ハハハ、時雨川もまさかこんな嫌がらせをされるとは思っても  
なかったよ」

「笑い事ではないぞ！」

すると、少女は可愛らしいリスが急に牙をむいたような表情で怒鳴った。

「春臣はその側杖を食ったのじゃ！」

「あ、ああ。すまない」

ぴしゃりと言われ、ゆずりは自身の軽率さを反省する。

「ちよっと不謹慎だったよ」

「むづ……」

「元々、この呪符は私を狙った物だということは明白だよ。それが、まさか何の関係もない少年がとばかりを食らうことになるなんてね。本当に申し訳ない」

「……お主、それほどまでに客を怒らせたのか？」

「ああ、まあな」

言いながら鬱蒼と木々が茂る暗い林の方へ目を向けてしまい、すぐに何か寒気のようなものを感じて目を伏せる。数日前の老人の穢れ感覚が思い出されて、記憶の奥にそれを押しやったのだ。

「得体の知れない気持ち悪い奴だったし、妙なことを聞いてきたからさ。ちよっと、がつんと言ってやったのさ」

「妙なこと？」

「神の力を使役できるような代物はないかって」

これには少女も驚いたようで、

「むむ、そんなことを考える人間がおるとは！」

と驚嘆した。

「そうだな。昔であればそんな恐れ多いことを考える人間もいなかっただろう。神と人との地位の差は、天と地よりも違いがあったんだ。神の前で人は誰もがひれ伏すのが道理で、その絶対的な力には誰も文句などはなかった。でも、時代も変わったってことだよな」

「……」

「神々の力は衰え、人々の信仰心は陽が差し込んだ路面の水たまりのように、急激に干からびていつている。今の子供たちにとって、神は敬うべき存在というより、一種のキャラクター的存在と言った方が正しいのかもしれない。かつての繁栄から思えば、神々にとっては物悲しい時代さ……」

喋りながら、ゆずりは肩に乗っている少女が切ない顔で俯いているのを見た。その様子があまりにも深刻そうで、ゆずりは思わず言葉に詰まり、話を変える。

「……おそらく、あの客は私が呪符に取り付かれ、どうしようもなくなつて泣きついてくると思ったんだろう。そして、呪符を取り除くことと引き換えに、私が知っている情報を聞きだそうとした。きつとな」

「……傍若無人とはこのことじゃな。自らの利益のために、いとも簡単に他人を苦しめようとする」

「ああ、全くだ」

ゆずりは横たわっているじつと春臣を見、しばらくしてゆっくりと立ち上がると、辺りに散らばっていたお守りを荷物の中に収め始めた。そして、ようやくその作業が終わったところで、お手製の神の木から作ったお守りの板に再び何かを呟いた後、傍の茂みの辺り

にそれをさっくりと立てる。さらに、その茂みに重たそうな荷物を隠した。

「さて、こうしておけば、後から取りに来たときにすぐに分かる、と」

お守りに特別な印をつけ、自分だけが感知できるようにしておいたのである。

「準備は整ったか？」

少女が訊く。

「ああ、後は少年を時雨川が背負っていけばいいんだが……ええと、少女」

「わしは、緋桐乃夜叉媛じゃ」

誇らしげに彼女は胸を張る。

「そうか、夜叉媛さん。肩に乗られると移動に不便だ。あんたはここに入ってくれ」

と、媛子の服を指でつまみ、装束の布が交わる胸元にぼすんと入れた。ひゃ、という小さな悲鳴が聞こえ、すぐに、彼女がそこから顔を出す。

「どうだい。座り心地は？」

「も、問題ない」

「そりゃあよかった」

「しかし」

すると、彼女はなにやらゆずりの胸元でもぞもぞと動き、

「お主。わしよりずいぶんと、お、大きいのう」

と頬を赤らめ、ぼそりと言った。

「あん、何がさ」

「う……いや、こつちの話じゃ。気にするでない」

ゆずりは小首を傾げたが、まあ、さして追求したいほどのことでもない。

「ともかく、今は一刻も早く春臣を助けてくれ」

「そうだな。全部こつちの責任だし」

「もう一度聞くが、春臣は本当に大丈夫なんじゃな？」

「まあ、心配しなさんな。なんととってもプロがついてるんだから  
な」

自信満々に言って、少年を抱えようと、ゆずりは腰をかかめる。

そして、今は気を失っている、少年の静かな表情を見た。

先ほど、

『あんた、何者だよ』

と、凜々しい顔つきで言い放った彼だったが、現在はその荒々しい敵意もなく、歳相応のどこか幼い顔をしていた。

自分のような者と対峙しても、逃げなかった、な。

底知れぬ勇気のある少年、そして、どこか不思議さも兼ね備えているようにもゆずりには思えた。



いったい、彼とこの緋桐乃夜叉媛に何が起こっているのか、実に興味深い事である。

さて、これからじっくりと聞かせてもらおうか。

そう心中でひとりごち、ゆずりは春臣の体を軽々と持ち上げる。腕を引つ張り首の前に回し、背中に寄りかからせると、

「よっと」

何とか背負うことに成功したと、

その時だった。

「うん？」

ゆずりはまるで体が一瞬浮遊するような、妙な重力を感じた気がした。地面に引つ張られるのとは違う……背後の方向からである。

何だ？

少年、か？

まるで、魂を引つ張られているような……。

瞬間、ゆずりの中にある予感が生まれた。

「！」

すると、ゆずりの異変に気がついたのか、少女が問いかけてくる。

「どっしたのじゃ？」

「いや、それが……」

言いよどみ、

「少し考えて、後から話すよ」

と答える。

「う、うむ……そうか」

彼女は明らかに納得していないようだったが、とりあえず頷いて前を向いてくれた。

場に沈黙が下り、ゆずりが一步一步進むたびに聞こえる鈴の音と、背中の春臣の呼吸音だけが規則的に耳に届いている。その度に、――筋ずつ嫌な汗が流れるようだった。

この少年、まさか。

まさか……な。

ゆずりは自分の予感が当たらないようにと祈りつつ、足早に歩いていった。

80 少年、影を宿す 1 (前書き)

どうも、お久しぶりです。ヒロユキです。

更新が遅くなり、申し訳ありませんでした。もっと早くしたかったのですが、ちょっとやむを得ない事情がありました……。。

今度からは出来るだけこんなことがないようにしたいと思います。

朝の訪れを感じ、春臣が目を開けると、そこにはいつもの自宅の天井があつた。

外からは途切れない小雨の音が聞こえていて、窓のカーテンが、湿った空気と絡まるように僅かに揺れていた。

「なんだか、よく眠つたみたいだな」

と、あくびと背伸びをしながら、身体を起こす。どこか、寂しげな六月の朝である。

さて、今日の朝飯は何を作るか。

確か、昨日買ってきた食材がたっぷりあるはずだから、少し贅沢なものを食べられるはずだ。

そんなことを考えながら、かかっていた布団をどけ、立ち上がるうとして、そこで春臣は気がついた。

なぜか、体が上手く動かないのである。

「あれ？」

両手両足に軽い痺れを感じ、感覚が鈍くなっている。

神経が情報の伝達をサポートしているように、動きが緩慢で、ぎこちない。

妙だ、と思った。

脳は十分すぎるほどに睡眠の名残を感じているが、それとは裏腹に、春臣の体力は大きく消耗しているようなのだ。

いったいどうしてこんな風に感じるのだろう。昨日はいつも通り

に眠ったよな。

しかし、思い出そうとして、記憶のあるべき場所にそれがなく、  
とに春臣は気がつく。

何だ？ 昨日はこの場所で眠った気がしない。

違う、俺は、どこか別の場所で。

そこまで考え、春臣は全てを思い出した。

「お、俺は……」

脳裏に浮かんだのは、あの白い閃光。

そっだ。

自分は、あの林道で時雨川ゆずりから逃げようとして転んで、  
気を失って、そして、そして……。

春臣は頭を押さえる。

どうして、ここへ？

腑に落ちない。

最後の記憶が何らかの思い違いでなければ、その場合、春臣はあ  
の林道で転んだままの格好で目覚めなければならぬのではないだ  
ろうか。いや、あの時雨川ゆずりに捕まってしまって、見知らぬ場  
所で目覚めるといふ可能性もある。しかしいずれにせよ、こんな風  
に平穩無事に自宅で目が覚めるなどということはありえないのだ。  
これを不自然といわずに何と云うだろう。

と、

「春、臣……」

りと鳴るような少女の声が聞こえた。

「え？」

「目が、目が覚めたのか？」

「媛子！」

目を向けると、枕のすぐ傍にいつもの神様少女の姿があった。彼女はどこかやつれたような青い顔をしていたが、その瞳は輝いていて、なぜか安堵しているようだった。

「よかった、きちんと目覚めたようじゃな」

「きちんと、って？」

「いまいち分からない。」

「そうじゃ。全く心配させおって、お主は二日間も眠っておったのだぞ」

「ふ、二日間だって!？」

その言葉に眠気が吹き飛んだ。

「うむ。覚えておるか？ お主はあの林道で転んで気を失い、それ以来眠っておったのじゃ」

彼女の言葉をきっかけに記憶が再び鮮明に蘇る。

不気味に笑うゆずり。媛子の警告。双子の少年。土砂崩れ。

「やっぱり、そう、なのか」

それら全てを飲み込むように春臣は言う。

しかし、あのときから自分は二日間も眠っていたなどと、すぐに飲み込めるものではない。いったいあの時、自分の体に何が起こったというのだろう。それに、この体の不調の正体は何だ？

混乱したまま、額を押さえつつ、立ち上がるうとする。

と、媛子がそれを制した。

「まだ無理をするな。お主の体はまだ全快の状態ではないのじゃ」「え？」

確かに、体が上手く動かない気がするが、

「もしかして俺、転んだ時に怪我でもしたのか？」

すると、媛子は不安そうに首を振った。

「いや、そうではない。そ、そうではなく……」

「何だよ」

と、そこでいきなり、ボタン、と無遠慮にドアが開き、続けざまに元気な女性の声が聞こえた。

「起きたか？ 榊少年」

振り返って、そのあまりにも意外な人物の出現に春臣は二の句が継げなくなる。掛け値なしに心臓が誤作動を起こすかと思ったほどだ。何を隠そう、あの蒼髪のお守り商人、時雨川ゆずりその人の姿が目の前にあっただのである。春臣は瞠目し、声にならない声を出す。

彼女はというと、まるでここにおいてさも当然のような顔で春臣を見下ろして立っていた。

「あ、あ、あんだ」

そして春臣が指差すと、「イツエース！」と調子よく彼女は敬礼のようなポーズを取り、

「時雨川ゆずり、さんじょー！　ってなわけさ」

とウインクをきめた。

「ど、どうしてあんだがここに！？」

「春臣、落ち着け。倒れたお主を手当てし、ここまで運んできてくれたのがあいつなのじゃ」

「え？」

言われて気がつく。確かに、倒れて意識を失っていた自分を、小さな媛子が背負ってここまで帰ってくるわけにはいかないだろう。彼女がそれをしてくれたというのなら納得がいくが、しかし

「本当に？」

あのいかにも怪しげな雰囲気からは、春臣を助けてくれるなどは、俄かには信じがたい話だ。

「……………！　っていうか」

さらに、あることを思い出す。

「そもそも媛子、お前姿を見せてて大丈夫なのか？　確かこいつはお前のことを狙ってたんじゃない？」



だが、彼女はそれをすぐに否定する。

「春臣、そうではない」

「はい？」

「あの時は説明してやらなかったが、こやつはあの時わしらに敵意があつたわけではないのじゃ」

「そ、そうなのか？」

「ああ、わしの説明不足じゃった。済まぬ」

意外な話だった。しかし、媛子は嘘を言っているようには見えな  
い。

それによく考えてみれば、彼女はその時、ゆずりが敵であるとは  
一言も言っていないのだ。

だとすると、自分は大きな勘違いをしているのだろうか。

春臣の中に新たな考えが浮かんだ。

彼女は悪人ではない。だからこそ、媛子を傷つけることもなく、  
意識を失った自分を助けてくれたのだ。だとすれば、辻褄は合う。

だが、そうになると、自分は彼女に対してずいぶん失礼なことをし  
ているのではないのか？

春臣は、あの小道でゆずりに怒鳴ったことを思い出す。

いきなりあんな風に敵意をむき出しにしてしまったのはまずかつ  
たかもしれない。これは一度謝るべきだろうか。ああ、きっとそれ  
がいい。

そう思い、正面のゆずりを見て、春臣は口を開きかけて啞然とし  
た。

彼女は口に食パンをくわえながら、両手には牛乳やソーセージ、

りんごやかまぼこなど様々な食物を持っていたのだ。

「お、おい、それって!」

声を荒げる。

そう、それはどう考えても春臣が数日前に購入し、冷蔵庫に入れていたものだったのだ。

「ああ、お腹減ってたから、つい」

彼女は飄々と言う。その発言に、春臣の中で謝罪の気持ちは一瞬にして霧散した。

「知ってますか？ それは犯罪です」

「固いこと言うなよお」

「一人暮らしの学生にとって、食物を強奪されることはすなわち死を意味する」

ただでさえ、一人分の生活費で媛子と暮らし、困窮しているのだ。勝手に家に上がりこんできた正体不明の人物に食い荒らされるだけの食料は無い。言語道断だ。

春臣はぎろりと彼女を睨んだ。しかし、彼女は全く意に介さないようで、畳の上に腰を据えると、人差し指を立てた。

「そんなことよりさあ、大事な話があんだけど」

「はい？」

「いやあ、少年の首元」

言われて気になり、右手で触れる。すると、そこに感じたのは紙の感触だった。

「なんだこりゃ？」

「気づいた？ いやあ、ちょっとした事故でねえ」

食パンを頬張りつつ、彼女は話すと、媛子の怒りの声が飛んだ。

「ちょっとした事故どころの話ではない。きちんと春臣に説明してやるのじゃー！」

「あん？ どういうことなんだ？ これ、はがせないのか？」

訊くと、彼女はこほんと重々しく咳払いをした後で、食べ物を平らげつつも、説明を開始した。

8 1 少年、影を宿す 2

「穢<sup>けが</sup>れの呪符、ですか？」

ゆずりが注いでくれた牛乳を飲み干しながら、春臣は聞き返した。いつもならば、朝に飲むそれは、気持ちを落ち着けてくれるものだが、数日前に自分の身に起こったトラブルを聞いている今は、その効果も半減しているようだった。喉の奥がまだどこか乾いている気がする。

「そう。穢<sup>けが</sup>れだよ穢<sup>けが</sup>れ。低濃度のものでは、さほど人体に影響はないがね。その呪符のように高濃度なものと、さすがにいつも通りの生活が送れるものじゃない」

彼女は言いながら、クロワッサンにハムとレタスをはさんだものをおいしそうに頬張っている。その様子は見るからに緊張感が皆無だったが、春臣にしてみれば彼女の話は大問題だった。

「そんなものが、俺の体に……」

まるで体内を得体の知れない生き物が這い回っているようで、とても恐ろしい。首筋に嫌な汗が流れた。

「それは……具体的にどんなことが起こるんです？」

返答が怖かったが、とにかく聞いてみる。

「ああ、それは単純だよ」

すると、彼女はあっけらかんと答えた。

「穢れつてのは目に見えないケモノみたいなものでね。いつも腹を空かせて、他者の体に取り憑くと宿主の魂を根こそぎ喰うんだ。それで、喰われた魂の主は、心がなくなるわけだからね、生きながらにしての死を迎えることになる。周囲に対して何の反応もなく、自ら生きようという意志もなくなる。穢れに自分の内側を八つ裂きにされ続け、ただそこにいて、同時に、そこにいないような存在になる。誰かの後に引っ付いているだけの影みたいな感じかな、まあ、それだけだね」

それだけって……。

正直、春臣にしてみれば、失神ものだ。それは、要するに人間という入れ物だけが残ったただの物になるということではないだろうか？

「それって……とんでもない話じゃ」

「だね。そこまでいくと、もはや生きていない、死んでいると言ってもいいね」

と、レタスを歯で千切る。

「けれど、安心しな。それは呪符の仕掛けが正常に作動しているときの話しさ。心配しなくてもその機能は今、停止しているよ」

「停止？」

「そ、だから問題なし」

にやりと笑う彼女に春臣はぐたりと肩を下ろす。ということとは、事は急を要する状況ではないらしい。

まあ、それもそうか。

媛子もゆずりも慌てていないところみれば、最初からそんなことは明白だったのだ。

すると、気持ちに余裕が出来たのか、春臣は次第に頭の中がすっきりし、明晰になった気がした。それから彼女がこれまでの経緯をさらに詳しく話してくれていたのだが、それでようやく事態の全貌が飲み込めた。

なるほど、とゆで卵にかぶりついていると、ゆずりが物珍しそうに春臣を見ていることに気がついた。どうしたのかと思っていると、彼女が口を開く。

「意外だなあ」

「何がですか？」

「きちんと話を信じてくれるんだなああって思ってたさ。呪符だの穢れだのって、胡散臭い話だったのに」

それに対し春臣は、ちらりと媛子を見てから頷いた。

「まあ、不思議な話で驚くなんてのは慣れてますし、それを否定するとなると、これまでのことを全部否定しなくちゃいけませんから」

「へえ……ずいぶんと波乱万丈な人生を歩んでたんだねえ」

若いのに感心感心、と彼女は調子よく手を叩く。

「ふうん。でもごめんねえ、こんなことになるなんて、まさかまさかの想定外でさ」

春臣は違和感のある首もとの呪符を触りながら、ゆずりを見てい

る。そんな厄介な事態に巻き込まれるとは確かに想定外ではあるが、いまさらそれに文句を言ったところで、事態が好転するわけでもないだろう。

過ぎたことに不毛な口げんかをしたところで、一向に状況打開の策は見出せないのだ。さすがに春臣にもそれくらいは分かる。だからこそ、怒っていないことを示すために彼女に向かって軽く笑った。

「もういいですよ。どういった事情なのかは知りませんが、向こうから仕掛けてきたことなんでしょう?」

「そうなんだよ。聞いてくれる? おっそろしい客だよ」

と、彼女が身を乗り出してくる。

「で、まあそれはさておき。この呪符のことですけど」

話がそれそうなことを察知して、春臣は話を戻した。

「現在は問題がないとして、具体的に呪符を剥がす方法はあるんですか?」

ああ、そのこと、とゆずり。

「もちろんさ。このお守りの専門家、時雨川ゆずりがいるんだから、大船に乗った積もりでいてよ」

自信満々に胸を叩く。

大船は大船でも泥舟じゃないだろうな。とは、春臣が胸中で思ったことだ。

丁寧に状況を説明し、自分たちにも協力的なところから見て、やはり悪い人間ではないようだが、いかんせん、やる気があるのかな

いのか判断に困るちゃんぽらん態度が、不安を煽るのだ。

「疑ってるかい？」

すると、彼女は春臣の胸中を看破したのかそう訊いてきた。

「ええ、少し」

「大丈夫大丈夫、安心しな。君の安全は保証するから。ただし、少しばかり時間がかかると思うけれどね」

と、そこで彼女は含みのあるような言い方をしたので、春臣は妙に思って彼女を向いた。見ると、媛子とゆずりが意味ありげに目配せをしている。春臣はそれを見逃さなかった。

「時間が？」

「事情があるんだよ」

少しの沈黙の後、春臣はためらいながら口を開く。

「……その事情とやらを話してもらえませんか？　もしかして、俺に何か問題があるんじゃないんですか」

ゆずりがヒュー、と口笛を鳴らした。

「少年は勘が鋭いなあ。まあ、どちらにしても話すつもりだったし、説明するよ」

ゆずりが正座に座りなおす。春臣はただならぬ雰囲気を感じて、体を強張らせた。まるでガンを告知される直前の患者の気持ちだった。



「僕が、何なんです？」

すると、意外にも口を開いたのは、媛子だった。

「覚えておるか、春臣」

「何を？」

彼女の方に目を向ける。

「わしがこの世に来た夜のことじゃ」

春臣はすぐに脳内で記憶を呼び覚ます。数ヶ月前のことだ。自分が神棚に祈り、奇妙な感覚に陥り、意識を失ったあの夜のことである。

すべての始まりとなったあの印象的な出来事は、忘れようにも忘れられない。

「あ、ああ。もちろん。いろんな偶然が重なって、媛子がこっちに来たんだよな」

「うむ。じゃが実はその偶然に、もう一つ、お主に関することが含まれていたのじゃ」

彼女が眉間に皺を寄せ、真剣な顔つきなる。

「はい？」

「時雨川がお主を連れてここに帰るときに申ししていたことで、今回明白になったのじゃが……実は、お主の体は『特別な性質』があるらしい」

「特別な性質？」

初耳だ。

「重要そうだから、その時の話を彼女から聞いたんだけどさ」

すると、ゆずりが口元の周りのパンくずを払いながら言葉を挟んできた。

「少年はねえ、いわば、神の力のような、人智を超えた、目には見えない超自然的な力を引き寄せてしまうことがあるのさ」

「は？」

春臣は聞き返す。

唐突な話で、話の整理が間に合わなかった。

「つまり、少年の中には先天的に力を引きつける磁石のようなものが内蔵されていて、どうやらそれがその時、この神の力を持つ夜叉媛ちゃんを呼び寄せてしまう原因になってたってことだよね」

春臣は絶句する。

いかにも簡単そうに彼女は言うが、それは大変なことではないだろうか。少なくとも春臣は自分が超能力を使えるなどと思ったことはない。

「い、いまいち実感がありませんが」

と、おどおどと訊ねると、

「そらあね。その力は少年、君が意識して使ってるわけじゃないから。きつと夜叉媛ちゃんの時は周囲の状況に呼応して、たまたま発

動しちゃったんだろうね」

「無意識に、ってことですか」

こくん、と彼女は頷く。

「残念ながら」

「……」

しばらく春臣は再び言葉を失った。

久しぶりに拳の中に冷たい汗が滲んだのである。

あの日のことはもう整理をつけたつもりでいたが、さすがにあの上、自分に原因があったという事実は、それなりにショックだった。

しかし、今はそんなことでいちいち落ち込んでいるわけにもいかない。春臣には彼女の話がいまいち腑に落ちないことがある。

「ですが、そのことと、今回のことに何の関係が？」

この話の流れでいったい何が言いたいのか春臣にはよく分からない。

「いい質問だね」

彼女は指を鳴らす。

「実はね、君のその性質というのは、まことに厄介なことに両極の性質を持つんだ」

「両極？」

「そう、プラスとマイナス、S極とN極、光と影、水と油、月とすっぽん、蚊と蚊取り線香のように、この世には対極に位置するもの

があるだろうか？」

頷きながら、最後の辺りは少し違つたるとよっぽど突っ込んでやりたかつたがそこは抑える。彼女は気がついていないのか、構わず続けた。

「それでね、それは神の力にも当然該当し、君はその対極に位置するものまで引き寄せてしまう力があるってことなんだ。それが何か分かるかい？」

「え、ええと……」

自分に聞いてきたということは、これまでの話にヒントがあるということだろうか。春臣は考える。

神の力と対極に位置するもの。つまり、神の力のように目に見えず、それでも周囲に影響を与える力と思えばいいのだろうか。

そして、そこまで考えて、はたと思い当たり、春臣は後頭部の呪符を思わず掴んだ。

「！」

「分かつたかい？」

お守り商人の目が怪しく光る。

「神のような神聖で汚されざる清浄な力と逆の力、くすみ澱んだ負のエネルギーである、『穢れ』さ」

「ということとは、つまり」

春臣は穢れの力もその体にひきつけてしまうということになる。

「そう、この呪符を剥がすことに一番抵抗しているのは、なにより

も君自身、といふことだよ」

そう言って時雨川ゆずりは唇を舌でぺろりと舐めた。

## 82 媛子の決意

朝食が済むと、時雨川ゆずりは作業があると言い残し、昼食分の食料を勝手にまとめ、さつさと部屋を出て行った。何でも、呪符の力を完全に制御できるだけの強力な護符が必要だということで、近くの森に向かったようだった。

その作業には時間がかかるらしく、正確な日数を断定はできないが、春臣を呪符から開放できるのはそれが完成するのを待って、ということになるのだそうだ。

詳しい話を春臣は知らない。しかし、そこは専門家であるところの彼女に任せたほうがいいと思っていた。そもそも護符だの呪符だのということにまるっきり知識のない春臣としては口出しすることは出来ない。一方で、神様である媛子が黙っているのだから、対処法として問題はないのだろうとも考えていた。

ゆずりがいなくなってしまうため、部屋はいつものように媛子と春臣の二人だけになってしまっている。

朝食を食べ終わった後は、特に何をするでもなかった。気だるい眠りの余韻に浸りつつ、二度寝をするでもなく、春臣は布団の上に寝転がり、媛子は媛子で淹れたばかりのお茶を啜っている。

外は六月特有のしっとりとした小雨がさわさわと降り続いており、動き出すことにためらわせるような陰気な空気が漂っていた。

加えて、春臣にしてみれば先ほどの呪符の話もあり、憂鬱な気持ちに拍車がかかっている。

天井を見上げてながら、先ほどのゆずりの言葉を思い出している。

超自然的な力をひきつけてしまう性質ねえ。

心の中で呟きつつ、掌を明かりにかざしてみた。

指の隙間からこぼれる光と、

自らの掌から落ちる影。

対照的な、白と黒。

『君のその性質というのは、まことに厄介なことに両極の性質を持つんだ』

脳内に響く、彼女の言葉。

はぶん、と春臣は重たいため息をつく。

全く、つくづく奇怪な運命に翻弄されているな、俺は。

今まではそんなこと、全く知らずに過ごしてきたというのに、普通の人間だと思っていたのに、いきなりこんな事実を突きつけられるとは思ってもみなかった。

かといって、彼女たちが言うその性質がどんなものであるのか、自分では上手く実感できていないため、ただ、現実味のない曖昧な不安感が、もやもやと霧のように春臣の周囲を覆っているような気がしている。

穢れをひきつけている。

彼女たちは言った。

そのために、自分に張り付いてる呪符は体に対する拘束を強めているのだ。

自分のことなのに、どうすることも出来ないのは歯がゆい。自身の深い暗闇の淵に潜む大いなる影の存在をひしひしと感じる気がした。

「春臣、大丈夫か？」

急に声がしたので振り向くと、湯のみのお茶をストローで吸っている媛子だった。その顔色はまだどこか悪い。おそらく自分が二日間眠っている間にいろいろと心配し、ろくに眠っていないのかもしれないなかった。

「……さっきからずっと気が抜けておるが」  
「うん？ 問題ないよ」

春臣は彼女を心配させまいと首を振る。

「少し寝ぼけているだけさ」  
「そうか、ならばいいんじゃないか……」

彼女が言葉を途切れさせると、場に嫌な沈黙が流れた。少々気まずい。

春臣は彼女に気を遣わせまいと慌てて代わりの話題を探す。

「あ、そうだ、聞きたいことがあるんだが」  
「何じゃ？」

彼女が再びこちらを向いた。

「ええと、あの時雨川ゆずりって、結局、何者なんだ？」  
「うっ？」

「ほら、自分じゃただのお守り商人だとか言っていたが、まさかそれだけじゃないだろう？ 媛子のことを知っているとなると、神の世のことも当然のことながら把握してるってことだよな」



少なくとも一般人では、そんなことを知っているととは思えない。瀬戸さつきのように巫女ならば納得も出来るが、彼女は別に巫女というわけではないのだらう。

媛子はというと、少し質問の返答に困ったような表情をして、口を動かす。

「そうじゃな。あやつは、少々特別な存在というところじゃな」「  
「やっぱり」

「ふむ、平たく言えば、か、神の世の関係者とも言えはよいかのう」

と言つて、それっきり口を閉ざした。その後には説明は続かない。春臣は不思議に思った。

「それだけ？ 何だよ、ずいぶん大雑把な言い方だな。もっと詳しく説明してくれないのか？ 媛子は全部知ってるんだらう？ あいつがどうして不思議な力を使えたりするのかも」

春臣はぐいと媛子に顔を寄せる。  
すると、彼女は、

「確かに、そうじゃが……すまん」

と目を逸らし、言葉を濁した。

「どうした、いきなり」

「じ、実は、そのことは、あまりペラペラと喋るわけには行かぬのじゃ」

「……へえ、そうなのか」

彼女の妙につつかえたような言い方が気になったが、春臣はとりあえず了解した。

納得しているかと問われれば間違いなくノーだが、なんだか彼女のような女性は謎という言葉がしっくりくる気がするし、とりあえず媛子たちの仲間ということが分かっただけでも十分だと思えた。少なくとも敵ではない。警戒は解くことが出来そうだった。

それに、特にどうにかして詳しく知らなければならぬ必要性もなかった。

この場合、問題は彼女が呪符を剥がし、きちんと対処してくれるかどうかであり、彼女の正体など二の次なのだ。

それに彼女が例え、神であろうと悪魔であろうと天使であろうと、今の春臣にとすれば、そんなことは取るに足らない些細なことに見える。

これまでの奇想天外の体験がそう思わせるのか、どんな場合でも落ち着いて対処できる気がしていた。

「まあ、ちょっと興味があっただけだ。神の世にもいろいろ事情があるんだろうから、別に無理して答えてもらわなくてもいいよ」

「す、すまぬの」

「……」

ふつむ、と春臣は首を捻る。

さつきからずいぶんと腰の低い彼女だ。

とそれについて考えているとき、春臣は彼女の向こう側、点いているテレビの時刻を見て、はっとした。

「そうだ、大学に行かなくちゃ」

大事なことをすっかり失念していた。

「二日間眠ってたってことは、休日だったおとといはいいとしても、昨日は行ってないんだよな」

そう言っつて、立ち上がろうとして、体に奇妙なだるさを感じる。先ほど寝起きに感じたものと同種のものだった。どうしたことだ、と壁によりかかる。

すると、媛子があつと声を上げた。お茶を零したのかと振り返るが、どうやらそうではないようだった。

春臣を見上げて口をパクパクさせている。

「い、言い忘れておったことがある」  
「何を？」

とてつもなく不吉な空気を全身で感じる中、彼女が重々しく言葉を紡いだ。

「……実は、春臣。少々申しにくいが、お主の体は今、とても体力を消耗しやすくなっておる」

「はい？」

「いったいそれはどういうことだ？」

「ああ、それがのう、時雨川が言ったように、呪符の力は今抑えている状態なんじゃが、そのためのエネルギーが必要とかで、それをお主の体力から抽出しておるんじゃ」

体力から、抽出。

鳥肌が立つのを感じながら、彼女に問う。

「……それって、大丈夫なのか？」

「も、もちろん命に別状はないが、その、体がとても疲れやすくなっている。お主、体がいつもよりも重く感じておったりせんか？」

なるほど、と春臣は脱力しながら頷いた。それが先ほどからの気だるさの正体か。

「……激しい運動はするな、と？」

「いや、出来ぬ」

根本から否定された。

「そ、そうか、分かった。幸い今日大学では体を動かすことはないと思うから」

「いや」

すると、今度は彼女が申し訳なさそうに頬を引きつらせながら言う。

「……何がだよ」

「学校には行けん」

「へ？」

「じゃから、おぬしの体は疲れやすい。おそろくじゃが、一日まとも起きておれる時間は、そうじゃの、ざっと五時間ほどじゃ」

「じ、ご、ご、五時間!？」

胃袋がひっくり返るかと思った。

片手の指で収まりきるぞ。

「それ以外の時間はほぼ強制的な睡眠となるのう」

え、それじゃ、

「大学に行けねえじゃん！」

「うむ。それはわしがもう言った」

なぜか威張ったようにむんと顔を突き出す彼女。しかし、春臣としてはそんなことなどどうでもよく、立ちくらみにも似た、軽いパニックに陥っていた。

「ど、ど、どうすんだよ」

主に単位とか、単位とか、単位とか。

「どうするも何も、しばらくは仕方ないことじゃ」

彼女の言葉に春臣は眩暈を感じる。講義で聞いた数字や文字の羅列が頭の中を回遊し始めたようだった。それらがよってたかって春臣の精神を攻撃し始める。

頭が重くなってきた気がした。

「……ちょっと、吐き気してきた。散歩してくる」

「春臣！」

歩き出そうとすると、彼女の声が引き止めてくる。

「何だよ」

「じつとしておらぬとさらに体力を消耗して、起きておれる時間が短くなるぞ」

「ええ！ それじゃ家事も出来ないじゃん」

「じゃから、この部屋で極力じつとしておれ」

何を言っているのか。

それでは風邪もひいていないのに、病人レベルの行動可能範囲の狭さである。

春臣は絶句する。気長にゆずりが問題が解決するのを待っていていいと思っていられるような楽観視はもう出来なかった。

「おい、春臣」

しかし、彼女はそのことについては問題は無い、と小さな体で腕を組んだ。

何を言うのかと思えば、

「こづいつ時に、このわしがおるのじゃろ」

さっと降りる沈黙。

「おい、あからさまに目をそらすな、目を！」

そう言われても、というのが本心だった。

初めから彼女は戦力外であるということは明白な事実なのである。

「媛子が買い物に行けるってのか？」

「出前なら電話で取れるぞ。ほれ、特上寿司はどうじゃ？ これから毎日お祭りじゃの」

「俺んちの財政を破綻させる気が。寝言は寝て言え」

「ふふふ、今のは冗談じゃ。わしがきちんとやってみせるぞ。任せよ」

子供っぽくけらけらと笑う彼女。

しかし、彼女に頼むなど、春臣の選択肢にはなかった。

「まったく、どうするかな」

そうぼやいて頭を抱える。しかし、背後からはまだ媛子の声が聞こえていた。

「無視するでない、春臣。全てわしに任せよ」

「だから、もういいって」

「春臣、このわしがやると言っておる」

「あのなあ」

「わしにかかればこんなこと簡単な……」

しつこいな。そう思った春臣は、

「今考えてるから少し静かにしろよ!」

とぴしゃりと彼女の発言の跳ね除ける。

「あ……」

そのまま暗澹とした気持ちで春臣は座り込んだ。

さて、どうするか。

五時間しか起きていられないとはいえ、自分で大抵のことは何とかする必要がある。洗濯や掃除や勉強。春臣は眠っているからいいかもしれないが、媛子、さらに居座っているらしいゆずりには朝昼晩の食事がなければ困るだろう。

悶々としていると、まだ諦めていなかったのか、

「春臣！」

と媛子が声を荒げた。

「だから、無理だつて」

「それでもじゃ！」

しかし、春臣が言いかけた言葉を遮るようにさらに叫ぶ。

その凜然と響いた彼女の声に、春臣は思わず落としていた視線を彼女に戻した。彼女の予想もしていなかった気迫に驚いたのである。

「お主、わしは、お主と約束したじゃろうが！」

媛子の口調は怒ったように荒々しかった。春臣が渡したお守りを握り締め、まるで敵に立ち向かうような態度でこちらを見ていた。

「わしは、わしは、お主に恩があると云うた」

「あ……」

「そして、わしは、その恩をこれから返すのじゃと、そう宣言したではないか、この馬鹿者！　それがわしのこれからの使命なのじゃ。お主が床に伏しておる今、わしがその使命を果たさんでどうする」

その睨みとも思える強い彼女の眼差しに、春臣は口を噤む。なんと言つか、言い返す言葉が出なかったのである。

同時に、媛子と話した数日前の記憶が蘇ってくる。

恩返し、か。

春臣としてはそんなことをすっかり失念してただけに、彼女が今までそれを覚えていて、さらに実行に移そうとしていたことなど、全くの想定外だった。正直な話、恩返しをするなどただの時間稼ぎ、その場しのぎの口実で、大した意味など持ち得ない、と思っっている



部分もあつたのである。

しかし、こうして彼女の不退転の決意を目の当たりにすると、あの日の約束は確かに本物だったのだと、軽く思っていた自分が恥ずかしくなった。彼女は彼女で、必死に考え抜いて生きているのだ。

「そうか、そうだったよな」

温かな感動に浸りながら、春臣は言った。

小さな体の限界など、春臣が示すまでもなく、当の本人が一番分かっていることなはずだ。

その上で媛子は自分に代わって家事をすると無茶なこと口にしていく。今、彼女からは春臣の負担を少しでも減らし、頼りにされたという気持ち痛みほどに伝わってきていた。

その健気な意思を自分は無下にしようとしていたのかと思うと、春臣は自分にげんこつをお見舞いしてやりたくもなつた。

大きく一つ、ため息を吐き出した。

「分かったよ。俺の負けだ」

すると、彼女の顔が一気に華やかになった。

「ほ、本当か？」

「ああ、家のことを頼むぞ」

すると、彼女は自分の意見が受け入れられたのがよほどうれしかったのか、その場で飛び跳ね回った。

どうやら自分に頼りにされたことがとてもうれしかったらしい。春臣はその様子を見て笑った。

「よし、任せておけ。わしも十分お主の役に立つということを証明

してみせるぞ」

彼女は自信満々にそう言う。

「言っておくが、無茶だけはするなよ」

「それくらい分かっておる」

妙に子供っぽい彼女の仕草に一抹の不安を覚えながらも、春臣は再び布団に寝転がった。

何だか体が疲れてきたようである。会話をしただけですでに体力を消耗してしまったのかもしれない。しかし、特にそのことを不安には思わなかった。

その時には、媛子に任せておけば問題はないだろう、という気楽な気持ちになっていたのである。

苦笑しつつそう思って、そのまま目を閉じる。

そして、考えごとをする間もなく、春臣は眠りに落ちていった。

### 83 家主のいぬ間に 1

これは何の冗談だよ。

暮野木犀は思った。

きつと、何かの夢なんだろう？

仰け反って尻餅をついた体勢のまま、木犀はやつとのこと息を吸った。

他人の家の玄関で、こんな風に無様な格好をしたことは初めてだった。目の前の事態にうろたえ、バランスを崩して後ろ様に倒れてしまっなんて。

おそらく、こんなことはこの先の未来でも起こり得ないことだろう、と思う。

しかし、今はそんな話など、どうでもいい。

木犀は、目の前の存在を両目でしっかりと凝視していた。

それ《・・・》を見た、あまりの驚きに、身体を支えるための芯がへなへなと力を失って、どこかの隙間から抜け出ていったような心地がしている。

ただ、目の前の状況を見極めるためには本能的に両目を開いていた。

頬をぬるい汗が伝い、喉に向かう。

いったい、

いったい、こいつは、何なんだ？

すると、目の前の、その存在が、小さな口をついに開く。

「驚くな、人間」

どこか妙に聞き覚えのあるその少女の声は空から降りてくる柔らかな風のようなだった。

無茶言うな。

混乱した頭で、何とかその言葉だけを捻りだした。

「あ、あんた、何なんだよ！」

後から思い出してみれば、ずいぶん陳腐な台詞だとは思ったが、あのときはあれが精一杯だった。

なぜなら、目の前に立っていたのは、たった数十センチの丈の少女だったのだ。

すると、彼女は木犀の強い疑念に、静かに口を僅かに歪ませて笑い、こう言った。

「なんじゃ、もう忘れたか？」

そして、彼女は手に持っている鈴のついた道具をしゃりんと鳴らす。

「わしは、緋桐乃夜叉媛。人の子が畏れ、敬うべき神じゃ」

そもそもその発端は昨日の夜だった。

最近知り合ったばかりの少女、近所の高校生である瀬戸さつきか

らの電話が木犀にあったのである。

それは夕食を済ませ、リビングでテレビ番組を弟たちと眺めているときに、木犀は机に置いていた携帯がピリリと着信したのを覚えていた。

電話が鳴ると、木犀はすぐに液晶の画面を開き、相手の名前を確認した。

そして、ああ彼女か、と思った。

瀬戸さつき。

そう表示された文字が白い光で浮かび上がっていた。

彼女は近所の神社で巫女をしているという年下の少女で、木犀とはひよんなことから知り合うことになったのである。どちらかというと控えめで大人しく、木犀と話していると、なんだかいつも緊張しているような、そんな印象の子だった。

思えばつい先日は町に一緒に買い物に行ったばかりで、それから特に連絡を取っていなかったのだが、何かあったのだろうか。

一応はこうして連絡を取れるように携帯の番号を教えていたのだが、彼女のシャイな性格からして、何か話をするにしても木犀としては自分からだろうな、と考えていただけに、彼女から電話が来たことに木犀はは少々驚いていた。

「もしもし」

弟たちの笑いが溢れているリビングから外に出て、軽く咳払いをした後、電話に出た。

「あ、あの、暮野さんですか？」

彼女は相変わらぬ他人の機嫌を伺うような緊張した声で聞いてくる。木犀は電話の向こうの彼女の様子が眼に浮かぶようで、ふつと微笑んだ。

「どうかしたの？　こんな夜に」

「あ、すみません。お休み中でしたか？」

電話の向こうの彼女が慌てたので、いやいや、と木犀は廊下の時計を一瞥して否定した。

「さすがに夜の八時から寝るには早すぎるよ」

「ああ、そうですね。それで……その……」

すると、彼女はそう言ったきり、言葉に迷子になったようにぼそぼそと何かを呟いている。木犀には何を言っているのか、分からなかった。

しかし、

「ええと、何か用があるんだろ？」

木犀はあることに勘付き、迫らず、ゆっくりとそう聞いた。

普段はデリカシーがないなどと周りの人間から白い目で見られるような大雑把な人間だが、さすがにこの場合には合点がいったのである。

女性がこんな風に、おどおどしてるってことは……。

大抵、悩みごとを相談するときには違いない。

と、いうことだ。

恋愛や、学校でのこと、将来のこと、家族のことや、友人のこと。

それらの悩みのどの場合に該当するのは判断できないが、こういう時の女性とはデリケートなものだ、と木犀は思っていた。

「何か、嫌なことでもあったの？」

と続けて語調柔らかく訊ねた。

しかし、彼女は、

「いえ、そうではなくて、ですね」

と言葉を濁らす。

木犀は首を捻った。どうやら違ったようだ。

「じゃあ何？」

「あの、明日は、お暇ですか？」

すると、彼女はようやくそう尋ねた。

「明日？」

ふと考えてみるが、木犀には特に予定らしいものはなかった。浪人生の身としてはそんなときこそ勉強に励むのが普通だろうが、今のところ、木犀にその予定は存在しない。

勉強などそのうちにやればいい、と考えていた。どうせ時間は腐るほどあるのだ。夏くらいから本気を出せば間に合うのではないか？

面倒くさいことに大事な余暇を潰す必要はない。

だからこそ、

「問題ないよ」

と木犀は軽く答えた。

「そうですか」

彼女が安堵する。

「では……」

「うん」

「榊さんのお宅に行ってもらいたいんです」

「……はあ？」

これは意外だった。

てつきり彼女が神社に来てもらいたいものと思っていたが。

榊、だと？

どうしてまた、彼の名前がここで出てきたのだろうか。

確かに、彼の家には神様へのお供え物として、ちよくちよくお菓子を持っていくために足を運んでいる。しかし、ただそれだけで、特別親しいわけでもない。

気になった木犀は訊ねた。

「何かパーティーでもあるのか？」

「いえ、そういうわけではないのですが」

「瀬戸さんも来るの？」

「わ、私は神社に行きますから……」

彼女の答えは相変わらず要領を得ず、一向に事情が分からない。

「どういふこと？」

「あの……ですね。実は榊さんが暮野さんに、どうしてもお力を借



りたいことがあるんだそうです。それで、どうにか連絡をしたかったらしいのですが、私が携帯番号を知っているということで、伝言を頼まれました」

「はあ」

それでなんとなく事情は飲み込めたが……。木犀は情報を咀嚼する。

「そうかあ……」

「あの、暮野さん」

彼女が名前を呼ぶ。

「何？」

「変だと思われるでしょうが、どうしても、ということなので、どうかよろしく願いします」

その彼女の言葉には心底困ったようなか弱さが感じられ、木犀はいても立つてもいられなくなった。

さすがに彼女からこんな風に言われては嫌だとは言えない。

「分かったよ。明日、行けば良いんだろ？」

「いいんですか？」

「ああ。どうぞ暇だし」

「あ、ありがとうございます」

急に電話の向こうが明るくなった。やはり女性はいつも明るくてくれるほづがいい。

「いいってことさ。問題ないよ」

「で、では。よろしくお願いします。榊さんの方へは私が連絡しておきますから」

「うん、じゃあ頼んだよ。お休み」

「は、はい、お、お休みなさいです」

最後に妙な挨拶をして、彼女の電話は切れた。ふう、と息をつく。

と思つたら、すぐに携帯が着信した。見ると、また彼女だ。

「す、すいません」

「何か言い忘れたことでもあつたの？」

彼女は案外そそっかしいところもあるのかもしれないな。木犀は思う。それはそれである意味かわいいが。

まあ、それはさておき、いったいどうしたというのだろう。

すると、彼女は奇妙なことを話した。

「ええ、えっと、あの、榊さんの家では、もしかすると、何か、」

「驚くようなこと』が起こるかもしれないが……」

「驚くようなこと？」

「はい、ですから、一応心構えをして置いてくださいね」

「え？」

「言い忘れたことはそれだけです。では」

「あ、ちよつと」

しかし、それっきり、通話は途切れてしまった。

83 家主のいぬ間に 1 (後書き)

どうも、ヒロユキです。

今回は話が中途半端になってしまいました。すいません。

最近では話がどっちの方向に向くのか、作者も完全に道を見失って  
ます。(笑)

話が長くなると、もう収集がつかなくなるというか……。だからこ  
うして、中途半端な感じになってるんだと思います。ダメですね。

読者の方々につきましては、こんな半端者の悪戦苦闘ぶりを生暖か  
い眼差しで見守ってもらえればと思います。次回の話、どうするか  
なあ。

## 84 家主のいぬ間に 2

「その、では」

それっきり、通話は途切れてしまった。

「何だ？」

と木犀は首を傾げる。

しかし、驚くようなこととは何なのか。その時には大して気にしたつもりもなかった。

きつと内緒の誕生日会を開くために仲間が自宅で待ち伏せているような、その程度のチープなドッキリを想像したと思う。スリッパを床に貼り付けていたり、人の家に勝手に出前を頼んだり、そんな感じだ。

だから、それを前もって知らせてくれた彼女には感謝したいが、いたずらする側のルールとしては違反だろうな、とか、のんきに思った気もする。

しかし、そんな考えが実に楽天的過ぎたことが次の日に分かった。まさか、まさか、神様がそこにいるなんて、思いもしなかったのだ。

「おい、話を聞いておるのか？」

目の前で綺麗な紅の髪を揺らしながら喋っているその少女は、不機嫌そうにあごを突き出した。

「え、ああ」

その姿に見とれていた木犀は、すぐに返事が出来ず、中途半端な声が出てしまう。

「お前、わしが珍しいのは分かるが、話に集中してくれぬと、何度も繰り返すのはこちらも疲れるのじゃぞ」

「は、はい。すみません」

彼女の苛立った様子に、慌てて頭を下げた。

先ほどの玄関から場所を移して、木犀たちは居間にいた。小さな食事前のちゃぶ台の上に彼女が立ち、畳に正座をして木犀が座っている。

そして、木犀がここに呼ばれた理由について、彼女からの説明が始まり、すでに数十分が経っていた。

しかし、机の上でちょこちょこ動き回り、大げさに身振り手振りで分かり易い説明をしようと心がけてくれている彼女とは裏腹に、未だに木犀はその話に集中することが出来ていなかった。

「いったい、どうして彼女のような神様がこんな場所にいるのか。そもそも、この少女は果たして本物の神様なのだろうか。」

と、こんな様子で、木犀は未だに混乱していたのである。

確かに、現在彼女から発せられている声は、あの晩に木犀が聞いた声と同一人物のようだったが、木犀としては、まさかその正体がこんな小さな姿の人物だったとは、想像もしていなかったのだ。

木犀の中で神様とは、強大な力を持った存在であり、滅多に人の前に姿を表さず、それでいて、空の上から人々を見守っているような、そんな存在だった。

だからこそ、そのイメージと彼女とのギャップに木犀の中で大きな違和感が生まれていたのである。



どうしてそんなことに？

木犀は目を点にする。

「春臣が病に伏しておる故、わしだけでこの家の家事をせねばならぬ。じゃが、それにはこのわしの体ではさすがに限界がある。そのため、わしの命令を聞いてくれ、且つ、暇なお主を呼んだのじゃろうが」

彼女は木犀の胸の辺りを指差しながら、言った。しかし、木犀には、そんなことなどどうでもよかった。春臣が病気。その言葉に驚いていたのである。

「神、大丈夫なのか？」

身を乗り出して聞くと、先ほどにもまして彼女の表情が不機嫌なものに変わる。

798

「お前、さてはちつとも聞いておらんかったの？」

「病院に連れて行ったのかよ？」

「うう、それについては問題ない。病は心配せずともじきに治る。

お前が心配するに及ばぬことじゃ」

「そ、そうなのか」

木犀はそれで納得した。

少なくとも、重大な病気でないのならば、大丈夫だろう、と思ったのである。すると、神は何か深く聞かれると面倒だと思っていたのか、それ以上聞かれなかったことにほっとしているようだった。

木犀は妙に思っ、少し首を傾げる。

と、そのことについて言葉を発しようとする前に、

「暮野木犀よ」

彼女から名前を呼ばれた。

「はい」

「聞いた話によれば、お主は学校などという場所に行かんでもよいのじゃろ？」

「一応、浪人している身ですから」

「ならば、わしの手伝いをせよ。お主には一応罪を見逃した借りがあるのじゃし、異論はないの。それにわしの力になれるのじゃ、信者一号からすれば誇りに思うべきことではないか？」

「はあ、少しくらい問題ないですけど」

少々疑問は残っているが、神様の役に立てるのならば、それくらいの手間は吝かではない。それに神の体調も気になった。木犀は天井を見上げる。一階にいないということは、彼は二階の自室にいるのだろう。様子を見にいけないものだろうか。

すると、その考えを看破されたのか、

「春臣は二階で眠っておる。起こすわけにはいかん。わしらだけでやるべきことを済ますぞ」

と神様から釘を刺された。さらに神様は、木犀を追い立てるように手を叩き、

「よし、ではまずは掃除を始める」

と宣言した。



一通りの作業が済むまでには小一時間ほどかかった。先ずは一階の全ての部屋に掃除機で塵や埃を隅々まで吸い取り、それが終わると、次に洗濯物を干す。これは一人分の衣類であるので、簡単に終わったが、異常だったのは台所。なぜか大人数で宴会でも開いたかのような汚れた食器の数に木犀は驚いた。

服のポケットに入りながら指示を出していた神様に尋ねると、「忌々しき大食漢がおつての」と表情をゆがめていた。

それが誰のことを指すのか、なんとなく木犀は訊ねなかったが、神の他に誰か住んでいる人間がいるのだろうか。

疑問に思いながらも、皿を布巾で拭き、食器棚に並べ終わると、あらかたの作業は片付いた。

その後、神様の指示に従い、台所上部の戸棚を開けると、緑茶のパックが入っていた。それで一服しようということらしい。木犀はごきりごきりと凝った肩を鳴らし、準備を始めた。

そして、やかんでお湯が沸騰するのを眺めながら、ふと、いったい自分は他人の家で何をやっているのだろう、と言う気持ちに駆られた。

特別親しくもない人間の家に入り、その家主が眠っている間に家事を済ませ、今は緑茶を飲むとしていいる。その一連の行動が不思議に思えてならなかった。そもそも、神様に呼び出されるなど、想像もしていなかったのだ。

お茶を淹れ終わり、木犀は、居間の机の前に座り、目の前で切り分けられた羊かんにはくついていいる神様を眺めながら、今さらながら、ふうむ、と唸った。

先ほどはこの神様の言葉に圧倒され、自分の疑問などすっかりどこかに置き忘れていたのだが、今ならいろいろなことを聞いてみたいと思つた。

#### 84 家主のいぬ間に 2 (後書き)

すいません、今回もまた中途半端ですね。

思いのほか話が長くなったので、半分で切りました。  
なるべく早く続きを載せようと思います。

## 85 家主のいぬ間に 3

先ほどまでこの神様の存在に圧倒され、自分の疑問などすっかりどこかに置き忘れていたのだが、今ならいろいろなことを聞いてみたいと思った。

木犀はお茶を一度飲んでから、彼女に話しかける。

「ええと、神様」

「なんじゃ？」

すると彼女は口の周りに羊かんをくつつけたままで振り向いた。

木犀は思わずふきだしそうになる。その姿は神とは思えないほどに、何とも愛らしいものだった。

しかし、それを見てにやけてしまうのも、彼女にいけないと思い、笑みを堪えつつ訊ねた。

「その、神様はどうして、この家に？」

「うむ？」

彼女の小さな瞳が木犀をはたと凝視する。その後で、彼女の頭の中でたくさんのが浮かんできたのか、一瞬迷ってから、

「……いろいろと事情がある」

と感慨深そうに答えた。

「確か、先ほども簡単に話したはずじゃが……どうせ、お主はちっとも聞いておらんかったのじゃろっ」

「め、面目ありません」

木犀は頭を掻いた。

なにしろ、さっきはいきなり目の前に神様が現れたもんだから、それに驚いて話に集中などできるわけがなかったのだが。

「まあ、よい」

彼女は面倒くさそうにまた一口羊かんを食べると、口をもごもごと動かしながら話す。

「わしは、元々ここにおけるべき存在ではなく、この世とは別世界から来た存在。それについては、なんとなくお主も理解しておるのではないか？」

「はあ、確かに、それが普通なんですよね」

木犀は頷いた。やはり、自分の認識は間違っていないかったようだと思う。本来神様とは人間を遠い場所から見守っているべきで、その辺にひよひよ顔を出してくるわけがないのだ。

彼女は続けた。

「ここへ来てしまったのは、本当に不運な事故じゃ。最初は簡単に元の世界に戻れるかと思っておったが、事態は思うより深刻で、この小さな姿でこの家から外に出ることも出来ずに生活せねばならんかった」

「……へえ」

「きつとわし一人では、今までこの世に存在していることさえ危うかったじゃろうの」

そう話している神の表情に影が差す。そこからは彼女の様々な苦勞の色が窺えた。木犀からすれば、彼女が話すような苦勞など、想

像することもできない。しかし、自身が馴染みのない別世界で本来の姿を失ったまま暮らすなど、並大抵の苦痛ではないはずだ。その場から逃げ出したくなってもおかしくはないだろう。

「しかしの、木犀よ」

と、神様は深刻そうな口調から、急に明るくなった。

「はい？」

「春臣じゃ。あやつには、ずいぶんと助けられた」

「はあ……」

「ここに来て、一人で何も出来ぬわしを見捨てることなく世話をしてくれたのじゃ。食べ物があったし、眠る場所もくれた。わがママを言っても許してくれたし、なにより、わしのことを守ってくれた」

まるで、太陽の光に照らされた花のように、語っている彼女は生き生きとし、喜びを周りにふりまいているように見えた。それは彼女に宿る神本来の力強さを見ているようで、木犀ははっとする。

「あやつはの、自らの身を犠牲にしようとするしてくれたこともあったのじゃ。それほど危険な場面に直面しながらも、あやつは、わたしの約束を守ろうとしていた。分かるか？ こんな小さなわしのためにじゃぞ！」

そして今度はゆっくりと腰を落とし、座り込むと、そこで彼女はぼんやりとした目つきになる。

「春臣への感謝は、一言では尽きぬ。じゃから、わしは、春臣に出来る限り精一杯のことをしてやりたい。そう、精一杯の、恩返しじゃ。それがたとえ、多少危険が伴うことであれ、の。あやつは、優

し過ぎるから、そんなことはいいと言うかもしれないが、わしは出来る限り春臣の傍にいて、力になればと思う。心の底から、そう思う。わしは……じゃから……」

言葉にならないものが溢れてくるのか、そこで彼女は喉の奥に思いを押し込めるようにして俯いた。

「お主をここへ呼んだのも、全部わしの考えじゃぞ。巫女の娘に協力してもらって、お前をここへ呼んだ。家事をこなして、春臣を驚かせてやるうと思っただのじゃ。あやつはまさかわしがすべての事をやり遂げておるとは夢にも思っまい。家の様子を見て驚いた姿が今から目に浮かぶのう、くっくくく」

「……」  
「じゃからお主よ。春臣が元気になっても、わしに頼まれて家事をしたなどは言わんでくれ。わしが一人でやり遂げたのじゃと、どうしても見せ付けてやりたい。これは、わしからのお願いじゃ。よいか、くれぐれも頼むぞ」

「はいはい、分かりましたよ」  
なるほどね。

木犀はそう答えながら、納得しつつ、とても不思議な気持ちを感じていた。

そして、その気持ちの正体は、きっとこの神様が話してくれた、榊春臣と彼女との奇妙な関係からきているだろう、となんとなく自覚していた。

この神様は、神でありながら、人間である榊春臣のことを同等の存在として扱っている。いや、それ以上に、自らの存在に欠かすことのない重要なパートナーとすら、思っているのではないだろうか。まるで、恋人同士みたいだ。

と、彼女はそんなことを思っている木犀の視線に気づいたのか、はっと我に帰ったようで、恥ずかしそうに視線を逸らすと、

「そ、そうじゃ、お主からもらった菓子もあつたの、食べるか？」  
と聞いてきた。

「あ、はい……」

木犀は答える。

すっかり忘れていたことだったが、確かに何度かここへ菓子を持ってきていたのだ。

彼女が台所の戸棚を指差したので、木犀は立ち上がり、そこから大きな缶を持ってくる。中身はほとんど見覚えのあるお菓子である。それをいくつか取り出して並べると、彼女は嬉しそうにはしゃいだ。

手当たり次第好きなものを口に入れ始める。こんなに食べて、この神様の胃袋はどうなっているのだろうか。全く何から何まで不思議な神様である。

しかし、それにしても……。

木犀は天井を見上げる。

「榊、ずっと眠ってるんですか？」

木犀は心配になり、訊ねる。

「う、うむ。安静しているのが一番じゃからの」  
「そうですか……」

しかし、木犀はそこであることに気がついた。

「でも、神様なら……」

「うん？ どうしたのじゃ？」

「いえ、すごい力を持った神様だったら、それくらい病気、小指の先で治せるんじゃない」

彼女が危ない目にあいつつ、ちょこちょこ家事などをするより、よっぽどその方が彼も喜ぶだろう。

が、言った途端に、彼女の表情に暗雲が立ち込めた。それはまるで、綺麗な水面に突然ぼつかりと穴が開き、全てを飲み込む闇が口を開いたかのような急激な変化だった。

木犀は、ぎよっとする。

もしかして、

もしかして、自分はとてつもなくまずいことを言ってしまったのではないだろうか。

「……わ、わしには……」

彼女は沈痛な面持ちで視線を落とし、震えた声で言う。

「わしには、出来ぬのじゃ」

その一言はとても重たく、心の奥にずしりと碇を落としたようだった。

「え？」

「わしには、それが出来ぬ……」

「どうして、です？」



「わしは……」

そう言いかけて、神様はそれっきり口を閉ざしてしまった。木犀の持ってきたクッキーに手を伸ばし、ぼりり、と頬張る。

ふわりと香るクッキーのおいしそうな甘い匂い。

しかし、彼女の表情は相変わらず悲しげで、無言でクッキーを食べている。

先ほどまでの元気が嘘のように思えた。

木犀は何かを言おうと口をあけたが、言うべきことが見当たらず、ただ、沈黙を埋めるようにクッキーを食べた。

ぼりり、ぼり……。

なぜ彼女が元気をなくしたのか、考えようとして、やめる。どうせ、彼女とのつながりが薄い自分には分からないことなのだろう。そう思ったのである。

神様にだって、一つや二つ、悩みがあるのだ。

そして、その悩みを解決できるのは、彼女のことをより知っている春臣に違いない。

だから、早く元気になるんだぞ。

木犀はどこかほろ苦いクッキーを噛み砕きながら、そう思った。

追加話(94) 椿と幽霊さん 1(前書き)

どうも、ヒロユキです。

今回は時雨川ゆずり編の番外編ではなく、追加話(まあ、番外編と呼んでも差し支えないと思いますが)です。物語に進む前に一応説明が必要だと思うのでここで作者から話をおきます。

このストーリーは時系列で見ると、ちょうど割り込まれた場所、「月下の二人」の前の話、という設定です。つまり、媛子がまだお守りの力で元の体に戻ろうとしている前、三夜叉媛のときの物語です。ですから、春臣もまだ呪符のせいで、苦しんでいる状態です。ゆずりがその治療の準備をしている段階です。今回はそこでの青山の椿の活躍(?)を描いた物語になります。

以上の点を理解したうえで、読者の方に読んでもらおうと混乱することはないかと思われます。長々と書いてすみません。それでは本文へお進みください。

「はあ……」

うちは大学の教室で、空いたままの隣の席を眺めながら大きくため息をつきました。

先ほどから教授の事細かな講義が始まっていますが、そんなものは目にも耳にも入っていません。もちろん、ノートを取る気にもなりませんでした。

そんなことより、重要なことがうちの頭の中をいっぱいになっています。

それが、隣の席にいるはずの彼なのです。

いったいどういうことなのでしょうが。

彼からは何の連絡もないまま、今日で大学に来ていないのは、もう三日目になりました。

「榊君……」

うちは知らず、不在の彼の名前を呟いていました。携帯電話をポケットから取り出し、電話帳から彼の名前を呼び出します。そして、そのままもう一度深いため息をつきました。

「一体、どうしてしまったんやろ」

彼 榊春臣君は、うちと同じ大学に通う友達です。この春からうちの近所で一人暮らしを始めた男の子で、引っ越してきた次の日からうちとは仲良くなりました。

よく、ぼうつとしてるとからかわれるうちとは正反対に、頭が良くて、ハキハキものを言い、そこらへんの道では迷わないというす

ばらしい超能力を持っている人です。

彼とは同じ学部ということもあり、毎日一緒にバスに乗って大学に通ってました。それが日常であり、今までそれが乱れるなどということは一度もありませんでした。

しかし、ここ数日は違います。なぜなら、榊君が何日も連絡がな  
いまま、学校を休み続けているからです。

それが、今日で三日目。

これは果たして、単なるサボりなのでしょう？

うちはよくよく考えます。

確かに、榊君は講義中によく眠って授業をサボります。一人暮ら  
しが忙しいのか、それとも、単に講義が面倒くさいのか、机に臥せ  
ってノートも取らずに目を閉じてぐうぐうとやっています。そんな  
ことやから、毎度うちにノートを借りる羽目になるのですが……し  
かし。

とは言っても、学校そのものをサボってしまうほど適当にのらり  
くらりと日々を過ごす人でもありません。現に大学が始まってから  
一度も講義を欠席したことは無いはず。一緒にうちも講義に出  
ているので間違いはありません。

となれば、この連日の隣の欠席はどうなるのでしょうか。うちは  
そこで直感的に事件の匂いを嗅ぎ付けます。

うちは思い出しました。実は、榊君はすっかりしているようで、  
いつも何か揉め事に関わってしまうおっちょこちょいな人なのです。

ひよんなことから神様と一緒に暮らしている上に、それに関係し  
ている厄介事に巻き込まれています。この前だって、その神  
様、媛子ちゃんを狙ってさつきちゃんが家にやってきたし、つい最  
近では、媛子ちゃんとの仲がうまくいかないらしく、お守りの作り

方を教えてくれと、せがんできました。

全くもって、はらばんじょう。うちがきちんと見てあげなければ、きつと榊君は一人で暮らしていけないに違いありません。そうです、榊君には、うちが必要なのです。

まあ、そんな感じで、うちはとりあえず、不在の榊君に連絡をとろうとしました。また厄介なことに巻き込まれていては、うちが助けにいかないあきません。

授業中ですが、彼のアドレスの電話番号に発信します。

トゥルル、トゥルル

しばらくして、誰かが電話に出ました。

「もしもし、榊君？」

「何じゃ？ お主は誰じゃ」

すると、意外なことに、榊君の携帯に出たのは彼ではなく、一緒に彼と住んでいる神様の媛子ちゃんでした。

「え、媛子ちゃん？」

うちは訳がわかりませんでした。

どうして、榊君の電話にかけたはずが、媛子ちゃんに繋がるのでしょうか。

しかし、媛子ちゃんはうちの気持ちなどお構いなしに、

「椿か、ちょうどよかった」

と嬉しそうな声を出し、

「今ちょうど、お主の助けが必要じゃったのじゃ」

とそのまま慌てた様子で切り出しました。

そこで頭の回転のいいうちは、ハハンと閃きます。どうやら、またしても榊君は厄介事に巻き込まれているようなのです。だからこそ、榊君の携帯に連絡して媛子ちゃんに繋がるなどという異変が生じるのでしよう。

「のっぴきならない事情が発生してしまったの……」

そう言う媛子ちゃんの声は深刻さを帯びていました。やはり、うちの予感的中したようです。

うちはすぐさま、二つ返事で了解しました。

「おっけえやで」

「おお、それは助かるぞ」

と、媛子ちゃんは安心したようです。

「お主が引き受けてくれねば、また別の人間を探さねばならんところじゃった」

「何があつたん？」

うちが訊くと、彼女は二三回咳払いをして、

「実はの」

と、なにやら事の成り行きを話し始めました。どうやらとても重要な話のようです。

うちは耳を傾けます。

しかしながら、媛子ちゃんという言葉が早すぎるのと、意味の分からないたくさんの事情説明とで、うちは全く理解が追いつきません。

「あ、あの、媛子ちゃん？」

「じゃからわしとしてはどうすることも出来ずに春臣を」

そんな感じのままに話が進んでいき、

「それではよろしく頼むぞ、椿」

とついに一方的な様子で通話は切れてしまいました。

「あれ、媛子ちゃん？ もしまし、もしもーし」

と呼びかけたのも、時既に遅し。返事は返ってきません。

うちは首を傾げながら、台風が通り過ぎた後のような呆然とした気持ちでした。一体全体なんだというのでしょうか。

しかし、かろうじて、ノートに聞き取った文字は、

『食料の買出し』

そう書かれていました。

なるほど。うちは手をぽんと叩きます。媛子ちゃんたちは、どうやら家から出られない状態のようで、そのため、うちに食料品の補充を頼んできたらしいのです。

それならば話は簡単でした。

「よっしゃ、うちが料理を作ったる」

そう言って指を鳴らします。

こういう時、友人を作っておいてよかったと榊君に思い知らせてやるのです。

そうと決まれば、後は行動あるのみ。

早速、学校の帰り、近くのスーパーに向かうことにします。

よしよし、こっちで間違いないな。

うちは迷わないようにひとつひとつの目印を確認しながら道を進みます。

町の中心地でバスを降り、郵便屋さんの角を曲がり、動物の鳴き声が聞こえるペットショップの前を通り、そして、いつものスーパーの前まで……来ました。

しかし、うちはそのスーパーの入り口の自動ドアで立ち止まってしまいました。

というのも、

なんと、そこには不思議な格好をした人物が、ぬうつと立っていたのです。その方は、何とも言葉にしがたい青く綺麗な髪を長く伸ばして、時代劇で見るとような古風な帽子を被っていました。さらに、全身を真っ白な着物で覆い、さらに履物は今時の靴ではなく、鈴のついた、下駄。

そして、どこか、恨めしそうにスーパーのお肉売り場を眺めているその様はまるで

「ゆ、幽霊や！」

うちはつい声を上げてその人を指差してしまいました。しまったと口を押さえても後の祭り。その人はうちの声に当然気づいて、や



はりぬうつと振り返り、うちに顔を近づけてきました。

「う、う、ごめんなさい」

うちは震えながら必死に謝ります。

もしも、幽霊であれば取り憑かれてしまいかもしれません。そんなことになるものなら、暗い部屋に押し込まれて『悪霊退散、悪霊退散』と唱えられながらうんうん嫌な汗を掻きつつ唸らなければならぬでしょう。そうなたら家族も知り合いもみんな悲しみま

す。  
しかし、その人はうちの目の前でにやりと笑うと、

「幽霊なんて言われたのは初めてだな」

と言って、うちの頭を撫でました。

思わぬことに、うちは、

「ひっ！」

と小さく悲鳴を上げて、後ずさりします。

すると、その幽霊らしき方は手を引っ込めると、申し訳なさそうに頭を下げました。

「ごめんごめん。驚いたかな？」

「あ、あの……」

「少女はもしかしてここに用があったの？」

「え、あ、はい」

うちは答えながら、そこでようやくその人の顔をしっかりと見ました。てつきり半透明に透けているのだと思っていましたが、つるん

とした白い肌の若い女性で、とても綺麗な人でした。少しも幽霊には見えません。  
すると、

「時雨川は幽霊じゃないよ」

さらに女性の方からも言われました。どうやら、しぐれかわ、というお名前の人のようです。

しかしながら、ずいぶん変わった名前やな、とうちは思いました。それに、自分のことを苗字（まさか名前ではないでしょうし）で呼ぶとは、さらに変わった人です。

「ここに、お買い物かな？」

うちは頷きます。

「は、はい。実はうちの友達が大変なことになっていて家から出られへんみたいなんで、夕飯の買い物を頼まれたんです」  
「……！」

途端に、その人の顔つきが変わりました。

「それで、買い物？」

「は、はい」

おどおど答えると、その人がまたしてもぐっと顔を近づけてきました。うちは驚きましたが、避けるのも失礼な気がして、なんとか踏みとどまります。

すると、その女の人は何かを小声で呟いているようでした。

「たしか夜叉媛ちゃんがこっちの事情を知っている近所の子に頼むって言ってたな……」

その表情が妙に真剣で、うちは立ち去るに立ち去れません。

「あ、あの」

「少女、君、もしかしてその友人というのは、榊、という名前の少年ではないか？」

うちはとても驚いて、その場で飛び跳ねてしまおうかと思いました。

「ど、どうして、それを？」

なぜ、榊君のことをこの人は知っているのでしょうか。

しかし、うちの困惑をよそに、その人はこの上なく嬉しそうに笑います。

「ああ、やっぱりそうか。ちょうど良かった」

ちょうど良かったということは、この人にとって何かうちが都合の良い存在であったようです。全く意味が分かりません。

その瞬間、うちは、もしかしてと思いました。背筋が氷が伝ったようにひやり、とします。

もしかすると、この人はやっぱり幽霊で、その幽霊が持つふわふわと宙を漂う能力を駆使して、他人の家に入り込み、その人の情報を何でもかんでも入手しているのでは、と考えたのです。幽霊であれば、壁をすり抜けることは簡単でしょうし、うちがどこで何をしているかなんて全てをお見通しなのでしょう。

うちは頭の中がパニックになりました。そうならば、この人はきつとうちと榊君が友達と言ったことも知っていて、きつと媛子ちゃんのことでも知っているに違いありません。そうです、間違いありません。

プライパシーのシンガイ、とか言う奴です。立派な犯罪なのです。

「や、やっぱり幽霊なんやな！」

そう思ったうちは、ずばり、言い放ちました。

「は？」

時雨川さんの目が点になります。きつと正体を見破られて驚いたのでしょうか。

しかし、うちは構わず腕を振り回しました。

「う、うちに近寄るな。け、警察呼ぶで！」

「おいおい、少女、落ち着くんだ」

言いながら、時雨川さんは焦った様子で辺りをきよるきよると見回しました。うちも見回すと、どうやら今の声で、他の買物客の人たちがこちらを不審げに見ているようなのでした。

しかし、これに冷や汗を掻くというのが、ますます怪しい。うちはまた大声を出しました。

「だれかー、だれかー、たすけてくださーい！」

「わあー、違う違う！」

「この人、幽霊なんですー！」

「違う違う、いろいろちがーう！」

追加話(95) 椿と幽霊さん 2(前書き)

どうも、ヒロユキです。

前回割り込み投稿をしたときに気づいたのですが、もしかして、これをすると、次話投稿として認識されないのでしょうか。最終更新が前回のままなので、この投稿方法は失敗だったかもしれない(これだと、更新された小説の一覧に並ばないみたい)。素直に次話投稿にすればよかった……。

ホットプレートの上で、お好み焼きがジュージューとおいしそうに音を立てていました。具材が焼ける香ばしい匂いがぽあぽあど部屋に充滿しています。机には他にも用意したサラダや煮物が所狭しと置いてあり、中々に豪華な出来栄でした。

さて、うちは今、榊君の家の居間にいます。

榊君たちというのと、箸を取り、机の周りに座って、それぞれお皿に盛られた料理に手を伸ばしています。皆よっぽどお腹が空いているのか、箸が止まることはありません。

そんな中、うちは夕飯を抜きにされた子供のように、一人で俯き、先ほどのスーパードの出来事を最初から榊君たちに説明していました。お腹は空いていましたが、食欲は湧いていません。

「なるほどね」

しばらくしてうちが話し終わると、榊君は眠たそうな目をこじ開けつつ、それでも箸を動かしながら、言いました。

「それで、ふぁ……いろいろな大騒ぎになったと」

うちは頷きます。プレートの上のお好み焼きがジュージュー、とうちを責めるように音を立てていました。

「その、うちは……てつきり悪い人なんかと思ってもて」

「はっはっは、いやあ、面白かったよ」

すると、向かい側に座っていた時雨川さんが大声で笑いました。

この人はかなりお腹が空いていたのか、すでに二枚もお好み焼きを

平らげています。

「騒ぎに驚いた店長さんが警察まで呼んじやっつてさ。事情聴取なんてされちゃったんだよ。それは何とかうまいことごまかしたけど。でも中々に向こうも時雨川に興味津々だったよ。不法入国者か、つて」

コーラを飲みながら陽気に話すその様子は楽しげで、とても勘違いされて迷惑だったという感じではありませんでした。

しかし、うちとしては、申し訳ない気持ちでいっぱいです。単なる人違いならまだしも、死んでいる人間違いとは、激怒されてぺちんぺちんと頬をぶたれても文句は言えません。

「笑って話すようなことか？ お主の格好はただでさえ人目を引く。もし不審人物として警察に捕まってみよ。こっちまで迷惑なのじゃぞ、時雨川」

と、机の上に座った媛子ちゃんは口を尖らせました。

「まあまあ……ふあ、媛子もそう目くじら立てるなよ」

そこに割り込むのは榊君です。フォークの先を振り回しかけている媛子ちゃんを制しました。

「結果オーライならいいじゃねえか」

「春臣、わしはそやつのはげはすみな言動が気に食わんのじゃ。こういうやつは過ちをしても反省をせぬ。じゃからそのうち同じ失敗をしでかす危険性があるといっておるのじゃ」

「何言ってるんだよ。失敗って、別にこれは時雨川さんが悪いわけじゃないだろう？ 元はと言えば……」

榊君の目がこちらに向きました。

「あ……うち……」

うちははっとして、思わず目を伏せてしまいました。罪悪感が胸を締め付けます。

「ええ、と、その……」

途端に榊君の声が弱まりました。

「……誰にでも失敗はあるし、な。気にするな、青山」

「じゃが、こういうことは気をつけてもらわぬと困るぞ、榊。何でもかんでも早とちりするのは危険じゃ。お主は時々ぼっつとしておることがあるようじゃし」

「は、はい。反省します」

媛子ちゃんにびしりと言われ、うちはしょぼしょぼと肩をすぼめて、小さくなりました。返す言葉がないとはこのことです。せつかく榊君たちの役に立ちたいと思ってきたのに、反対に迷惑をかけるとは、これではあべこべでした。

いったいうちは何をしているのでしょうか。夕方に媛子ちゃんから電話を受けた直後のような自信はもうありません。

何が、うちがいて良かったと思いきらせよう、でしょう。全く、ダメダメです。

ああもつ、うちの馬鹿馬鹿。

「何言ってるんだ」



しかし、急な明るい声にうちは顔を上げます。まるでそれは天から降ってきた声のようでした。

見ると、時雨川さんがこっちに向かって微笑みかけています。

「こんな格好をして、あんな場所をうるついでた時雨川が悪いんだ。ちっとも少女の責任じゃないよ」

その優しい言葉にうちのしばみかけていた心は、ぼわんと膨らみます。

「それに、この夕飯の準備をしてくれたのも彼女だろう。そうじゃなきゃ、また今夜だってコンビニ食だったんだ。むしろ感謝すべきだよ」

そうして、時雨川さんは、ありがとうなとうちに目配せをしてくれました。うちは顔が熱くなります。

「え、えと、うち……その……」

しかし、隣の媛子ちゃんはその言葉が気に食わないのか、時雨川さんをじいっと睨みつけます。

「お主、新参の居候の分際で偉そうなことを……」  
と、ぎりぎりど歯噛みし、再びフォークを振り上げかねない様子です。

が、ここは再び榊君に止められました。

「はいはい、細かいことは言いつこなしだ。折角の大人数での食事なんだろう。楽しくなけりゃ宴会じゃないって」

彼にそう言われ、媛子ちゃんはふんと不機嫌そうにそっぽを向き、しばらくぶつぶつと唸っていました。彼から煮込んだじゃがいもをフォークで口に入れられると、うれしそうに目を閉じました。

「うむ、うまい」

柔らかい至福の表情です。

そして、そのおいしさに触発されたのか、次々に食べ物を平らげ始めました。どうやら落ち着いてくれたようで、一安心です。

うちはそこで彼女を眺めるのを止め、もう一度向かい側で再びお好み焼きを食べている時雨川さんを見ました。

たった今、うちを庇ってくれたその人です。うちの心はその瞬間、ときめいていました。

なんと優しい人なのでしょう。こんな阿呆なうちを庇ってくれるなんて。まるで、天使のような人です。

けれど、うちはそこでふっと考えます。

時雨川さん。

そう、時雨川さんです。

不思議な青い髪をして、白装束を着て、榊君の家に居候している、その人のことです。

よく考えてみれば、時雨川さんのことをうちは知りません。スーパーでの騒動の後、とりあえず、榊君の知り合いということが分かって一緒に買い物を買って済ませ、こうして榊君の家まで帰ってきたのですが、依然として、彼女の正体は何者なのか、全く知れないのです。なぜ、榊君の家に居て、なぜ、こんなにも自然に榊君たちと会話し、受け入れられているのでしょうか。

榊君の知り合い？

媛子ちゃんと同じ神様？

うちは混乱します。

でも。

でも、少なくとも、悪い人やないよな。だって、うちのこと、庇ってくれたし。

と、そんなことを考えていると、ふいに時雨川さんと目が合いました。

「少女、楽しんでるかい？」

いきなりそう聞かれ、うちはどきまぎとしました。どう答えるべきか迷っている、いつの間にか向かいに座っていたはずの時雨川さんは、うちの真横に腰を下ろしてきました。いったいいつ移動したというのでしょうか。うちは呆然とします。

そんな時雨川さんの方からは、ふわり、と草原のような優しい香りが漂ってきました。

「おいしいよ。少女が作ってくれた料理」

「え、ほんまですか？」

うちは褒められて驚きました。

「そうそう、お好み焼きだっけ。こんなにおいしいものはそこらへんにはないね」

時雨川さんはそう言って、嬉しそうに箸を伸ばします。プレートの上のお好み焼きを小さく分け、食べ易い大きさにしているようです。

「そらあ、おおきに」

とお礼を言いながら、うちは時雨川さんの手元に目が行きました。その時、あれ、と思います。

「それ、持ち方がちやいます」

「え？」

時雨川さんは、びっくりしたのか、持ち上げたお好み焼きをぼろりとプレートの上に落としました。うちは、それを見て軽く笑って、自分の箸を持ち上げてみせました。

「正しいのこう。上の箸は三本の指で鉛筆を持つように支えながら持つて、下の箸は動かさずに固定するんです。ほら、こういう感じで動かします」

うちは説明しながら、今度は時雨川さんの手に触れ、指を正しい位置に動かします。時雨川さんの手はうちより大きく、しかも、白く長く綺麗で、なんだか大人の女性という感じがしました。持ち方を修正し終わると、うちは手を離しました。

「ほんなら、これで動かしてみてください」

「え、つと、こう……かな？」

すると、今度は上手くいきました。上の箸だけがぱちぱちと動いています。

「そうですそうです」

うちは両手を叩きます。時雨川さんは恥ずかしそうにはにかんてから、不思議そうに箸を持つ自分の手を見ました。

「ふうん、少女はよく知ってるんだな。時雨川は昔っからの持ち方だから、直そうと思ったこともないよ」

「ふふふ……でも、うちかて、昔は下手やったんです」

うちは言いながら、苦笑いをしました。

「へえ……」

「お母さんから、何度も教えてもらうて、ようやく出来たんです。その、うちは、覚えるの下手やから」

「猛練習したんだ」

感心したように時雨川さんが目を丸くしました。

「ええ、そらあもう。二ヶ月練習して、ようやく出来て……けど、

あの、うちは思うんです」

「うん？」

「どうして、昔の人は二本の棒で食べ物を掴む、なんてことを考えたんでしょうか。絶対に他にええ方法があったんちゃうんかって、うちは思うんです。ほら、フォークとかスプーンの方が絶対持ちやすいでしょう？」

すると、時雨川さんは少しぼうつとした顔をした後で、急に笑い出します。

「ハハハ、確かに考えてみれば小さな子供には持ちづらい食器だな」

「ですよねえ」

うちは鼻息荒く頷きます。ここに反箸同盟を結成できるかもしれません。しかし、うちがそれを提案しようとしたとき、そこで時雨川さんは突然吹き出しました。

「ぷつ、くふふふ。しっかし、少女は本当に面白いな」

「へ？」

突然のことに、うちはぽかんとします。

「日本の食文化のひとつである食器の箸を否定するとは、よくそんなことを考えるもんだ。ハハハ」

時雨川さんがあんまり笑うので、うちはだんだん恥ずかしくなってきました。前から思っていたことなので、つい言ってしまうしたが、言わないほうが良かったかもしれないと後悔しました。

うちは机よりも身長が低くなるかと思うくらいに縮んだ気がします。

「……久しぶりなんだよな」

ふいに、時雨川さんが言いました。横を見ると、彼女は氷でよく冷えたコーラのグラスを持って、ちびちびと飲んでいきます。

「え、何がですか？」

「こうやって大勢でわいわいすることって」

その横顔はどこかはしゃいだ子供のようで、純粹にこの食事の場を楽しんでいるようでした。

しかし、うちは思います。

ということは、時雨川さんは、いつもは一人ということなのではないか。

「あの、時雨川さんは、いったい何してる人なんですか？」

「うちは気になっていたことを訊きます。」

「時雨川かい？ 時雨川は、ただのしがないお守り商人だよ」

あまり聞きなれない言葉にうちは目をぱちくりさせました。

「お守り、商人？」

「そうそう。全国を渡り歩いてお守りを売り歩くのさ。とっても骨が折れる仕事だよ」

「一人で？」

「そうさ」

「日本中を？」

「ああ」

うちはそこで一度、言葉を飲み込むように呼吸をした後で、こう訊きました。

「……寂しく、ないんですか？」

その瞬間、カラリ、とグラスの中で、氷が落ちる音がしました。時雨川さんの表情が一瞬固まります。

「う……うっん、あんまり考えたことがないなあ」

うちはそんな時雨川さんを見てから、榊君と媛子ちゃんの方を見

ます。

「うちやったら……」

「うん？」

「いえ、うちやったら、皆がおらんと寂しいと思うから……」  
「……」

それきり、時雨川さんは何も言わないままでした。どこか遠くを眺めているような目をして、部屋の明かりをじいっと見つめているのです。その横顔は先ほど違い、どこか冷たい印象を与える、青白い壁のようでした。

うちは、その時、時雨川さんが何を考えているのか分からなくて、少し怖く思いました。



追加話(95) 椿と幽霊さん 2(後書き)

ええと、最後に一言。

サイドストーリーのくせに、話が長くなってしまってます。次回ももう少し続く予定です。更新は早くて二日後、かな？

それから、どれくらい経ったでしょうか。

気がつくと、ホットプレートの上で焼かれていたお好み焼きは黒い焦げ付きだけを残し、全て消えていました。いつの間にか、榊君は机に突っ伏して寝息を立てており、さらに、媛子ちゃんは飲み物を口に運びながらテレビに夢中になっています。

うちは半分眠っていたのでしょうか。ぼんやりと目を擦り、今さらながら冷えたお好み焼きを口に入れようとして、ふと隣を見ました。

あれ？

いません。時雨川さんです。

周囲に目を向けますが、部屋の中には姿が見当たりません。いったいどこにいったのでしょうか。

うちは立ち上がります。部屋にいないとなると、台所で何か新しい食材を探しているのかもしれない、と思ったのです。

うちは、その辺りに放り出してあったタオルを榊君の肩にかけて後で、部屋を出しました。

「時雨川さん？」

廊下は人の気配がなく、真っ暗でした。足を踏み出すと、板がぎしりとゆがみ、古めかしい音を立てます。

うちは転ばないように壁伝いで明かりを探します。しかし、運悪く見当たりません。

「あれえ、どこやったっけ」

これでは仕方ありません。とりあえず、明かりなしで進むことにします。うちは頭の中で榊君の家の廊下を思い浮かべました。確か、出てすぐに正面が台所やったはず。いくら方向音痴のうちでも家の中で迷うほど阿呆でもありません。

目的の台所はすぐに見つかりました。手探りで、引き戸の取っ手に触れたのです。

しかし、残念なことに、人がいる気配はしません。そもそも、中に誰か居るのでしたら明かりがついているはずなので、考えるまでもなく却下でした。

うちは首を振ります。

「ここやない……」

ということは、時雨川さんはいったいどこへ？

そう思って振り返り、うちの暗闇に慣れた目がある場所を発見しました。

ちょうど廊下の先、階段の横手にあるドアから、光が漏れているのです。どうやら、時雨川さんはそこにいるようでした。

しかし、そこは今まで入ったことの無い部屋です。いくらうちが榊君の家には何度から来ていると言っても、用の無い場所には入りませんから、当然知らない場所もあるのです。

いったい中はどうなっているのでしょうか。全く分かりませんが、うちは向かってみます。

暗闇で転ばぬよう、足元を確認しつつそろりそろりと進み、そして、目的の場所へと辿り着くと、

「時雨川、さん？」

もう一度呼びかけてから、ゆっくりとそのドアを開けました。いたい、中で何をしているのでしょうか。

ですが、一步踏み込んで、うちは目の前の光景に驚きました。

「お？」

そこにはなんと、脱衣かごに服を脱ぎ、裸になっている時雨川さんの姿があったのです。

「あ……あ」

時間が凍りつき、うちはあまりのことに、言葉を失います。ですが、目だけは咄嗟に塞ぐことができずに、その白い肌を凝視してしまいました。

その美しい陶器を思わず、流れるような体の曲線とふくよかに丸みを帯びた胸。

そして、青い髪を揺らし、肩越しに振り返る時雨川さんの様子は、とてもヨウエンというのでしょうか、うちの目に、大変色っぽく映りました。まるで絵画を見ているような感覚になり、女のうちでさえ、目を奪われてしまいます。

「あれ、少女じゃない。どうしたの？」

時雨川さんは、突然のことに呆然としていました。これからお風呂に入ろうという一番無防備なときに、とんだ侵入者が現れたのです。驚いて当然でしょう。

「う……う、うち、じゅ、ごめんなさい！」

叫ぶようにそれだけ言って、うちはすぐさまドアの向こうに引き

返しました。ばたんと勢いよく閉め、そのドアにすがりながら、大きく深呼吸をします。

ああ、なんとということでしょうか。

とんでもなく胸がバクバクと脈打っていました。まさか、ここが脱衣場だったとは考えてもみませんでした。

すると、目を瞑った暗闇に、時雨川さんの絹のような体の表面が、浮かび上がってきます。それを思っただけで、頭に熱が上ってきて、ああ、あわわわ……。うちは思わず両方のほっぺを押さえます。

「おーい、少女。大丈夫か？」

すると、ドアの向こう側から時雨川さんの心配した声が聞こえてきました。

「だ、大丈夫ですー」

うちはかろうじて理性を保ったまま返事をしました。

「逃げなくても良かったのに。こっちに戻っておいでよ」

「え、で、でも」

「一緒にお風呂に入らないかい？」

一緒にお風呂？

その一言に、うちの頭はまたしても沸騰寸前にまで温度が上がります。とんでもありません。うちがあんなすばらしいスタイルの女性と一緒に風呂に入るやなんて。

「いえ、う、うちはええです。着替えなし」

苦し紛れにそう言うと、

「そっか、残念だな」

と言つて、時雨川さんはお風呂に入つていったようでした。すぐに諦めてくれたようでうちはほっとします。

しばらくすると、部屋の奥からシャワーを浴びる水音が聞こえ始めました。

そして、うちはそれをしっかりと確認してから、何を思ったのか、呼吸を整えた後で、恐る恐るもう一度部屋の中に入ります。その時は無意識のうちに、時雨川さんに近づいて、彼女のことをもっと知りたいと思つていたのかもしれない。

脱衣場の先には、浴室があります。曇りガラスの向こうで、もくもくと湯気が立っていて、そこから陽気な鼻歌が聞こえていました。どうやら時雨川さんが歌っているようです。

うちはまたしても胸がドキドキしていることに気がつきました。いけないことをしているような気持ちになります。すると、いきなり鼻歌が止み、

「おや、少女、入ってきたのかい？」

と時雨川さんに呼びかけられました。

「え？」

うちはその場でビクンと跳ね上がります。まさか気配に気づかれていたのでしょうか。注意して、音を立てないようにしていたのに。

「ハハ、入ってこなくてもいいからさ。ドア越しだけど、ここで少し話でもしないかい？」

「話、ですか？」

てっきり怒られるかもしれないと思ったのですが、これは思わぬ申し出でした。

「そうそう、少女は中々にユーモアがある子みたいだからさ。もっと楽しい話を聞かせてよ」

「楽しい話……ですか」

「何かないのかい？」

そう言われても、ぱっと思いつきません。うちが困っていると、先に時雨川さんが話しかけてきました。

「ほら例えば、時雨川がどんな風な幽霊に見えたとか、さ」

「え、それはうちが勘違いして」

「いや」

と、うちの言葉の途中で、時雨川さんが口を挟みます。

「……それは、あながち間違いでもない」

「ど、どういうことですか？」

あまりのことに、うちは激しく動揺しました。

しかし、そんなうちとは裏腹に時雨川さんは不気味なほどに落ち着いて言いました。

「時雨川はさ、幽霊みたいなもんなんだよ」

それはまるで、誰に向けるわけでもなく宙に放った、儂い吐息のようでした。ドア越しの時雨川さんの気配が急に薄くなってしまっ

たようです。

うちは、とても困惑しました。その言葉がエコーのように脳内に響きます。

自分のことを幽霊みたい、なんて言うやなんて。そんな、恐ろしい。

うちには、とてもそんな気持ちは分かりません。

でも、確かなことは、そう言った時雨川さんはどこか寂しそうで、なんだか、そのまま水蒸気の一部になって、どこかに消えてしまうような気持ちでした。

なんやろ……この感じ。

その時うちは気づきました。

うちと時雨川さんの間に、飛び越えることの出来ない溝が隔たっているような、そんな感じに、です。

うかが、

どこまでいっても、

どこまでいっても、

時雨川さんの傍にたどり着くことが出来ないような、漠然とはしています。そんな絶望的な隔たりが、あるような感じがしたので。

時雨川さんとは、もしかすると、永久に友達になれへんのやろか。そんなおかしな考えさえ浮かびます。

違う、違う……。

うちは強く首を振りました。片方の拳をぎゅっと握り締めます。



違う、それは絶対違う。

時雨川さんはそんな幽霊みたいな人間とちゃうんや。

うちの中で押さえようのない気持ちがぶるぶると震えだしてしました。

だって、こんな綺麗で優しい人が、そんな恐ろしい幽霊なんかにはずがないのです。それ以外に、大した根拠なんてありませんけれど、絶対にそうです。

ちゃうと言ったら、ちゃうのです！

「時雨川さんは……ちやいます」

抑えきれず、声が出ていました。

「え？」

「幽霊なんかや、ありません」

「……どうして、そう思うんだい？」

不思議そうに、時雨川さんは問い返してきました。その声には小さな驚きと、なぜか、ほんの少しの期待が混じっているようでした。

「だって、だって、だって……」

うちは必死で呼吸するように、逆転の言葉を探しました。

あれでもない、これでもない、それでもない。

そして、握り締めた掌をじっと見つめて、あっと思います。

そつや。

うちは時雨川さんに箸の持ち方を教えたのを思い出していました。

あの滑らかな、柔らかな、肌触り。でも、うちにはそれの他にも、じんわりと伝わってきたものが確かに、あるのです。

「だって、時雨川さんの手え、温かいんです」

うちは、それを告げました。

「え……」

「もしも幽霊なら、そんなことはありません。命が無いから、死んでいるから、幽霊の手えは、冷たいんです。けれど、時雨川さんの手えは、温かかった。それは、生きてるから、血が通うてるから、温かかったんです」

うちは上手く喋れているのか、とても不安になりながらも、必死に言葉を続けました。

「せやから……せやから、時雨川さんはちっとも幽霊なんかやありません」

目を閉じて思い浮かべるのは、  
重ね合わせた、  
手と手。

「うちとおんなじ。あつたかい手えしてます」  
「……」

時雨川さんはしばらく無言でした。体を動かす音はおろか、滴る水の音も聞こえてきません。

うちは急に怖くなりました。もしかすると、うちが話している間に、彼女はどこかへと消えてしまったのでしょうか。本当に幽霊や

ったのでしょうか。  
返事が欲しくて、話しかけました。

「あ、あの、時雨川さん？　うちが言ってること、変ですか？」  
すると、

「……フフフフ、ハハハハハハハ」

ドアの向こうから、いきなり豪快な笑いが返ってきました。

「あ、あの？」

それはまるで嫌な空気を空へと吹き飛ばすような笑いです。

「そうか、その通りだな、少女。幽霊には体温なんて、ないんだよ  
な」

「時雨川、さん……」

「はあ……我ながら少々卑屈なことを言ってしまったようだよ。あ  
りがとう、そう言ってくれて」

その瞬間、うちには、何とも言えないきゅうつとした気持ちが喉  
元にこみ上げてきまして、何だか、目頭が熱くなり、涙が零れそう  
になりました。

「いえ、うちは、大したことはしてません」

「うつん、そんなことはない。君は、君が思っている以上に、周り  
の人に幸福を振りまいているんだよ」

「そう、ですか？」

「そうだよ。時雨川が言うんだもの。間違いないさ」

うちはそう言われて、きょとんとします。いったい、何が間違いないのでしょうか。

そんなことが簡単に決め付けられるほど、時雨川さんはすごい人なんでしょうか。うちはなんだかおかしくなってきました。堪えきれず、笑い出します。

「ふふふふ……」

全く、時雨川さんは、本当に不思議な人です。

「な、何だ、少女。何がおかしい？」

「ふふふ……」

「時雨川がおかしなことでも言っただか？」

「ふふふ、秘密です。教えません」

そして、

うちに負けず劣らず、ユーモアのある人なんでしょう。

「どういうことだよ、全く」

「ふふふふ……」

ふと顔を上げると、脱衣場の窓から、外の暗闇がこちらを見ていました。

まるで、笑い声気になっているようです。

たとえ、そこに幽霊がいたとしても、

今のうちには、少しも怖くないように思えました。

追加話(96) 椿と幽霊さん 3(後書き)

どうも、ヒロユキです。

これで番外編も終了し、ゆずり編はすべて終わりですね。今回のゆずり編はお守りの話をベースにいろいろと話を発展させてみましたが、読者の方々、いかがでしたでしょうか(話におかしなところなどがあれば言ってください)。

ええ、次回からは本筋の話に戻り、新章に突入ということになります。確か、どこかで言いましたが、次章でこの物語を終わらせる予定です。長々書いてきましたがようやくゴールが見えてきました。気がつけばもう一年も連載をしている話なんですね。正直、よくここまで書き続けられたと自分でも信じられない気持ちでいっぱいです。自分の性格から考えれば、奇跡みたいなもんですよ。しかし、それは読んでくださる方々がいてくれたから頑張れたのだと思います。そうでなければ、きつとどこかで心が折れていました。こんな後書きではありますが、この場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

p.s. 次回更新は次章の話を組み立ててから書くので、ちょっと遅れると思います。だいたい25日頃くらいには出来るかな。

## 86 月下の二人

空から見下ろしている銀色の月を眺めながら、ゆずりは屋根の上に腰掛けている。冷蔵庫からくすねてきたコーラを傍らに置いて、優雅に足を組んでいた。

月見酒（実際はコーラだが）には、少々湿り気が気になる雨後の夜だったが、光の粒が零れ落ちそうなほどに見事な満月は、そんな不快感などさっぱりと払い落としてくれる。

一日の終わりに見るには、少し豪華なほどにも感じる。

一方、ゆずりの横、つまりはコーラと逆の位置だが、そこにはペタンと腰を下ろした緋桐乃夜叉媛の姿があった。つるつるとした瓦に足を滑らせないようにか、周囲に気を配りながら、座っている。

その横顔は陶然と月を見上げるゆずりとは違い、少々疲れているようにも見えた。

「それで、時雨川のことは彼に何て話してるんだい？」

しばらくして、ゆずりが横目で夜叉媛を見ながら聞いた。

春臣が一日の短い覚醒時間を終え、再び眠りに落ちてしまった後、ゆずりと夜叉媛は現状報告をするために、こうして屋根の上に来ていた。何もわざわざこんなところでしなくても、と思われるだろうが、部屋でするよりもこちらの方が開放感があり、気分がいいというゆずりの提案で、屋根の上での話し合いとなっている。

「もう、彼から聞かれたんだろう？」

再びの問いに、緋桐乃夜叉媛は短く頷く。

「もちろん、大したことは話しておらん。大まかに、わしの仲間、

という程度じゃの」

「……少年は、何か疑っていたかい？」

すると、夜叉媛はちらとゆずりを一瞥してから、悩ましげに目を伏せがちな様子で答えた。

「さほど詮索はしてくる様子はなかったが……それも時間の問題かもの」

これは意味深な発言だ。

「ほい？ それはどうして？」

「聞く前に自分の行動を振り返ったらどうじゃ？ あんな奔放な振る舞いをしておれば、いつ犯罪者として警察に突き出そうと春臣が思い至るか、分からんからな」

腕を組んで鼻を鳴らした彼女に対し、ゆずりはくっかかか、と腹を押さえて笑った。

「食い物を食べ過ぎだっことを言ってるのか？ 残すよりはよっぽどいいと思うぜ」

「わしは人の家の物を勝手に食っておることを言っておるのじゃ。そもそもお主に食べていいと許可した記憶はない。じゃから、残す残さぬに限らず有罪じゃろうが」

「ほほう、世の中は厳しいね。少しくらいいいじゃない」

「よくないのじゃ。軽口を叩く前に、まず世の中の決まりを知れ」

彼女の目がかなり真剣だったので、ゆずりはふざけすぎたかと、後悔する。

「……分かったつてば、努力するさ」

少し、面倒だな。

普段、人と商売以外の面で深く接することのないゆずりにとつては、彼女の注文は少々難しいことだった。ルールというものは他人がいて初めて発生するものであつて、一人でいる時間が多いゆずりには、そういう堅苦しいものに頓着しない傾向があるのである。

法律だの礼儀だの規則だの、数え上げれば切りがない決め事で溢れた社会は、ゆずりとつて窮屈なものでしかない。だから、いつもであれば、人との接触はあまり長期間ならないよう気をつけている。そうしなければ、いろいろとボロが出て、ゆずりの決まりにルーズな面が他人を不快にするからだ。

しかし、今回の場合、そうともいえないだろう。いやが上にも、他人と時間を共有しなければならぬ。自らの失敗が招いた状況なのだし、そこからは逃げられそうにもないしな。

ゆずりはそう思つて一口コーラを飲んでため息をつく。

すると、それを見た夜叉媛の眼光が強くなる。げっ、と咄嗟に口元を押さえた。もちろん、そのコーラだつて、春臣から許可をもらつて飲んでるわけではないからだ。

夜叉媛はそれについて続けて文句を言おうとしたようだが、しかし、何か諦めたようにむすつとした表情のまま、そっぽを向いた。これはさすがにまずいと思ひ、笑つてごまかす。

「ごめんごめん。今度から自重するからさ」

「……もうよい」

彼女は呆れたように言つた。

「そんなことより、お主の正体のことじゃ」

「……」



「大丈夫じゃと思うが、くれぐれも春臣に話すでないぞ。その点に気を配ってくれ」

「はいはい、分かっていますとも」

ゆずりは頷く。

「きちんと約束したからね」

それは、ここに来てから了解したことだった。

『時雨川ゆずりの正体に関わる情報を榊春臣に口外するな』

という彼女からの半ば強制的な命令のことである。

どうしてそうなったのかというと、ゆずりが人間とは違う、少々特殊なタイプの存在であるせいだった。特殊であるがゆえに、ゆずりは人間と一線を画す超人的な身体能力を発揮し、さらに、不可思議な神力を発現することさえ出来てしまう体なのである。

他にもいろいろと秘密があるのだが、そこで問題になるのが、もしもそれらの情報が彼に伝わると、夜叉媛にとって困ったことに発展する可能性があるということなのである。

捕捉すると、彼女がこれまで春臣に対し、頑なに守ってきた秘密が露呈するかもしれないのだ。

ゆずりとしては、その可能性は少ないと踏んでいたが、彼女としてはそうだとしても危険性の芽は摘んでおきたいらしく、だからこそ、ゆずりにこれまでの経緯を説明した上で、こう突きつけてきたのである。

そして、今回の件で、明らかに自身に落ち度があるゆずりとしては、当然拒否するわけにもいかず、それを呑んだわけなのだ。

しかし、

「でもさ」

とゆずりは言う。

「夜叉媛ちゃんのやり方に文句を言うわけじゃないけれど、いつまでも『そのこと』を彼に秘密にしておくのはどうかなあ」

そこで、もう一度コーラを飲み、

「夜叉媛ちゃんだって、彼に隠し続けているのは辛いんだろう？  
だったら、綺麗さっぱり話しちゃえばいいのに」

すると、夜叉媛の眉がぴくりと不機嫌そうに動く。

「そんなことは、最初から分かっておる。それが出来ぬから苦勞しておるのじゃろうが」

そして、どこからかちゃっかり自分用に持ってきていたおちよこを取り出すと、ゆずりに向けてきた。コーラを注げというのだろう。了解、とゆずりはペットボトルを持ってちよこに傾けた。小さくしゅわしゅわと泡が立つ。

それを見ながら、ゆずりは訊ねる。

「まさか、彼との関係にひびを入れてしまつかも、とためらってるのかい？」

「あ、当たり前じゃ！」

「ふふーん、夜叉媛ちゃんにとって、それだけあの少年は特別な人間なんだ」

すると、それを聞いた彼女は飲みかけたコーラを気管に詰まらせたのか、途端に咳き込んだ。

「ぐっ……ゴホゴホ」

それを見て、ゆずりはにやついた。

「まあ、二人の様子を見てれば嫌でも分かるよ。だからこそ、夜叉媛ちゃんはそのことを言いたくないわけだろうし。うーん、じゃあいつそのこと、もう何も話さなければ分からないんじゃないか」

しかし、夜叉媛は強くを首を振った。

「そういうわけにもいかん。どのみち神社に赴けば、土地神がそのことを見過ごすわけがないだろうし。それに、そうなる前に、わしは春臣に話すと約束しておる。このことは、わしが、決着をつきたいのじゃ」

「……そりゃまた厄介なことだね」

ゆずりはくしゃりと前髪を手で押さえる。そして、苛立たしげにかき回した。

「迷惑をかけてる手前、何か私に出来ることがあればいいと思ったんだけど、この様子じゃ、夜叉媛ちゃんに心の整理がつくのを待つしかないさそうだね」

ゆずりはぶつと息を吐く。

「……せっかくだ、他に何かあれば話を聞くよ」

すると、彼女は少し思案した表情になり、目を落とすと、急に顔を上げた。

「じゃったら、聞いてもらいたいことがある」

「お、なんだい？」

「う、うむ。わしは今、一日中眠っておる春臣のために何か役に立てればと思っておるのじゃが」

「とうとう？」

「つまりの、お主が出かけた後に、何とか春臣に楽をさせようと家事をしようとしたんじゃ。じゃが、当然一人ではどうにもならん。

それで、わしの信者を一人呼んでやらせたわけじゃが」

「信者、ねえ」

そんなものがあるのか、とゆずりは少々驚いた。

夜叉媛の話は続く。

「しかし、考えてみれば、それは他人に仕事を押し付けたただけ、実際にわしがやったわけではない。春臣のために何かしようと思っておるのじゃが、わし自身では、結局何も出来ておらんのだ。この小さな体で、力も使えず……それを、今日実感した」

彼女のちよこを持つ手が震えている。きつと自らの無力を感じて、もどかしいのだろ。それほどまでに、彼女は彼のために必死なのである。たかがそれくらいで、と鼻で笑うことは出来るはずもない。ゆずりはそのどこへ向かうこともできない彼女の苛立ちの感情を肌でひりひりと感じるほどだった。

「わしは、わしは……」

すると、彼女の小さな手が胸元のお守りに触れる。そこで、はた

とゆずりの目が止まった。

「それ」

と指差す。

「う、なんじゃ？」

「いいお守りだ」

骨董品を眺めているように、ゆずりは感心のため息を漏らした。

「分かるか？ 春臣がわしに作ってくれたものじゃが」

「もちろん、時雨川は専門家だぜ」

どれ、と手を触れてみる。

すると、目を閉じたゆずりの視界に温かい色をした力の波が広がっていくのが分かった。まるで、春風のような穏やかさで、体の内側をエネルギーが満たしていく。

「ふうん、作り手の思いが伝わってくるね。余程一生懸命作ったんだろう。その熱意を指先で感じるよ。時雨川が作るお守りとは、また違う良さがある」

「うん？」

「人が誰かを想う気持ちってのはさ、それだけで強い力になるんだよ。純真で清らかな魂の力さ。神の力に匹敵するとまではいかないにしても、十分、相手を守ってくれる。フッフ、つまり夜叉媛ちゃんはこのなに彼から思われているわけだ。幸せだねえ」

「な、からかうようなことを言うな！」

しかし、彼女の頬がぼんやりと赤くなったのをゆずりは見ていた。

と、

「あれ？」

ゆずりはそのお守りのあることに気がつく。

「……ふふっ、こいつは面白い」  
「どうした？」

怪訝そうにこちらを振り向いた彼女に対し、ゆずりは含み笑いを  
する。

「もしかすると、夜叉媛ちゃんに力を貸してあげられるかもしれな  
いよ」

そう言って、残りのコーラを一気に飲み干した。

## 87 閉じられた場所

暗い廊下だ。

いつの間にか、そこに立っていた。

呼吸の音さえ吸い込まれてしまいそうな漆黒が、目の前にある。廊下の両脇の壁には、四角い窓があるが、どれもこれもなぜか厚い黒いカーテンで覆われていて、陽の光が届いていない。完全なる、閉じられた闇だった。

いったいどうやってここに来たのか、ここはいったいどこなのか、皆目検討がつかない。

濃い闇は、自分をここへ縛り付けるように、じつとりと濃密に体にまとわりついていているような感じがした。振り払おうとすると、さらにきつく深く、締め付けてくる気がする。まるで蛇に絡まれているようで、気持ちが悪い。

だが、なぜだか、ここから逃げたいとは思わなかった。不思議に落ち着く場所だ。

長い、長い、廊下である。

先は見通せず、まるで奈落へと続く深い縦穴のようで、四方八方から押さえつけられているような圧迫感があった。その先には見えない魔物が、真っ赤な長い舌をちらつかせながら、大きな口を開け、自分を待ちかまえている、そんなおぞましい予感さえする。

しかし、自分は前に向かって歩き出していた。

なぜか、

ずっと昔から、

それを望んでいたような覚えがあるのである。

どこか自己破壊的なその、暗い願望。

しかし、自分はその暗い感情にどこかこれ以上ない居心地の良さを感じていた。

ここがどこであろうと関係はない。

ただ、歩み行く。しつかりと、前を見据えて。  
しかし、そこへ響く声。

「行っちゃだめだ」

それは、人のようで人ではない、何者かの声だった。思わず立ち止まる。

「その向こうにあるものは危険だ」

振り向くが、そこには誰もいない。

しかし、自分はそのことには疑問を抱かず、

『危険？ そんなはずはない』  
と思う。

自分はこの先に待つものを『望んでいる』のだ。問題はない。しかし、再び歩き出そうとすると、また、声が響いてきた。

「よく考えるんだ。何が大切なことを。今の君に、何が重要なのかを」

それは耳ではなく、脳内に直接聞こえてくるように、不思議な心地がした。

「自分の、大切なこと？」

拳げようとした足が、止まる。

すると、なぜかぐうんと肩に重力がかかり、膝をついて、自分は倒れこんでしまった。廊下が闇の向こうへと傾いたのだろうか。

「分かっているはずだろう？ 君はここでこんなことをしては



だめなはずだ」

また謎の声。

どういうことだ？

転がりそうになる体を床にしがみつくことで押さえた。不思議な言葉に自分が揺さぶられ始めているのが分かった。

「すぐに引き返すんだ。難しいことじゃない。妙な幻想を断ち切る  
勇気があればいい」

「勇気？」

「そうだ。簡単なことさ。君には戻らなくてはならない場所がある  
はずだ」

すると、急に我に帰ったような気がした。催眠術が解けた感じで、  
体に何か巻きついてような、重量感が姿を消す。そうだ、自分  
は戻らなくてはならない場所がある。

そう認識すると途端に、冷や汗が噴き出した。

じゃあ、ここはいつたいたいどこだ？

「こわい、こわい……」

ひんやりとした空気が背筋を舐め、全身の毛が逆立つ。

間違いない。自分は今、恐怖していた。

目の前の向こうで待っているものに、戦慄している。歯が鳴り、  
鳥肌が立ち、膝が震えた。

早く、戻らなくては。

でも、どこに？

周囲に見えるものは目をふさぐ闇ばかりだ。  
分からない、だが……とにかく立ち上がれ。  
そう思った途端に、視界が淡く滲み始めた。

目を開けると、そこには時雨川ゆずりがいた。春臣は畳みの上に寝そべっている。彼女は肩ひざをつけて座っていて、春臣を覗き込んでいた。

「あ、あれっ?」

「明るい……」。

「ここは、いつもの部屋か。」

「少年、おっは」

すると、寝ぼけた春臣の頭上で能天気ゆずりが笑った。

「お、おはよう」

おどおどしながらも春臣も返事をする。そして、起き上がった体のあちこちを点検し、これが現実であることを確認した。

ここは勉強部屋で、傍にはドア、横には机、気になるような不審点はない。

しかし、先ほどまでの暗い廊下を、春臣は思い出す。

井戸の底のような、あの……。

あれは……ただの夢か。

「おい、少年」

と、ぼうつとしている春臣にゆずりが声をかけた。

「はい、何です?」

振り向く。

彼女は胡坐を組んでなぜか物珍しそうに春臣を見ていた。

「体の調子はどうだ?」

「体の調子、ですか?」

そう言われて考える。

特に不調はないように思えた。体がだるいわけでもないし、熱もなさそうだ。眩暈めまいがするわけでもないし、怪我があるわけでもない。いたって、健康そのものである。

「別に、問題な……」

言いかけて、

「あ! そう言えば」

と、あることに気がつく。

そうだ、自分は呪符の力を抑えるために体力が消耗しやすくなっているはずなのだ。なのに、どうしてこんな風に自然に動ける。いつもからだがるくて仕方が無かったのに。

「実はな、少年」

すると、ゆずりが懐から短冊のような紙切れを取り出してちらつかせた。

「それって」

「少年に張り付いてた呪符。もう取れちった」

手で後頭部を触れると、なるほど、確かに何も無い。

「でも、取れたっていつの間に？」

「つい今しがた、君が眠っている間だよ。いやあ、ようやく仕事が済んだなあ。一週間もかかったかあ」

そして彼女は大きく背伸びをする。ごきりごきりと肩を鳴らし、さらにもう一度背伸び。おまけにあくびまでかました。

春臣はそんな彼女の気の抜けた様子を見ながら、ただただ唾然としていた。自分が眠っている間に何が起こっていたのか、説明が欲しかったのである。

「そんな簡単に、呪符って剥がせるんですか？」

「そだよ。説明したっけ？　そもそも呪符自体は本来人を守るための道具で、人に害を与えるものじゃないんだ。今回の場合はその使用用途を逸脱していたわけだから、君との結合のシステムさえちよちよいと破壊できれば、案外容易に呪符の方から剥がれてくれるんだ」

彼女はそこで一度区切り、

「これももし、呪符を土台としものではなく、本当に人を狙うことを目的で作られたものを土台にしてあれば、対処にかなり時間がかかったらうけどね。でも、今回厄介だったのは、前にも言ったように、呪符を拘束している君自身の力だったわけさ。まあ、こちらの方はそれを抑制できるお守りの力があれば十分。対処方法がシンプルだから、特別困ることは無かった」

そして彼女は指で挟んで呪符をひらひらさせて、手で包み、ぐしやぐしやにしたかと思うと、また掌を開いて、なにやら呪文を唱えた。

なんといつているのか、聞き取ろうと思った瞬間、呪符にぱつと火がつく。

「うわっ」

春臣は驚いて尻餅をついた。

しかし、彼女はとんでもない高温だというのに、涼しい顔のまま、手の中で踊る赤い火を見ている。

「こつという危ないものはさつさと処分するに限る」

そして、ぱつと握りなおし、もう一度開くと、掌には灰一つ残らず、呪符は消えていた。春臣はそれを口を開けたまま眺めていた。

「はいつと。これで全部終わり。本当に迷惑をかけたね」

「ああ、はあ」

春臣はひざをついて座り込む。何だか質問したいことがいっぱい浮かんできた気がしたが、たくさんありすぎて脳内に渋滞しているのか、言葉が上手く出てこなかった。

そして、代わりに、あることを思い出す。

「あ、そつだ。媛子は？」

いつもなら自分のことを心配して傍にいてくれそうなものだが、部屋の中に彼女の姿は見えなかった。

「外にいるよ」

ゆずりが顎でドアを差す。

しかし、

「でも、今は出れない」

と首を振った。

「え、どうして？」

「結界を張ってるからね」

そして、ゆずりは部屋の天井近く、柱がある四隅を順に指差した。春臣も目を向ける。するとそこには彼女のお守りらしきものが四枚貼り付けてあった。どうやらそれが、結界というものらしい。

「外部から余計な影響を受けないための措置だよ。出来るだけ安全に、呪符を取り外すためのね。ここは特殊な異空間で、神の世界とも繋がっている。結界にエネルギーを供給し、より強固にするためには申し分ない環境だったし、ちょうどよかったよ」

「結界を、強固に……」

「この結界が張ってあれば、外部からは馬で体当たりしようとも、ミサイルを打とうとも、簡単に部屋に侵入することは出来ないんだ。そして、その逆も然り。頑丈だろ？ つまり、今ここは、外部から切り離された完璧な封鎖空間にあるということさ」

「はあ、よく分かりました。だったら、すぐにその結界を解いてくれませんか？」

「……」

しかし、彼女は返事もしないまま、無表情になって正面の壁を向

いた。

「あの、時雨川さん？ 聞いてますか？」

「結果はまだ解かない」

ぼつり、と言う。

「な、どうして？」

春臣が驚いて聞くと、彼女は壁にもたれて座った状態で、首だけをこちらに向けた。

「少し、話をしないか？」

そう言って、彼女は不気味に微笑んだ。

「話、ですか？」

春臣はきよんとした。

「そう、君とはまだ二人だけでゆっくり話をしていないだろうか？」

ゆずりは壁にもたれかかったままで、前髪をいじっている。

「……確かにそうですが」

何の話をするつもりだろうか。それも、こんなに改まって。春臣は不思議に思った。

まさか、こんなときに自分と世間話が出来たいってわけじゃないだろうし、でもそうでなければ、何の話だろう。悩み事、とか？

しかし……うーん。

春臣は心の中で首を傾げた。

それは考えにくい話だ。目の前にいる、この白装束の謎めいた女性が、自分などに悩み事を話すことなどあるものだろうか。そんな柄ではない気がするし、そもそも悩みなどあるのかどうかも疑わしい。

となると、これはいつたい……。

ふいに、彼女が突然立ち上がった。かと思うと、ずい、と春臣のすぐ傍まで来る。

そして、す、となよやかな白い手を伸ばし

「えっ？」



ぼつっとしている春臣の頬に添えると、自分の顔の方へ近寄せた。

「あ……」

「さほど時間はかけないつもりだがね。真剣に答えてもらいたいことがあるんだ」

春臣の目の前で、彼女の赤く艶やかな唇が動き、そこから、漏れる吐息が肌に触れた。

「……答えてもらいたい、こと？」

急な彼女の接近に心臓が高鳴るのを感じつつ、春臣はぼんやりと繰り返す。ゆずりから漂う、底知れない大人の女性の匂いは脳内の思考回路を少なからず、ショートさせたようだった。見えない力に抗うことが出来ず、彼女の手を振り払えない。

こんな雰囲気ですりたいどんなことを聞かれるのだろうか。妙な考えが浮かびそうで、春臣の視線は一箇所に留まらず、どきまぎと右往左往してしまった。

しかし、ゆずりと目が合ったとき、あれ、と思った。彼女の大きな瞳には真っ直ぐな真剣さが強く宿っていたのである。いつものように、どこか気を抜いている雰囲気はなかった。

春臣は目が覚めた気分になる。

「そ、それって、どんなことですか？」

「なに、簡単な質問に答えて欲しいんだよ」

彼女はそう囁いて、春臣からするりと手を離すと、そのまま数歩下った。何をするのかと思うと、立ったまま思案顔で春臣の顔をじっと見つめる。そしてさらに、落ち着かないように部屋をあっちへこっちへうろろしてから、最終的に勉強机の椅子に座った。そ

の姿はまるで推理に煮詰まった探偵のような拳動だった。

質問の内容を考えているのだろうか？

それからしばらくどちらとも喋らない時間が続き、ついに耐え切れなくなつた春臣は、半分ほど手を挙げながら聞いた。

「あの、話は？」

「少年、君は……」

すると、一拍遅れて、ゆずりがようやく口を開いたところだった。

「何ですか？」

「うむ……君は、もしも、『誰か身近な人が君を裏切っていた』として、それを知ったとき、君はいつたいどうする？」

「な、何ですか、藪から棒に！」

春臣は思わず素つ頓狂な声を出した。

「いきなり脈絡のないことを聞かないでください」

しかし、彼女はそんなことはお構いなしに、口調を強めてさらに言った。

「そんなことは関係ない。時雨川の質問に答えるんだ」

「ちよつと待つてください。いったいそれは何の質問ですか？」

「意味が分からないか？ 特に意味不明な言葉は使用していないが」「質問自体の意味ではなく、なぜ、そんな質問をするのか聞いていますよ」

身近な人間が裏切っていた時、自分がどう行動するか、だと。

そんなことを聞いて彼女に何のメリットがあるというのだ。春臣

は彼女をじつと睨む。

いったい彼女は何を企んでいるのだろう。

考えてみれば、彼女の様子は先ほどから変だった。何かそわそわしている。

それに……。

春臣は思った。

それに、そもそも結界を張ってここを封鎖空間にしているという話も、何だかおかしい気がする。

まるで、自分を逃がさないようにしているかのようだ。

そう思った春臣は、さらにこう問い詰めた。

「時雨川さん、いったい何を考えているんですか？」

「私は私なりに考えているさ」

「はぐらかさないでください！」

そう怒鳴って、ぎり、と強く歯に力を込める。

と、その春臣の様子をさすがに変だと思ったのか、ゆずりは立ち上がって、春臣を見た。そして、諭すようにこう言う。

「いいかい、少年」

「な、何ですか？」

「言っておくが、これはとても大切な質問なんだ。ふざけているわけでも、少年を陥れようとしているわけでもない。少年に關係する重要な話なんだ」

彼女の口調はいつものようではなく、厳しいものだった。これには、春臣の中で彼女を疑おうとする気持ち揺らいだ。ゆずりの顔は、とても嘘を言っているようには見えなかったのである。

だとすれば、これはいったいどういうことなのだろう。

春臣は彼女から目を逸らさないままで、

「答えたら、ここから出してくれますね？」

と確認のために聞いた。

「それは当然だろう。せつかく呪符が外れたのに、少年をいつまでもここに閉じ込める理由なんてないんだから」

ゆずりは何を下らないことを、と言いたげだった。

春臣は心の中で頷く。どうやら、信じてもよさそうだな。

「……分かりました」

と、長く息を吐いた。

「答えればいいんですね」

「うん、そうしてくれると助かる」

自分を裏切った人をどうするか、か。

さて、と考える。難しい話だな。

そして、しばし沈黙した後、考えがまとまった春臣は口を開いた。

「俺は……」

「うん？」

「俺だったら、きっと相手を『許す』と思いますよ」

それを聞いたゆずりは一瞬、目を見張り、

「許す、か」

と呟いて、それまで硬かった表情をほころばせた。それはまるでコーヒーに溶けるミルクのようで、春臣はほっとする。それまで収縮していた空気がまた元の大きさにまで膨らんでいき、重苦しさが消えていくのが分かった。

「なるほど、君は実に寛大だねえ」

彼女はからりと笑う。

「でも……どうして、そう思うのかな？」

「……そうですね……」

春臣は一瞬詰まってから、

「俺、生きていくには、『誰もが傷を背負わなけりゃいけない』って思っんですよ」

と答えた。

「というと？」

「生きていれば、皆、誰かを傷つけずにはられない、ってことですよ。嘘をつかない人はいないし、喧嘩だって誰でも一度はするでしょう。相手の気持ちが変わらず、無神経なことを言ってしまうこともありますし、大切な約束を忘れていたり、つい意地悪なことを言ってしまったり……。身近な例だけでも挙げればきつと切りがありません。この世にいつまでもはびこる犯罪、国や民族間の戦争紛争、ネット社会の誹謗中傷。そのどれもこれも、我々人間が引き起こし、衝突し、傷つけあってるんです」

「ぶつむ」

「裏切るといふ行為だって同じ。明らかに人を傷つけてしまうもの

です。確かに簡単にゆるされることではありませんよ。でも、生きていく上で、人を傷つけてしまうことなんて数え切れないほどあるなら、俺は、もっとその先を考えるべきだと思うんです」

「その先、とは？」

「受けた傷をどう癒すのか。お互いにその傷跡をどう受け止めるのか。過ちから、いつたい何を学び取るのか。きっとそれこそが大事なことだと思うんです。裏切られたのなら、その事実を見つめ、そこから新たな一步を踏み出す。だから、だからそのためには、こちらからも相手に歩み寄らないといけません」

「なるほど。そのために、許すのか」

すると、ゆずりは言葉をかみ締めるように、少しの間目を閉じていたが、やがて嬉しさを表現したのか、微笑えんだまま、ぷくうと頬を膨らませる。そして、まるで春臣の頭を自分の子供のようにくしゃくしゃと撫でた。

いまいち何が起こっているのか分からないまま、春臣の視界がぐらぐらと揺れる。しかし、どうやら褒められているようだと分かり、なんだか恥ずかしくなった。

## 89 優しさの理由（前書き）

どうも、ヒロユキです。

話が半端なところから始まって、また妙なところで止まります。すいません。上手く区切れなかったんです。

そういえば、時雨川ゆずり編もそろそろ終盤です。途中で方向を見失いかけてましたが、なんとかここまで漕ぎつけました。今回も一段と長かったです。

## 89 優しさの理由

「夜叉媛ちゃんも言っていたが、少年は本当に優しいんだな」

何気なく、彼女が言った。

「え……」

しかしなぜか、その言葉を聞いた途端に、春臣は胸の奥がぐぐつと押さえつけられるような気がした。

「どした？」

「……俺は、優しい、ですか」

「うん、そう思っけど……それが何か引つかかるのかな？」

怪訝そうにゆずりが顔を覗き込んでくる。

「いや、何だか突然よく分からなくなってしまった。人に優しくするって理由が」

「……人に優しくする理由、ねえ」

腰に手を当て、吟味するようにゆずりは言った。春臣は、俯きながら額に手を当てる。

「どうして俺は、こんな風に思うんだろう。今の話だって、確かに言葉で説明することは出来ましたが、どうしてそう思うのか、もつと根っこの部分が見えてない気がするんです」

「そうかい？」

「なぜ、自分は他人に優しくするのか……もしかして、俺は『他人



に優しくする方法』を知っているだけで、単にそこに後から理屈を当てはめているだけじゃないんでしょうか？」

それは、底知れぬ疑念だった。

春臣の心の奥に、見たことのないぞわぞわとした黒い塊が地を這うようにして広がっていくような気がした。

「君は、自身の優しさを偽物だと思っているのかい？」

ゆずりが問いかけてきた。

「……分かりません」

力なく首を振る。

「ただ自分が他人に優しくする理由の底の部分に、すっぱり穴が抜けている感じがしたんです。時々机の引き出しを開けて確認していた大事な宝箱が、いざ開けてみると空っぽだったような……」

言い知れぬ不安が春臣の胸中を席卷していた。ぐるぐるとぐるを巻く暗雲のように、春臣の心に黒く巨大な影を落としている。心なしか、指先がひんやりしてきたようだった。

すると、そんな春臣に対し、ゆずりは何かを思い出したのか、「あっ」と小さく声を上げた。

「何か？」

「い、いや、難しい話だ、って思ったさ」

なぜか焦ったように目をきょろきょろさせている。

「優しさの理由、か。でも、別にそれは君じゃなくても、他の誰だつてきちんと理解している人はいないんじゃないかな？」

「時雨川さん、も？」

聞くと、彼女は頷く。

「そ、そうだよ。特に時雨川は一人者の流れ者だからねえ。優しくする以前に、他人にどうしてあげたらいいか迷うことなんて、しょっちゅうさ」

「そういつ、もんですかね……」

呟きながら、春臣は気持ちを緩めるようにすとんと肩を落とした。正直腑に落ちないが、確かに、彼女の言う通りなのかもしれない。そう考えたのである。

優しさなんて実体のない不確かなもので、手で触れて確かめるわけにもいかないし、本当のところは誰にも分からなくて当然なのだ。

「目に見えないものの話は、いつだって面倒なんだよ」

彼女が目を細めながら、詩人のように言った。

「……そう、ですね」

と、

「そうそう、時雨川なんていつも困ってることがあるんだがな」

ゆずりが急に明るい声で人差し指を立てる。

「え、何です？」

「匂いだよ匂い」

さも厄介そうに顔をしかめて、彼女は立てた指を鼻の頭に寄せた。

「山を歩いているとそうでもないが、町を歩いているとおいしそうな食べ物匂いがいたるところからするだろう？」

「……………」

「あれは時雨川的には非常にまずいんだよ。時雨川はおいしいものの誘惑には弱いからさあ、いろんな食べ物の匂いを嗅ぐともうパニックになるのさ。どっちに行こうかなって。お金を持っていればまだいいけど、持ってないとさらに悲惨で、誘惑されないように町を逃げ回るんだよ」

「……………」

「な、大変だろ？」

と、同意を求めてきた彼女の顔はあまりにも真剣で、それを見た春臣は返答するより先に、お腹の底が震えだすのを感じた。

「……………くくく、ははははは」

「な、何で笑う、少年」

春臣が急に腹を抱えて笑い始めたのに驚いたのか、彼女は目を丸くした。

「いや、すいません。とつても時雨川さんらしいなって思って、おかしくって……………くくく」

笑いが止まらない。

すると、ゆずりは怒ったのか、むんと唇を突き出した。

「少年の癖に、生意気だぞ」

大人をからかうな、ということなのだろうか。  
しかし、春臣には反論する手立てがあった。

「ははは、よく言いますよ。その生意気な少年の家の冷蔵庫から、  
食べ物勝手に物色しているのはどこの誰です？」

彼女が分かり易くのけぞった。

「ぐう、返す言葉がない」

「ふふふ……」

いたずらっぽく笑って、そこでようやく、春臣は目じりに溜まった  
涙を拭いた。さすがに笑いすぎるのも彼女に失礼だろう。

続けて、大きく深呼吸する。

すると、いつの間にか先ほどの鬱屈とした気分も消え去っていた  
ことに気がついた。あの黒々とした、得体の知れない暗雲のような  
気持ちである。

笑ったおかげでどこかに飛んでいってしまったのかもしれないな。  
彼女の少し変な話は春臣の沈んだ気持ちを和ませる作用があった  
ようだ。

「……あのさ、少年」

と、ゆずりが、ぽつりと呼んだ。

気がつく、春臣のすぐ目の前に彼女がいる。またしても、彼女  
には似合わない真面目な顔で、こちらをじっと見つめていた。

春臣は緊張して、顔の筋肉がくっくと収縮したのが分かった。  
今度は何を聞かれるのだろうか。

そう身構えていると、何の前触れも無く彼女が両腕を広げ、

「え……!」

春臣をぎゅっと抱き寄せた。

「あ、の……時雨川、さん……?」

春臣は驚いて身じろぎする。

しかし、そうするとさらに彼女は春臣に身を寄せ、逃げないよう  
にか、回した腕に力を込めた。体がもつと密着する。

「じつとして……」

囁かれた。

さらに、

「春臣君」

なぜか名前で呼ばれ、ドキリとした。

「言おうか言うまいか迷ったのだが……」

「は、はい……?」

「君は、あまりこういうことで悩み過ぎないほうがいい」  
「……」

「君は一見、芯が通っているようで、実は、案外脆く、危なっかし  
いところがあるみたいだ。だから、こうして時々難しいことを考え  
たがる。でもね……」

ゆずりの声が耳元で聞こえ、目の前には、彼女の蒼い髪が、まる

で宝石のように輝いていた。初めて間近で見たその神秘的な色に、春臣は無邪気に触れなくなった。

「君は君のままでもいいのだよ。この世に、完璧な存在など、いやしないのだ」

春臣はとう言ったらいいものか、迷って、

「なぜ……どうして、急にそんなことを？」

と訊いた。

「……」

彼女はすぐには答えなかった。

ややあって、

「……さっきの夢は覚えているかい？」

「夢、ですか？」

彼女に言われて、春臣は思い返す。

夢。そういえば、確かにさっき目覚めるまで何か奇妙な場所の夢を見ていた気もするが……。残念ながら、今となってはほとんど記憶は残っていないかった。

「いいえ」

「そうか……覚えてなければその方がいい」

彼女は安堵したようだった。すると、それと同時に、少しずつ、春臣の背中に回っている手が緩んでいった。

「いいかい？ 暗い誘惑に惑わされてはいけないよ」

と、それだけ言って、彼女はついに春臣から体を離した。そして、また椅子に戻る。難しい顔をして、天井を見上げた。

春臣は呆然とする。

ゆずりが不思議なことは今に始まったことではないが、今日はいつのも増して、その不思議さに拍車がかかっているようだった。

ゆずりに抱きしめられた感触がまだ残っている。

急に、こんなことをしてくるなんて。全くの予想外だった。

春臣は眉間をつまんだ。

それに、暗い誘惑って……。

## 90 想いとお守り

「さてとお」

彼女は、椅子に座って大きく伸びをした。

「すまないね。妙な話をしてしまって」

「……これで、終わりですか？」

「そうだよ。私が話したいことはこれだけ。とりあえず安心した」

そう言って屈託無く微笑する。しかし、春臣は自分だけが取り残されているような釈然としない気持ちがあった。

「俺はいつたい、何を試されたんです？」

「試すだなんて人聞きが悪い。ちよっとした好奇心だよ」

ゆずりは不機嫌に口を尖らした。

「好奇心？」

「そ。でも、急に驚かせるようなことをしてしまったことは事実だね。だから、そんな少年へのお詫びというか、何というか。とにかく見てもらいことがあるんだけれど」

「はい？」

今度は何をされるんだ？

すると、彼女はドアの方を見た。

「少年、夜叉媛ちゃんを呼んでみなよ」

「へ？」



そう言われ、今まで春臣は彼女のことをすっかり失念していたことに気がついた。

そうだ、呪符が剥がれたことをまずは媛子に報告しなければならなかったのだ。彼女の心配そうにしている顔が思い浮かぶ。一週間とはいえ、媛子にはいろいろと迷惑をかけてしまったのだし、その点についても、お礼を言わなければならなかった。

「わ、分かりました」

素直に従い、ドアに向かう。

しかし、ノブを握って、あることに気づいた。

「そうだ、結界は？」

確か、彼女の話では、現在この部屋は完璧な閉鎖空間であり、あらゆる一匹抜け出せない状態にあるのだ。だとすれば、自分がドアノブをまわしても外には出られないはずで、まずは、彼女にその結界を解いてもらうのが先だった。

見ると、ゆずりは身体をのけぞらせ、豪快に欠伸をしているところだった。ふにゃ、と間抜けな声を出す。

「うん？ 何の話だい？」

「いえ、結界ですよ。さっき言ってたじゃないですか」

しかし、彼女は春臣の言葉には答えず、無言のまま立ち上がり、窓にかかっていたカーテンを開けると、さらに、いとも簡単な様子で窓まで開けてしまった。

そこには、見えない力の壁があるわけでもなく、のどかな鳥のさえずりが聞こえ、初夏の朝の光がきらきらと差し込んできていた。

「へへん」

と彼女は得意げに鼻をこする。その表情はしてやったりと嬉しそうに口元が緩んでいるものだった。

こうなると、春臣としてはお手上げだ。  
なるほど。そういうことか。

「……俺を騙しましたね」

と、肩をすくめる。

「いやあ、どうしても君から真剣に話を聞きたかったからね。逃げ出してもらっちゃ困ったし。それよりさ、早く夜叉媛ちゃんを呼びな。心配してたみたいだからさ」

「……わかりました」

結局、最後の最後まで彼女に翻弄されっぱなしだな、と春臣は半ば降参したような気持ちになった。

まあ、いいか。

すぐに気持ちを切り替え、部屋から出ると、この家のどこかにいるはずの媛子を呼んだ。

「……おい、媛子？ どこにいるんだ？」

部屋の前にいないということは、階下だろうが、そうになると、居間でくつろいでいる可能性が高い。春臣は階段を下りて、居間に向かおうとした。

しかし、そこで、こちらに向かって駆け寄ってくる何者かの足音が聞こえた。どたばたと騒がしく、春臣はその足音の正体を訝った。

椿が家に来ているのだろうか、いや、それにしても、足音がうるさい。彼女ならば、トストスともっと静かに走ってくるはずであると、

「誰だ？」

春臣は首を傾げる。

すると、その足音の正体が廊下の先からささっと、姿を現した。そして、春臣へと一目散に階段を駆け上り、体をかばう時間もないままに、突進してきた。

「はーるーおーみー！」

抱きつかれた。

「うわあああ！」

驚いて悲鳴を上げる。春臣はそのまま後ろに倒れて、階段の段差で背中を打った。

「痛ててて」

痛みに顔をしかめる。

体が元通りになった直後に、これはさすがに堪えるものがあつた。すぐにでも起き上がりたかったが、体に抱きついてきた何者かを振り払わなければ、起き上がるうにも起き上がれない。

「くそつ、一体なんだよ」

「春臣、春臣！」

あれ、どうして、俺の名前を呼んでるんだ？  
パニックになった頭で考えながら、春臣ははっと思った。

「あれ……ひめ、こ？」

「そうじゃ。春臣。わしじゃ」

目の前の人物がそう返事をした。慌てて目を擦る。そして、その人物を間近に見て、呆気にとられた。

それは確かに媛子だったが、いつもの彼女ではなかったのだ。  
なぜなら、彼女の体が……。

「ふふふ、びつくりしたか？」

彼女は小悪魔的な笑いを見せる。

「そりゃ、そうだろ……」

知らず、声が震えていた。

「少し見ないうちに、こんなに『大きく』なってるんだから……」

そうなのだ。

彼女の体は、以前とは比べ物にならないくらいに成長していた。  
春臣と同じくらいとは言わないが、見た目の年齢では、大体七八歳の子供くらいの体格にまで大きくなっていたのである。

「ふふふ。無事に呪符は剥がれたようじゃの」

唖然としたままの春臣を無視して、嬉しそうに小さな手でぺたぺたと春臣の後頭部を触る。くすぐりたいので、是非ともやめてもら

いたい。

「これは、いったい何がどうなってるんだ!？」

「……君のお守りさ」

すると、返事が背後から聞こえた。階段の上に倒れたまま、頭だけを上に向けると、ゆずりが覗き込んでいるところだった。

「はい？」

「だから、種明かし。夜叉媛ちゃんが本来の姿を取り戻しかけているのは、少年のお守りの力ってわけ」

「そうじゃ、これのおかげなのじゃ!」

媛子が目の前で首にかけているあの緋桐の花が刺繍されたお守りを見せてきた。

「これが？」

春臣は首を捻る。どう見ても普通のお守りにしか見えない、というより、少なくとも春臣が何か細工していたわけではない。

すると、再びゆずりが話し出した。

「少年、君には、君自身に宿る不思議な性質があることを説明したね」

「え、ああ、はい」

春臣は思い出す。彼女が話してくれたのは、春臣の体は、神力を引き寄せる力と、穢れを引き寄せる力、両方を併せ持っているという話だったはずだ。

「それが何か？」

「今回のパターンは、君のその力がプラスの方向に働いた結果なのさ」

そして、彼女は階段を一段、二段と下り、春臣と媛子の隣に腰をかけた。

「プラスの方向に働いた？」

「そうだよ。私は少年がそのお守りを作るに至り、何を考え、どれをどのように作ったのかは知らない。だけれどね、少なくとも、少年の夜叉媛ちゃんに対する、温かい真心を感じることが出来た」

「は、はあ」

「人の想いとは、『目に見えないもの』だけれど……」

彼女はそこで意味ありげに春臣に目配せする。

「え……？」

「けれどね、それは時に目に見えるもの以上の力を発揮するものなのさ。君の純粹なる夜叉媛ちゃんへの愛情は、君の中にある神力を引き付ける能力と呼応し、お守りに不思議な力を宿らせた」

春臣は頷きつつ、彼女の話の話を聞いている。

「つまり、具体的な話に移るけれど、以上のことから、君がそのお守りに入れていた榊の葉、それへの神力貯蔵のキャパシティーが大幅に増大した。そのため、夜叉媛ちゃんへと供給できる神力の量も格段に増やすことが出来る状態になっていたんだ」

ゆずりは、そこまで来て小さくため息をついた。

「しかし、残念なことにそれだけの好条件にまでお守りの力を高め  
ておきながら、あと一歩のところそのシステムの稼働に至ってい  
なかつたわけだよ」

「はあ」

「だからさ、時雨川がちょちょいと細工をしてあげたわけさ。その  
システムが上手く作動するようにね」

すると、彼女は本当に骨が折れたと言いたげに、肩を押さえつつ  
ぐるぐると回した。

「その結果が、彼女の急激な体格の変化だよ。供給できる神力が増  
えれば、必然的に彼女も大きくなる」

「な、なるほど」

春臣は頷いた。そこでようやく合点がいったのだ。

「そういうわけだったのか」

すると、そこでゆずりはさらに思ってもみないことまで口にした。

「おそらくだけれど、彼女の体はあと数日で完全に元に戻るはずだ  
よ」

「え、完全に、元に……」

春臣は目を見張る。

それは思っても見ないことだった。

「元の身長まで？」

「そつだよ。嘘なんて言わないさ」

だとすれば、これからの生活がずいぶんと楽になることは間違いない。今までは彼女の体の小ささ故に、日常生活の様々な弊害を乗り越えなければならなかったが、体格が戻れば、これからの生活レベルが春臣に追いつくのである。いちいち階段の昇降で転がり落ちることを心配しなくてもいいし、食器を彼女サイズに合わせることもない、それに、春臣がふとした瞬間に小さな彼女を踏みつけてしまうというリスクもなくなるのだ。

いや、そんなことより……。

春臣は媛子に微笑みかける。

何より、彼女にとって、「本来の姿」を取り戻すことは一番嬉しいに違いなかった。

「よかったな、媛子」

春臣は何のわだかまりもない声で喜びを表現した。しかし、彼女はそんなことはどうでもよかったのか、

「ふふ、はーるおみ」

とびきりの笑顔で春臣の首に手を回し、頬ずりしてきた。胸の中に温かな幸福感がこみ上げてくるのが分かる。

「媛子……」

が、そこで、

「あのさ、邪魔して悪いけど」

顔を向ける。

すると、所在無げなゆずりが春臣たちから視線を逸らしていると



ころだった。

「いつまで君たちはいちゃいちゃと抱き合っているんだい？ さすがの時雨川と言えど、嫉妬しちゃうよ」

苦々しげに言われ、春臣と媛子はお互いの顔を見合わせる。一瞬、沈黙して、ようやく自分たちの行動がいかにも恥ずかしいものかを認識し、大いに赤面した。

## 90 想いとお守り（後書き）

どうも、ヒロユキです。

今週はテストと重なり、ちゃんと投稿できるか不安でしたが、何とか予定通りできました。とりあえず、一安心しております。それにしても、春臣と媛子は人前で何をしているのやら。

そういえば、最近、新しく小説を投稿しました。この作品とは雰囲気異なる物語ですが、もしお暇があれば読んでいただけると嬉しいです。

報告はいじよ！ それでは。ノシ

## 91 フクロウとゆずり

温かな午後の光が、木々の葉の間から、切れ切れに差し込んできている。

時雨川ゆずりは、春臣の家の前に立つ、一本の老木の枝の上に悠々と寝そべっていた。長年の間、風雨に耐え、隆々とした筋肉のように太くなった枝は、ゆずり一人分の体重などももっていないように、少し動いた程度では、みしりとも揺れない。

ゆずりはその枝が二股に分かれている場所に頭を乗せ、鼻歌を歌いながら、のんきに紙飛行機を折っていた。作り慣れている様子で、紙の上を滑るように指が動いており、綺麗に折り目をつけている。

と、そこへ、どこからともなく一羽の鳥が舞い降りてきた。静かな羽音で、どこかどっしりとした貫禄のある斑色の羽をしたその鳥は、大きな目をしたフクロウだった。そのフクロウは、ゆずりのすぐ傍の枝に止まると、何をするかと思いきや、じ、と彼女の手を観察しはじめた。しばらくして一度、ホオ、と鳴く。

するとゆずりは、そのフクロウの存在に気づいたようで、のっそりと頭を向けた。そして、そのフクロウに対し、旧知の仲であるかのように軽く礼をし、こう言った。

「どづも、アオヒノワシノミコト蒼日鷲命さま。今日はフクロウの格好なんですね」

突然に話しかけられたフクロウはと言うと、驚いて逃げようとする様子もなく、

「ふん」

と鼻息を飛ばした。

そして、おもむろに口を開き、

「普段はこの格好の方が動きやすいからな。本来の鷲の姿でこんな場所に来れば、周りの鳥どもが何かとざわついて耳障りだ」

なんと、言葉を話した。しかし、それに対し、ゆずりも全く驚く様子はない。それどころか、寝転がったままくすぐすと笑った。

「嗚呼、おいたわしや、命さま。ずいぶん嫌われていらっしやるのですね」

「いらん戯言を吐くな、ゆずり。俺はお前のその悪意の込もった挨拶に付き合ってやるほど暇じゃないんだ」

そう言って、フクロウはその両翼をまるで脅かすように一度広げて見せた。その様子はどこか普通のフクロウとは違う、荒々しい威圧がある。

「まあまあいいじゃないですか。普段は会えないことが多いんだし。たまにこうして、冗談を言い合って時間を潰すのも」

「あんな、俺はいろいろと忙しいんだよ。それに、あんまり長居すると、ここの土地神にどやされるかもしれないしな」

位の高い神ってというのは、縄張り意識が強いことが多いんだよ、と面倒くさそうに言う。

「そうですか、それは残念ですね」

しかしゆずりは全く残念そうになく、そう言った。本心の見えないその表情は、フクロウに対する柔らかく打ち解けた様子の言葉とは裏腹に、どこか硬質的なものを感じさせる。

「それでは早速本題へ？ 何の用ですか？ あの少年の呪符なら無事に除去、破壊しましたか」

すると、フクロウの首が機敏にくるりと動いてゆずりを見、そして、木々の合間から見える家の方へ向いた。

「……そうか。それはなによりだ。一先ずは安心だな」

そこでゆずりは起き上がると体勢を変え、枝の上で正座したまま、恭しく頭を下げる。

「なによりも、ここ数日、命さまがお力を貸してくれたおかげです。土砂崩れの際に子供をお救いいただいたことに始まり、時雨川の失敗のせいでお守りを作る際にもいろいろとご迷惑を。後者に関しては、時雨川一人ではまだ作製に時間がかかっていたでしょう」  
「ふん」

フクロウはぶつきらばうな様子でそっぽを向く。照れているのか、顔の周りの羽が妙な感じに逆立った。

「それくらいは当然のことだ。部下の失敗の責任を背負うのが上司としての役目というものだろう。そう大したことじゃない」

すると、ゆずりが指に紙飛行機を摘んだままで、何かを閃いたようにぽんと掌を打った。

「あ、そうですね。そう言ってもらうと時雨川も気が楽です。じゃあ、この件は貸し借りなしのチャラということでもいいですね」

フクロウの後姿が、げんなりしたように沈む。

「……お前は相変わらずだな。どうしたらそういつ図々しい思考回路になるんだ」

しかし、彼女は不気味なほどにこにこと笑ったままだった。

「ったく、この失敗が、少しはいい薬になったと思っていたが……まあ、そのことはいい。それより、聞きたいことがある」

ゆずりは、手首をしならせながら、今度は紙飛行機を投げる練習をしていた。

「何ですか？」

と訊く。

「この家に住む、その少年と、お前が話していたやつのことだ。そいつらの関係はどうだ？」

ゆずりの手が一度だけぴたりと止まり、

「……神の世の者と、人の世の者がどう暮らしてるのか気になるんですね？」

と、すぐにまた動き出す。

「そつだ。お前はどう思った？」

「そつですね、率直にとても面白い、と思いますよ。時雨川は久々に驚きました」

「ほう。それは？」

「ああやって、本来別世界に住んでいるはずの者たちが、お互いを思いやり、助け合い、同じ場所で共同の生活を営んでいる。少なくとも、時雨川の常識では考えられないことです。数日間ではありましたが、彼らと生活したことは、中々貴重な体験でした。久々に神と人の関わり方について、真剣に考えましたよ」

そうやって、ゆずりの手が紙飛行機を放った。それは彼らの前でゆっくりと風に乗れり、木々の枝を抜けて飛んでいく。ふらふらと危うげに蛇行しているように見えて、その紙飛行機は上手くバランスがとれており、まるでそれは紙と風が仲良く語らっているようにも見える。

フクロウは、なるほどな、と胸中で一人ごちた。

「そうか……そうだな。確かにこれは普通ではありえない、異常な事態だ。俺もいろいろと興味深いよ。何かを考えるいいきっかけになりそうだな……」

すると、それっきり言葉が止む。まるで、たった今飛ばした飛行機が、両者の間の音を乗せて飛び去っていったかのようにだった。

ややあって、フクロウはふと、隣でゆずりがこちらを見ているのに気がついた。

「どづした？」

その顔は深刻そうで、どこか今までのようでなくおどおどしているように見受けられる。

「あの、一応申し上げておきますが、例のことを少年に告げるのは

」

彼女がそこまで言いかけて、なるほど、それを心配していたわけか、とフクロウは、ははん、と軽く笑った。『それ』に対する彼の心積もりは最初から決まっている。

「言われずとも、分かっている。忘れたか？ さっきも言ったように、俺はお前の上司だ。連帯責任者だ。今回は部下であるお前がへまをやらかし、偶然あいつらに関わり、それについて知る羽目になった。でも、そのことであいつらに干渉はしないとお前が先に約束したのならば、上の立場であるが故、偶然にもその事実を知った俺が勝手に動き、その少年に真実を告げるといのは、いささか道理に反するというものだ」

「おお、さすが命様。義理高いお方です」

「ふん、感心したような声を出すな。お前からだと馬鹿にされたような気がするんだ」

フクロウは何かを振り払うように、ばさりと羽を一度はためかせた。

「今回は特別に見逃すということだ。本人も自分から話すと言っているようだし、問題はないだろ。それに、むやみに介入せず、こいつらがこれからどうなるのか、俺が観察するのも面白いかもしれんからな」

「……そうですね」

そういった彼女の笑顔には安堵の色が窺えた。フクロウは、それを見て、小さくホオと鳴き、そばだてた耳で、何かを察知した。

目を家の方へ向け、羽ばたいて、少し上に張った枝に飛び移る。ゆずりに向けて言った。



「ゆずり、俺はそろそろ行くぞ」

「おや、もしかして獲物のねずみでも見つけましたか」

「そうじゃねえよ！ お前、この口ばしで肉をえぐりたいのか？」

「おお、怖い怖い」

と、ゆずりは頭を隠した。その仕草はまるでふざけた子供のようだ。それを見ると、さらに続けようと思った言葉が、どうでもよくなる。

「まったく、とフクロウはつぶやいて、

「それじゃあな」

とどこかへと飛び去っていった。

それから程なくして、何者かの足音が庭の辺りから聞こえてきた。ゆずりが見下ろすと、走ってきたのか、膝に手について大きく呼吸をしている春臣が見えた。

## 92 やさしさの答え

それから程なくして、何者かの足音が庭の辺りから聞こえてきた。ゆずりが見下ろすと、走ってきたのか、膝に手をつけて大きく呼吸をしている春臣が見えた。

「時雨川さん、こんな場所にいたんですか？」

彼が顔を上げる。その額にはうっすらと汗が滲んでいた。

自分が見つかからないので、探し回っていたのだらう、とゆずりは思った。しかし、彼が走り回るほどに必死になる理由が分からなかった。

ゆずりは不思議に思いながらも、木の枝の上に座って足をぶらつかせる。

「昔から高い場所が好きなんだよ。木の上や屋根の上、塀の上や、高い山の上とか。ごめんよ、もしかしてずいぶん探した？」

「いえ、大丈夫です」

彼はそんなことはどうでもいいという様子だった。目の色がどこかぼんやりとしていて、こころなしか視線が泳いでいるようにも見える。

「せっかくだし、少年もこっちにどう？」

そこでゆずりは、木の上から手を伸ばしながら言った。木の上に二人並んで話があったのである。

「え？」

春臣は驚いたようだったが、

「いえ、遠慮します」

とすぐに首を振った。枝の上が不安定な場所だと察知したのかも  
しれない、と思った。

しかし、ゆずりは手を伸ばしたままで、もう一度彼を誘う。

「ほら、手を伸ばして。掴まってくれたら、上に引き上げるから」

すると、彼はゆずりを見ながら、こう言った。

「あの、言っておきますけど。僕は男だし、重いですよ」

それを聞いて、なるほどな、とゆずりは合点がいく。彼はどうやらゆずりの華奢な白い腕を見て遠慮したらしい。確かに、自分で見ても、どこか机の角にぶつけてしまえば、ぽきんと簡単に折れてしまいそうにほっそりとした腕だった。男性を支えて持ち上げるのはさすがに心もとない。

ゆずりは、大きな口を開けて笑った。

「ハハハ、大丈夫だよ。こう見えても時雨川は力持ちなんだ。少年なんて、ひょいっと持ち上げてあげるからさ」

「本当、ですか？」

「本当だよ。嘘なんて言わないしたら」

そうゆずりに言われ、春臣は「はあ」と少し迷った後、とりあえず、という感じで、手を握ってきた。間違いなく半信半疑だ。

見てるよ、とそこでゆずりは力をふつと抜く。

春臣はきつと自分が顔を真っ赤にして、自分を持ち上げるところを想像しているに違いないとゆずりは思った。

しかし、ゆずりは自分の腕力に頼って彼を持ち上げようなどとは毛頭思っていないかった。ゆずりにとっては、彼を持ち上げることなど、ほんの少し、人ならざる能力を発揮させればいいだけのことなのである。少しニュアンスが違うが、それは非力な人間でも重いものを持ち上げることが出来る、あてこの原理に近い。

ゆずりは、頭の中で羽が風に舞い上がるイメージを膨らませる。大事なことは、イメージすること。逆説的に聞こえるかもしれないが、それは自分で自分に春臣の体がとんでもなく軽いものだと、無意識に意識させる』作業なのだ。

刹那　地べたに散らばった花びらを舞い上がらせるような風が、さつと吹く。

すると、もう春臣はゆずりの向かいの枝に座っていた。それはまるで、最初からそこにいたかのように、何の違和感もなく、そこにいた。

「ほらね」

ゆずりが得意げに繋いだ手を離すと、彼は周囲を見渡し、夢を見ているようにぼかんとした。

そして、不思議そうにゆずりの手と自身の手とをしばらく交互に見続けたが、どうやら深く考えても無駄と悟ったらしく、素直に礼を言った。

「あの、あ、ありがとついでいます」

ゆずりは彼のこういう潔いところが好きだった。すぐに首を振る。

「いいよ。それより、ここからの眺めを見なよ」

「眺め？」

「ちよつと地上から離れるだけで、ずいぶん眺めが違つたろう？」

春臣が目凝らして、じつと遠くに見える川を見る。それから、足元に視線を落とし、

「そうですね。何だか、家の二階から見るとはまたわけが違います。足がこんな風にぶらぶらしてませんから」

「ハハハ、確かにな」

笑いながら、ゆずりは盛大に足をばたつかせた。

「そつだ、夜叉媛ちゃんは？」

ふいに気になり、ゆずりは訊ねた。

「ああ、媛子なら、久しぶりに大きな体に戻つたのが嬉しかったのか、家の中を走り回るのに疲れて、二階で眠ってます」

「ふうん」

「かなり疲れたのか、ぐっすり眠ってるみたいで、多分当分起きないと思います」

「……そつか」

すると、春臣が黙ってしまったので、少し変な空気になった。彼を見ると、ちらちらと景色を眺めているが、どこか上の空である。どうやら、ゆずりに話したいことがあるようで、心の中でそのとっかかりになる言葉を探しているのが見て取れた。

ゆずりは助け舟を出す。

「何か時雨川に聞きたいことがあったんじゃないのかい？」

「あ……」

春臣の表情を見ると、やはり凶星だったようだ。

すると、彼は一瞬のためらいを挟み、

「その……もう、出て行ってしまっんですか？」

と訊いた。その問いに微妙な違和感を感じつつ、ゆずりは空を見上げながら答える。

「そっだよ。少年も元気になったし、もうここに滞在する意味はなくなった。これ以上少年たちに迷惑をかけるのは忍びないし、また新しい旅に出るさ」

「旅に？」

「うん。元々そっいう商売をしているし、なにより旅はいい。自由に大空を飛ぶ鳥になった気持ちになる。どこへだって行けるんだからさ。まあ、それでお金もあれば最高なだけけど。くくく」

自嘲気味に笑うと、春臣も一拍置いて苦笑いをした。その様子が妙にぎこちないので、やはりまだ、隠していることがあるな、とゆずりは思った。

「少年は、他に本当に聞きたいことがあるだろうか？」

ゆずりはさっさと問い詰める。

すると、彼は瞠目したが、「どうして？」とは聞かなかった。おそらく自分の拳動がおかしいと薄々自分自身で気づいていたのだろ

う。

ゆずりは何の婉曲もなく、ずばり訊いた。

「少年は今朝のことを聞きに来たんだらう?」

一瞬の空白の後、

「……はい」

彼は答える。

「時雨川は、君が作ったお守りに君の真心が宿っていると聞いた。それが気になっていたのであらう?」

「そう、ですね」

「そして、その想いに呼応し、君の内なる力がお守りに宿ったということも、だらう?」

「仰る、通りです」

見抜かれていたことに春臣は恥ずかしそうに目を伏せて、それから、もう一度考えを整理しているようだった。しばらくして、思い出すように、確認するように彼は話す。

「時雨川さん、こころも言っていましたよね。僕の中にある力って、自分の意思ではどうすることも出来ないものだって。じゃあ、今回のことはどういうことなんですか?」

「とても稀なことが起こった、と時雨川は思っているよ」

ゆずりは間髪入れず、正直に話した。

「稀な、こと?」

彼の問いに自信を持って頷く。

「そうだね、君が夜叉媛ちゃんを思う気持ちが、それだけのものだったってことだよ。動かせるはずのないものを君の意思が動かしたんだ」

「……」

「こう言ったほうがいいかい？ 君が彼女に『優しくしたい』って気持ちが、君の内なる力を呼び起こしたのさ」

そう告げると、春臣がはっと息を吸ったのが分かった。ゆずりはさらにそのままふらついて、木の枝から彼が地面に落ちてしまうかとも思った。

しかし、なんとかさうはならずに持ちこたえたようで、ゆずりは伸ばそうとした手をひっこめる。

同時に、やはり、彼が本当に訊きたかったのは、こういうことだったのだな、とゆずりは思った。

言葉を続ける。

「少年、君は今朝自分が言ったことが心の奥底ではずっと気になっていたんだろう。自分が本当に他人に対して優しいのか？ 優しさを本当に理解しているのか？ 自分はただの偽善者ではないのか？」

ゆずりは指を折って数えるように言う。頭の中で底の見えない暗い階段を降りながら、段数を数えている春臣の姿が浮かんだ。

「今まで当たり前だと思っていたことが、突然、不安定で、見えないうちの上に立っているような心地になった。とても、我慢してはられない。確かめずには、られない。そうだろうか？」

「はい」



「でも、安心しな」

と、ゆずりは明るい声でそれら暗い幻想を打ち払うように言った。

「これは少なくとも、少年が夜叉媛ちゃんを思う優しい気持ちは真実だっていう、一つの証拠になると思うんだよ。それくらい奇跡に近いことを君は行ったんだ。君は、そのことに自信を持っていい。もしかすると、近いうちにまた同じような気持ちに苛まれるかもしれない。けれど、負けちゃだめだよ。君は強いんだ。そこらへんの同年の奴らより、ずっとね」

そして、ゆずりは、そこでとびきりの笑顔で彼に笑いかけた。

春臣はというと、言葉を返さなかった。いや、返せなかったのかもしれない。それくらいに胸の中で様々な感情が重なりあっているような気がしたのだ。

しかし、いずれにせよ、ゆずりには彼の表情から、安堵した様子を感じ取ることが出来た。おそらく、これで彼は大丈夫なのではないか、とも思った。

よつと勢いをつけて、木の枝から飛び降りる。

「あ、時雨川さん」

「はい、難しい話はこれで終わり！ あんまり頭を使うとお腹すくしよ」

振り向くと、彼は木の上からゆずりを見下ろしていた。

「ハハ、そうですね」

どこか呆れたように半眼で見つめていたので、自分が実は空腹であることを悟られたのかもしれない、と思った。全く、最後の最後

で決まらないな。ゆずりは鼻の頭を掻く。

### 93 別れの言葉

旅の身支度は十分ほどで済んだ。ちよつとした衣類や、ほとんど空っぽの財布、お守りを作る際に使う道具などを荷物にまとめる。お守りを除いてしまえば大したものを持ち歩いているわけでもない。ので、もっと早く終わっても不思議ではなかったな、とゆずりは思う。

それから、居間を少し眺めて、短い間ではあつたものの、ここで過ごした日々を思つて感慨に耽りつつ、くるりときびすを返した。もう、出て行く頃合いだった。

ゆずりは玄関でいつものように鼻緒に鈴がついた下駄を履いて、外に出た。

頭上を仰ぐと、空が赤く色づいていた。風に乗って、近づく夜の気配もしている。さらに、天に向かって縦横に膨らみ始めた雲は、遠くない夏の到来を人々に示していた。直に蝉も鳴き始めるだろう。

「また、季節が巡るな……」

どこかしんみりとゆずりは呟く。

夏が来て、秋が来て、冬が来て、春が来て……そしてまた、夏が来る。そう、全ては何も変わらない、その繰り返しなのだ。人も神もその終わらない繰り返しの中を、生きている。

ゆずりは、歩き出した。一步踏み出すたび、しゃりん、しゃりん、と鈴が物悲しげに鳴る。

と、

「時雨川さん！」

呼び止められた。

振り向くと、春臣が玄関端に立っていた。彼は驚きと困惑が混じった顔でゆずりを見ている。

「挨拶もなしに出て行くのは、あんまりにも常識知らずつてもんじゃないですか？」

彼の両手には取り込まれたばかりの洗濯物があった。居間の前の物干し台の辺りから自分が出て行くのが見えたのかもしれない。これは迂闊だった。やれやれ、と肩をすくめる。

ゆずりは、こう返した。

「少年、君は時雨川に常識があるって思ってるのかい？」

すると、春臣は確かに、と眉をひそめた。

「考えてみれば、今まで常識的な態度をしてくれたことが記憶にあまりない気がします」

「そつだろつそつだろつ」

と調子に乗って胸を張る。

「それ、自慢できませんよ」

笑われてしまった。

「本当に変な人ですよね、時雨川さんって。でも、別れの挨拶くらいしてくれてもいいんじゃないですか？」

言われて、ゆずりは少しげんなりと俯いた。

「その、なんていうかさあ。『じゃあね』とか『ばいばい』とか『お元気で』とか言うやつだろう。そういうの苦手なんだよね」「苦手って、そういう問題ですか？」

春臣はあきれてしまったようだ。  
しかし、ゆずりは構わず、

「そういう問題なんだよ」

と、だだを捏ねる子供のように言い返す。なぜなら、ゆずりは本当に挨拶のような人と人との決まりごとの類が不得意なのである。

特に、別れの挨拶というのは、他のものとは違う特別な意味を含んでいるので、さらに嫌だった。

ふっと目の前の景色が歪み、ゆずりの胸の奥底に眠るはるか昔の記憶が蘇る。

ゆずりの背が低くて、目の前に立った誰かは腰をかがめてこちらを見ていた。

『お別れの挨拶っていうのはね、また今度会いましょう、っていう人と人との約束みたいなものなのよ』

あれは、

あれは、誰の言葉だっただろうか。今はもう、時の砂に埋もれてしまっただけではない。でも、

『約束？』

そう無邪気に問いを返したあの頃のゆずりは、確かに、まだ

だった頃で。

ゆずりは奥歯をかみ締めた。

この記憶を思い出すと、ゆずりの心は見えない渦に吸い込まれてしまうような、いてもたってもいられない切なさを感じてしまうのである。

ああもつ、上手く、忘れてしまえばいいのに。

ふと気がつくと、春臣が目の前に立っていた。洗濯物を玄関に置いてきたのか、手には何も持っていない。

「本当に何も言わずに行くつもりだったんですか？」

彼の瞳は空の色を映して綺麗な茜色だった。なぜだか、思わず目を逸らしてしまう。

「媛子にも、何も言ってないんですか？」

「彼女はまだ眠っていたよ。大きな体に慣れないうちから無理しすぎなんだ。うれしいのは分かるが、くれぐれも無茶はするなって言い聞かせておいてよ」

「はい、分かりました。他に俺たちに言うべきことはないですか？」

「……う、うーん、ええと……」

それきり言葉が見つからず、ゆずりは口をもごもごとさせた。ああ、やっぱりだめだ。こういう別れの雰囲気にはそもそも体が慣れていない。

すると、急に春臣が頭を下げた。

「え？」

「あの、時雨川さん、ありがとうございます」

いきなり礼を言われて、ゆずりはまじつく。

「な、な、なんのことさ？」

「呪符を剥がしてくれたお礼、そう言えばまだ言ってますでした」「なんだよ。そんなのこっちが悪いってのに」

むしろ、こちらが謝らなくてはならないくらいだ。

しかし、彼は首を振る。

「いえ、そういうことじゃないんです」

「え？」

春臣が微笑む。

「俺は、他でもない『時雨川さん』にそれをやってもらって、嬉しかったから、お礼を言っんです」

どうやらそう言われて、柄にもなく、ゆずりは照れてしまったようだった。ほんのりと顔が熱を帯びるのが分かる。つたく、なんだか別れ辛いじゃんか。

「分かったよ、そのお礼はありがたくもらっとく」

私のことなんて、

気にしてくれなくていいのに。

「も、もうそろそろいいかな？」

何かを振り払うようにゆずりは言う。

「ええ、言いたいことはもうないような気がします」  
「そうか」

そして、自分がそう言ったのを合図に、ゆずりは夕風に蒼い髪をなびかせて、一思いに彼に背を向けた。

視界が、夕陽に照らされて、大きな木々から伸びた長い影を捉える。それは、ゆずりがこれから進む田舎道でまるで通せんぼするよう横たわっていた。

ゆずりが通れば、きつとすっぽりとその影に覆われてしまうだろう。

いいよ、構わない。ゆずりは小さく微笑む。

時雨川を存分に飲み込んでくれるといい。

ゆっくりとそこへ向けて歩き出す。

「ゆずりさん！」

するとまたしても、呼び止められた。

何か痺れのようなものが体に走って、ゆずりは、わざと振り向かず、答えた。

「何だよ、春臣君」

「最後に、一つだけ聞かせてくれませんか」

「……ひとつだけ、だからね」

彼が背後で深呼吸をしたのが分かった。

「ゆずりさんの、その蒼い髪、どんな秘密があるんですか？」

「……！」

そうか、やっぱりきたか、とゆずりは言葉を失った。彼は言葉を



続けた。

「媛子も、不思議な色の髪の毛をしています。あの、燃える炎のよ  
うな色です。あいつは、いつだったか、自分の髪の色は神の世の中  
でも自分一人くらいだと言っていました。俺は、もしかすると、それ  
には何か、特別な意味があるんじゃないのか、って考えたんです。  
自分に、黙っていなければならぬようなことです。そこでゆずり  
さんも、同じように不思議な髪をしているから、聞いてみようとな  
…あいつが秘密にするようなことで、何か、心当たりはありません  
か？」

「……そんなに気になるかい？」  
「ええ」

彼はどうやら頷いたようだった。

そうか、知りたいのか。

しかし、そこで、ゆずりの脳内に夜叉媛の言葉が響いてきた。

『絶対に、春臣に言うてはならんぞ』

彼女の真剣な表情。

強く引き結ばれたその口元。

自分が話すと聞いた、その決意。

はいはい。分かってますってば。

「それはだね、少年」

「……」  
「今、時雨川が言うことじゃない」

そう言って、彼は今、どんな顔をしているのだろうと思った。

これは、半分答えてしまっていることになるのかな。ゆずりは静

かににやつく。

「でも、少年。近い未来、それはきつと分かることだよ。ただ、今は待っているといい。必ず、分かるから」

「……はい！」

いい返事だな。ゆずりはかみ締めるように聞く。そして、「ご思った。

もしすると、

私はこの少年のことが、  
好きなのかもな。

心の水辺に、ぱつと飛沫が舞い散ったようだった。  
ハハハ、ありえないよ。

でも、もし、

もしも、少年が時雨川にとって、  
そういう意味で、

特別な人間なのだとしたら、  
仮に、そうだったなら、

最後に遣り残したことがあるんじゃないのか？  
そんな心の声が聞こえてくる。

私は、別れの挨拶なんてしないけれど。  
けれど。

「少年」

彼を呼ぶ。

「何ですか」

「君とは、またもう一度、会えるような気がする」

それはどこか、ゆずりの心の奥底から響いた、小さな叫びのようだった。決して、さようならや、また会おうなんて分かり易い言葉ではない。誰かからもらった大事なお守りにささやかな祈りを込めるような、そんなちっぽけな言葉である。

けれど、それが、今のゆずりに出来る精一杯、唯一の別れの台詞だった。

さあ、どうなる？

そのままゆずりは、唾を飲み込んで、彼からの答えを待った。そして、返ってきた言葉は、

「俺も……俺も、そう思います」

その瞬間、自分の中で温かい空気が膨らんだような気がした。

「そうか」

答えながら、久しぶりに胸がどうしようもなく、ドキドキとしているのを感じる。思わず、声が震えていないかどうか、不安になった。ゆずりはこのとき、確かに感動していたのである。

「じゃあ、また会ったときには、食べ物たくさん用意しておいてくれ」

「分かりました。じゃあ、時雨川さんはその時に今回のツケ、払っ

てくださいね」

その春臣の思わぬ切り返しに絶句しながらも、ゆずりは、新しい希望を胸に歩き出していた。

これから始まる旅の目的に別の目的が加わったのだった。

こりゃ、のんびりばかりもしていられないな。

しゃりん、しゃりん、しゃりん。

鈴の音が跳ねる。

眩しい夏は、もうすぐそこだった。

### 93 別れの言葉（後書き）

どうも、ヒロユキです。

今回で長かった時雨川ゆずり編も終了です。次回は番外編、そしてまた新しい章ということで、心機一転頑張るつもり……だったのですが、ここで、少々心残りなことがあります。

というのも、一生懸命書いてきたゆずり編なのですが、もう少しゆずりと春臣たちのふれあいの部分を書いておくべきだったかな、と書き終わった後でふと思いました。読者の方がどう思われたかは、作者ゆえ、分かりかねるのですが、どうにもあっさりし過ぎたような気がするんです。

そして、うんうん唸って考えた結果、その点がどうしても納得が出来ないのです、今回は前のように番外編をやらないということに決めました。それでどうすんのや？というところ、代わりに追加話ということで、新しく後半の物語に関わっていなかった樫の視点のストーリーを書き、ゆずり編の途中に挿入するという方針にしました。

ですので、次回は物語の途中にいきなり新しい話が食い込むということになると思いますので、よろしく願います。

ええと、長々と書いてすいません。以上、作者からの報告でした。  
ノシ

97 遠き日の夢（前書き）

どうも、ヒロユキです。予定より早く書けたので更新しました。

## 97 遠き日の夢

「おばあちゃん、死んだの？」

母親が運転する車の中で、春臣はそう聞き返した。窓の外はまだ夜が明けきる前で、静まり返った町並みが見える。通りに面して軒を連ねる店のシャッターは悉く閉まり、歩いている人々もまばらだった。

心なしか、漂う空気が白んでいるようにも見えた。昨日までの人々の活気を含んだ空気が、夜の時間を経て、綺麗に洗浄されてしまったかのようだった。

「それ、本当？」

春臣は現在の状況に対して、まだ明確な理解が出来ていなかった。つい数分前に母親から聞かされた事情は、近くの病院に入院していた祖母の容態が、今日の未明に突然悪化し、そのまま祖母は息を引き取ってしまったという簡単な内容だった。それにはどんな病気であったのか、どんな最後だったのか、などの情報は含まれていない。

おばあちゃんが、死んじゃった？

あの優しくて、いつも微笑みながら自分の頭を撫でてくれた、おばあちゃんが？

春臣の頭の中では考えが上手く進まず、先ほどからひれを動かすことを知らない動きの鈍い魚が泳ぎ、ただぶかぶかと泡を吐き出しているだけのようだった。

死んでしまう、ということとは、もう動かなくなることなのだろう。

そして、動かなくなってしまうって、もう会えない、ということなのだろう。試しにそう考えてみるが、いまいち実感が沸かない。

若い春臣は死をよく知らなかった。大人からそれがどんなものであるのか、話として聞いたことはあるが、実際にそれを目の当たりにしたわけでもなし。当時の春臣にとって、所詮、死とは言葉で構築されただけの脆い知識であって、それ以上のことは当然、上手く理解出来るはずがないものだったのである。

しかし、

しかし、少なくとも、それがとても悲しいことだということをも、春臣は同じように、言葉で構築された知識として知っていた。だからこそ、必死でそれを自分に分からせようと頭の中で言葉を繰り返していた。

おばあちゃんが死んだ。

それは、とても悲しいこと。

悲しい、悲しい。

けれど、どれだけ思っても、春臣の心の中はいまひとつ空っぽで、どうにもきこえない。自分の周囲が暗いムードに包まれている一方で、自分だけがどこか半信半疑の夢見心地でいるようだった。

「そう、母さんは、死んだの」

ハンドルを握る母が、何かを堪えるように、声を絞るようにして、数分前の言葉を繰り返した。その視線は春臣の方を向くことはなく、前方の赤くなつた信号を、哀れむように見ている。

「もう、死んじゃつたのよ」



それはまるで、自分に言い聞かせるかのようだった。

「おじいちゃんは？」

春臣は堪らなくなって聞いた。

いつも会いに行くたびに、たくましくでっかい手で春臣の頭をぐしゃぐしゃと撫で、大声で笑う優しい祖父は、春臣にとって、とても頼りがいのある人物だった。

あの祖父が今ここにいてくれればどれほど心強いだろう。そう思うと、春臣は今すぐにでも、祖父に会いたかったのである。

すると、母はなぜか一度自分の頬を叩いた後で、

「もう、先に病院に行ってる。おばあちゃんと、一緒にいるわ」

と答えてくれた。

「おじいちゃん、いるんだね」

それを聞いて、春臣は少し安心する。あの祖父の顔を見れば、この拠り所のない浮遊するような気持ちを、いつもの笑顔で消し去ってくれると思っただのである。この先の知れない、一本の綱の上を歩くような気持ちを。

おじいちゃんに会えば、きっと大丈夫。

春臣は、そのときまで、そう、考えていた。

病院に辿り着くと、春臣の母は入り口の自動ドアをくぐり、受付

を見ることもなく、真っ直ぐに歩き、正面のエレベーターのボタンを押した。ピン、と妙に高い音が鳴り、すぐに扉が開いて乗り込む。祖母の病室は五階にあった。エレベーターを降りて、廊下を進む。以前に来たときは、窓の外から景色を眺めて、とても綺麗だったことを覚えているのだが、その日、祖母の病室の窓は閉まったままだった。そのせいか、空気に皺が入ったように、まるで活気がない。

祖父は、ベッドの傍に座っていた。

春臣はその姿を見るや否や、駆け寄ろうとして……止めた。なぜなら、祖父の俯いた暗い表情が目に入ったのである。

それは春臣が今まで見たことも無い、弱弱しい老人の顔をした祖父だった。長年の苦労が蓄積したような数々の皺に、生気の抜けたその目には、杖をついてしか歩けないような、歯がすべて抜け落ちてしまったかのような、頼りなさがあった。

自分が入ってきたのに、祖父はベッドに目を向けたまま、動かない。まるで春臣がそこに存在していないかのような振る舞いだった。おじいちゃんが、悲しんでいる。

いつになく萎んだ様子の祖父を目の当たりにし、春臣は直感的にそう思った。

ふいに、祖父の掌は小さく震えているのが見えた。春臣は、唾を飲み込む。そのまま何も言えなかった。

今度は母に肩を抱かれ、春臣はそこで初めてベッドに横たわる祖母を見ることになった。

祖母は、確かに死んでいた。まるでおとぎ話に出てくる天使のような白い顔をして、目を閉じていた。

『春臣が大人になって、どんな男前になるか早く見てみたいものだわね。きっとおじいちゃんみたいに二枚目になるわ』

祖母がいつかそんなことを言っていたのを、なぜか、なぜだか、思い出した。

そして、その言葉を聞くことは、もう二度とない。

ああ、

これが、

死んでいる、

ということなのか。

そう思って、春臣は急に寂しくなり、祖母から目をそらした。とても耐えられない。

しかし、その先で次に見たものは、母に肩を叩かれ、支えられながらゆっくりと立ち上がる祖父だった。

その目にはやはり、いつものような、澁刺はっしゅうとした明るさはなく、まるで飛ばなくなった風船のようだ、と愕然とする。

いつものじいちゃんはどこへ行ったんだよ。

おばあちゃんを、元気にさせてよ。

そう声を出そうとしたが、喉から出たのはなぜか擦れたような吐息のみだった。不思議に思い、頬に触れて、一筋の涙が零れていることに気がつく。

「あ、ああ……」

それによって、春臣は自身の中で、何かが決壊したのが分かった。次の瞬間、病院中に響くような大声で、春臣は泣き始めた。

## 98 安らげる場所

太陽の光を浴びた、干したばかりのふかふかの布団の上で転がるうちに、春臣はいつしかまどろんでしまっていたらしい。気がつけば、時計の針が三十分も動いていたことに、目を開けて気がついた。

この休日に家の中の物品の整理などを済ませようと意気込んでいたのに、このザマとは。気が緩んでいたのだろうか、先が思いやられるな、と春臣は思った。

昼下がりの家の中は、媛子はどこにいつてしまったのか、やけに静かで、ひっそりとしている。外から聞こえてくるはずの木々の葉擦れの音も、十分に一度の車の走行音も届いてこない。

しん　とした静寂の中、今に埃が舞い落ちる音さえ聞こえてきそうだった。

春臣はそんな中、数ヶ月前叔父と共にこの家を訪れたときのことを思い出していた。

トラックを降り、眺めた、この家。

祖父という主を失い、寂れた青い空気をまとう、この家。

「じいちゃん……」

天井を見ながら呟いた。

つい先ほどの夢の中で、その祖父のことを思い出していたのである。祖母が死に、この世に残された、抜け殻のような祖父を。

「何で今になってそんなことを思い出すんだ……」

春臣は急に蘇ってきた幼い頃の記憶に戸惑いを覚えながらも眠気覚ましに頭を揺すり、上半身を起こした。

すると、同時に上階から誰かが駆け下りてくる慌ただしい音が響いた。どうやら、媛子らしい。がたがたと廊下を走り、居間の襖が開いた。

「お主……起きておったか」

彼女は布団から起き上がっている春臣を見て、そう言った。どうやら、自分がここで眠ってしまったことを知っていたらしい。

春臣は、襖を閉めながら入ってくる彼女を、眠りの余韻を引き摺ったままのまぶたで、ぼんやりと眺める。

つい数日前まで、小人サイズの大きさであった彼女は、今では立派に、春臣の肩ほどの身長にまで伸びていた。

どうやらあの時雨川ゆずりが細工していった春臣のお守りは、どうやら絶大な効果を發揮しているらしく、彼女の成長は今のところとどまる兆しを見せていなかった。一日の間だけで何センチも伸びるのだ。完全に元の身長に戻るのには、時間の問題だろう。

と、その媛子が傍に寄ってきて口を開いた。

「たった今、お主の携帯に電話があった」

「電話……誰からだ？」

春臣は訊ねる。

「椿じゃ、これから来ると言っておった」

彼女はつきつきした様子で春臣に報告する。

「椿が？」

また遊びに来るのだろうか。春臣はそう思った。暇になると椿がふらりと春臣の家にやってくるのはいつものことなのである。おそらくまた媛子と遊びたいのだろう。

しかし、ここ数日は春臣が呪符の影響で寝込んでいたこともあり、そういう日常から遠ざかっていただけに、春臣はそれが何だか新鮮な気持ちがあった。そして、同時に、安堵する。

また、この取るに足らない、雲の上を浮遊するような平穏な日常が戻ってきたのだ。媛子がいて、椿がいて、大学の生活があつて、電話の向こうの家族がいて……。そこに特別な何があるわけではないが、今の春臣にとっては、それだけで純粹にうれしい。そう思うと、自然と顔がほころぶ。

そうだ。休んでいる間中、椿には大学の講義の内容をノートに書いておいてもらったのだ。そのことを感謝しておくべきだな。

と、

「はーるーおーみ」

いきなり甘えるような媛子の声がしたと思うと、布団の上で起き上がっていた春臣に彼女が寄りかかってきた。

「え、媛子!」

驚いて、避けようとする。

が、彼女に手をつかまれた。

「こ、これ、動くな。じっとしておれ。少しだけ……」

「おい……」

春臣が制するも、すっと媛子は春臣の鎖骨の辺りに頭を乗せる。

「少しだけ、こうしておいてもよいか？」

「な、何だよ、いきなり」

「せっかく元の体に戻りつつあるのじゃ、今まで出来なかったことをしてみたい」

春臣の狼狽をよそに、媛子はくつろぐごとくしているようだった。

彼女が喋るたびに、微かに頭が動く振動が伝わってくる。

滑らかな紅髪が僅かに肌に触れ、その思わぬ柔らかさに春臣は驚いた。

いや、それより何より、彼女が近い。近すぎる。脳内の春臣が叫ぶ。何とか、この場を回避できないものか。

しかし、

「ううむ。よい頭の乗せ心地じゃ。このままこれを枕にして眠ってもよいのう」

媛子はのんきにそんなことを言う。

「こ、これから青山が来るんだろ、そんなことは無理だつて。ほら、お茶の用意でもしよう、な」

「むう、よいではないか。あやつにこのままわしらの仲睦まじさを見せ付けてやるのも一興じゃ」

「お、おいおい」

「嫌か？」

つい、春臣は口ごもる。不意打ちの彼女の上目遣いに、反撃の言

葉を失ってしまったのだ。まったくこの神様ときたら、ここぞという時の自らの武器を心得ている。  
ため息をついた。

さあ、如何にしてこの窮地を脱しよう。

しかし、春臣がそう考えたとき、玄関のチャイムが鳴った。助かった、どうやら椿の訪問らしい。

ずいぶん早いような気もするが、ここから彼女の家まで徒歩五分走ってくれば三分もかからないはずで、この時間の短さも頷ける。

「榊くん。来たでー！」

相変わらずの元気そうな声に、春臣はこれ幸いとすぐに返事をした。

「ああ、今行く」

そして、今だ自分に寄りかかっている少女を見た。春臣が立ち上がろうとすると、彼女は恨めしそうに自分を睨む。

「ちっともお主の枕を堪能できんかった」

「あのなあ」

「ふふふ、もうよい。ほれ、早く椿を迎えてやらんか」

てつきりふくれっ面をされるかと思いきや、案外簡単に諦めてくれたので、春臣はほっと一安心する。

いつもこれくらい素直でいてくれたらいいのに。

そう思いながら、立ち上がろうとしたときだった。

ほんの少し、媛子の肩に手を触れた瞬間、春臣の視界が暗み、ま



るで立ちくらみのような感覚に襲われた。

「……………」

咄嗟に額を押さえる。

これは、何だ？

「どうした、春臣」

媛子が心配して覗き込んでくる。

春臣は首を振った。

「い、いや……………」

その眩暈のような感覚は一瞬にして消えてなくなっている。今は特になんともない。

指先に痛みが走ったわけではないのだから、静電気の種類ではないのだろうか……。では、今のはいったい、何なんだ？

「き、気にするな、どうってことないよ」

釈然としない気持ちを抱えながらも、春臣は立ち上がった。何か悪い事の予兆でないことを願いながら。

## 99 迫る魔の手

とく、とく、とく

滑らかな音と共に、目の前の小さな酒杯へ、気前良く酒が注がれていく。

杉下隆二は足を崩し、斜め上から見下ろすように、その様を陶然とした面持ちで眺めていた。

やがて、酒は杯いっぱい満たされ、手が触れるだけの僅かな振動でも零れ落ちそうになる。

と、案の定、杯を持ち上げた隆二の手に酒が零れ落ちた。指を伝い、ふわり、と心とろかすような匂いが鼻腔に広がる。

隆二は酒を口に含み、ゆっくりと味わった後で、酒に濡れた指をくわえる。仄かな酒の味が舌の上を潤した。

「酒はいいね、じいさん」

正面に座っている老人に、隆二は話しかけた。

とある休日の昼間。

隆二がいるのは、杉下家の座敷部屋だ。それなりの店で売ればかなりの高値で売れるであろう、意匠が凝らされた木製の机の前に座っている。

正面に座る老人の顔に刻まれた皺が、少し緩んだ。

「そうだな。酒はいい」

そして、くいつと一口飲んだ後で、光に翳すように老人は杯を持

ち上げる。

「……それはもちろんだが、酒が持つこのなんとも形容しがたい高揚感<sup>たうげかん</sup>は他の飲み物にはない、特別なものだ。隆二、なぜだか分かるか？」

「さあね、何のことやら」

隆二には、この口ぶりの後に続くであろう老人の言葉に、ある程度目星がついていたのだが、そこは分からないふりをした。

どうせまた、あれの話なのだろう。

老人の目が怪しく光る。

「酒は神聖な飲み物なのだ、隆二。神と人が交わることのできる、な。この高揚感<sup>たうげかん</sup>は、人が神に近づきつつある証拠と言われておる。大昔から人は酒を好んで飲むが、そこにはこのように神に近づき、交わりたいと望む人間の心もあったのだ。だから神と関わる特別な儀式には酒が欠かせない」

「……ふうん、そうなんだね」

隆二は適当に返す。どうでもいいことだった。

隆二は元来、神などという曖昧<sup>あいまい</sup>模糊<sup>もこ</sup>とした存在を信じる性質ではない。もっと地に足のついた、現実的な考え方が人間には好ましいと考えている。

子供の頃からそうだった。周りの友人たちはお化けだの幽霊だのと目には見えもしないものに臆し、暗がり<sup>くらがり</sup>を歩けば情けない叫び声を挙げ、逃げ出すのが常だったが、それが隆二には実に奇怪で、馬鹿げたものに映っていたのである。

何も不気味なものなどいるわけがない。

そんな隆二は棒切れを持ち、率先して友人たちの前を歩いた。そ

して、恐れ慄く友人たちを横目に、自らが他人とは違う、選ばれた者であるという意識を強めていった。

何かを怖がり恐れる者は、弱き者である証拠だ。

そして、そうではない自分は、つまり強き者。そう思っていたからだ。

そして、その隆二の考えでいくと、この世は上に立つべき強い者と下で虐げられる弱い者という、単純明快な二者の存在だけで成り立っていることになった。

しびれるほどに、明確な理論だな。

隆二は口元に僅かな笑みを含ませる。

それは、大人になった今でも寸分も揺るがない。だから、そこに神だの仏だのというものは関係ない。語る必要もないのだ。

しかし、

まあ、そんな神の思想を抱いてきた人間たちが、捧げ物としてそれを欲し、この旨い酒を作ることに貢献してくれたかと思うと、神というものもある意味では悪くないのかもしれない。

「良い酒だ、全く」

愉悦に浸りつつ、隆二は一息に酒を飲み干した。

「ところで、隆二」

急に老人の声色が変わる。

これはどうやら真面目な話らしい。隆二は体を老人に向けた。

「何だよ？」

「わしが以前に呼んだ商人の女を覚えておるか？」

「商人の、女？」

隆二の神経質そうな目元に影が出来る。

「ほれ、覚えておろう、あの奇抜な青い髪をした若い女子<sup>おんな</sup>じゃ」

「青い髪……」

そう言われてみれば、数週間前に家から出て行く妙な女がいたなと隆二は思い出す。確かに、あの女の髪色は、息を呑むほどに青かった。

「あの女、じいさんに用があつたのか？」

「護符を扱う面白いやつと聞いてな。わしが呼んだ。そして、来てみれば、言うまでもなく怪しいやつよ。まるで人のようでない雰囲気だった」

「それで？」

「わしはその女の護符は買わなんだ」

「そりやまた……どうしてだい？」

「……」

老人は目を伏せ、酒を口に含む。少し不機嫌な顔をした。さては、その女と喧嘩でもしたのだろうか。

「あの女は何かを知っている……神の力を使役する護符についてだ」

微妙に言葉にこもる力が増した。

神の力、だと？

隆二は呆れながらそう訊いた。

「……じいさん。まだそんなもの探してるのか？」

しかし、老人の瞳は強気な色になり、しわがれた声で癩癩を起こ

すよつに言った。

「隆二、分からぬか？ わしには、神の力が、奇跡の力が必要なんじゃないー」

「またそれかよ」

やれやれ、と隆二は思う。

祖父が神とやらに心酔し始めたのは、いつのころからなのか、隆二は知らない。

元々そういう性格の人間なのか、それとも、親の影響でもあったのか、成長していく過程で、何か不思議な体験でもしたのか、いずれにせよ、孫である隆二が物心ついたころには、祖父は神を敬う熱心な信者だった。

毎日のように神棚に祈っていたし、神社へも事あるごとに足を向けていた。さらに、わけの判らない祝詞いのちを唱えていることもあったのも覚えていいる。

神など関係なく、強者と弱者だけがこの世に存在していると考えている隆二には、そんな祖父の行動は不気味で受け入れがたく、嫌悪の対象でもあったが、だからといって、祖父を弱者だとは思っていないかった。

何より、祖父にはこの地域の人間を圧する絶大な影響力があったし、毎日拜んでいる神だって、敬いはするものの、決して恐れている様子ではなかった。

そして、何より、

『誰からも踏み潰されぬような強き者になれ』

と、幾度となく隆二に語り、その考えを教えてくれたのも、祖父だった。

神を信じている点を除けば、隆二には祖父が尊敬するに値する人間だったのである。

しかし、ここ数年というものの、そんな祖父は神の力というものに対し、異常なほど執着の感情をむき出しに始めた。あの手この手を使い、神の力を我が物にしようと考えているのである。

隆二は祖父がそうなってしまった原因を知らない。もしかすると自らの老いからくる一種の焦りなのかもしれない。

もちろん、隆二は神の力がどんなものであるかなど知らないし、あるとも思わない。けれど、祖父はその力によって若返るであるとか、永遠の命を手に入れようとでもしているのがあるうか、などと推測して考えた。

いくら強者でも、いつかは老いゆくものだし、それに少しでも歯止めをかけられるものならば、間違いなく魅力的な話だ。

しかし、そこまで考えて隆二は首を振った。

なんだそれは。馬鹿げている、ナンセンスだ。そんなことがこの世にあるはずがない。

だが、祖父は目的はどうあれ、神の力を探している。自分のコネを使い、莫大な財力に物を言わせ、ありとあらゆる手を使って……。それはまるで、ガリガリとどこまでも乱暴に地面を削る掘削機のような勢いだった。

「それで、何の用件さ」

隆二は聞く。

「お前に、あの女の行方を探って欲しい」

「……あの青い髪のか？」

「そうだ。他に誰がいる」

そう言い切った老人の鋭い目つきは有無を言わせない凄味があった。

「……」

それに言葉を失いつつ、面倒だな、と隆二は思う。このためにわざわざ昼間から自分に高級な酒を振舞うなどと言い出したのか。分かっていれば、話など聞かなかつたのに。聞こえないよう、舌打ちをする。

だが、今さら後の祭りだ。隆二にとって、祖父からの言葉は簡単に無視することは出来ない。

「分かった、探せばいいんだね？」

「頼まれてくれるか、隆二」

すると、老人が顔をほころばせる。それは先ほどの重圧的な表情から打って変わって、見るもの全てを和ませるような柔和な笑顔だった。

隆二はそれを見ないままに、杯を空にして、一本の指を立てた。

「一週間だ」

「……」

「一週間で決着をつける」

こんなどうでもいい仕事、さっさと終わらせてやるぞ。隆二は意気込む。



「そうか、頼もしいな」

すると、老人は身の毛もよだつような声で大笑いをした。

先ほどから、春臣の家は騒がしい。

居間で二人の少女が、まるで子供がじゃれあうように、どたばたと暴れまわっているのである。

「こ、これ、椿。止めぬか」

「ええ！ もうちょっとだけやから」

と、こんな具合に、畳の上をのた打ち回って嫌がる媛子に対し、椿が上から抱きついて押さえつけようとしていた。

かれこれそんな状態が五分ほど続いている。いったい何をしているのかといえ、椿曰く、こうして体が大きくなった媛子と触れあい、さらなる親睦を深め合っている、ということらしい。しかし、傍から見れば、まるきりそんなことはなく、ただ椿が妹のような媛子に対する一方的な「可愛い」という感情を抑えきれずに、彼女へ発散させているようにしか見えなかった。

一方で、春臣はというと、椿が持ってきた土産のどら焼きを食べつつ、彼女たちの様子を机の傍から我関せずと眺めていた。適度な甘みのある和菓子は程よく心を落ち着けてくれるもので、目の前で繰り広げられている騒動など、春臣にはどうでもいいことのように見えていたのである。

と、ようやく椿の抱擁攻撃から抜け出た媛子が怒声を挙げた。

「も、もう、十分じゃる！」

必死に椿から逃れようとしてもがいていた彼女の髪は、今やぼさ

ぼさに跳ね回っている。

しかし、椿がそれで諦める様子は微塵もない。

「まだまだやって、ほっぺも触ってないやん」

と、またしても、媛子に飛びかかる。媛子が悲鳴を挙げた。これでは、またしても振り出しである。

上手く獲物を仕留めた椿は、今度は媛子に頬ずりを始めたようだった。彼女が至福の表情をしているのが見えた。

「嫌じゃあ、どけ、椿！」

畳の上で再び彼女たちが暴れ始めると、白っぽい埃が舞うのが分かった。

さすがにこれ以上暴れてもらっては、せつかくのどら焼きの風味も落ちかねない。そう思った春臣は、そこでようやく椿に注意した。

「おい、青山。もうそろそろ止めてやれよ」

「ええ！」

「媛子が嫌がってるし、ほら、せつかく掃除したのに、また散らかるだろう」

春臣はうんざりするように言う。すると、さすがにこれ以上は本気で怒られると思ったのか、椿は渋々ながら媛子から離れた。

「折角大きくなったんやから、もっとスキニップを取りたかったのに」

「何がスキニップじゃ、こんな乱暴なスキニップなどない！」

媛子の怒声が飛ぶ。

彼女は安全地帯に逃げ込むように春臣の傍まで来た後、ふうふうと怒った猫のように鼻息荒く、敵意に満ちた目で椿を睨んでいた。

「これ以上わしに許可なく触りおったら、天罰を下すからの！」

「ええ、そんなあ。うちの癒しがあ……」

「お前の癒しになどわしはなつたつもりはない！」

春臣は、そんな怒れる媛子を宥めるためにどら焼きをひとつ手渡して、彼女が一口食べるのを見てから、落胆している椿の方へ視線を向ける。

「そんなことよりも青山、俺たちに何か特別な用があつたんじゃないのか？」

そう訊いた。

というのも、包みの中のどら焼きは彼女が持ってきたものだったが、単に遊びに来るだけのために、わざわざ店でこんなものを買って来るとは春臣には、いまいち思えなかつたのである。そこには、なんらかの理由があるのではないかと踏んでいた。

すると、椿は指を鳴らす。

「ああ、忘れとつたわ。そうそう、せやねん。頼みごとがあつたんや」

「頼みごと、どんな事だ？」

「実はな、榊君の家で、ちょっとしたイベントをさしてもらおうと思つてな」

「イベント？」

聞くと、彼女は、胸の前でぱちんと手を合わせる。

「せや。ここで皆を呼んでパーティーをするんや」

「パ、パーティー？」

春臣は驚いて目を瞬かせる。隣を見ると、媛子も全く予想していなかったようで、同じように困惑していた。

「ど、どうしてまた……」

「そら、うれしいことがあったらパーティーを開いて皆で祝うつちゆうのは、ひとつの決まりみたいなもんやろ」

彼女はにっこりと笑って言った。

しかし、それだけではいまいち春臣にはぴんと来ない。いったい何を祝う必要があるのだろうか。首を傾げた。

そのことを訊ねると、彼女はそんなことも分からないのか、とでも言いたげに、

「何って、媛子ちゃんのお祝いに決まってるやろ」

と、眉を曲げつつ言った。

「媛子ちゃんが元の体に戻るつちゆうのはそれだけで十分めでたいことやんか。これは皆でお祝いせなあかんて」

なるほど、と春臣は思う。

それは考えてもみないことだった。確かに悪くない話ではある。そして、隣の神様を見た。

「だ、そうだが、媛子。どうだ？」

すると、媛子はどら焼きを食べようとして、一度下ろし、

「その、パーティーというと、お、お祭りのようなものか？」

と訊いた。

「そうや。でも、うちが主催するんや。そこらへんのお祭りに負けへんびつくりするようなパーティーにするで」

張り切るように胸を叩く彼女に、いったい何をするつもり、もとい、しでかすつもりなのか、と春臣は不安に思う。

しかし、隣の媛子はそんなことは考えていないようで、どこか驚きと困惑に満ちた目になり、

「それは……本当にうちが主役なのか？」

となぜかそんなことを恐る恐る確認した。

「そりゃそうや。媛子ちゃんが元の体に戻るお祝いなんやから」

その答えに対し、媛子が沈黙する。そのまま、ぼんやりと何かを思い浮かべているような表情になり、やがて、満足気に頷いた。その彼女の瞳は……喜びの光で満たされていた。

春臣はその横顔にはっとする。

媛子がこの上なくうれしい気分になっていることに気がついたのである。それは、ただパーティーで浮かれているとは違う、長年の願いが叶ったかのような、大げさとも思えるそんな表情をしていた。

どうしてなのだろう。もしかすると、彼女はこんな風に誰かからお祝いをされた経験がないのだろうか。春臣は咄嗟に思う。

神の世界では、こんな風に他人をお祝いする習慣はないのか。それとも、彼女は今まで、生きているうちに、誰かから、何かを祝われたことがないのだろうか。

さらに、そんな思いにさえ駆られた。

それは寂しさをまとった不安な予感だった。春臣は何だか怖くなり、首を振る。必死でその暗い考えを追い払った。

いずれにせよ。そうだ、いずれにせよ。媛子がこんなにうれしいのであればそれでいいではないか。よし、と頷く。

気がつくと、媛子が椿の方へ身を乗り出していた。

「椿、ぜひ頼むぞ」

「ガッテン承知や」

二つ返事で椿は応じた。

「何だ、眠ったのか？」

お茶のお代わりを春臣が台所から持つてくると、先ほど春臣が転寝をしていた布団の上で今度は媛子が寝息を立てていた。まるで猫のように手足を縮め、ひだまりの中に小さく丸まっている。

「せやねん。疲れてたんかなあ。いきなりふらふらした思ったら、棒が倒れるみたいに眠ってしもたんよ」

と、その隣で彼女の顔をのぞきこんでいた椿が春臣を向いて言った。椿の右手はここぞとばかりに、人差し指で媛子の頬をつつこうとしている。春臣は彼女に、余計なことはするなよ、とたしなめた後で再び媛子を不安げに見た。

なぜか最近是她女がこんな風に急に眠りにつくことが多くなったような気がするのである。確かちょうど、体が大きくなり始めての頃からだったはずだ。

ひょっとして、と不安になる。

もしかすると、彼女はどこか体の調子でも悪いのだろうか。だとすれば、病院に連れて行かなければならないかもしれない。

しかし、そこで春臣は時雨川ゆずりの言葉を思い出した。

媛子には無理をさせるな……そう言ってたよな。

それはつまり、現段階において彼女の体力の方が急激な体の変化に追いついていないということだろうか。ならばおそらく、その皺寄せがこの唐突な睡眠に繋がっているのだろう。

そう思って、春臣はため息をつく。

さほど、心配するほどのことでもなさそうだな。



ふいに、椿が媛子の首から下っているお守りを手に取り、物珍しそうに見つめているのに気がついた。

「これ……このお守りの力で、媛子ちゃんは元に戻るうとしてるんやね」

「そうそう、時雨川さんがいろいろ細工してくれたみたいでさ。助かったよ」

そこで、時雨川という言葉にぴくんと椿が反応した。どこか悲しそうな目で春臣を見上げる。

「時雨川さん……そう言えば、もう行ってしまったんやっつてね」

「あ、ああ……うん」

春臣は、彼女が何も言わずに出て行こうとしたあの夕暮れを思い出す。あの後……そうか、あの後、結局時雨川さんは青山に別れの挨拶をしなかつたんだよな。

吸い込まれるように木々の影に消えていく、ゆずりの背中が浮かんだ。

それはあの不思議なオーラをまとった彼女らしいと言えば彼女らしいが、その後、彼女が去ったことを椿に話したとき、椿が今のようになつたことを考えると、ゆずりのしたことはやはり褒められるものではない。

特に、時雨川さんと青山は特別な関係が築かれていたようだったし……。春臣は思う。

数日前、皆で夕飯を囲んだ時、親しげな雰囲気とは裏腹に、どこか他人と距離を置いているような雰囲気のあるゆずりと短時間で仲良くなり、あれこれと椿が話をしていたのを覚えているのである。

あの時は、寝ぼけた目を擦りながら、椿が彼女に魔法でも使ったのではないかと、心底不思議に思っていたものだ。

「時雨川さんも、パーティーに招待できたら良かったのになあ」

彼女は口惜しそうに言う。

「そう、だな」

「どこに行ったのか、ほんまに分からんの？」

春臣は彼女の期待に応えられないことに申し訳なくなりながらも、言葉を返す。

「さあな、あの人は無計画そうだったし。どこに行こうか考えがあるわけじゃないんだろうな」

「そうかあ……じゃあ、しゃあないな」

案の定、彼女は肩を落とす。しかし、そこで春臣はあ  
ることに気がついた。

「待てよ。もしかすると、またそのうちひょっこり戻ってくるかもしれないんだった」

「へ？」

「ほら、だってあの人、俺に食費の借金があるし。必ず返済に来るはずだって」

春臣は、白い歯を見せて笑ってみせた。きっと彼女ならば、その約束を守ってくれるはずである。

「もし戻ってきたら、椿にも知らせに行くよ」

「ほんま？ おおきに」

そう彼女も笑ってくれたので、一安心する。やはり、いつも明るい彼女が暗い顔をしていると、どうにも落ちつかないものである。彼女にお茶を手渡しながら、春臣は話題を変えた。

「しかし、パーティーって、具体的に何をするつもりなんだ？」  
「うん？」

湯のみを持った椿が目を見開いた。

「ほら、さっき媛子に言ってたろ。びっくりするようなパーティーにするって。何か普通と違うことでも考えてあるのか？」

すると、彼女はうつむ、と顎に手を当てて考え込んだ。

「せやなあ、具体的にはまだ考えてないなあ」

「……何だ、そうなのか」

すると、彼女は自慢げに人差し指を立ててこう言った。

「れつといつとびーやで、榊君。あるがままに、なすがままに。それがうちのモットーやねん。パーティーの準備をしてれば、そのうちなんか見えてくるはずや」

果たしてその無計画さはどうなんだろうな、と思うが、春臣は椿のそういう肩肘張らない考え方は嫌いではない。いかにも、いつもマイペースな彼女らしいと思うのだ。

「あ、せや。こういのはどうや？」

急に椿が指を鳴らす。

「え？」

じゃじゃーん、とどこかからトランプを取り出した。

「まさか……」

「そう、手品や」

椿はそう言つて不気味な薄ら笑いを浮かべてみせる。春臣はとうと、それに対し、苦笑いを返した。

「青山、出来るのか？」

「あ、今、うちのことを馬鹿にしたな」

「そ、そういうわけじゃないけれど」

いつもがいつもなだけに、さ。

「むうう、榊君、馬鹿にしたらあかんで。不思議な力を使えんのは、媛子ちゃんやさつきちゃんだけやあらへん。うちかてちよっとくらい超能力があんねん」

彼女は言いながらまるで魔術を掛けるように、春臣の顔に向かつて人差し指の先をくるくると回した。

「へええ、そりゃ楽しみだな。じゃあ、少しだけでも見せてくれな  
いか？」

「じゃあわかった。とっておきのやつたる。絶対にびっくりさせた  
るからな」

「へええ、そりゃ楽しみだな。じゃあ、少しだけでも見せてくれな  
いか？」

「じゃあわかった。とっておきのやつたる。絶対にびっくりさせた  
るからな」

そう言つて、彼女は自信満々にトランプをケースから取り出すと、  
すぐに切り始めた。

春臣は思わず彼女の手元を見た。小気味良いリズムでトランプが  
シャッフルされていく様は、彼女がその扱いになれていることを  
感じさせた。

へえ、と心の中で感心する。

いつものおっとりしたイメージの彼女からはあまり想像できな  
かったからだ。けれど、裁縫や料理などが得意な辺り、手先を動かす  
ことは得意なのだろう。春臣は彼女が自分にお守りの作り方を教え  
てくれたときのことを思い出した。彼女は春臣に指示を出しながら  
も、自身は春臣の倍以上のスピードで、縫い物をしていたのだ。あ  
の一見、細くか弱そうに見える指先は想像以上の働きをするらしい。

しばらくすると、彼女はカードを切り終えたようで、にやりと笑  
い、それを春臣に差し出した。

「ほつら榊君、この中から一枚好きなん引きい」

春臣は悩まず、適当に目に付いた右から二番目のカードを引く。

「そのカードをよよく覚えてください」

彼女は本物のマジシャンさながらのどこか余裕のある落ち着いた口調で話した。どこからか、それっぽいBGMも流れてきそうである。

春臣は指示に従い、カードを裏返してその数とマークを確認した。スピードのクイーンだった。記憶できたという意味で、椿に向かって頷く。

「ほんなら、それを好きな場所に戻してください」

次に彼女はそう言って、再び扇状に開いたカードを再び春臣に向けた。春臣は、また適当に中央辺りのカードの隙間へ、覚えたカードを差し込んだ。

すると椿は、そのカードの位置が完全に分からなくなるように、トランプの束を再びシャッフルし始める。

シャ、シャ、シャ。

春臣が見ている限り、その間、彼女が何らかの細工をカードに施しているようには見受けられなかった。彼女が本当に不思議な力を持っているのならば話は別だが（まず、ありえない）、少なくともその可能性を除外して、妙な動きはひとつも見当たらなかった、と思う。いったいどうやって彼女は春臣が覚えたカードを当てるといふのだらう。頭を捻った。

十数回だらうか、一通りトランプを切り終わると、彼女はカードの裏面、つまり数字ではなく、同一の絵柄が書かれた面を上にして机に並べ始めた。

そして、真剣な面持ちで、一番端のカードを手に取って、

「これから、カードに込もった榊君の思念の欠片を探していきます」

などと怪しげなことを言っ。

「思念って何だよ」

と聞くと、

「もう、榊君は野暮なこと言うなあ。ええか、そういうのは聞かへんルールや」

と怒られた。

さいですか、と謝る。どうやら、そういうものらしい。

仕切りなおして、彼女がカードに念を送るように見つめ始める。ややあつて、最初のカードは違ったようで、椿は軽く首を振り、次に移った。

またカードを手にとって見つめるが、どうやらそれも違う。次のカード、また次のカード、そのまた次のカード……。彼女は何かを感じようと目で一枚一枚確認していく。

そして、しばらくして、彼女が一枚のカードで止まった。

「これや、このカードや！」

自信ありげに彼女が指差したカードを裏返してみると、

「スペードのクイーン！」

なんと、ピタリ命中である。

「どや?」

「せ、正解だよ」

まさか、本当にこれだけで当てるとは予想外だったので、目を見張った。

「いったいどうやったんだ?」

と、驚いている春臣に対し、椿は得意満面になる。

「そりゃ、うちの超能力やて、榊君。うちかて、やれば出来るんや」

などと言つて、憎き敵を今こそ打ち負かしたと言わんばかりの表情をしていた。

彼女からまさかそんな顔をされる日が来るとは思つてもみなかった春臣としては、悔しくないわけなかったが、いかんせん、トリックが分からないことには言い返すことも出来ない。

むうっ、としばらく考え込んだが、お手上げだ、と肩をすくめ、トランプに目を落とす。

と、そのとき、春臣は、トランプのある点に気がついた。

「あれ、これは……」

一枚のカードを手にとってじっと見つめる。

そうか、なるほど。春臣は無言で頷いた。

こんなもの、小学生にも解けてしまっ、単純な仕掛けじゃないか。

「ふふふ」



つい、笑ってしまった。

「な、なんや、その笑いは」

そんな春臣の態度の急変ぶりに、椿は動揺したのか、座ったままの姿勢で後ずさる。

「榊君、思い出し笑いは気持ち悪いで」

「そうじゃねえよ、今の手品のタネが分かったんだよ」

「へ？」

啞然とした彼女の前で、春臣はカードの裏面を指差す。

「ほら、これ。このカード、実は裏面の絵柄が点対称じゃなくて、上下逆さまにすると柄が微妙に違うんだよ」

ほら、これとこれ。そう指摘してみせると、彼女は言葉を詰まらせて、「ええと、それは」と目を白黒させながら狼狽した。どうやら、凶星のようだ。正解を確信した春臣は、さらに説明を続ける。

「多分、青山はこのカードの向きで、俺が選んだカードがどれであるか判断したんだ」

「い、意味が分からんけどな」

「つまりだな、おそらく青山はあらかじめカードの向きを一定にして東にしておいたんだ。一枚も反対の向きにならないよう、注意してな。そして、そのカードの束から俺にカードを選ばせ、覚えさせているうちに、こっそり手元のカードの束の向きを変えた。ちようど、こんな風に」

春臣はカードの束をくるりと半回転させる。

「そして、そこに俺が選んだカードを差し込めば、必然的に俺のカードの絵柄が一枚だけ逆方向になるってことだよ。後は椿がそれとない動作で、逆の絵柄のカードを見つければいい」

「……」

「分かってしまえばとても簡単なトリックさ」

「……ぐ、ぬぬぬ」

すると、椿はものの数分でタネがばれてしまったことが悔しかったのか、歯を食いしばり、春臣を睨みつけた。

最初は自慢げに彼女を見ていた春臣もその剣幕を見て、さすがに冷や汗を掻いた。

これは、やり過ぎてしまったのだろうか。なにしろ彼女は、手品の前にとっておきの手品だと豪語していたし、それをあつという間に見破られてしまえば、その悔しさも分からないでもない。

ここはすぐに謝ったほうが賢明。そう思って春臣が口を開きかけたときだった。

パン。

突然、何かが炸裂した音と共に、春臣の視界に何か色とりどりの帯が降って来た。

「う、うわあああ！」

思わず絶叫を上げる。そのまま、後ろにひっくり返った。

何が起こった？

状況が分からず、春臣は腕を振り回す。火薬の匂いと共に、得たものの知れないものが、腕や頭に絡みついていてた。

「アハハハハハ」

すると、椿の笑い声が聞こえた。それが、春臣のパニックになった思考の熱を冷ました。

「な、何だ？」

冷静になってみると、それはただの、

「く、クラッカー？」

だった。

「ハハハハハハ」

春臣が飛び出した飾りをどけていると、椿が腹を抱えて笑っているのが見えた。

「榊君、驚いたな」

「そ、そりゃあな」

こんなことをいきなりされたら誰だってびっくりするだろう。びっくりするなというほうが無理だ。

すると、彼女はなぜかしたり顔になり、

「うちの勝ちやで。これをすれば皆びっくりするパーティーになるはずや」

とぬけぬけと言った。

春臣は呆れる。

「おいおい、今は単なる不意打ちじゃないか。びっくりの意味が違う。それに、そもそもどうして、そんなものを持つてるんだよ」

普段から、こんな騒がしいパーティーグッズを持っているなど、少なくとも春臣の中では常識の範囲外だった。

すると、彼女はきよとんとしたまま、

「どうしてって、防犯用や」

と訳の判らないことを言った。

「はあ？」

「最近は何かと物騒やる。変な人に追いかけられたりしたときのために、これを持っておきなさいって、お母さんが」

「クラッカーをか？」

「せや。これさえあれば、悪い人も音に驚いて逃げていくはずやで」

春臣はもはや何も言わず、半眼で椿を見た。

彼女のおっとりとした性格はどうにも、母親からの遺伝なのかもしれない。

不審者が怖いなら、市販されている防犯ブザーを買えばいいだけの話だけなのに……。そこを娘にクラッカーを持たせるとは。

春臣は、椿が何者かに襲われ、その人物に対し、クラッカーを飛ばしている映像を思い浮かべた。

確かに、相手の意表を突くことは出来るだろうが、そんなものいきなり出された不審者の方はどんな気持ちなのだろう。混乱のあまり、逃げていく椿の背中に向かって、

「え、俺、誕生日じゃないけど？」

とそんなことを口走るかもしれない。乱暴されるか否かという時に、妙にシユールな話だった。なんとも青山らしい、と思う。

「でも、パーティーで人に向けて使うのは、却下だ」

嬉しそうに笑う彼女に、春臣はそれだけ、釘を刺した。

椿が帰っていったのは、それから数時間後だった。あれこれとパーティーの大まかな予定日や準備物について話していると、時間はあつという間に過ぎていた。

彼女を玄関まで送り、「また今度」と手を振ると、春臣は中へと引き返し、台所に向かった。そろそろ今日の夕飯を作らなくてはならない。腕まくりをして、冷蔵庫を開ける。中身を確認しながら、献立を頭の中で組み立てた。一人暮らしを始めてから、ずいぶんと料理のレパートリーも増えたものだが、さて、今日は何を作るべきか。

まな板の上に野菜と肉を置き、春臣は手際よく包丁で小さく切っていく。鍋が沸騰し、火を止め、炒めた材料を入れてかき混ぜた。後は火が通るまで、コトコトと煮る。今日はカレーだ。スパイス独特の香りが台所に満ちた。

ふいに、春臣は自分が汗を掻いているのに、気がついた。気温が高いのか、と思うが、今は夕暮れの涼み時。どうやらそうではない。動くことによつて体が温まっているのだ。

そういえば、最近はほとんど一日中眠ったままで、動くことがなかったのを思い出す。呪符の力を封じるため、春臣自身の体力が大幅に削られていたせいだ。

だからこそ、久しぶりになまっていた体が動いたことで、汗が出ているのだろう。そう思うと、春臣は清々しい気持ちになった。

一段落して、居間に戻った。

干したばかりの布団の上で、相変わらず、媛子は平和そうに眠っていた。明かりのついていない部屋は薄暗く、彼女のきらきらと光

る髪が闇に浮かび上がっている。と、彼女が寝返りを打って、無意識に鼻の頭を搔いた。

その無邪気な様は やっぱりただの女の子だよな。

そんな媛子の横顔を見ながら、春臣はあることを思い出した。

彼女が数日前、あの小さな体のままで、眠っている春臣に代わり、家事をしたいと申し出てきたことである。

あれは驚いたものだ。以前から、掃除をしていたことはあるが、しかし、それは安全なこの部屋に限ったことだったし。

だが、実際に、彼女は有言実行し、いつも部屋は綺麗に片付いていたし、食事の準備もされていた。時雨川が協力していたのか、とも思ったが、本人に聞けば、どうにも違うらしい。いったいどういう手段を使ったのか、分からないが。

春臣は、そつと媛子の傍に腰を下ろす。

いづれにせよ、彼女は自分との約束を守ってくれたのだ。それは事実であり、つまり、その当然の帰結として、春臣は彼女に感謝をしなくてはならないだろう。

そつと、右手を媛子の髪がかかった額に伸ばす。以前も同じようなことをしたことがあったが（確か、彼女が初めてここに来た、翌日のことだったか）、その時とは違い、今は何の恐怖も感じない。むしろ、可愛らしいとさえ思う。

「椿を見習って、俺も彼女に何かするかな」

そう一人ごち、指先が彼女の額に触れた瞬間だった。

「！」

春臣は、声にならない悲鳴を挙げた。まるで、意識が虚空に吸い

込まれるように、またしても目の前が急に眩んだのだ。

慌てて手を引っ込める。

いったいなんだ、この感覚は。

これは、昏間、媛子の肩に触れたときと、同じ感覚？

知らぬ間に、呼吸が激しくなっている。指先と媛子の額を見つめて、何の異変もないことを確認した。

さっきと、同じか。

その唐突な異変は、やはり一瞬で訪れ、一瞬で消え去ってしまった。身動きがとれない、とか、体に痛みが残っているわけではない。

が、問題は、それが昏間に引き続き二度目、ということだ。つまり、先の一度目が、ただの勘違いなどではない、ということを示している。

それに、今分かった、最初の異変との共通項。

それは、

媛子に触れようとする、なぜかこんなことが起こる。

ということだった。

いったい、どういうことなのだ。

もしかして、

もしかして、まだあの呪符の影響がなんらかの形で体に残っているのだろうか。

しかし、ゆずりはそんなことを一度も言っていなかった。春臣は思い出す。あのいい加減でありながらも、自信満々だった彼女がミスをお犯すとも思えない。

だとすれば、これは？

不吉な予感が拭えない。



「う、うっ……」

すると、媛子が目を覚ました。

まるで猫であるかのように、はふう、と大きな口を開けて欠伸をすると、両手両足を伸ばして、力を入れる。とろんとした眼で春臣を見た。

「ああ、春臣か……わしは眠っていたよう」

と、言葉が急に途切れ、彼女が春臣の表情をじっと見つめた。

「ど、どうした？」

「お主、何か恐ろしいものでも見たような顔をしておるぞ」

「へ？」

「さては、幽霊でも見たのか？」

「……いや、なわけないって」

春臣は、心配させまいと咄嗟に嘘をつく。台所の方へ目を向けた。

「それより、晩飯が出来てるぞ。食べないか？」

すると、彼女は相好を崩す。

「ほう、ちょうど腹が減っておるところじゃ。よいぞ、もってこい」

春臣は逃げるように台所へと向かいながら、ほっとした。どうやら、自分の体の異変は彼女に悟られなかったらしい。

とりあえず、このことはしばらく内緒にしておこう。そう思って、夕食の準備をした。

媛子はよほどお腹が空いていたのか、せつせと止まることのない勢いでカレーを平らげていた。春臣はその様子を正面で見ている。おそらく、失われたエネルギーを食事によって補っているのだろう。すっかりした睡眠と食事は、健康的な生活には欠かせないものであると思われるが、彼女の場合、体の急激な成長（いまさらだが、考えてみれば、彼女の場合、成長というより元の体への復元と言った方が正しいのか？）中ということで、その双方が生活の中で大きなウエイトを占めているものと思われる。どうやら、単純に存在の力が蓄積されていれば体が元に戻るという問題でもないようだ。

しかし、食べ物に一方的な攻撃を浴びせかけるような、勢いのある食事は、春臣を唾然とさせた。

女の子なのにはしたくない、などというよりも、その次元を越え、まるで早食い大会全米チャンピオンの日常を垣間見ているようだった。いや、それはさすがに過言か。

と、彼女が乱暴にサラダヘフォークを突き立てた瞬間、撥ねたドレッシングが、春臣のコップの中に着水した。

「あ……」

ぶわり、と油が広がる。

しかし、彼女は気にかける様子はない。食べることに夢中で気がつかないのか、それを謝ることさえ面倒だと思っているのか。

まあ、いいや。

こんな調子では耳を傾けてもらえるか、甚だ怪しいが、春臣には話すべきことがあった。

さりげなく、自分のコップを彼女から安全圏に遠ざけて、フォークを置き、軽く咳払いをした。

「あのさ……媛子」

ためらいがちに話し始める。

「うん、なんじゃ?」

彼女は口をもごもごと動かしながら答える。中身が見えてしまいそうなので、出来れば飲み込んでから話して欲しいのだが。

「提案というか、なんというか、その……夕飯を食べたら、少し外に出かけてみないか?」

「外へ? どこへ行く?」

「それは……行ってからの楽しみみてやつさ。ええと、もし良かったらでいいけど、一緒に来るか?」

そして、春臣は彼女の返答を待った。

てつきり、春臣としては、彼女が気分に応じて、即座に答えを返してくれるものと思っていたが、その時は違った。代わりに、食事そっこのけで、なぜか穴が開くほどに春臣を凝視した。

「むむむ……」

「な、なんだよ」

すると、彼女はくすくすと嬉しそうに笑い始めた。

「初めてじゃ」

「へ?」

「お主の方からデートに誘ってくれるとは」

「で、デート?」

「そうじゃ、それはつまるところ、デートなのじゃろう?」  
「え、えと、それは、だな……」

言葉に詰まる。春臣としては、もちろんそんなつもりはさらさら  
ない。毛頭ない。発想すら無かった。

デート……なんて。

ただ春臣は、彼女が数日間、自分の代わりに家事を行ってくれた  
ことへの単なるお礼として、二人での外出を申し出たに過ぎない。  
それ以上も、それ以下もない。全くもって、デート云々という浮か  
れた行為とは、違う……はずだ。

ならば、この場合、きちんと否定して、本来の主旨を伝えるとい  
うのが、筋であり、春臣の義務であると思われる。

しかし。春臣は迷っている。

彼女がそう言っていることを、無理して否定する必要もない、よ  
な。ということだ。

彼女が、春臣とデートが出来るということで喜んでいたのであれ  
ば、それはそれで、春臣としては吝かではない。お礼とは、彼女に  
喜んでもらうことであり、あながち、ずれてはいないのだから。

静かに、頷く。

少々照れくさくもあるが、

「う、うん」

デート。

そういうことでも、いいか。と、春臣は妥協した。  
すると、彼女の目の色が輝きを増す。

「そうかそうか」

と何度も頷き、さらに食事のスピードが上がった。

「そうと決まればすぐに行くぞ。一秒で行くぞ。ほれ、春臣も早く食べぬか」

「え、ああ」

喜んでくれるのはうれしいのだが、なんだか恥ずかしくなり、春臣は、頬を掻いた。

そして、ふと思う。

まさか、春臣の人生において、人間の女性をデートに誘う前に、神様を誘うことになるうとは、いったい、誰が予想できただろうか。これは果たして、人間として間違っているのか、それとも、むしろ光栄と思うべきなのか、いまいち分からぬ。

「はあ……」

媛子と、デートか。

何度目かになるのだろうか。

なぜか、春臣は耳の辺りがピリピリとする。喉が渴いてきた気がした。

カレーのせいかな。そう思ってコップの水を飲む。

さっきのドレッシングのせいかな、変な味がした。

食事を終えると、春臣は、早速外へ出かける準備を始めた。といつても、単なる散歩程度なので、特別に何か準備するものがあるわけでもない。適当に着替え、携帯や財布などの小物をポケットに入れる。簡単なものだ。

しかし、問題は媛子の方だった。

何が問題なのか、というと、彼女を見れば一目瞭然。その自慢の長くたなびく赤い髪である。

そのことを考慮していなかった春臣がいけないのだが、こんな彼女が近所を歩けば、間違いなく、目立ってしまう危険があった。

東京のような大都会の真ん中というのならば、まだ許容されるのかも知れないが、片や、ここはバスが一時間に一、二本しか通らないという真正銘の由緒正しき純然たる田舎町である。

彼女のように奇抜な髪色をした人間が現れれば、いったいどのような目で見られるのか分かったものではないだろう。

あの蒼髪のお守り商人、時雨川ゆずりだって、町を出歩くことは少なかったようだが、それでも、まるで妖怪の目撃談のような噂話が広まっているのを、春臣は知っていた。媛子もそうならない保証はない。

彼女の存在をなるべく近所の人間に知られたくない春臣としては、かなり切実且つ、重大な問題である。

それに、媛子だって。

媛子だって、周囲の人間から奇異の眼差しで見られることは、少なからず、ストレスを抱いてしまうことになるかもしれない。

春臣としては、せつかく元の姿に戻ろうとしている元気な彼女がナースになるのは是非とも避けたい状況だった。

しかし、当の媛子はどうと、

「構わぬ。そうしたい者にはそうさせておけばよい」

と妙にあっけらかんとしていた。

どうして、と聞くと、

「春臣、わしだって、我慢が出来ぬわけではない。第一、他の者と違うこの髪色は生まれもつてのもの、そういう扱いには慣れておるのじゃ」

と言う。

春臣はなんだか拍子抜けしたような気分になった。しかし、言われてみれば、彼女の言う通りである。春臣の方が余計なお世話だったというわけだ。彼女が気にしないというのであれば、別に文句を言う必要もない。

一方で、彼女の存在を周囲の人間に知られるのもまずいだろうが、よくよく熟考してみると、元の体に戻りつつある彼女と一緒に住んでいる時点で、その秘密がバレるのも、時間の問題と言える。

ならばこちらは、早いか遅いか、という話だ。つまるところ、結果は一緒。

じゃあ、いいか。と納得した。

何か問題が発生すれば、またその時に考えればいい。

そう考えていて、ふと見ると、媛子がどこからか、怪しげな紙袋を引っ張り出してきていた。どうやら、女性ものの衣類が入っているようだ。

「それは？」

と聞くと、

「時雨川が体が大きくなれば必要になるはずだからと、安い古着屋で適当に見繕ってきたらしい」

彼女は袋から衣類を取り出しながら説明した。

「ああ、なるほど」

確かに、媛子が出歩く際、いつもいつも着物というわけにもいかないだろう。少しでも、服装には現代風なバリエーションがあったほうがいい。春臣は拳で手のひらをぼんと叩く。ゆずりにしては気が回ることをしてくれたものだ、と春臣は感心した。

「これで外出着も困らないな」

が、すぐに、妙なことだと気がつく。

「あれ、ちょっと待てよ、媛子」

「うん？」

「そんな金、時雨川さん持ってたのか？」

いくら古着とはいえ、何着も買えば、それなりの金はかかる。しかし、今日食べるものにも苦労していたあのゆずりに、それほどの金銭的余裕があったようには、とても思えない。



「いや、お主の財布からいくらか抜き取っておったように思ったが」  
媛子はあるさりとそう言った。  
それを聞いて、春臣はがっくりと肩を落とす。

「……はあ」

そんなことだろうとは思っていたが……。っていうか、それじゃもう窃盗犯だろ。

食料を黙って食べるだけならまだしも、彼女の行動がいよいよ本物の犯罪者じみてきたことに春臣は啞然とした。

「あの人、いつか警察に捕まらなきゃいいけど」

しばらくして、媛子はゆずりが選んできたものから、気に入ったものを見つけたようで、早速着替えた。ふわりとした印象の少女らしい花柄のワンピースだった。

いつもの彼女の印象と違うので、春臣は思わず目を奪われる。見た目は何歳も年下の少女にしか見えないとはいえ、なんだか、ますますデートじみてきた。知らず、鼓動が早まっている。

「それでは、行くか？」

彼女が胸元のお守りを揺らしながら、そう言った。

「あ、ああ」

ぎこちなく春臣は頷いた。

外に出ると、辺りはかなり暗くなっていた。かろうじて西の空が仄かに明るい。それも、時間の問題だろう。じわじわと布に染み渡る墨のように、夜の色が東から次第に世界を覆おうとしていた。

一番星である金星の瞬きが、宝石のようで、見とれた媛子が指差す。

「あの星は綺麗じゃの」

と彼女がいい、

「そうだな、綺麗だな」

と春臣が返した。

さわさわと辺りを漂う、夜気がある。

涼しい風が山の方から降りてきていて、昼間の熱を洗い流しているようだ。

春臣たちは、川の方角へと歩いた。

行き先は最初から決めてある。春臣が以前、生きている頃の祖父に教えてもらった秘密の場所だ。

秘密というくらいだから、もちろん、容易く他人に教えていいものではないのだろ。うけれど、教えてくれた祖父はもう死んでいるし、秘密とは共有するからこそ楽しい。

それに、媛子を喜ばせるためだと思えば、あの祖父なら、豪気な笑いで、許してくれるだろう。春臣は、そう思っていた。

一方で、媛子は行き先のことは気にならないのか、そのことについては聞いてこない。上機嫌に鼻歌なんて口ずさんで、春臣の傍を歩いている。

彼女の性格なら真っ先に、どこに連れて行くつもりじゃ、なんて問い詰めてきそうなものだけれど。そんなことも気にならないくらいに上機嫌、ということだろうか。

まあ、いい。

春臣の方から、簡単に説明する。

「今から行くのは、秘密の場所なんだ」

「秘密の？」

「そうそう、昔じいちゃんに教わった場所であ、そりゃあもうすごいとこなんだ。実は今まですっかり忘れていたんけれど、つい昼間に思い出したんだよ。そこまでの道順までばっちりね。で、僕とじいちゃんだけの秘密にしておくのはもったいないからさ、せっかくだし、媛子と一緒に行くこうかなって」

「おぬしの、じい、ちゃん……。あの家の、元の持ち主か」

彼女の透明な瞳が春臣を映す。

「ああ、そうだけど」

「ふふ、そのじいちゃんとやらは、お主にとって特別な人間なのか？」

春臣は、彼女のその質問を疑問に思った。

「どうしてそんなことを聞くんだ？」

「ほんの少しの間じゃったが、祖父のことを思い出しておったお主の顔。どこか楽しそうじゃった」

彼女はいたずらっぽく笑う。

自分が気がつかないうちに、そんな顔をしていたのか、と意外に思いながら、春臣は頷いた。

「ああ、今は死んじまったけどな。とても頼りになるじいちゃんだった」

「憧れておったか？」

「そうだな、いつかじいちゃんみたいに強くなりたいて思ってた」「強くなりたいと？　なあ、どう強くなるのじゃ？」

「え、そりゃあ……それは……」

急に言葉が続かなくなる。あれ、と思った。心の中に、妙な引っかかりがある。

俺は、どう強くなりたかったんだっけ。

「春臣？」

「え、ああ、うん。じいちゃんみたく、たくましい男にさ」

春臣は適当にごまかした。

「たくましい、か」

「何だよ、変か？」

「まさか、そんなわけがないじゃろう。早くたくましくなって、か弱いわしを守ってくれ」

「そうだな。けど、媛子を守るには、まず経済力をつけなくちゃならないな。食費に金が取られて借金しちゃ、世話ないし」

「な、お主、殴りたいのか？」

彼女が拳を振り上げたので、春臣は殴られまいと、さっと彼女から距離を置く。

「八八、冗談だよ、冗談」

そんな他愛も無い話をしていると、次第に道が細くなってきた。楡川にかかる橋を越え、そのまましばらく、川沿いを進む。目の前に巨大な森が見えてきた。その暗がりの傍に、小さなわき道があるのが分かった。そこは楡川へと注ぐ支流の一本に沿った林道で、野放図に延びた木々が、上からしな垂れかかっている。

「こつちだよ」

春臣は記憶を頼りに進んだ。以前もこの道を、暗闇の中で祖父の背中を追いつつ、進んだものだ。思い出して、懐かしくなる。

しばらくすると、周囲から圧迫するように伸びた木々が消え、突き抜けた夜空に、ぼつかりと月が浮かんでいるのが見えた。

しっとりとした光が辺りに注ぎ、周囲の草木は皆、青く濡れているようだ。

ふいに、目の前に小さな橋が見えてきた。おそらく、地元の間人しか使わないであろう、欄干も何もない、石で出来た短い古びた橋だ。暗くてよく分からないが、その橋の真下から、からこると小川の流れる音もする。

「やっと見えてきたな」

と春臣は言う。目的の場所とはこのことだった。

すると、媛子があつと口を押さえた。橋の袂の草むらを指差している。

「春臣、あれは！」

彼女が見ている先にあるのは、無数に飛び交う小さな光の粒だった。

「蛭だよ。見たことはあるか？ 少し季節外れだったかもしれないと心配したけど、案外いるもんだな」

そう言った春臣の言葉を、媛子は聞いていなかったのか、何も言わずに、彼女はその草むらに足を向けていた。まるで、その光に魅せられているように、吸い込まれるように歩いている。

春臣は慌てて後を追った。

草むらの向こうは段差があり、すぐ真下が水の流れる沢となっているのだ。転げ落ちてしまっただけは怪我をするかもしれない。

しかし、彼女はその数歩前で立ち止まった。ざわり、と風が草の穂先を撫でる。

背を向けている彼女は、どこか神秘的な雰囲気で、春臣は、その瞬間、彼女が人ならざる神であったことを、強く再認識した。

「媛、子？」

と、どこからか、鈴の音が聞こえ始めた。  
しゃりん、しゃりん、しゃりん。

「月の光が……我が身に満ちる……」

彼女は深呼吸をするように、両手を頭上に伸ばしている。

鈴の音につられてか、蛭が周囲から集まってくる。まるで見えな  
い糸に引き寄せられるように、彼女の周りを螺旋を描いて、旋回を  
始めた。

春臣は息を呑んで、その場に立ち尽くした。美しい、光の舞いを  
見ている。

まるで、

まるで、媛子に、光の翼が生えたみたいだ。

と、彼女がこちらをゆっくり振り返って、にっこりと笑う。

「どっじゃ、すごいじゃろっ？」

「なんていうか、その……」

それ以上の言葉は続かなかった。いや、必要なかったと言っていい。

彼女は、

言葉などいらないほど、

美しかったのだ。

しばらく春臣が何も言えずに口を開いていると、媛子は突然、何かに気がついた顔になった。

「あ……」

春臣の方をじっと見て、まるで、母親に怒られた子供のようにしよげてしまふ。

その途端に、美しかった蛍の羽も、息を吹きかけたように、宙に散らばっていった。

どうしてしまったのだろうか。

春臣からは、彼女が何かを後悔しているようにも見えた。俯いた顔を覆うように前髪がかかっている、悲しげだ。

もしかすると、気に入らないことでもあったのかもしれない。知らないうちに、自分が変なことでも口走ったのだろうか、春臣は不安になる。

彼女に駆け寄ろうとすると、

「すまぬ、少し調子に乗りすぎたようじゃ」

と彼女がぼそりと言った。

春臣には意味が分からない。

「調子に乗りすぎたって、どういうことだ？」

「お主が気にするほどのことでもない。これは、わしの独り言じゃ」

彼女は、春臣と目を合わせたくないのか、視線をわざと逸らしている。その瞳は、木々の合間を濃密に埋める闇を吸い込んだかのよ



うに、暗く、深く、澱んでいた。

春臣は、釈然としない。

彼女は、いったい何を考えている？

媛子が急に落ち込んでしまった理由がちつとも見つからないのだ。もしかすると、体が元に戻っていないうちから神の力を使ってしまったことを、自戒しているのだろうか。と思った。

それならば、分からないこともないが……。

と、そんな春臣の前を横切り、媛子は、橋の方へ足を向けていた。ただこの小川を越えるためだけに出来た石の橋は、短いため、五歩も歩けば、すぐに向こう側へと渡れてしまう。だからだろうか、彼女は、その橋をちょうどいい腰かけとして捉えているかのように、中央部辺りまで行くと、納得したように小さく頷いて、足を宙ぶらりんにして座った。川を覗き込むようにして、水際を飛ぶ蛭を見ている。

春臣は、とりあえず疑問を意識の外へ追いやり、彼女の方へ向かった。

彼女がそれほど不注意とも思えないが、どうしても幼い外見からか、そのまま川に落ちてしまうのではないかと不安になる。傍まで行って、横に腰を下ろした。

すると、媛子はややあつて、ためらったように口をもごもごと動かし、

「そつえば、お主にまだ言っておらんかった」

と言つ。

「何を？」

「そりゃあ、もちろん、ここへ連れてきてくれたことのお礼じゃ  
「気に入ってくれたか？」

「もちろんじゃと。こんな夜には、最高の場所じゃの」  
「そう、かもな」

と返した時、微笑した彼女と目が合った。

「……ありがとう、春臣」  
「あ、ああ」

そう面と向かって言われるのも恥ずかしいもので、春臣は鼻の辺りが急にむずむずとした。青い草木の匂いが隣の媛子の甘い匂いと一緒になって香って、なんだか夢を見るようにぼんやりとする。

春臣はそこで、少し後悔した。

彼女を喜ばせたくて、この場所を選んだのだが、ある意味、これは選ぶべきではなかったかもしれない。媛子と二人きりになるには、あまりにも出来すぎたシチュエーションだったのだ。

これからいったいどうすればいいのだろう。何を言えばいいのだろう。

不器用な思考だけが、焦るたびにもつれていく。

しかし、このままだ無言を貫き通すのは、あまりにもかっこ悪い。  
い。

さて、どうしたものか。

こんなことなら、椿もあのまま帰さなければよかった。

「春臣」

と、ふいに媛子が話しかけてきた。

「うん？」

顔を向けると、彼女は、足元の辺りを飛び交う蛍を見ている。

「蛍は、一週間ほどしか生きられぬそうじゃな」

そんなことを言う。

「え？」

「たった一週間ほどじゃ。太陽が七回昇って、七回沈んで、それで命が終わってしまう。あっけないものじゃ。実に、あっけない」

耳元にかかった赤い髪が、彼女が喋るたびに、切なげに揺れた。

「お主ら人間から見ても、あまりに短い生の時間じゃろう。ましてや、大昔から生きてきた神の目からすれば、それは一瞬にも満たぬ時間じゃ」

ため息をついて、

「例えば、そんな一瞬の時間で消えていくものには、いったいどれほどの意味があるのじゃろうか」

そう言った彼女の瞳が虚ろで、春臣はぎょっとした。

「き、急に何を話し出すんだよ」

彼女の言葉の意図が春臣には掴めない。先ほどからの気分の落ち込みといい、いったい全体どうしたというのか。不安が膨らむ。

しかし、媛子は、そんな春臣の胸中など知る由もなく、

「どう思う？ 答えて欲しいのじゃ」

と問いかけてきた。

「え？」

蛭が、生きている、意味。

またしても、難しい話だ。春臣は思う。

「そうだなあ」

こんな話は、時雨川さんとの会話で、もうこりこりだったのにな。しかし、この雰囲気では、適当にごまかすことも出来ないだろう。春臣は、息を吐いて、目の前を浮遊する光の粒をそっと両手で包んだ。

「あ」

媛子が目を丸くした。

「大丈夫」

安心させるように、春臣は優しく言う。

そして、ゆっくりと手のひらを開くと、そこには、蛭が一匹、止まっていた。指の合間を興味津々な様子で動き回りながら、儂くも、どこか力強さを感じる、優しい光を放っている。捕獲成功だ。

「見ろよ」

それを媛子の顔に近づけて、春臣は言う。

「綺麗だろ」

「……へ？」

「ずっと、この輝きを見ていたいと思わないか？」

「……う、うむ」

彼女は戸惑いつつも、肯定の意思を示した。春臣はそれに頷いて続ける。

「たとえば、たった一週間の命だろうと、こんなに美しいんだ。たとえば、ちっぽけな虫だろうと、必死に生きて、こんなに輝いてる。だったら、それだけでも虫が存在する価値は十分にあると思わないか？」

そこで、彼女の返答を待つつもりだったが、春臣は、考えが変わってすぐに言葉を継いだ。

「いや」

「なんじゃ？」

「価値があるとかないとか、そういう議論はそもそも必要ないって、俺は思う」

「必要、ない？」

「ほら、顔上げてみろって」

春臣は、頭上を指差した。媛子がそれにつられて視線を向ける。

「このでっかい宇宙で、これほど小さくて綺麗な光に出会えたんだ。それだけで奇跡だろ」

「奇跡」

「そう、出逢いは奇跡さ。媛子だって、いつだったか言ってたじゃないか、この移り変わり行く世界で、俺とめぐり合えたことが嬉し  
いって」

「あ……」

「出逢いってのは、とても簡単なように見えて、その実、全然そう  
じゃない。それだけで特別な意味があるんだよ」

春臣は言いながら、今度は指先を這い回る蛍を見ている。もうそ  
ろそろ仲間の元へと、飛び立ちそうさ。果たして、自分の手のひら  
の上の居心地は良かったのだろうか、なんて思っている。

「出会えたこと自体に俺たちはむしろ感謝するべきなんだ。蛍たち、  
いや、きつとそれに限らず、この世で巡り会う全てにさ。だから俺  
は、この世に、無意味なものなんて、ないと思う」

そして、一拍置いて、

「だから、だからさ……急に变なこと、言つな」

放っておけばどこか消えてしまいうので頼りない彼女を、そうた  
しなめた。

「はる、おみ……」

すると、彼女は泣き出す前触れであるかのように、肩を震わせた  
ようだった。

「春臣、ありがとう」

「おいおい、何で俺が感謝をされないといけないか、ちっとも分か

らないんだけど。俺はただ、媛子の質問に率直に答えただけだぜ」  
しかし、彼女はふるふるとかぶりを振る。そこには強い確信があるように見えた。

「いいのじゃ、わしは感謝したい。確かにお主はただ答えただけなのじゃろうが、わしはそれがうれしいのじゃ。わしは……うむ。お主と、こうして出逢ったことを永遠に誇りに思うぞ」

刹那、媛子と視線が交じり合った。

すると途端に彼女が頬を赤らめ、恥ずかしそうに俯いたので、同じように、春臣も恥ずかしくなる。意思の制御が利かず、耳が熱くなった。

「ば、馬鹿、何だよ。さつきからいちいち大げさなんだよ。どうしたんだ媛子、らしくないじゃないか」

突如湧き上がってきた羞恥の念を振り払うように、ぶっきらぼうに言い放った。

しかし、彼女は何も言い返さないまま、体育座りをし、膝の間に顔をうずめてしまう。

しばらくして、彼女はようやく言葉を探すように空を見上げ、そして、

「そうじゃな、もしかすると、わしは、この月の光に酔っておるのかもしれない」

と言った。春臣はきよとんとする。

「はあ？ 神様って、月の光で酔うものなのか？」

そんなことは初耳である。  
すると、

「……ぶ、ハハハハハハ」

媛子が笑い出した。

「な、なんだよ」

「存外、お主は不粋な奴じゃのう。ここはそういうことにしておくものじゃ」

そう言われた。

「不粋？」

「そうじゃ、お主は察するということが出来ぬダメな男、というわけじゃ」

「……さいですか」

「全く、ダメダメの唐変木じゃ」

果たしてそこまで言われるほどのことなのだろうか。

春臣は、頬を掻いた。なんだか、つい最近も同じようなことを言われた気もするが……。

まあ、いいか。

媛子を取り戻した先ほどの笑顔を見ながら、春臣はそう思った。



105 宵の幻 3 (後書き)

作者の言葉。

先日、レポートが終わらず、ひいひい言いながらやりました。なんとか間に合ったけど、こんな時でさえ、小説のことが気になってしまうのは病気なのでしょうか。

106 宵の幻 4 (前書き)

今回は少し短めです。

本当はカットしようかと迷っていた部分ですが、せっかく書いたの  
でupします。

その帰り道。

森の小道を抜け、楡川の脇を二人で歩いていると、下流の方から、何かの音が聞こえてきた。

振り返ってみると、

「花火だ」

どうやら、川岸で、誰かが打ち上げ花火をしているらしい。数名の影が見え、パラパラと夜空に光が散っている。それにあわせて、子供の歓声が微かに聞こえてきた。

おそらく花火を初めて見たであろう媛子も、つられて感嘆の声を上げた。

「綺麗じゃのう」

と、見上げ、

「まるで、夜空に星を打ち上げておるようじゃ」

と興奮しながら言う。その表現が興味深くて、春臣は思わず立ち止まって彼女の顔を見た。

「星を打ち上げる、か」

花火など、もう昔からよく知っているものだが、今まで一度も、春臣はそんな風に考えたことはなかった。花火は、夏の風物詩で、音がよく響いて、まるで花のようで、ただただ綺麗なもの。そんな

ありきたりな春臣の概念を覆した彼女は、さすがは神様というべきだろう。ポケットに手を突っ込んで、微笑んだ。

「確かに、そう見えなくもないよな」

「じゃろっ?」

「まあ、すぐに消えちまうけど」

「しかし、意味はあるぞ、あれほど綺麗なのじゃから」

そう媛子に上手く返されてしまい、一瞬、春臣は呆気に取られた。

「……ハハハ、そうだな」

先ほどの自分の言葉が思い浮かび、春臣は恥ずかしくなって鼻の頭を掻く。

そして、その感情を隠すために、今度のパーティーでは、媛子のために打ち上げ花火でも用意するかな、と関係ないことを考えた。椿と金を出し合えば、少しくらい豪華なものが買えるかもしれない。さて、と帰るべき方向へと足を向け。

その時だった。

ふと誰かが、春臣たちのすぐ傍をすれ違った。

「え?」

それは一瞬のことで、春臣が振り返ったときには、すでにその人物は通り過ぎ、もう背を向けていた。どこの誰かは分からない。顔も見えなかった。去っていく背格好から推測して、大体二十代くらいの男性のようだが……。

「春臣」

と、横を見ると、媛子がその人物が去っていくのを、睨むように見ていた。不安がるように、服の袖を引っ張ってくる。

「どうした、媛子」

「今、すれ違った男……どうやら、わしのことをじろじろと見ておったようじゃ」

「え？」

「奇妙な感じじゃ」

彼女の目には、怯えるような警戒の色がある。しかし、春臣はその様子を疑問に思った。

「そりゃ、媛子の髪は珍しいからな。通りかかれば少しくらい見るだろうさ」

普通に考えれば、そう思うのが妥当だろう。

が、言いながら、妙だと思った。何かおかしい。喉に小骨が引っかかっているような、そんな感覚。

あれ、ちよつと待てよ？

春臣は逡巡する。

そうだ。出掛ける前に彼女は言っていたじゃないか。

『自分の髪色は元から珍しい。他人から過剰な視線を向けられることには慣れてる』って。

それならば、ただ通りすがりに見られたくらいで、どうして。

どうして、こんなに拒否的な反応を見せる？

彼女が春臣の服を握る手が僅かに震えている。それが、先ほどの

人物が彼女に与えた影響を物語っていた。それほどまでに、その人物の視線は悪意に満ちたものだったのだろうか。

春臣は顔を道の向こうに向ける。男の姿はもうどこにも見えなかった。闇がその存在を覆い隠してしまったかのように、物音すら聞こえない。

遠くの方で、また花火の光が散った。

森の奥にひっそりと佇む千両神社は、蝉たちの容赦のない鳴き声で騒がしい。

いつも通りに参拝客の姿こそ無いが、その騒音のせいで、音にぎゆうぎゆう詰めにされているかのような密度がある。むんむんとした満員電車に乗り込むのも不快だが、これはこれで、逃げ出したくなるようなうっとおしさだった。

そんな神社の拜殿の階段に、巫女である瀬戸さつきの姿がある。いつものきりりとした立ち姿はどこへやら、だらしなく箒を投げ出し、服が乱れるのも構わずその場に寝転んでいる。自慢のポニーテールは、無造作に段差へ投げ出されていた。

彼女の親が見れば、真っ先に顔を赤くして注意されるであろう、そのだらしない姿は、一人になったこの空間で全開となっているようだ。

そして、さつきは、

「ああ……世界が、暑い」

と、いまいち判然としない意識の中で呟いた。

影から見上げる初夏の高い空は、清々しいほどに雲ひとつない。

中天へと昇った太陽は、遮るものがないと知ってか、余す事無く自らの熱を地上へと注いでいる。

そこへ、生ぬるい風が吹いてきて、さつきの服からむき出しになっている膝元をかすめていった。それは、彼女から体温を僅かに奪い、そのまま吹き続けるかと思いきや、五秒も持たないですぐに止んだ。そう、すぐに。残酷にも、すぐに。

「あ、ぐっぐっ」

さつきは苦しげに呻きながら思った。

何だ、今の風は、と。そんなことなら、最初から吹くな、と。取るに足らない微々たる優しさなど、今のさつきには必要ないのである。

どうせ吹くなら、台風の一つや二つ、この神社に直撃してくれるくらいがちょうどいい。それくらいでなければ、この異常な暑さと釣り合いが取れないはずだ。そうさつきは確信した。

湿っぽい梅雨も終わり、立ちくらみを起こしそうな蒸し暑い七月のある日だった。

休日ですることもないさつきは今朝からこうして神社に来ている。折角なので、掃除でもしようと思いつき、午前中から箒でゴミを拾い集めていたのだ。しかし、始めたのはいいのだが、ものの数分もしないうちに箒を持った手が休みがちになっていた。言うまでもない、この異常なほどの暑さが原因である。

大勢でやるのであれば、まだやる気ももったかもしれないが、たった一人で、この暑さと向き合って黙々と作業するのは、もはや掃除ではなく、修行と言っても過言ではないだろう。

午後に入っても、まだ仕事の三分の一も済んでいないなどということはない。そうあることではない。

これから拝殿の床を拭いていこうなどと考えていたのだが、そんな思考も、まるで水蒸気のように頭のとっぺんから空へと抜け出ていつていた。服が汗で肌にくっくっ張りと張り付き、すこぶる不快である。

と、拝殿の奥から、

「これこれ、さつきよ」



誰かが呼ぶ声がする。

「少しわらわに水を汲んできてくれ。こう熱いと水分がすぐに蒸発してしまふ。花瓶の中の水がもう五分の一もないぞ」

誰と言うこともない。この神社に祀られている神、千両神である。この神の声は特殊なもので、千両神がそうしようと思わない限り、巫女であるさつき以外には聞こえない。その声が、さつきを呼んでいた。

「はやくせぬと、わらわの枝が枯れてしまふのじゃ」

寝転んださつきは、ごろりと首だけを社殿の奥の花瓶に向け、面倒くさそうに言う。

「自分でしてください」

「お、おい。さつき」

「私は今、ここから動く気はありません」

「何を言うておる。ほれ、その手水舎てみづぐらから水を汲んでくるだけではないか」

そう言われ、さつきの目が拝殿斜め前方の小さな屋根がついた施設を見た。そこには石造りの手洗い場があり、参拝客はそこで柄杓を使って手などを洗い清めることになっている。そして、そこから流れ出る水は、ご神体がある森の奥を流れる小川から汲み出した神聖なものであるため、同時に、千両の枝を浸すための水としても利用されていた。千両神はそれを汲んで来いと言っているのである。

しかし、

「私、これから寝るんです」

さつきは素っ気無く返す。

「嘘をつけ、この暑さで眠れるわけがないだろう。干からびたいのか？」

と、千両神が言つと、

「ああ、もういっそ干ばしになってやろうかしら」

投げやりになってみせた。

「悩みもなくて気楽そうだしね」

これには千両神も次の言葉に迷ったようだ。

「うむう……いい加減なことを言ってわらわを困らせるでない」

「でも別に、水がなくなつたって、千両様が死ぬわけじゃないでしょう。ご神体は森の奥にあって、その枝はあくまで分身のようなものだし」

「そ、それはそうじゃが」

「あ、そうだ。熱いお茶ならいっぱいあるし、差し上げますよ」

さつきは良いことを思いついたと手を打つ。

「は？」

「今日お母さんが、私への嫌がらせに持たせてくれました」

「う、ぐう、なんじゃと。お前たち、どうせまた下らぬ親子喧嘩でもしたのじゃろう」

「ぶつぶ」

「よいか、そんなものにわらわを巻き込むでない。枝が茹ってしまった。頼むから冷たい水を汲んできてくれ」

すると、ようやくそこで観念して、さつきは長く息を吐いた。

「……ふう、分かりましたよ。あまりの暑さに冗談を言いたくなくなっただけです」

そうして徐に立ち上がり、拝殿の奥にまで歩いて、千両の枝が入った花瓶を持ち上げる。すると、確かに水が減っているようで、ずいぶんと軽く感じた。試しに軽く揺ると、底の方で水が僅かにちやばちやばと鳴る。この暑さで中身が蒸発してしまったのだろう。これはすぐに補給せねばならない。

「いつもすまぬの」

「いえいえ。でも、ほんとに今年の夏は熱いわあ」

さつきは額の汗を拭う。やはり、いつそ台風くらいの風がびゅうと吹いてくれれば、心がすっきりするのだが。そう思いつつ、拝殿の階段へと足を向ける。

そして、階段を下りようかという時だった。急に、何の前触れもなく、前方の鳥居を抜けてきた突風が、さつきたちに吹きつけた。

「へ？」

かと思うと、次の瞬間には、さつきの視界に黒い何かが飛び込んできた。

「き、きゃあああー！」

あまりのことに驚いたさつきは、手に持っていた花瓶を落としてしまった。それが千両の枝ごと宙を舞い、ごっつん、と地面と触れ合う音が響く。

「千両様！」

さつきはすぐに気づいて、そう叫んだが、すでに倒れた花瓶から千両の枝が水浸しのまま落ちていた。昼間の太陽に晒されている地面は今や鉄板の上といっても過言ではないほどに熱されており、零れ出た水からすぐに蒸気が上がる。

「熱い熱い、地面が、石が熱い！」

千両神の悲鳴を上げた。

「は、早く助けてくれ！」

「千両様、大丈夫ですよ。落ち着いてください。分身である枝がどうなるかと、ご神体の方は問題ありませんから」

「いや、それは落ち着きすぎじゃ。魂だけの身とはいえ、わらわの五感も千両の枝を通して繋がっている。見ていないで今すぐ助けろ！」

「は、はい」

さつきと千両神が突然の事態にどたばたとしていると、

「おおっと、すまねえ」

背後から大きな羽音と共に、いきなり何者かの声があった。

さつきは先ほど目の前を横切った黒い物体を思い出し、咄嗟に振り返る。

見上げれば、一羽の鷲が拝殿の屋根の上に颯爽ととまるところだった。黒光りする長い爪で屋根をがっしと掴み、さつきたちを見下ろし、悠然と両翼をはためかせた。

「ちよいと驚かせちゃまったみたいだな」

「わ、鷲が喋った」

目を丸くするさつき。

「こ、こんなことって……」

あまりのことに動けなくなってしまっが、

「さつき、驚いておる場合ではない。そっちよりもわらわじゃあ、死ぬ、死ぬうっ！」

その背後で千両神の声が蝉の鳴き声をかき消す叫びとなった。

108 白昼の訪問者 2 (前書き)

10/4 文章を一部修正しました。もしかするとまた加筆するかもしれません。

千両の枝が差し入れられた花瓶を元通り拝殿の奥に置くと、中から、からりと涼やかな音が鳴った。枝が前方から綺麗に見えるように調整してから、さつきは千両神に話しかけた。

「一応、応急処置として、花瓶には氷を入れましたが、どうですか？」

先ほどの花瓶の落下事故から少し経って、今は花瓶の水も補給し終え、さつきも千両神も、拝殿の中にいる。相変わらず参拝者などはいないので、さつきが声を落とすことはない。

「うむ、大丈夫じゃ。気分も悪くない」

すると、すぐに千両神の返事が聞こえた。どうやらこの処置で満足しているようである。心なしか、千両の赤い実も瑞々しさを取り戻したように見えた。

「そうですか」

一時は千両神がパニックになったため、どうなることかと危惧したが、一先ずはこれで問題はないようだった。肩から力を抜き、さつきはほっとため息をつく。

それはそうと。

この蒸し暑い夏の午後に、少し前から穏やかな風が吹いていた。先ほどのぬるい風同様に、すぐに止むでもなく、一定の風速で吹き続けている。

おかげで、べとべとと張り付く汗もひき、今では午前中に失ったさつきの活力も取り戻してきたようだった。全く、申し分ない風である。

しかし、何もこれはさつきが天に願ったからではなく、はたまたタイミングよく偶然にも風が吹き始めたわけではない。

さつきは後ろを徐おもむろに振り返る。拜殿の階段の手すりにとまっている一羽の大鷲を見た。話によると、この大鷲が吹いている風の動きを制御しているらしいのだが。

さつきはつい数分前にこの大鷲から説明されたことを思い出す。

「俺は、神なのさ」

先ほどの騒動の後、大鷲は近くまで降りてきてさつきたちに謝罪をした後、こう言った。鷲に喜怒哀楽の表情があるのか、さつきにはよく分からないが、少なくとも、得意げな声でその大鷲は言った。

「いろんな地方の鳥たちを統べる、な」

そして、続けてこうも言った。

「今日は、この神社の土地神さんに用事があったんだけど」

そこで首を縮めて、

「いやあ、まさかこんなことになるとは、本当に申し訳ないことをしたよ」

心配している仕草なのか、くいくいと首を動かす、気分が優れな



いため、一言も喋らない千両神の枝を見下ろしている。  
すると、大鷲がさつきにくるりと首を向け、

「あんたの名は？」

そう訊いてきた。さつきはいきなりの質問にどきまぎとしながらも答えた。

「瀬戸さつき。なるほど。見たところ、こちらの神社の巫女さんだ  
る？」

「はい」

大鷲はさつきの顔をしげしげと眺めると、

「ふうむ、見た感じ、良い筋してるみたいだなあ。中々の素質を持つ  
っている」

「そ、そんな」

「ハハハ、謙遜しなさんな。今時、これほど自然に神と会話できる  
だけの能力を秘めた巫女などざらにいないさ。おまけに美人ときた  
もんだ」

「え？」

「天は二物を与えたもんだよ」

そうして、その鷲は大笑いしてみせたのである。さつきは驚いて  
目をぱちくりとさせたものだ。

と、その大鷲が嘴を動かして喋り出した。

「少しは元気になったみたいだな」

「どうやら、その言葉は花瓶の千両神に向けられたものようである。」

「地面の熱で焼けなくて安心したよ」

そのフランクな口調からは、相手に対する尊敬の念はほとんど感じられない。友人の身を案ずるかのような、親近感のある話し方だった。

さつきは最初から不思議だと思っていたのだが、この神はいかにも神らしい全てを超越したような独特な雰囲気をもっていないようだった。くだけた感じの喋り方といい、千両神のような神とはまた違う感じがする。

すると千両神が、

「まったく、ご挨拶なやつもおったものじゃの」

と不機嫌そうに言う。

「アポなしでいきなり訪問してきたと思えば、わらわへのこの仕打ち。いささか冗談が過ぎるのではないか？」

姿こそ見えないが、さつきにはこの神が頬を赤くして怒りの陽炎を揺らめかせているのがよく分かった。あんな騒動になったのは初めてのことだったし、千両神が怒るのは当然のことだろう。まさか勢いに任せて力を放つような暴力的な振る舞いはしないと思われたが、さすがにさつきはドキドキして、千両神の枝を見た。

「ああ、悪い悪い。こちらとしても悪気があったわけじゃないんだ。さつき謝っただろう。そのお詫びに、こうして過ごしやすいよう、涼しい風を送ってるんだ。少しは大目に見てくれ」

「大目に見ろ、じゃと?」

そこでさらに千両神の言葉に怒気を帯びる。

「お前、浮ついた台詞を並べる前に、きちんとすべきことをしてもらおうかの?」

「何のことだ?」

「まさかわらわが気がついておらんとでも思っておるのか? お前であるう、ここ最近、わらわの領地を許可なく徘徊しておるのは」

さつきは、驚いて背後を振り返った。

「おお、そうだそうだ。さすがに気がついていたか」

すると大鷲は、そう即答する。その様子が何の恐怖心も抱いていないようだったようなのでさつきはさらにぎょっとした。

というのも、千両神から教わった神たちの常識からすれば、神が他の神の領地に無許可で踏み入るなどとても無礼な行為であり、敵意のあるなしに関わらず、争いの問題になったり、なんらかのペナルティが課せられたりしてもおかしくない行為なのである。神の領地とはそれほど厳正に守られるべきものであり、おいそれと踏み越えていものではないのだ。

榊春臣の家に現れた緋桐乃夜叉媛のようなやむを得ない例外的な事態であれば、千両神が許すのも分かるが、この神の場合、話の雰囲気からして、無許可で侵入したのも一度ではないと思われ、千両神も心穏やかに接することは出来ないのだろう。

だが、この鷲の神は、自らの行為に対し、さほど罪悪感を感じていないようだった。いや、むしろ堂々としている。

「すんなり認めたか」

「当たり前さ。でなきゃ、こんなところにこのこ来たりしない。そもそも、今日は挨拶するために来ただぜ」  
「……」

千両神はそこで一度言葉を止め、何かを考えたようだった。あまりにもあっさりとしたこの神の態度にどう対応すべきか、と迷っているのかもしれない。

「……で、それで何という神じゃ？ 名は？」

「俺の名は、アオヒノフシノミコト蒼日鷲命」

その大鷲はそう名乗った。

「ふむ……知らんのか」

「だろうな。でも、これでもいろんな地方の鳥たちを統べる立派な役職を持った神なんだぜ」

蒼日鷲命という名の神は自慢げに言う。誇らしげに胸を張っているようにも見えた。

しかし、それが気に喰わないのか、土地神の方は微かに舌打ちをしたようだった。苛立った様子で喋る。

「そうかそうか。それはご立派じゃ。ちなみに忠告しておくが、今日以降、いくら仕事とはいえ、わらわの半径10キロ以内に近寄るでないぞ。獣臭い匂いが移るのでな」

これに対し、鷲命は苦笑した。

「ハハハ、こいつは嫌われたもんだ。でも、これを聞けば少しは興味を持ってもらえるんじゃないかな」

「なんじゃ？」

「俺の異名さ。『技師屋』って聞き覚えないか？」

その瞬間、さつきには千両神が急にこの大鷲に興味を示したのが分かった。さつきには巫女のもつ性質で、集中の度合いでごくごく表層面ではあるものの、神と感情をリンクさせることが出来るのである。

「む、それは広く噂で知られておるな」

「だろう？」

「何でも、毒にも薬にもならん知識を豊富に持ち、新しいものに目がない偏屈狂の馬鹿をさす言葉らしいぞ」

鷲命は一瞬、絶句する。

「……そりやまた、どぎつい噂だな。ま、妙な奴と見られてるのは自分でも知ってるが」

「それから、その者は誰もが目を疑う奇妙な作品をいくつも作っておるとか」

加えて、千両神が言った。鷲命は頷く。

「ああ、まあな」

作品。

それが何のことなのか、さつきは気になったが、神同士の会話においそれと口を挟むわけにもいかず、ぐっと言葉を堪えた。

しかし、それにしても、やはりこの鷲の姿をした神は変わり者らしい。技師屋という異名から察するに、何か怪しげな発明品でも作っているのだろうか。だとすれば、それを作品と呼ぶことも頷ける。

「一先ずお主の素性は分かった。一安心じゃの」

そこで、千両神がふむ、と何かを考え終わったように言った。

「そうか」

「これで心置きなくいつでも仕返しに行けるな」

「お、おい」

さすがにこれには驚命もたじろいだ。

「ふふふ、まあその前にお前にさせることはあるがのう」

「あ？」

途端にピリリと肌に電流のようなものが走るのをさつきは感じた。それと同時に、ざわりと、ただならぬ巨大なものが神社の奥の森で蠢く気配を感じ取る。それは、足の底から震えがくるような、首根っこをぎゅっとつかまれているような、ぞっとするほどの気配だった。

勘違いではない。

それは巨大な神の力。微々たる人々の力など、小手先で捻り潰せる絶対の力。圧倒的な存在の力の気配だった。

さつきは戦慄する。

千両神は、いざとなれば、戦闘態勢に入る構えをとったのだ。

「蒼日驚命よ」

神の声が、にわかには厚みと重みを増して響いた。

「土地神であるわらわとこれから話をしたいというのであれば、ま

ずは許可なく我が領地に足を踏み入れたことへの非礼を詫びることからせんとな。神たるもの、義を通すのは当たり前のことじゃ。悪ガキでさえ、悪さをしてかせば謝らなければならぬ道理くらいは知っておるじゃろつ」

「……」

「どつじや、それを拒むのであれば、問答無用で我が領地から追い出すぞ」

千両神は本気である。そうでなければ、これほどまでの気迫を相手に見せることはないだろう。

長年の付き合いだからこそ、さつきには分かるのだ。

こんな時、千両神は相手が誰であろうと妥協はしない。神たちのルールは相手がたとえ誰であれ守らせる。それこそが、土地神の土地神たる所以なのだ。そう、いつも声高に語っていた。

空気が動きを止める。

さあどうなる？

さつきは固唾を呑んで見守った。

「そうだな」

と、鷲命が静かに羽を縮めた。

そして。

拜殿の床の上に降り立つと、その場で、低く、頭を垂れた。いや、体全体を床に押し付けるようにして、平身低頭した。

さつきは、目を見張る。

なにしろ、神様が頭を下げたのだ。そんなこともあるのかと、とても驚いた。

「ふん、躊躇なく頭を垂れたか」

千両神は、威圧を緩める事無く、ほとんど吐き捨てるように言った。

「生憎、こんなことくらいで、他の神と争いたいと思つほどのプライドは持ち合わせていないんでね」

対する鷲命はあくまで淡然としている。きらりと光る鷲の瞳は、そこに一点の嘘もないことを物語っていた。

ひりひりと舌の先がしびれるような沈黙が続いた。しばらく両者が動かないでいると、そこですっと千両神から怒りの気配が消えたのにさつきは気がついた。森の奥でざわめいていた巨大なものの気配もそれつきり何も感じなくなつた。

「なんじゃ、いじめ甲斐のない奴じゃ」

と土地神は少しがっかりしたようだった。

「お前が渋々頭を下げるのを見て楽しもうと思つておつたのじゃがな」

「ご期待にそえず、心底遺憾だ」

「全くじゃ。こんなことなら、許して欲しくば、三度回つて可愛らしくちゅんと鳴けとでも言えばよかつたのう」

そう言う様子は意外と悔しそうである。

しかし、一方でさつきにはその様子があまりにも能天気に見えて、絶句していた。目の前でいつ神同士の戦いが繰り広げられるのかと戦々恐々としていただけに、張っていた気が緩むと、ぺたんとその場に尻餅をついてしまった。齒を食いしばっていないと魂が抜け出



てしまいそうだった。

「おや、さつき、大丈夫か？」

「は、はい。何とか」

「少々本気を出しすぎたの。さつきがおることをつい忘れておった」「いえ、平気ですから」

さつきは起き上がった。これくらい、巫女であるなら平気だ。

「どうぞ、お話しを続けてください」

108 白昼の訪問者 2 (後書き)

作者の一言。

千両神を書くのがとても難しい。

表情も動きもないただの枝なので、どうしても表現の限界が発生します。さつきの視点で話を書くことで、彼女を媒介に感情を表現することを思いつきましたが、それでも難しい。

つていうか、そもそも驚が動かない木の枝と話している場面を想像し、その間抜けな絵に笑ってしまいました。神様って難しくって面白い。

「それで、なんじゃったか？ お主、他にもわらわに用があるのじやろつ？」

「ああ」

鷲命が頭を上げた。

「そちらの方が本題だからな」

「本題？」

「そうだ。この近くに榊春臣と言う名の少年がいるのを知っているか？」

いきなりその名前が鷲命の口から出てきたことに、さつきは目を丸くして驚いた。思わず、「どうして彼のことを？」と聞き返しそうになる。

さつきはもちろん彼のことを、榊春臣のことを知っている。緋桐乃夜叉媛という神様と共に暮らしている年上の少年だ。彼とは、数ヶ月前にその緋桐乃夜叉媛を巡る騒動で知り合いになったのだが……

なぜ、この神の口からその名が出てくるのだろうか。一見、接点などなさそうだが、彼と何かあったのだろうか。さつきの脳裏に不安がよぎる。

と、そこでふいに、鷲命と目があった。鷲というだけはあって、その視線は鋭かったのだが、さつきを見た瞬間に、その視線がさらに鋭くなったのを感じた。どうやら、さつきの胸中の動揺を読み取つたらしい。

それを見て、さつきは、困惑しながら傍らの千両の杖を振り返つた。千両神は僅かに動揺はしたようだったが、さつきほど、感情の

振り子が揺れることはなかったようだった。

「……なるほど、お主が徘徊しておったのはそういうわけか」

落ち着き払った声で言う。

「え？ あ、あの、千両様」

「さつき、今はしばし黙っておれ」

千両神はそう言つと、鷲命に先を促した。

「……蒼日鷲命よ、して？」

「土地神なら、あそこで、どういうことがあったのかも、全部知っているんだらう？ あそこに緋桐乃夜叉媛と名乗る神がいるってことを」

「無論じゃ」

神は即答する。そこには土地を見守る者としての使命感と自信が漂っていた。

「わらわの有能な巫女であるさつきの働きによって、情報は一通り得ておる。わし自身は動いておらんが、さつきと意識を一時的に共有することで、見てきたものも大体把握しておると言つてよい」

「そうかそうか、全部承知済みつてわけか」

「……それがなんじゃ？ いや、そもそも鷲命よ。なぜお主がその情報を得るに至つた？」

千両神が疑問を投げかけた。この状況から、それは当然の問いだつた。赤の他人としか思えないこの神が彼らのことを知っているのはあまりにも不自然である。

すると、その大鷲は両翼を揺らして少し笑ったように見えた。

「なに、大したことじゃない。土地神さんにも優秀な部下がいるように、俺にだつてそれなりに使える奴がいるんだ。まあ、簡単に言うと、そいつが情報を集めてくれた」

「情報を集めた？」

「ああ、勘違いしないで欲しいのは、最初から俺がそう意図してそいつを動かしたわけではなく、今回の事は単に偶然の出来事が重なつたに過ぎないんだ。たまたまさ、たまたま」

そう、ラッキーだったのさ。

鷲命はどこか嬉しそうにそう付け加えた。

その様子がさつきにはよく分からなかった。いや、妙だと思った。喜んでいふということは、この神にとって、その事実が何らかの利益をもたらすということ、しかし、それがなぜなのか、さつきには全く分からなかったのだ。

「なるほど。その詳しい経緯も気になるころではあるが……まあ良い。それで？」

「そこで質問なんだが」

声の調子を変えて、鷲命が言う。

「何じゃ」

「土地神さん、あんたはその事実を知って何をした？ 何らかの対策を施したか？」

「特に、何も」

千両神は堂々と答えた。そこには何の嘘も偽りもない。

「そうか。じゃあ、その事実を他の神々には伝えたのか？」

「いや、伝えておらん」

「なるほど……」

「それが何なのじゃ？」

「つまり、土地神さんはこの事態に対し、特に手を打っているわけじゃないってことだろう？」

「……」

「誰に事態の收拾を頼むでもなく、自分自身も状況を把握したただけに行動を留めて動いていない」

「全くもってそうじゃが」

「それは、これからもそのつもりということに相違ないのか？」

「お主！」

そこで痺れを切らしたように、千両神が苛立った声を上げた。

「さきほどから、いまい何を言いたいのか分からぬ。お主の望みは何じゃ？ はっきり言え」

「俺の望み？」

すると、一瞬驚命はきょとんとしたようだった。しかし、「ああ」と思いついたようにすぐに頭を下げる。

「つい回りくどいことをしてしまっていたか。申し訳ない。単刀直入に言うと、今しばらくこの土地で俺に自由に行動させてもらいたいんだ」

「その許可をわしにもらいに来たわけか」

「そう、それと同時に、観察対象が保護されているのか、土地神さんがどういう考えを持っているのかということも、いろいろはつきりさせておかなければならないと思ったわけだ」

「観察対象……」

千両神が呟く。さつきもその言葉が気になった。

観察対象というのは、話の筋からして、榊春臣、もしくは、緋桐乃夜叉媛なのだろう。あるいは両方とも取れるが……しかし。

しかし、その言葉には、どこか彼らを物としか扱っていないような、そんな雰囲気も感じられた。

それが、さつきを不快な気持ちにさせた。これはいったいどういうことなのだろう。彼らは観察されて然るべき存在なのだろうか？ 少なくとも、さつきは彼らを実験動物などとは思っていない。

さつきは驚命を見た。大驚は相変わらず、泰然としている。

「言い方がまずかったか？ でも、あんただってそうなんだろう。なんら対策を講じるわけでもなく、彼らを放置してここから見ているだけだ」

「確かに、状況的に見ればただそれだけじゃの。しかし、それにはきちんとわらわりの考えがあつて……」

千両神は先を話すのを止めた。咄嗟に何かを考えたようで、そして、驚命に問いかける。

「驚命よ。では聞くが、そもそもお主はなぜあやつらに興味を持つ？」

それはさつきも知りたいことだった。突然に現れたこの神は、いったいどういう事情でそんなことをしたいと言うのだろう。

「あ、知らないか？」

「うむ？」

「俺は、『アレ』に関してはそれなりに専門家でもあるんだぜ」

「……そうなのか？」

「ああ、それになにしろ面白い状況だからな、これからどうなるの  
か見物じゃないか。つまるところ、いわゆる知的好奇心ってやつだ  
な。ハハハ」

「好奇心、じゃと……お主は、さつきも言っておったが、やはりあ  
の者を単なる調査対象としてしか見ておらんのか？」

さつきにもその神の怒りは分かった。何がアレで、何が専門家な  
のか、さつきは全く知らない。しかし、この神が榊春臣や緋桐乃夜  
叉媛をどこか軽く見ていることだけは分かった。それはいくら人間  
の上に立つ神とはいえ、胸の中になんとも言えないもやもやを生じ  
させた。

すると、驚命はさつきたちの感情を読み取ったのか、静かに首を  
振った。

「土地神さん、あんたが俺の言葉を不快に思ったのなら謝る。だが、  
言うておくが、俺はそのことに関して他者と論争したいとは思わな  
い。俺は自分の考えを変えるつもりも、あんたの考えを変えるつも  
りも、端からないからだ。あんたが『アレ』に思うことは、そりゃ  
いろいろあるんだろう。あんただけじゃない。最近、神の世でもそ  
のために様々な争いが起きているのを、俺は知っている。けれど、  
俺にとっては、あくまで己は己、他者は他者だ」

「……」  
「だから、俺は他者から何と言われようと構わないし、それに対し  
て、何ら対抗しようとは思わない。あんたが俺を軽蔑するならそれ  
でもいい。俺はその考えを否定も肯定もしない。今回の場合なら、  
お互いの考えは違えど、そこから発展する行動が一致しているので  
あれば、俺にとっては万事オーケーなのさ」

「……さすがは偏屈者らしい考えというか、なんというか。よくそ  
んなことで神が勤まるものじゃの」



何をしても意味がないと知れば、自然と怒りも萎えてくるもので、千両神も怒るつもりはなくなったようだった。

「ハハ、それで勤まってるんだから、世の中ってのは面白いよな。

ま、とはいえ、このボスは土地神さんだ。いくら他人の意見を聞かないとはいえ、あんたの命令は聞くぜ。さっき頭を下げたばかりだしな。俺の態度が気に入らず、このまま出て行けというのであれば、それにも甘んじる覚悟だ」

「むう、もう別に良い。あやつらに余計なことはせんと言うのであれば、観察でもなんでも好きにせい」

「すまないな。恩に着る」

「しかし、ここに留まる以上、わらわの命には従え。郷に入らば郷に従えじゃ」

千両神は忘れないようにと付け加える。  
すると、

「分かってるよ。土地神さん」

そう軽い調子で驚命は頭を下げ、別れの挨拶もせず、空へと飛び立っていった。

109 白昼の訪問者 3 (後書き)

次回、この話にもう少しだけ続きがあるので、早めにアップしたいと思います(明日か、あさってになるかと)。

鷲の羽音が聞こえなくなると、途端に、世界にうつとおしい蝉の鳴き声が舞い戻ってくる。

そこでさつきは、はっと我に帰った。一瞬、それまでの記憶が吹き飛んで呆然としていたのだが、すぐにまた思い出す。

そう、自分は今まで神と神の会話を聞いていたのだ。それは、いくら巫女のさつきでも、日常では起こりえない特異な状況である。その非現実的な事態に、気を集中させすぎていたのだろうか。今まで意識の外へ置いていた精神の疲れが、どっとさつきの肩にのしかかってきた気がした。

さつきは再び立っていられなくなり、その場によるよると腰を落として体育座りをし、力を抜くと、社殿の天井を仰いだ。すつと気持ち切り替えるように深呼吸をする。

「あの神様、帰っちゃいましたね」

「そうじゃの」

千両神はどこか遠いところに想いを馳せるように、しみじみとしている。

「神の世にもいろいろな考えを持った奴らがおるのう。いちいちまともに取り合っておつたら切りがない……」

さつきはそんな神の言葉を聞きながら、寄りかかるのにちょうどいいものを探し、近くにあった賽銭箱を見つけた。

服が汚れるのも気にせず、そこまですりずりと体を引き摺って移動し、そして、背中を預け、楽になったのを確認すると、一、二度咳払いをして、タイミングを計って口を開く。

「あの、千両様。聞いてもいいですか？」

「んむ？」

「さっきの話、いったいどういうことなんですか？ 榊さんたちに何か問題が？」

「……」

すると、そのまま神は何か迷っているのか、一度口を閉ざした。

「ええと、千両様？」

「……さつき、お前にも話しておいてもよいのだが、今はせぬ方がよいのじゃろう。彼らと付き合っていく上で何か悪影響を与えるやもしれぬ。余計に彼らの生活を刺激せぬほうが……」

「それは、どういうことですか？」

さつきには千両神が何を言っているのか分からない。なぜそんなにも頑なに、彼らに関わることをよく思っていないのだろうか。

「わらわは……わらわは、この一連の事件を彼らだけで終わるものとは思っておらんのだ。大げさかもしれぬが、これはもつと大きな、重要な意味のある事件なのだ。それを考えた上で、わらわは、下手に手を出さないほうが良いと考えた。少なくとも、わらわはそう思っている。いくら神とはいえ、の」

「神様とはいえ、ですか？」

最後の言葉がさっきの印象に残った。この世の森羅万象を統べる神が、手を出さない方がよいことなど、果たしてありえるのだろうか。聡明な神に比べて、遙かに浅学なさつきには、皆目分からない。しかし、もしそうだとすると、それは間違いなくさっきの理解の範疇を越えていることなのだろう。

「……わ、わたし」

そう思うと、自分はもしや、何かとんでもないことに関わっているのではないかという思いがさつきの声を震わした。急に榊春臣や、緋桐乃夜叉媛に関わることが怖くなってくる。

千両神はそれを慮ったのか、宥めるように言った。

「さつき、勘違いするな。お前が心配などせんでも、大したことなど起こりはしない。ただ、少しだけ、わらわの期待が叶うか、叶わぬか、それだけの違いじゃ」

「え?」

「じゃから、さつきはこれまで通りの付き合いを続けておけばよい」

「本当ですか?」

「ああ、わらわが保証する」

神がそう言ってくれるのならば、何も恐れることはない。さつきはほっと心を落ち着ける。

しかし、その一方で、その千両神の期待というものも気に掛かった。

「さつき。話を変えるか」

と、急に千両神が切り出した。

「え、何ですか?」

「いや、なんとということもないのじゃが……お前、最近仲良くしておる男がおるらしいの」

「は……はい!?!」

あまりのことに、心臓が飛び出してしまっかと思つた。急に息を吸ってしまった反動でさつきは咳き込む。

「そやつのことをどう思つておる？」

「へ、へ？」

「デートはしたのか？」

「え、え？」

「将来は、一緒になることを考えておつたりするのか？」

意地悪のつもりなのか、千両神は矢継ぎ早に聞いてきた。脳内に千両神の言葉が次々に押し込まれ、さつきは、今にも目を回しそうな心境である。

「な、なななな、なんですかあ、いきなり！」

呂律も回らないままにようやくそれだけ喋つた。

「フッフ、わらわは案外真面目に聞いておるぞ。ほれ、正直に答えてみよ」

しかし、土地神は相変わらずこの調子だ。

「か、からかわないでください。暮野さんのことは……その。それは、いい人だとは思いますが。そ、そういうことは、なんていうか……ええと、気が早いつていうか、そもそも暮野さんが私のことをどう思つてくれるのか、分からないし」

そして、これはしめたと言わんばかりに、

「ほう、面白いことを言う。さつきが懸想けんそうしておる男は暮野という

のか」

などということを行い始めるのだから、さつきはますます混乱して頭を掻き毟ってしまつう。

「は、はめられたあ！」

「フフフ、女子おなこの赤くなった頬というのは、実に可愛いもの」

「ひどいですよ、千両様！」

「まあ案ずるな。その男のことはゆっくり考えていけばよい。さつきの思つとおりな。何があつてもわらわがついておる」

「え？」

「おいそれと運命を変えるなどということは出来ぬが、アドバイスくらいはしてやつてもよいぞ」

「……ほ、本当ですか？」

「わらわは土地神じゃ。ほら吹きとは違つぞ」

それを聞いて、さつきは微笑んだ。神が味方についてくれるなど、これほど心強いことはない。なんだか午前中に失った元気も取り戻せそうな気がしてくる。

すると、何を思ったのか、千両神は少しの沈黙の後、ため息をついてこう言った。

「わらわたち神は、いつたいいつまでこうして、お前たち人間を見守っていられるのじやろうか」

その言葉があまりにも寂しげに聞こえて、さつきはドキドキした気持ちに急に冷めていくのを感じた。

「……あの、千両様？」

「うん？ なんでもない。独り言じゃ」

さわりと、千両の枝が風で揺れる。

「ただの、独り言じゃ」

その風をなぜか冷たく感じたのは、きっとさつきの気のせいなの  
だろう。



## 111 夢の迷い路

榊春臣はその日、とある街中にいた。

密集した巨大なビルが立ち並ぶ通りをおおよそ南から北へと向けて歩いている。

辺りに漂うのは昼間の都会のむせるような熱気だ。季節も夏であるから、暑いのは当たり前なだけけれど、群れを成して歩く人々や、排気ガスを撒き散らす車たちを見ていると、それだけが原因ではない気がした。じっとしていると、それだけでじりじりと地球が焦げている音も聞こえてきそうに思う。

ふいに、汗が額から流れ、ぽたりと落ちて、服の襟に吸い込まれていくのが見えた。春臣はその様子に、自らの生命力が体から次第に抜け出て、溶け出しているような錯覚を覚えた。歩けば歩くほどに、疲れが増している気がした。

そして、交差点で信号待ちをしている時、春臣はついに、自分はどうしてこんな場所にいるのだろう、と考えた。

いったい何の用があって、こんな不快を感じるだけでしかない街の中にいるのだ、と。

春臣の意識はいまいちはっきりとしていない。

最後に媛子に会ったのはいつだったのか、椿に会ったのはいつだったのか、両親と話したのはいつだったか、柊町にいたのはいつだったのか、すべてが不確かで、記憶になかった。

なんだか心が空っぽになった心地である。

これからどこに行くのか、そもそもここはどこなのか、どうやってここに来たのかも分からない。

まるで抜け殻のような心地だけがそこにはあった。

すると、その時、春臣は人ごみの中から見覚えのある人物を見出した。

あれ、と思う。

春臣の視線の向こうにいたのは、彼の祖父だった。白い顎鬚をたくわえ、すらっとした体でありながら、どこかがっしりとした大木のような体格は春臣が知っているいつもの祖父のイメージと変わらない。

ひょんなところで会うものだと思いつつ、春臣はビルのショーウインドウの前に立つ彼に近づいた。

「おじいちゃん」

と呼びかけてみた。

こんなところで何をしているのか、訊ねてみようと思ったのだ。

しかし、祖父はそれに気がつく様子もなく、春臣の方を見ることもなかった。ただその場に突っ立っていて、真っ直ぐ道路の向こう側を見ている。

まさか、聞こえなかったのだろうか。

妙な感じだと春臣は思いつつも、今度は、もっと近づいて、祖父の手を握ってみた。揺すぶってみた。

「おじいちゃん。ねえ、おじいちゃん」

これにはさすがに彼も反応を示すかに思えたが、祖父はやはり、動かない。まるで、祖父の姿をしたマネキンが地面から生えているように、瞬きも身じろぎもしなかった。

まさか無視されているのか、とも思うが、どちらかと言うと、祖

父の様子は春臣という存在そのものを認知していないように見える。いったいどうしてしまったのだろう。

祖父に何が起こったのかは分からないが、これは誰かに助けを求めるときか、とそこで春臣は考えた。状況の分からない春臣にはそれが最善の策に思えたのである。

まさか、こんな祖父を放っておくわけにもいかないだろう。

と、そんなことを考えていると、唐突に目の前の祖父がすりりと歩き出した。それは、止まっていた時が動き出したかのようだった。あまりのことに春臣は啞然とする。声を出すことすら、忘れる。

そして、祖父は、そんな春臣を振り返ることもなく、すうっと溶け込むように人ごみへ消えていった。あっという間に見えなくなる。そこで我に帰った春臣は、追いかけては、と咄嗟に思った。

「待ってよ。おじいちゃん！」

そう叫んで、走りだした。歩道を横切り、横断歩道に出る。往來する人々を避けながら駆け抜け、歩いている祖父に追いついたように思えた。

が、意外なことに、よく見ると祖父は、すでに向こう側の通りにいた。人ごみを抜けて、さらに北へ進んでいる。

何と足の速いことだ。早くしなくては見失う。そう思って、春臣は懸命に走った。

しかし、追えば追うほどに、なぜか祖父の背中が遠ざかっていった。歩いている祖父よりも、遙かに走っている春臣の方が速度はあらずなのに、ずんずん、ずんずん、と遠ざかる。

そして、気がついた時には、祖父の姿はもう、道の向こうに米粒ほどの影が見える程度だった。

そこで春臣はさすがに苦しくて立ち止まり、俯いて大きく息を  
した。

「お、おじいちゃん？」

どうして、

どうして、追いつけないんだ。春臣にはその理由が分からないま  
ま、下唇を噛む。

そして、顔を上げたときには、もはや祖父の姿はどこにもなかつ  
た。

それは、これ以上の追跡が無意味であることを、春臣に告げてい  
た。その絶望感に、急に周囲の景色が霞み、歩いている人々が生氣  
のない無機質な色を帯びて見えたような気がする。

これから、どうすればいいのか。

どうしても自分は、祖父に合わなければならないような気がする  
のに。もう、間に合わないのか。

すると、そこで誰かが春臣の肩を叩いた。

「春ちゃん」

「えっ？」

振り返ると、そこには、

「おばあちゃん？」

春臣の祖母が立っていた。

「じいじで何してるのね？」

穏やかな笑顔で春臣を見る祖母は、いつもの様子と変わらない。しわしわの手を伸ばしてきて、春臣の頭をくしゃくしゃと撫でてきた。視界がぐるぐると揺すぶられた。

「うわ、くすぐったいよ。おばあちゃん」

春臣はそれが恥ずかしくて、祖母の手をどけようとする。

しかし、そこであることを思いついた。これはもしや、ラッキーなのではないか？

祖母なら、祖父がどこに行ったのか、分かるかもしれない。そう思った春臣は、祖母に訪ねてみた。

「ねえ、おばあちゃん。おじいちゃんがどこに行ったのか知らない？」

しかし、祖母は唇を尖らせてしばらく困った顔をした後、

「さあ、知らないねえ」

と答えた。

「そっか……」

春臣は肩をすくめる。期待の欠片はあっけなく四散した。

「居なくなったのかい？」

「うん、さっきこの道を真っ直ぐ行って、そのまま消えちゃったんだ」

「そっかい、じゃあ、一緒に探そうかね」

この申し出に春臣は驚いた。

「いいの？」

すると、祖母はおかしなことを言うものだど、軽く微笑んだ。

「可愛い孫が困ってるのを見て、助けないことがあるもんかね」

そう言つて、すつと、手を差し出してくる。

「ほら、行くよ」

春臣はそれで元気を取り戻した気になって、祖母の手を握った。

「う、うん！」

一人で行くよりも、二人の方が心強い。それに、よく知っている祖母と一緒にということになれば、百人力だった。

そうして、今度は二人で、どこにいるのか分からない祖父を探して、通りを北へ進んだ。街を抜け、川を越え、人々の姿が次第に少なくなつていき、もうどれくらい歩いたのか分からないほどのところまで来た。

そこはもはや、春臣と祖母の他には、だあれも歩いていない、薄暗く細い田舎道だった。

次第に、するすると陽の光が世界から後退し、夜の闇が辺りに侵入してきた。

寂しげな鳥たちの鳴き声が静寂を満たし、東の空から、月の光が世界を照らしている。

そこで、ふいに前方に、闇がばかりと口を開けた。黒々とした蛇

がとぐるを巻いているような異質な闇だ。

その闇の中心で、見覚えのある人物がこちらに手を振っている。よく見れば、春臣の祖父だった。

「おじいちゃん！」

ようやく、見つけた。そう思って、春臣の胸が高鳴る。

祖父は、こちらを見て、自分を呼んでいた。

「おばあちゃん、ほら、おじいちゃんが向こうにいるよ」

春臣はそう言って祖母に告げた。手を引っ張って、祖母を急かす。

「ほら、早く行こう」

しかし、それまで優しい表情だった祖母は急に恐ろしい剣幕で、春臣を見た。

「だめよ。行ってはだめさ」

と、首を横に振る。

「どうして、あそこにおじいちゃんが居るのに」

「行ってはダメ。あれは、おじいちゃんなんかじゃないのさ」

春臣は、啞然とした。それはどういうことだろう。あの祖父が偽者なんていうことがあるのか。

「どうして、どうしてそんな意地悪なこと言っの。ねえ、おばあちゃん、おばあちゃん」

「ほら、帰りなさい。自分の場所へ」

「どうして、おばあちゃん、おばあちゃん」

春臣はその場に泣き崩れる。自分の泣き声が周囲にこだまし始め、暗闇が急に迫ってきた。

しかし、次の瞬間には、回線が途切れるように、すべてが消え



目が覚めて、一瞬前までの光景が全て夢であったことに、春臣は気がついた。

どうやら、またしても死んだ祖父と祖母の夢を見ていたらしい。

また、なのか。

そう思うと、なんとも言えない、胃の底に灰が溜まっているような憂鬱な気持ちさがこみ上げてくる。

もう会えない人間と夢の中で再会するというのは、それはそれで嬉しいことなのかもしれないが、一方で、この目覚めたときの行き場のない空しさというのも、否定することは出来ない。彼らのいない現実を再び突きつけられている気がするからだ。

しかし、先ほどの夢は奇妙だった。死んだ祖父たちが出てきたという点でもすでに奇妙だが………いったい、あれは、なんだったのだろうか。

暗闇の淵に立っている祖父、そして、そこへ向かおうとする春臣を止める祖母。

世の中には正夢というものがあると聞くが、もしかすると、何かよくないことの前触れなのだろうか。

春臣は自身に超能力的な素質があるとは思っていない。が、それを前提としても、なんとも不吉な予感がする。閉じたはずのドアが振り返ると開いていたような、窓のない部屋から、ふと生ぬるい風が吹いてくるような、そんな言葉にし難い、不吉さだ。

そこで春臣は、夢の光景をじっくりもう一度思い出そうと試みた。しかし、そうすると、じわじわと染み出すように頭痛がしてくる。なんだか嫌になり、考えるのを止める。

片手を布団から出し、両目を覆ってみた。  
その真つ暗な闇には、  
今は誰もいない。

「じいちゃん……」

そうして、春臣が過去の記憶を思い出していると、いきなり腹部に何かがめりこんだ。

「ぐあっ！」

情けなくも、思わず悲鳴を上げる。

どうやら、急に誰かが春臣の布団に乗りかかってきたらしい。驚きに、肺が一気に縮んだのが分かった。

まさか、こんな無防備な状態で何者かに襲われるとは。

一体誰だ、と思うが、まあ、言うまでもなく、緋桐乃夜叉媛である。顔を上げれば、彼女が見下ろしていた。

「うふふふ」

と朝っぱらから上機嫌な笑みを浮べていらつしやった。

しかし、そこには神様らしい高貴な上品さは欠片もなく、獲物を見つけた肉食動物のような凶暴さが漂っていた。きつと朝一番の充電された活力を春臣をいじめる方向に使っているのか、朝食が待ち遠しくて気が狂いそうなのか、どちらかだろうと春臣は思った。まあ、いずれにせよ、たちが悪いことには変わらない。

とりあえず、春臣は無言のまま布団の中でもがき、彼女の拘束から、逃亡を試みることにした。足でつつぱり、布団の外へと脱出しようとしたのである。

しかし、悲しいかな、媛子が布団の上から両足で春臣の体を固定しているために、ほとんど身動きが出来ず、ふがふがと摩擦熱を起こした程度に過ぎなかった。

「おはよう、春臣」

そんな春臣の抵抗をあざ笑うかのように、媛子が言う。

「わしよりお寝坊さんじゃの」

そうして、長い紅髪を布団に垂らしている様子は、どこか色っぽい雰囲気もあった。

「お寝坊さんじゃの、じゃないって」

春臣はむすつとして言い返す。

「何じゃ？」

「あのな、そういうあいさつは起きたばかりの人に跨りながら言うべきじゃないってことさ」

「おお、これはすまなかつたの。ではこう言えばよいか？」「ごほん、さあ、彼奴の居場所を吐いてもらおうか」

どこのスパイ映画だよ。確かに、この状況にはいかにもな台詞なのかもしれないが。

「媛子なんかじゃ、迫力に欠けるっつーの」

「ふふん。まあ、それはそれとして、わしの愛嬌として受け取ってくれ」

そう言つて、ちろりと舌を出す。

「分かつた分かつた、かわいいつて。だから、そろそろどいてくれないかな。お願いだからさ」

「嫌じゃ！」

しかし、断固として、彼女は言い放つた。

「ど、どうしてだよ？」

いい加減にしないと、朝飯抜きにするぞ。

すると、彼女は真剣な眼差しで、そつと手を伸ばすと、乱暴に春臣の胸元を掴んだ。

「春臣、わしをよく見よ」

「な、何だよ」

ただでさえ、上から押さえつけられて苦しいのに、この体勢で上半身が引つ張られれば、さらに負荷がかかった。首が段々絞まってくる。

「おい、息が出来ないつて」

「じゃから、わしをよく見よと言つておる」

「あ、ああ？」

「何か気がつかぬのか？」

「ええと？」

気がつくか、と言われても、何か普段と変わったことがあるだろうか。春臣は近づいた媛子の顔にドギマギしつつ考える。しかし、少なくとも、春臣には彼女がいつも通りに見えた。

「か、髪型を変えたとか？」

「違う、よく見るのじゃ！」

「や、痩せたのか？」

「わしは最初から太りもせぬし、痩せもせぬ」

「ようやく九九を言えるようになった、とか」

「あいな、お主……」

彼女の目の端が怒りにくっつきり上がる。どうやら冗談を言うべきときではなかったようだ。

「こ、降参だよ。降参。俺の負けだ。だからな、ほら」

参ったからどいてくれ、と目で合図する。

しかし、媛子はというと、ふん、と冷たくそっぽを向いた。

「分かるまでわしはここをどかぬぞ」

と、こっきたわけである。

「おい、ちょっと待てよ」

「これくらいのが分からんで、よくわしと一緒に暮らしておるの」

「何を怒ってるんだ。さっきまで上機嫌だったくせに」

「あーあ、やはり所詮お主は、空気の読めぬ察しの悪いどうしようもない唐変木じゃのう。見ていて腹立たしいことこの上ない。この、この、このお」

そうして、媛子は布団の上からポカポカと春臣の胸を叩いた。手加減というものを知らないのか、本当に怒っているのか、かなり痛

い。たまらず、悲鳴を上げる。

「痛いつてば、やめろよ」

「この馬鹿春臣。あれほどいつも一緒におりながら、なぜ気がつかぬのじゃ！」

「だから、なんなんだ」

「……」

すると、彼女は無言になり、動きを止め、春臣を見下ろした。その呆れた目には、事を理解できていない春臣に対する軽い失望が感じられたが、すぐに、目じりが喜びに緩んだ。

「戻ったのじゃ」

と、言う。

「何が？」

「じゃから、ようやく、体が完全に戻ったのじゃ」

「へ？」

「わしの体が、元の姿まで」

「そ、そうなのか？」

あまりに突然の報告に、春臣は一瞬、混乱した。

「モトノスガタニモドツタ？」

「媛子が？」

そして、数秒後に、あの時雨川ゆずりが媛子の体が数日で元に戻ると言っていたことを思い出した。その事実を、春臣はすっかり失念していたのだった。

確かに、ここ何日かで、すでに彼女の身長が自分と大差ない程度にまで伸びていたのは知っている。見た目では、ほぼ十七、八と言つて問題ない。

が、まさか、気がつかないうちに完全復活をしていたとは。

「よかつたじゃないか！」

春臣は、身体を押さえつけられた状態ではあるが、素直に祝福する。

「そうじゃ、これでもうあの小さな体とも不便な生活とも完全におさらばじゃ」

うんうんと媛子は目を閉じて頷いている。

「ここまでが長かった。もしや、永遠に元には戻らんかと思うこともあつたが……この通りじゃ」

「これはますますパーティーで豪華に祝わなくちゃな」

「そうじゃ、祭りじゃ祭りじゃ。遠慮はいらん、盛大に祝うぞ！」

「分かつたから、あ、あんまりはねるな」

春臣はたまらず、注意する。彼女が乗りかかったまま暴れるので、春臣は、体のあちこちが痛かつたのだ。

「ああ、済まぬ」

「ぶっ……」

しかし、媛子の喜ぶ様子を見ながら、春臣もこれまでの長い、彼女にまつわる日々のことを振り返った。いちいち出来事を取り上げて考えることなど面倒だが、総じて、一言ではとても言い表せない

ものだろう。

春臣自身、身の危険を感じたことも一度や二度ではない。それでも、彼女も元の姿をここに取り戻すことが出来たのだ。そこには、達成感とはまた違う感慨深さがある。

「どうした、春臣」

すると、ため息をついた春臣を媛子が覗き込んできた。

「いや、初めて媛子を見たときを思い出してさ」

春臣は記憶の糸をさらに深く手繰っていた。すべての始まり。

あの夜、あの神棚の前で祈ったとき、混濁した意識の中で、媛子の、いや、緋桐乃夜叉媛本来の姿を、少女の姿を、春臣は見ていたのだった。

何よりもあの鮮烈な星屑の輝きにも似た髪の影響が今でも脳裏に焼きついている。

そのことを彼女に話すと、彼女は興味津々で頷いた。

「どうじゃ。その時のわしと寸分狂いないか？」

「ああ、全く変わらないよ」

「綺麗か？」

「うん、き、綺麗だよ」

「さようかさようか」

納得できる答えを聞いたからか、満足そうな媛子だ。

「なら、そろそろ降りてくれないか？」



今ならば、と春臣は媛子にお願いをする。

しかし、やはり彼女は首を振り、一向に降りようとしない。全くどこまでわがままなのだろう。

「何だよ。まさか、元に戻ったからまたわしを敬えとか言い出すのか？ この状況で拝め、とか」

「ば、馬鹿。そんなことを言うはずないじゃろう」

そうなのか？

「いや、媛子のことだからてつきり」

すると、媛子はぶるぶると頭を振る。それは普通ではない、過剰なほどの拒絶に見えた。

そして、なぜか感情が高まっているようで、見る見るうちに、媛子の目を潤んでいく。

「そうではない。お主は、もうわしが神などとわざわざ意識せんでもよいのじゃ。そのために、最近神の力をなるべく使わぬようにしておるし」

「何だつて？」

それは、衝撃的な言葉だった。

神の力を、意図して抑えている？

しかし、これには、確かに思い当たる節があった。春臣は思い出す。

あの蛭見の夜のことだ。

『すまぬ、調子に乗りすぎた』

神の力を使った後、急に後悔したような彼女の台詞が、今でも耳に残っている。あれには、こういう意味があったのか。

「同年代の少女とまではいかなくても、せめてそれに近い存在くらいには思ってくれてもよいのじゃ」

と、さらに彼女は意味深なことを言う。

「おい、急に何を」

そして、

「春臣」

名前を呼んでくる。

「お主も、わしと同じ気持ちなのじゃろっ?」

と、心なしか、

いや、完全に、

体を前傾させてきた。

春臣が静止する暇もなく、

彼女の顔が、

どんどん近づいてきて、

「え、お、おい!」

何をするつもりだとか、

春臣は聞こうとして、

それでも、

もう間に合わないと感じいて、

彼女が春臣の肩を押さえつけて、

媛子の顔がそこに、

唇が、

吐息が、

鼓動が、

もう、

「春臣、わしは、わしは、お主のことが」

「媛子、止め……」

そして、ついに、触れ。

ピリリリリ。

そこで、無遠慮で無機質な電子音が、部屋に響いた。二人とも弾かれたように、音のした方を振り向く。

「け、携帯だ」

春臣は彼女のその一瞬の隙をついて、起き上がった。

「ああ！ 春臣、動くな」

媛子が、恨めしそうに言ったが、それを無視して、電話に出る。

「も、もしもし？」

すると、聞こえてきたのは、能気な椿の声だった。

「あ、榊君か？ こんな朝早くにごめんな。もしかしてお休み中や  
った？」

「いや、そんなことはない。ナイスタイミングだ」

正直、間一髪だった。

### 113 冷めたコーヒー

椿からの電話は、パーティーの準備に取り掛かるために、町へ買い物に行こうという誘いの電話だった。彼女の計画する媛子のためのパーティーは、すでに予定日まで数日を切っていたし、あまりのんびりするわけにもいかないというのである。

春臣は鼓動を抑えつつも、それを聞いて、すぐに了解した。

特に重要な用事があるわけでもないし、断わって彼女一人に買物をさせれば、いつものように妙なことになるか不安な気がしたからだ。興味の向くまま一人でふらついて迷子にならないとも言切れないのだから、恐ろしい。

そして、彼女から集合場所と時間を聞き、

春臣は、電話を切った。

その間、媛子がまだ布団の上で困ったように春臣を見ていたが、それを無視して、朝食の準備に取り掛かった。

台所でフライパンを出して目玉焼きを作り、トースターにパンを突っ込むと、やかんでお湯を沸かし、インスタントのコーヒーの準備をすることにした。

それは比較的いつもの作業で、深く考えなくても流れ作業のように行うことが出来る。そう、いつも通りのことだ。春臣はゆつくりと自身の呼吸の音を聞きながら、作業の中で気持ちを落ち着けた。

ゆつくりと居間に下りてきた媛子を物音だけで確認したところで、朝食の準備は整った。

椿との約束の時間は案外早い。ゆつくりしすぎるのもまずいだろ。パンを齧りながら、テレビでニュースをチェックした。

その間、媛子が春臣の方へ視線を向け、何か言いたげにもぞもぞ

としていたが、春臣はそれを敢えて無視した。

極力何も感じないように、振る舞い、そして、さっさと外出の準備をさせた。

そう、させたのだ。媛子に。

「お主は、行かぬのか？」

洗面台で顔を洗いながら、媛子が聞いてきた。その声には、あからさまに不審感があるのを春臣は感じたが、やはり、それを敢えて無視をした。

「ああ、ちよつと今日は他の用事があるんだ。一人だけで行つてくれ。話じゃ瀬戸さんも行くみたいだから、三人もいれば問題はないだろう」

「用事……」

「ああ、用事だ」

「……そうか」

彼女は、それ以上追及することはなかった。おそらく、というか、間違いない、春臣にそんな予定がないことなどお見通しであったに違いない。

椿から電話が来る直前、彼女がしてしまいそうになった行為のことを、その行為の持つ意味を、彼女が再認識し、強く意識しているのが春臣には分かったし、また彼女も、春臣がそれを意識していることを、春臣と同じように、理解していたのだろう。

彼女も自分と同じように困惑しているのだろうと思った。

今、春臣と媛子の中に、触れればすぐにでも崩れ落ちてしまいそうな繊細微妙な緊張の壁が出現していた。

彼女と一緒にいる間、春臣はそのことを出来るだけ考えてはいけ

ないと強く念じた。

そして、彼女が着替えるのを待ち、手短に町を歩くときの注意をし、さらに昼食代などの代金を渡すと、近くのバス停まで送った。椿との待ち合わせ場所はそこになっていた。

「じゃあな。あんまりはしゃくなよ」

「ああ、分かっている」

ただそれだけの、場を繋ぐだけの空っぽの会話をして、春臣は背を向けた。その背中に、彼女の視線が突き刺さるのを感じた。

が、もちろん、振り向くことなんてしなかった。振り向いたら、何を言い出されるのか、怖かったのだ。

そして、家に帰り着き、誰にも見られていない安堵感から、春臣は重たい息を吐いた。

こんなにも頭を抱えて逃げ出したくなかったのは、初めてだった。あの瞬間を思い出して、眩暈めまいがしそうになる。

媛子に、キスを、されそうになった。

「夢、じゃないよな」

目を閉じれば、彼女の呼吸の音さえ覚えていることに春臣は気づいた。

自分は、あのとき、果たしてどうすればよかったのか。

椿からの電話。

あの、何らかの妨害がなければ、自分は間違いなく、媛子とキスをしていただろう。無理やり押しつけて拒むことも出来たのかもしれないが、少なくとも、呆気に取りられて、何をすることも出来なかった、と思う。

もしも、

仮にもしも、そうなっていたら、状況はどうなっていたのだろう。現在でさえ、あれこれ切羽詰って最悪と言っても過言ではないけれど、もしキスをしていたなら……彼女と自分との関係はどうなっていたのだろうか。

春臣は自問する。

いや、たかがキスだぞ。

と、心の声が言った。

それで、そんなことごときで、何が変わるってんだ。

子供だって、じゃれてキスすることくらいあるだろう。そんなものに、大した意味なんてない。気にすることなんてないはずだ。

「……いや」

違う違う。そうじゃない。

問題は、

問題は、するしないに限らず、彼女が、そういう愛情表現を自分に対してしてもいいと、『判断した』ことじゃないのか？

何しろ、キスは、友達とか、家族でさえ、滅多にするもんじゃなし。特別な意味のある行為だ。ただ、お互いの肌に触れるだけは、また違う。

そう、親密度の違いだ。

人と人の心の間には常に一定の距離があるとしてだ、その距離に応じて、ラインが引いてある。知り合いであるとか、友人とか、家族とか、きつとそれは心の距離で表せる。

そして、キスという行為は、その心の距離のラインをきつと踏み越えるのに近い意味を持った行為で、要するに彼女は、これまでの、たまたま運悪くこちらの世界に来てしまった神様と、その原因をたまたま作ってしまった哀れな人間の少年という関係を壊して、それとは別の本格的に新しい関係を作ろうとしてきたのだ。

それは、



「こ、恋人、とか？」

自らそう言つて、春臣は情けなくも赤面した。自分と、彼女が恋人に。

頭が痛くなりそうだった。耳の奥でつーんと変な音がし始める。嗚呼、いい感じに混乱してきたぜ。

しかし、そこまで考えて、春臣は別の可能性にも気がついた。そもそも、彼女が本気でキスをするつもりがあったのか、ということだ。

あのタイミングで椿からの電話がかかってきたので、結果的にはキスは未遂と春臣は思ったが、最初から彼女が寸前で止める計画であったという確率も、ないわけではない。つまり、イタズラだ。

『心底困った春臣の顔が面白くてのう』

といたずらっぽく言う彼女のニヤニヤ顔が浮かぶ。

しかし、あの電話のせいで、その台詞も言いそびれ、気まずくて中々切り出せないのではないだろうか。ありえなくも、ない。

いや、もしかすると、もっと状況は違って、彼女はむしろ、この緊張感を楽しんでいるのかもしれない。あの性質の悪い神様にはありえることだった。

後から家に帰ってきて、あれは冗談だったと笑ってくるかもしれない。

そう思うと同時に、自分が考えていたことがどうでもいいものかと思え、そして、怒りも湧いてきそうだった。

そうだ、きつと彼女の冗談だったのだ。

全部悪ふざけだった。ただ、自分が勘違いしているだけ。可能性はある。そう、可能性は、ある。

春臣は無言のまま、居間に戻った。テーブルの上には、朝食の時のまま出しっぱなしの食器があった。冷めたコーヒーが媛子の側にある。それに気がついた。

「媛子、全然飲んでないな」

いつもならば、春臣が淹れたコーヒーはおいしいと言って全部飲んでしまうのに。

見た感じ、少しも飲んでいないようだった。

まさか、コーヒーも飲めないほどに、『緊張していた』ということだろうか。

春臣はその瞬間、息を呑む思いだった。

そして、テーブルの横に腰を下ろすと、最近の彼女の様子を、春臣は思い出した。

数日前、春臣に意味もなく擦り寄ってきた媛子。それはまるで小猫がじゃれているようで、嬉しそうだった。

「馬鹿か、俺は……」

気がつかないうちに、声が漏れていた。

いつか、こういうことになるかもしれないなんて、そんなのとっくに予想できていたことだろうか。

「大馬鹿野郎か、俺は……」

どうしてこういうことになるか自分は今にも男らしくないのか。なんて意気地がないのだろうか。

今だつて、彼女と一緒にいるのが怖くて、答えを出すのが怖くて、彼女を意図的に遠ざけたんじゃないのか？

どうなんだ、おい！

心の方がする。

そして、憂鬱の風船が胸の中で膨らみ続けていた。こいつ、そのうち時限爆弾みたく、破裂でもするのかな。

春臣は冷たいコーヒーを啜ってみた。

「苦いな、これ」

そう呟いて、額に皺を寄せた。

髪先を指で弄びながら、夜叉媛はバスの最後尾の席に座っていた。車内はクーラーから吹く風で涼しく、立っているだけで太陽光に焦がされそうな外とは大違いだった。むしろ、肌寒いほどの温度である。

つい数ヶ月前まで、このような人々の生活環境など知りえなかった夜叉媛にとって、乗り物の中にまで冷房設備があるという事実とは信じがたいことではあった。

しかし、今の彼女には、そんなことなど瑣末なことである。なんとも拭いがたい、ぬるま湯のような憂鬱に喉の辺りまで浸かっている気がしていたのだ。

夜叉媛は不機嫌そうに指に絡まった髪の毛を息を吹きかけて飛ばす。

「媛子ちゃん？」

すると、隣に座っていた椿が話しかけてきた。彼女はいつも通り、触れば綿毛が出てくるのではないかと思うほど、ふわふわとした無邪気な表情をしている。

「どないしたん、何かあったん？」

おそらく先ほどから夜叉媛が黙っているせいだろう。心配して声を掛けてきたようだ。

その様子を見て、夜叉媛は思った。

全く、この少女ときたら……。

いつも空気が読めていないようで、存外、相手の気分を敏感に察知する能力を持っているのだから侮れぬのう。

出会ったばかりの頃、夜叉媛は彼女を小生意気な人間の少女としか思っていなかったはずなのだが、次第に彼女を見る目は変わっていた。時折彼女が見せるその力は、人間がただいつも見えている面だけで、判断されるべきでないことを確かに夜叉媛に伝えていたのである。

「いや、何でもない」

しかしながら、夜叉媛は軽く笑ってごまかした。

一瞬、彼女に今朝の出来事について、一切合財を話そうかとも思ったが、止めた。今はまだ少しばかり、自身の胸に秘めておきたい。そう思ったのである。

そうして夜叉媛は無言で目を閉じる。

それにしても、今朝の出来事。

夜叉媛が、春臣にしようとしたことを、思い出す。

彼に、口付けをしようとしたことだ。

それを思うと、花の蜜のような甘い感情が、夜叉媛の中を満たした。これ以上ないほどの、高揚感である。無意識に唇を押さえる。

あともう少し、ほんのもう少しだったのに。それなのに、たまたま運が悪かった。

口付けは未遂に終わった。

しかし、そこまではまだいいのだ。

次の瞬間、あの光景が、脳裏にフラッシュバックした。

春臣が、夜叉媛がしようとしていることに戸惑っている様子である。

途端に、胸の奥がぎゅっと狭くなる。急に居た堪れない感情に自身が晒されるのが、夜叉媛には分かった。

先ほどと打って変わって、あれはやはり、やりすぎたのだろうか、

という戸惑いが生じた。

正直な話、あの瞬間の夜叉媛は冷静さを欠いていたと言っている。元の体を取り戻した喜びと、春臣からそれを祝福されたことで、高まった感情を抑えきれずに、彼にぶつけてしまおうとしたのである。それはよくないと言え、よくないことだ。

それに、やり方もまずかった可能性もあった。なにしろ、春臣から自由を奪った上で、半ば強引にしようとしたのだから……。

これはやはり、本格的に春臣を怒らせてしまっておるのかもしれないのう。

夜叉媛は思い出す。あの後、椿からの電話を切った後の春臣の態度は、妙に素つ気無い、冷たいものだった。普段なら、馬鹿なことをするな、とか適当に叱るはずなのに。

それが、なかった。何もなかったのである。

それが、なんとも言えず、不気味だった。

それに、夜叉媛だけを今回の椿との買い物に付き合わせ、自分が来なかった理由は間違いない、

「明らかに、わしと距離を置こうとしておるよな……」

そう独りごちた。

と、

「榊君やろ？」

急にそう言われ、夜叉媛は心を読まれたのかと驚いた。

「な、何じゃ？」

見ると、椿が夜叉媛の顔をのぞきこんで、にやにやしていた。

「せやから、深刻そうな顔してたし、榊君と何かあったんかと思うて」

「む、鋭い奴じゃの」

「何言つてんの。媛子ちゃんが何か悩んでるっちゆうことは、常に一緒におる榊君のことやろうなって、すぐに想像がつくやん」

「ま、まあ確かに、そうかもしれん」

「それで、何があったん？」

当然のようにそう聞かれて、夜叉媛はたまらず視線を逸らして閉口した。やはり、彼女に話すのは止めておきたい。これは春臣と自分の問題なのだ。

解決すべきなのは、自分だ。

夜叉媛が話すつもりがないと分かったのが、彼女はくるっと笑顔を見せて、

「話せへんのん？　せやったら、それでもええけど」

とあっさり諦めた。

「へ？」

「でも、せつかく元の姿まで戻ったんやから、楽しまな。ほら、バスに乗るの、初めてなんやろ？　見てみ、外の景色。気持ちええで」

彼女が指差す方向には、川の向こう、人々が住む町並みが見渡せた。

顔を向けると、夜叉媛の瞳にも流れていく風景が映り込む。

人々が暮らす家々がある。

あの屋根の下には、春臣と自分が暮らしているような普通の生活

があり、変わらない毎日を過ごしているのだろうか。

そう思うと、なんだか安心した。

この世界に来てから、もうずいぶん経った。こういう風景で気持ち落ち着くのは、この世界に夜叉媛が馴染んできているからなのだろう。

「あ、見てみ。さつきちゃんや」

ふいに、椿が声を上げた。

「さつき……巫女の娘か？」

夜叉媛の視界も道端に佇む彼女を捉えた。すると、同時にバスが再び減速した。女性の声のアナウンスがかかる。どうやら、停留場だったらしい。



114 揺れる想い 1 (後書き)

どうも、ヒロユキです。

今回は少し短く、また半端なところで終わってますね。すいません。実は、残りの部分はあるのですが、まだもう少し見直そうと思っっているので、明日upすることになっています。それまで少々お待ちください。

夜叉媛の視界も道端に佇む彼女を捉えた。すると、同時にバスが再び減速した。女性の声のアナウンスがかかる。どうやら、停留場だったらしい。

「今日はさつきちゃんも呼んでるんやで。女同士で一緒にパーティーの準備の買い出しや」

椿が言った。

「ほう、そう言えば春臣も言っておったな」

夜叉媛も、春臣の言葉を思い出す。今回のパーティーにはもちろん、彼女も招待してあった。

通路を眺めていると、バスのステップを踏んで、さつきが車内に乗り込んで来た。そこできよるきよるとしてしたが、それを見かねて椿が彼女を呼ぶ。

「さつきちゃん、こっちやで」

「ああ、青山さん」

彼女の表情が椿を見てぱっとほころび、そして、隣に座っている夜叉媛を見て、一瞬、戸惑いの気配を見せたのを、夜叉媛は見逃さなかった。

先日の騒動（時雨川ゆずりに関わる一件）については、以前に春臣が大まかに説明を終えていたのだが、やはり、元に戻った夜叉媛の姿を見て、驚いたのかもしれない、とそう思った。

「お、おはようございます……ええと、夜叉媛、様」

固まりきった表情でそう頭を下げてくる。

その緊張をほぐそうと、夜叉媛は出来るだけ優しく彼女に話しかけた。

「巫女の娘よ、わしはさん付けでよいぞ」

「え、いいんですか？」

「うむ。椿にも普通に呼ばせておるし、お主もわしを気軽呼んでくれてよい。そうじゃのう、少し年上の人間とぐらいに思ってくれ」

「と、年上の……先輩って感じですか？」

「まあ、いきなり意識を変えるのは難しいかもしれんが、徐々に慣れてくれればよいぞ。その……さつきよ」

「は、はい。分かりました」

ペこりとさつきはまた丁寧<sup>に</sup>頭を下げた。後頭部でまとめたポニーテールが揺れる。

「ほら、さつきちゃん。後ろの席やからゆったり座れるで。はようこつち来いな<sup>き</sup>」

そう言われ、椿の隣にぽすんと座った。

すると、それを待っていたようにバスが再び出発した。大きな道路に入り、どうやら街の中心部に向かい始めたようだ。夜叉媛はそれを窓の外を眺めながら確認する。

隣では、早速さつきと椿が世間話を始めたようで、楽しげな笑い声が聞こえてきた。

そこで、夜叉媛は誰かの視線を感じる。はつとして振り返ると、そこでこちらを窺っていたさつきと目が合った。

「あっ」

と、彼女が口を押さえる。

「さつき、わしに何かあるのか？」

すかさず、夜叉媛はそう訊ねた。

「い、いえ」

ぶるぶると彼女は首を振る。それが大げさに見えて、逆に怪しい。

「うん？ どないしたん、さつきちゃん。媛子ちゃんに言いたいことがあるんなら、怖がらんでも、はつきり言ったらええやん」

「そうじゃ、別にいきなり怒ったりなどほせん。遠慮なく言え」

夜叉媛がそう言つと、彼女はじゃあ、と少し渋々という様子でこ  
う聞いてきた。

「あの、何か問題が発生したりしてませんか？」

「うむ？」

「その、榊さんと、です」

これには、夜叉媛も驚いた。開いた口が塞がらないかと思った。

「さつきの椿といい、お前たちは、二人とも揃ってわしの心が読めるのか？」

「じゃあ、やっばい」

さつきの顔がさつと青ざめる。そして、ぼそりと、

(千両様たち、榊さんたちのことで、何か怪しげな話してたからなあ……)

「何じゃ、何か言ったか？」

「い、いえ、何でも」

そう言っつて、手刀を振る。何を想像しているのか分からないが、ひどく心配しているようなのは確かだった。

そんな彼女を、夜叉媛はじっと眺める。上から横から角度をつけながらじろじろと見た。

「な、何ですか？」

「……ときに、さつきよ」

「はい」

「お主は、誰かと口づけをしたことがあるか？」

こっつ聞いた。

「は、は？」

その途端、言葉の意味が分かっていないのか、彼女の目が点になった。

しかし、一瞬のち、全てを了解した顔になり、一気に顔が沸騰するように赤くなり、あわあわと口を開閉させ始める。

「そ、そんな、あ、あああああ、あるわけないじゃないですか！  
！」

と、両手で顔を覆ってしまふ。

「き、き、キス、なんて!!」

「さつきちゃん、バスの中では静かにせなあかんよ」

彼女の声が叫びに近い音量であったため、めっ、と椿が注意をする。

「あ、すいません」

さつきは謝り、顔を真っ赤にしたまま俯いく。

そうか、そもそもこやつはそういう類の話題には免疫がないのじやったな、と夜叉媛は思い出した。経験がなくて当たり前か。

ならば、仕方ない。

「では、椿はどうじゃ?」

と、今度は首を向けて隣に聞く。

「うっん、うちもチューはしたことないなあ」

ハア、と夜叉媛ため息をついた。

「当てにならぬな……」

「なあなあ、でも媛子ちゃん。ということは、榊君とチューしたん?」

「え、え、えええええ! そ、そうなんですか!?!」

「別に、なんでもない。ただ参考までに聞いてみただけじゃ」

すると、椿がぶくりと頬を膨らませた。

「もお、つれへんなあ。うちにそんなに話したくないん？」  
「あんな、わしはただ……」

それが人間たちの間でどういうものであるのか、きちんと把握が  
したかっただけ。

しかし、それを言おうとして、夜叉媛は途中で言葉を濁らせた。  
それが、自分と春臣の間の埋めようのない距離という事実を認識  
させてしまったのである。

自分は、神の世の存在で、春臣は、人間の世の存在だ。  
そしてそれは、元々お互いが、住む世界の違う者同士だとい  
うことだ。

いくら、この世界で生活するのに慣れてきたとはいえ、夜叉媛は、  
まだこの世のことを、春臣のことをほとんど知らないのに等しいの  
である。

「媛子ちゃん？」

「夜叉媛さん……」

いきなり沈み込んでしまった夜叉媛を見て、二人が困ったように  
顔を見合わせていた。

と、そこで、またしてもバスが止まる。夜叉媛の席から街中に入  
り、通りに沿った街路樹が見えた。いつもテレビで見ているような  
店が並んでいる。

どうやら、誰かが乗ってきたようだ。夜叉媛は何気なく顔を上げ  
る。

乗ってきたのは二十代の青年一人のようだ。  
が、しかし……。

彼の顔を見たとき、夜叉媛は戦慄に似た感覚を覚えた。

あの男。

見覚えがある。

そうだ、春臣と蛭見をした夜に、すれ違った男だったのだ。



115 揺れる想い 2 (後書き)

ども、ヒロユキです。

またしても、話がぶつりと切れてしまいましたね。いやはや、申し訳ない。続きをなるべく早く書こうと思います。可及的速やかに、マツハで、やろうと思います。

まあ、それはさておき。

近頃のさつきさんは、すっかり赤面キャラの地位をこの作品の中で不動のものにしてしまいましたね。何だか出るたびに頬を染めるシーンを書いている印象があります。いやあ、当初のキャラクターの覚束なさから思えば、大きな進歩ですよ。ああ、うれしい。ここまで頑張つて書いてきた甲斐があるってもんです。この先もどんどん目立って欲しいですね。

と、そんなことを思う今日この頃。これ以上書くともたたらだらしてしまふので、今回はこの辺りで。それではまた次回。ノシ

すると、隣にいたさつきが息を呑んだのに、夜叉媛は気づいた。まさか、彼女もその男と面識があるのだろうか。反応の仕方からして、嫌な感じがした。

視線を男に戻す。男は進行方向の通路を一瞥してから、こちらに振り向き、歩いてきた。どこか頼りないひよろつとした細長い男だ。しかし、その外見とは裏腹に、夜叉媛には、彼が性質の悪い、捻じ曲がった根性をその腹に隠しているのが分かった。真っ黒でいながら威嚇するようにぎらつく目は、どこか洞窟の暗がりの奥に潜む、巨大な蛇がこちらを窺っているようだった。

気味の悪い奴だ。

夜叉媛はそう感じた。

あんな目で見られたら、たちまち鳥肌が立ってしまう。夜叉媛は咄嗟に、見つからないよう、出来るだけ窓側に寄った。

と、その男が、ふいにさつきを見た。

「おや」

と、可愛らしい小鳥を見つけたように、嬉しそうな声を出す。

「誰かと思えば、さつきちゃんじゃあないか」

「え？」

やはり、知り合いなのか。

夜叉媛が、横目でさつきの様子を確認すると、彼女は表情を強張

らせ、顎を少しだけ上下させて礼をした。

「こ、こんにちわ、杉下さん」

それは単なる挨拶だったが、その声には警戒のオーラが色濃く滲んでいるようだった。

しかし、杉下と呼ばれた若い男は、それを知ってか知らずか、やはり馴れ馴れしい様子で訊く。

「今日はお出かけかい？」

「は、はい。少し街まで」

「街か。そりゃあ、いいことだ。若者は街に行くべきだと僕は思うよ。家にひきこもっているよりは、大いに有り余るエネルギーを発散させてくるといい」

そうして、その若い男はどかっとさつきの前の席に座った。まるで王様であるかのように、広々と二人分の席の占領し、中央に腰をかけて、伸びをしている。

「いったい何者じゃ、この男。」

「夜叉媛は思う。」

「心なしか、さつきは怯えておるようじゃしの。」

「神社……」

と、服に付いたゴミを払いながら、男がどこか意味ありげに、その口走った。

「！」

すると、その言葉にさつきがぴくんと反応する。

「今日は、神社の方は良いのかい？」

「ああ、はい。今日はお休みさせてもらっているので」

それを聞いた男は、急に、耳障りな声で高らかにけらけらと笑った。

「お休み、ああそう。まあ、あんな人の来ない神社なんて、年中お休みしているようなものだけれど」

「え？」

あまりにことに思わず夜叉媛は声を出してしまった。

「来るのは相変わらず、その辺のじいさんばあさんだけだろ？ 最近の若い子なんて、そんな神社の存在すら知らないに違いないしね。神様に祈るなんて、下らないし。ダサイし」

何を、この男は……。

「でも、まあ頑張つてよ。僕たちはそんな神社ですら、守ってあげようって寄付しているわけだから。少しくらいは参拝客が増えるようにさ、工夫したり努力したりさあ。いろいろあるだろう？」

ま、無理かもしれないけれど。そう吐き捨てるように、言う。見ると、さつきの握り締めた拳は震え始めていた。

夜叉媛はよっほど男の話を止めさせようかと思ったが、その時……。

男のいやらしく狐のように細くなった目がさつきを見下ろしているのに気がついた。

まるで、傷ついた動物をさらに痛めつけるような、残酷な目をし  
て、

「にたにたと、面白がって、  
笑って、いる！」

刹那　夜叉媛の中で、何かが弾けた。

話をただ止めさせるなどと、生ぬるい。座席から立ち上がり、そ  
の男に掴みかかろうとした。

しかし、既すんでの所で腕を押さえられた。何だ、と振り向けば、椿だ  
った。

彼女はゆっくりと首を振る。

そのいつも笑顔を絶やさない彼女の顔は、今や一切の緩みもなく  
引き締められていて、僅かに口元だけを動かして、「あかん」と告  
げてきた。

「と、さつきちゃんとの世間話はこれくらいにしておいて」

そこで、男が夜叉媛を押さええている椿の方を見たのが分かった。

「君は、さつきちゃんの友達かい？」

「はい、そうです」

椿が胸を張って、挑戦的に言い放つ。それに対し、男はあくまで  
にこやかに笑うと、

「へえ、彼女と仲良くしてあげてね。巫女さんの友達なんて、そう  
そういないでしょう」

「はい。さつきちゃんは、うちの大切な友達です」

「青山、さん」

と、それを聞いて男の目の色が変わった。

「ふうん、青山ねえ」

何かを了解したように、顎を指先で撫でる。

「はい？」

「確か、何年か前にこっちに越してきた子だろう？」

「う、うちのことを知ってるんですか？」

そう椿が不思議そうに訊ねると、男は得意げに眉を動かした。

「そりゃあね。僕たち杉下家はね、何でも知ってるんだよ。この柵町のことをさ。昔からねえ」

「む、昔から」

「そうさ、そして現在のことも知ってる」

言いながら、窓の向こうの町並みを指差して、

「この町で毎日どんなことが起こり、どんな人が生活して、どんな奴がやってくるのかをね」

「……は、はあ」

「そしてだ、僕らは未来をも知っていると云っていい。未来の柵町だよ。それがどういう意味か分かるかい？ 八八、分からないだらうっ」

そうして、男は椿たちの目の前で右手の指を二本を立てた。

「いいかい、前途有望な君たちに教えておいてあげよう。この世には二つの存在がある。それは、支配するべき強い者と支配されるべ

き弱きも 「

とそこで言葉が止まった。

何を隠そう、夜叉媛とその男の目が合ったのである。それまでは、椿の背後からちらちらとしか男の姿を確認できなかったのが、その瞬間は、ばつちりとタイミングを合わせたように、男の視線と夜叉媛の視線が重なり合った。

途端に男が目を瞞って夜叉媛を凝視した。特に、髪の色を見ている。

夜叉媛には分かった。この男は、間違いなくあの夜のことを思い出したのだ。自分とすれ違ったあの夜のことを。

夜叉媛はそこで咄嗟に頭を隠すことを思いついたが、その時には既に手遅れである。

「あれ、そっちは 「

これは、何だかまずそうだ。

「おい、君は 「

しかし、その瞬間、

ブーー。

バスのブザーが鳴った。

「はい、降ります！」

さつきだった。彼女が車内の停車ボタンを押していたのである。

「ほら、青山さんたちも降りますよ」

と、そそくさと立ち上がった。

「お、おい、ちょっと君たち！」

慌てる男を尻目に、彼女の意図していることを悟った夜叉媛と椿はすぐさま立ち上がり、通路を横切った。

その途中で、男の伸ばした手が夜叉媛に伸びてきた。それが腕に触れそうになったが、間一髪、すり抜ける。

「おい、待て！」

男は声で制止しようとするが、構わず料金を支払い、慌ててバスのステップを降りた。

それと同時に、ぶしゅう、と重たい音を吐いてドアが閉まり、再びバスが発する。それを見送って、夜叉媛たちはようやく大きく息を吐いた。

「い、いったい、何だったのじゃ？」

「な、何とか逃げ切れて幸いでした」

椿は地団太を踏んで怒っている。

「ほんまに感じ悪い人やったな。さつきちゃんを馬鹿にするやなんて」

「さつきよ。いったいあの男は？」

夜叉媛は停留所のベンチに座りながら、気になって訊ねた。すると、さつきは眉間に皺を寄せながら、話しくそくに口を開いた。



「す、杉下隆二さんです。うちの神社に寄付をもらっている杉下家の方ですよ」

「杉下、隆二……」

忘れないようにと、念じるようにそう繰り返す。

「全く、気味の悪い男じゃった」

「あの、夜叉媛さん」

呼ばれて頭を上げると、そこには心配そうなさつきの顔があった。

「あの人たちとはなるべく関わらない方が身の為です。決して、近づこうなんてしないでください」

「さつき……」

「絶対に、あの人たちは、ダメです！」

そこには、単なる注意というよりは、有無を言わせず禁止するような迫力があつた。歯を食いしばり、彼女は何らかの感情を抑えている。それほどまでに、さつきは本気なのだろう。

「分かった。近づかぬよ」

夜叉媛は、バスの消えた方向を見ながら、そう答えた。

夕闇に迫ってきた雨雲は、夜の帳が下りると共に、しとしとと忍び寄るように降り出した。夏の夜だというのに、妙にひんやりとした風が吹いていて、襖を揺らし、小刻みに音を立てている。

カタカタ、カタカタ。

まるで、何かが起こる前触れのような夜だな。

杉下隆二は、暗闇に沈む柵町の片隅、杉下家の屋敷の縁側に腰掛けながら、そう思った。彼の傍らには盆が置いてあり、そこには大きな酒瓶が乗っていた。

彼はそこからグラスに酒を注ぎつつ、少しずつ飲み干している。そして、グラスを傾けて、何度目かの時、ふわりと一瞬風が吹きぬけ、それに乗って雨粒が彼の頬に飛んだ。ぴしゃり、と頬に散る。しかし、彼は気にしない。拭う素振りさえ見せない。むしろ、微笑んでいた。

自らの仕事の思わぬ成果に満足して……。彼の心は今、その高揚感に満たされて、酒を舐めつつ喜びをかみ締めている。

そこへ、みしり、と板の軋む音が響いた。

おもむろに振り返れば、羽織を着た杉下老人の姿がある。長く伸ばした自慢の銀髪を後頭部でまとめ、堂々たる面持ちをした老人は、縁側に座る隆二を見下ろしている。以前は黒かったのであるう瞳は、今は少し白くくすんで見えたが、そこには、老成した者だけがみせる貫禄の凄みが宿っていた。

老人は、隆二をじっと見つめると、開口一番に、

「一週間だ」

と深い声で言った。

「一週間経ったぞ。隆二」

「そうだな、じいさん」

隆二は余裕の表情を見せている。なぜなら、彼は今まさに、この老人が喜ぶであろうとおきの情報を握っていた。

そして、その情報は同時に、当初は何の興味もなかった隆二でさえ、調べる価値があると唸らせるものだったのだ。

「その顔は当然分かったのだろうか？ あの女の行方が」

老人は迫るともなく、どちらかと言えば冷ややかに訊ねる。しかしながら、隆二には老人がはやる気持ちを無理やり抑え付けているのが分かった。

老人の頬が微かに紅潮しているのが見える。期待している証拠だろう。

しかし、

「……いや」

隆二はそう否定した。それがまるで、大したことではないかのよう。

「な」

すると、老人の目元に深い影が差す。それは明らかに不快感を露わにしていた。

自分の計算が狂うのが気に入らないのだろう。老人は昔からそう

いう人間だった。何だって全てを自らの手のひらで操りたがるのだ。  
案の定、

「何だと、突き止めておらんのか！」

と怒声を上げた。

「ハハ、せっかちななあ、じいさん。まあ待ちなよ」

しかし、そうやって隆二は、余裕の表情でまた一度グラスを傾ける。

「確かに、まだあの蒼髪の女の居場所は分かっていない。ところどころで目撃情報はあるんだが、どうにもばらついていて、決定打に欠けるものばかりだ。妙な話さ。もしかすると、あいつは大方背中に羽でも生えていて、空を飛べるのかもしれない」

「それだけしか、分からんのか？」

「まさか」

隆二は首を振る。

「僕の情報網を舐めてもらっちゃ困るね。目撃情報はあるって言うたろ？ だから、その女の大まかな足取りは掴めてるよ」

「足取りが？」

「そつだよ」

「うつむ、構わん。それでも話してみろ」

しかし、隆二はふうとため息をつくとき、グラスを盆の上に置いた。もったいぶった様子で、

「だけど、その前に」

と指を鳴らす。

「うむ?」

「まずは、それよりももっと面白い話をしよう」

「それよりも面白い話、だと?」

「ああ。じいさんも興味があると思うぜ」

「……」

意味ありげな言葉に老人は逡巡したようだったが、すぐに先を促した。

「分かった、ともかく話してみる」

「了解」

そして、隆二は立ち上がると、ポケットからタバコを取り出し、口に啜えた。何をするのかと見つめる老人の前で、重量感のある金属のライターを取り出す。

「何を?」

そして、

カチリ。

ぼつつと、火をつけた。

その火が、隆二の顔を、老人の顔を、仄かに、ゆらゆらと、儚げに照らし出す。

「じいさん、この炎の色をどう思う？」

タバコを啜えながら、隆二が訊いた。

「何だ？」

「綺麗だろ？」

にやりと笑う。

「……」

「例えばだ。例えば、こんな髪色をした女が、この世にいたら、どうだい。面白くないか？」

これには、さすがの老人も絶句した。

「……蒼い髪だけでなく、炎の色をした髪の子がいると？」

「そうさ」

タバコに火をつけ終わると、煙を吐いて、ライターを消す。すると、隆二の目はタバコについた火を反射しているのだろうか、急にぎらぎらと妖しく光り出した。

「ありや、しびれるねえ。ため息が出るほどに、燃えるような、咲き誇る花びらのような髪だ。俺は……そんな女を見た」

「な、なんだとー！」

「嘘じゃないぜ。あいにく写真は撮ってないが、俺はこの目で確かに見たんだ」

すると、隆二は不満げにタバコの煙を口から吐き出し、空を見上げる。

「だが、その女については、奇妙なことだらけだ。まず、俺はこの一週間の間に、その女を二度見たが、同一人物に間違いないはずなのに、背の高さが違った」

「背の高さが？」

「ああ、俺はオカルト染みたことは嫌いだが、その女は小学生ほどの身長から、高校生くらいに伸びていた。竹の子じゃあるまいし、この世に、数日でそこまで成長する人間などいない」

「お、お前の見間違いではないのか？」

老人は、生唾を飲み込みながらも、冷静に言った。

「姉妹という可能性もあるだろう」

「いや、俺はこの目で間違いなく見たんだ。あの女は紛れもなく同一人物。それに、まだおかしいことはある。そんな奇抜な髪をした奴がひよひよひよいそこらへんに現れるはずがない。俺たちが知らない間にだ」

「……お前、それも調べてみたのか？」

これには、老人の目が混乱したように忙しく揺れた。

「ああ。だがさっぱり分からない。蒼髪の女にも言えることだが、これほど情報がないなんてこと、ありえないんだよ」

隆二はそう苦々しげに言う。

なにしろ、この町に張られた杉下家の情報網は伊達ではない。町に出入りする人間は、乳飲み子から杖をついた老人までほぼ全ての割合で網羅しているため、調べればそれなりの情報は出てくるのである。

それは、杉下家が大昔から連綿と受け継ぎ、構築してきた独自の

ネットワークであり、現在は隆二に受け継がれ、管理を任されていた。

隆二としては、もちろんその管理を怠っていたわけではないし、これまでも特に問題がなかったため、今回、赤い髪などという特別奇抜な特徴をした少女を見逃していたなどという事態は、寝耳に水だった。奇怪としか、言いようがないのである。

「まるで、異空間からひょっこり出現したみたいだ」

隆二は不快感に、頬を引きつらせながら言う。

異空間などと、不可思議なことを信じない隆二からすれば、使うのに躊躇する言葉だが、この時ばかりはそういった表現も禁じえなかった。

「こんなこと考えたくねえが、もしかすると、じいさんが言うような不思議な力を、マジでその女は持っているのかもしれないな」

「む、むう。大いに考えられる」

「まあ、それはともかく、俺は調べた。俺たちの情報網にも、万一の漏れがあつたということも考えうる。だから、改めてその女についてな」

「分かったのか？」

「もちろんさ」

「ならば、早くその情報を」

「そこで、さっきの話に戻る」

隆二が手を翳し、老人の言葉を遮って言った。

「蒼髪の女だ」

「む、それがどうした？」



老人は明らかに苛立っている。無理もない。話が二転三転して、自身の満足いく答えに中々たどり着かないからだろう。しかし、隆二はまあまあと老人を抑えた。

「ここからが面白いんだから」

「何だ、早く言ってみろ」

「実はな、この両者、柊町の『同じ場所』を出入りしていることが分かったんだよ」

「な、ど、どういう……」

老人の顔に明らかに動揺が浮かんだ。

「驚いたか、じいさん。同じ場所なんだよ。同じ場所！」

そこで隆二は畳み掛けるように、老人を指差す。

「そ、そ、そこは、どこだ！」

その問いに、すつと呼吸を止めて、じっくり間を置くと、

「そこに住んでいる者は、じいさんもよく知っている人物の関係者だ」

隆二は白い歯を見せつつそう言った。

「楠哲夫っていうじいさんの孫、榊春臣ってガキの家だよ」

柊町の北東。

せらせらと淀みなく流れる楡川の上流。

蔽かな空気に包まれた森の奥に、その神社はある。

千両神社である。

古い歴史を持つその神社で、ひっそりと木漏れ日光る鳥居前の石段に、今日も一人の少女が立っていた。

少女 瀬戸さつきは手に長い竹箒を持ち、長い髪を揺らしながら、石段の掃除をしている。

高校生でありながら、親から普段の神社の管理を任されているこの少女は、従順にもその役目を背負い、来る日も来る日も神社へと通っていた。昔の勢いはどこへやら、今となっては参拝客など皆無のこの神社を、千両神と共に日々見守っているのである。

降り注ぐ蝉の鳴き声の中、さつきの箒と石段の擦れる規則的な音が、湖の岸辺に寄るさざ波のように、遠く、聞こえていた。

ザザ、ザザ、ザザ。

と、ふいにその音が消えた。

何かと思えば、さつきが手を休めて、石段の下の辺りを見ているのだ。そこに気が誘われるものでもあるのであろうか。

しかし、彼女は何を思ったか、すぐに視線を戻すと、再び作業に戻る。

また、箒の擦れる音。

そして、しばらくすると、またしても音が止んだ。するとやはり、

この少女は石段の始まり辺りを見ているのである。

いったいどうしたことだろう。仕事熱心な彼女であれば、普段の作業で集中を切らすということはない。単に暑さや、疲労で作業を中断するというのであれば話は別だが、彼女のこの様子は、明らかにそれらとは気の逸れ方が違う。

彼女の澄んだ無垢なる瞳は、何かを求めるように瑞々しく、潤んでいる。

しかし、視線の先には、誰もいない。ただ、ぐねぐねとうねった寂しげな砂利道が続いているのみである。

それが、幾度か続いた。

作業を始めて十分ほど経っただろうか。そこでさつきは、休憩をしようとして、石段に腰掛けた。ずいぶん立ちっぱなしで作業をしていたので、足が重たくなっているのだ。タオルで流れた頬の汗を拭う。そして、

「今日は、来てくれないのかな」

と呟いた。

「昨日は暇だから明日遊びに行くって、電話で言ったのに」

身体を逸らして、さつきは空を仰ぎ見る。

木々の合間から見える夏の空は、ひたすら青く、うっかりすれば、頭の中が真っ白になり、ふわふわと遠くまで飛んでいってしまいうだった。

まるで、浮遊するような、心地いいような、それでいて、ふらふ

らとした不安定な気持ちをさつきは感じている。

「いったい、これは何だろう。なんだか、変な感じ。」

そこではっと我に帰ると、さつきは急に、いてもたってもいられないような、切ない気分には晒された。両腕でぎゅっと足を引き寄せ、もじもじと身体を動かす。

「ああ、もう。わたしったら、そう言われただけで、何で昨日からあの人のことばかり考えてるんだろ。こんなことしても意味なんてないのに。」

じれったそうにもがいて、ため息。膝の間に頭をぐりぐりとこずめてみた。

「ああ、ほんと、何してるんだろ。」

と、そこで、傍らの石段の影から、あるものが顔をのぞかせているのに、さつきは気がついた。

「あ……」

それは鮮やかな赤い花弁をした野草だった。

さつきの目が吸い込まれるように、その小さな赤い花を凝視した。そして、なにやら、うーむと唸りだす。

その時、さつきの脳内では、いつも自室で読んでいる多くの漫画や小説の記憶が引き出されていた。

誰もいない丘の上。

約束の木陰で、恋人を待つ少女。

一時間経ち、二時間経ち……。

やがて、彼は来るのか、来ないのか、言いようのない不安が少女

の胸に押し寄せてくる。

そして、彼女は傍らの花を摘んで。

一枚、一枚、花びらを。

さつきの瞳が、迷っているようにきよるきよると忙しく動いた。  
うん、会いたい人がいる時は……定番、よね。

けれど。

さつきの目に迷いが生じる。

「こ、子供じゃないんだし」

いかにも馬鹿馬鹿しそうに、そう独り言を言って、さつきは目を逸らした。

そうだ、こんなことしている場合ではないのだ。仕事をさつさと終えてしまおう。

そして、箒を握りなおし、作業に戻ろうとする。服に付いた砂を払って立ち上がった。

しかし、

しかし、なぜかその手が動かない。

どうしても、花が気になるのである。黙ったまま俯き、さつきはまた腰を下ろした。彼女の細い手がその赤い花に伸びる。

ま、まあ、物は試し、だしね。

そして、そつと花を茎から千切りとった。そのまま、誰かに見られていないこと確認して、花びらの一枚を摘む。

「あ、会える……会えない……」

息を潜めるように、恐る恐る、彼女は呪文を唱え始めた。

「会えない、会える、会えない、会える……」

はらり、はらりと、花びらが彼女の膝に、足元に落ちていく。

「会える、会えない、会える、会えない」

最初は綺麗に円形で開いていた花も花びらが抜け、次第に形が変わっていき、次第に角度が狭くなる。だんだん、満月の形から、半月の形に、そして、扇形に。

そうなるにつれ、彼女の言葉のテンポも早くなった。

「会える、会えない、会える、会えない、会える」

後、もう少しだ。

「もしもし、さつきちゃん」

「う、うぎゃああああ!!」

絶叫しながら、その場でさつきは数十センチ飛び上がった。もちろん、まじないの途中にいきなり声をかけられ、心臓が飛び出すほどに驚いたのである。

混乱しながらも、さつきが小動物のように素早く背後を振り返ると、そこには、最近親しくなった一つ年上の少女がにこやかに立っていた。

いつも花のような笑顔を絶やさぬ少女、青山椿である。

「ふふふ、神社の階段のお掃除なんて、」苦勞さんやなあ

た。 勞いの言葉と共に、椿は髪を揺らして彼女の隣にひょいと座つ

労いの言葉と共に、椿は髪を揺らして彼女の隣にひよいと座った。

「あ、青山さん!？」

「こんにちわやな、さつきちゃん」

「ど、どうしてこんなところ!？」

言いながら、さつきはさりげなく花を背後に隠し、散らした花びらをすばやく払った。それを椿に見つかっては説明が面倒だし、なんといつても恥ずかしい。今時、時代遅れな花占いをしているなど、笑われてしまうに決まっている。

すると、椿はぼかんとして答えた。

「どうしてって、そりゃあさつきちゃんに会いに来たからやろ。なんでそんなにおろおろしてるの?」

「い、いえ、あんまりにも突然だったので、驚いて」

と、さつきは取り繕って……。

まさか、今の花占いが青山さんを呼んだなんてことは、ないわよね。そう思いながら、気もそぞろに愛想笑いをする。

「き、今日はいい天気ですよねえ。絶好の散歩日和っていうか」

「ああ、せやな。散歩するのもええけど、こうして森林浴するのももってこいや」

そう言って彼女は、両腕を伸ばし、ぐうっと深呼吸をして、ふわっと息を吐いた。



そこを風が吹きぬけ、木々の緑をざわめかせる。

「ここは、静かだええとこやなあ。毎日来るのもええ感じや」

椿はうつとりするように言った。

「そうですね？ でもさすがに毎日来ると、静か過ぎて飽きちゃいますよ」

「うん？」

「私以外は、時々茶菓子を持って参拝してくれる近所のご老人しか来ませんし……」

さつきはほとんど参拝客の来ない、ひっそりと静まり返った神社を思っていた。

「ええ、ほんまに!？」

椿は意外そうに目をぱちぱちと動かす。

しかしながら、ここに初めて来た彼女は知らないで当然のことだ。この森の奥にある神社に流れる、永遠の檻に閉ざされているような、長い沈黙の時間のことを。

夏であれば、まだ生命力豊かな生物たちの騒々しさがあるものの、冬の間の、あの、誰も来ない寂しさと言ったら、さつきには、空気をすら凍ってしまったように思えるほどなのである。

自分という存在が世界から切り離されて取り残されて、どんどん小さくなっていき、終いには消えてしまいうそにも感じるほどに。

そう思っていると、さつきは今度は数日前のバスでの出来事を思い出した。

あの、杉下隆二の、心の奥を無遠慮に踏み荒らすような、嫌みっ

たらしい言葉だ。

『神様に祈るなんて、くだらないし。ダサイし』

まるで、自らがすべての頂点に立っているかのような、高圧的な声だった。出来れば、さつきは二度と、聞きたくない。思い出すだけで目が熱くなりそうなのである。

すると、椿が急に、そや、と明るくさつきの膝に手を置いてきた。

「なあなあ、さつきちゃん、巫女さんの服って、一着しかないん？」

と訊ねてくる。

「はい？ それは、何着もありますけど……どうするんですか？」

「うちもさつきちゃんのお手伝いするんや」

と、椿が顔を輝かせながら、名案やろ、と提案してきた。

「ええ!？」

この申し出にはかなりびっくりした。

「あれ、あかん？」

「いえ、それは構わないですけど。どうしていきなり？」

「だって、一人で仕事するよりも二人の方が楽しいやろ？ そっちのが捗るし。それに、うちはこの千両神社が気に入ったんや」

椿はぴつと指を立てて言う。

「そ、それは、あの、ありがとうございます」

「うっん、なんも感謝されることやあらへん。うちは心からそう思うだけのことや」

そうして、

「うちらで少しでも頑張つて、この素敵な神社にたくさん人が来てくれるようになるよええな」

彼女はまるで、祈りを込めるように呟いた。

その瞬間、さつきははっとする。それまで胸の奥でもやもやと煙っていた隆二の言葉が消え去り、代わりに、穏やかな春のような日差しが降り注いでくるような気がしたのだ。思わず、目を閉じる。

そして、改めて横を見ると、椿がこちらを向いて、にっこりと微笑んでいた。その優しい笑みには、彼女の穏やかな人間性からにじみ出てくるぬくもりがあった。

「そう……ですね」

さつきはそう言って、満面の笑みを返した。

それからしばらくして、

「そうや、ちよつとさつきちゃんに協力してもらいたいことがあるねんけど」

急に椿が思い出したように言った。

「協力してもらいたいこと？」

いったいなんだろうか。さつきは小首を傾げた。

「うんとな、榊君と媛子ちゃんのことなんやけど」

「え？」

これには思わず目を見開いた。

榊春臣と、緋桐乃夜叉媛。

彼らのことは、当然のことながらさつきも気になっていることだった。最近、彼女らのことで、神たちが不穏な会話をしているところを聞いているし、数日前のバス内でも夜叉媛の様子がおかしかったことをさつきたちは知っている。

「また、何かあったんですか？」

戸惑いを隠せないさつきに、椿も困惑している様子で続きを話す。

「うんとな、媛子ちゃんだけやのうて、榊君も様子がおかしいねん」

「……榊さんも、ですか？」

「そつやねん」

と椿はどこか気落ちした元氣のない声で言った。

「大学来てもいつもよりぼつっとしてるし、うちが話しかけても、上の空つちゆう感じで、元氣がないんや。何かあつたんかって聞いてみても、もごもご誤魔化されるばかりで」

「なる、ほど……」

「あれは間違いない。媛子ちゃんのこととて悩んでんねん。うちにも話さへんってことは、よつほど重要なこと……」

「そ、そついえば、夜叉媛さんは、きき、キスがどうとかつて言つてましたけど」

ふいに思い出したことを話すと、椿がずばりとさつきの顔を指差した。その表情には確信めいた自信を感じる。

「それや。うちもそれを思った。せやから、そこから連想するに、

おそらく二人が抱えてんのは、恋の悩みやな」

「恋、ですか」

そつ自分で言った瞬間、さつきの胸の中に木犀の顔が浮かんで消えた。なんだか、恥ずかしくなつて目を閉じる。

一方で、椿は探偵のような険しい目つきで、顎に手を当てていた。

「榊君も人に対してあんな風に上の空になんのは恋の悩みつて相場は決まつとる」

「そつなると………いったい、二人に何があつたんでしょうか？」

「うーん、さすがにそこまでは分からんけど、ともかく、二人の間が緊迫してるっていうのは分かるで」

と、彼女は難しそうに腕を組む。

「緊迫、ですか？」

「せや、二人ともお互いにいろいろ考えてんねんけど、なんていうか、それを素直に言えずに、身動きが取れてないって感じやねん」

そして、なにやら手のひらを地面に対して水平に伸ばして、

「シーソーがな、こつ、吊り合ってる状態で、真っ直ぐなってるやろ」

と説明する。

「こんな時は、どつちかに少しでも重みが増せばすぐに傾いてまう。めっちゃ不安定な状況や。媛子ちゃんたちはな、今そんなギリギリな状態になってんねん」

「……そ、そんなことに」

「そこで、さつきちゃんに頼みや」

と、椿が急に明るく手を叩いて言う。

「はい、何です？」

「あんなあ、この状況の打開のために、うちら二人で協力して、媛子ちゃんと榊君が素直になれるよう背中押したろうと思うてんねん」  
「え、そ、それって……」

さつきは一度言葉を飲み込んで、

「それって、いわゆる恋のキューピッドって奴ですか!？」

と素つ頓狂な声を上げた。

「ああ、それええな。キューピッドってなんかかっこええし。うちの名前に決定や」

椿がのんきそうに笑う。

「い、いえ、青山さん。そんなことはどうでもよくてですね……」

そこでさつきはごほんと咳払いをし、一度気持ちを落ち着かせる。そして、椿をじっと見つめて考え込んだ。

さて、これはどうするべきか。

なにしろ、さつきには、彼女が行おうとしていることが、とても余計で、危険なことに思えていたのである。

もちろん、さつきも彼らのことに気に掛かっていないと言えは嘘になる。

しかしながら、これはそれだけの理由で唯々諾々と承諾できる問題ではないのだ。

なぜなら、彼らの関係の不安定性というものは、今に始まっていることではない。表面上ではそうと見えなくても、心の奥底では、お互いですら気がついていない葛藤が、常にあるのである。

その奇妙な齟齬そごが生み出す違和感を、さつきはずっと、彼らに会う度に感じていた。

そして、さつきはその原因が、『神と人』という、圧倒的な存在の違いにあることも知っていた。本来ここに存在すべきではない者と人が共存しているというちぐはぐな事実、それだけで、夜叉媛と春臣の心に不和としてわだかまっているのである。

だからこそ、さつきはそんな不安定な要素を抱えた彼らのするこ

とに、あまり手を出さずにしてきたのだ。

そして、そのただでさえいつ崩れ落ちてもおかしくない彼らの関係に、さらに問題が発生している現状で、不用意に手を出そうものなら……いったいどうなることか。

さつきは唇をかむ。

これは事の重大さを椿に話さなくてはならない。

そう思って、口を開くと、迫るような強い口調で訊ねる。

「青山さん、本気でそんなことをするつもりなんですか？」

「え？」

てっきり了解してくれるものと思っていたのか、椿が呆気に取られた様子で、さつきを見た。

しかし、さつきは語気を緩めない。

「いいですか、私たちが榊さんたちのその緊迫した状況に介入するということは、つまり下手をすれば、榊さんたちの関係を逆に悪化させてしまうかもしれないんですよ」

「さ、さつきちゃん……」

「分かりますか？ さつき青山さんが言っていた、シーソーを傾けてしまうようなことを、私たち自身が起こしてしまうかもしれないんです」

「……」

「青山さんは、その危険を冒してまで、本当にそんなことをするんですか？ その危険を、理解しているんですか？ 人の気持ちはいつだって、弱くて、頼りなくて、壊され易いものなんです。遊び半分ですることじゃ、ないんです」

椿は、必死に話すさつきを何も言わずに見つめていた。その瞳の色はよどみ、何も映していないかのように光を閉ざしている。



が、しばらくすると、しずしずとまたその瞳に光が戻り始めた。  
今度は椿が凜然とした様子で口を開く。

「確かに、さつきちゃんが言うようなことが起こるかもしれへん」  
「だったら」  
「でも！」

そこで椿の言葉が遮る。

「でも、それ以前に、うちは榊君たちが悩んでるのを、放っておけへんねん」

「え？」

「だってさつきちゃん、二人はうちの友達なんや。分かるやろ？  
街ですれ違うだけの他人とはちゃうねん。たった数ヶ月やけど、うちは榊君たちとたくさん一緒におった。楽しいこともしたし、怖いこともあった。うれしいこともあったし、悲しいこともあった。そんなたくさんの時間を過ごして、榊君たちはうちの特別な存在になったんや。せやから、榊君たちに起こることは、他人事やない。うちは、自分に起こっていることと同等と思うからこそ、二人をなんとかしたいと思うんや」

「……」

「さつきちゃん、それだけで、うちが行動する十分な理由にならん？」

「そ、それは……」

さつきは言葉に詰まる。確かに彼女言うことには説得力があった。

「二人がギスギスしてるより、やっぱり仲良うしてくれてるのが、うちはうれしい。そう思うから、うちは助けたいって思う。うちに

とっては、このまま見過ごして、放っておくことの方がよっぽど嫌や。それを何より、うちが許さへん。さつきちゃんは……さつきちゃんやったら、友達が苦しんでんのを、見過ごせんのか？」

「え、あ……いえ」

思わず、閉口する。さつきには、この熱意に、反論出来る気がしなかった。

友人だからこそ、手助けしたい。  
なるほど。

あまりにも単純明快で、これ以上ない答えである。少なくとも、その純粋な思いを、さつきが止める権利はない。

さつきはしばらくして、ゆっくりと頷いた。

「……分かりました。青山さん」

「うん？」

「お引き受けしましょう」

「ほんまに？」

「ええ。私だって、榊さんたちを助けたいですから」

自然に口から出た言葉。

これも、さつきの本心には違いなかった。

すると、

「おおきに。さつきちゃんなら協力してくれると思った」

そう言って、椿がまたいつものように白い歯を見せてにこっと笑った。さつきの手をぎゅっと握ってきて、倒れこむように抱きついてくる。そして、そのまま類ずりをしようとするものだから、さつ

きは驚いた。

「ひゃあ！ 青山さん。やめてくださいよー！」

と、その少々乱暴な抱擁から逃げつつ、石段を登って、そして、あることに気がついた。

「あの、青山さん」

追いつがろうとする彼女を見下ろしながら聞く。

「肝心なことに気づいたんですが、私たちが榊さんたちを後押しするにしても、それは具体的にどういうことをするんです？」

すると、彼女はさつきの腰に腕を回そうとした状態で、ぽかんと口を開けた。

「うーん、ああ、それやなあ」

と困ったように唇に指を当てる。

「か、考えてないんですか？」

「それは、せやから、さつきちゃんと考えよう思ってたからな」

まあ、そんなことだろうとは思ったが。

「うーん」

さつきは石段の上に再び腰を下ろして、そして、重たいため息をついた。

そう言われてもなあ。

そもそも、正直な話、さつきは自分に恋のキューピッドなど務まるとは思っていない。

だって、私だって、暮野さんのこと、どうすればいいのかわからないのに。

そう思うと、さつきは急に冷たい風に吹かれたような、切ない気持ちになる。

ああ、暮野さん、暮野さん。

今日はまだ来ないのかなあ。

そのときだった。

「おーいー！」

蝉の鳴き声が止まない神社の石段を貫くようにして真っ直ぐに少年の声が響いた。

そのときだった。

「おーい！」

蝉の鳴き声が止まない神社の石段を貫くようにして真っ直ぐに少年の声が響いた。

突然のことに、一瞬、さつきは時が止まったような錯覚に陥る。

一気に周りの音が遠のいて、ただ顔だけをその声のした方へ向けた。木々からせらせらとふり零れる光の筋に照らされて、作業服姿の少年が石段の始まりで手を振っている。

「暮野さん！」

その姿を視界に捉えた瞬間、さつきは転がるように一段飛ばしで階段を駆け下りていた。親が見ていけば危険な上にはしたないと顔をしかめるであろう行為だが、この時のさつきには、そんなことなど意識の外だった。

跳ねて、跳ねて、ぐんと跳ねた。

そして、木犀の前で急停止すると、急激な運動の反動からか、大きく咳き込んだ。

「おいおい、大丈夫か？」

と手をさしのべる木犀に、さつきは深呼吸をしながら首を振る。

「い、いえ、平気です。それよりも、暮野さん、もう今日は来ないのかと」

すると、木犀は申し訳なさそうにかぶりを振った。

「ああ、ごめんな。本当はもっと早くに来る予定だったんだけど、急にバイトが入っちゃって」

「そ、そうだったんですか」

さつきは、胸を撫で下ろした。

(良かった。もしかしたら、暮野さんに何かあったのかと思った)

と小さな声で安堵した。

「さつきちゃん。どないしたん？」

すると、背後からゆっくりと階段を下りてくる樁の足音が聞こえた。振り返れば、転げ落ちないようにか、彼女はずいぶんゆっくりと下りてくる。思わず駆け寄って手助けしたくなる様子だった。

さつきが樁に駆け寄ると、木犀が彼女を見て、何か気がついたようだった。

ようやく階段を下りてきた彼女に対し、

「そっちは確か……青山、さんだよね」

と訊ねた。

急に名前を呼ばれてか、樁は目を白黒させて驚いた。

「な、何でうちの名前を？」

と口到手を当て、細い目で見上げるように木犀を睨み、

「まさか、幽霊!！」

と、理解に苦しむ微妙な推理を披露した。

「あ? な、何でさ」

「ほら、幽霊ならいろんなところ通り抜けられんねやろ? そしたら、うちの情報なんてほほいのほいで調べ放題やし」

これ以上ない完璧な推理と自負しているのか、彼女は勝ち誇ったような顔で説明する。

だが、

「全然違っつて、生きてるし」

当然ながら、木犀に一蹴された。

「俺だよ俺、一度会ったことがあるだろう? 青山さんが山の中で迷子になって、弟たちと一緒に帰ってきたとき……」

そこまで言うと、椿はようやく合点がいったのかぶんぶんと何度も頭を上下に揺すった。

「ああ、そう言われたら」

が、なぜかすぐに顔を真っ赤にし、今度は腕をぶんぶんと振り回して抗議した。

「って、うちは迷子になんてなってないんや!」

「ああ、ごめんごめん。そうだったよな」

木犀は苦笑いをしながら頭を搔く。

しかし、そんな彼を威嚇するように椿は睨んでいる。それを言われては、自らの沽券に関わるとでも言いたげに、低く体勢を構え、妙なことでも口走ろうものなら、彼に飛びかかることも辞さない様子だ。

このままでは、場が険悪なムードになってしまいかねない。

まずいと思ったさつきは、椿の肩を優しく叩いた。

「落ち着いてください、青山さん。暮野さんは私の友達です。悪い人じゃないですよ。それに、暮野さんのことは前にも話したはずですよ。ほら、パーティーの……」

「そうそう、さつきちゃんから聞いてない？ 今度の榊の家でのパーティーに行くって」

すると、ぱんと音がする。全てを思い出したのか、椿が手のひらを叩いたのだ。

「ああ、その暮野さんかあ。さつきちゃんが一緒に連れてくるって言うてた人やな」

「そうですそうです」

「さつきちゃんの友達の……」

「ええ、ええ」

「それで確かさつきちゃんが、めっちゃかつこええって言

その途端、さつきが椿の口をむんずと塞いだ。それは尋常ではないスピードで、まるで空間から空間へ、瞬間移動をしたようにも見えた。ひゅんと風が起こり、砂塵を舞い上げる。

あまりのことに、木犀は目を丸くして驚いた。



「ど、どうした？」

「え、えへへ。な、なんでもないですよ」

さつきはぎこちない笑みを返した。

その間、椿がもがもがと足掻いて恨めしそうにさつきを睨んでいるが、さつきは気づいていない風を装い、無視した。

「全然少しもちっとも気にしないでください」

その言葉の持つ殺伐とした空気に、思わず木犀は後ずさりながら答える。

「そ、そうか。分かったよ。気にしない」

そして、彼は思い出したように腕時計を見ると、

「それじゃ、そろそろ俺は行くから」

と言った。

「え、も、もうっ？」

それを聞いて、さつきの表情がみるみる沈む。

「悪いな、これからまだバイトがあつてさ。本来なら、こんなことしてないで、早く戻らないとまずいんだ」

「そう、だったんですか」

「でも、昨日はここに来るって言ったる。だから、さつきちゃんの様子ぐらいは見に来ようと思ってさ」

その瞬間、まるで、信じられないものを見たかのようにさつきは目を見開いた。それは、一瞬前まで、暗く俯いていたとは思えない表情だった。

「え、じゃあ、それだけの……私のために、わざわざ？」

と、おずおずと、その事実を確認する。

しかし、木犀の方はというと、何をそんなに驚くのか、意味が分からないというようにきょとんとしていた。

「わざわざなんてことはないって。だって、さつきちゃんと約束したんだから」

その、たださりげなく言った言葉が、さつきの頬をみるみる赤く染めた。

私との、約束を守るために、来てくれたんだ。

そう思うと、さつきの口から言葉にならない声が漏れて、口が震えるようにパクパクと開閉した。それはまるでオーバーヒート寸前のロボットの様相である。今に湯気が上がっても不思議ではないようにも見えた。

が、それには気がつかないのか、木犀はくるりときびすを返すと、

「じゃあ、パーティー楽しみにしてるよ。俺、とっておきの、持って行くからさ」

と手を振りつつ去っていく。

さつきも慌てて手を振りかえして、彼を見送った。

「は、はい、楽しみにしてます。それでは、お気をつけて」

そして、彼の姿が木々に隠され、徐々に消えていくと、はつと我に帰ったさつきは、そこで、ようやく椿から手を離れた。荒く呼吸をしながら、彼女が新鮮な外気をようやく吸い込む。

「はあ、酷いでさつきちゃん。いきなり何すんの？」

よほど苦しかったのか、彼女の目じりには涙がじんわりと溜まっていた。

さつきはすぐに頭を下げ謝った。

「すみません。緊急事態だったので」

「緊急事態？ よう分からんけど。それより、さつき暮野君が言うてた、とっておきつて、なんやの？」

「へ？ そんなことを言つてましたか？」

「言つてたやない。覚えてへんの？ さつきちゃん、もしかして、熱でもあるんちゃうか？ なんかほっぺも赤いし」

すると、ぶつにぶにい、と歌いながら椿が口を塞がれた仕返しといわんばかりにさつきの頬をつついてくる。

「な、何を言ってるんですか！ やめて下さい青山さん。熱なんてありませんよ。私は、健、康、そのものなんです！」

さつきは彼女の手を払いながら、むんと胸を張る。しかし、すぐに何かに慌てた様子になって背後を振り返った。

「はっ、しまった。そういえば、石段の掃除を終わらせなくちゃ！」

見れば階段の途中に、竹箒がほったらかされたままだ。立て続けに来訪者が出現したために、さつきは仕事のことなどすっかり失念

していたのである。

脳内にあの神の怒声が蘇った。神は自身の神社が汚れたままにされるのを、とても嫌うのを思い出した。

「ああ、千両様に怒られるっ」

そう悲痛な声を上げ、急いで石段を駆け上がるさつきに、

「う、うちも手伝っ」

と、遅れないよう、椿がいそいそと後を追った。

122 遊宴の夜 1

クラツカーの音が炸裂した。

全員の手元から放たれた色とりどりの紙ふぶきが狭い居間を花びらのように舞い、歓声が弾ける。

賑やかな夏の夜。

媛子の完全復活を祝う宴は、そうしてクラツカーの音と共に、華々しくスタートした。

テーブルの上には椿たちが腕によりをかけた豪華な夕食が並び、その中央には、イチゴと生クリームがたっぷり乗ったケーキが威風堂々と置いてある。周囲の壁には、帯状の煌びやかなテープが張り巡らされ、夏だというのに、なぜか電飾付きのクリスマスツリーがチカチカと部屋の隅を照らして、お祝いムードの盛り上げに一役買っている。

「媛子ちゃん、おめでとうさん」と椿。

「おめでとうございます。夜叉媛さん」とさつき。

「おう、神様おめでとう」と木犀。

皆が口々に祝福の言葉を送ると、今回のパーティーの主役は、えっへんと威張るのかと思いきや、はにかむように僅かに俯き、

「ありがとう……」

と控えめにお礼を述べた。

「わしのために、ここまでしてくれたこと、感謝する」

隣の椿が口を押さえて笑いながら、どこか子供っぽいとんがったパーティー帽子を媛子に被せた。きらきらとした飾りが光を跳ね返し、綺麗である。

媛子は、

「むっ」

と最初は戸惑う様子を見せたものの、すぐにまんざらでもないのか、自分で帽子の位置を調整し始めた。

「なかなか、良いのう」

とご満悦である。

そして、グラスが全員の手元に回される。

とてもじゃないが全員では飲みきれないほどの大量のペットボトルから、それぞれが好みのジュースを注ぐ。

それが終わると、いよいよ媛子が乾杯のコール。

かつん、とガラスの触れ合う軽い音が響き、各々がグラスを傾け、食べ物に取り掛かった。

春臣は、少し離れたテーブルの角に座り、その様子をシユースを飲みながら、見つめていた。物思いに耽っていた。

ずいぶん、賑やかになったな。そうしみじみと思っていた。

数ヶ月前。

ここで、初めての一人暮らしを決意したときの、あの心細い気持ちが蘇ってきている。叔父の車があぜ道の向こうに消えていき、置いてけぼりにされたような心細い気持ちを、春臣は忘れようがない。

無人島ではないけれど、これまで生きてきた中でそれほどまで、他人との関係が希薄になってしまうことは極めて稀な経験だった。

何かあればいつだって両親が顔を覗きこんでくれた日々とは違うのである。

生きていく上で的一切合財を、当面、自分で背負わなければならぬ。他人の助けなどないに等しい場所なのだ。

初めて味わった、あの孤独。

その味は、どこか甘美な誘惑に彩られてはいたが、何者とも分かち合えない、断絶された寂しさも兼ね備えたものだった。

春臣は、あの夜を思い出している。じつくりと。  
しかし。

春臣は思う。

しかし、それがいまや、こんなに仲間が来た。

傍にいて、肩を叩きあって、一緒に歩いていける仲間だ。春臣は思う。

自分は、今、孤独ではない。

心に小さな明かりが灯ったような気持ちに、春臣はなっていた。

ふいに、隣に木犀が座ってきた。

にやにやと気持ちの悪い笑みを浮かべている。

「よお、榊」

と手をひらひらさせる。

「招待してくれてありがとな」

すると春臣は小首を傾げて、

「俺は、招待したつもりはないんだが」

と返した。

「お礼なら、瀬戸さんに言えばいい。暮野をこのパーティーに呼ぶって言い出したのは、彼女だぞ」

「ああ、そうなのか」

彼はさつきを一瞥すると、飲み物を一口飲んだ。あぐらをかいて座る。

そんな彼をじっと見つめながら、春臣は聞いた。

「彼女とはずいぶん仲がいいんだな」

「え？」

「だから、瀬戸さんだよ」

春臣はその少女に視線を向ける。

媛子たちと談笑している彼女は、大人の女性のような慎ましやかな笑みを浮べているが、そこからはどこか、少女らしい初々しい眩しさも感じられた。

「まあな。時々神社に遊びに行くよ」

木犀が答えた。

春臣はそこでふっと考えながら、またなんとなくジュースを飲んだ。

「あまり詮索するつもりはないけれど、その、彼女とは、あれか？」

横目で木犀を見る。

「あん？」



「ほら、だからさ……なんていうか」

春臣はなんだかずばりと言えず、ついもごもごととしてしまう。

「ああ、もういいや。我ながら野暮なことを聞いた。気にしないでくれ」

「……ふうん」

すると、腑に落ちない様子のまま、ごつごつとした無骨な手で木犀は頭を掻いた。何かを考えている様子である。

そして、しばらくして、春臣が言わんとしたことが分かって、

「べ、別にそんなじゃねえよ」

と妙に擦れた裏返った声を出した。同時に、軽い肘鉄を食らわしてくる。

春臣は笑った。なかなか面白いリアクションだな、と思った。テレビの芸人みたいといわないが、かなりオーバーだ。

その時、春臣はいつかの夜を思い出した。

そう、木犀が春臣の家に来た夜のことだ。あのときは、媛子と一緒に彼を騙して笑いあったんだっけ。あれは、とびきりおかしかったものだ。

「鈍い奴だな」

とからかうと、彼は不機嫌そうに目を尖らせた。

「うるせえ、頭が足りねえのは生まれつきだ。自分で分かっている。それと、きちんと答えておくと、彼女はただの友達だよ」

「本当にそれだけか？」

意地悪い感じで春臣は追撃してみた。

「ああ？」

「だって、さつきからずっと下の名前でかなり親しげに呼んでるじゃないか。少なくとも俺にはかなり親密に見えるぞ」

「あいな……」

「ほら、彼女に打ち明けていないにせよ、いろいろ思ってることがあるんじゃないのか？」

「しつこいな。榊、お前、そんな面倒くさい奴だったのか？」

春臣は必死ににやにやを堪えながら返す。

「違うよ。ただ俺は暮野のことを純粹に知りたいと思ったただけだよ。考えてみれば、俺は暮野とあんまり話をしてないだろう」

ふん、と木犀は鼻息を飛ばす。怪訝そうに春臣を白目で見つめている。

「それにしたって、質問が偏ってるってもんだ。俺に聞きたいことってさつきちゃんのこと限定かよ」

「でも、それも暮野のことには違いない。俺は外見からでは分からない気持ちを知りたいんだって」

「さつきちゃんをどう思ってるかって？」

「単純に面白そうだしね」

すると、途端に木犀がひっと小さな悲鳴を上げて仰け反った。相変わらずオーバーだ。

「俺は今、いつもクールな榊の中に潜む野次馬根性を垣間見たぞ」

「オーバーだな。俺だって人並みに好奇心くらいあるさ」

春臣は飄々と言ってみせた。とんかつにソースを付けて齧った。

「そ、そうなのか」

「それで、実際どうなんだよ？」

すると、木犀ははあ、と半分諦めたようにため息をつく。

「そりゃ、かわいいとは思っよ」

と言った。春臣はにやにやして頷く。

「だよな。あのポニーテールがいい」

「分かってるじゃないか、榊」

途端、木犀が目を輝かせる。

「それから、あの凛々しくも清楚な立ち姿は、そこらへんの子とは違う」

「目の付け所が違うな。お前とは旨い酒が飲み交わせそうだ」

調子に乗ってきたのか、彼はバンバンと春臣の背中を叩いてきた。

「だろ？」

しかし、そこで彼は得意げに鼻の頭を擦る。

「だが、何と言っても一番は……」

「うん？ まだそれ以上の魅力があるのか」

ああ、と自信満々に木犀は耳打ちしてくる。

「彼女はな、はにかんだ顔がとても可愛いんだ」

「ふうん……」

「ああ、それとな、さつきちゃんは……あん？　なんだよ榊、俺の顔をじろじろ見てさ。俺じゃなくて彼女が……」

「分かってるよ」

春臣はわざとつまらなそうに相槌を打った。

「何だよ。もう俺への興味が冷めたのか？」

別にそういうわけではないのだが。

しかし、彼女のことを語る木犀の表情があまりにも生き生きしていたので、春臣としては彼がさつきをどう思っているのか、さもあらんと理解してしまったのである。つまりは、それで今日はすっかり満足してしまったのだ。

「いや、ずいぶん楽しげだなって思ってさ」

そう言うと、木犀は一瞬ほかんとしたが、

「はあ……」

と、目を瞬かせ、またさつきについて、あれこれと語りはじめた。春臣はそれをうんうんと適当に相槌を打ちながら聞いた。しばらくしてだった。

春臣は、そこで、もうひとつ彼に質問したかったことを思い出した。

「そうだ、すっかり聞くのを忘れていたが、いつから知ってたんだ？」

「うん？」

「俺の家に媛子が住んでて、あいつが神様だって」

それはずっと気になっていたことだった。

なぜなら、春臣としては、木犀がずっと媛子の存在を知らないはずだと思っていたからである。確かに以前、彼にはこの家に神がいると言つて、媛子の声で驚かせたわけだが、その実体を見せたわけではないのだ。

すると、彼は得意げにくいつと眉を動かした。

「それは……神のあずかり知れぬところにいるいるあつたんだよ。

俺と神様とには、こう、なんていうか、やんごとなき事情が、いろいろとさ」

「やんごとなきじじよー？ 適当にごまかすなよ。ちゃんと話せ」

しかし、木犀の口は堅い。

「残念だが、そのことについては神様から口外してはならないと命じられているんだよ。特に神にはな」

と言つのである。

「なんだよ、それ」

「俺が緋桐教の敬虔な信者ということだけ。俺は拷問にあつても決して口を割らないと緋桐様に誓つたのさ」

「はあ……」

そういえば、そんなこともあったな。  
半分呆れながら春臣は思った。  
緋桐教か。

「まあ、それはそうと」

と、木犀が話を変える。

「せっかくのパーティーなのに、神はちゃんと祝ってやらないのか、神様を」

「え？」

木犀が目線で、テーブルの向かい側で座る少女を示した。

どうやら、祝ってももらってもうすっかり良い気分になっているのか、頬を赤くして媛子は一生懸命に椿たちと何かを話している。しかし、春臣は、何事もせず目を逸らした。自らの中にもやもやとわだかまっている感情が、彼女に対してまだ素直になることを許さなかった。

あの、例の出来事以来、彼女とは極力、会話をせずに生活をしてきた。お互い怒っているわけでも悲しんでいるわけでもないが、どうしても、元通りになるきっかけが掴めないのである。そのせいで今日という日でさえ、春臣は素直に彼女におめでとうと言っていいのだ。

「どうしたんだよ……」

「……」

不安そうに見つめる木犀に対し、春臣は無言でトマトに箸を伸ばす。

123 遊宴の夜 2

「あれえ、榊君たち何話してんの？」

するとふいに、椿が背後に立っているのに春臣は気がついた。彼女がこちらを見下ろしている。えへー、いつもの笑顔を向けてくる。

「榊君、もつと盛り上がらな」

「盛り下ってるように見えるのか？」

と、嘆息しつつ訊く。

「十分どんよりしてるで」

そして、なぜか、彼女はわざわざ狭い春臣と木犀の間に割り込んでくると、木犀にこう言った。

「ほら、暮野君は、向こうで話してきて。榊君は、うちが引き受けるから」

「うん？ なんだよ」

一緒に話せばいいのに。

春臣はそう思ったが、椿がこっそりこちらを見、目配せして、テールの反対側を見るよう合図した。

それに従って視線を向けると、なるほど。

木犀の方をちらちらと窺っているさつきの視線があった。こちらと目が合うと、いけないことを見つけた子供のように彼女は顔を

逸らす。春臣は無言で小さく頷いた。

「そうだな。青山と話でもするか。暮野は邪魔だから、どこかに行つてくれ」

「ずいぶんな扱いだな、おい」

木犀は不満げに眉をひそめる。が、その言葉とは裏腹に、意外にもさっさと彼は立ち上がった。

「俺を抜きにして、せいぜい二人で楽しく話せばいいさ」

そう憎まれ口を叩いて、テーブルの反対側へと行ってしまう。

春臣はそんな木犀を片目で見やり、きつと彼は心中で、向こうでさつきと話すのも悪くないと思ったに違いないと思った。だからこそ、場所を明け渡すのは吝かではなかったのだ。

「それで、青山」

気を取り直して向き直って、彼女が持ってきていたグラスに春臣はジュースを注ぐ。手元にあったのはたまたまオレンジジュースだった。

「俺に、何か用でもあるのか？」

そう訊いた。

すると、彼女はおおきに、とお礼を言った後で、表情を僅かに曇らせた。

「もう、そんな疑うような目したらあかんよ、榊君。うちはただ、お話ししたいだけや」



「なんだよ、それならいつもしてるじゃないか」

彼女との会話は、通学のバスの中、大学の授業中、たまの休日、帰宅後の電話などもりだくさんなのだ。話し過ぎと思われても不思議ではない。

しかし、彼女は頬を膨らませる。

「せやけど、今日はパーティーやん。いろいろと話したいんや」

「ふうん」

「なんか冷たいな。うちと話すの嫌？」

春臣がうわの空気味にため息を漏らすと、彼女は目を尖らせた。

「まさか。そうじゃないって」

春臣は首を振る。

確かに頻繁に話をするものの、それが苦痛かと言われると、そんな要素はこれと違って見当たらない。ころころと変わる彼女の表情を見ているだけで十分楽しいのだ。

「じゃあ、うちと話すの楽しい？」

「……うーん」

しかし、これには思わず、春臣は言葉に窮した。もちろん、楽しいことは楽しいのだが……。

「改めて面と向かって言われると、何だか答えるのが恥ずかしいな」

「恥ずかしいないよ、ほら」

「あー……」

「なあ、どっち？」

「……た、楽しいよ」

春臣がようやく言ったのを聞いて、彼女が表情をほころばせた。

「うん、うちも楽しい」

と小さくはしゃいだ。

そんな無邪気な彼女を見て、春臣は恥ずかしくなるのを通り越し、なんだか心がほぐれて安心してしまふ。

思えば、彼女と出会ったのは、この柘町に来た次の日だったなあ、  
と思いつく。

あの時は、いきなり関西弁で話しかけられて驚いたものだった。

確かその後、初対面でありながら、二人で朝の町を歩いたんだっけ。

そして彼女は、春臣にこれといって警戒らしい素振りも見せず、  
まるで最初から友人のように接してくれたのだ。

そのあまりの警戒のなさに春臣の方が大丈夫なのかと思った覚え  
さえある。

しかし、

ともかくあの頃から、彼女は底抜けに明るくて、マイペースで、  
可愛くて……。

全く、ちっとも変わらないな。

「青山は、青山だよなあ」

そう思いながらしみじみと春臣が言うと、彼女はオレンジジュースを飲みながら、目を丸くした。

「あ、それ知ってるで、うち」

と予想外に、なぜか興味津々な様子を見せた。

「な、何がだよ」

春臣は意味が分からない。

しかし、彼女はこめかみの辺りを指でなぞりながら記憶を掘り起こしているようで、

「ちょっと待って……あ、あれやあれ、と、と、トートロジーや！」

と叫んだ。

「あ？ とろー……じー？」

「ちゃうちゃう、トートロジーや、榊君。エコロジー、サイコロジ  
ー、ファンタジー、トートロジー！」

関連があるのかないのかよく分からない言葉を羅列して、呪文の  
ように彼女は唱える。

春臣は首を傾げた。

「……よく分からないが、難しい言葉を知ってるんだな」

「なあ、偉いやろ？」

「あ、ああ……」

よく知らないから褒めようがないのだが。

「ちなみにどういう意味なんだ、教えてくれよ」

「ええと……」

「うん？」

「それは自分で調べなさい」

この様子ではどうやら、知らないようだった。

彼女のまつげの下で泳ぐ目を見ていれば春臣には分かる。動揺している証拠だ。往々にして、彼女とは分かり易い生き物なのである。

「なんだよ、手厳しいんだな」

と春臣がわざと悔しそうに言うと、彼女はふふんと鼻を鳴らした。

「せや。うちは厳しいで。獅子は我が子を千尋ちゃんの谷に突き落とすんや」

「おいおい、千尋は人名じゃねえよ」

これにはさすがに突っ込まざるを得なかった。正しくは深さを表す言葉のはずだが。

しかし、彼女があんまりにも堂々というので、春臣はそのまま吹き出してしまう。まったく、ボケについては、彼女は相変わらず異彩を放っている。

「あれえ、せやっ たっ け？」

せやっ たっ けも何も、そうだろう。

一体彼女は毎度どこで間違えて覚えてくるのだろうか。そもそも、春臣は彼女の子供でもない。

春臣が笑っていると、つられて彼女もくすくす笑いだした。

彼女の持つグラスの中のジュースが波打っている。まったく、見ていて危なっかしい。

思わず春臣が彼女の小さな手を押さえると、

「うちはな、いつも楽しそうな榊君がええ」

彼女が目を伏せつつ、ぼろりと言った。

「え？」

「最近、榊君、暗いからなあ。これでちょっとは明るくなったよな？」

春臣は、その瞬間、こちらを見上げる椿の目を真っ直ぐに吸い込まれるように見つめた。

何だ、彼女は、自分に気を遣ってくれていたのか。

春臣は無言で、彼女のコップをテーブルに置くと、ややあって、

「ああ」

と答えた。

「ありがとうな」

椿が頷こうとして、小さくくしゃみをした。

その異変が起こったのは、パーティーが始まって二時間が経ったときだった。

あれから春臣は、椿と共に切り分けたケーキをつつきながら、とりとめのない四方山話にひたすら花を咲かせていたのだが、ふと、媛子たちの方をずっと気にかけていないことを思い出した。

思いのほか、椿との話が楽しいので、すっかり媛子たちのことは春臣の意識の外だったのだが、今日はその媛子の復活を祝うパーティーなのである。

やはり、ずっと放っておくわけにもいかないだろう。

そう思った春臣はフォークでケーキの頭に乗ったイチゴを突き刺し、口に入れると、他の三人が話している方へ視線を向けた。

と、そこでいきなり、春臣の目の前に誰かが倒れこんできた。

「うわっ!!」

春臣は思わず悲鳴を上げて仰け反った。バランスを崩し、そのまま仰向けに倒れる。

その拍子に、春臣の右手がテーブルの上に置いていた皿に当たり、乗っていたケーキが派手に宙を飛んだ。

事態を理解できないまま、それが、春臣の顔面に不時着する。

ぺちやり。

「うがっ!!」

どこかひんやりとした感触と、柔らかくべとべととした物体に視界を奪われ、春臣はそれが何であるかも確認できず、じたばたともがいた。

冷たい、甘い、何だこれは。  
しかし、

「榊君！」

そこで榊の声が飛んできて、春臣ははっと我に帰って起き上がった。手で顔に付着したクリームを乱暴に拭くと、ようやく、目の前に倒れてきた人物が誰であったのかが分かった。

瀬戸さつきである。

彼女は、いつものきりりと引き締まった態度はどこへやら、体をだらしなく畳みの上に投げ出し、仰向けになつてとろんとした目で春臣を見上げている。

「せ、瀬戸さん？」

春臣は榊が気を利かせて渡してくれたタオルで顔を拭きつつ、目の前に倒れている少女をゆっくり起こした。

「大丈夫？」

「ふああ、榊さん？」

すると、彼女はまるで半分眠っているように中途半端に目を開け、力なく首をだらりとぶら下げたままで、たった今日覚めたかのような顔でそう言った。

明らかに様子がおかしい。まるで風邪でも引いているようだ。

「どうした？ 疲れてるのか？」

「さつきちゃん、どないしたん？」

榊と春臣が同時に質問する。しかし、さつきは目も虚るなまま、

まともに答える気配がない。

「ふにゃあ？」

と気の抜けた言葉を発するのみだ。

一体何事なのか。

だがその時、彼女の方から漂ってきた特徴的な匂いで、春臣は彼女がこの症状に陥った原因に気がついた。

「まさか、酒を飲んでるのか？」

「え、ほんまに？ さつきちゃん！」

春臣は彼女を揺さぶった。

「お、おい、どこから酒を？」

「ふぁい？ お酒って、ショーチューってジュースのことですかあ？」

相変わらずぐにやりと首を傾げたまま、さつきが夢を見ているよ  
うなふわふわとした口調で言った。

「焼酎？」

「ええ、暮野さんが、おいしいからって飲ませてくれて。ところで、  
何で榊さん顔にケーキつけて」

彼女がそこまで言いかけたときには、すでに拳を握り締めて春臣  
は立ち上がっていた。

「暮野！」



そう荒々しく怒鳴り、背後に座っていた少年を睨む。

そして、次の瞬間には、春臣の視線は彼が手に持っている物体に注がれていた。それは紛れもなくオレンジジュースが入っているペットボトルではない、酒の入った一升瓶だった。

「お前、酒なんて持ってきてたのか！」

「おう、とっておきの酒さ。父ちゃんの部屋からくすねてきたんだよ」

彼は酒を飲んですっかり上機嫌なのか、意味もなく大きな声で、妙なイントネーションで飄々と言った。

「誰がそんなものもってこいなんて言ったんだよ！」

「馬鹿言え、これは持って来いって言われて持って来るものじゃねえよ。こういう祝い事には常備しておくもんだ。宴会と飲酒は同義語みたいなものだろう？」

「あんな、俺たちはまだ未成年だ！」

春臣はずんずん足を踏み鳴らして彼に近づくと、問答無用でむんずと瓶を奪った。

「ああ、俺の酒えー！」

そう叫んで木犀は春臣に飛びつこうとしたが、春臣は彼をもう片方の手で押しつける。これ以上木犀に飲ませるわけにはいかない。すると、木犀は相当酔っていたようで、その勢いだけで、ころんとひっくり返ってしまった。そのまま部屋の隅のツリーに当たり、それが、音を立ててひっくり返る。

「ぎゃふんー！」

犬のように彼が鳴いた。

何かのギャグのつもりなのだろうか。一人で壊れたようにけらけらと笑い出す。

この様ではしばらく放っておくしかないだろう。

春臣はそう思って、木犀を無視すると、一升瓶を揺すつてみた。ちやばちやばと瓶の側面を酒が打つ音がする。どうやらすでにかなりの量を飲んだようで、中身はほとんど残っていない。さらに、他にも周囲に何本か空っぽの瓶が転がっているのを見て、春臣は恐ろしくなる。

「こんなに、飲んだのか……」

「まだ缶ビールもあるぜ」

半分寝転びながら木犀がまだそんなことを言い出すので、さすがの春臣も頭にきた。

「うるさい！ 酒を飲めない子を酔わせてどうするんだよ！ いくら羽目を外すにしても限度つてものがだなあ」

「はる、おみ」

と、その時、誰かが蚊の鳴くような声で、春臣の足元に縋りついてきた。

「そ、それを……」

その声の主は紛れもなく媛子である。

「媛子？」

はつとして、春臣は慌てて彼女の方を振り向こうとする。しかし、そこでなぜか持っていた瓶がぐいっと何者かに引っ張られた。見れば、そうしているのは媛子である。

「それを寄越せ、春臣。それはわしがまら飲むのじゃ」

と声を荒げる。彼女は頬を紅潮させ、夢を見ているような目で、瓶に抱きつくようにして、それを引っ張っているのだ。

「媛子、お前も酔ってるのか！」

春臣はぎよっと飛びのいた。

「つく、何を言う、わしはまだ酔っておらん。そこいらの下戸とは違つのだ、ひつく。まだまだ頭脳明晰じゃよ」

「俺には酔っ払いが泥酔して管巻いてるようにはしか見えないがな」

これはまずいと彼女から酒瓶を引き離すと、春臣はとりあえず唯一無事な椿に瓶を持たせた。

「青山、飲むんじゃないぞ」

「了解や、榊君」

「よっしー」

そして、春臣はしゃがんで腰を落とすと、よっんばいのまま左右にふらつく媛子の肩をしゃんと押さえた。

「おい、媛子」

しかし、彼女の視線はあらぬ方向をゆらゆらと漂っていて、一点

に定まっていない。こちらの話を聞いているのかさえ、定かではなかった。

「うがー……」

と不機嫌な犬のような声を出している。

「あのな、よく聞け。こつちの世界では二十歳以下は飲酒禁止なんだ」

「な、何を馬鹿なことを。わしは生まれてとっくに二十年は過ぎておるぞお」

ああ、それもそうか。神様だもんな。

しかし、そこで春臣は首を振る。

「そ、そうだとしてもだ。お前、酒なんて飲んだことないんだろう。無茶はするもんじゃない」

「ひっく、うるさいぞ、春臣。堅いことを言うな。わしは今気分がすこぶる良いのじゃ。文句を言わずもつと酒を寄越せ」

「……態度がすっかり昔に戻ってんのな」

春臣は嘆息した。

「ダメだ。酒はやらない」

「なんじゃと、お主……ふざけるな!」

すると、彼女は聞き分けのない子供のようになり、しばらくじたばたともがいたが、急に何かを思いついたのか、はたと動きを止めた。

突然、ずりずりと体を動かし、春臣に寄り添ってくる。

「じゃあ、代わりにお主、わしの枕になれ」

そう言った。

「はあ？ 何言ってるんだ、枕だつて？」

「ほれ、この前わしが、つく、お主に寄りかかったことがあるじゃろつ」

「ああ、そういえば」

確か、青山がパーティーの話をしに来たときだったか。

「あの時は、じっくり眠ることが出来なかった。じゃから、今でよい。わしの枕になるのじゃ」

彼女はそう言うだけ言つて、有無を言わせず、全体重を春臣に預けてくる。鎖骨の辺りに頭を寄せ、ずり落ちないように、Ｔシャツの裾をぐつと掴んだ。

「ば、馬鹿言つな。寝言は寝て言えつてんだ」

これには春臣も慌てた。

単に彼女にこんな場所で眠られても困るという理由もあるが、それより何より、タイミングが悪い。

なにしろ、今はパーティーの最中なのである。この友人たちの視線が集まる状況において、自分たちのこんな体勢を見られては、いたい、どう対処すればいいというのか。だらだらと額から汗が垂れる。

すぐさま春臣は、すっかり脱力しきつた媛子をなんとか起こそうと試みるが、そこでなぜか椿が止めに入ってきた。

「ああ、ダメやで榊君」

と首を振るのである。

「パーティーの主役は媛子ちゃんなんやから。媛子ちゃんの言うことは絶対服従や」

春臣は啞然とする。

何を言つかと思えば。

「おい、青山」

調子に乗るなど言い掛けたが、そこで彼女はあろうことが、

「ほれ、さつきちゃんも」

と、隣でふらふらと立っている少女にも同意を求めた。そして、何か意味ありげな目配せをしたと思うと、さつきも合点がいったように「ああ」と返事をした。

「そうれすね。夜叉媛さんの言うことを聞いてあげるといいれす」  
「なんでそうなるんだよ」

春臣は目を白黒させた。

「起こすのを手伝って」  
「残念やけど、うちら料理作ってくたたくたやしなあ。起こせへんのなら、そこで一緒に仲良う寝たらええやん」  
「お、おい、何を言ってるんだ」

しかし、椿はそれに追い討ちをかけるように、わざとらしく腕をまくるとその白い手首を見て、

「あ、もうこんな時間や、早う帰らな」

などと言いだめる。

「青山、お前、腕時計なんてしてないじゃないか」

そんな春臣の突っ込みも空しく、彼女は春臣の言葉をまるで無視すると、ぱんぱんと急かすように手を叩いた。

「ほら、皆帰るで。あんまり夜遅うなったら、まずいやろ。さつきちゃんも、暮野君も」

「あ？ まだ少々飲み足りないが、仕方ないな」

「そうれすね。私も門限があるので」

皆は口々にそう言って、帰る支度を始めてしまう。春臣は信じられない気分だ。

「おいおい、逃げるのかよ？」

「何を言つてんの、そんなわけないやん」

彼女はあくまでにこやかに微笑んで春臣を見下ろしている。

「ほなな、榊君に媛子ちゃん。パーティーの片付けは明日一緒にするから、今夜のところは、お休みや」

「おう、お休み」と後ろ向きに手を振って木犀。

「おやすみなさい」とぺこりと頭を下げてさつき。

「ちよっと待てよ、この状況で俺を置いて行くな！」

春臣は部屋から出て行くところとする彼らの後を追おうと立ち上がる。うとするが、ぐっと媛子に掴まれ、引き戻される。上半身が畳みに打ち付けられ、ずりずりと引き摺られる。

「お主、逃げるな」

と、凶悪な目で睨まれた。

「あのさ、媛子……」

「むう、わ、わしの言うことを聞け。命令じゃ」

そこで春臣が何か言おうとすると、彼女は拳を振り回した。まるで聞き分けの無いわがままな子供だった。こうなれば、もはや成す術はない。諦めて、肩を落とした。

「なんだよ。もう神様みたいに威張らないんじゃないの？」

「むう……今日くらいは、目をつぶれ」

媛子はそうして、くしゃくしゃと頭を顎の下に擦り付けてくる。まるで、子猫だ。

時計の針が進む音がする。コツコツコツ。

静かになった部屋に、今は、春臣と媛子だけがいる。

春臣は無言で、そっと彼女の肩に手を回すと、脱力して、今日一日のことをじつくりと思いだすことにした。

倒れたツリーが、窓を意味もなくチカチカ照らしている。

しばらくして、媛子は春臣の枕に満足したのか、顎を肩に乗せた。すると、今度は春臣の顔を見つめたまま、ふいにくすくすと笑い出す。



「ふふふ」

「何だよ」

なんだかくすぐったい気持ちになって、春臣はぶっきらぼつに言  
って視線を逸らす。

「お主、ほっぺに可愛らしくクリームなんぞつけおって。その顔で  
どこに行く気じゃ？」

「え……？」

そうか、さつき頭にケーキが乗ったんだっけ。春臣は思い出  
す。

どうやら、ふき取れなかったものが残っていたらしい。

春臣は自分の手でふき取るうとするが。

「どれ、わしが食べてやる」

ぺろっ。

「ふふふ、おいしい」

なんと、媛子が指ですくって食べてしまった。

「な、何を……」

突然のことに春臣が言葉を失っていると、媛子はそのまま目を閉  
じてしまう。そして、

「……………ぐっ」

静かな寝息を立て始めた。

125 天罰なんて怖くない

さすがにいつまでも媛子をここで寝かせるわけにはいかない。すっかり自分の目の前で眠ってしまった彼女を見下ろして、春臣は思った。

時計の針は、もう椿たちが帰ってしまつて、三十分も経つたことを示している。その間、春臣は媛子に言われるがまま、彼女の枕として、なるべく動かさずにそつと壁に寄りかかっていたのだが、季節がいくら夏とはいえ、そろそろ動かなければ、二人揃つて風邪を引いてしまつたらう。

春臣はそう思い、

「とりあえず、媛子を二階に連れて行くか」

と独りごちた。

せつかく皆に祝ってもらつたというのに、翌日二人して寝込んでしまつたのでは、その喜びも台無しだ。

そして、一先ず彼女の体を起こそうと試みたのだが、そこで春臣はいきなり問題にぶち当たる。

なにしろ、彼女はぐでんぐでんに泥酔しているのだ。声をかけてもせいぜいびぎが返ってくるのみで、もはや、立ち上がらせるどころか、目を覚まさせることさえ困難な状況だった。

すると、先ほどの椿の言葉が春臣の脳裏を不吉によぎる。

一緒に仲良う寝たらええやん。

いやいや、その決断を下すにはまだ早すぎる。他にも方法はあるはずだ。

そつだ、何も彼女に動いてもらう必要はない。単純に自分が彼女を持ち上げればいいのだ。春臣はそう思った。

もちろん、春臣にしてみれば、彼女一人を持ち上げることは不可能ではない。年端もいかない子供や、腰の曲がった老人ならまだしも、自分は成人しようかという男子大学生だ。何も無茶なことはいい。

しかし、

しかし、そこで春臣はためらう。

確かに一番手っ取り早い方法ではあるが、そこには少々問題があるのだ。

それはつまり、彼女は神とはいえ、普通の少女の姿をしているいうことである。

女性の体に触れる機会など、この世に生を受けて以来、皆無に等しかった春臣に、その行動を実行に移すことは困難を極めた。

まず、どう抱えればいいのだ。

肩を抱え、膝裏に手を通して、いわゆるお姫様だっこをすればいいのか？

それとも、子供のように背中におんぶ？

はたまた、両足を持ち上げて引き摺るか？

ううん、とりあえず、最後の選択肢だけは確実に怒鳴られそうだが、却下だ、却下。

「……」

しばし困った春臣だが、しかし何もしなければただただ無為なる時間だけが過ぎていく。

よし、と覚悟を決め、深呼吸すると、ひとまず、媛子を背負ってみた。ずり落ちないように、彼女の腕を自分の首に巻きつけると、次に両足を抱えて立ち上がる。

すると、案外安定した。どうやら上手くいったようだった。背中で媛子がのんきにズビーと寝息を立てる。

それを確認すると、細心の注意を払って一歩ずつ歩を進め、何とか二階まで運ぶことに成功した。畳の上に彼女を下ろし、ふう、と重いため息をつく。

しかし、作業はそれで終わりではない。

今度は布団を敷いて、枕を用意して、眠る準備をし、彼女をそこへ寝かせた。いやはや、たったそれだけとはいえ、一人を動かすわけだから、ずいぶんな大仕事である。

そして、ようやく全てを終えて、疲労した体を春臣が布団の上に横たえると、ちょうど、壁の神棚に目がいった。

最近は特に意識することもなかったそれだが、今さらながら、その神棚こそが今日の前で眠っている媛子をこの世界に繋ぎとめている異空間の形成の要となっていることを思い出だし、途方もない気持ちを押し寄せてくる。

確か元々は、祖父が作ったはずだ。

神など信じないはずの祖父が、どうしてそんなことをしたのか、未だに春臣にはその真意よく分からなかったが……。

「……」

春臣は、何も言わずに、その神棚をじっと見つめていた。

そして、ふいに思う。

神の世界。

それは、どんなものなのだろう。

神棚の、その向こう側にある世界。日常世界からは見えない、人間たちから、隔離された完璧なる世界。

いったいそれはいつから始まって、この先、どこまで続いていくのだろうか。

媛子たち神様は、そこで、どんな風に生まれ、どんな生活し、どんなことを思っていたのだろうか。

何より、別世界から、自分たち、人間のことをどう思っていたのだろうか。自分たちの足元で蠢くちっぽけな人間たちを、どう捉えていたのだろうか。

考えれば考えるほどに、春臣には分からなかった。すべてが自分の想像を超えている。真っ暗な宇宙の片隅を頼りなくただ浮遊しているような気持ちになる。

神様、か。

自分にとつての神様って……。

春臣は今度は幼い頃の自分を思い出ししていた。

あれは、確か、春臣が小学生の頃だった。放課後、友人たちとサッカーに夢中になるあまりに、自宅の窓ガラスを割ってしまった事があった。

あの時は相当に焦った挙句、母に怒られることが怖くて、つい自分がしたのではないと嘘をついてしまったものだった。しかし、大人相手にそんなものが通用するわけもなく、当然のように母にこっぴどく叱られてしまった記憶がある。

散らばった窓ガラスの破片を前に、

『嘘をついたら、天罰が当たるのよ』

と酷い剣幕で叱った母の顔が映像として蘇る。

『神様はね、こんな春臣の嘘なんて、全部お見通しなんだから。空の上から、いつだって皆を見張ってるのよ』

昔は、神様とはそういうものだ、母からよく言われてたのだ。

だからこそ、幼い春臣は神様なる存在をいつも恐れていた。自分

が何もしていても、時折空の上から見下ろす、巨大なものの視線を感じ、びくびくと気持ちが悪く、萎んでしまうことが多々あった。

小さな自分の力では到底敵うことのない、その絶対的な存在は、今でも春臣の胸の奥に強烈な印象のまま、残っているのである。

しかし、

しかし、こちらはどうかろう。

春臣は首を横に向け、隣で眠る媛子を眺めた。自分から遠くかけ離れているはずの神様が、今では、隣で眠っている。それも、酒に酔って。ぐでんぐでんで。だらしく、いびきをかいて。

全く、滑稽ったらねえな。

そう思うと、春臣は急に愉快的な気持ちになった。数日前から心の奥を冷たく閉ざしていたはずの氷が一気に溶け出すのを感じる。

そうだ、自分は今、そんな神様と共に生活をしているのだ。

当たり前前のことだが、春臣は結局そこを意識して考えることがあまりなかった。だからこそ、心の奥で、昔のままの視線で、彼女と自分との間に、無意識にどこまでも「人」と「神」という厳然たる線引きをしようとしていたのだ。媛子を、元の世界に戻すべきだと、それが真実の答えだと、考えていたのだ。

たとえ、彼女が自分のことを好いていてくれたとしても、この世界に居座りたいと願っていたとしても、彼女は「ここにいるべき存在ではない」と、そう思っていたのだ。

こんなことから、自分は、彼女からの歩み寄りに対して、酷く混乱し、拒絶しようとした。

でも本当は、何もそんな余計なことを考える必要なんて、どこにもなかったのだ。

そうだ。

彼女がどんな存在であろうとも、歴然とした事実として、自分たちはこうして毎日を普通に過ごしているじゃないか。

事件に巻き込まれても、喧嘩をしても、ただただひたすら悩むにしても、いつだって解決してきたじゃないか。

自分たちは一人じゃない、頼れる仲間がいるじゃないか。

もしも、彼女がこちらの世界で生きていくことが困難なことがあるなら、また助け合えばいいのだ。何度つまずいたっていい。その度に起き上がればいい。皆で悩んで、笑って、楽しく暮らせるように、力を合わせればいい。

ただそれだけ。

簡単なことだ。簡単すぎて笑えてくる。

自分はなんと融通が利かない頭をしていたのだろう。

自らの、

彼女に対する、

素直で純粋な気持ちを押さえつけてまで。

そして、春臣はそこでもう一度、空の上にいる神様のことを考えた。

「悪いことをすれば、天罰が落ちる……」

天罰、ね。

でも、こんな神様に天罰を落とされるなら、それはそれでもいいかもしれない。

いまや、遠い世界ではなく、自分の傍にいるその存在。

こんなにきまぐれで、穏やかで、愛しくもある、神様。

そう思えば、

そうだ、そう思えば、

天罰なんて怖くない、のだ。



窓から外を見渡せば、眠りについた柵町の家並みがぼんやりと浮かんで見えた。世界の時間が止まってしまったかのように、何も動かず、誰もが息を潜めているようにも思える。

唯一、遙か遠くに見える、揺らめく青いきらめきがあるが、あれはきっと楡川に映る月の白光だろう。見ているだけで、しずしず、こころごと、心が清められていく気がした。

春臣は、窓枠に腰かけていた。

パーティーが終わって、もうどれくらいが経ったのだろうか。時計を見ていない春臣には、正確に今が何時なのか分からない。

しかし、日付が変わっていることは間違いないさそうだと春臣は思う。感覚から判断して、おおよそ、この部屋に来てから、二時間以上は経過しているはずだった。そして、そうになると、必然的に、あの仲間たちとの賑やかな宴は、もう昨日のことということになる。

この静けさを前にそれを思うと、春臣はまるでその全てが夢であったかのように遠く感じた。それほどに、世界は無音なのだ。

と、ふいに春臣は、背後に何者かが動く気配を感じて振り向いた。そこにいたのは媛子だった。一眠りしたことで酔いが覚めたのか、冷静さを取り戻した表情で、こちらの様子を窺っているのが、薄明かりの中で分かる。

「媛子……」

声をかけると、彼女は微妙に首を傾げた。

「春臣。眠れぬのか？」

「え？」

「先ほどから、ぼうつとしておるぞ」

どうやら彼女はしばらく自分の様子を見ていたらしい。もうずいぶん遅い時間だというのに、布団にも入らない春臣を不審に思っていたのだろう。

「いや、別に」

春臣は否定の意味で手を振った。

「ただ少し考えごととしていたんだ……それよりも、媛子の方こそ大丈夫なのか？」

そう聞き返すと、彼女の眉が少々驚いたようにぴくりと反応した。

「うむ、何のことじゃ？」

「ほら、さっきあれだけ酒を飲んでたじゃないか。ぐでんぐでんになるまでさあ」

言いながら、春臣は居間に今も転がっている一升瓶のことを思った。彼女が一体どれほどの量を飲んだのか知らないが、あの様子では相当だったのだろう。それを思えば、朝まで酔いが残っても不思議ではない。

しかし、彼女はふふんと自信有りげな様子で鼻を鳴らした。

「それならば問題はない」

「問題ない？」

「うむ。わしはその気になれば酔いのコントロールなどいくらでも出来るのじゃ」

「へえ、なるほど……それじゃあさ」

「なんじゃ？」

「さっきはそのコントロールを怠けていた、ってわけなのか」

春臣は呆れたため息をつく。そのせいで自分は三十分も身動きを取れなかったというのに。しかし、春臣が敵意のこもった目で睨むと、彼女はなぜか、そうじゃと堂々と胸を張った。

「じゃから、お主はわしに『感謝』せねばならんぞ」

「はあ？」

全く、この阿漕あせうな神様ときたら、何を言い出すのだろう。

「どう考えたらそうなるんだよ」

呆れた春臣が抗議すると、彼女は口の端だけでニカツと笑い、人差し指をピンと立てた。

「春臣よ、よく考えてみよ」

「何をだ？」

「男の持つ力強さというものはここぞという時に発揮されて然るべきじゃろう？ 酒に酔ってしまったか弱き乙女を助けることができ  
る状況など、男として生まれてきて本望であるはずじゃ」

「あのなあ……」

それで俺が納得すると思ったのか。

そう春臣が文句を言おうとすると、そこへすかさず彼女が言葉を重ねてきた。

「何も言わずに……」

「へ？」

「何も言わずに、わしを背負ってくれたお主は、なかなかよかったぞ」

そして、意味ありげにうつとりと目を細めた彼女。

「う……」

そうか、こいつ、狸寝入りしてやがったのか。

「ほれ、照れるな照れるな。ほんに初心じゃの、お主は」

そして、くふふと彼女が愉快気に笑い、むすりと春臣は口をつぐんだ。

微妙に気まずい沈黙が辺りを満たす。

しかしながら、春臣には、それが不思議にも心地よく感じられた。つい数時間前までは、彼女と話すのも億劫であったのに、いつの間にか、彼女とのやり取りが、いつも通りになっていることに気がついたのである。

それは、一体今まで彼女と自分の間にあつた見えない壁は何だったのだろうと思うほどの自然なやり取りだった。

「春臣」

しばらくして、媛子の指が春臣の肩をつんと突いた。

「何だ？」

振り向くと、彼女は妙に真剣な顔して春臣を見ていた。その強い眼差しは、これから何か特別なことを話そうとしているような、そ

んな決意に満ちたものだった。

彼女の朱色の唇が動く。

「春臣。わしの名を、呼んでくれぬか」

126 フタリノトキ 1 (後書き)

どうもヒロユキです。

今週は投稿のペースが遅れてしまいましたね。すいません。いろいろ忙しかったので、執筆に集中することが出来ませんでした。次回からは元通りになれると思うので、よろしくお願いします。

朱色の唇が動く。

「わしの名を、呼んでくれぬか」

「え？」

突然の申し出に、春臣は訳が分からず面食らった。戸惑いつつ、

「名前を、か？」

と確認する。すると、彼女は冷静な様子で頷いた。

「そうじゃ。わしは、誰なのじゃ？」

「決まってるだろ。媛子じゃないか」

即座に春臣は答える。同時に、変なことを聞くものだと思い、眉をひそめた。よもや、実はまだ酒に酔っていて、自分の名を忘れたとでも言うつもりなのだろうか。

しかし、彼女はいたって真面目な表情で春臣を見ている。その瞳の中央には揺るがぬ光が宿っており、発した言葉が何の冗談でもないことを示していた。

「ふむ、そうじゃ、わしは媛子じゃの。お主がそう名づけてくれた」

「あ、ああ……そうだったな」

春臣は、記憶を掘り返した。確か、彼女が初めて来た晩につけたのだった。

「でも、名づけたってほど、おおげさなことじゃねえよ」

そう言って苦笑いする。

ただそれが呼びやすくて、ちょうどよかっただけだ。緋桐乃夜叉媛じゃ呼ぶのには長過ぎたし。今思えば、彼女がこの呼び名を妙に気に入らなければ、使っていなかったらうと春臣は思う。

しかし、彼女はいいやいやと首を振った。

「ううん、おおげさなことなのじゃ。わしにはの」

その表情はやはり重たく真剣だ。一体、何を話そうとしているのだろう。春臣は不思議に思う。

「それは、どういうことだ？」

と問いかけると、

「お主には、まだ話しておらんかったの」

彼女が少し声を低くして重々しく言った。

「実は、真実を言つと、わしには『名が無い』のじゃ  
「え!？」

それはあまりに唐突で、思いがけない告白だった。

「ふふふ、おかしいじゃろう」

「お、おかしいっていつか……」

春臣は思わず狼狽する。



名前がないだつて？  
本当なのか？

しかし、そこで落ち着いて思い直した。

いや、

いやいや、違つぞ。

そつだ。彼女には緋桐乃夜叉媛という列記とした名があるではないか。それはどうなるのか。

「で、でも」

が、春臣がそれを指摘しようと言いかけたところで、彼女が見透かしたように、薄つすら笑みを浮べたまま口を開けた。

「春臣」

「な、何だよ」

「確かに、わたしには、緋桐乃夜叉媛という名がある。しかし、これは他でもない、わしがわしにつけた名前なのじゃ」

「自分、で……？」

「そつじゃ。わしが向こうに、神の世におつた頃は、誰もわしのことを、名前で呼んだりはせんかつたからな」

そつ、なのか？

だから、あの時、彼女はあだ名をつけられて、あんな風に喜んで春臣は、壁に飾られた媛子の書初めの文字を見た。「媛子」と頼りない線で書かれたそれは、今見れば、当時彼女の中でこみ上げてくる嬉しさが、文字の中から伝わってくるような気がした。

しかし、そうになると、一体全体どうして彼女には名がないのだろう。春臣は当然疑問に思う。普通、神にだつてきちんと名前はあ

はずだ。

問い詰めようと、春臣は再び口を開きかけた。

が、発しようとしたその言葉が、喉の奥で立ち止まってしまふ。他でもない、目の前の媛子に目を奪われてしまったせいだ。

彼女は、いつの間にか、春臣のすぐ手の届く傍まで近寄っていた。そこに、窓から差込む月光が淡いベールのように彼女を包んでいる。春臣は思った。まるで、月光の下で、赤く鮮明な色をした花が咲き誇っているみたいだ。

媛子の腰まで届く長い髪が、彼女を初めて見たあの日と同じように、星屑を閉じ込めたような輝きを放っている。長いまつげの下、儂げなその瞳が、何かを訴えかけるように小刻みに震えていた。その可憐さに春臣は我を忘れ、つばを飲み込んだ。

彼女と、目が合った。

「春臣、聞いてくれ。じゃからこそわしは、お主が何の隔たりもなく、わしの名を自然に呼んでくれることが嬉しかった。たったそれだけのことじゃが、わしは心の底で、自分がここにいて大丈夫なのじゃと、感じる事が出来た。安心することが、出来たのじゃ。今まで言ったことはなかったがのう」

「……媛子」

「春臣、わしが大げさと言ったのは、こういう理由じゃ。でも、いつの間にか、わしの中の気持ちは、それだけで納まらなくなっておった」

すると、彼女の白い手が、迷いながらも、春臣の手首を掴んだ。それは、微かに汗ばんでいて、ひんやりとしていて、春臣の心がぎゅっと縮こまる。

「それがどういう意味か、分かるじゃろ、春臣。もうわしは、隠す

つもりは無いぞ」

「……」

「わしは、もうずっと前から……そんなお主に惚れておったのじゃ」

大きく見開かれた彼女の瞳が、すつと意思を持って強く春臣を見据える。

「わしにとつての、特別な存在。じゃから、もっと近くにいたい。これからも、ずっと、自分を見ていて欲しいと思うようになっておった。お主のことが愛おしいのじゃ。もう、我慢せぬ。わしは、春臣に本当の気持ちを知ってほしかったのじゃ」

彼女の言葉が終わって、春臣はしばらく沈黙した。頭の中がまたしてもパニックになるのかと思っただが、今度は大丈夫だった。落ちて着いている。

すつと息を吸って、吐いた。

そして、何も言わずに、媛子の手を上から包んだ。彼女が小さく悲鳴に似た声を出した。きっと彼女も驚いたのだろう。春臣の手の平の冷たさに。

「俺も、もう、隠さない」

「春臣？」

「俺も、媛子が好きだ」

春臣がそう言うと、彼女は喜ぶのかと思いきや、驚いた子供のように目をパチパチと開閉した。

「不気味なほど、あっさりと言いおった」

おそらく、今までの春臣の煮え切らない態度から、こんな風にする

っぱり言い切るとは思っていなかったのだろう。

しかし、春臣は、最初から決心していたのだ。彼女に、自分の本心を告げるのだと。

「もう馬鹿みたいに頭使ってあれこれ考えるのは止めたってことさ」「考えるのを、止めたのか？」

「そうだよ。人間ってのは考えすぎると余計なことばかりに目がいっってしまうらしい。だから、やめたのさ」

そうして、春臣は自嘲気味に笑った。先ほど自分が考えていたことを彼女に話してもよかったが、それはそれで恥ずかしい。やはり、その考えの馬鹿馬鹿しさに自分が気がついたせいもあるのだろう。

「ほう、お主がいったい何を考えておったのか知らぬが、そうか、考えるのを止めたか……」

すると、急に媛子が黙り込んだ。

「どうした？」

「いや、なに……」

と、何かよからぬことを思いついたようで、ぺろりと舌を出す。

「それは好都合じゃの」

「何だ、どういうことだよ？」

嫌な汗が滲んだ。

「もう、何も考えぬのであるっつ？」

そう言うのと同時に、彼女の手がすつと春臣の頬に伸びる。それが、ぴとりと優しく触れた。その細く柔らかな感じがなんとも言えず愛おしい。頬の感覚を通して春臣の頭の奥をピリピリと心地よく麻痺させた。

「これからわしの言う通りにせよ」

媛子が囁く。

「は、はあ？ どうしてさ」

「むう、口ごたえは無しじゃ。今お主は何も考えることの出来ぬ人形なのじゃろう？」

「あのな、俺は何もそんなこと言ったつもりはないぞ」

「うるさいのう、余計なことを言うなと言っておるじゃろう。なんなら今すぐにこの生意気な口をつねってもよいのじゃぞ」

媛子が春臣の頬をすつと抓む。彼女の爪が頬に少しずつ食い込んだ。もちろん、痛みが走る。

「お、おい止める。何のつもりだよ」

「何のつもりも何も……ぐう、少しはお主も察せ！」

「はあ？」

すると、何かの前触れのように、媛子の指から力が抜けた。

「ようやく……ようやく、想いが通じ合ったのじゃ……してみたいことの一つや二つ、あるものじゃろう……」

春臣から見て、彼女が、小さく息を吸うのが分かった。ああ、そういうことか。春臣は、それで彼女がやるうとして理解

する。ならば、抵抗は止めた方がよさそうだ。

「ほれ、目を閉じよ」

彼女の言葉に応じ、素直に目を伏せる。その後はもう、何も考えずに、キスをした。余計なことを思うと、また面倒になる。今一番頼りにするものは、彼女を想う気持ちだけなのだ。

彼女からは、ふわり、と花のような香りがした。

キスを終えて彼女を見ると、恥ずかしげに頬を染めていた。自分もそうなのだと思うと、なんだかいた堪れない。でも、その中にもとても心地よい、手離し難い温かな気持ちがあるのに、春臣は気がついていた。

ようやく、気持ちが通い合ったのだ。何を彼女に対する気持ちを抑える必要があるだろう。

俺は、彼女が好きなのだ。

おそらく、この上なく。

いますぐにでも、ぎゅっと強く抱きしめてやりたいくらいに。

そう思って手を伸ばそうと思うと、彼女は自ら、背後の布団の上に体を仰向けに倒した。ぼふう、と空気が押さえられる音がする。

おいおい、何を考えてるんだ。

彼女に対して、そんなことを考えるが、頭に血が上り、もう、冷静な判断が出来るような状況ではなかった。ぶつりと脳内で回線が切れるような音。額に熱が集まり、春臣は眩暈がしそうになる。

気がつけば、春臣は、彼女の上に覆いかぶさっていた。

媛子、媛子、媛子、媛子、媛子、媛子、媛子、媛子……。

叫びにも似た衝動が胸の奥から湧いてくる。

「今度は、俺からしても、いいか？」

そう聞くと、彼女はしおらしく頷いた。

「構わぬ。わしは、もう」

もう、何なのか。聞くことはなかったが、聞く必要もないことだ  
と思った。なぜなら、既にお互いの気持ちは伝え終わっているのだ。  
それ以上に、何を確認することがあるだろう。

躊躇いなく彼女の唇に顔を寄せる。

「媛子、好きだよ」

しかし、

しかし、

しかし、

それは、崩壊の始まりでしかなかった。

次の瞬間、バチリっ、と春臣の中で何かが爆ぜたのが、分かった。

127 フタリノトキ 2 (後書き)

どうも、聖なる夜にこんばんわ。ヒロユキでございます。皆様、いかがお過ごしでしょうか。

もう今年も残すところあとわずかですね。一年と数ヶ月続いておりますこの作品もそろそろ終盤、最後の佳境を迎えようかとしているところであります。

夏辺りでは、年内には作品を完結できるかなあ、と薄っすら思っております。書いても書いても終わらないんです。

現在の見込みでは、来年の二月か三月ごろまではかかりそう。それまでまだまだではありませんが、読者の方々にはどうかお付き合いいただければ、と願っております。それでは、また。



次の瞬間、バチリっ、と春臣の中で何かが爆ぜたのが、分かった。

「！」

声にならない悲鳴を上げて、春臣はその場でのた打ち回る。

一体なんだ。何なんだ。

訳の分からない何かが、どっと春臣の腹の中から噴出し、喉が詰まり、呼吸が出来なくなる。

「春臣！」

媛子の悲鳴だ。

しかし、苦しくて、視界が滲み出した涙で霞み、彼女の姿を確認することが出来ない。のたうつ内に周囲が、次第に、暗黒へと変わっていく。ずんずん、ずんずん、沈んでいく。

何だ。これは一体、何だ？

その半濁した意識の中で、春臣は見覚えのある場所に自分がいるのが分かった。

厚いカーテンに囲まれた暗く長い廊下である。そこはいつか見た、夢の中の光景と同じ。目には見えない、巨大な怪物の気配を感じた、あの黒い夢と同じ場所だった。

これは、夢なのか、現実なのか。

しかし、春臣は、それを認識するや、今度は問答無用で、その暗い廊下の向こうに引き込まれた。声を出す間もなく、ぐわんぐわんと意識が攪拌され、闇の向こうに落ちていく。

そして急に、唐突に、意識がはつきりとした。

そこで感じたものは、気づいたものは、本当の自分の気持ちだ

った。

そうか、そうだったのか。春臣は確信した。自分は、初めから、最初から、それを望んでいたんだ。

俺は、俺は、ずっと

かつたんだ。

だから、

だから、だから、

だから、だから、だから全部。

ブチコワセヨ。

次の瞬間、目を開いた春臣は、近づいてくる媛子の手を乱暴に払い飛ばしていた。

パシン、と乾いた音が部屋中に響く。

時間が、止まった。

「な」

春臣は、その刹那、媛子の表情を見た。突然のことに、彼女の顔は、複雑に歪んでいた。どうやら、目の前の状況が理解できていないようだ。当然だろう。

しかし、春臣は説明しない。

代わりに、ぎりりと歯を食いしばる。

そして、叫んだ。

「触れるな！」

それは、いつも自分の声とは思えないほどに、どす黒く、野獣の

よつに凜猛で低い声だった。

「俺に……俺に、触れるな！」

威嚇するよつに、続けざまに、叫ぶ。心臓が痛いほどに拍動し、春臣の頭の中で、何かが騒ぎまわっている。

どうにも、止められない。

「春臣……」

そこで、動揺に震えた媛子が口を開いた。いきなり払われた自分の手のひらと、春臣の顔を信じられないもののように、交互に見ている。

「春臣、お主……」

これはどうということなのか。そう問いかけようとしたのだろう。だが、春臣はそれを弾き返すようにして叫んだ。

「お前なんか、嫌いだ！」

「え？」

「嫌いだ嫌いだ、大嫌いだ！」

真つ黒い何かが、春臣の腹の中で暴れまわり、ぬめぬめとした毒を撒き散らしている。それが、春臣の精神をどんどん腐らせていく。

「な、なんじゃ、と。春臣、落ち着くんじゃ」

あまりの展開に、呆気にとられている媛子の声が頭に響く。しかし、それで春臣が冷静さを取り戻すことはなく、むしろ、内なる怒

りを増幅させた。そして、春臣の口はその捌け口となり、容赦なく乱暴な言葉を媛子に叩きつける。

「お前に……お前なんか、俺の気持ち分かるのか。お前に、この俺のどうしようもない気持ちを消せるのか？」

「春臣、わ、わしは意味が分からぬ。いったい、どうしたのじゃ。

わしは……怖い」

怯えた媛子の言葉。

しかし、春臣は、意識が、かき回されていて……。

「うるさい……うるさい、黙れ。お前には、結局何も出来ない！」

「は、はる、おみ。止めてくれ」

媛子は、今にも、泣き出しそうである……。

でも、春臣の言葉は止まらない。

「そう、お前は、いつだって何も出来ないんだ。神様のくせに、役立たずで、肝心なときにはいつも他人任せな奴なんだ！」

「は、はる……」

「そんな目で、そんな目で俺を見るな！ お前なんか、最初から厄介者だったんだ」

「そんな……嘘じゃ……」

「勝手に、ずかずかと俺の生活に入ってきてやがってよお。迷惑なんだよ。目障りなんだよ。俺はお前が、いつそのこと早くいなくなっ  
てしまえばいいと、ずっと思ってた。消えちまえばいいと思っ  
たんだ。分かるか？ 俺は、お前が大っ嫌いなんだ！」

「うそ、じゃ……」

「うるさい、喋るんじゃない！ いいか、よく聞け。ここは、俺の家だ！ 俺の居場所だ！ 他の誰も、ここにいない。俺一人

でいいんだ。だから、今すぐに出て行け、ここから。そして、二度と、もう二度と帰ってくるな、分かったな！！」

ビーン。

最後に放った言葉の切れ端が、部屋中に跳ね返って、空しく残響音を立てる。春臣の頬から、汗が垂れた。それは音もなく、ぴとりと畳に落ちて、吸い込まれていった。

息が、熱い。とにかく熱い。

肺が、溶けてしまいそうだ。

春臣は自身の体が震えているのが分かる。体中の細胞が興奮しているのだ。無理もない、あんなに叫んだのだから。

乱れた呼吸を整える。

そして、おもむろに顔をあげた時。

春臣は、そこに捉えた。

絶望の色に染まった、媛子の顔だ。

つい先ほどまで瑞々しく柔らかかそうだった彼女の肌はいまや強張り、凍りついたように動かないその瞳から、一筋の涙が零れた。それは悲しげな紫の光を帯びて、喉を伝い、彼女の手の甲に落ちた。ぱつと碎けるように、弾ける。

それを見て、氷の剣で貫かれたような衝撃と共に、春臣ははっと我に返った。

いったい、いったい、俺は。

俺は、何を、した？

混乱が血液をめぐり、怖気が背中から這い上がってくる。

とにかく、今の言葉を否定しなくては。

しかし、必死に春臣は弁解をしようと口を動かそうとするが、それが出来ない。腕にも、足にも、顔にも、どこにも、力が入らなかつた。頭の中が急速に熱を失っていき、エネルギーが空っぽになつてしまったように、疲労感が怒涛のごとく押し寄せて体を支配し、立っているだけで、やっとな気がする。

そうこうするうちに、先に媛子が動いた。彼女は音もなく、静かに首を落とすと、立ち上がった。その影が部屋の奥まで、異様に長く、色濃く伸びる。

「そうか、やはり、相容れぬか。わしとお主は」

その沈みきった絶望の声を前に、春臣は何も言えなかった。何かを弁明しようとするが、頼りなく擦れた吐息が漏れるのみである。

「すべてが、最初から、わしの勘違いじゃった。お主と、人間と共に暮らすなど、砂糖にまみれた、甘い幻想じゃったのじゃな。それが、お主の嘘偽りのない本心の言葉なのじゃろう？」

彼女の問いかけ。それに対し、春臣はやはり動けない。肯定も、否定も出来ない。

しかし、彼女はそれで全てを納得したように頷いた。

「済まぬな。今まで、わしは気がつかんかった。ほんに、愚鈍じゃの。滑稽じゃの。確かに、どこからともなくひよいと現れたわしなど、お主にとって、邪魔者以外の何者でもない。そのくせ、お主にはいつも無理をさせて、わしは、大きな顔してあぐらをかいておった。厚顔無恥にも程があるういの。全く、何様のつもりじゃ。ほんに、申し訳ない」

「いや、今のは……」

「じゃが、安心せよ、春臣。これからわしは、お主の望むとおり、もう二度と、おぬしの前には姿を現さん。金輪際、絶対にじゃ」

「ち、違う、媛子」

「約束しよう、春臣。わしはここから出て行く」

そう言って、彼女は振り払うように春臣に背を向けた。紅の髪が

それに従い、じつとりと闇を吸って、重たそうに彼女の背中で揺れる。その様子が、なんとも痛々しい。

そして、彼女は一步部屋の外に踏み出して、

「春臣よ」

と呼んだ。

「何もないわたしには、大した礼も出来ぬが、これだけは言うておく」

天井を仰ぎ、すうと息を吸うと、とびきり明るくこう言った。

「今まで、お主とおって、とても楽しかったぞ！」

「あ、あ……」

「それでは、さらばじゃ」

そしてそのまま、春臣が何も言えないまま、彼女は、部屋から出て行った。

ボタン、と扉が閉められる。

それは、これまでの春臣と媛子の関係を断ち切る、決別の音だった。

その音を聞いて、しばらく、春臣は動かないままでいた。いや、まだ動けなかった。この状況にまるで実感が無い。力も出ない。

そして、その空虚な気持ちを晴らすために、

「何だよ、これは」

と、静かに自身に問いかけた。

俺は、いったい、何をしたんだ、と。どんな罪を犯したのだ、と。すると、すぐに答えが返ってくる。

ブチコワシタんだヨ。スベテヲ。

どうして、こんなことを。

アレデヨカッタんだ。

もう、全部、手遅れなのかよ。

テオクレ？ ソウダナ、オマエハテオクレダ。

モウ、リカイシテルノダロウ？

オマエハ、カノジヨト、クラセナイ。

「春臣は拳を振り上げ……。」

オマエハ 俺は、彼女とは、暮らせないんだ。

「暮らせないんだよ！！」

その言葉と同時に、拳を畳に叩きつける。ミシリ、と部屋全体が軋んだ。

そうだ、暮らせないんだよ。

そう言い切ってしまうと、春臣の中で、不思議な安心感が生まれた。春臣の心の奥にあった枷が外れ、自然と笑みがこぼれる。もう、彼女は戻ってこないのだろう。そして、自分は一人だ。これでいいんだ。これで、何も心配しなくていいのだ。

「ハハハハハ……」

しかし、それは一瞬のことだった。



すぐに、悲しみの奔流が大波となって押し寄せ、春臣の心を取り  
囲み、飲み込み、感情を溢れさせた。抵抗もなく、春臣は失望の海  
に投げ出される。

あっけないものだったな。

こんなこと、ちっとも望んでないのに。ちっとも、ちっとも。

嗚咽が喉の底からこみ上げてくる。

そして、

「

声もないままに、

「

春臣は両目から、涙を零し始めた。

夜が明けたのは、いつのことだったのだろうか。春臣には分からなかった。

閉じられているはずの部屋に、染み込むように、朝の光が入り込んでいた。春臣の周囲はひっそりしているのに対し、その光を通じて、外の世界の空気が活発に振動しているのを感じ取る。鳥たちの羽ばたき、犬の咆える声、クラクションの音、人々の話す言葉。どうやら、外の世界の生き物たちは、すでに活動を始めているらしい。

しかし、春臣は部屋の隅で膝を抱えたまま、相変わらず動けだせずにいた。城の最奥に幽閉されてしまった王子のように、希望も持たず、ただ小さくなって、浅く呼吸し、体から細く伝わる鼓動の音に耳を傾けていた。

喉が異様に渴いている。当然だ。昨日の夜から春臣は何も口にしていない。しかし、だからと言って、春臣は何かを口にしたい気分ではなかった。

喉が渴けば、そのまま渴いていけばいい。何もない砂漠の真ん中で、成す術もなく絶望し、立ち尽くしているような気分になる。叶うのならば、この渴きが、いつそのこと春臣の人間としての感情も体から全て抜きとってくれないだろうかと思う。そうすれば、ただの肉の塊として、春臣は何も感じずに済む。媛子のことを思って思い悩まずに済む。そうすれば、一番楽だ。そうすれば、孤独の塀の中で、春臣は、自分を守っていられるのだ。

しかし、現実にそんなことは無理である。春臣の胸はまだ確かに人間の感情を宿していて、その奥には、未だ昨晚の媛子の残り香が

漂っている。彼女の最後に見せた表情が劣化した映画のフィルムのように目に焼きついていた。春臣は、どうにも拭えない、深い虚脱感に苛まれている。

そんな自分に対し、春臣は一晚中、納得させようと言いつづけてきた。

悲しみに我を失い、ただ媛子と一緒に生きたいと、そんなことを願っている自分など偽者なのだ、彼女は自分から離れて正解だった、と。

しかし、それにも関わらず、春臣は全く前進出来ていなかった。良い奴でいたい春臣はまだしぶとく生きていて、自身の内の皆で、息を潜めて籠城しているのである。これでは埒が明かない。

春臣は力を抜いて目を閉じた。とりあえず、今は諦めて眠ってしまおう。そう思ったのである。何しろ、一晚中起きていたわけだし、さすがにいくぶんまぶたが重い。背中を壁につけて、大きく息をついた。

しかし、そこでいきなり部屋の扉が乱暴に開いた。春臣の体が無意識に反応する。もしかして、媛子が戻ってきたのか、と思わず期待してしまったのだ。

しかし、入ってきたのは、

「榊君！」

血相を変えた榊だった。彼女は部屋の隅で縮こまっている春臣を見つけると、すぐさま近寄り、春臣の肩を揺すぶった。

「榊君、どないしたん？ 媛子ちゃんは？ どないして、呼び鈴鳴らしても返事がなかったん？」

呼び鈴？

ああ、そんなものを鳴らしていたのか。  
ぼうつとしていたせいで、全く、聞こえなかった。

「うち……うち、心配で勝手に入ってきてしまった」

椿は混乱しているのか、早口に言う。春臣はというと、生気の抜けた半眼でそんな彼女を見た。

「心配？ そうか。それなら俺は大丈夫だ」

そう言って、無理やり笑って見せる。しかし、彼女にはそんな上辺だけの元気などは通用しなかったようで、

「何言うてるん？ 全然大丈夫やない。顔が真っ青やで。榊君、しっかりしい！ いったい何があったんや？ 媛子ちゃんはどこに？」

問われて、春臣は一瞬口をつぐむ。

「ああ、媛子は……媛子は」

そして、その問いにどう答えたものかと逡巡し、神棚を見つめ、ふいに思いついて、

「神の世界に、帰った」

そう答えた。

「か、帰った!？」

椿が驚きに口元を手で押さえる。

と、それと同時に、椿の背後に見えていたドアの向こう、誰かがいるのが立つのが見えた。どうやら、木犀とさつきのようだ。おそらく、昨晚の片付けをするために椿について来たのだろう。

しかし、その二人は今や、春臣の発言を聞いて、顔色を失っていた。

「今の話、本当、なのか？」

一步踏み出して、木犀が問う。愕然とした表情で、目を見開いている。

「ああ、昨日の晩だ。もう、ここには用がないからって、帰っていったんだ。体も完全に復活したんだし、後は神の世界に戻るだけだったしな」

何でもないことのように、平静を装って春臣は言った。

さも、それが最初から想定されていた自然の成り行きであるかのように。そこに、何の疑問を抱く余地など微塵もないように。

水は上から下へ流れると教えるように。太陽は東から昇ると説明するように。

それがどうした、そういう風を装って、堂々と言った。

その時の春臣には、それで、すべてを隠せると思っていたのだ。

しかし、

「嘘や」

ものの数秒もしないうちに、誰かが否定した。

春臣は声がした方を見た。すると、椿が表情を強張らせ、首を振っている。

「嘘や、そんなの……嘘や」

「嘘じゃねえよ。現に、今ここに、媛子はいないだろう？　それが証拠だ」

春臣は片足で畳を踏んで示す。

しかし、彼女は頑なに首を振った。

「嘘や。媛子ちゃんは、そんな子やない。うちに何も言わずに、いきなりいなくなるやなんて、ありえへん」

春臣はそう言い切った彼女を見つめた。その瞳にはどこまでも真っ直ぐな力が秘められているのが分かる。

それを確認して、春臣は出会って初めて彼女を嫌悪した。

どうしてそんなに媛子を一途に信じられるのか。春臣は思う。そんなに、難しいことを、どうしてこんなに易々と出来るのだろう。

そんな彼女の眩しい純粹さが腹立たしい。春臣は向きになって答えた。

「本当だ、青山！！　何度も同じことを言わせるな！！」

不自然なほど、声にあからさまな怒気が混じる。

しかし、彼女はそんな春臣に臆することもひるむことなく言い返した。

「絶対嘘や！！　嘘やったら、嘘や！！」

一見、華奢な体つきの少女から放たれたとは思えない強い言葉が

部屋を揺らした。いったい、そんな力をどこに隠し持っていたのだらう。

これには春臣もさすがに気圧される。

「青山……」

こいつ、怒らせたならこんなに怖かったんだ。初めて知った。思わず身震いした。

すると、椿はさらに追い打ちをかけるように目じりをきつと絞り、口を開く。

「そんなありえへん嘘をつく柗君なんて、嫌いや。大嫌いや！」

大嫌い。

柗から言われたその言葉が、春臣の心をえぐる。それは春臣が、媛子に放った言葉だった。彼女の影が春臣の脳裏をよぎる。

その瞬間、すべてを隠し通そうとした春臣の心が、今にも壊れそうに脆くなってしまうたような気がした。

柗はというと、今や、瞳を潤ませている。

「柗君、お願いやから。ほんまのこと、教えて」

それは懇願するような声だった。

「そうです、柗さん。私にも、それが真実とは思えません」

これは、木犀の後ろにいたさつきが言った。いつだったか、媛子を倒そうとやってきたときのように、尋問するかのような迫る口調だ。その隣では木犀が、言葉はなくとも、頬を引きつらせて睨んで

いる。

春臣は、力なく肩を落とした。

三対一。これじゃ、あまりに分が悪いな。

そう観念して、ややあつて、口を開く。

「……俺は、俺は、あいつに酷いことをしたんだ」

それを聞いて、沈痛な面持ちになった椿が訊いた。

「酷いこと？」

「そうだ。もう、俺の顔なんて見たくなくなるような、酷いことだ。それで、あいつはここから出て行って、どこに行ったのか……分からない」

「分からないって、どうして……」

さつきが不安そうに唇を噛む。

「探してないから、どこに行ったか、分からない。そういうことだ」

すると、今度はそれを聞いた木犀が動いた。くるりときびす返し、部屋の外に向かおうとする。

「木犀、さん？」

さつきが問いかけると、彼は毅然とした顔で振り返った。そこには、春臣に対する敵意のようなものも感じ取れる。

「分からない、じゃねえよ、榊。何があつたのか知らないが、緋桐様の居場所が分からないなら、探すまでだ」



そう言って、一人で階段を下りていこうとする。しかし、春臣はそんな彼を引き止めようと体を起こしていった。

「やめるよ。彼女の、好きにさせてやって欲しい。どうせ、もう帰って来ても意味はないんだ」

「榊君、それどういう意味や」

「だから、そのままの意味だ。彼女は、そもそも俺なんかと一緒にいるべきじゃないんだ」

「一緒にいるべきじゃないって？」

その問いに対し、春臣はため息を吐いた。それは体全体を埋め尽くす倦怠感を塊にしたかのような、重たい吐息だった。

「気づいちまったんだよ。自分の本当の気持ちに、昔からの願望に」  
「それは、何なん？」

「俺はな……俺は……ずっと昔から、誰とも交わらない『孤独』な人間でいたかったんだよ」

129 弱き者 1 (後書き)

どうもヒロユキです。

今年、この更新が最後となります。今思えばもうあつという間の一年ですが、いろいろ発見も多く、成長できた年でもあると思います。続きは来年ということになりますが、なるべく早く新年のご挨拶が出来るよう、早めに更新しようと思っております。なんだか駆け足な挨拶ですが、それでは、また来年。皆様、よいお年を。

130 弱き者 2 (前書き)

明けましておめでとうございます。ヒロユキでございます。

もう少し早くご挨拶しようかと思っていたのですが、少し予定より遅れてしまいました。

やはり、年末年始には慌ただしいので、なかなか執筆するタイミングを逸してしまい、つい、だらだらしてしまいました。新年早々こんなことではいかんですね。もっと気を引き締めていかねば。

ええ、こんな自分ですが、今年もどうかよろしく願います。

「榊君、それは、どういうこと？」

ややあつて、椿がそう聞いた。怪訝そうに眉を寄せる様子は、彼女が春臣の発言に対し、深い混乱の中にあることを示していた。

しかし、春臣はそれに対し、いかにもあっけらかんと、単純だよ、と人形のような無機質な笑い方をして答えた。

「俺は、独りになりたかった。誰からも気にされることもなく、触れられることもなく、誰からも隔絶された存在になりたかったんだ。この何十億つて人々が暮らす世界から分離した、自分だけの世界にいたかったんだよ。俺はそれが欲しかった。いつだって頂点にして底辺の自分だけが存在する絶対の世界をな」

それはまるで長年の夢を語るようなその口ぶりである。

しかし、それに対し、木犀は少しも共感することなどないといった風に、憤然とした様子で腕組みをする。

「何だよ、それ」

その声には明らかな怒りが込もっている。

「え？」

「何でそんなややこしいことを思うようになった？」

その言葉が、春臣の上辺だけの笑みを消した。いきなり、額を押さえて俯く。

春臣の中に、あの祖母の死に顔が蘇っていた。あの光に包まれた

ような、真つ白な、祖母の死に顔。そして、それと対照的に映りこむ、生気を失った生きる希望を失ったような、あの祖父の顔。

春臣はその記憶が、自身の心の奥の柔らかい場所に長年爪を立てていたのに、思い出した。あの時、春臣は確かに胸の中にあつた温かいものを失つたのだ。

もう、それを経験したくはない。思い出したくも、ない。言葉を発そうとした唇が震え、冷や汗が喉を伝った。

「……別に、深く話すつもりもない」

そう言って、春臣は逃げるように、首を振る。

「とにかく俺は、昔からそれを望んでいた。ほとんど無意識の内に、そもそも、人が多い都会を離れて、静かなこの町に越してきたのも、一人で生活できるように強くなりたいてって思いも、そこからだったんだ」

そうして春臣は、自らの根幹を支えている見えない柱を掴むように、拳を握り締めた。

そう、これこそが自分の喜びなのだ、と言い聞かせる。

「俺の目的はただひとつ。ここで、自分ひとりの、誰も踏み込めない城を築きたかったんだ。他人と関わらず、自分ひとりで、自分の力を頼りに生きていくんだ。だから、邪魔だった媛子を追い出した」

断言するように、春臣は言う。

「榊君……」

そこへ向けられるのは、縋りつくような、椿の瞳だった。

「榊君は、そんな人やない、うちにも、皆にも優しいし」

しかし、春臣は彼女との間にあるつながりの糸を解くように、彼女から視線を逸らすと鋭い口調で突き放した。

「青山、俺を買い被るな。俺に、期待なんてするな。俺は、弱い人間なんだ。ちっとも、お前が思っているような良い人間なんかじゃない」

そして、すつと息を吸い、大声で一気にまくし立てる。

「俺は、他人のことなんて、どうでもいいんだ。ただ、自分が一人で生きていけるように、完璧な人間になろうだなんて、心の底では思ってた。ただ、強さを欲してた。そうだ、俺が優しかったのは、その強さの証として、他人への優しさも含まれていたからなんだ！」

「そ、そんな……」

「青山、俺がする他人への行為は全て偽り、全てが自分のため、利己的な優しさなんだよ。分かるか？ 所詮、俺なんて、いい格好がしたい、ただの狭量な偽善者なんだよ！」

しかし、そこでさつきが割って入る。さすがに、どこまでも内へ内へ籠ろうとする春臣の言動に、黙ってはいられなかったのだろう。彼女は胸に手を置いて、必死な声で言った。

「榊さん、違います。願望は願望に過ぎません。そんなことで、これまでの自分を否定しないでください。卑下しないでください。これから変わればいいんです。そんなことで、夜叉媛さんを拒絶しないでください」

それに対し、不気味なほど冷静に、春臣は首を振って否定する。

「瀬戸さんこそ違うよ。この願望こそ、紛れもない俺自身なんだよ。俺の一部分なんだ。俺自身を消し去ることは容易じゃない。受け入れるしかないんだ。それに、媛子を追い出して放っているのは、それだけが理由じゃない」

「え？」

これにはさつきだけではなく、全員が一斉に春臣に視線を向ける。他にも理由があるなどと、初耳だった。

「時雨川さんが言っていたんだ」

「時雨川、さん」

「だ、誰だよ、それ」

事情を知らない木犀は目をきよろきよろとさせた。

しかし、そんな彼には構わず、春臣は続けた。

「彼女は、俺に、先天的に特別な力があるって言った。神様のような超然的な力をひきつけてしまう力と、穢れのような負の力をひきつけてしまう力だ」

「榊さん、それは……」

「これは推測だが、俺の中の孤独になりたい願望は、俺が知らないうちに、その力と結びついていったんだ。おそらく、神を拒絶する、負の力の方に、な。だから、俺が彼女に触れようとするたび、頻繁に俺の体が拒絶を示した。彼女は穢れの力と正反対の存在だからな」

春臣は言いながら思い出す。ゆずりから呪符を剥がしてもらったとき、夢の中で見たあの光景。あの薄暗い廊下はまさしく、自分自身ですら容易に踏み込めない、心の奥。そして、その向こうに待ち

受けるものは、自らに内に潜む、黒々とした影の形をした化物。

そうだ、と春臣は確信する。

媛子を追い出したとき、間違いなく春臣は、その化物と目を合わせていたのだ。

「そ、そんなことがあったんですか!？」

驚いたさつきに春臣は首肯で答える。

「そして、その拒絶反応は、静電気のようにだんだん蓄積され、増幅されていくんだ。今回は言葉だけで収まったが、俺はきつとそのうち彼女を傷つけるようになる。どんどんエスカレートしていつて手がつけられなくなる。それを予感した。だから、どちらにせよ、彼女は、ここにいるべきではないんだ」

その言葉は、静かに沈んでいくような諦めの色を滲ませていくようだった。それは窓から差し込む朝の健康的な陽光と対照的に、暗く澱んでいる。

「所詮、神様と一緒に生きるなんて、そもそもが馬鹿げていたんだ。みんなも、俺なんか放っておいてくれ。俺はきつと最低最悪の人間だ」

「そんな、榊君」

「出て行けよ。ここから。俺は何をするか分からないぞ。頼むから、俺を、独りにさせてくれ。これで、これでいいんだよ」



130 弱き者 2 (後書き)

投稿してから気がついたけど、すごく中途半端な終わり方ですね。すいません。

お詫びにちよつと次回予告。

次の話では、春臣の話聞いていた木犀がついに……。すいません、適当な予告ですいません。

吐き捨てるように春臣が言い放つと、また辺りがしんとなった。

春臣には、トクントクンと脈打つ心臓の音だけが耳にうるさい。落ち着けるために、少しだけ深呼吸をする。

その時、春臣は、なんとなく、子供のころおもちゃ箱をひっくり返して癩癩かんしゃくを起こしたときの事をうっすら思い出した。

あれは、確か祖母が死んでからすぐのことだった気がする。

何かあったのかよく覚えてはいないが、とにかく、自分は苛立っていた。何かをむちゃくちゃにしてやりたかった。その意味の分からない衝動は、今の状況に似ていた。

もしかして、

春臣は直感する。

もしかして、自分はまだあの頃のままなのだろうか？ 自分の成長の時計は、あの時から、止まってしまっているのだろうか？ たただだ周りが気に入らなくて泣き喚いでいるだけなのか？

途端に、焦燥に駆られた。

そして、何だか納得したような気持ちになって。

だとすれば、サイテー、だな。

そう春臣はさらに自分を嫌悪した。ずうん、と耳の奥で何か沈んでいく音がする。早く、部屋から誰もいなくなって、自分一人になればいい、と思った。

しかし、そこで沈黙を突き破って、誰かの声がした。

「ぶざけんなよー！」

それは、体の奥に響く、厚みを持った声だった。

「え？」

意表を突かれた春臣は、その人物を見上げた。声を発したのは木犀だった。彼はどっしと足を開き、仁王立ちになって春臣に向かい合っている。

「そんなもん聞きたかねえ！ てめえのそんな腐った願望だとか、わけのわからねえ力とか、そんなもん、俺は知らねえつつてんだ！」  
「な！」

「いつまでうじうじうじそこでなめくじみたいに悩んでんだよ。いい加減に目を覚ませ、馬鹿！ 一発殴ったら目が覚めるか、この野郎！」

これには春臣もたじろいだ。

まさか、こんな風に激怒されるとは……。全くの予想外だった。

春臣としては、てつきり、このまま全員が春臣に失望し、愛想を尽かせて部屋を出て行ってしまおうと思っていた。あれで全て終わったと思っていたのだ。

いったい、何だこの状況は。呆然として、頭を振った。そして、事態を把握できていない、焦点の合わない目で木犀を捉える。

「暮野、お、お前」

「榊、俺はそんなに頭がいい方じゃねえ。けれど、これだけは分かる。今のお前は考えすぎだ。緋桐様を追い出しちまったショックで落ち込んでるだけだ！」

「考えすぎ？ いい加減なこと言っな。俺は真剣なんだ。だいたい、暮野、お前に何が分かる！」

堪らず、春臣は噛みついた。圧倒されてしまいそんな自分を必死で奮い立たせる。いったい何が木犀の逆鱗に触れてしまったのか分からないが、今さら逃げ腰になるわけにはいかない。

しかし、依然、彼の勢いは止まらなかった。

「だから分からねえよ。てめえの、他人を否定するだけの、わけのわからねえ心の奥なんて知りたくもねえんだよ！ 何が独りが好きだ。独りになるために強くなりたかっただ。そんで引きこもりか？ 仮病も大概にしるよ！ 聞いてるだけで虫唾が走るぜ！！」

「何だと、お前なんかに関係ないだろ！」

はねつけるように振り払おうとするが、木犀は一步も退く素振りを見せない。むしろ、火に油を注いだようで、俄然、声を張り上げた。

「違う！ お前は大馬鹿野郎だ。関係大ありなんだよ！ いいか、よく聞け。てめえ、さっき自分を弱い人間だっつたな」

「え？」

「お前が、弱い人間か否か。俺はその問いにこう答える。ああそうだって、肯定する。榊、お前は、確かに弱い人間さ。他人に優しく、いつも冷静で、強い人間のようで、その実、そんな自分を疑いまくって身動きが出来なくなつて、こんな自分なはずがねえって地べた這いずり回つて、自分は最低だと思つている、ちっぽけで弱い人間さ！」

彼はそこまでを一気に言い切ると、息も荒いまま、今度は親指を自身の胸に突き立てるように押し付けた。

「そして、それは俺も同じだ。俺だって自分の弱さを知ってる。自分のどうしようもないどん臭さにいつだって嫌気が差してる。どう

してうまくいかないんだって、何で失敗ばかりすんだって、悩んでる。自分を最低だっと思って思うこともある」

「暮野……」

「俺が言ってる意味、分かるよな。弱さなんて、そんなもんあって当たり前なんだよ。弱さを持ってない人間なんて、一人もこの世にはいねえんだ！ それでもな、皆生きてるんだ！ 自分は他人と違うとか、特別だとか思ってるんじゃない！」

その瞬間、春臣の中で蘇る記憶があった。

『完璧な人間など、この世にはいない』

あの時、そう、時雨川さんにも言われたっけ。

『君は君のままでもいいのだよ』

木犀の声はさらに熱を帯びていく。

「そして今、てめえはその弱さの内にこもって、自分を守れる大層な武器を手に入れた気分なのかもしれない。けどな、いいか、そんなもんこっちは痛くも痒くもねえんだよ。そんなもんで、俺たちを追い出せると思ったら大間違いだぞ。他人を消し去れると思ったら大間違いだぞ、榊。俺は、俺たちは、お前がどんだけもがこうと抵抗しようとか外に連れ出す。否応なしに引きずり出す！」

春臣の耳のすぐ傍で鐘が突かれているように、彼の声が大きく反響して聞こえた。心の中で、縮こまった自分が、隅っこで震えている。ビリビリと鼓膜が揺れている。

「なんで分かるか？ それが仲間だからだ！！俺たちは皆友達

なはずだ！！ 誰かがいなくなつて、『はいそうですか』って放つておけるわけねえんだよ！！」

思わず振り向けば、心底心配そうな顔で、さつきと椿がこちらを向いて頷いている。その表情には一片の偽りも、見当たらない。それがなぜか怖くなり、春臣は目を逸らした。

木犀の話はその間も続いている。

「分かるよな、榊。お前だつて本当はそのはずだ。彼女が、緋桐様がどうなつていいなんて、思つてるわけないだろ。今まで、ずっと一緒だつたんだろうが！ 大事な仲間だろうが！ だからこそ、自分のせいで、彼女がいなくなつて悲しんで、ショックで動けないんじゃないか？」

「ちが、う……」

否定する声が、もはや、上ずっていた。しつかり解けないように力を込めていたはずの、手の平の指が緩んでいく。抵抗する力も体から抜けていく。

どうして、どうして、どうして。 。  
気がつかないうちに、春臣は、自分がどんどん押しつぶされていくような気がしていた。

「違う。これは、まだ彼女のことを好きだと勘違いしている自分なんだ。本当の俺は、彼女なんてどうでもよくて……」

「嘘吐け。それなら、今すぐに笑い飛ばしてみろよ。緋桐様なんてどうでもいいって、大声で叫んでみるよ。そんでもって独りで、いつも通りに生活してみろよ」

思わず絶句する。

「お、俺は……」

出来ない。そんなこと。

馬鹿か、俺は。最初からそれが出来たなら、今だって膝を抱えて悩んでいないはずじゃないか。

その不意を突いて、乾いた喉の奥から、何か熱いものがこみ上げてきた。

もう、よせよ。強がるな。

見えない誰かに、そう、言われている気もした。

その様子を見て、安心したように木犀が軽く笑う。

「それ見る。無理じゃないか。だったら、そんなもんはやっぱり本音のふりした偽者だ。偽者の感情に騙されるな」

「本音の、偽者？」

「確かに、以前のお前は確かに独りで生きることを望んでいたのかもしれない。でも、新しい現在のお前は違っただ。今彼女を拒絶した自分を憎んで、俺たちと繋がっている、今のお前の方もっと強いはずだ。何といっても、俺たちもついているんだから。だから、安心しろ。顔を上げて、自信を持て。榊の価値は、榊の良さは、榊が知る以前に、俺たちがちゃんと知ってるんだ」

そう言われてしまうと、春臣は一気に心が軽くなるような気がした。川の流れに素直に身をゆだねたような、そんな心地よさが体に溢れてきた。途端に、呼吸が楽になる。

「そう、だな」

そう言って、深く頷きながら、朝の空気を吸い込んだ。生命力が

体の末端まで、行き届くを感じる。自分は、これほど大事なことを、こんなにも簡単に忘れていたのかと、気が抜けてしまいそうだった。

「また俺は、性懲りもなく馬鹿やらかすところだった。俺はもう、彼女と生きる、そう選択したはずなのに。みんなと頑張るって、そう決心したはずなのに」

そして、さらに、力強く息を吸って、

「こんなどうでもいいことで、躓いてる場合じゃねえんだ！」

そう奮い立たせるように叫ぶと、どこかふざけたような半笑いで木犀が肩を小突いてきた。

「その意気やよし、だ。ようやく表情に力が戻ってきたみたいだな」

春臣は目を合わせて頷く。

「ああ、もう大丈夫だ。皆、本当にごめん。さっきまでの単なる寝ぼすけ野郎の妄言だと思ってくれ」

「言われなくても、な。榊君は元々お寝坊さんやし」

と、榊がにやにやしながら言った。

おいおい、その設定って、まだ生きてたのかよ。

内心で突っ込みを入れながら、誰にも見られないように、そっと春臣は目じりを拭って、歯を食いしばる。我慢していなければ、このまま何かあふれ出してしまいそうな気がして、我ながら女々しいなと、春臣は小さく笑った。



そして、弾みをつけるように、少し大げさに春臣は手を叩いてみせた。

「ようし。じゃあ、この大馬鹿野郎から、皆に頼みがある」

今ならちゃんと分かる。目を開けなくても分かる。仲間たちのぬくもり。

それは、かけがいのない、自分の。

「おっけーや！」

「いいぜ！」

「力になりますよ！」

声を聞いたただけなのに、ただそれだけなのに、春臣には、意味の分からない自信が、はちきれそうな勇気が、湧いてきたようだった。

「媛子を探すために、俺に、力を貸してほしい！」

そういつて、宙に手を差し出した。

春臣の家の前に物々しい高級車が止まったのは、全員でいなくなった媛子を捜索しようとかを出ようとしていた時だった。

まるで周囲を威嚇するような黒い光沢を放つその高級車は、静かで穏やかな周囲の景色の中で、明らかに目立っていて、どこか目にゴミが入ったような、不快な感覚を春臣に与えた。

二階の窓からその様子を確認していると、隣で見ていたさつきが何かを思い出したように、あつと声を上げた。

「どうした？」

春臣が訊くと、彼女はなぜか狼狽した様子で、ゆっくりと窓から後ずさった。

「いえ、ちょっと……」

と、恐れを隠して必死に取り繕っているような、中途半端な顔をする。

「さつきちゃん、あれが誰の車か知ってるのか？」

これは木犀が訊いた。彼女が心配なのか、傍によって話しかける。

「何か知ってるなら、話してくれ」

すると、彼女は言葉に迷い、しばらく目を忙しなく動かしていたが、やがて、

「多分、杉下さんが外出用に使用する車です」

とそう言った。

「杉下さん？」

春臣は、彼女の言葉を鸚鵡返した。どこかで聞いたことがあるような気がする。すると、隣で椿も春臣と同じように、あれ、どこかで聞いたことあるなあ、と顎に指を当てている。

しかし、それとは違う過剰な反応を見せたのは、さつきの隣にいた木犀だった。彼はその名を聞くと、すぐに顔色を変えた。

「す、杉下？ ど、どうしてそんなやばい奴らがここに？」

「やばい奴ら？」

「そうだよ。榊にも前に話したろう？ この辺一带を裏で牛耳ってる金持ち野郎だよ」

その言葉に春臣も合点がいった。そうだ、彼が以前ここに忍び込んできた晩にそう言っていたではないか。

そして、その杉下家は、自分がここへ越してきたときに、一番に挨拶に向かった家だった。確か、その家には祖父も世話になったと聞いている。

しかし、そこまで思い出して、春臣は疑問に思った。

その杉下家の人間がわざわざ春臣の家に来て出向いてくるとはどいうことだろう。あの杉下老人には連絡先は伝えてあるし、何かあったらまずはそこからこちらに連絡があるはずだった。

だが、それもなしに、いきなり家の前に現れるとは、何かよつぱどこのことに違いない。

この木犀と話とさつきの反応といい、何かありそうだ。春臣にた

だならぬ緊張が走った。

すると、階下から玄関の扉が叩かれる音がした。少々乱暴に叩かれているようで、扉が軋んでいるようだ。

ベルを鳴らせばいいはずなのに……まるで、家の中の人間を威嚇するようだな。

その考えが、春臣の心をいやが上にも身構えさせた。

一先ず、他の三人に目で合図し、ここにいるよう指示すると、自身は階段を駆け下り、靴を履いて扉を開けた。

「はい、どちら様ですか？」

あくまで明るい声で顔を出す。

すると、そこには数ヶ月前に会った、あの白髪の老人が立っていた。杉下老人である。一度しか見たことが無いはずだが、春臣の記憶にはなぜかくつきりとその老人のシルエットが焼きついていて、一目で、その人と分かった。

そして、その杉下老人の背後には、なぜかどこか見覚えのある気のある痩せた一人の若い男と、さらに、まるでボディーガードのような屈強な肉体をした二人の男たちが立っていた。

その、なんとも異質な組み合わせに、春臣はぎよっとする。

一体何事なのだろう。少なくとも、穏やかな空気ではない。

「おお、ごきげんよう、榊君」

この場に不釣り合いな、のんきな調子で杉下老人が手を差し出してきた。春臣はおずおずとその手を握る。

「杉下さん、どうも、お久しぶりです」

春臣はそう挨拶をし、すぐさま、

「あの、今日はどんなご用件で？」

と訊いた。

「うむ。突然訪ねてきて申し訳ないが、折り入って、君に聞きたいことがあってね」

「聞きたいこと？」

何だろう、と春臣は思案するが、そのこととは別に、ここですらまでも老人を立たせてこんな場所で話をするというのは礼儀に反すると思ひ、中に招こうとした。

「お茶でも出しますので、とりあえず、中へどうぞ」

と、一歩退いて、玄関に人が入れるスペースを空ける。

しかし、老人は静かにそれを手で制した。

「いや、君にそんな面倒なことをさせるつもりはない。用事が済めばさっさと帰ろうと思うからね」

「はあ……」

肩透かしを食らい、なんだかぼんやりとしてしまった後で、春臣は改めて訊く。

「では、その用事と言うのは？」

「うむ、単刀直入に申そう」

すると、老人は深くしわがれていながら、よく通る声で言った。

「君の家に、紅い髪をした少女が住んでいるだろうか？」  
「え？」

その途端、春臣は、いきなり体の肩から下の部分がすくとんと全て落ちてしまったかのような感覚に襲われた。

な、何だって？

この老人は、今、何と言った？

紅い髪の少女？

それは、紛れもなく、明らかに、媛子のことだろう。

つまり、杉下老人は、その媛子がここにいるか、と訊いているのだ。

いったい、いつの間に？

いつの間に、この杉下老人は、そんな情報を知っていたのだろうか。

「住んで、いるのだろうか？」

まるで言葉をよく知らない子供に言い聞かせるように、そして同時に答えを催促するように、老人は訊ねてくる。

春臣は、どうすべきか逡巡した。脳内はすでに混乱の大波で洪水が引き起こされている。

考える、考える。すぐに、考える。

どう答えれば最善だ？

全く知らないと、しらを切るか？

いや。そこで脳内の冷静な声があった。

ここで下手に否定すると、危険な気がする。素直に肯定すべきだ。

咄嗟にそう思つて、春臣は頷いた。

「え、ええ。ご存知だったんですか？」

すると、隣に立っていた若い男がまるで春臣を見下したようにへらへらと笑つた。

「そりやそうさ。僕たちがこの町で知らないことなんてないよ、君。僕たちは何でも知つてるのさ」

まるでそれは、自宅の庭に植えてある木のことを語っているような、ずいぶん簡単な言い方だった。いつもなら、その態度はなんと春臣の癩に障るものだったが、今はそれどころではない。春臣はすぐに老人に視線を戻す。

「そうか、やはりそうなのか」

するとそこで、老人は満足そうに一度深々と頷き、そして、両目を大きく開いて春臣を見た。

「それで、その少女は今、どこにいる？」

「え？」

それは続けざまの衝撃だった。

なぜ、

なぜ、この老人がそんなことを聞くのだろう。

どうして、そんなことを知る必要があるのだろう。

ただならぬ気配に、春臣は、すぐに答えることはためらった。もちろん、現在彼女は行方不明であつて、そもそも居場所など答えよ

うがないのだが。

「どうして、そんなことを？」

恐ろしい核心をついてしまいそうで、僅かに震える声で訊く。

「おお、すまない。いきなりそう聞く前に君に言うことがあったな。何事にも順序がある」

すると、ごほんとして老人はわざとらしく咳払いをした。春臣はそこでてつきり、きちんと質問した事情を説明してくれるのかと思っただが、老人の口からでたのはまたしても質問だった。

「あの少女は、人間ではないな？」

これには、ついにとどめを刺された気分がした。春臣は体の先から先までが真っ白になってしまいう心地がして、口の奥でじわりと嫌な味が広がる。

彼女の話出た時点で、嫌な予感はしていたが、まさか、そこまで知っているのか！？

彼女が、普通ではないということを知っているか？

彼女が、神様だということを知っているか？

すると、畳み掛けるように刃物を突きつけるかのような鋭い目つきで老人が睨みを利かせてきた。これには必死で内に覆い隠そうとした動揺が、抑えきれずに湧き出てくる。

「あ、あ……」



つい、声にならない息が漏れてしまった。全くもって、不覚だった。これでは誰がどう見ても、挙動不審である。

すると、それを見た老人は春臣の答えもないままに、突然、口の端が耳まで届くような恐ろしい笑いをみせた。

「そうか。その女はやはり、人間ではないのだな！」

「そうか。その女はやはり、人間ではないのだな！」

途端に、春臣は体が地面から離れるのを感じた。飛びあがったわけでもないのに、どうしたことかと左右を見ると、先ほどまで老人の背後に控えていた二人の男が、なんと、春臣の両肩を掴んで持ち上げているのだ。

どうやら、老人がそうしろと素早く指示をしたらしい。春臣は突然のことに抵抗する暇すらなかった。

「な、何ですか！ これは！」

と、驚き叫ぶ。

そして、必死にもがいて彼らの図太い腕から抜け出そうとするのだが、もがくほどにその男たちはさらにきつく春臣の肩を締め付け、動きを封じてきた。掴まれた場所がぎりぎり痛み。思わず声を上げそうになった。

それを見て、それまで笑っていた老人の顔が一変し、醜く歪んだ。

「さて、神君。残念ながら優しく訊ねるのも、これで終わりだ」

そう睨みつけておいて、春臣の横をひよいと通り抜け、家の中に入っていく。

「茶はいらぬと言ったが、一先ず家に上がらせてもらおうか。さすがにこんな場所では人目につく。大の大人が寄ってたかって一人の純朴な少年を羽交い絞めに行っていると知れば、大問題だ」

「ちょっと、やめて下さい！」

春臣は止めようと叫びもがくが、その抵抗も空しく、両手両足は相変わらず空を掻くだけだった。いくら若く健康な肉体を持っている春臣とは言えど、大の大人二人に掴まれたのでは成す術も無い。何も出来ないままその男達に引き摺られ、ずるずると家の中に引っぱり込まれてしまった。

そして、最後に若い男が入って、扉が閉まる。ボタン、と外の世界と隔たりが出来る。

助けは、呼べなくなつた。

その事実を認識し、春臣はパニックになりそうになつた。

なにしろ、相手は大人四人で、こちらは一人。多勢に無勢である。さらに、春臣は武器になりそうなものを何一つ持つておらず、その上、動きを封じられているときた。

これこそ万事休す、だ。

抵抗するだけ無駄なようである。春臣は程なく体から力を抜いた。

一方で、老人は勝手知つたる我が家のように春臣の家にとんどん侵入していた。と、居間に足を踏み入れたところで、ぎよつとして足を止めた。

「何だ、これは？」

と声を上げる。

それにつられて、春臣も引つ張られたまま様子を見た。そこで、思い出した。

居間はまだ昨日のパーティーの片付けが済んでいないのだ。

部屋の中は乱雑に散らばっていて、倒れたツリーや、クラッカーの飾り、空っぽの一升瓶などが昨夜のままに転がっていて、雑然と

している。

「ずいぶん散らかっているではないか」

「昨日、ここで友人たちとパーティーをしたんです。勝手に入らないでください！」

春臣は思わずそう叫んで、老人たちへこれ以上の侵入を止めようとした。

しかし、老人は春臣のそんな制止の言葉などまるで気にも留めない素振りで、

「パーティー？ 酒を飲んで宴会か？ 最近の若者は豪勢だな」

などと嫌味つぼく笑っただけで、そのままずいずい入っていつてしまう。そして、一升瓶など邪魔な物を足で乱暴にどけると、まるでこの空間の主であるかのように、テーブルの前にどかりと座った。

さらに、遅れて入ってきた若い男は、「何だこれは、汚いな」などと、ぶつぶつ文句を言いながら、適当な場所に腰を下ろし、見るからに不快そうな顔をして、あちこちを眺めた。

その様子を見るや、春臣の内には怒りがこみ上げてきた。

このあまりに理不尽な状況にである。

そつちが勝手に入ってきておいて。なんだ、その言い草は……。

その時にはもはや、目の前の老人が、かつて一人暮らしを始める自分を憂い、優しい言葉をかけてくれたことなど、意識から消え去っていた。

それと引き換えに、春臣の脳内にまざまざと映し出されていたのは、昨日の記憶だった。騒がしくもあったが、仲間たちと共に準備し、媛子を共に祝った、あの温かなパーティーの風景である。

そこへ今は、こんな不粋な人間たちが許可もなく勝手に足を踏み入れていると思うと、今すぐにも出て行けと怒鳴りたい気分だった。

「ここは、ここは、仲間たちとの大切な場所なのだ、主張したい気分だった。」

「それより、榊君」

しかし老人は、春臣の心情など全く知るつもりもないようで、無神経な、平坦な調子でそう訊いた。

「赤髪の少女はこの家にいるのだろうか？ どこにいるのか教えてくれないか？」

春臣はつい大声で突っぱねてしまいそうになるのを堪えて、首を振る。

「……教えませんか」

「何？」

「それよりも、早く離してください。俺は、暴れたりしません」

「ふん……」

すると、老人はじ、と春臣を見て、それからなぜか春臣の背後の方へ一度視線をやってから、

「そうだな、離してやれ」

と言った。途端に男達が春臣からすつと手をどける。そのあまりにもあっさりとした様子に、自分から頼んだものの、春臣は一瞬呆

然とした。

もう少し、拘束されるものと思っていたけど……。

すると、老人は動かない春臣には興味がないのか、今度は傍で控えている男達に視線を移す。

「お前たち」

と呼んだ。

「この家の中にあの女がいる可能性は高い。隈なく探して来い」

それを聞いた男達がロボットのようにするりと無言で立ち上がり、振り向いて部屋の外へ出て行く。

春臣ははっとして、我に返った。

そうか、そのために、春臣を離したのか。

そして。

これ以上、この者たちに好き勝手にさせてはならないとそう思っ  
て、

「ちょっと待」

男達の背中に手を伸ばしかけた。

しかし、

「止まれ！」

急に腹を殴りつけられるような言葉が飛んできた。杉下老人だ。

振り向くと、老人は身も凍るような冷たい表情をして、春臣を見ていた。まるで、人の命など平気で奪って潰してしまいたいような、そ

んな残忍さすら感じる目つきである。

腹の中に、化物でも飼ってるみたいだ。  
直感的に春臣は思った。

「君のような純朴な少年に、わしの裏の顔をいろいろ知られてしま  
うというのは、いささか心苦しいがな」

全く感情のこもらない声で、老人は言う。

「しかし、目的のためには心を鬼にせねばならんこともある。今回  
はその例というわけだ。分かるか？ あまりうるさいと、わしは本  
気で手を上げねばならなくなるぞ。それが嫌ならば、大人しく、あ  
の赤髪の少女をわしに差し出せ」

「どうして、どうして、あいつが必要なんですか？」

春臣はそう問いながら、奥歯をかみ締め、必死に混乱と怒りで乱  
れそうな呼吸を整えた。

「どうしてこんなむちゃくちゃなことまでして、彼女を……せめて、  
質問に答えてください」

「大したことではない、ただ、少し調べるだけだ」

調べる。

それは一見、とても簡潔で明瞭なようで、同時に不透明で不穏な  
表現にも思えた。

春臣は身構える。まるで媛子をモノとして扱っているような、そ  
んな嫌な予感もしたのだ。

「何を、ですか……」

一度、息を吸って、



「いったい、何を」

「その少女が……神であるのかどうか」

じつくりと言葉を味わうように、老人は言った。

「何だつて!」

「話によると、君の言うその少女は、なにやら人ならざる力を持っているらしいではないか」

絶句して、春臣は口を押さえた。

それを、知っているのか。

まるで、腹の底をひんやりとした手で撫でられたような感じがし、鳥肌が立った。想定はしていたが、やはりこうしてその事実を突きつけられると、春臣は狼狽した。

いったい、どうやって調べたのかは皆目知らなかったが、彼らは媛子が神であるという証拠を握っているらしい。

老人は先を続ける。

「それに、君もさきほど認めただではないか」

「え?」

「彼女は人ではないと」

「あ!」

先ほど、玄関で老人が見せた不気味な笑みが蘇る。春臣が質問に対し、つい言葉を無くしてしまったがために、その動揺を、老人は肯定として、彼女が人ならざる者であると、そう受け取ったのだ。た。

突然のことで、どうしようもないことであつたが、もしもあそこ

で首尾よく白を切ることが出来ていれば、こんな状況に陥っていなかったかもしれないと思うと、悔やまれた。今さらとは思いつつ、春臣は首を振った。

「そんなことを、認めたくもりはありません」

「む？」

「俺は……俺は、一言も何も言ってますん」

しかし、老人は春臣のその否定に対して、ぞわりと顎髭を撫でただけで、つまらないことのように、口をすぼめるだけだった。

「ふむ、まあいい。それは些細な問題なのだよ、榊君。君が認めようと認めまいと、わしらは彼女を調べる。その方針に変わりは無い。そこに神である可能性があれば、な」

なぜ。

春臣はうつろな目で老人を見た。

なぜ、そんなにも彼女に、神にこだわるところだろうか。

「俺には、少しも分からない。どうしてそんなことをする必要があるのか。あなたの目的は、何なんですか？」

すると、老人は不思議なものを眺めるように春臣を見た。

「分からないか？」

と、大きく目を見開いた。

「神の力だよ、榊君」

それが答えだ、と頷く。

そして、何かを握り締めるように、老人は宙に手を伸ばした。

「神の力を手に入れた者は最強だ。君だってそう思うだろう。世界を創造できるほどの力。それを手にすれば、この世の頂点に立つことが出来るのだ」

「この世の、頂点に、立つ？」

「そうだとも。こんな小さな土地など簡単に握りつぶせるほどの力だ。わしはだね、未来を知る力が欲しい。この世のすべてを知る力が欲しい。そして、この世の全てを掌中に収めたい。このわしの欲望を満たせるものは、ただ一つ、神の力なのだよ」

全く、意味が分からない。

こんなご時勢に、世界を征服しようとも言うのか。本気で、そんなことが出来ると、信じているのか。

思わず、春臣の肩からずりりと力が抜ける。

そんな、荒唐無稽で、下らないことのために、媛子を捕えようというのか……。

ふざけている。単純に、そう思った。怒りで、手のひらがわなわなと震えた。

すると、なぜか哀れむような目つきで老人が春臣を見た。その目は春臣の考えを見透かしているようだった。

「榊君、可能なのだよ。神の力を使えばね。この世の森羅万象を統べる力だぞ。長い歴史の中、幾度となく人類を絶望の淵に追いやった、大自然の力を手に入れるのだぞ。それさえあれば、他者など虫けら同然だ。この世の全てを手に来る」

しかし、それでも春臣は、そんな馬鹿な、と思った。そんなこと

にはならない、と断言も出来る気がした。

瀬戸さつきのような特殊な場合を除き、生身の人間が神の力を思うが俥に操るなど、なんともちぐはぐな気がしたのである。

例えるならば、そう、蟻が別大陸を目指すのに、飛行機を手に入れるような話だ。飛行機は確かにこの広い世界を高速で旅するのに、とても便利な乗り物ではあるだろう。しかし、たとえそれがあるからといって、蟻では飛行機を操縦することは出来ない。操縦室のボタン一つ押すことさえ叶わないだろう。

春臣には、老人の話が、そんな強い違和感を伴って聞こえたのである。

単純にその力が存在することと、その力があるからといって、それを自在に使役できるかということは決してイコールで結ばれるべきものではない、と春臣は思ったのだ。それは、十分条件にはなりえない。別の話なのである。

それに。

そもそも、老人が捕らえようとしている今の媛子に、そんな大それた力はないのだ。

せいぜい、木に花を咲かせるのが精一杯だというのに、この世のすべてを知り、森羅万象を統べることなど、到底不可能だろう。

それは、老人が望む完璧な力には遥かに及ばない、微弱な神の力だ。

不完全な部分だらけの、彼女の力だ。

だからこそ、彼女は这个世界でとてつもない苦勞を強いられた。神だって、完璧なわけではないのだ。

そうだ。

だから、

だからこそ、

彼女は、自分にとって、あんなにも愛おしいのだ。

そして、守らなければならないのだ。この、得体の知れない連中から。絶対に。

負けるものか。

そう思うと、春臣の体の震えが自然と止まった。決意を込めて、すつと息を吸う。

「杉下さん、あなたの」

あなたの望むような完全は、ここには何一つないですよ。

そう春臣が言おうとしたときだった。

上階から何者かの動く音が聞こえてきた。老人の目の色が変わった。

「どつした?」

その場の全員の視線が上を向く。俄かに天井辺りが騒然とする。

「友達です」

春臣は答えた。おそらく、家の中を探っていた男達が、二階にいた樁たちと鉢合わせたのだろう。

「何?」

「二階には、僕の友人たちがいます」

「そ、そんなことを言ったか?」

目の前の老人は明らかにうるたえていた。突然の誤算に慌てているのだろう。おそらく老人の考えでは最初からこの家には春臣と媛子しかいないと思っていないに違いない。

その様子に、春臣は、これはもしや、またとない逆転のチャンスなのかもしれないと直感した。

計画は小さなミスからでも、その連鎖によって、全ての破綻を来たすことがある。上手く利用すれば、春臣たちがこの場の主導権を握ることも可能だ。

「訊かれてないので、答えてませんよ」

そう思った春臣は、先ほどまでと一転して、強気な姿勢で言い放つ。

「どうするんですか？」

「ぐう、これは面倒が増えたな」

しかし、老人もさる者、すぐに動揺を身の内に隠すと、涼しい顔に戻った。

「なるほど……」

と、思案顔で顎鬚を触る。

「何をするつもりですか？」

「何、暴れてもらわないように、静かにしてもらっただけだ。それから、赤髪の少女を匿っているのなら、君ではなく彼らに話を聞くといいものもい。人数が増えればそれだけ聞き方の『バリエーション』も増えそうだ」

そう楽しげに語る老人はいかにも余裕綽々だった。しかし、その勢いに春臣だって負けていない。

「そんなことまでして、ただ済むと思ってるんですか？」

「む？」

「もしも騒ぎになって、ここに警察が来れば！」

そつだ。

この状況に巻き込まれる人間が多ければ多いほど、彼らにとっての計算外な状況は生まれ易くなる。例えば、誰か一人でも上手く外に逃げ、周囲の人々に助けを呼ぶことが出来れば……。しかし、

「ガハハツ、警察！」

呵呵大笑。

突然、老人が身を反らして大口を開け、笑い出した。その剛胆な態度に、慌てている様子は微塵もない。

春臣は驚愕した。なぜ、笑うことが出来るのだろうか。この状況はどう考えても、老人たちにとって、好ましくないものになっているはずだった。

「何が、おかしいんですか」

恐る恐る訊ねる。

「その心配いらんよ、榊君。警察などわしらの前では何の意味も持たぬ」

「え！？」

「残念だが、奴らは既に何十年前からわしらの傘下だ。たとえ、少々騒ぎになったとしても、わしが裏から指示を出せば、揉め事や事件の一つや二つ、もみ消すことなど造作ないことだ。君らのような小僧どもがいくら騒ごうと何も変わらない。誰も君らの言うこと

など信じない。諦めるのだな」

「そんな……」

「わしらを甘く見るなよ。そして、理解しろ。この地で、我々に楯突くことは自殺行為なのだ」と

春臣は、いきなり自分の真下にぽっかり穴が空いたような気分だった。

そうか。

そうか、この人たちの背後には、杉下家という、古くからの圧倒的な権力があるのだ。その権力に物を言わせれば、この土地では、大抵のことが思うがままなのだ。

すっかり忘れていた。木犀が言っていた、ではないか。

そうなれば、この地の秩序を保とうとしているのは、もはや警察などではない。面向きには、きちんと警察も機能しているように見えるが、その裏でこの老人が全ての糸を手繰っているのだ。この老人こそが、秩序なのである。この老人が正しいと言えば、正しい。誤りと言えば、誤り。無実と言えば、無実。罪人だと断ずれば……その者は、罪人なのだ。

事實は簡単にくつがえり、真実は容易に闇の幕で閉ざされる。

もはやそれは、春臣のような人間がいくら歯向かったところで、どうにもなるものではない。

だから、こんなにも正々堂々と正面から家に上がりこんできたのか。

春臣は奥歯をかみ締めた。

そんなもの、卑怯だ。春臣は絶望すると共に、地団太を踏みたくなる。こんなことがまかり通っていいはずがない。絶対に、おかしい。

しかし、それでも、どうにもならない。それは分かっている。こ



ここで咆えたところで、逆転の目は無い。こちらの、負けなのだ。

ならば、ならば、どうする？

春臣は、俯いた。この状況での、最善は何だ？ なるべく、被害を最小限に抑えるには……。

「か、彼らは……」

俯いたまま、春臣は声を絞り出した。

「うん？」

「彼らは赤髪の少女とは、何の関係ありません。今すぐに開放してあげてください。俺がきちんと、ここで見たものは他言するなど説明しますから……ですから」

「ほう」

すると、感心したように老人がため息をついた。

「何ですか？」

もしかすると、その条件を呑んでくれるのだろうか。

「健気なものだな。そんなに友人が大切か？」

「え？」

「他人が、そんなに大事か？」

老人は身の毛もよだつような、ぞつとする、笑みを浮かべている。

「何を、言うんですか」

「前に言おうとしていたのだがな。君は、どうにもわしに『似てい

る『ようだ』

「似ている？」

どこが？

「いつたい、どこが？」

その刹那、春臣と老人の視線が交わった。電流が走るように、瞳の奥が振動し、そして春臣の意識が反応して、何かがかみ合ったような印象を受けた。それは、春臣という人間の芯ががしつと驚掴みにされたような感覚だった。

ああ、これは。

「君は心の奥に私と似た物を隠し持っているようにわしには見えただ」

そうか。

この人は。

俺と、同じだ。

俺と、同じなんだ。

ただひたすらに、孤独を望む心を持ち、自ら穢れを引き寄せ、その身に纏っている人間。他人を寄せ付けず、孤独の城に籠もり、自身の周囲を埋め尽くす虚無を喰らい、その背中に闇を負っている者なのだ。

その闇は、重く、重く、どこまでも、重い。縋りつくものもないまま、孤独の底まで、ずんずんと、ただ一人、落ちていく。

全て同じだ、この自分と。

「君とは、その内中々面白い関係を築けそうに思っていたのだがな。だが、残念だよ」

視線を落とし、どこか寂しげに老人は言った。そして、もう一度顔を上げ、春臣を真っ直ぐに指差すと、

「君のその憎たらしい頑固そうな目。どこまでも腹立たしく、真っ直ぐな瞳。今気づいたよ。その目は、あいつにいかにもそっくりだ」

と苦々しげに、謎めいたことを言った。

「あいつ?」

「ああ、わしに近づき、わしを謀ろうとした憎き男さ。楠哲夫。お前の祖父だよ」

「あの男は厄介だった」

老人は憎憎しげに机を叩いた。

「ああ、今思い出しても忌々しい！」

と、烈火のごとく怒りの感情を露わにする。

まるで、老人の体の中で火柱が上がるようだと思つた。それは、今まで地下を流れていた溶岩が一気に地表に噴出すような勢いだった。

ただならぬ気配につばを飲み込む。

「な、何があつたんですか？」

「あの男は！」

そう叫んで、老人は立ち上がる。そして、春臣の方へ無言で歩み寄ると、胸元を乱暴に掴んで引き寄せた。

「うわっ！」

がくん、と視界が揺すぶられ、ぐつと首が絞まる。

それはいつたいこの老人のどこにこんな力があつたのか、と春臣が思うほどの怪力だった。

老人の顔が目の前にある。春臣は火が走つたと思つた。老人の両目が赤く爛々と輝いている。

「あの男は、わしを騙したのだ！」

つばを撒き散らしながら老人は怒鳴った。

「ど、どういう、こと、ですか？」

春臣は息継ぎをしながら、訊ねる。

少なくとも春臣には、祖父がそんなことをするような人間とは思えなかった。もっと真っ直ぐで、卑怯なことを許さない心を祖父は持っていたのだ。

その祖父が人を騙すなど……ありえない。

すると、そこで老人は一度呼吸を整えると、春臣から視線を逸らし、昔を思い出すように、宙を見た。幾分か、落ち着いたようだ。

「わしは……」

と、語り始めた。

「わしは、あいつがこちらに越してきたばかりの頃をわしは今でもよく覚えている。あいつはな、親しげな顔をして近づいてきたよ。一緒に暮でも打たんか、とそう誘ってきた。面白い奴だとは思ったよ。わざわざわしのような者のところにそんなことを言ってくるなぞ」

あいつは、ここ一帯ではわしが有名な人間らしいと聞き、たまたまここに来たらしい。奴がここに来た事情を聞いて、大方、女房に先立たれて、よほど暇だったのだろう、最初はそう思っていたのだ、と老人は言う。

「わしは、そんな奴を特に追い払う理由もなかった。だから、付き合ってたっていた。一月に数回会う程度だったがな。最初は本当に

暮を打つ程度だったが、わしが神を信仰しておると聞くと、それに対してもあれこれ聞いてきたな。神とはどういう者なのか、どうい  
う存在なのか、いろいろと、な」

「そ、それで、騙されたというのは？」

春臣が訊くと、老人の目に再び炎が蘇った。

「そうだ。あいつは、わしを騙そうとしたのだ。あいつは、あいつ  
は、わしらの不正を見抜こうとしていたのだ」

「え？」

「わしらがこうしてこの土地で強い権力を持っているのは、元々か  
らの勢力というのもあるが、裏でいろいろ取引しているからなのだ。  
詳しくは話さないが、不法に金や人をいろいろ秘密裏に動かしてい  
る。彼奴は、その不正の証拠を掴もうとわしに取り入っていたよう  
だ」

彼奴という言葉に力が入る。まるで見えない何かを歯で潰すよう  
な感じだった。

「まあ、結果は失敗終わったようだがな」

「……」

「それに、もし仮に何か証拠を掴んだところで、それを上手く世間  
に公表し、わしらを警察に突き出すことが出来たかというところ、確率  
は低いだろうの。わしらも、そんなじじい一人に潰されるほど馬鹿  
ではないのだ。そういう事態に陥らぬよう、二重三重の対策は施し  
てある。この町に住む者はそれをよく理解している。そう、だから  
こそ、わしらに逆らうという選択肢は、この町の者には、そもそも  
存在するはずがないのだ。だのに、あいつはそれをやろうとした。  
越してきたばかりで、この町の事情をよく理解できていなかったの  
か、さもなければ、単に自分なら出来ると過信しておったのか。いず

れにせよ、全く、馬鹿な者よ。結局は何も出来ぬまま、勝手に病に倒れて死んでしまいおった。わしらが制裁を加えるまでもなく、な」

しかし、それならば、分からないことが春臣にはあった。

「だ、だったら、何を、そんなにも恨むというのですか？ 結局、祖父はあなたに何も害を加えていないのでしょうか？」

胸倉を掴まれた体勢のまま、そう訊く。

すると老人は、怒りの熱を帯びたままの口調で、

「あるのだよ」

と言う。

「わしは、とても悔しいのだよ、榊君。多少なりともあの男を信用したわしが。あの、一見、気の良さそうな顔をしたあの男を、敵ではないと認識してしまったわしが。とてつもなく、腹立たしい事実だ。まあ、わしが迂闊だったのも仕方ない。まさかあんな風に、単身でわしらに歯向かおうとしてくる者があるとは思わなかったからな。不覚だったよ。奴はきつとその盲点をついたのだ。全く、小癩なことをする。忌々しいじじいが！」

そして、ふうふう、と老人は肩を上下して息をした。一気に喋ったのが、体に堪えたらしい。

「まあ、そんなあいつも、今ではこの世におらんがな。それは喜ばしいことだ。実に、喜ばしい。ハハハ……」

そして、

それから、

老人は、春臣の祖父の死を、笑った。

それは破壊的で破滅的で、機械の歯車が軋んでいるような、耳障りな不協和音のようなきいきいという笑いだった。聞いている者全ての耳を引っかくような、凶暴で荒んだ笑いだった。

思わず、身震いしてしまう。足が、竦みそうになってしまう。

しかし、

しかし、春臣はそこに一つの確信を見出していた。それは、この老人も気がついていない、足元の岩が崩れかけていることへの予感だった。

そうか、そういうことか。

春臣は、そこで老人に対抗するように、薄く笑った。

「な、何がおかしい！」

案の定、それを見た老人は激昂した。

しかし、春臣はそれですます確信を強く感じた。間違いない、この老人は怒っているのではない。ただ、恐怖しているのだ。

そう、いつか相対したであろう祖父と同じ目をした孫の少年を。

春臣は自分の胸倉を掴んでいる老人の手を逆に掴みながら言った。

「その様子を見る限り、じいちゃんのやったことは、無駄じゃないみたいだ」

「何だと？」

ぶるりと老人の手が震えた。僅かに力が緩む。

「じいちゃんは、きっと理解していたと思いますよ。自分の行動が無謀なことだって」



「なんだと？ それならば、なぜあんな行動に出た？」

「簡単なことです。それがじいちゃんの信念だからですよ。曲がったことは許さない。自分の正義は貫き通す。神様の力なんて信じない。人の間違いを罰するのは天罰なんかじゃなく、やっぱり人の行動だ。つまり、そういう自らの掟に従っただけなんです」

「だから、わしらに立ち向かったと？ 無謀だと言っのに？」

理解に苦しむな、全く解せん。老人は呆れたように首を振った。しかし、春臣は迷う事無くその先を続ける。

「じいちゃんのその考えの中には、相手に対する条件はないんですよ。だからどんなに大きな相手だって、信念は変わらないんです。たとえ、町ひとつを掌握できるほど強大な力であってもです」

「……ほお」

「じいちゃんはあなた達のが許せなかった。人々を裏の力でねじ伏せ、無理やり言うことを聞かせる。そんなことは間違っている。そう思った。でも、残念なことに、誰もそれに抵抗しようという者はいなかった。あなた達の力を恐れているから。だから、自分が抵抗者の先駆けとなるつもりだったのでしょう。そして、じいちゃんはその結果として、あなたは『動揺』した。もしかすると、それこそが、じいちゃんの狙いの一つだったのかもしれないと俺は思っています」

「どういうことだ？」

「じいちゃんは、自分があなたの理屈を越えた存在だということを知らしめたかったのです」

「なに？」

「他者を打ち負かすには、力が絶対だと思っっているあなたに、じいちゃんは一人で立ち向かった。相手よりも強大な力を持って立ち向かうならまだしも、同等どころか、戦力など皆無な単身で挑んだんです。だから、あなたはまさかと油断したんです。動揺したんです。

そんなことなど、まず『ありえない』と思っていたから。力を持たない弱者がそんな風に強者に襲い掛かるはずがないと思っていたから。あなたには、少しも理解が出来なかった」

言葉を重ねれば重ねるほどに、春臣の中で誰かが乗り移ったような感覚が増していた。まるで、その見えない誰かが春臣の口を使って喋らせているように。言葉が次から次へとあふれ出て、声に自信が漲っていた。

「じいちゃんは、あなたの考えが間違っていると言いたかったんじゃないでしょうか。でも、残念なことにはあなたは、自分が間違っているとは思わなかった。その代わりに、じいちゃんが立ち向かってきたその状況に、こう結論付けたんじゃないんですか？ 『自分の力がまだ不完全であったのだ』と。相手を怯えさせるのに不十分であったと。だからこそ、こんなことが起こったのだと。そして、あなたは傾きかけた自分の正しさを証明するために、より強い力を持つとうとして、振りかざそうとして、神の力なんて途方も無いものを、求めているのではないですか？」

「……」

「だったら、諦めたほうがいいです。これ以上力を持ったって、意味なんてない。そんなことをしても何も変わりませんよ。いくら相手が圧倒的な力を行使する者であれ、必ず抵抗する者は出てきます。じいちゃんは、きつとあなたにそう伝えたかったんです。正面からあなたの懐に飛び込むという行動でそれを示そうとした。自分がいなくなっても、自分と似たようなことをする者は必ず現れると！」

「黙れ……」

「もしかしたら、今もこうしている間にも、祖父の行動をこっそり見ていた人たちがあなたたちの大船を転覆させようと虎視眈々と目論んでいるかもしれませんよ。だから、だから素直に、これまでの間違った行いを認めて」

「黙れ、小僧！！」

鋭い怒声が飛んできた。それは春臣の口から発された言葉を弾き飛ばすよような勢いを持っていた。春臣は老人を見た。その目は血走り、額にはおぞましいほどにくつきりと浮き上がった血管がはつきりと見えた。

老人の怒りは今や頂点に達しているようだった。春臣の胸元を掴んだ手を揺さぶる。

「それ以上知ったようなことを言うな。いいか、全ては強くなければ始まらないのだ。この理屈は揺るがぬ。力を持たねば、何事も通らない。あいつは確かに予想外のことをしでかし、今でも非常に腹立たい存在だが、事実として、弱きあいつは、結局わしを屈することは出来なかったではないか。そして、お前の言う通り、これから、次々にわしらに抵抗する者が出てくるかもしれん。しかし、それはそれで良いだろう。そのたびに力でもって、叩き潰せばいいのだからな。歴史は戦いに勝った強者によって記されてきたように、この世は力があってこそなのだ。そういう存在だけが生き残れる。その理論に間違いなどない。そう、だからこそ、他者を完膚なきまでに叩き潰す、何者にも負けない完璧な力が必要なのだ。そして、弱きものはそれに屈するべきだ。神に傳く人のようにな！！！」

そして、そこまで言い切って、老人はまたしても苦しそうに喘いだ。一気に喋ったせいで、呼吸が上手く出来なかったのだろう。

老人は苦しそうに喘いでいた。一気に喋ったせいで、呼吸が上手く出来なかったのだろう。

そして、汚らしいものを放るように、春臣から手を離れた。

「ふん、無駄話も、こ、これくらいにしておこう」

掴まれていた手を離されて、ようやく春臣は自由になった。圧迫されていた分、新鮮な空気を吸う。ほんの少し足元がふらついたが、しっかりと気を張って老人に向かい合った。

すると、老人は春臣を牽制するように数歩、距離を置き、こう言い放った。

「とにかくだ。お前はよほど仲間が大事と見える。弱き者は弱き者同士、仲間意識が芽生えるのかもしれない。ならば、その仲間が傷つけられるのは、大層心が痛むことだろう」

そうして、春臣の背後を顎で示す。

「え？」

すると、背後から友人たちの騒ぐ声が春臣に届いた。振り向けば、あの無骨な体つきをした男達に腕を乱暴に掴まれた状態で、三人の友人が部屋に引きづられてくる。

さつきと椿は男に片腕を掴まれ、木犀はもう一人の男に両腕を後ろに回された上で自由を奪われていた。皆状況に困惑した表情をしていたが、中でも木犀は自分の腕を掴む男を強く睨んでいた。今に

も牙をむき、腕に噛み付きそんな雰囲気である。おそらく、勝負を挑んだものの、あつという間に羽交い締めにされたのだろう。

春臣は、唇を噛んだ。

結局、自分は、友人たちを誰一人逃がすことは出来なかったのだ。

「榊君、これ、どうなってんの？」

椿の声だった。

「この人たちは何なん？」

彼女は、戸惑いながら、男に掴まれた手を振りほどこうともがくが、その動きを察知した男は、急に邪魔者を見るような目で彼女を睨んだ。そして、掴んでいる手で、彼女のか細い腕を普通では曲がらない方向へ、無理やりとひねり上げた。

「あ、それ、あかんで！ 止め 痛っ！」

椿の悲鳴が上がる。

「青山！」

その瞬間、春臣の中で怒りが爆ぜた。

「止める！！ 今すぐに青山たちから手を離せ！」

そう命令するが、春臣の言葉を男が聞き入れるはずもない。その男は無表情で、痛がる椿を見ている。

それが、春臣の感情を尖ったナイフのように鋭くさせた。

もはや、形振り構ってはいられない。そう思って、男に飛びかかろうと決意する。

が、そちらに意識を向けてしまっているうちに、自身の背後に先程の若い男が迫っていたのに気がつかなかった。

「あっ!？」

反撃する間もなく、春臣は再び動きを止められる。羽交い締めにされたのだ。

「くそ、離せ！」

両腕を振り回して引き離そうとする。しかし、男にはその攻撃は届かない。

男は涼しい顔をしてヘラヘラとせせら笑っている。不覚をとった春臣が滑稽でたまらないのだろう。

「どうした？ 女の前では格好良い所を見せたかったのか？」

「な、何だと！」

それを見て、今度は、バチバチと火花が散るような衝動を春臣は感じた。

「お前!！」

この男を、今すぐに殴ってやりたい。猛烈に、そう思った。殴って傷めつけてやりたい。

しかし、両腕の自由がない状態では、どうあがいても春臣には勝ち目などなかった。虚しくもがいただけで、すぐに諦め、力を抜く。抵抗するエネルギーが、体から蒸気のように全て抜け出てしまった。

力なんて、ない。自分には。  
そう思うと、喉の奥が切なくてひくひくと動いた。嗚咽がこみ上げてきそうなのが分かった。ただ、情けなかった。

何て、

何て、自分は無力なのだろう。

こんなにすぐ近く、目と鼻の先で苦しんでいる青山がいるというのに、自分は、救えないのだ。反撃すら、できないのだ。そんな自分を呪ってしまいたいほどの気分になる。

それを見て、老人が愉快そうに笑った。春臣は耳に棘が刺さるようだった。

「それ見る。何だかんだ言っておいて、お前も力を欲しているではないか」

老人は言う。

「その顔を見ればわかる。もっと自分に力があれば殴り倒せる、そう思っているのだろう?」

春臣ははつとして、俯いた。その考えは危険だ。聞いてはいけない。

媛子の手を振り払った自分を思い出す。一人で膝を抱えていた自分を思い浮かべる。

何があっても……そちらに堕ちてはいけないのだ。

「違つ……」

そう、否定する。

しかし、老人は言葉を続けた。

「無理に綺麗事を並べ立てて自らを飾る必要は無いというのに、全く。何が祖父の信念だ。何が正義だ。笑わせる！ もっと本当の自分を感じる、もっと素直になれ。お前は何を望んでいる？」

「こ、これは、違う！」

「何が違うというのか。見苦しいな。小僧、お前も本当は知っているのだ。力さえあれば、他者など自分の思うがまま。ありとあらゆるものが手に入る。そうだろう、わしの同族」

「絶対……絶対、違う。違うはず、なんだ」

否定する声が、恐怖で震えていた。

「ふん、単なるやせ我慢だな。下らないプライドだ。いい加減、青臭い陳腐な夢から目を覚ましたまえ。そして、現実の空気を吸え。世の中の泥に浸かれ。そうすれば、我々が求めるべきものが何か、自ずと分かるはずだ」

俯いた春臣に、老人は投げつけるように台詞を吐くと、数歩椿たちの方へ歩み寄った。ごほん、と大げさに咳をし、パンパンと手を叩く。

「さて、役者が揃ったところで、全ての事情が分かっている榊春臣、お前に、改めて聞きましょう……赤髪の少女はどこだ？」

俯いていても、春臣には分かった。老人はあの濁った目で、自分を見ているのだ。肌がひりひりと痺れるような気がする。

「知りません！」



無理やり、もがきながら叫ぶ。

「知りませんし、知っていたとしても、教えません！」

老人はもはや諦めたのか、それ以上、春臣を問い詰めようとはしなかった。ただ、ため息を吐く音だけが聞こえた。

「そうか、それは残念だ」

そして、こう言う。

「ならば早速だが、別の手段で訊くでしょう」

この発言に、春臣は顔を上げた。

見れば、いつの間にか、片腕を掴まれた、さつきの目の前に老人が立っていた。不吉な老人の影が、さつきの体を覆っている。場の空気に戦慄が走った。

何をするつもりなのか。

男に捕まっているさつきの目に、怯えの色が映った。

「よし、ではまずはその巫女の女からだな」

そう言って、彼女の顎を掴む。乱暴に引っ張って引き寄せる。

「瀬戸さん！」

「さ、さつきちゃんに、何をするって言うんや!？」

しかし、周囲の言葉などまるつきり無視したまま、老人は彼女に話しかける。

「久方ぶりだな、瀬戸さつき。まさかこんな形で再会しようとは思わなんだ。どうだね、千両神社の様子は変わりないかね？」

「……」

「返事をせんか」

顎を掴んだまま、老人は苛立つて彼女の頭を揺すぶった。

「人に質問をされれば答えるのが礼儀であり、道理であろう。礼節を重んじているはずの瀬戸家では、そんな事も教わらなかったのか？ さつき君。君は、ここに住んでいる『赤髪の少女』を知っているな？」

その瞬間、さつきの口元がさつと強張った。視線を老人から逸らす。どうやら、彼女はこの状況が何を示すのか、理解したらしい。目をぎゅっと閉じ、何も反応を示さない。

すると、老人はふん、と面白くなさそうに鼻を動かした。

「ふむ、黙すか。ならば仕方ない。わしとしては心苦しいが、躰のなっていない子供には、仕置き必要だ」

そして、隣で木屋を掴んでいた男を見ると、

「お前、その女を殴れ」

そう、なんでもないことのように、命令した。

その言葉に、春臣の顔は凍りついた。

殴る？ そんな馬鹿な。そう思った。

こんな自由を奪われた無抵抗な少女を、ためらいもなく殴るとい

うのか？

普通じゃない、いくら何でもやり過ぎだ。怒りで目の前が見えなくなりそうになる。

だが、そこで冷静になるために春臣は、一度息を吸った。動揺してはいけない。

すると、ある考えが頭に浮かんだ。

違う、これは……。

これは、単なるハツタリに違いない。全ては、春臣に媛子の本当の居場所を吐かせるための演技なのだ。きっと老人は、春臣が友人たちを助けるためなら、媛子の居場所を話すとそう考えているのである。

そう思った春臣は、ちらりと老人の様子を横目で窺った。

と、その瞬間、こちらを見ている老人と目が合った。いやらしくつりあがったその目は、春臣が今にも全てを白状をするのではないかと待ち構えているように見えた。

やはりか。春臣はそこから確信した。老人は、こちらの我慢が限界にくるのを今か今かと待っているのだ。

そうになると、こんなものに屈するわけにはいかない。春臣は口を真一文字に結ぶ。絶対に口を割ってはいけない。

しかし……。

しかし、そんな春臣の目の前で、老人から命令された男は、木犀の拘束を解くと、そのままさつきに近づいた。そして、何の躊躇いもなく、彼女の前で、ゆっくりと拳を頭の上まで振り上げる。力を込めて盛り上がった筋肉が、服の上からでも分かる気がした。

これは、この動作は、どうみても、単なる演技とは思えない。

嘘だ、嘘だろ。その光景に、目を疑う。この男は、本気で、彼女を殴るつもりだ。

脳内に危険信号が灯り、春臣は咄嗟に叫ぶ。

「止めるおー！」

しかし、その時には既に、

男の拳は、

さつきの頬へ向けて振り下ろされて　。

間に合わない。そう思った春臣は、恐怖で咄嗟に目を瞑る。

さつきは、殴られてしまったのだろうか。

だが……周囲はなぜか、無音のままだった。時が止まったのかと思っほどの沈黙に満ちている。

無音、無音、まだ無音。

さすがに、おかしい。

そう思ったとき、いきなり、さつと風が春臣の頬を撫ぜた。反射的に目を、開ける。

瀬戸さんは……？

まだ、その場に立っていた。

殴られて……いない。どうして？

どうやら、本人も何が起こったのか分かっていないようで、目を開け閉めして、気が抜けた顔をしていた。いったい、何があったのか。

と、そこで春臣はある異変に気がついた。

さつきを殴ろうとしていた男が、その場から忽然と、姿を消して

いたのだ。

そんなはずはない。たった今までそこに立っていたのだから。いったい、どこに消えたというのだろう。

しかし、男の居場所はすぐに分かった。

「う、うう……」

小さな低い呻き声が聞こえたのである。それも、春臣たちの足元から。

この事実が気がつき、すぐに視線を向けると、男は無様な格好で床に突っ伏していた。畳が、男の大柄な体で、ぐっとめり込んでいく。どうやら、さつき感じた風はこの男が倒れた時のものだったらしい。そして、その背中には、何者かの見事なかと落としが決まっていた。

「暮野！」

春臣は彼の名を呼んだ。

彼は至って冷静な面持ちで、足を戻すと、ふんと鼻息を飛ばした。ごきりごきり、と威嚇するように指を鳴らす。

「言っておくが、こいつは正当防衛だぜ。この場の全員が証人だ」「何だ、お前！」

春臣を捕まえている若い男の怒声が飛んだ。予想外の事態に動揺しているのが分かる。

しかし、木犀は静かな表情を崩していない。

「喧嘩には昔から慣れてるんだよな。双子の弟と毎日ゲームの取り合いしてたんだ。それなりに動きには自信があるぜ」

「このガキ！」

「ガキい？ ああ、そうかもな、俺はアホでとんまなガキだ。でもなあ……」

すると、彼は畳を後ろ足で強く蹴った。大きく跳ねて、倒れていた邪魔な男を飛び越す。

そして、着地すると、樁たちを捕らえている男を翻弄するように左右に素早い動きを見せつつ、一瞬の隙を狙って、小さく屈んでその男の懐に飛び込んだ。目にも留まらぬ、あつという間の接近だった。

それを見た男が僅かに顔を歪め、驚愕したのが春臣から分かる。身の危険を咄嗟に察知したのだろう。しかし、今更間合いを詰めた木犀から逃れられるはずもない。

次の瞬間には、たじろいだ男の無防備なみぞおちに、木犀の拳がねじ込まれていた。勝負は、ものの数秒で決まった。

「ぐっ……」

男の肺から圧縮された空気が吐き出されていた。メリメリと拳が沈み込む生々しい音が、春臣には聞こえる気がした。

「大の大人のくせして、無抵抗な女に手え出す腑抜けどもなんて、こんな俺の十億倍はガキだな！！」

そう、木犀が吠えた。

形勢は逆転した。

春臣は目の前の状況を見て、そう思った。

数秒前まで、場に圧迫するような空気を与えていた二人の大男が、今や畳の上に倒れ伏し、烈火の如く怒りを燃やした木犀が、その傍に立って老人たちを睥睨している。

この誰もが予想しなかった事態に、老人はただただ啞然とし、春臣の背後の若い男も、言葉を失っているようだった。

そこには、場を乱した木犀に対して、何らかの対抗手段に出る様子は感じられない。

当然だ。彼らは、この瞬間、春臣たちを抑えつける役割を担った、重要な武器を失っていたのである。

そして、それは同時に、この場における主導権も無くしてしまっただことを意味する。春臣は、この状況を驚きつつも、即座にこう分析していた。

一度動きを止めたはずのサイコロは、突然の風によって再びその目を転じたのである。そして、それは、願ってもいない逆転の目。

あまり時間をかけてはならない！

次の瞬間、春臣が咄嗟に思ったのは、それだった。老人たちは、今、動揺している。この硬直の時間を利用して、今自分にできることは何だ。

答えは明白だった。春臣は体勢を僅かに落とすと、くるりと回転しながら、背後の男の腕から逃れた。

「あ、お前！」

男は春臣の動きに気が付き、すぐに手を伸ばそうとするが、しかし、時既に遅しだ。その時には、春臣は男の腕の届く範囲から、とうに脱出していた。

そして、棒立ちになっっている椿とさつきを庇うように立つと、隣の木犀を見た。

彼は肩を上下させて荒い呼吸をしていた。一見、鮮やかで非の打ち所のない素早い動きをしていたように見えて、かなり体力を使っていたようだった。考えてみれば、普段から彼がこんな大男を相手に戦っているはずもないわけで、それは当然の結果なのかもしれない。

「暮野、大丈夫か？」

春臣が気遣うと、彼は、苦しそうな呼吸を整えつつ、頷く。

「ああ、何とかな。だが、あんまり慣れないことはするもんじゃない。すっかり、心臓がびびっちゃまってるんだ」

春臣はちらりと木犀の足に目をやった。小刻みに震えているのが分かる。どうやら、精神的にも、かなり消耗しているらしい。

と、春臣の目が、すぐ傍で倒れている男を捉えた。先ほど、あんなに思い切り木犀に殴られたというのに、もう男は意識を取り戻したようで、目を開け、ゆっくりと起き上がろうとしていた。

その、体つきの良さから察するに、普段から体を鍛えているのだろう。木犀の力などでは完全に気を失わせることはできなかったのだ。



春臣は、逡巡する。

これから、どうすればいい。

このまま男達が、再び、戦意を復活させれば、もはや、春臣たちが立ち向かったところで、まともに敵う相手ではない。

そうなると、必然的に、選ぶべき選択肢は一つだ。

逃げろ、

この場から、

今すぐに。

「貴様ら！！！」

怒りが頂点に達した、老人のドスの利いた声である。

「わしらから逃げられると思うか？」

しかし、そんなものを聞いている暇はない。

「今のうちだ。みんな走るぞ！」

そう叫びながら、立ち尽くしてた椿の背中を押した。ぼうつとしていたさつきも、春臣に従って、居間の入り口から廊下に出る。

しかし、

しかし、この期に及んで、木犀だけが動かない。

春臣の背後でまだ立ったまままだ。

いったいどうしたのか。恐怖で身動きが取れないのかとも思うが、彼の横顔は闘志を失っていない。依然として、凜とした覇気と共に、周囲に睨みを効かせている。

では、これはどうしたことか。

「暮野！」

早く逃げるぞ。そう春臣は必死にそう伝えようとした。しかし、彼はその言葉を聞く前に、真剣な面持ちで首を振る。

「俺はここにいる！」

耳を疑った。

「な、何言ってるんだよ！」

一緒に逃げなければ、何をされるのか分かったものではない。だが、

「お前たちはさっさと行け。俺はここで時間を稼ぐ」

「ふざけるな、正気か！？ ヒーローみたいに格好つけてる場合じゃないんだよ！」

四対一だ。到底敵うわけがない。先ほどの玄関先の春臣と同じ状況である。

あの時、春臣はこの老人たちに対して、手も足も出なかったのだ。いくら、喧嘩に自信がある彼と言えども、勝利は絶望的である。

「いいから、行け。緋桐様を見つけるのが、最優先事項だろう。こいつらのことは後から何とでもなる。決着のつけようがある。だが、ここでまたこいつらに捕まってみる。緋桐様を探すチャンスはなくなる。そうなれば、もう二度と緋桐様は戻ってこないかもしれないぞ。手遅れになる前に、見つけ出せ。そのために俺はここで闘になる」

「暮野さん！」

それは悲痛なさつきの叫びだった。廊下から聞こえた。木犀はそれに気がつくが、振り向かずには答える。

「大丈夫だ、さつきちゃん」

その声は不思議な自信に満ち溢れていた。

「俺はこいつら全員を一発ぶん殴らなきゃ、腹の虫が収まらないんだよ。こいつらは、さつきちゃんを殴ろうとしたんだ。そのイカれた考え、間違ってるって思い知らせなくちゃな」

そう言い切った時、春臣は木犀の決意を読み取った。これは、何も言っても曲がらない、そんな強靱な決意だ。

「でも」

食い下がろうとする、さつきの肩を無理やり、引っ張った。

「もう、行くぞー！」

迷っている、時間はないのだ！

背中、あの男達がのっそりと立ち上がる気配を感じる。木犀は、いったい彼らに対して、今どんな表情で立ち向かっているのだろうか。そんなこと、分かるはずもない。

春臣は息を止めて、走りだした。

「さ、榊くん！」

「青山、瀬戸さん、走れ、走るんだ！」

自分たちのやるべきことは、もう決まっているのだ。

家の外に飛び出すと、春臣は肌を突き刺すような暑く眩い太陽の光に照らされた。

暗い室内から出てきたため、本能的に、目を瞑ってしまふ。視界が真っ白に染まった。

すると、それと同時に、長い年月を経て、ようやく外の光を感じることが出来たような、なんとも不思議な錯覚を、春臣は覚えた。それがどれほど長い年月なのかは定かではないが、少なくとも、自分がこれまで、深い洞窟の奥にいて、外界との行き来を断絶し、ひたすら土の中で亡霊のように徘徊しながら生活していたような、漠然とした感覚があった。

その間、春臣は上に行ったり、下に行ったり、迷路のような洞窟内で様々な試行錯誤をしていたのだが、今、ようやく外の光を感じ、そちらに向かっているようなのである。

春臣は空を見上げていた。

どこまでも高い高い空には、地上を見下ろす、燦然たる太陽があった。世界は闇の一角ではなく、様々な色が散りばめられ、目の前に広がっている。

その下では誰もが自分を隠せない。世界は遍く光に満たされており、春臣の体の内側にも、それは届いてくるようだった。

春臣は何か言葉には言い表せないしがらみから解き放たれた気持ちにもなる。それは、とても不安定でありながら、飛び回る鳥のようにならぬやかであり、春臣に確かな自信を与えるものだった。

そうして。

何かにほっとしたのも、つかの間。

すぐに春臣は、目の前の目的を思い出す。

まずは、この場から離れなくてはならない。春臣は背後を振り返ると、椿を見た。どうしたらいいのか、不安げな表情を浮かべる彼女の手をとると、今度はさつきに目を向けた。

「とりあえず、ここから逃げよう！」

それだけ告げて、走りだす。

真夏の風が吹き抜ける田舎の道は、人っ子ひとりいない。まるで春臣たちのいる場所だけが世界から隔離されたような印象を受ける。おそらく、先ほどからの緊迫した状況がそんな異質な感覚を与えるのだろう。

自分たちの味方はどこだ、春臣はそう思いながら走る。砂利が飛び、汗がシャツに滲んだ。

背後を振り返る。十分距離はとったものの、自宅はまだ見えていた。

しかし、依然として、追っ手が近づいてくる気配はない。

とりあえずは安心だった。

春臣は身を隠すために二人を近くの繁みに連れて行き、腰を落とすと、呼吸を整える。

さて、これからどうするか。

すると、隣で同じく荒い呼吸をしていた椿が話しかけてきた。

「榊君、何が起こったんか知らんけど、ここは、早う警察を呼ばなあかんのちゃうん？」

彼女の考えは最もだった。

もちろん、それは春臣も第一に考えていたことではある。しかし、それをためらう理由が、春臣にはあった。

「それは……おそらく無意味だと思う」  
と椿に告げる。

「え？ どないして？」

「それは、だな」

説明しようとしたとき、

「青山さん、警察は、おそらく杉下さんの味方をする確率が高いからです」

そう言ったのは、さつきだった。春臣は驚いて振り返る。

「瀬戸さんも、知ってるの？」

それはもちろん、この町の裏の勢力事情である。彼女はこくんとあごを下げ、頷いた。

「ええ、昔から町に住んでいますから。杉下さんの力がどこまで及んでいるかはよく承知しています」

なるほど、と春臣は納得する。

彼女は春臣よりずっと以前から、この町に住まう者なのだ。その事実を知っていたとしても不思議ではない。

「なあ、どついついことなん？」

いまいち事情を飲み込めていない椿が首をかしげている。

「つまりだ、今の状況じゃ、警察はあてにならないってこと。相手が杉下さんと知れば、呼んだところで話を聞いてもらえないかもしれないし、最悪、そちらの味方になる可能性すらあるんだ」

春臣は起こりうる状況だけを、簡潔に説明した。

「よう分からんけど、助けは呼べへんってこと？」

「ああ」

すると、椿は、彼女らしくもなく、絶望しているような表情になり、深い溜息をついた。

急に表情が見えなくなったので、春臣は不安になった。もしかすると、彼女が泣いているのではないかと思ったのだ。先ほどはあの屈強な男たちから乱暴されたようだったし、彼女もショックだったことには違いない。

そう思うと、春臣の中での者たちへの怒りが再燃するとともに、彼女への申し訳ない気持ちが起こった。

自分の力が足りなかったばかりに、彼女には怖い思いをさせてしまったのだ。

「青山、腕は、大丈夫か？」

そつと、彼女に手を伸ばす。しかし、彼女はその言葉に答えることとはなく、呆然とした様子のまま春臣を見上げた。

「なあ、榊君」

「何だ？」

「そもそもあの人達、いったい何なん？ あの人達、媛子ちゃんのことを探してるんやろ。どうして、どうしてこんな乱暴なことをしてまで」



「……あいつらは、媛子の神様の力を利用して、自分たちの利益のために使うつもりなんだよ」

その返答に、椿は全く意味が分からないという風に、きよとんと目を見開いた。

「な、なんやて?」

「やはり、そうですか」

隣で、さつきが得心がいったように頷いた。その様子は、先ほどの状況から、それなりの予想をつけていたようだった。

「そ、そんなこと……ダメや。そうなったら、媛子ちゃんは、どうなんの?」

「わからない……けど。一つだけ分かる。あいつらに媛子が捕まったら、何をされるにせよ。もう一生、あいつは戻ってこないってことだ」

「い、イヤや、うち。そんなん、あかん」

すると、椿の瞳に、見る見る涙が溜まった。媛子が居なくなってしまうことを想像したのだろう。いつものほほんとしている彼女だけに、きつとそんな未来は受け入れる以前に信じられないのだ。

くたん、と力が抜けてしまった彼女の体を春臣は肩を持って支えた。

「大丈夫だ。そんなこと俺がさせねえ。媛子は必ず見つけるし、あのじいさんの好きにはさせない」

「ほんま? ほんまに? なあ、榊くん」

恐れている彼女を勇気づけるように、春臣は何度も頷く。

「ああ、約束する。だから、とにかく、今は一刻も早く、媛子を見つけ出さなくちゃいけない。あいつらに捕まる前に」

そう言い切った時だった。ふいに、背後でさつきがごそりと動く気配があった。

「そうですね。榊さんの言うとおりです。ともかく、私たちにできることは、杉下さんたちの行動をなるべく抑えることと、夜叉媛さんを早急に探し、安全を確保すること」

言いながら、彼女は土を払ってなぜか立ち上がる。その表情は凜然とした決意に満ちていて、それが何を意味するのか、一瞬、春臣には分からなかった。

すると、彼女は、

「ですから、二手に、分かれましょう」

そう唐突に申し出た。

「え？」

春臣が止める間もなく、さつきは繁みから飛び出す。

「私は、やっぱり、木犀さんの所に戻ります」

「瀬戸、さん？」

春臣は急に頭を揺すぶられたかのような衝撃を感じた。いったい、何を言っているんだ？

ようやくチャンスを見つけて逃げてきたというのに。

「私、暮野さんを放っておけません」

「助けに、行ってくること？」

「はい。どこまでできるか分かりませんが、私たちであの人たちを牽制してみます。ですから、夜叉媛さんのことは、榊さんたちにお任せします。早く、見つけてあげてください」

「な、何言ってるんだよ、戻ると危険だぞ！」

春臣は立ち上がり、叫ぶ。先ほどだって、自分たちは手も足も出なかったのだ。結果は目に見えている。しかし、彼女の態度は相変わらず、毅然としていた。

「そんなこと、分かっています。でも、だからこそ、暮野さんを一人には出来ません」

「さつき、ちゃん？」

「青山さん、止めないでください。私は、『強くなるために』行きます。今度こそ、相手を間違わないように」

そう言い放った彼女の姿が、数ヶ月前の彼女を春臣の中に思い出させた。モノクロの彼女の影が、ぴったりと現在の彼女に重なった。それは、迷いのない意思に光る瞳をして、媛子を滅しようとして、春臣に扇を突きつけてきた彼女である。

そうか、今の彼女は春臣が何を言ったところで、もはや止められないのだろうか。

しかし、そこで春臣はあることに、気がついた。

今の彼女は、あの時と、何かが決定的に違っているように感じたのである。

それは、いつたい。

「幸運を祈ってます。どうか、夜叉媛さんを見つけて出してください。」

お願いします！」

しかし、それを確かめる間もなく、さつきは走り出して行った。

138 脱出 2 (後書き)

どうも、ヒロユキです。

今回もちよつと短めですいません。実は最近、新しい作品を同時進行で執筆しておりますで、そのために、こちらの作品を集中して書けない状態が続いています。この作品は現在、5日間隔ほどで投稿しておりますが、今後、上記の理由から、そのペースが大きく乱れることも起こりえますので、その点は、ご了承ください。さらに、先ほど述べました新しい作品に関しては、2月の下旬頃から連載する予定です。もしよろしければ、読んでやってください。以上、作者の言葉でした。

私が、行かなくては。

たった今走り抜けてきた道を戻りつつ、さつきはそう決意していた。

そう、今度は、

今度こそは、間違っわけにはいかないのだ。

耳元を掠めていく、風の音を聞いた。ヒョンヒョンと自分と戯れるように鳴る風は、さつきの心から、今にも暴走してしまいそうな興奮の熱を奪ってくれる。

『千両神社の巫女たる者、常に冷静に、感情を乱さぬよう、心がけなくてはならない』

昔、そう口酸っぱく繰り返していた千両神を思い出す。

人間が持っている感情というのは、常に脆く、何かの力がかけば、右にも左にも簡単に傾いてしまうものだ。千両神はそれをよく知っていた。

その感情の柔軟性は、時に、状況に対してプラスに働くこともあるが、逆に、自らを逃げ場のない絶壁に追い込むこともある。故に、その扱いには慎重を期す必要があるのだ。

しかし、さつきは以前、その言葉を軽んじ、大きな過ちを犯してしまった。

そつと、さつきは胸元に手を伸ばした。そこに常に忍ばせてある、大切な、アレを掴む。

千両神から預っている、代々神社に伝わる、神の扇だった。

それは以前から何度も手に触れているものであり、すっかり、さ

つきの手に馴染んでいる。それはさつきにとって、心に安らぎを与えてくれるものだ。だが、それと同時に、苦い記憶を閉じ込めたものでもあった。

そう、その記憶こそが、自分の過ちの記憶だ。

ほんの、つい数カ月前のことである。

あの時は、浅はかな自分の感情の動揺と、焦りによって、関係のない者たちを傷つけようとしてしまったのだった。

もしも、

もしも、あの時。

さつきが榊少年に怪我を負わせていたら、どうなっていたのだろうと思うと、ゾッとする。

判断を誤った自分は、今でも千両神社にいるのかさえ分からない。それほど過ちだった。自分は、その罪を償う必要がある。

榊さんたちは、とても寛容で、何事もなかったように接してくれているけれど……。

しかし、さつきの中でそれは、今でも決着のついていない問題なのだ。

あの時の自身を思い出す。さつきは、自分の中に敵を作っていたのだ、と思う。

自分勝手な思い込みで、誰もいるはずのない、暗闇を睨み、それを憎み、千両様の役に立ちたいという一心で、後さき考えずに行動してしまっただのだ。

甘かった。本当に。

自分は、まだ他者を傷つけることの、その事実の重みを知らなかった。

もう、失敗は許されない。千両神からは厳重な注意で済まされたものの、これ以上のことは駄目だ。

だからこそ、私は。さつきは思う。

今、はつきりと意識する。

敵はどこにいるのか。

なにより、守るべき存在は誰なのか。

そして、そのために、自分は何が出来るのか。

家の玄関が近づいていた。ピリピリとした緊張が手のひらを伝わり、指先をしびれさせている。ここで、引き返すわけにはいかない。さつきは一層、意識を集中させると、閉じられていた玄関の扉を開けた。

すると、いきなり乱闘騒ぎが目の前に飛び込んできた。

狭い廊下では男と木犀の取っ組み合いが行われていたのだ。手や足がぶつかりあう音がして、何が何だか分からない。

しかし、さつきには、自分に背を向けて戦っている木犀だけがはっきりと見えた。彼は殴られたのか、右頬を腫らしている。どう見ても一方的な防戦だ。敵うはずがない。

それを見た途端。

暮野さん！

熱い何かが、さつきの喉元にせり上がってきた。彼が自身に見せてくれたあの笑顔を思い出した。

そう、この人は私に、何か大切な想いを抱かせてくれたのよ。

だから、だから、守らなくちゃ。

「暮野さん、伏せて!!」

その叫びに、背後で様子を見ていた老人と隆二がさつと顔色を変えた。

さつきの様子を見て、ただならぬ気配を感じたのだろう。物陰に隠れようと身構えたのが確認できた。



さつきは、勢いを止めない。一瞬で力を体中にみなぎらせて、集中力を最大限にまで高める。

トクントクン……。

心拍数が一気に跳ね上がったのが分かった。仕方ない。これほどまで急激に力を同調させるのは初めての経験なのだ。普段ならもつと段階を踏んで精神集中を行わなければならないが、今は四の五の言っている暇はない。一気に片を付ける。ぐつと踏み出した右足に力を込めた。

大いに哮<sup>たけ</sup>よ、神の風！

木犀が、さつと、腰を落とすのを見て、後は一閃、扇子を振り抜いた。

轟音と共に、大地が震えた気がした。

先ほどいた繁みから、ずいぶん離れた川沿いの平坦な道に春臣たちはいた。

そこは周りにあまり障害物がないために見晴らしがよく、美しい川のせせらぎを聞きながら、町の遠くまで見渡せる場所である。

弾ませた呼吸を整えつつ、春臣は周囲に視線を走らせる。ここならば、媛子がどこに消えたのか、ある程度目星をつけることも出来るだろう。

「青山、媛子がどこに行ったのか、分かるか？」

春臣は自分の背後を、少し遅れてついてくる椿に聞いた。

それに気づいて少し顔を上げた彼女は、声を出そうとして、軽く咳き込んだ。

「おい、大丈夫か？」

春臣はすぐに近寄って彼女の肩を押さえた。おそらく、彼女はすでにかなり体力を消耗しているのだろう。無理もない、彼女は普段から運動をするタイプではなさそうだし、加えてこの炎天下がその疲労に拍車を掛けているに違いなかった。

彼女は「平気や」と一言だけ喋って呼吸を落ち着けると、ようやく、

「媛子ちゃんと外歩いたんは、ほとんど無いし、残念やけど、検討もつかんで」

と言った。

それもそうか。

「じゃあ、町の中心地へ行ったとか？」

春臣は思い出してそう訊ねた。確か少し前、媛子は椿たちと共に買い物に出かけたはずではある。

しかし、椿はすぐに首を振った。

「それはちょっと難しいと思うで、榊くん」

「え？」

「遠くに行くつもりなら、そっちにはバスやら電車やら乗り物もあるけど、全部お金が必要や。いきなり飛び出していった無一文の媛子ちゃんには乗られへんし、それに、媛子ちゃんはただでさえあの髪の毛で目立つしなあ。探しに来たうちらに見つかってしまいう可能性考えたら、普通は人目の多い町の中心地やのうて、逆に人がおらんところに行くはずや」

「う、確かに正論だな」

珍しく彼女の的を射た発言に少々驚きながらも、春臣はふうむ、と唸った。そうなると、彼女の移動範囲はかなり狭められてくるに違いない。

交通機関を使用できないとすれば、移動は当然ながら、徒歩。

夜に飛び出してから、かなり時間が経過しているとはいえ、椿の言葉を含めて考えると、

金も持っていない彼女が闇雲に自分の知らない場所に行くとも考えられない。それはかなり危険なことだし、そもそも、遠くに行こうにも、この柵町以外に、この世界で彼女の行くあてなどないのだ。

「考えられるとすれば、やっぱりこの近辺か。おそらく、移動はせずどこかに身を隠しているかもしれないな」

そうだ、そうに違いない。おそらく、それは、それで合っているのだろう。

春臣は自分で言っただけで頷く。

彼女はまだ、昨日のことをすっきり忘れていないわけがないんだし。昨日の媛子の悲しげな表情が、フラッシュバックするように目の前をよぎった。

じゃあ、そうになると、どう、なるんだ？

と、そこでなぜか春臣の思考が停止した。何だかエンジンのかわらない古い車になってしまったような気分だった。

あれ、と思う。カスン、カスン、と脳内で何かが空転する音がする。

走ったことで疲れているのか、知らないうちに焦っているのか、春臣は少しも意識を集中できなくなっていた。

媛子が行きそうな場所、

身を隠せそうな場所、

どこだ、どこだ、どこだ。

しかし、考えは同じところをぐるぐると回るばかり。これでは、堂々巡りだ。

まるで、雨の日の水たまりのように、跳ね返る水滴で水面が常に落ち着きがなく揺れているようだった。

その時、春臣の中では、昨日からの苦しい記憶が怒涛の勢いで蘇ってきていた。自身が媛子を傷つけた瞬間が、生々しいほど目の前に映し出されていた。彼女の手を振り払った感覚が蘇ってくる。

一刻も早く動かなければならないのに。進まなければならぬのに。

その映像が止まらない。  
椿の後ろを見やった。遠く、自分がやってきた方向を見る。

「暮野、瀬戸さん……」

なぜかふいに、口から言葉が出ていた。

「え？」

驚いた椿が春臣を見ている。

「ふたりとも、無事かな？」

「榊、君？」

「こんな、こんなとんでもないことになっちまうなんて、俺は、考えもしなかった……」

声が震えていた。いまさらながら、春臣は事の重大性に体を打ち震わせていた。

つい先程までは興奮していて、激高していて、杉下老人に、打ち勝つため、何だか全てを背負いきれるような気がしていたのだが、今になってみればそんな力など自分にはあるのか、という疑問がわいてきていた。

たとえば、ここで首尾よく媛子を見つけられたとして、その後、皆はどうなってしまうのだろうか。

あの杉下老人から目をつけられたということになれば、全員、ただでは済まされないに違いない。

殺されるとか、追放されるとか、そんな大げさなことを言うつもりはないが、間違いなく、この町での生活はとも風当たりの強いものになるだろう。昔で言う、村八分むらひちぶん。それほどの権力を、あの老人は握っているのだ。

そんな状況など、とても想像も出来ないが……。

ただ、仮にそうだったとして、自分はそれに責任が持てるのか？  
どうなんだ？

春臣には、分からなかった。その問いに答えられる自信がなかった。

大波のような後悔の念が春臣を責め立てた。

もしも、自分と媛子があそこに住んでいなければ、こんなことにはならなかったのに、皆を巻き込まずには済んだのに。

そう思うと、悔しいやら、悲しいやら、いろんな感情が湧いてきた。この場から逃げ出したくもなかった。

そもそも、そもそもだ。

自分がこの町に越してこなければ、  
そうであつたならば、

自分は媛子とも会わず、椿たちとも会うこともなく、普通に平穩な生活を送っていたかもしれないのに。

全部、全部、俺の、おれの、

オレノセイダ。

「くそつっつたれ！！！！」

突如湧いてきた行き場のない怒りに、春臣は自身の拳を自身の膝を打ちつけた。びりびりと痛みが走って、春臣は口を噛み締める。

「榊くん！」

そんな様子を見かねたのか、椿が春臣の腕を揺さぶっていた。春

臣を止めようとしたのだろう。

「あ、青山……」

咄嗟に我に帰り、目の前の悪夢を振り払おうとする。  
大丈夫だ、そう椿に言おうとした。  
しかし、

「怖いん？」

「え？」

「怖いんなら、泣いてもええよ」

そう言った椿はなぜか脳天気には微笑んでいて、春臣に無邪気に両手をさし出してくる。

「お前、何、言ってるんだよ」

「うちが胸貸したげるで？ ほら、遠慮せんと、ぎゅうってしてみ  
？」

「は、はあ？」

「榊くんなら、うち、抱きしめられてもええし」

彼女はそう言うてにこりと笑う。予期せぬ事態に、春臣は気が動  
転し、赤面してしまう。いったい、この少女はどういうつもりなの  
だ。

そりゃ、以前から、天然な奴だとは思っていたが……。  
この状況で、普通そんなことを言い出すか？

「ば、馬鹿。じよ、「冗談はよせよ！」

「うん、「冗談や」

すると、えっへん、と彼女は開き直ったように胸を張った。これでは、ますます彼女の言動の意図するところが分からない。

「お、お前なあ」

春臣が呆れた顔をすると、彼女は罰が悪そうに「えへへ」と笑った。

「でも、少しは気分楽になったやろ？」

「え……？」

椿の表情が急に真剣なものになる。

「うちはな、榊くん。こんなことするくらいしか出来んのだ。落ち込んでる誰かをちょこつと笑わす分だけの力しかないんや」

「……青山」

「でもな、榊くんはな、頭がええし、うちよりもっといろんなことが考えれるねん。せやから、いつも落ち着いてくれないとあかんのや。冷静に媛子ちゃんの場合を探し出してもらわなあかんのや」

その彼女の言葉が春臣の後悔していた気持ちを消し去った。これには、自嘲の笑いを禁じえない。

全く、阿呆だな。

今は迷っている時間はないというのに。媛子を見つけた後のことはそれから考えればいいのだ。

つくづく自分の馬鹿さ加減には嫌気がさす。春臣は椿に頭を下げた。

「あ、ああ。ごめんな、青山」

「そんな謝ってる暇があったら、ぼけつとすとらんと、少しは媛子



ちゃんのおるとこ考えてや」

思わぬ彼女からの叱咤の言葉に戸惑いながらも、

「あ、ああ」

と返事をして、そこで春臣はあることに気がついた。

「そうか、青山、閃いたぞ！」

そう叫んで目を見開いた。

「何や？」

「ほら、あるじゃないか。この辺りで、人があまりいなくて静かな場所が」

春臣は椿の肩を乱暴に揺さぶる。

「ええと？」

「だから、千両神社だよ。確か、この先の森の中にあるんだろ？  
そこなら媛子だってだいたい場所が分かるし、参拝客は少ないから、  
身を隠すには持ってこいだ」

しかし、椿はすぐに反論した。

「で、でも、榊くん。そこに媛子ちゃんは行きたくないんやなかったん？」

この前だって、ずいぶん嫌がってたやん。そう彼女は続けるが、  
春臣の確信は揺るがない。

「確かにそうだけど、他に妥当な場所もないだろうよ。あの神社には神様がいるんだろ？ もしも俺が彼女の立場だったら、他にあてのない世界で、出来るなら仲間の助けは借りたいと思う」

「助けを借りる？」

「そうだよ。きっと助けを借りて、元の世界に……」

言いかけて、はっとした。その事実には、愕然とした。

そうか、どうして気がつかなかったんだ。

こいつは、

こいつは、最初に考えるべき可能性だったじゃないか！

助けを借りて、元の世界に……。

そうだ、彼女は、『神の世界に戻る』つもりなのだ。なにしろ、それが最初から彼女の願いだっただのだから。

自分という繋がり系の糸が切れた今、彼女はもはや、この世界になんら未練などない。その点から考えても、彼女が取るべき行動は、  
一つだ。

「うん？ どうしたん、榊くん？」

「急ぐぞ、青山。早くしないと、手遅れになるかもしれない」

春臣はそう告げると、榊の手を握りしめて、森に向けてその足を踏み出した。

「頼むから、間に合ってくれよ！」

容赦なく降り注ぐ夏の日差しと、頭が音で飽和してしまいそうな騒がしい蝉の鳴き声に、夜叉媛は目を覚ました。

いったいどれくらい眠っていたのか、正確には知ることは出来ないが、いつもより、長い間眠っていたらしい。

見上げた空の太陽は既にかなり高い位置にあった。

無理もない。と夜叉媛は思う。

真夜中に、あんな、とんでもないことがあったのだから。

背中を預けていた木の幹に寄りかかりつつ、立ち上がると、体の節々が痛んだ。どうやら、知らず知らずのうちに無理な体勢で眠っていたようだった。夜叉媛は軽く屈伸運動をして、固まっていた体をほぐす。

すると、今度は何かを催促するように、ぐう、とお腹がなった。

何か食べ物が欲しかったが、生憎ながら、何も持っていなかった。飲み物もなければ、何か食べ物を買うお金もなかった。服のポケットは空っぽである。

当然だ。夜叉媛は夜中、何も持たずに、あの家を飛び出してきたのだから。そうして、一心不乱に走り、行くべき場所が見当たらず、適当に走り抜けた結果、こうして、林の中に身を隠してようやく眠りについたのである。

「はあ……」

夜叉媛はため息をつく。

起きたばかりだと言うのに、体はなんと形容しがたい不快な倦怠感に包まれていた。走った疲れがまだ取れていないという理由もあるのだろうが、それ以前に、夜叉媛には、春臣のことが目に浮か

んだ。彼の顔が浮かぶと、喉の奥がきゅっと絞られるような切ない感じがした。

夜叉媛は、春臣に振り払われた手の甲を見る。そこがうつすら赤く腫れているのが分かった。未だ、じんじんと痛みが伝わってくる。そして、それは紛れもなく、数時間前の出来事が単なる勘違いではないことを示していた。

春臣に、拒絶された。夜叉媛は思いだす。

あの時、春臣に何が起こったのかは正直、夜叉媛には分からなかった。

それまで、自分の気持ちを受け入れてくれたはずの彼が、夜叉媛に口づけた途端、まるで、悪霊でも乗り移ったかのように、態度が豹変し、夜叉媛に対して敵意を向けたことである。そこには、何の脈絡もなく、何の理由もないはずだった。

しかし、

『お前なんか、大嫌いだ』

春臣に、そう言われた。それは夜叉媛の心を深く傷つけるものだった。

だが、夜叉媛は気がついていてた。きつと、嫌いだなんて言ったのは、彼の本心ではないのだろう。あの時の彼の異常な反応をみていれば分かる。

あれは、本当の、春臣ではなかった。

そう、あれは、春臣ではない別の何かが喋っていたのだ。でも、

分かっていたけれど、  
分かっていたのだけれど、

それでも夜叉媛は、飛び出してきた。

それは、なぜか。実はあの瞬間、夜叉媛はこう直感していたので

ある。

これは、自分に対する、『天罰』なのかもしれない、と。自分は、最初から、彼と結ばれるべき運命にはないのかもしれない、と。

あの時、なぜ春臣が夜叉媛に敵意をむき出しにしたのか理由は定かではないが、夜叉媛と春臣の関係があんなにも不自然に、いきなり断絶されたことは、それ自体が、夜叉媛に向けられた世界の意思だったのではないだろうか、という気がしていたのである。

それは、あまりにも大げさな話に聞こえるかもしれないが、夜叉媛にとつては、それもありえると思っていた。

なにしろ、夜叉媛は、最初からそういう存在として生まれてきたのだ。生涯、幸せになることもなく、誰かから愛されることもなく、いてもいなくても同じ、夜叉媛はその程度の存在なのだ。

今までのこちらの世界での生活の楽しさですっかりその事実を忘れていたのだが、あの春臣の、何も映さない冷たい瞳を見た時、夜叉媛は全てを悟ったのだ。

自分は、初めからここにいるべきではなかった、と。

「結局、最後まで春臣には真実を言い出せないままじゃったの」

夜叉媛は、悲しげに目元を細めて、独りごちた。

すると、ざわりと、風が吹いた。夜叉媛の鮮やかな紅の髪が、静かになびいた。

まるで、さあ、歩けと背中を押されているような気がした。

そうだ。いつまでもここで立ち止まっているわけにはいかない。

夜叉媛は溢れていた涙を手の甲で拭くと、顔をまっすぐ前に向けた。自分は、これから成すべきことがあるのだ。

「全てを、元に戻すのじゃ。全て、何も起こらなかったことにする」

あらゆる原因は、あの日、夜叉媛自身が、この世界に迷いこんで

しまったことにある。

あの日、春臣と出会わなければ、あの家で、暮らすことにならなければ、こんなことにはならなかっただろう。

夜叉媛は運命の線路と線路の僅かな隙間にたまたま転がり込んでしまったに過ぎないのだ。

ただそれだけなのに、夜叉媛は勝手に自分の目の前に輝かしい希望があると勘違いして、舞い上がっていた。その拳句、身の丈以上のものを望もうとして、調子にのっていた。

そして、その結果、今、その罰を受けている。そう、当然の結果だ。

それを認識した今。

全ての責任を取らなくてはならない、と夜叉媛は考えていた。運命をあるべき方向に向けるのだ。

彼と、夜叉媛のために、今こそ、道を分かつのだ。

私は、どうあがこうとも、所詮、外れ者なのだから。

林を抜けると、誰もいない静かな石段が見えてきた。鳥居が見えることから考えるに、その先は神社らしかった。

「方向はこつちで間違っていないかっただみたいじゃない」

夜叉媛はそう独り言で確認し、足を向けた。そして、石段の前で立ち止まり、その場に漂う、どこか儼かな凜と張り詰めた空気を吸う。

なんだか、懐かしい匂いがする気がした。最近はずっかり意識することもなかった、過去の記憶を思い出す。自分が神の世界にいたころの記憶である。

綺麗に清掃された、石段をこつこつと登っていった。そうするにつれ、夜叉媛は、肌にしひしと強い力を感じた。

間違いない、この石段の先に、力の強い神がいる。とにかく、そこで話をつけなくては。

そうして、石段を登り切った時だった。

「ほづ……」

頭に響くような何者かの声と共に、いきなり強い風が夜叉媛に吹きつけた。思わず、目をつぶる。

「これはこれは、思わぬ珍客が現れたな」

紛れもない、神の音が、脳内に反響していた。どうやら、声は神社の建物の方から聞こえてくるようだった。声だけだというのに、そのとてつもない存在の力に、夜叉媛は膝が震えたが、恐る恐る話しかける。

「土地神様、でございますか？」

それはいつもの口調とは違う、目上の存在への丁寧な口調だった。

「左様だな。わらわはこの神社の主なるものだ。緋桐乃夜叉媛よ」

「……ご存知でしたか」

「うむ、わらわはよく聞いておるぞ。お主のことをわらわの巫女からのう」

夜叉媛は思い出す。そうか、さつきの奴が、報告したと言ったのう。

「それに、神の世でも、風の噂にお主のことは聞き及んだことがある」

「え？」

「世に珍しき、美しき緋の髪を持つ者と、な」

夜叉媛はそれには絶句した。まさか、自分の程度の者が、土地神にも知られている存在だったとは、思いもしなかったのだ。

「ふふふ、それで緋桐乃夜叉媛、か。なかなか自分でつけたにしては良い名ではないか」

姿は当然見えないものの、夜叉媛は神の視線を強く感じた。

「しかし、今この場では、その名ではないほうがよいか？ せつかくこの場では神の世の者しかおらぬことであるし」

そして、急に土地神は薄く笑った後でこう夜叉媛を呼んだ。

「のう、『ホカノ』よ」



## 142 思わぬ来訪者

「いやあ、しっかし、派手にやったなあ」

木犀は、苦笑するというよりも堪らえられずに吹き出すように笑いながらそう言った。

「うん、これはさ、冗談みたいにすごいって」

彼は四方八方にめくれ上がった廊下の板を踏みつけながら、倒れていた物を脇へ素手でどけていく。その度に、辺りは咳き込んでしまいそうな多量の埃が舞い、部屋の中は全体的に白っぽく霞んでいた。ふいに目を向けた壁は物がぶつかった衝撃で多くの傷が入っていたり、大きくへこんでいたり、見るに耐えない状況である。

と、続いて奥の方から、  
バリバリバリ、ズズーン。

何か大きな物が破片を散らばらせながら、倒れる音がした。間違いない。あれは、タンスか食器棚が倒れた音だ。さつきは青ざめた顔で、へたり込んだまま、そう確信した。

「あ、ああ……」

また、やってしまった。

心胆寒からしめる思いとは、まさにこのことであろう。

今回はさすがに、神の力を使う相手を間違える、という根本的で重大なミスこそなかったものの、結果がこの有様では、とても千両神に合わせる顔がない。

なんととっても、この、荒れっぷり。

どうしよう、榊さんの家、壊しちゃった。

さつきは生気のない目で改めて、目の前の惨状を確認する。

それは、どれだけ弁明しようとして試みても、弁明の余地が一片もない、呆れたほどの崩壊度だった。百歩譲っても、これは、花瓶が割れたとか、掛けてあった絵画が破れたとかいうレベルの話ではないだろう。

紛う事なき、大破壊の痕跡である。

まさか、あの扇の一振りでこうなってしまうとは……。

ああ、どうしよう。千両様に怒られる。

『千両神社の巫女たる者、他人に迷惑をかけるな』

神の言葉がさつきを責めるように、頭の中に響いた。

すいません、すいません。さつきは、震えながら目をつぶって謝罪をする。

また、私は掟を守りませんでした。

もう、どうして、こんな狭い場所で力を使おうとしてしまったのだろう。冷静になれば、少なくとも、何かが壊れてしまうことくらい、目に見えていたはずなのに。

さつきが、この場所で力を使ってしまったことは、家の中に台風を出現させてしまったようなものである。運良く、さつきと木犀は入り口付近にいたため、吹き飛ばされることはなかったものの、もしも、状況が違えば、自爆攻撃も甚だしいものだった。

「べ、弁償とか、どう、なるんでしょうか」

見たこともない数字の羅列を脳内に並べ、さつきは震えながら木犀に訊いた。

「弁償？」

すると、彼は一瞬、意味するところが分からなかったのか、思索顔になった後で、

「ハハハ、いいんだよ。あの状況じゃ、こつちがやらなきゃ、向こうにやられてたんだからさ」

そう言っつて、快活に笑った。おろおろするばかりのさつきと違い、彼はこの非日常的な状況を楽しんでいるように見える。

「それよりも、さつきちゃん。助かったぜ」

「へ？」

彼は、さつきの前に、腰を落として顔を覗き込んできた。腫れた頬が痛々しいものの、彼はそんなものは一切気にしていないようだった。それくらいに、興奮している。

「こんなすごいことが出来たんだな。さすがは巫女さんって感じだぜ。俺なんかより、断然強いよ」

まさかこの惨状を目の当たりにして、褒められると思っていなかったさつきは、引きちぎれんばかりに首を左右に振る。

「そ、そんなことないですよ。私は、ただ、必死になってめっちゃくちゃにやっちゃってしまっつて」

「そうか？」

「そう、ですよ。私は、ただ、暮野さんが殴られてるのを見て、とても、慌てちゃって。少しも、すごくなんてなくて。こんな、榊さんの家もぼろぼろにしたりなんか、して……」

「でもさ、俺は、それを差し引いても、やっぱりさつきちゃんは、

「すぐいって思っけどな」

「え？」

「だって、さつきちゃん、戻ってきてくれたじゃないか」

彼はそう言っつて、さつきの肩をぽんと叩く。

「一度安全な場所に逃げたのに、また危険な場所に戻ってくるなんて、それってすごく勇気があることだぜ。ここにいる俺のために、わざわざ」

「わ、わざわざなんかじゃないですよ！」

咄嗟に、さつきはつい大声で否定した。これには、木犀もぎよつとしたように、目を白黒させた。

「ど、どうした？」

「い、いえ」

はつと我に返って、自分の行動が恥ずかしくなり、さつきは萎むように首を引っ込めた。すると、同時に、妙に体の血の巡りがよくなり、頬がどうしようもなくぼかぼかとしてくる。

「わ、私は、私は、暮野さんのことが、心配だったから。その、一人にして、おけなかつたから」

「……そっか」

すると、頷いて聞いていた木犀がさつきの肩を優しくそつと掴んだ。

「え、え？」

「ありがとな。俺、さつきちゃんの顔を見たとき、とつても嬉しか

「つたんだ」

「あ、あ、あ……」

その温かな感謝の言葉に、声にならない何か、喉元をせりあがってきた。

「ひゃああああ！」

思わず絶叫してしまったさつきは、暮野の手を払いのけ、その場から飛び退いた。うれしさと恥ずかしさがごちゃ混ぜになった感情が押し寄せて、目頭が熱くなっていた。

「ひゃ、ひゃああって、そんなに俺、驚くようなこと言った？」

「い、いえ、これは、暮野さんが悪いんじゃないですかね、私が」

さつきは木犀にバレないように、こっそり目元を拭う。  
と、

「あれ？」

木犀が足元に目を向けていた。どうやら、埋れていた何かを発見したようだった。

「ど、どうしたんですか？」

「いや、あんまりのことにすっかり忘れてたけど、気を失ってるな、こいつら」

彼がどけた襖の下には、なんと、先程の二人の男が折り重なるように倒れていた。彼らは大きな怪我はなさそうだが、すっかり気絶

してしまっている。起き上がる気配がまるでないので、放っておいでも問題はなさそうだった。

とりあえず、これで眼前の危機は去ったとみていいだろう。

しかし、そこで、さつきは気になることを思い出した。

「そう言えば、あの、杉下さんはどこに?」

「うん?」

木犀は不審げに辺りを見回す。

「ついさつきはこの場にいたと思うんだが、いないな。それに、あの若い男もいないみたいだ」

「隆二さん、ですね」

さつきがそう付け足すと、木犀は先程の記憶を思い出したのか、不愉快そうに口元を歪めた。

「ああ。そいつそいつ。あのじいさんと並んでいけすかねえ顔した奴さ。どこかに逃げちまったのかな」

うーん。

さつきは頭を捻って考え込んだ。確か、さつきが扇を振る一瞬前、彼らは物陰に身を潜めるような素振りを見せていたはずだ。

もしかして、あの風をどうにか凌いで、家から出て行ってしまったのだろうか。

可能性は、あった。自分は予想外の事態にあたふたとしてしまったし、その隙に逃げようと思えば、いくらでもチャンスはあるだろう。

もしそうならば、榊さんたちを、追っていったのかもしれない。嫌な予感が、さつきの脳裏をかすめる。

すると、突然、  
ピーンポーン。

場違いに間延びした音が家の中に響いた。

「え？ お客さん？」

さつきと木犀が振り向くと、開け放たれた玄関には一人の人物の影があった。あいにく逆光で、その人物はシルエツトでしか捉えられなかったものの、どうやら、かなり長身の人物のようである。

「あれー？」

と、その人物は頭を掻きながら、暢気な声を上げた。

「おっかしいな。ここって、確か榊少年の家だろう？」

榊さんの、知り合い？

さつきは咄嗟に思うが、声だけではそれが誰なのか、判断が出来ない。

そう考えている間にも、その人物は遠慮無く、ずんずんと荒れ果てた家の中へ踏み込んでくる。

「うひゃあ、これはぶったまげたね」

などと、驚きながら、物が散乱している廊下を飛び越えてくる。

と、その時、  
しゃりん、しゃりん。

その人物の足元からだろうか、跳ねる度に、軽やかな鈴の音が響くのに、さつきは気がついた。その人物の下駄の鼻緒に、鈴がつい

ているようだ。

しゃりん、しゃりん。

「すこーし旅してる間に、こつも家の中が様変わりするもんかな？  
なあ、その少女に少年」

「え、ええと……」

急に呼びかけられて、さつきは思わず固まる。

「あれ、もしかして、部屋の模様替え中だった？ お邪魔だったかなあ？」

「あ、あの……」

「でも、それにしたら、板を引っぺがしたり、壁をぼろぼろにしてみたり、ずいぶん乱暴で、派手で、斬新な模様替えだね。ねえ、少女」

そうして、さつきを見ながらにっこり笑うと、彼女は、その長い蒼髪を揺らしてみせた。

「ところで、君は誰かな？」



142 思わぬ来訪者（後書き）

最近は章で話が小分けに出来るようになったのですね。  
少しは目次が見やすくなったかも！。

### 143 蒼の帰還

いったいどこから溢れ出してくるのか、肌を伝う汗は途切れることなく落ちてくる。春臣はそれを、乱暴にシャツで拭いた。強く引っ張ったせいで、シャツの端が少し破れてしまったようだが、そんなことは気にしない。

無言で、前だけを見つめていく。

森の中に入ってからというもの、もう、それなりの距離を走ってきたはずだった。この先にあるという、千両神社の姿はまだ見えなものの、樁の話では、神社までは一本道なので、見つかるのはもはや、時間の問題だろう。

それを信じ、春臣は走っていく。ずんずん、ずんずん、と森の奥まで突き抜けていく。

景色が、引っ張られるように、後ろに吹き飛んでいった。

ふいに、春臣は呼吸をしながら、なんとなく、空を見上げた。すると、錯覚のような、妙な感覚がしてぎよっとする。木々の梢から覗く空が、異様に高い気がしたのである。

太陽が、不思議なほど小さく、遠い。

さらに、春臣の周囲も、蝉やら虫の大合唱で、耳が痛いはずなのに、なぜか、先ほどから空気がそれらを遮断しているように、雑音が気にならない。遠のいている。

まるで、これは……。

そう、異世界に迷い込んでしまったようだ。春臣はそう思う。

漫画や小説の主人公が、ある時偶然に、異次元の狭間に入り込んでしまったような、あの、目に映るもの、聞こえてくる音、漂う匂いなどの、全ての感覚が狂って伝わってくるような心地である。

どうして、そんなことを感じるのだろうか、一瞬考えるが、事実、そうだからかもしれないと、春臣は直感した。何しろ、この先にある神社は、古来から神が御座す特別な場所なのだ。

昔、春臣は、聞いたことがある。神社の鳥居の話だ。

あれは、ただ単に、神社へと繋がる門の役目を果たしているだけではない。この世とは違う、別世界との境界線をも意味するものなのだ。

そう、鳥居の向こうにあるのは、この世における一切の穢れが取り除かれた、清浄で、厳格な侵されざる、神の領域。

春臣たちにとっての、異世界だ。

自分は、今、そこに向かってる。

春臣は走りながら、そう頭の中で念じるように繰り返す。

しかし、その意識の隙間から、止めようのない不安が、一気に春臣の脳内に押し寄せてくる。

媛子は無事だろうか。

果たして、そこにいてくれるのだろうか。

もしかして、もう向こうの世界に戻ってしまって、手遅れなのではないだろうか。

くそつ。

握りしめた拳が、汗で滑った。

媛子……。

勝手に、勝手に、向こうに帰ったりするんじゃないぞ。

俺は、このまま、お前に悲しい思いをさせたまま、向こうの世界に返すわけには、いかないんだ。

と、その時だった。

「や、榊くん！」

背後から椿が呼ぶか細い声がした。

「どうした？」

慌てて勢いを止め、振り返ると、彼女はずいぶん離れた場所に立っていた。膝をついて、肩で大きく息をしている。

「う、うち、もう走れへんよ」

遠目にも、彼女がすでに体力の限界であるのが分かった。ふらふらと足がぐらつき、立っているのも難しそうである。

「あ、青山、ちょっと待ってる。今、そっちに……」

春臣は思わずそう言って、道を引き返そうとした。  
しかし、

「あ、あかんわ」

彼女が首を振って、それを拒否する。

「うちのことはええから、先に神社に行つて」

「青山……」

「榊くん、ここはさつきちゃんが言ったことを思い出すんや」

「え？」

「手分け……手分けするんや。うちは、この辺を、森の中を、重点的に媛子ちゃんを探す。この森の中なら、どこかに媛子ちゃんがいるかもしれない。あんまり動けんうちでも、それくらいは大丈夫や」

なるほど、それも一理ある。どのみち、こんな状態の彼女をこれ

以上、無理に動かすわけにもいかないだろう。

そう思った春臣は彼女の提案を呑むことにした。

「そうだな、それが一番いいかもしれない。俺は先に神社に向かってみる。青山は探しても見つからなければ、後を追ってきてくれ」

春臣はそう言って、

「休んでいいから、無理はするなよ」

と、一言彼女を気遣った。

「うん、うち、頑張る」

「じゃあ、頼んだぞ」

そう後ろ向きに手を振って、椿を背にして走りだした。

「じゃあ、頼んだぞ」

その声を聞きながら、は、繁みの中から、そっと周囲の様子を窺った。

道の向こうに見える少年が、背後の少女に対して、手を振りつつ、離れていく。

やがて、その姿が見えなくなると、は物音を立てないよう慎重に動いた。地面に腰をつけて、ゆっくりと呼吸を整えている少女の背後に回りこむ。

無防備に背中を向けている少女は、こちらに気がついている様子

はない。

どうやら、これは大きなチャンスのようなのだ。

そう思った　　は、タイミングを見計らって、繁みから飛び出した。

その物音に対し、少女が弾かれたように、振り向く。表情が、一気に凍りついたのが分かった。

彼女は咄嗟に立ち上がり、その場から逃げ出そうとした。しかし、それは手遅れだった。

なぜならば、繁みから飛び出してきた人物、杉下隆二によって、すでにその右手首を掴まれていたのである。

「きゃあっ！！！」

「ほづら、捕まえたぞ」

隆二は手を引っ張り、少女をその場で無理やり立たせる。

彼女はパニックに陥っているようで、呆然と固まった表情でこちらを見て、口を半開きにしている。この場に隆二がいるのが、信じられないようだった。

「いいか、静かにしろよ！！！」

隆二は脅すように、怒声を浴びせた。

「そ、そんな、なんでこんな場所に！？　さつきちゃんや暮野君は？」

「さつき？　暮野？」

合点がいかず、逡巡して、

「ああ、あいつらか」

と、隆二は先程の家の中での出来事を思い出す。それと同時に、その怒りで、眉間に深い皺が寄った。

「くそ忌々しい奴らだ、全く。あのガキのしたことも我慢ならんが、あの巫女の女、瀬戸さつき、妙なことをしやがって、全く訳が分からん！」

「どういう、ことなん？」

「ったく、俺は何とかこうして逃げてきたからよかったもの。あの男どもはやられたようだったな」

「ふ、二人は無事なん？」

隆二は、そこで掴んでいる少女の手を乱暴に引き寄せると、その顔を覗き込んで吐き捨てるように言った。

「ああ、残念なことにな」

すると、それを聞いた少女はほっとした表情を見せる。隆二はそれが気に食わず、乱暴に言葉を続けた。

「おい、お前！」

「な、何や？」

「あの、赤い髪をした女のことを知ってるんだろう？ どこにいるのか、俺に教えろ」

「いや、いやや。離して！」

少女はじたばたと暴れだした。

「そうはいくかよ。ようやく捕まえたんだ。今度はもう逃がさない

ぞ  
「う、うちは何も知らん。絶対、何も言わへんで」  
「そうかそうか、全く強情な奴だな。対して抵抗も出来ないくせして」

もつと問い詰めてみるつもりだったが、隆二は詰まらなくなつて、ふつとため息を吐いた。

「まあ、いい。俺の本来の目的はそいつじゃないしな」  
「へ？ それは、どういうこと？」

少女が不思議そうな顔を見せる。

「じいさんは、あの赤髪の女を自分の利益のために使うつもりだよ。うだがな、俺は、そっちよりも、あの榊とかいうガキの方に興味があるんだよ。あのガキ、どうせ何かよからぬことを企んでるだろう。なんとも動きが怪しい。どうにかして、俺たちを落とし入れようとしているんだ」

「そんな、榊くんは何もしてへん！」  
「さて、それはどうか」

薄ら笑みを浮かべて、隆二は言う。

「え？」  
「あいつのじいさんはうちの一派に楯突いてきた野郎なんだぜ。同じ血が流れてるあの男が、同じような馬鹿げたことを考えていないとも分らない。大体、そんな奴がこの町に引っ越して来たただけも怪しいってもんだ」

「そ、そんなん、言いがかりや！」



隆二はそんな彼女の言葉を軽く払うように手をひらひらさせた。

「はいはい。俺は君の意見なんて聞いちゃいないって。ともかくね、君は俺に噛み付くよりも、まず自分のことを考えた方がいい。君はあの男への人質にはちょうどよさそうだしな」

「ひ、人質？」

その言葉に、少女の顔が青ざめる。ドラマやニュースでしか聞かないような、現実味のない単語に、恐怖したのだろう。

それが嗜虐心を刺激し、隆二は彼女を一層怖がらせてやろうと、ニタニタと気味悪く笑ってみせた。

「そうだよ、君を引っ張って行って、あの榊とかいうガキに見せれば、きつとなんでも言う事を聞いてくれるさ。さっき見てて分かったが、あの男は友人たちには殊更弱いようだしな。君さえ手中に収めれば、彼は実に扱い易い、従順なただの木偶の坊になる。そうなれば、あとは煮るなり焼くなり、だ。企んでること全て吐き出させてやる」

「いやや、そんなことはさせへん！」

すると、どうしてもそれだけは防がなければならないと感じたのか、必死の形相になったその少女は、わめきながら、再び手足を振り回してきた。それが彼女の精一杯の抵抗のつもりなのだろう。しかし、それは隆二の体に何度も当たったものの、そもそも力が弱いせいか、彼女が疲労しているせいか、痛みは微々たるものだった。

隆二はそんな少女をあざ笑う。

「ハハハッ、馬鹿だな。そんなの攻撃の内に入ってないよ」

全く、弱者は弱者らしく、大人しく頭を垂れていればいいものを。

そう思って、彼女の手を掴んでいるのと逆の手を振りあげて、

「あのね、もっと思い切りやってくれないと痛くも痒くもないんだ  
よ」

少女の頬を目がけて、手を振り下ろそうとした時だった。

「思い切りというのは、これくらいか？」

姿の見えない何者かの声と共に、肌にぶつかってくるような猛烈な殺気を感じ、隆二は咄嗟に、少女の手を離してその場から飛び退いた。

すると、そこに寸毫すんごうの差で何者かの大きな影が上空から落ちてくる。

ズズン。

と重量感のある着地をしたその影は、少女を庇うように立ち、隆二と向かい合った。

「ちょっと、外しちゃったみたいだね」

しゃりん　綺麗な鈴の音が鳴った。

「失敗、失敗」

そして、そこで隆二の目に入ったのは、着地の衝撃で舞い上がるその人物の、長髪の色。

それは、爽快な夏の空を思わず、鮮やかな、蒼だった。

蒼、色、だと？

その刹那、隆二の脳内を、様々な情報が駆け巡る。

まさか、まさか、まさか……。

「そ、そんな……」

少女の、気の抜けたような声が聞こえる。

そして、隆二は、その人物の全体の容姿をじっくり確認し、驚きで、奥歯をぎりりと噛み締めた。

「ああ、やはりお前なのか？ 蒼髪の」

すると、その女は、じりじりとした真夏の昼だというのに、これ以上ないほど涼やかな笑みを湛えながら、隆二の言葉を受けて、こう言った。

「うん、そうだよ、お待ちかねの皆さん。私がスカッと爽やか、キラリと光る蒼き閃光でおなじみ、お守り商人時雨川ゆずりでござい。乙女のピンチに、ただ今、参上!!!」

### 143 蒼の帰還（後書き）

どうも、ヒロユキです。

最近、物語がいつになっただら終わるのか、書いている自分にさえ本気で分からなくなってきたことに恐怖しています。

着実にゴールに近付いているはずなんですが、どこまでも終わりが見えない。書けば書くほど、書くべき事柄が増えていく、謎の現象なのです。人呼んで、伸びるラーメン現象、とか言ってみる……（  
。ハッ！そんなこと言ったら、なんだかその現象に陥った自分の小説がまずいみたいじゃないか。何言ってるんだよ、俺。

下らないこと言っていないで、続き、書きますね。

#### 144 激突（前書き）

どうも、ヒロユキでございます。11日の地震、大変驚きました。私が住んでいる地域は被災地からは遠い場所でしたので、目立った被害はありませんでしたが、テレビやネットを通して災害のすさまじさを知るに、こんなことが日本で起きていることが信じられない気持ちです。一刻でも早いうちに被災された方々が安心できる日常を取り戻し、復興が進むことを祈っております。

「さて、こいつはどういうことかな」

それは穏やかな口調であったものの、同時に、隆二を牽制する威圧感を含んだ言葉だった。その女、時雨川ゆずりがじろりと周囲に目を走らせる。

周りに自分たち以外いないのを確認して、再び視線が、隆二を見据えて止まる。強く、睨まれる。

もしや、そのまま飛び掛ってくるかと、隆二は数歩後ずさって様子を見たが、意外にも、ゆずりからはそんな様子は感じ取れなかった。

どうしたことが、と不思議に思っていると、なんと、彼女は隆二に背中を向ける。

そして、

「少女、大丈夫かい」

と、背後で腰を抜かしている、隆二の人質になるはずであった女に、手を差し伸べた。その眼差しはまるで、転んだ子供を気遣う母親のような優しさに満ちたものだった。

隆二は目を疑う。

この状況で、明らかに敵である俺に背を向けるだと？ 無防備にも程があるというものだ。そう隆二は思った。

こいつ、案外馬鹿なのか？

しかし、これは態勢を整えるまたとない好機だ。

隆二はそつと着ていたズボンのポケットに手を伸ばす。その中にあるひんやりとして、それでいて鋭利な、ある物体を隆二は掴んだ。ふっと微笑む。

「時雨川さん……どうして、ここへ？」

椿が顔を上げていた。その瞳の動揺は、この状況が飲み込めていないことを物語っている。

「時雨川はね、本当は榊少年の家に行くつもりだったのさ」

ゆずりが言う。

「でも、そこはどういう訳か、ぐちゃぐちゃのめっちゃめっちゃになっていてね。そこにいた少女と少年に聞いたんだけど……」

「さつきちゃんと暮野くん!？」

「あ、ああ、確かそう言ってたかな？」

と、ゆずりはぼんやりと頭を搔く。

「あの少女、なぜか時雨川のことを知っていて、とにかく、榊少年と、青山少女を探してくれて頼まれたのさ。それから、夜叉媛ちゃんもいなくなったって。いったい、どういふことなわけさ」

「そ、それは……」

「おい!」

隆二は痺れを切らして、怒鳴った。

「俺のことをほったらかして、ぺちゃくちゃと下らねえ世間話かよ。面白えことしてくれんじゃねえか」

そして、隆二は二人に見せびらかすように、右手に持った物で宙を薙ぐ。ヒュッと風が切れる音がした。

いい音じゃねえか。

隆二はそれを見ながら、恍惚とした笑みを浮かべた。目に見える『力』を手にしていることが、隆二を安心させると共に、気持ちを高揚させた。

「そ、それ、ナイフ!？」

悲鳴のような椿の声。

「そつだよ、よく知ってるな、青山のお嬢ちゃん」

ナイフを手のひらの上で弄びながら、邪悪な低く冷たい声で隆二は言う。

「さあて、おかしなことを考えるなよ。二人とも、俺の言う事をよく聞け」

「……!」

「特に、蒼髪の……時雨川、だっけか。てめえ、どうせ、あの榊とか言うガキとグルなんだろ。一体お前らは何を企んでる。赤い髪的女人然り、怪しげな奴らが雁首揃えて集まりやがって。洗いざらい吐いてもらおうか?」

「うーん、何のことかな?」

すると、ゆずりはまるで隆二の話などあまり興味がないかのように、わずかに小首を傾げただけだった。

「とぼけるな!! 俺は冗談は言わねえぞ。てめえが黙るんなら、俺はどんな手を使っても吐かせるぜ」

じり、と近寄った隆二に、椿が堪らず悲鳴を上げる。



「時雨川さん！」

「心配要らないよ、少女。時雨川が来たからには、もうこの『ごぼう男』の好きにはさせない」

「ご、ごぼう男だと？」

なんだそれは。

ゆずりの口から出た、珍奇な呼び名に、隆二は一瞬唾然とした。

「お前、女、それはまさか俺のことか？」

「そうだよ」

ゆずりは相変わらず飄々としている。

「だって、細っこくて、まるで地面の中に埋まってるごぼうみただもの。お似合いの名前だと思うよ」

その挑発的な態度に、隆二はナイフを持つ手が震えた。もちろん、恐怖によってではない。この女に対する燃えるような怒りによってだった。

どうやら、俺はこの女に思い切り見下され、馬鹿にされているようだぞ。隆二は思った。

武器を持った男と素手の女。

どう見てもこの状況は、隆二の方が圧倒的有利だと言うのに、この女は余裕の表情を浮かべている！

その事実が隆二は許せなかった。

「女、これがどういう状況か分かっているのか？」

ナイフを振り回しながら、問いかける。

「俺が持っているものが見えるだろう。ナイフだよ、ナイフ。こいつで切りつけられたら、痛いだけじゃ済まないぞ」

「だろうね」

「ほう、それを認識した上で、まだ余裕を持っていられると？」

「余裕？ ああ、正直言うと、時雨川は限界に近いね」

すると、ゆずりは不快感を滲ませるように、額に急に皺を寄せた。

「ああ？」

「出来るだけ表情は変えないように務めていたけれど、ごぼう君、君が時雨川の大事な友人を痛めつけようとしたこと、時雨川は今、怒ってるんだよ。いや、怒ってるじゃないな。これは……そう、ぶつちぎれるって感じた。メーターがバリバリ振りきれてるんだよ」

「それで、だつて？ 状況がわかってないのはごぼう君、君の方じゃないかな。ぶつちぎれた時雨川がすることは一つだよ。できるだけ速やかに、全力を持って君を倒す、そういうことさ」

「何だと、笑わせるな。何も持たずに女の力で俺に勝てるというのか？」

「うん、勝てるよ」

それは、清々しいほどのさっぱりとした即答だった。それによって、隆二の怒りが増幅される。

「ハツタリも大概にしろよ。この状況はどう考えても、武器を持っている俺の存在は、お前らにとって、圧倒的な脅威なはずなんだよ。泣けよ、怖がれよ、怯えろよ。てめえ、何でそんな余裕ぶっこいてるんだ？」

「どつでもいいでしょ、そんなこと」

ゆずりが言い放つ。

「ああ？」

「言っただろう。今時雨川は最高にぶつちぎれてるって。君からの無意味なだけのうわ言じみた言葉なんて、正直、もう聞きたくないんだよ。さっさと決着をつけたいからさ」

ゆずりはざつと両足をその場で開いて伸ばす。まるで何か準備体操をするようにも見えたが、その途端、急にごおつと熱風が吹いてきたように、隆二は感じた。

一瞬、それが何であるのか、理解出来なかったが、すぐにそれが、ゆずりからの一分の隙のない殺気であることが分かる。

何だ、こいつ。これがバリバリ振り切れてるってやつか？  
相変わらず、気味が悪い奴だ。隆二は思う。

これほど真っ直ぐな敵意を向けられては、さすがに、もう議論をする暇はないな。

そう認識すると共に、隆二の中で一気に何かが爆ぜた。この女、もう一切の容赦はいらない。手加減なしでぶちのめしてやる。

「その台詞、そっくりそのままお返しするぜ」

そして、片足で踏み切って、一気に隆二は間合いを詰める。刺突の構えでナイフを持つと、女の懐に向けて、突き出した。

「時雨川さん！！」

少女の絶叫が飛ぶ。

と、

次の瞬間、

目の前にいたはずのゆずりの姿が、消えた。隆二の視界から、跡形もなく、何の前触れもなく、突然、空気に溶け去ったようにも見えた。行き場を失ったナイフの切っ先が止まる。

そんな、馬鹿な。どうして、いなくなるなんてことがある。

意味のわからない恐怖が、隆二の脳内を巡った。ぶるつと背筋が震える。

あいつ、いったい、どこへ？

こんな至近距離で、見失うはずがないぞ！

しかし、その刹那。。。

隆二の顔面に凄まじい衝撃が走った。何が起こったのか、分からない。

顔の鼻が、頬が、唇がぐしゃりとひしゃげるのが分かる。体が地面から浮く。声を出す暇もなく、隆二は後ろに吹っ飛ばされた。

意識が、どんどん白くなる。

その消え行く意識の中、隆二はあることを認識する。

あの女、あの距離から、助走もなしにドロップキックしてきやがった！

145 弱者の勇氣

「ふう」

ゆずりは手についた土を払って、地面から起き上がった。たった今自身が蹴り飛ばした男は、後方数メートル先の繁みに体を突っ込んでいる。小さな呻きが聞こえるが、あれではまともに意識を保っているとは思えない。

「時雨川さん」

背後で椿が呼んでいる。ゆずりは振り返ると、笑顔で答えた。

「ハハツ、こんなもんだよ、少女」

大したことはない、とぺろりと舌を出してみる。

「時雨川にかかれば、こんな敵なんて」

そう言いかけて、目の前にいるはずの椿がいないことに気がつく。すぐに、体に衝撃が走る。ゆずりは事態を理解した。自分は、椿に抱きつかれたのだ。

「少女」

「うちは、もう……」

「うん？」

「もう、会えへんのかと思いました」

まるで、搾り出すような声だ。ゆずりは思う。椿は顔をゆずりの

胸につずめているので、表情までは分からないが、十中八九泣いているのだろう。

泣いている、のか。

その事実を飲み込むのに、一瞬躊躇した。ゆずりにとって、他者がそんな風に感情をあらわにしてくれることが、稀有な事だったために、そこに戸惑いが生じたのである。

この少女は、こんな自分に対して、涙を流してくれているのか。もう、すっかり、他人とのまともな付き合い方など、忘れた自分に。

しかし、その動揺とは裏腹に、なぜか、安心出来るような不思議な気持ちに満たされていくのが分かった。

「ごめんよ、折角仲良くなったのに、挨拶もなしに出て行ってさ」

抱きしめ返して、椿の返事を待つ。  
すると、

「あかん。許しません」

という、ピシヤリとはね付けるような声が帰ってきた。

「許してくれないのかい？」

「うちかて、怒るときは、怒りますから」

そう言って、椿は回した腕にさらに力を込める。そこにはやっと見つけた宝物をそつと腕の中に抱き寄せるような、強い意思があるように感じた。

そつと、彼女の柔らかなぬくもりが伝わってくる。

次第に、ゆずりは、何だか懐かしい匂いを嗅いでいるような心地

になった。

思い出せないほど遠い過去、かつて、自分もそうして抱きしめてもらった記憶がある。その時感じた、毛布のような安心感はゆずりのとつくの昔に凍りついていた心を、溶かすようだった。

これは、なんなのだろう。

よく、思い出せない。

けれど、けれど……。ゆずりは確信する。

自分は心のどこかで『これ』を求めて、こんなにも早く、この地に舞い戻ったのだ。長い間、忘れていたはずの、『この思い』にもう一度触れたくて。

「これは、参ったな」

そうゆずりはつぶやく。しかし、それは言葉とは裏腹に、安堵に満ちたものだった。

椿の背中に腕を回し、ゆずりも抱きしめ返した。すんすんと、彼女がしゃくりあげているのが、分かった。くしゃくしゃと頭を撫でてやる。何だか、妹みたいで、無性に可愛い。

どうしたら、彼女に許してもらえるのかを考えながら、目を閉じかけた。

しかし、そこで、安息を引き裂く、少女の悲鳴が上がった。

どろどろとした沼の底から引つ張り出されるような感覚がした。

混濁した意識が、次第に鮮明になってくる。

隆二はゆっくりと目を開けた。鉛色をした視界が、急速に、色を取り戻し始める。

誰かが、立っている？

ここは何だ？

自分はどうなったのだ？

何度か、ぐるぐると自問した後で、記憶が蘇ってきた。

そうだ、自分は、あの女を刺そうとしたはずだ。そして、それで、ふいをつかれて自分は顔面を蹴り飛ばされて……。

自分の周囲を見回す。どうやら、繁みの中に上半身をうずめた形で、倒れているようだ。じんじんと顔の痛みが戻ってくる。片手で触れると、血がついた。鼻血だ。鉄の味がする。口の中も切れているのかもしれない。

ああ、なんだ、この様は。

俺は、負けたのか？

あの、女に。

傍らに、落ちていた、ナイフに目が止まる。隆二のナイフだった。今や、ただのモノになった、それ。

おかしいじゃないか。あれさえあれば、自分は強いはずじゃなかったのか？

しかし、隆二は蹴り飛ばされた。あんなどこの馬の骨とも分からない女に。それも、まるで、赤子の手をひねるように、いとも簡単に、負けてしまった。

隆二は、その事実を認識し、愕然とする。

この俺が、弱かったということか。それは何とも、ふざけた話に聞こえる。

自分が、これまでの人生で、そんなことがあっただろうか。そう、自問する。いつだって、他人を踏みつけて押しつけて、生きてきたというのに。踏みつけて、踏みつけて、これでもかと踏みつけて、生きてきたというのに。



そうだ。だから、自分は、あんな女にむざむざやられて、いいわけがない。隆二は、そう確信する。何より、自分が納得しない。

自分は、断じて弱者ではない。負け犬ではない。強者だ。誰かの上に立つべき者のはずだ。

「これで、終わらせるかよ」

隆二は、再びみなぎった意思によって、落ちていたナイフを握って立ち上がった。

目の前に立っていたゆずりたちは、無言のまま抱き合っていた。自分を難なく倒せたことを喜び合ってもいるのだろうか。

よく分からないし、知りたくもない。ほんと、どうでもいい。

しかし、一つ確かなことは、それを見た途端、隆二は殺気立ったのだ。

奴らは、なんとという無防備な状態か。これは、またとないチャンスだ。このまま、二人とも倒せばいい。本来ならば、言う事を聞かせて二人とも引っ張っていくつもりだったが、もはや、隆二にはどうでもいいことだった。

足音を消して、水面を渡るように駆け寄る。今なら、こいつらを倒せる。

と、そこで、不覚にも、椿が隆二の存在に気がついた。

「あっ!?!」

口に手を当て、悲鳴を上げる。

しかし、隆二は確信していた。

もう、遅いのだ。

隆二のナイフは、既に時雨川ゆずりの脇腹を直指して一直線に、

宙を鋭利に裂いていた。気持ちが一気に高揚する。嘲笑がこみ上げる。

もう少しだ。あの女が苦痛に顔を歪める姿が拝めるぞ。

飛んだ、跳ねた。砂利が舞い、風が鳴った。勝利は目の前だ。俺はやはり強者なのだ。誇り高き勝者だ。耳鳴りがキーンと聞こえる。意識が研ぎ澄まされ、刃先にそれが集中する。

しかし、

しかし、隆二の刃がゆずりに届くことは、なかった。

ほんの少し、掠めることもなかったのだ。

突如、隆二とゆずりの間に炸裂音が響く。

その瞬間、隆二は再び、視界を奪われた。理解不能な、色とりどりの闇が目の前に現れた。

何だ、これは。

「くそっ！」

手で払う。それと同時に、鼻を突く火薬の匂い。隆二は気がついた。

これは……クラッカーか！

わずかに透かし見える、向こうの景色の中、震える樁の手に、それが握られていた。

この女、舐めたマネを……。

「うちは、うちは、弱くなんか……ない！」

彼女が力強くそう叫んだのが、聞こえた。

その瞬間、隆二と樁の視線が刹那、交わった。その途端、まるで激流に飲み込まれていくような、身の毛もよだつ無力感に、隆二は

晒された。

一体何だ？ 分からない。

しかし、その眼差しは隆二の中の凝り固まった何かを打ち砕いたのが分かる。全身から力が抜ける。

もう、何も、分からない。

くそっ、何で、こんな……こんなことが。

「俺が、負けるのかよ」

こんなクラッカーごときに。

「くそっ！！」

なめやがって……なめやがってなめやがって！ 弱いくせに弱いくせによお！！

ナイフで、飛び散った紙のカラーテープを必死に引き裂く。しかし、それが間に合わない。

既に、時雨川ゆずりの攻撃が飛んできていた。今度は、回し蹴りだ。隆二には、それがスローモーションのように、はっきりと認識出来る。

もう、激突までは、一時の猶予もない。

「そんな」

おいおいおいおい、ちょっとまってちょっとまってちょっとまって  
俺が、おれが、こんな奴に、こんなやつ。

「静かに寝てるよ、ごぼう野郎」

その言葉を最後に、再び、意識が飛んだ。

## 146 決意の淵で

目の前の空間に、ふいに黒い亀裂が走る。

すると、今までその場に留まっていたはずの空気がそこからこっそりまとめて引き込まれるような風を夜叉媛は感じた。次第に、ミシミシという不協和音が辺りに伝播していき、肌にざわりと静電気のようなものが走る。

どうやら、始まったようだ。

その黒い亀裂はすぐさま周囲に広がりを見せ、あちらへ、こちらへ、縦横にひび割れ、虚空の破片を飛び散らせ始めた。瞬間、大きくその場の重力がたわみ、その亀裂の合間から、渦を巻くような膨大なエネルギーが溢れでてくる。

両目を開いてそれをしつかりと見据える。

ぼっかりと開いた、暗い、穴だ。

それは夜叉媛にとって、見覚えがある穴だった。

忘れもしない数ヶ月前のことである。

こちらの世界。人間の世に迷い込む際、夜叉媛の足元にこのような空間の亀裂が走ったのだ。

その瞬間、夜叉媛は為す術も無く、その暗い虚無の世界に引つ張りこまれた。そして、目を覚ますと、あの今ではすっかり見慣れた春臣の部屋に流れ着いたのだ。

あの瞬間の途方も無い恐怖を、夜叉媛は鮮明に覚えている。今まで頼りにして、体を支えていた地面を全て無くしてしまったような崩壊的な恐怖だ。

そして、同時に、今眼の前にある状況に対して、よく分からない高揚感も同時に湧き上がったものだ。自分は、もしかすると、新た

な可能性を手に入れたのかもしれない、と。

しかし、今なら分かる。それは、本当にマチガイだらけの認識だった。

暗い穴を見つめつつ、夜叉媛はゆっくりとこれまでの日々を回想をする。すると、その映像は、次第に回転速度を失い、ノイズが混じり、茶色く変色していった。最後にはロウソクの火を吹き消すようにしゅんと消えてしまった。

それでいい、と夜叉媛は思う。無言のまま頷いた。

「よし、これで準備は整ったぞ、夜叉媛よ」

ふいに、傍らから声がした。振り向くと、そこには、淡い人の形をした光が立っている。ぼんやりとしたその光の塊は、こちらの世に、少しだけ姿を顕現させた千両神の姿だった。

その神は先ほど元の世界に帰りたいたいという夜叉媛の願いを聞き、こうして神社の境内に、神の世への入り口をこじ開けてくれたのである。

「後はお前が好きなタイミングで足を踏み入れるといい。そうすれば、お前はこちらの世界に戻ってこれる」

「は、はい」

震えた自分の声だ。

「私のためにご助力いただき、感謝の意に絶えません」

「なんの、気にすることはない。これくらいわらわにかかれば朝飯前であるしな」

千両神の淡い光がわずかに揺れる。軽く首を振ったらしい。

「しかし、本当に良いのだな。こちらの世界に戻って来て」

「も、もちろんです」

「わらわが黙っておれば、こちらの世界にお前が迷い込んだことなど、誰も知らないのだぞ」

念を押すように千両神が聞いてくる。そこには、どこか、夜叉媛に対し、思いとどまって欲しそうなニュアンスが含まれているように感じたが、きつと気のせいだろう。

「そう、ですが……」

「うん？」

「もう、ここにはいられないのです」

夜叉媛には分かっていた。

もう、こちらに自分がいる意味などもはや、ない。それどころか、こちらにある過去は全て振り払わなければならないという使命が自分にはあることを認識していた。

だからそのことに、もう迷いはない。

全ては、自分と彼のため、彼らの友人たちのためなのだ。

強く、一步を前に踏み出す。

赤く、光り輝く髪が、凜と揺れる。それは、彼女の決意の強さを表すように、ごうごうと火の粉を散らす、火柱のようにも見えた。

もう、後ろを振り返ることは出来ない。

この空間の亀裂に身を投じるだけ。全てを任せて、落ちていけばいい。

そうすれば、皆、幸せに暮らせるのだ。

「オらばじゃ、春臣」

誰にも聞こえないよう、小声でつぶやき、また一步、夜叉媛は亀裂に近づく。この闇の無効にはきつと、懐かしい世界が待っていることだろう。自分が生まれ、自分がいずれ消えていくための世界が、そこにはあるのだ。

それでいい。それで、全ていいのだ。

夜叉媛の足が、虚空の淵に、伸び。

「媛子！！」

きこ、えた。

瞬間、夜叉媛は呼吸が止まってしまおうかと思った。これは、春臣の声。

なぜ、なぜ、聞こえるはずのない人物の音が、耳に届くのだ。

幻聴だ。幻聴に違いない。

自分が、もう一度聞きたいなどと甘ったれたことを思っているから、そんなものが聞こえるのだ。

全部、振り払ばいい。

しかし。

「待て、媛子！！」

その声は再び、耳に届く。

そして、それは確かな目に見えない力になって、媛子の腕を、足を、体を引っ張った。

伸ばした足が、止まった。そのまま、体中の筋肉という筋肉が弛緩して、崩れ落ちてしまいそうになる。それまで強く固めたはずの決意の砦が、脆く儂い砂塵へと、姿を変えてしまいそうになる。どうして、どうして……。

「どうして、来たのじゃ……」

もう、全てを忘れようという段階に来て。

もう、全てを捨て去ろうという段階に来て。

どうして、どうして……。

「どうして、春臣」

夜叉媛は、ゆっくり振り返る。

その瞳が、そこに立っていた少年を捉えた。



147 夜叉媛の真実

「待て、お願いだから行くな!!」

ここまでの距離を走りきり、すっかり疲労した体のままで、春臣はあらん限りの力を込め、そう叫んだ。

先ほどから、頭はもうガンガンと容赦なく痛み、心臓の鼓動は止められないほどに早く脈打っている。下手をすれば倒れてしまいうなほどの、限界に満ちた倦怠感に、春臣は包まれていた。

しかし、それでも春臣は目の前の媛子に向かって、一歩ずつ近づいた。

足元はふらついても、彼女からは視線を決して逸らさない。

もしも、一瞬でも目を離せば、彼女がこつ然とその場からいなくなってしまうような、漠然とした恐怖が春臣の内には巣食っていたのである。

やっと、会えたのだ。

ここまでできて、彼女をみすみす失うつもりは毛頭ない。

今はその緊張感が、春臣の精神力を刺激し、かろうじて、意識を正常につないでいた。

一方で、媛子はというと、何も無い空間にぽっかりあいた謎の穴を前に、こちらを振り返って見ていた。その瞳には今にもこぼれ落ちそうな感情の滾たぎった雫が溜まり、光を放っていた。そして、まるで瞬きの仕方を忘れてしまったかのように微動だにせず、石像のごとく春臣を凝視している。

彼女からは、ほんの少し葉が揺れるほどの、微かな吐息の音が分かる程度で、それ以外の情報がなければ、きちんと生きているのかどうかさえ分からなかっただろう。

それくらいに、媛子は動揺し、体の動きを止めていた。

まさか、自分を嫌っていたはずの春臣が、ここまで追いかけてくるとは思わなかったに違いない。

しかし、

しかし、春臣は来たのだ。

何よりも、彼女をここから連れ帰るといふ使命を帯びて。

「……どうして、来たのじゃ？」

微かな声で、媛子が言った。いや、それは言ったというよりも、茫然自失したまま、無意識に考えていることが漏れてきたという感じに、春臣には聞こえた。

「わしのことが、大嫌いなはずじゃろう？」

なんとも悲しげな表情を、彼女はする。

それを見た春臣の心が痛んだ。胸元に刃が食い込むような罪悪感が心を占拠する。自分の弱さに負けそうな自分が顔を出す。

しかし、今の春臣は先ほどまでとは違う。瞬時に仲間たちのことが頭に浮かんだ。

「あれは、違うー！」

今は強く、言い返すことが出来た。

「違う？」

「ああ、あれは、俺の本音なんかじゃないー！」

自信を持って、一步、前に踏み出す。

「ただの、俺の、偽物の言葉なんだ。俺の中の力が、一時的に暴走

してしまつたに過ぎない」

「春、臣」

「意味が分からないと思う。正直、無茶苦茶だつてことも分かる。けれど、それについては、今はきちんと説明する時間がないんだ。だから、信用して欲しい。俺は媛子を嫌つたりなんてしてない。一緒にいてほしいと思つてる。だから、だから、そつちの世界に、戻るな――！」

「……」

「お願いだ、媛子」

それは短いなりに、春臣の渾身の力を込めた言葉だつた。言葉で伝える時間がないのならば、気持ちで伝えるしかない。もしも、これで彼女が首を縦に振らなければ、全て終わりである。

祈りを込めるような気持ちで春臣は彼女の次の言葉を待った。

媛子はしばらく、黙っていた。ひどく混乱しているように、反応に困っているようにも思えた。

戻るべきか、そのまま行くべきか、選択肢の間で迷っているのだらう。

「媛子、返事をしてくれ」

答えを促そうと、春臣は彼女を見つめる。すると、俯いていた彼女はようやく、顔を上げた。

「うむ。そうか……やはり、そうであつたか」

噛み締めるように、彼女は言う。その表情には、温かな喜びの萌芽を感じ取ることが出来た。

「わしは……わしは、最初から、お主のこの本当の気持ちを知っ

ておつたとも」

震えながらも、そう言ってくれたことが嬉しく、春臣は安堵する。目と目が合つて、心が通じ合うのが分かった気がした。

その瞬間、互い違いになっていたパズルのピースがあるべき場所へ収まったような、心地良さが胸に舞い込んでくる。

そうだ。ただ自分たちは、お互いに勘違いをしていただけなのだ。考えすぎて、本当の気持を信じる事が出来ていなかっただけなのである。それは単なる自己欺瞞であり、危うく春臣はそれに全てを飲み込まれてしまうところだった。

ともかく、危機は去った。

「なら……」

春臣は、彼女に手を差し伸べた。

「一緒に、戻ろう」

その誤解が解けたならば、もう何の問題もないはずだった。当然、彼女はその手を握り返してくれると思っていた。

しかし、

しかし、彼女は、手をぶら下げたままで、

「ならぬ」

そう言った。

「ならぬ、わしは、戻るわけにはいかぬ」

厳しい表情で、そう言った。

春臣は耳を疑った。

今、彼女は何と言った？

戻るわけには、いかない、だと。

「そんな、どうしてだよ！」

理解出来ない感情が春臣の胸に去来する。

「どうしても、わしは戻るわけにはいかぬのじゃ」

だが、彼女は悲しいまでの決意を込めて、そう言い放った。ぐつと引き結んだ唇が震えており、そこに隠れた強い決意と同時に、必死に悲しみを堪えているのが分かる。

春臣にはそれが分からない。

「何だよ。もう誤解は解けたはずだろう？」

「違う、そこが問題ではない」

「じゃあ……じゃあ、どこに問題があるんだよ！」

春臣の声は苛立った。

「春臣」

きつとこちらを見据えた媛子と視線が交わる。彼女は、とん、と自らの胸に指をおいた。

「問題は、わしにある」

「どういう、ことだ」

「春臣、これは運命なのじゃ。受け入れなければならぬ、な。わしはお主とはこれ以上、一緒におれぬ」

運命、だと？

この場に来て……。

「……下らねえよ」

「え？」

「下らねえこと、言ってるんじゃないよ！」

春臣は首を振りながら叫んだ。

「お前は神様だろ。本来なら、運命なんて、いくらでも変えられるくらいの力を持つてるんだろ？　なら、そんな意味のない言葉なんて使っなよ！」

「神様、か」

「何だ？」

見れば、彼女が微笑んでいるのが分かった。

「媛子？」

しかし、それは、ぞっと背筋が凍るほどに、悲しい笑みだった。絶望の歪みが引き起こす、壊れた笑みだった。

「済まぬ、春臣。今まで、偽ってきてしまったな」

「どう、した？」

「本当に済まぬのう……」

まさか、そんな……。

「嘘、だろ？」

「わしはな、春臣……」

永遠にも思える一瞬の後、

「神、ではないのだ」

彼女は一言、そう告げた。

「なん、だって？」

その瞬間、頭の前からつま先まで、体を巡る血が、ずつしりと重くなつたような、そんな感覚に春臣は支配されていた。そのせいで肺に送られる血量が不足し、呼吸困難になつたような息苦しさに瞬時に襲われる。

何だって？

神じゃない、だと？

どくどくと心臓が胸を叩き、指先にじんじんと痛みが走るような気がした。

「どういふ、ことだよ」

と、訊いた。

もちろん、春臣は以前から、彼女が自分に対し、重大な隠し事をしていることを知っていた。そして、その重大さ故、彼女が自分に対してそれを切り出しにくいのではないか、ということも十分予想はしていた。

けれど、まさか。

まさか、こんなに、彼女という存在の根幹を揺るがす大きな秘密だということは、想像もしていなかった。

彼女は、しん、としていた。

こちらを見て、じつと、立っていた。

それはさながら、支えとなる部品を埋めこまれて、ただ、その場に立たされている人形のようにも、見えた。今更言うことでもないけれど、顔立ちの美しい彼女はまさに、そう見えてしまう。



感情など無い、体温もない、ただ、されるがままに立っている、美しき人形だ。

すると、彼女の口だけが動いた。

「どういうこともない。ただそれだけじゃ。わしは神ではない。そうではない、別の生き物じゃ。今まで、騙しておって、済まぬ」

それは酷く乾いた声だった。春臣の鼓膜に当たって、震え、脳内に反響した。

いつもは彼女の生き生きした笑い声や、だだをこねる子供のような声を聞いているので、それはまさに、違う生き物が発した言葉に思える。

春臣は、彼女にかけるべき、次なる言葉が思い浮かばなかった。首から下の感覚が欠落してしまったかのような脱力感に晒されていた。

何をどうすればいい。

何をどう判断すればいい。

春臣は理解が出来なかった。ここは怒ればいいのか、泣けばいいのか、それとも笑いとばせばいいのか……。

組み上げようとする言葉が次から次へと、赤茶けて錆びてしまつて、端からどんどん崩れ去っていく。

重い、沈黙が流れる。

なんなのだ、これは。今すぐに、やめたい。取消したい。リセットして洗い流したい。

そう願うが、もはや、この場からは逃げられなかった。

すると、ふいに、春臣の目の前に旋風のようなものが現れた。くると木の葉が眼前で踊り、その中央辺りから、淡い光が生まれた。それはそのまま、縦に伸び、光の束となつて一つの人の形になった。

唾然としていると、その人の形のようなものが言葉を発す。

「人の子よ」

と言う。

しかし、それはどうやら、言葉を発したというより、その人らしきものの言葉が春臣の脳内に直接響いてきているようだった。

これがテレパシーという奴だろうか。春臣はなんとなく思った。おそらくそうなのだろう。

これまで不思議な体験など山ほどしてきた春臣にとってはそれは、特に不思議なものではなく、すぐに許容出来た。

「わらわが分かるか？」

「あ、あなたは？」

春臣は思わず、その光に触れようと手を伸ばす。しかし、その手は何も触れずに宙を描いただけだった。

「触れることは出来ぬ。わらわは、お前の意識を借り、それを媒介にして、こちらの世界に姿を顕現させておるだけだからのう。一応説明しておくが、その夜叉媛を覗いて、お前以外の人間には見ることは出来ぬ。少々面倒臭いが、さつきのように力のないお前に、わらわの声を届けるにはこちらの方が手っ取り早いと思っただのだから、は、はあ……」

何だかよく分からないが、どうやら、春臣は、その誰かを立体映像のような感覚で見ているらしい。

「まずは名乗っておこう。わらわは、この神社の主。櫛那美千両神だ」

「土地神様ってことですか？ 瀬戸さんが仕えているっていう」

「そうだ。お前、榊と言ったか」

「はい」

「お前のことは、さつきよりよく聞いている。ここはわらわが事情を説明しよう」

そうして、すすす、と光が夜叉媛の傍まで歩み行く。その様子は、口ウソクの火が揺れるようだった。

「さつきもこやつ自身が言った通り、こやつは神ではない」

やはり、その事實は揺るがないのか。

その先を覚悟して、春臣は聞く。

「では、媛子は一体……？」

「ホカノ、だ」

聞き覚えのない三文字をその神は口にした。

「ほかの……？」

「そう、わらわたち、神の世の者はこやつらの事を神ではない存在、『ホカノ』と呼ぶ。人の世の文字で表すのであれば、『外』と言う字をあてるのう」

「媛子が、そのホカノって言う存在だと？」

「左様。そう言っておる」

「本当なのか？」

これは千両神ではなく、媛子に直接問いかけた。すると、彼女は全ての行為を認めた罪人のような静かな面持ちで頷いた。

「そうじゃ、それが真実じゃ」

その光を失った瞳が悲しい。

「人の子よ」

再び千両神が呼びかけてきた。

「お前が神の世のことなど知るはずもないのであろうが、わらわたちの住まう神の世では、今、こやつのような、ホカノが大量に存在しておるのだ」

俄に情報が増え、考えの処理で重くなった頭を動かしながら、

「お、俺には、どういうことだか。一体、な、何なんですか。そのホカノって」

すると、千両神は意外にも、一瞬、口ごもった。

「うむ……正直な話、わらわたち神でも、こやつらが真実に何者なのか、知らぬ」

「知らない、のですか？」

「ああ、残念なことなのに……しかし、わらわたちが知っておることだけを、話そう。人の子よ。お前はそれを知る必要があるじゃろう……」

春臣はそこで、気持ちを落ち着けるため、息を吐き、ゆっくり頷いた。

きつとこれから、春臣を驚かせる様々な真実が明らかになるだろう。心をまっさらにして、それらの事実を受け止めていかなければ

ならない。

それを見て、千両神はよし、と頷いた。

「して、話に入る前に、質問じゃが……」

「はい？」

「お前は、神を信じているか？」

春臣は思わず、口を閉じた。その質問の意図することが分からず、うろたえる。

「ど、どどういうことでしょうか？」

「どどういうこともなにも、答えは二択だ。肯定か否定。どうなのだ。正直に答えよ」

「それは……信じるも何も、目の前にこうして存在していますし、それに、俺は今まで不思議な力に関する様々な体験をしてきました。ですから、神が存在すること、そこに疑いの念はありません」

すると、その千両神である光の束は、顔の辺りがふつと微笑んだように見えた。

「そうか、そうか。それは嬉しいことだ」

心なしか、声の質も、柔らかくなったような気がする。

しかし、次に続く言葉は、それとは一変して、厳しい口調になった。

「だがのう、残念なことに、今神々の力は、急速に衰えつつある。

これは偏に、人々が、もはや、神への信仰を忘れつつあるためじゃ」

「わす、れる……？」

「そうだ。人々はこの流れる時間の中で、次第に、我々神を忘れよ

うとしておる。写真がだんだんと時間が経つにつれて、色あせていくように、な」

「……」

「例えばでよい、思い浮かべてみよ。お前の身近な者たちのことだ。友人たちでも家族でもよい。今までの人生の中で、果たして、毎日神を思い、敬い、祈りを捧げる人間がどれほどいた？ おそらく、ほとんどいないのではないか？ 極端なことを言つつもりはないが、多くの人間にとって、今の時代、神などという存在があるうとなかろうと普段は気にしないものだろう」

そうして、千両神は春臣の背後の境内を示した。

「見よ、この寂寞せきぼくたる光景を。お前にも一目瞭然じやろう。参る人の影の絶えた、この神社が。これが時代の移ろいというのを雄弁に語っておる。さつきは何とかこの神社に元のように人々が増えればよいと思っておるようじゃが、おそらく、それはないであろう。この国の多くの神たちは、今このような状態に晒されておるのだ」

重々しい神の言葉の一つ一つが、春臣の肌に喰い込み、すぶすぶと沈んでいくようだった。

そうか、と思う。

そうか、人は、神を忘れようとしているのか。

たかだか、十数年生きただけの春臣には、古より続く、人と神が共に歩んだ道のことなど、あまりにも途方も無いもので、歴史という巨大な影となって横たわるその膨大な時間を逐一理解することなど、ちつとも出来ないのだろうけれど、千両神の言うことはよく認識出来た。

革命が起き、産業が発達し、文明が栄え、今や、地球の外、宇宙にまでその手を伸ばそうとしている人類にとって、今、神がどれほ

ど必要とされているのか……。

もちろん、昔から変わらずに、神を信じる者たちはいるが、しかし、この世の多くのことが人々の手によって、たかだかボタンの一つや二つで、コントロールできようという現代、かつてその役目を担っていた神の存在が、薄れていつていることは疑いようがないことだろう。

今や、神という存在や概念の中身がすっぱり空洞化し、形骸化し、神に対して、人々は、もはや昔のように、心から感謝をするでもなく、恐怖して日々を過ごすでもなくなったのだ。

それが、何とも言えない深い罪悪感となつて、春臣の上へのしかかってきた。まるで、今自分がその人類の代表として、この場に立たされているような気がして、耐え切れない思いに駆られる。

と、そんな春臣の感情を読み取ったのか、千両神は優しくこう言った。

「人の子よ。何もお前がそれを気に病むことはないぞ。これは世の一つの摂理なのだ。大きな大きな流れの一部分なのだ」

だから、我々はその流れに身を任せるしかない、と千両神は言った。それは全てを悟りきつたような、優しさに満ちた言葉だった。

そして、こつも言った。

「お前も知っているだろう。この日本という国の中で、古より数々の国が栄え、滅んでいったことを。この世の全ては移ろいゆくものよ。神も人も。花が咲き誇り、枯れ行く様のように、な。そして、そういうわけで、わらわたちの世界は『縮小』を始めたのだ」

「縮小、ですか？」

「うむ。わらわたちの世界は今、緩やかな衰退期に入っており。知っておるであろう。わらわたちは、決して完璧な存在ではない。

人と共にある存在であり、人々がわらわたちを欲しなくなれば、後は廃れるだけじゃ。わらわたちは次第に、以前のような力を失い、その結果、世界は緩やかではあるものの、縮まり、崩壊を始めた。そして……」

神は一度言葉を止めて、

「その崩壊とともに現れたのが、このホカノじゃ」

と、そつと媛子の頭を撫でるように手を動かした。



それは神の世界が崩壊が始まったところからだったらしい。

神々の住まう場所に、この名もなき者たち、「ホカノ」がどこから流れつき始めたのだと、千両神は言う。

「初めてその話を聞いた時は、とても驚いたものだ。何しろ、そんな得体の知れない話は見たことも聞いたこともなかったからのう。誰もが経験をしたことのない未曾有の事件だったわけだ」

しかし、そうは言っても、最初、流れつくホカノの数は少なかった。そのため、神々たちは案外暢気なもので、特に対処することもなく、泰然とした態度で、看過していた者たちが大多数だったそうだ。

神とは人間に比べてとても長い時間を存在し続けるために、驚くことはあっても、多少のことでは大いに取り乱すことはないらしい。だが。

「次第に、ホカノの漂着の数が増えていくに連れ、さすがに神々もその対処に、重い腰を上げざるを得なくなった」

千両神は言う。

その頃には次第に、神々の間で、この事件が神の世を揺るがす大きな異変として認識されるようになったのだと言う。

このため、神々の代表により、話し合いの場が持たれ、その結果、最初に神々の間で議題に上がった問題は、彼らが一体全体何者なのであるのかということだった。

そこで、神々の中でも特に知識が豊富で、博識な者が彼らを調べることになった。調査はそれなりの期間を設けて、じっくりと行わ

れ、その結果、次のようなことが明らかになった。

彼ら、ホカノたちは、流れ着いた時には、「自我」らしきものは認められず、ただの空っぽの入れ物のごとく、何にも反応を示すことなく、ぼうつとしていた。しかし、しばらくすると、周囲の物事を認識するようになり、人間の子供のように、物事を覚えたり、動き、考えを持つようになる。

この辺りは、普通の生き物の赤ん坊のようである。そのため、姿形が似ているから、人間の子か、とも思われたが、どうにもそうではない。そもそもの問題として、人が神の世に存在出来るわけがないのである。

では、彼らは神なのか。

しかし、だからと言って、神々はそちらの結論に考えを結びつけることはしなかった。

知識のある神々たちは、彼らを神と人のちょうど中間のような存在なのだと言った。

「なんと言うのだったか……。そうそう、お前たち人間がよく言う『ハーフ』とか言う奴だ。こやつらは、神と人を足して二で割ったような感じなのだ。そのため、神のように巨大な力を操ることは不可能だが、人間のように、全く力を使えないわけでもない」

そう言われて、春臣は思い出す。

確かに、媛子は不思議な力を使っていた。空中を浮遊したり、物を飛ばしたり、花を咲かせたり……。そういう所を春臣は目にしている。

すると、春臣の意識を媒介にしてこちらに存在しているという千両神は、春臣の心をなんとなく読んだようで、

「そつじゃのう、そんな低級な魔法のような力がこやつらには精一杯である」

と言った。

「しかし、こやつらに関してはそこまで分析出来たものの、結局、神々の知識でもってしても、この不可思議な者たちに該当する既存の存在を見極めることは出来なかった。話し合いは決着の兆しを見せぬまま、袋小路に入った。そして、大いなる謎が残った。一体、こやつはなぜ存在しているのか」

そして、

なぜ、こやつらは、ここに存在しているのか。

重々しく、千両神はそう言った。

それは、まるで、「人はなぜ生きるのか」という究極的な問題を目の前に突きつけてくるようで、思わず、ごくり、と春臣は唾を飲んだ。

千両神は続きを話す。

「そして、次にわれわれたちが行った調査は、彼らが一体どこから発生していくのか、ということだった」

ホカノが何らかの生命体である以上、何も無い場所から急に湧き出ることはないということである。川を逆に登って行けば、必ず湧き水を見つけたことが出来るように、何事にも、根源はある。神々はそう思ったのだそうだった。

そして、今度は、勇気のある神々たちが彼らの流れてくる方向へどんどんと遡ってみた。すると、そのホカノたちの発生源は意外な

ことに、世界の崩壊が始まっている場所、その淵、闇ヶ淵と呼ばれる場所らしいということが判明した。

そこは神々にとつて、とても危険な場所であり、付近にはあまり近づくことは出来なかったが、帰ってきた者たちが言うには、彼らは『崩壊した世界の一部が変化し、誕生していた』ように見えたのだと言つた。

「崩壊した世界から……彼らが生まれていた？」

春臣は額に皺を寄せる。不思議な話である。もしそれが事実だとするならば、それは何を意味するのだろうか。

149 ホカノ（後書き）

どうも、ヒロユキです。

相変わらず話が半端な状態で終わってしまい申し訳ありません。しばらくの間、長々と説明だけの文章が続くので、どの辺りで区切るべきか迷い、迷いに迷った挙句、このような状態に……はい、すいませんです。次回はきっちり終われるようにしたいと思います。

「崩壊した世界から……彼らが生まれていた？」

春臣は額に皺を寄せる。事実だとするならば、それは何を意味するのだろうか。

「これはな、非常に興味深い現象であると同時に、神々の間に新たな疑問を生んだわけだが……それを解決する前に、わらわたちは次第に、そんなことを考えている暇もなくなっていた」

「どういうことですか？」

「うむ。つまりだ、まずは流れ着いてくるホカノたちにどう対処すべきかということが、神々の中では急務となったのだ。数が数だけに、ただ無視しているわけにはいかないのでは？」

千両神によると、それに対し、再び神々の間で議論が持たれたということだ。

そして、そこで様々な意見が交わされたのだが……。

「結果、ホカノの多くは、対処に困った拳句、わらわたちの付き人のような役職につかせ、働かせた。こやつらはきちんとしてつければとても従順であり、働き者であるからな」

千両神はそう説明する。

「媛子、も？」

春臣は彼女に問いかけた。彼女は相変わらず、生気のない目のまま、こくと首肯する。

「うむ、わしもここへ来る前は、とある神の付き人であった」

「そ、そうだったのか」

「……春臣」

急に彼女から名を呼ばれて、ドキリとする。彼女が能動的に、自分を呼んでくれたことを驚くのと同時に嬉しくも思ったのだ。

彼女がまだここに『生きている』ことを実感出来た気がした。

「何だ？」

返事をする。

「全て今の話は真実だ。わたしたちホカノは、未だ多くの謎に包まれた存在だ。そして、同時に、世界にとって、限りなく、『無意味な存在』なのだ」

「急に、な、何を」

言い出すのか。

春臣は強く首を振った。

「そんな、そんなこと、言うなよ」

「そんなことなどではない。それこそが真実なのじゃ。わたしたちは存在する意味が分からないのだぞ？ それは、存在する意味がないこととほぼ同義ではないか」

それは、氷のように凍てついた言葉だった。おおよそ、生き物から感じ取れる全ての感情を喪失したような、無味無臭な空虚さだけが春臣に伝わってくる。

「馬鹿なこと、言ってるなよ」

春臣は大声を出したいところを、自分を抑えながら言い返す。

「ほぼ同義だろうと、完全な同義じゃねえなら、イコールじゃねえ『余地』があるなら、自信持って、真っ直ぐ前見ろよ。自分たちのことが分からないなら、まだこれから考えればいいじゃないか。そんな風に、諦めたような顔するな」

しかし、彼女は至って冷静にゆっくりと首を振る。

「春臣、それは違う。そもそもわしたちは諦めることを必要としていないのだ」

「それは、どういう意味だ？」

「わしたちはな、初めからわしたちがそうあるものと、神々によって認識されているのだ」

「認識されているって……それが、何だよ！」

「いいか、春臣、神々はあの世界の長なのだ。長である彼らからそう考えられているのだから、それが絶対だ。わしたちのような下等な者は、そこから何も考えを発展させる必要はない。反論も意見も感想も必要ない。ただそうであることを受け入れるだけだ」

そう言う彼女の瞳はもはや、濁っていた。周囲にあふれる光を映さず、今や視力さえ完全に失っているようにも見えた。

おいおい。

これじゃ、まるつきり、ただの人形じゃねえか。そんな現状を、本気で甘んじてるのかよ。

「お前、本当に……」



言いかけて、春臣は、あることに気がついた。

「そう言えば、媛子、お前には元々名前がないんだったよな」

「ああ、そうだが……」

「神の世界では、名前なんて呼ばれなかったって」

「うむ」

「お前……そういうことかよ」

ぐっと握った拳に爪が食い込むのが分かる。

「ああ、神々はわたしたちに名前など必要ないと思っているから、そうなのだ。そんなもの、つけてもらえるはずがないだろう？」

だって、だって……。

彼女は言う。

「わしらは、なぜ生まれてきたのかを知らぬ。存在する意味が分からぬ。父もおらぬし、母もおらぬ。兄弟のような存在はおっても、お互いに通じ合える繋がりなど皆無だ。神々に仕え、とりあえず働かせてもらっておるだけで、使えなくなれば、いくらでも代わりはおる、塵芥ちりあくたのごとき存在じゃ。そんな者たちに『いちいち個体を区別する名』が必要かのう」

彼女はそれを、神々を批判しているわけでもなく、自分たちを卑下しているわけでもなく、ただ、あくまで事実としてそう語るような、無機質な口調でそう言った。

頭が急に重たくなるような、そんな感覚に春臣は陥る。

「お、おい、そんなこと……」

それは、とても信じられない事実だった。

そして、同時に、春臣は胸の奥にズキンと何かが大きな痛みを感じる気がした。ぐくぐくと抑えつけられ、傷口が疼くような感じだ。そうだ。

この痛みにも、この感覚にも、春臣は覚えがあった。

目を閉じると浮かんでくる。あの、心にたまつたどす黒い濁り水の匂いを。かき混ぜて、波打ち、さらに淀み、色を濃くする、この水たまりの冷たさを。

「人の子よ」

そこで、千両神の声が響いた。

「お前には酷な事実かも知れぬが、これも真実じゃ。多くの神は、ホカノのことなど、その程度の存在とみておる。いてもいなくても誰もそれほど困らぬ。害がないから使役するというだけで、わらわたちは、この者どもに、それ以上の意味を認めているわけではない」「い、意味って……」

「いらなくなれば、いつでも排除出来る。こやつと言った通り、塵芥のごとき」

「そんなの、おかしい!!」

春臣は怒りで喉の奥が震え出すのが分かった。歯の裏側で、今にも弾き飛びそうな強い衝動がこみ上げてきている。

「そんなの、無茶苦茶だ。絶対におかしい。いくら神様だからって、媛子たちの存在の意味を認めるとか、認めないとか……そんな権利なんてない！ そんな、道理なんてない！ 俺達は……俺達は、誰かから認められて、許可されて、ここに存在してるわけじゃないんだ!!」

春臣は喚くように感情のまま、そう叫んだ。

「それに、俺は、俺は……媛子の存在に意味が無いなんて、ちつとも、これっぽっちも思わないんだ」

彼女との、これまで暮らしてきた日々を思い出す。

出会いの時から無茶苦茶で、振り返れば振り返るほどに、語りきれない苦労があった毎日だった。

でも、彼女ともし、会えなかつたらと思うと、春臣は無性に寂しくなる。もはや、恥も外聞もなく、子供のように泣いてしまつかもしれない。

それほどに、彼女という存在が春臣の人生を埋める上で、重要なものになっているのが今はよく分かる。

辛いこともあった以上に、彼女は喜びやぬくもりを与えてくれた。そう、彼女がいなければ、榊春臣という人間の人生は、ずっと不完全で未完成のままなのだ。パズルの最後のピースは永遠に、埋まらない。

春臣は確信を持ってそう思える。

こんな不完全で、ちつとも強くもない自分のような存在が完全を望むなんて、実に滑稽で、馬鹿馬鹿しい話だが、しかし、不完全ゆえに……不完全ゆえに、自分の隣で支えてくれる彼女という存在を、春臣はどこまでも欲していた。

そして、その事実を決して、彼女が無意味な存在ではないという答えを、導きだしてくれる。彼女との出会いがその始まりだったことも。

「ふふ……」

すると、千両神は、その光の束は、わずかに微笑んだようだった。

「確かに……」

「え？」

「確かに、そうなの。お前の憤りはもっともだ」

彼女は何度も頷く。

「わらわも、そう思う」

「で、でも、さつき神様は彼女たちについて意味なんて認めてないって……」

「多くは、の」

その部分を神は強く繰り返した。

「中にはそう思っていない神もある。わらわもその一人というわけだ。ホカノのことについてはまだまだ謎が多い。全ての結論を出すには、まだまだ時期尚早というところだ。そのため、わらわはホカノに対する偏見や誤解を少しずつ改めていくべきであると思っている。それに……わらわには」

さつきがおるしな。

その神の一言は、まるで血のつながりのない人間の子でありながら、わが子を呼ぶような愛しさに満ちているのを、春臣は感じた。

「瀬戸さんですね」

「そうだ。神であるわしの元でいつも甲斐甲斐しくわしのために働いてくれておるあの子を思うと、相手が人間であろうとホカノであるのと、そういう存在をその辺の取り換えのきく物品と一緒に扱いたくないのだ」

「そう、ですね」

春臣は心から、良かったと思う。こんな神様もいてくれて。

「人の子よ。それはわらわも同じ気持ちじゃ。このような考えを持つものが人間にもいてくれることが嬉しい」

しかし。

と、千両神は言葉を挟む。

「この事に関しては、今はしばらく、保留にしておこう。わらわたちとここで話し合ったところで、どうなることでもないからな」

それは、春臣も当然と思うところだった。

ここでいくら喚いても、その現状はどうなるものでもない。

「それで、次は別の問題だ。この夜叉媛についての、のう」

そう言って、千両神は再び、口調を厳しくした。

「それで、次は別の問題だ。この夜叉媛についての、のう」

そう言っつて、千両神は再び、口調を厳しくした。

「媛子、ですか？」

そう聞き返した途端、急に首筋に静電気が走ったような、感覚がした。見れば、目の前にいたはずの千両神がいない。

「え？」

驚くことに、神は春臣のすぐ背後に立っていたのだ。瞬間移動をしたのか、とも思うが、先程の話では神の姿は、春臣が見ている立体映像のようなものであることが分かっているので、どこからどこへ現れようが、自由自在なのだろう。

しかし、こうして実際に近くに来られると、やはり、自然と体が熱くなるような、不思議な力を春臣は感じた。まるで海の中に立っているように、ざぶんざぶんと、間近から見えない力の波が体に打ち寄せてくる。

「ふふ、驚かしてすまない。わらわはのう、お前に近づいて、お前の考えをもっとよく知りたいと思ったのだ。お前が見ているものを、お前が感じていることを」

「……え、と」

「ふふん。わらわは、お前に興味がある。とてもとても、な」

「興味、が？」

「大丈夫だ、安心しろ。近づいただけ取って食ったりはせん」

神が優しくそう言うと、春臣の両肩に何か触れたような感触があった。じんわりと目に見えないぬくもりが伝わってくる。

「あ、あの、千両神様？」

しかし、振り向こうとすると、春臣の頭が途中で止まった。神の見えない力によって、押さえられたのである。そして、視線が無理やり、媛子の方へ戻される。

「人の子よ。今はわらわよりもそやつをよく見よ。その者のことを考えよ」

「媛子、を？」

「そうだ。よく聞くのだぞ。そいつがお前に犯した罪のことを。お前はそれを聞いて判断をしなくてはならない。だから、よく考えるのだ。他のことは考えるな」

いやが上にも、媛子と目が合う。

彼女の、魂の抜けたような、壊れかけた顔を真正面から捉えた。

「さあ、問題の時間だ、人の子よ」

途端、ざわわ、と冷たい空気が春臣の中に渦巻いた。

「別世界からやってきたホカノであるこやつは、自らを『神』と名乗り、お前を騙した」

騙した、騙した、騙した、だました、だました、だました、ダメシタ……。  
神の声が撃ち放たれた銃声のように、脳内に反響する。

「お前が様々な危険に苦難に晒されつつも、必死に守ろうとしていたそやつは、お前を今までずっと、裏切っていたのだ。分かるな？ そやつはお前のその守りたい、相手のために強くありたいという、純粹無垢な気持ちを踏みにじるような行為をしたのだ。どうだ、それは卑しい行為であるう？」

千両神の言葉が今度は媛子に向けられる。

「夜叉媛よ、今、わらわが話したことは事実だな？」

「はい、間違いありません。私は、彼を騙しました」

春臣の視界がぶれる。紫色の霞がかかる。

彼女は自分を騙した。

それは、それは、確かに……そうだ。

そうだ、けれど……。

「どうだ、人の子よ」

それはまるで、わが子の肌を愛撫するような柔らかな声だった。

「わらわはな、ここでお前に一つの裁きを下して欲しいのだ」

「さ、裁き？」

「そうだ。よく聞け。わらわは神だ。上に立つものだ。この者たちを管理する立場にある。ならば、この者が粗相をしでかせば、それを罰するのが道理だ。悪いことをすれば、罰せられる。それは誰でも同じことだろう。分かりやすく言えば、天罰を下す。わらわはな、その『権利』をお前にやろうと思っただ」

「天罰を下す、権利を、ですか……？」

「うむ。お前はこいつに騙された張本人だ。だから、お前の判断でこやつを裁き、それ相応の報いを受けさせてやろうと言っただ。



どんなことでもいい。こやつをわらわの力で、罰してやれるのだぞ。お前は、どうしたい？ 答えを聞きたい」

「こた、え……？」

春臣は慄然とした。その決断の重大さに、思わず、足が震えた。神が何を言おうとしているのか、分からない。

こんな自分が、彼女を裁く？ 天罰を下す？

この神は、自分に何をしようとしているんだ？

矢継ぎ早に疑問が頭を駆け巡る。

「さあ、迷うな。お前の結論は何だ？ この娘はお前の答えを受け入れる決意がある。お前がだした答えなら、何でも甘んじるだろう。何も遠慮する必要はない」

「お、俺には、無理ですよ」

「何をためらうか、お前はこやつが今まで秘密にしてきたことで、傷ついたであろう？ 驚いたであろう？ 怒っているだろう？ 我慢せずともよいのだ。どうしたいのか、言え」

「無理です、出来ません！ 俺は、俺は……神様じゃない！」

ただの、人間だ。だから。

こんなの、無理だ。

すると、その春臣の悲痛な声を聞いて、考え直したのか、

「そうか、そうだな、お前はただの人間だ。確かに、神ではない」

と、千両神は納得したように、頷く。

「では、天罰うんぬん、という話は抜きにしよう。しかし、それでは、特別な力などない、神の力など持たぬ、いつも通りのお前ならば、この者をどうする？」

「人間の俺なら……？」  
「そうだ」

神はその先を促した。  
春臣は思わず、沈黙する。てつきり、決断を拒否して、それで終わりだと思っていたのだ。

「駄目だ。問題にきちんと向きあえ、はじめをつけるのが肝心なのだ。答えを出すことから逃げるな」

けれど、だとすれば、彼女に自分は何をするべきなのだろうか。  
春臣は困惑する。

確かに、千両神にも言われた通り、春臣は彼女が嘘をついていたことについては、驚いた。目の前が真っ暗になりそうだった。

しかし、

しかし、きつと、彼女の事だ。

春臣のことを騙し、裏で嘲笑っていたわけがない。きつと、そう  
だ。

なら、

「や、やむを得ない事情があったんだよな、媛子」

春臣は訊ねる。

「春臣……」

「俺を騙していたのは、仕方がないことだったんだろう？ お前は、お前は、全然、悪いヤツなんかじゃないよな？」

春臣は彼女への期待を込めて、問いかける。彼女に一度でいい、

頷いて欲しかったのだ。

だが、

「いや、違う」

彼女のその一言で、その希望はあっけなく打ち砕かれた。

「わしは悪い奴なのだ。わしはお前を騙した、どのような理由があったにせよ、その事実が変わらぬ。だから、春臣、わしを罰せ」

罰せ、わしを。罰すのじゃ。

彼女は何度も、繰り返す。

罰せ、わしは、悪い奴なのだ。

お前を、お前を、わしは、

「裏切ったのだ!」

すると、その言葉が春臣の心を揺さぶった。

急に、既視感を感じたように、記憶が巻き戻される。数週間前のことだ。

『もし、自分の身近な人物が、君を裏切ったらどうする?』

急に、そんな問いが蘇った。

これは、いつだったか、あの奇妙なお守り商人、時雨川ゆずりに聞かれた質問だった。狭い自室の中で、彼女と二人きりになったとき、問いかけられたのだ。

『誰かから裏切られた時、君ならどうする?』

たったそれだけで、とても難解な問い。

あの時は、それが何を意味するのか、春臣には全く分からなかったのだが、今思えば、全て合点がいった。

そうだ。彼女は、あの時すでに、媛子の秘密を知っていたのだ。そして、その上で、春臣がどういう答えを出すのか、試したのだ。

もしも、いつか、媛子が秘密を打ち明けたとき、春臣たちの関係が壊れてしまわないかどうか、不安だったから、もしものことを考えると、怖かったから。

だから、確かめた。彼女は好奇心だとかごまかしていたが、絶対にそうに違いない。

それで、肝心なことは、

『あの時、俺は、何と答えた？』

ゆずりが嬉しそうな顔をしていたのを思い出す。

『君は本当に優しいなあ』

そう言っていたのを覚えている。ぐしゃぐしゃと頭を撫で回されたのを覚えている。

そうだ、『答え』を思い出した。迷う必要なんてない。春臣は確信する。

初めから、自分の気持ちは決まっていたじゃないか。

そう思うと、すっと肩から余計な力が抜けた。気持ちが透き通っていくのが分かる。

「どうやら、心は決まったようだな」

千両神が静かに言った。そこにはどこか冷静な春臣に戻り、安心

したようなニュアンスがあったように感じた。

「はい」

「では、どつするっ」

そこで春臣はすつと息を吸う。

「媛子」

彼女を、まっすぐに見据える。

何度間違っても、一緒に、共に、歩くのだ。だから、こちから  
一歩、そっちに踏み出す。

「はる、おみ……」

「俺は、お前を、許す」

152 高貴な心と不良品

「許す、じゃと?」

媛子の表情が、信じられないものを見たように、強張った。無意識に声が上がっている。

「ああ」

「お主、本気でそんなことを言っておるのか!？」

「ああ」

何と言われようとも、春臣は考えを変えるつもりはなかった。

「確かに、媛子が俺を騙していたことは、良くないことだ。その報いを受けるべきと言われれば、当然、受けるべきなのかもしれない。でも、それは俺の望むことじゃないんだ」

「なに?」

「お互いがなんらかの痛手を受けることで、この問題を、俺は解決しようなんて終わらせようなんて思わない」

「……」

「俺は、そういうことじゃなくて、お前と考えたいんだよ。その過ちを、一緒に背負いたいんだ」

「一緒に背負う?」

「そうだ。強いて言うなら、これが俺なりのお前への罰かな。間違ったなら、お互い逃げずに、一緒に考えたいんだ。お前にだって、言いたいことがあるだろう、俺にだってもちろんある。今までの付き合い方に問題があったなら、また違うやり方を探してみようぜ。俺達はさ、間違いを犯す存在なんだよ」

「お主は……」

彼女はそこで口を開いて、何かを言いかけたが、なぜか再び口を閉ざしてしまった。その様子が、どこか淋しげで、「何かを諦める」ように見えたが、春臣はさらに言葉を続ける。

「それにさ、俺はいいんだよ。お前が何者でもな」

「春臣……」

「お前がどういう境遇にあって、どういう存在で、どういう経緯でここまで生きてきたかなんて、俺の知らないことがいくつあったって構わない。俺は今のお前が好きだし、一緒にいたい。だからさ、分かるだろ？」

そうして、春臣は彼女へと静かに手を伸ばす。

「向こうに、神の世界に帰ることなんてない。また、皆で一緒に暮らそうぜ」

そうだ。

それが一番理想的な未来なのだろう。

戻る必要なんてない。このまま、元の生活に戻るのだ。何か問題があれば、皆で一緒に解決すればいい。

それが、春臣の思い描く未来だった。

きっと、彼女だって、本心ではそう思っているのだ。それが一番の答えだと。

だから、必ず、この手を握ってくれる。春臣はそう確信していた。目を閉じ、祈りながら、待っていた。

しかし。

しかし、いつまで待っても彼女の手が春臣の伸ばした手に重なることはなかった。

「……媛子？」

待ちきれず、目を開くと、そこには、今まさに両目から大粒の涙をこぼそうとしている彼女がいた。

泣いている？

それが、春臣には衝撃だった。

彼女のその行動、行為には、先ほどまでの抜け殻のような彼女とは違う、生きているがゆえの感情のほとばしりがあるように感じたのである。

彼女が流している涙は、まるで、彼女の熱い生命力が具現化しているのではと思えるほどにそれは温かな輝きを灯していた。

良かった。春臣は思う。

今の彼女なら、この彼女となら、自分はまたやり直せる。

彼女は、まだ、彼女なのだ。

しかし、彼女が口にしたのは、重たい絶望の水を吸って、宙に浮くことなく、その場に落ちてしまいそうなほどの重さを持った言葉だった。

「お主なら、お主なら……そういつじゃろつとっておった」

「お、思っていたって……」

どういう、ことだ？

春臣には分からない。

しかし、その一方で、彼女の言葉は、零れ出す涙の量に比例するように、ぼろぼろと大きくなっていく。

「お主は、本当にお人好しで、馬鹿みたいに優しくて、死ぬほど甘すぎるのじゃ。そんな、そんなことで、どうするのじゃ。わしのことが気に入らぬなら、わしをもっと叱ってくれてよいのに、怒って



くれてよいのに、殴ってくれてもよいのに……！」

「そ、そんなこと、出来るわけねえだろ」

「そうじゃの」

ぐすり、と彼女は涙を拭いながら話す。

「お主は、そういう男じゃ。じゃから、じゃから、わしは、わしは、自分を許せぬのじゃ。お主のような高貴な心を持った人間を騙しておったことが」

「媛子……」

彼女は、一体、何を言おうとしているのだ？

「何度も言うが、春臣。わしは、この世に存在しておる意味すらあるのか分からぬ塵芥のごとき存在なのじゃ。そんな分際で、わしは、お主を騙しておった。自分の身の丈の低さも知らずに、ただこちらの世界にきたことに浮かれ、都合よく神などいってお主を口車に乗せて騙し、お主の優しさにひたすら甘えておった。それは断じて許されることではない」

「……」

「春臣、お主の気持ちはうれしい。こんなわしを許してくれたことは、泣きたくなるほどにうれしい。でも、やはりわしは自分自身にけじめをつけねばならぬ。決着をつけねばならぬ。そうでなければ、わしの気がすまぬのじゃ。お主を騙したこと、迷惑をかけたこと、傷つけたこと。わしは『わしの身』を持って、それに償うのじゃ」

春臣の背筋に悪寒が走った。急なめまいに襲われたように視界がずんと暗くなる。

わしの身、だと。

「お前、馬鹿言ってるじゃねえぞ……」

媛子は、媛子は……。

冗談では済まされないうことを、こいつは言おうとしている！

春臣には、それが分かった。

止めなくてはならないと思ったが、先に、彼女が喋りだす。

「本当なら、これ以上お主に迷惑をかけぬよう、ひっそり神の世に帰るつもりであったが、今、気が変わった。お主に全てを知られてしまった以上、わしは、やはり、お主を裏切り、傷つけたその枷を背負わねばならぬのじゃ」

そして、彼女は春臣に背を向けると、急にその場からかけ出そうとした。それは、神の世へ繋がる、空間の亀裂とは違う方向である。彼女の視線は、社殿の奥にある、深い森へと向かっていた。

一体、どこに行こうと言うのか。反射的に春臣は彼女の方へ足を踏み出す。

「馬鹿野郎、何でそういう結論になる。行くな！」

しかし、彼女の手首を逃がさないよう、捕まえようとした時だった。

「触れるな!!」

悲鳴にも近い甲高い声を、彼女が上げた。

キーン、と周囲に彼女の声の残響して、春臣は手を止めた。あまりのことに、驚いたのだ。

「え?」

咄嗟に覗き込んだ瞳は本気の色をしていて、彼女はふうふう、と興奮したように肩を揺らして呼吸をしていた。

「無理して、わしに触れることはない」

いきなり、そう言う。

「ど、どうして？」

「痛いんじゃない、苦しいんじゃない。わしに触れると。わしは知っておる。お主の体はわしを拒絶しておるのじゃ。無理して、共に暮らすことはない。お主には、もうこれ以上ないほど苦勞をかけておる」

「媛子……」

ばれていたのか。

春臣の体から、為す術も無くずるずると力が抜けていく。

「春臣、わしに行かせてくれ。わしはもう、神の世にも、こちらの世にも、これ以上迷惑をかけるつもりはなくなったのじゃ。わしは知っておる。わしらホカノは所詮、この世の変容が生んだ単なる副産物に過ぎぬ。不良品のようなものじゃ。ネジの足らないガラクタなのだ。人の世界では不良品は捨てられて然るべきものじゃろう？　しかし、それならまだしも、その不良品が勝手に動き出し、自らを良品と称し、人々を騙したとなれば……弁解のしようのない、大罪じゃ。元の世界に戻ったところで、それが露見すれば、もう信用もされぬじゃろう。こちらの世界におったとしてもお主たちに負担をかけるだじゃ」

「お、お前！」

「じゃから、わしは、消えようと思つ」

春臣が捕まえる前に、彼女は社殿の外へひらりと降り立っていた。さらに奥の森へと続く道に足を向けている。

「来るな、春臣。ここで、本当に、お別れじゃ！」

彼女は振り返らない。啞然とする春臣を置いて、そっ言い残して、走り去ってしまった。

足元から崩れ落ちるとは、まさにこのことだろう。

春臣は媛子の姿が暗い木々の向こうに消えていくのを見つめていた間に、いつのまにか、両膝について蹲っていた。支えを無くした棒切れのように頼りなく、床と衝突する既のところ、かろうじて、両手で自分を受け止めている。

神社の古めかしい板張りの床から伝わる冷たさがささくれだった心を逆撫できるように、妙にひりひりと感じた。

悪寒が背筋をひたひたと這い回り、吐き気すらしそつである。喉元に酸っぱい何かがせり上がっていた。嗚呼、いっそ、吐いてしまえばいいだろうか。

「どうした？ 追わぬのか？」

聞こえたその声も誰のものか分からず、春臣はすぐに返事が出来なかった。

振り向こうとして、そこにいる『存在<sup>かみ</sup>』を思い出し、

「千両様、ですか」

と、訊ねる。

「まさか追うって『あの』媛子を、ですか……？」

「そうだ。他に誰がいる。早くせぬと、見失ってしまうぞ」

春臣の視界が灰色に煙る。

この神は、この神は、本気でそんなことを言っているのだろうか。たった今の春臣と媛子とのやり取りを聞いて、いったいどこにそ

んな行動を実行に移す意味があるだろうか。一体どこに、その行動によって見出される希望があるだろうか。

春臣は胃袋をぎりぎり絞るようにして声を出す。

「今の俺が、俺なんかが、彼女を追ったところで、何が出来ますか？」

「さあのうち……」

まるで、他人事のように、神は言う。

「また、あの夜叉媛に拒否されるのが関の山、というところか」

何だって？

春臣は耳を疑った。

これが、これが、神の言葉なのか。

それは、あまりにも、無責任に突き放した言い方だった。

ついさっきまでは、まるで傍で見守ってくれている母親のような優しさがあったのに、この態度の変化は何なのだろう。

そう思った瞬間、春臣の中で怒りの火種が燻りかける。何か、苛立ちに身を任せて、ぶちまけてしまおうかと思ったのかもしれない。しかし、すぐに、それも、春臣の中に訪れた、無気力の風に吹かれて消え去ってしまう。喉がガラガラになって、乾いた咳が出た。

「ゴホ、ゴホ……」

嗚呼。

全てが、溢れすぎて、無感情。

それが、今の春臣の中身だった。

すると、

「悲しみ、悲しみ、戸惑い、苛立ち、怒り、無気力、空虚、空虚、焦り、焦り、悲しみ、絶望、戸惑い、絶望、後悔、後悔、沈黙、沈黙、空虚、空虚、焦り、悲しみ、絶望、戸惑い、絶望、後悔、後悔、沈黙、後悔、後悔、沈黙……」

何かを、神が呪文を唱えるように、呟く。

「怒り、怒り、後悔、悲しみ……お前の中には、様々な感情がひしめいている」

どうやら、春臣の内を覗いているらしい。

「それが、何ですか？」

別に、特に、聞きたくもなかったが、一応、聞いてみた。

「うむ。お前がいよいよ、行き止まりのどん詰まりの袋小路に来てしまったということだな」

春臣は、

「そうですね」

と、感情のこもらないトーンで、肯定をした。

そして、それにつられて、言葉が口から漏れ出る。

「俺には、もう分からなくなってしまったんですよ……良かれと思って選んだ言葉が、結局、彼女を逃げられない場所まで、最後の崖っぷちまで追い込んでしまったなんて……信じたくない。でも、それは逃れようのない現実で、もう、何もかも八方塞がりなんです。」

ここに来て、起死回生だの、一発逆転だの、そんな方法は存在しない。あの深い闇の底に沈んだ彼女の心を引っ張り上げるなんて、とても、俺には出来やしない」

そこにあるのは、ただの、絶望、なんです。

春臣は呟く。

もう、全然ダメなんですよ……かみさま。

「そうか」

それに応じる神の言葉は、やはり、あっけらかんとしていた。

「それなら、仕方がないかもしれぬな」

春臣はそのまま魂が抜かれてしまうような心地になる。

仕方がないって……。

それが、今の自分にかける言葉なのか。

いや、そもそも、神だからといって、期待する自分がいけないのか。このなんともならない、雁字搦めがんじがらの状況を解きほぐしてくれることを、願うなんて。自分は甘えているだけなのだろうか。

神は言う。

「心に決めた固い意思というものは簡単に覆らん。あの娘の中の揺るぎない道理によってあの答えが導きだされているのならば、その考えを断ち切ることは容易ではないだろう」

「……」

そう、だよな。

無言で、眼を閉じる。

春臣は、震える体が入ったり抜け出たりする、空気を感じた。そ



して、そんな空気さえ、今や疎ましく思っている自分に気がついた。もう、そんなものなんていらぬから……。

いっそのこと、この体から、空気という空気を搾り出して、自分をすっからかんに出来ないだろうか。そして、何も出来ずに消えていくことは出来ないだろうか。

きっと、それこそが、今の自分に対する、唯一の救いになるのかもしれない。

だが、そこで、

「しかし……」

暗雲から、一筋の光が差し込んだような、神の声が聞こえた。

「榊春臣、お前の気持ちはどうなのだ？」

「え？」

思わず、顔を上げる。

「確かに先ほど、あの娘は全ての事に目を伏せ、背を向け、自ら、罪の闇の中に身を投じる決意をお前に告げた。それはおそらく、死ぬつもりであるということだろう。そして、それによって、お前があの娘に対して行えることは、もはや、何もないという結論に至った。説得は無理だという結論に至った。だが、それで、お前の気持ちまで納得出来るかと言えば、そうではないだろうか？ もし、それできつぱりとあの娘のことを諦めることが出来るのなら、お前は悲しみに暮れる必要も、後悔の念に苛まれる必要もないわけだ。よいか、心とは、世界が導きだす答え、道理、運命などで、簡単に割り切れぬものだ。それらとは違う次元に位置するものだ。殺しても殺しても、死なず、拭いても拭いても滲み出してくるのが、感情だ、

気持ちだ。違うか、人の子よ。お前の本心は、今にでもかけ出して、あの娘をもう一度、穏やかな暮らしを取り戻したいと願っているのだろう。どうだ？」

「そりゃ……」

言いかけて、こらえていた嗚咽が春臣の喉に、こみ上げる。ドクンドクン、と目尻に湿っばい熱が溜まる。

当たり、前だろ。

つつか、当たり前だ。

自分が、そう思うのは、めちゃくちゃ、当たり前なんだ。

頭の先の髪の毛の一本から、足の小指の爪の先っばまで、徹頭徹尾、当たり前なんだよ！！

だって、媛子を、俺は、俺は……。

「そうですよ。俺は……媛子を諦めたくない」

「そうだな。お前の気持ちはいつだって、そこにある。ちゃんとある。大事な内なる箱に入っている。そして、お前のその想いを紡ぎ出しておる『大切なもの』は、まだあの娘と繋がっておる」

「媛子と繋がってる、大切な、もの？」

春臣がそれを疑問に思うと、神は微笑んだようだった。

「ふふふ、それはわらわが言うまでもない。なぜなら、お前はそれにすでに気づきかけているのだからな」

気付き始めている……。

春臣には、その神が一体何を言おうとしているのか、まだ、分かんかった。

しかし、媛子を思えば、自然と沸き上がってくる気持ちの根っこにあるもの、その輪郭を春臣は知っている気もした。

そう、それは、これまで春臣が出会い、関係を築いてきた人々全てに、『つながっている』モノ。

手繰り寄せれば、どこまでもどこまでも、際限なく広がる何か、だった。

そして、それは、他者を拒絶し、孤独になろうとしていた自分とは、全く対極に位置するモノであることも、何だか分かる気がする。

すると、神は高らかに歌うように、言った。

「さあ、いざ訊ねよう、人の子よ。あの娘の気持ちは今は関係ない。お前の言葉で、お前の声で、お前の答えを、わらわと一つ一つ確認していいかどうか」

「かく、にん？」

「うむ。まずは、お前にはあのホカノと共に生きておく覚悟あるのか？」

「……はい、もちろん」

自分自身に問いかけつつ、春臣は頷く。

「それが、困難な道のりと知っていて尚、進みたいと思っているのか？」

「はい」

「お前は、あの者を愛しているのか？」

「はい」

「その気持ちは、誰にも、根絶やしに出来るものではないな？」

「はい」

「当然、それはあの娘自身にも、だな？」

「……はい！」

そう言い切った途端、体中に新鮮な血液が巡るのを感じた。冷たい川の流れの中で目覚めるような、透明な清々しさと瑞々しさを春臣の意識が取り戻す。

まだ、頑張れるような気がした。

膝を起こして立ち上がる。

「よし、ならばお前は、大丈夫だ。お前にはまだ繋がりを保とうとする気持ちがある。輝きに満ちた自信がある。ならば、遠慮はいらぬぞ。自分に納得ができるまで、最後まで、戦つてくるといい。背後のことは心配するな。わらわたちがきちんと始末をしておこう」「始末、ですか」

「そうだ、後のことは一切合切、わらわたちに任せるのだ。だから、安心せよ。何も考えず行つてくれればよい」

神のその言葉はこれまでに以上に頼りになるものだった。

そして、ふっ、と姿が風にかき消えてしまう。

もう、行け、という意味に違いない。

春臣は背後を振り向く。

と、その刹那。

ふいに、春臣の中で湧き出るように、これまでの道のりで離れ離れになってしまった友人たちの顔が思い浮かんだ。

皆、無事だろうか。そんなことを思う。

願いがかなうなら、どうか、無事でいてくれ。

続いて、罪悪感が胸を刺す。

嗚呼、彼らをこんなことに巻き込んで、本当に、申し訳ない。

とても面目ないし、全ての借りを返せないかもしれない。  
でも、俺は弱いから、きつとこれからも頼りにしてしまうだろう。  
手を引いて欲しいと、幼い子どものようなことも頼むかもしれない。  
い。

春臣は切実にそう思う。

でも、それでも、一緒にいてほしい。

「必ず、あいつを連れ戻してくるからよ!」

そう、全てをあるべき場所へ。

春臣は目の前にぽっかりと暗闇の穴を開けた木々の向こうを見つめながら、おもむろに膝の砂を払った。心の中でカウントする。

さあ、走れ!

154 蒼日鷲命の作品

春臣の姿が神社の境内から消えた後。  
その神社の上空では、一羽の鷲がゆっくりと町を見下ろすように旋回していた。

巨大な両翼を雄々しく広げ、まるで風を従えるかのように無理なく飛行するその様は、ただの鳥とは思えないほどの超越感に満ちていた。

さらに、太陽の光を受け、燦然と輝く羽と鋭い瞳には、並々ならぬエネルギーに溢れている。

鷲の姿をした神、蒼日鷲命である。

彼は今、こうして町の上空を飛び、大地を睥睨し、静かにその様子を探っているのだ。

と。

よく見れば、その鷲の神は何かを口に啜っていた。その何かは、太陽の光に触れ、瑞々しい緑色を反射させる、木の枝だった。

それは千両神の魂が宿る枝だが……。

「ふむ、あいつも、行ってしまったか」

ふいに、千両神の声がその枝から発せられた。

「では、しばらくはこちらに意識を戻して、高みの見物とするのも良い。今日は他にもいろいろと町で騒動が起きておるようじゃし」

と、一仕事終えて、暢気そうに言う。枝から伸びている葉が、風に乗って涼しげに揺れている。

「おいおい、その高見の見物が出来てるのは誰のお陰だよ」

そこで、忘れてくれるな、と鷲命が羽をはためかす。枝を落とさないように、器用にくちばしを動かす。

「俺が、こうしてわざわざ空を飛んでやってるからだろうが」

鷲命はそう言って感謝の言葉を求めたつもりだったが、千両神は特に礼を言うでもないようだった。

「そうだな、わらわの体は空を飛べぬし、こうするのが一番であるう。我ながら名案だった」

「おい……」

「うむ、しかし、空を飛ぶというのは久々だが、やはり、とても気分が良いものだな」

鷲命の言葉を見無視して、まるで王座に腰掛ける女王のように、優雅な態度で振舞う。

それに対し、鷲命は嫌味たっぷりにこう返した。

「ハツハア、そりゃそうだ。何と言っても他の神をこき使ったの見物だからなあ」

「ふむ、だが、それが何だというのだ？」

「うん？」

「お前がこの町にいる時は、主であるわらわの命に従うと、この間、そう申したではないか」

「う……」

それまで攻撃的な態度を見せていた鷲命は形勢が悪化したと思っただ瞬間、急に言葉を詰まらせる。

「まさかと思うが、今さらその約束に文句を言うつもりではないだろうな。境内でお主がわらわに頭を垂れたことは、しかと両目に刻んでおるぞ」

これには、ぐうの音も出ない。

全く、その千両神の言う通りなのである。

しかし、そうだとしても、何だってこんな下僕がするような仕事を俺が……。

(……やれやれ、目も無いクセして、偉そうに……)

聞こえないよう、そう小さく嫌味を言ったつもりだったが、千両神はそれに対し、すぐに反応を返した。

「おい、聞こえているぞ」

と、高圧的な声である。

「げっ」

「お前、場合によっては、わらわがお主を無許可の領地侵犯の罪で、上の神々に訴えることが出来ることを忘れておるわけではないだろうの?」

「う、うへえ……」

「領地の問題はかなり面倒だぞ。場合によっては、神としての位を落とされかねない」

その脅すような口調に、鷲命は首筋の筋肉が引きつるのが分かる。全く、冗談じゃない。

しかし、この神は本気なのである。



「こりゃ、マジで下手な発言は命取りになりかねないな。」

「しかしまあ、わらわは非常に寛容であるから、お主に対してこうして『平和的な譲歩』を試みておるわけだな」

千両神の言葉が耳元で囁くそうに聞こえる。

「そのところをきちんと理解してもらいたいものだな。そして、ゆめゆめ忘れるな。場合によっては、わらわがお主の将来を左右する立場にいることを、な」

「……り、了解」

くちばしの先に妙な感じのむずかゆさを感じながら、わずかに頷く。

「ほれ、どうした？ 高度が落ちてきたぞ、もっと高く飛ばぬか」

そう千両神に叱咤され、渋々ながら鷲命は両翼をはためかせた。ぐうん、と鷲の姿が太陽に近くなる。

真夏の太陽が近づく。

見下ろす町はうつすらと青く、じりじりと大地の焦げる匂いがしているように、鷲命は思った。自分の行く末が焼けて無くなっているわけじゃないよな、とそんなことをふと思って、爪の先がひんやりとした。

「しかし、あの人間の坊主……」

ふと思いついたことを、鷲命が呟いた。

「……何だ？」

半分眠っていたのか、千両神が面倒くさそうに呟いた。

「いや、だからさ、あんたはよ。何だつてあんな風にあいつを、『試す』ような真似をしたんだ？ あの手この手で気持ち揺さぶるようなことしやがって。何が天罰を下す権利を与えるだ」

すると、千両神は相変わらず暢気そうな口調で、

「何だ、お前でもそんなことが気になるのだな」

などと言う。

「人間よりも自分の興味が最優先のお前が……」

「あのなあ、それじゃ俺がまるで人々のことを何も考えていない不良の神みてえじゃねえか」

「何を言う、事実であろう。あんな大層な『作品』を、暇を見つけては作っておったのだから……」

千両神のその言葉に、鷲命は、すぐに合点がいった。間違いはない、自分の例の手下の話だ。

「……『ゆずり』のことか？」

「うむ。まあ、どれほど時間をかけたのかは知らぬがな、あんなことに夢中になっておれば、本来の仕事がおろそかになるというのは、

言わずとも知れる。説明するまでもない、自明の理というものだ」  
「……」

反論の言葉はなかった。

それは事実なのである。あの時雨川ゆずりを創り上げるのには、骨が折れたものだ。

しかし。

と、千両神はそこで逆説の言葉を挟む。

「しかし、中々に見目麗しい娘ではないか。それに、どうやってこしらえたかはしらぬが、あの娘は『別のホカノとはひと味違う、魂の輝き』を持っておるな」

その指摘に、鷺命はうつすらと笑う。

「そりゃそうだ、あいつは、ただのホカノじゃねえからな」

すると、途端に、千両神の意識に乱れが生じたのが分かった。鷺命の言葉に驚いたらしい。

あの人の形をしていながら、人に非ざる者。

時雨川ゆずりの正体が、ホカノであることにはこの神は気がついてきたようだが、それよりさらに深い所にある真実を見出すことはさすがに不可能だったと見える。

「どういうことだ？」

「実はな、あいつは『生身のホカノと死んだ人間の魂を繋ぎあわせた代物』なのさ」

「な、なんと……!」

千両神は息を呑んだ。

「それは、初耳だな。あの娘が夜叉媛と同じくホカノであることはこの土地にやってきた時点で知っていたが、まさか、人の魂と繋ぎあわせたものだとは……知らなんだ」

し、しかし、何故そのような無茶なことをしてまであの者を作ろうとしたのだ？

と、千両神の口から疑問が提示される。鷲の神はそれに対し、自信満々に、にやりと笑った。

「簡単に言えば、この世界を監視する手下が欲しかったのさ」

「手下……」

「そうだ。それも、神の目線ではなく、人々の目線から世界を見つめることの出来る手下がな」

「ふむ」

「まあ、こつちの世界でいろいろと小回りが効く存在ってのは使い勝手がいいぜ。ちょいと大食漢だったことをのぞけば可愛いもんだ」

ガツハツハ、と鷲命は笑う。すると、つい、千両神の枝を取り落としそうになって慌てた。慌ててくちばしで挟み直す。

「き、気をつける」

「お、おう、すまねえ。ともかく、あの時雨川ゆずりはだな、お守りを配って神の信仰も広めつつ、俺に人の世の情報を持ってきてくれるわけよ」

あんたのとこの、巫女のお嬢ちゃんと同じだな。

鷲命は言う。

「さつきのことが、ふむ。しかし、一つ気になったのは、人の魂を混ぜた、のか……？」

「ああ、そりゃ当たり前さ。ホカノは神の世の存在。人の世で活動をさせるには、まず、存在が消滅しないように、その対策しておかないといけないのは、あんただってよく分かってるだろう？」

住んでいる世界が違う者はその世界では存在出来ない。姿形を保てない。

それが世の中のルールだ。

だからこそ、千両神はこちらの世界の木の枝を依代よりしろとして魂を宿らせているのだし、鷲命も、こうして、鷲に魂を宿らせているのだ。

「それで、こちらの世界の物である『人の魂』を媒体にしたということか。それをホカノにつなぎとめることで、存在を保っているというわけだな」

「ああ、大体そういうことだぜ。ちなみに、あの夜叉媛とかいうホカノは、お守りの中に入れた神の葉に蓄積された存在の力で、姿形を維持出来ているようだが、あれでは機械に入れる乾電池のようなもの。永続的な効果は期待できない。もって一日か、二日というところだろう。それに比べて、人の魂は元々こちらの世界の物であり、簡単には消えねえからな、それを選んだというわけだ」

そう説明すると、千両神はいろいろと考え込んでいるようだった。鷲命が苦勞して作ったゆずりの構造をじっくり理解しようとしているのかもしれない。

「しかしねえ、あのホカノという生き物……」

ふいに、鷲命は思い出したことを呟いた。

「何だ？」

「いや、いろいろ試していて、気がついたんだが……奴らはな、非常に柔軟性に富んでいるんだ。まるでくにゃくにゃと形を変える粘土だな。あいつらは……様々な環境に適応する力が飛び抜けている」「それは、まことか？」

驚命は静かに頷く。

「ああ、あいつの髪を見ただろう。まるで青空をそっくり写しとったかのような目の覚める蒼色だ」

千両神も頭の中に思い浮かべたらしい。

「あ、ああ」

と返事をする。

まあ、誰もが一度見れば目に焼きつくほどののはつきりとした色だ。忘れるなどということはありえないだろう。

「しかしね、これがね……ああ、さすがにちょっとバカげてるよな……」

言いかけて、驚命は言葉を濁らせる。

さすがに、この事実は信じてもらえるか分からない。

「何だ、もったいぶらずに言え」

「いや、実はこれがねえ、『ただの比喩』ではないんだぜ」

「どういうことだ？」

「だから、言葉の通りだ。あのゆずりはな、『そっくりそのまま青空の色を髪に取り込んだ』んだよ」

「なに!？」

驚くのも無理はない、と驚命は思う。

何しろ、話している驚命自身、まだ信じられないのだ。

しかし、紛れもない事実ではある。

「これは驚くべきことだぜ。まるでこの世界に住む、カメレオンって動物のみみたいだ」

興奮を隠し切れず、驚命の声はわずかに上ずり、言葉が乱れてしまふ。

「きつと、いつもあいつが山の中、空に近い場所に居座っているせいなのだろうが……こいつはマジで驚くべきことだぜ。あいつらはな、住んでいる『世界』の状態に適応出来るよう、体を進化させることが可能なんだよ!」

## 155 呼吸をする、セカイ

鷲命のホカノに関する話を聞き終わると、千両神はずいぶん長い間、沈黙をした。

その話があまりにも突飛で、鷲命に呆れているのか、それとも、少しでも理解をしようとして理屈を積み上げているのか、どちらかなのだろうと鷲命は考えていたが、どうやら、先ほどから様子が違うことに気がついた。

「とすると、やはり、わらわの推理は……」

などと、意味のわからないことを、ぶつぶつ呟いているのだが、その声が先ほどから、非常に余裕に満ちたものになってきているのである。

困惑でも、呆然でも、愕然でも、ない。

確かな自信に満ちた、勇気ある冒険者の足取りのような、声なのである。

鷲命はそれが意味することが分からないのと、自分が丸っ切り忘れられていることに、すっかり苛立っていた。

一体、いつまで、この神様は自分の考えをこねくり回しているのか。

さすがにうんざりして、鷲命は強引に話を聞く。

「千両神さんよお、推理が何だつて？」

しかし、

「……ちょっと待て……うむ、やはりそうか」



相変わらず、口元の木の枝に宿った神様は、自分の中で何やら勝手に理論を組み立てている様子だ。

「おいおい何だよ、何考えてるか知らねえが、こつちの話もそろそろ聞いちゃくれないか？」

「うっん？」

まるで、寝起きで不機嫌な猫のような反応だ。

「何だ、うるさいぞ」

「あんたさ、そう言えば、さっきの俺の質問にちゃんと答えてないだろ」

「質問？」

千両神は素っ頓狂な声を出す。

やはりそうだろうとは思っていたが……。

どうやら、話があらぬ方向に向かったせいで、先程の言葉をすっかり忘れてしまっているようである。

驚命は嘆息しつつ、話を元に戻す。

「だから、何であの少年にあんな揺さぶりをかけたのかってことだ」

すると、千両神はさも簡単そうに、なんだそんなことが、とため息を吐いた。

「何も大したことではない。あの少年がああホカノと共に暮らせるか、その覚悟と適正が本当にあるのか知るためだ」

「おいおい。あれ、マジだったのかよ！」

今度は驚命が驚いた声を出す番だった。

「嘘だろ!?!」

「何がだ?」

「ほ、本気でこのままあの少年とホカノと一緒に生活させる気か?」

ありえないぜ!

「ふふ。まだ、完全に決まったわけではないがな」

あの娘が無事戻ってきた場合の話だそ、と千両神は言う。

「でも……じゃあ、仮にあいつらが無事に戻ってきたとしたら、本当に……」

「……ああ、そのつもりだが、それが何かおかしいか?」

千両神は妙に落ち着いていた。

それは一体、どういう了見だ。

彼女の考えが読めない。そのことが、驚命に千両神への不信感を募らせた。

「おかしいだろうよ!」

思わず、声を張り上げる。

「いいか、それは世界の理をねじ曲げるってことだ。ホカノはこの世のものじゃねえ。神の世界に在るべき存在だ。だったらこれ以上、あの異質な存在をこちらの世界に留めておくのは間違いだ。その理屈も分からねえあんたじゃねえだろ」

すると、急に千両神は残念そうに声を落とす。

「なんじゃ、てっきり、驚命はわらわの味方だと思っておったのがなあ。今までだって、あいつらのことに興味を持って見守っていたではないか。わしが何も手を打たず、あやつらをただ放置しておくだけと知って、お前は喜んでおったであろう」

「あ、あれは、調査のためだった！」

知らず、興奮していたのか、言葉が早口になる。

「前例のない、特殊な状況だったしな。人とホカノが共生している状況も、短期間で終わるなら、それも良しと思ったのだ」

「短期間で終わる？」

「考えれば分かるだろう。あいつらは最初から一緒に居られるわけがねえんだ。住むべき場所が違う。だから、遅かれ早かれ、ちょうど今みたいな状況に陥り、全てが破綻するのは目に見えていた。俺はそれで終わりと思っていた！ それで俺の調査は、完了のはずだった！」

けれど……けれど、

「あんたは動いた。何もしないと書いていたはずなのに。絶望に打ちひしがれてたあの少年の耳元で囁いたのは……あいつらにあそこまで干渉したのは、話が違うと言ってるんだ！」

すると、千両神はふん、と鼻で笑う。

「話が違う？ わらわはお前に、最後まで何もしないと、断言していなかったはずだが？」

「何？」

驚命は面食らう。

「う、嘘つけ。あ、あんたは、確かに……」

すぐに過去の千両神の発言を思い返すが、残念なことに、よく覚えていないことに気がつく。

くそ、と舌打ちをした。

「……だ、だが仮に、そうだとしてもだ。あんたが干渉してまで、このままの状況を続く限り維持していくのは、間違っている！」

ちつとも分からねえ。

苛立ちに耐え切れずそんな声が漏れた。

「俺は……俺は、あんたに、俺には言えねえ何かもつと別の、特別な考えがあつて、あいつらを、あえて放置しているんだと思つていた。だから、何も言わなかつた。けれど、そんな破天荒な話は想定外だ」

つい、カんで枝をくちばしで折りそうになつてしまつたのを、驚命は、自制心でブレーキを掛ける。

「いいか、俺が他人のことに口出しするのは滅多なことじゃねえよ。変なことは考えるな」

しかし、千両神は相変わらず、余裕で堂々としている。

「別に、わらわは自身の考えを、お前に理解してもらおうなどとは元々考えていない。ここはわらわの土地じゃ。わらわが、わらわの

考えでもって、わらわの思うとおりには、続ける」  
「……」

つまり、何を言っても無駄というわけか。

鷲命は絶句して、考える。

まあ、今まで他者の言葉を無視し、好き勝手な神としてやってきた俺が、今更誰かを思いとどまらせるなんて、確かにふざけた話だよな。

しかし、この神の行動はこちらの世界に『大きな負荷』を産む可能性がある。

何しろ、世界が淘汰しようとしている関係を、いくら神とはいえ、無理やり手を加えて繋ぎとめようとしているのだから。

だから、

だから、何としても、防がなくては。

「まあ、そう興奮するな、蒼日鷲命よ」

やはり、あくまで千両神は落ち着いている。

「今からきちんとお前にも理解できるよう説明してやる。特別な理由というのを、な」

「特別な、理由？」

「そうだな、少々突飛な話かもしれないが、お前に理解してもらえるよう努めよう」

そして、千両神は静かに一呼吸を置いて、話し始めた。

「まず、第一に、わらわは、この状態が不自然なものであるとは考えていない。かなり以前から、な」

「ど、ど、ど、どういう意味だ？」

「簡単だ。状況はその逆、むしろ自然な状態だということだ。わらの考えでは、あのホカノは最初から、遅かれ早かれこちらの世界に来る運命にあった」

「い、意味が分からないぞ。何を言ってる？」

一体、何を根拠に……。

「それは、お前がさつき一番適当な答えを申したではないか。あいつらは非常に柔軟性のある生き物だと」

「……そ、それは、たまたま」

「いや、わらわはそう思わなんだ。その独特な柔軟性は、神の世の住人からこちらの世界の生き物になるために必要な特性だったのだ。これはわらわが今まで考えていた推理と、何の無理も矛盾もなく符合する」

「なに、を、言ってる……」

「ホカノは、崩壊していた世界の一部なのだろう？　それが意味することがまだ分からないのか？」

「……おい、それって」

吸った息が凍りつくかと思った。

「いいか？　ホカノとは、姿を変え、生命体となった『世界そのもの』であり、滅びかけた神の世界が生き残るための、『手段』なのだ」

空の頂上にあつた太陽は、次第に西に傾きつつあつた。正午を過ぎた神社の森は、そこに住まう生物たちが引き起こす騒がしさと、何か、見えないものを守るうと枝を伸ばす木々の静寂がひしめきあい、ぎしぎしと異様なほどに密度が高まっているようだった。

ふいに、風が止んでしまうと、それまで揺れていた木々たちの影は動かなくなつた。野放図に広がつた枝から、そこから生えている小さな葉まで、ピタリ、と残らず動きが止まる。

それはまるで、彼らが急に目を光らせ、神経を尖らせて、周囲に警戒しているようだった。

ザリツザリツ。

と、見れば、そんな木々の中を、細く伸びる小道を、一つの小柄な影が少しずつ前進している。のろのろ、のろのろ、と動いている。疲れて早く進むことが出来ないのか、その影は持っている杖に縋りつくようにしているのが分かつた。次第に、その影の輪郭が明らかになる。

杉下老人である。

彼は、つい数時間前まで、榊晴臣の宅におり、さつきの神の風によつて倒されてしまつたかに見えたのだが、その後、こつそり家を抜け出し、先に進んでいつた隆二の後を追つて、この森にやつてきたのだつた。

遅れること、数時間でようやくここまでたどり着いたのである。

しかし、追つてきたまではよかつたもの、その行動には、ある問題が生じていた。

それは。

「ぶつ、ぶつ……」

老人は、荒く呼吸をしながら、立ち止まると、持っている杖に縋りつき、呼吸を整えた。先程から少し進むたびに、ずっとこの調子で、少し進んで立ち止まり、また進んで立ち止まり、を繰り返しているのである。

「くそう、ふう、ふう……老いた体というものはいつでも不便なものだな」

吐き出す息と共に、そう悔しそうに言葉を滲ませながら、また、歩み出す。

一步、また一步と踏み出すたびに、老人には、体の中で小さな悲鳴が上がるのが分かった。さながら、部品が錆びついて思うように動かなくなつた機械のようだ。

嗚呼、若い頃は、あんなにも体はしなやかに躍動していたというのに……。

嘆息する老人の心の水面に、静かな絶望が打ち寄せる。

こうして、必死にあの榊春臣の後を追ってきたというのに、その後姿を見つけれないうちから、このザマとは。ふがない話だ。

しかし、それにしても。

老人は周囲に視線を向けるため、首を上げる。

あの、隆二の奴はどこへ行ったのか。先に行ったというのに、姿が見えないところを見ると、あのガキの仲間にやられてしまったのかもしれんな。

だとすれば、厄介なことだ。

「おちらの手下の者どもも二人ともやられてしまったようだったしのう」

老人は言いながら、今なお、榊少年宅に気絶して寝転がっている



であろう、屈強な男達を思い出す。

「全く……」

他に連れてきた者はいないし、だからといって、今更他の誰かを呼び寄せるのも、時間がかかる上、面倒だ。

何ということだろうか。

「全く、誤算ばかりだ！」

そう撒き散らすように叫んで、老人は杖で地面を強く叩いた。

「全く、全く、全く役立たずどもめが！！」

何度も、何度も、地面に杖が突き刺さり、土がえぐれ、その飛礫<sup>つぶて</sup>がぐちゃぐちゃに、めちゃくちゃに、周囲に飛び散った。くそ、くそ、ちっとも、わしの思い通りに動かん。

「結局、最後に信じることの出来るのは、わし自身ということか……」

そう、老人は吐き捨てる。

ならば、ならば、

「もはや、他の、誰の、助けもいらん」

わしだけ、わしだけの力でいい。

「わしだけが、わしのこの手で、神の力を掴みとるのだ」

おのれ、今に見ておれ、榊春臣。

お前を出しぬいて、あの赤髪の女を手に入れてやる。

そして、そして、念願の神の力を、我が手に。

そう思うと、笑いが自然とこみ上げ、体が揺れる。

「ハハハハハ……」

ガハハハハハ。

しかし、その老人の笑い声は、すぐに呼吸が詰まって、ヒューヒューという喉の奥から出る苦しそうな音に変わった。大きく咳き込み、老人は持っていた杖に寄りかかって、肩を上下して呼吸をする。

「はあ、はあ、くそっ……これが老いというものか……全く、くだらん」

しかし、この時間の残酷な流れからは誰も逃れられない。

それは老人でも、昔から経験上、痛いほどに知っていた。

そう、生きとし生けるものは皆、最後には命果て、死に絶えるのだ。今まで、そうやって消えていった者たちを多く知っている。

あの、楠哲夫もそうだった。

老人は思い出した。

わしのプライドをズタズタにしたあの、憎き男でさえも、だ。

体を病に侵され、みるみるうちにやせ細り、ついには、自分で起き上がることもできなくなり、永き眠りについた。そう、さっぱりと、呆気無く、息を引きとって、死んだのだ。

わしが手を下す暇もなく、だ。

人の命は、斯様かようにも、儂なまいのだ。

哲夫の死を聞いた時の心境を、老人は今でも鮮明に覚えている。

そして、そのことを思うと、老人は自分の体にまさにその死がひたひたと手を当て、刃を突き立てる場所をどこにするかと品定めさ

れているような気分になった。

鼓動が早まり、胸が窒息しそうな圧迫感を感じる。

「ば、馬鹿な……」

強く首を振る。

「わしはそんな苦しみからは近いうちに開放されるはずなのだ。神の力を手にすることができれば……」

そう、もうすぐに。

わしは、無敵になるのだ。

わしが、わしこそが最強なのだ。

きつと、死をも克服出来る。

そうだ、そのはずなのに。

それと同時に、どうしようもなく、老人の胸の奥がざわついた。

自分が存在の消滅から逃れようとするたびに、どこまでも振り払っても、『それ』はついてくる。

ああ、これはきつと、あの少年の中にあるものと、同じものだろう。老人は思う。

眼を閉じて『それ』に触ると、それは、どこまでもざらりざらりと指に引っかかり、加えて、うっとおしいほどの、重みもあった。

全く、一体なんなのだ、これは。

長い間、胸の奥で凝り固まったしこりのような……。

すると、

そこで再び、

あの、楠哲夫のことが思い出された。

フラッシュバックのように、映像が次々と目の前に映し出される。

急に眩しい光に照らされたように、老人は思わず目を伏せた。

どうして、あいつのことを今日は何度も思い出すのだろうか。思い出したくもないのに。

『杉下さん、あなたは時々、とても悲しい目をしていることがある』

あいつは、いつだったかこう言ったことがあった。

『あなたは、自分の人生が寂しいと思ったことはありませんか？』

あの時、自分は、どう答えたのだったか。確か、そんな馬鹿なはずはないと笑って返したような気がする。自分の人生はとても満足いくものだ。少しも、後悔などはない、と。

しかし、哲夫の表情は変わらず、いまだ静かに老人のことを憂いているように見えた。

『私はね、前にも一度、そういう目を見たことがあるんですよ。孫のこと、なんですがね』

と、自分の話を始めた。

『あれは、私の妻が死んだあの日のことです』

哲夫は遠い目をしながら、淡々と話した。

『私はね、あの時、自分から魂が抜けちゃったと思った。とても大切なものを失った悲しみで、他のことが全て頭から消えちゃって、このままどこか、誰にもいないところに行ってしまうかと思ったのですよ。全く、それまで何十年も生きてきたっていうのに、情けない話ですがねえ』

そう言って自嘲気味に、茶化すように、哲夫は笑った。しかし、その裏には、深い後悔の念が横たわっているのを老人は感じとる。

『しかしねえ、あの時の自分の姿を孫に見られたのが一番の失敗だった』

そう語る姿は心底悔しそうだ。

『あの時の、私を見た孫の顔と言ったら、全ての悲しみを通り越した、失望だったんですよ。あいつはあの時、とても大事なものを同時に失ったんです。一つは、よく面倒を見ていた妻だったが、もう一つは、密かに将来の目標にしていた私という存在だった。あいつはねえ、なぜかは知らないが、私に憧れてた』

それは、後になって知ったんですがねえ。

『あいつは、きっとあんな私の姿を見て、がっかりしたんでしょう。いや、がっかりなんて生やさしいもんじゃねえ。幼いあいつには、それだけのことで、ぎりぎりの崖っぷちに追い詰められるような深い絶望を知ってしまう原因になったんです。あいつはあの時、信じていたものを全てを断ち切られた気持ちになったんだ。触れただけで凍りつきそうな、冷たい孤独に触れてしまったんだ』

そんな、悲しい目付きをね、私に向かってしてたんですよ。あの冷たい視線、ぞっとしました。

きつと、今ではすっかり忘れちゃまってるでしょうがね……。

そうして、それ以来、哲夫は、プツンと糸が途切れたように、急に黙りこくってしまったのだった。

そこで、映像は途切れる。

ふん、なぜこんなことを思い出すのだろうか。

老人は、鼻息を飛ばした。

単なる老いぼれの戯言ではないか。一文の値打ちもあるわけがない。聞く価値などない。覚えている必要すらない。

そんなどうでもよい過去の些事にはかり囚われているから、あいつはわしに負けたのだ。

もっと未来に目を向け、完璧な独占と、十分な満足を感じることこそが、人間には必要だと言うのに。

深い溜息を吐きながら、老人は額の汗を拭う。

そして、その汗が妙にひんやりしていたことに一瞬ぎよっとするが、すぐに、そんなことはどうでもよくなった。

「  
」

そこで老人は、急に接近してくる大きな羽音を聞いたのである。

何だ？

ふいに、見上げると、巨大な鳥の影が自らの頭上に降り立ってくるところだった。

気を失っていたのはどれくらいだったのか。

杉下老人は、いつしか自身の体が暗闇の中に横たわっているのに気がついた。

ここは、どこだ？

どこかの部屋の中なのか？

しばらくの間、自分に起こった状況について、ボヤけた意識で分析し、ゆっくり体を起こす。そして、周囲に首を巡らすが、見渡すかぎりに視界は濃密な闇で満たされていた。

闇、闇、闇、闇、闇、隙間のない、そして、逃げ場のない、闇。

何か明かりになるものはないかと頭上に目を配ってみる。しかし、やはり電灯のスイッチはおろか、天井があるのかさえ、分からない。

「……………」

空気が微かに流れているところを考えると、閉じられた空間ではないのだろうか……………」

しかし、そう考えても、ここがどこなのか老人は全く検討がつかなかった。

そもそも、自分は今まで、どこで何をしていたのか。

確か、最後の記憶は、頭上に大きな鳥が現れて、目の前が真っ暗になったのは覚えている。

しかし、それからの記憶ははさみでぶつとりと切り取られたかの

ように、ブラックアウトしていた。

「まさか、この暑さで気絶をしてしまったのか？」

だが、仮にそうだとしても、こんな奇妙な場所に横たわっていた理由にはならない。目覚めるのであれば、あの森の中の小道で目覚めるべきなのだ。

とするならば、他に有り得べき可能性は……。

「わしは、何かの夢を見ているのだろうか？」

ありえない話ではない。

しかし、それにしても鮮明過ぎる夢だ。老人は不思議に思った。

体の感覚や意識があまりにもはつきりし過ぎているのである。普通、夢とは、もつとあやふやで、曖昧なものではなかったか？

むづ……やはり、分からない。

と、

「恐れし者がやってきた……」

どこかともなく、声がした。

「恐れし者がやってきた、恐れし者がやってきた、今日はほんに、面白き日よ」

まるで、歌うように軽やかに、その声は言う。それは、耳元で囁かれているようで、遠くで微かにたゆたっているような声だった。

「騒がしき者がやってきた、騒がしき者がやってきた。今日はほんに、面白き日よ。今日はほんに、面白き日よ」



姿が見えないのをいい事に、その声は老人をからかうように、そこからじゆうを飛んで跳ねた。まるで、透明な子どもがそこからじゆうを走りまわっているようで、不気味だ。

老人の背筋に怖気が走る。思わず、反射的に叫んだ。

「何だ、お前は！ 何者だ、姿を見せる！」

「おうおう、老いてなお威勢のいいことよ」

返事は返ってきたが、その声はまるで四方八方から聞こえてくるようで、掴みどころがない。

「いいからわしの質問に答える。貴様は誰だ！」

すると、

ふふふ。

腹の底をぬるりと冷たい手で撫でるような、そんな薄ら寒い笑いが聞こえたかと思うと、

「……ならば答えよう、わらわはお前が望み、追い求めてきた存在、  
『神』だ」

その声は言った。

思わぬ答えがぼろりと転がってきたことに、老人は絶句する。体重を預けている杖が揺れた。そのまま倒れて、折れてしまいかもしれない、と思った。

「神、だと？」

ごくり、生唾を飲み込む。

「如何にも」

明瞭な声が答える。

答えは、肯定である。ここで普通の人間ならば、いくらこの不思議な声が超自然的さを醸しだす空気をまとっていたとしても、すぐに真の神の声だと鵜呑みにする者はいないだろう。

だが、老人は信じた。一切を疑わなかった。

そうか、そうか、この者は神なのかと、がっちり心と心の鍵穴に答えがはまったのである。

そう、それならば、全て合点が行く。

やはり、わしは選ばれた者であったのだ。全てが、こうなる運命にあったのだ。自分はその素質がある。やはり、わしは、神の力を手にできる存在なのだ。

老人の老獪な瞳が不気味で危うげな輝きをキラキラと見せる。

この声の主は、神に違いない！

では、そうになると、この暗闇は神が見せている幻なのか？

「いや、それは少し違う」

急に言葉が飛んできて、老人は心を読まれた気がし、ぎょっとした。

「な、何が違うのか？」

「これは、幻ではなく、お前の心の中の風景だ」

「わしの、心の中、だと？」

「そうだ、お前にとっては、懐かしいのではないか。お前は昔からここにいた。ずっとここにいた」

老人は驚いて辺りを見回すが、触れられる物も何もなく、空っぽなだけの暗闇が自分の心の中とは、とても思えなかった。

わしの中身は、こんな、がらんどくなはずがない。

わしはもっと、もっと、満たされているはずだ。幸福な気持ちが溢れているはずだ。

そこへ、神の声が続きを話す。

「わらわはお前の心の中にいる。だからお前の心が読めるのだ」

「……なに！」

本当に、ここが、自分の中だと言っのか？

とても、信じられない。

「本当だとも、嘘ではない」

胸中をずばり言い当てられて、老人は言葉を失う。心を読まれていることは間違いないようだ。

「しかし、お前は、いつも何かから逃避しているのだな」

すると、まるで、面白いものを発見したような明るい無邪気な声で神は言った。

「何？」

「恐怖と孤独を常に、感じている。そこから逃げ出そうとしているな。わらわにはそれが手に取るように分かるぞ。お前の中にあるもの、それは」

恐怖と、孤独だ。

「孤独、恐怖、孤独、恐怖、孤独、恐怖、孤独、恐怖、孤独、恐怖、孤独、恐怖、孤独、恐怖、孤独、恐怖、孤独、恐怖、孤独、恐怖、孤独、恐怖、孤独、恐怖、孤独、恐怖、孤独、恐怖、孤独……」

いきなり、壊れたレコードのように、神の声はキイキイ声で繰り返す。どこまでも終わる気配のないその冷たい言葉の羅列に、堪らず老人は声を荒げた。

「う、うるさい、やめろ！」

止める声が裏返った。知らず、冷や汗が喉を伝っている。

ええい、なんだこれは。

まるで、見えない手が体中をまさぐっている気もした。ぶるぶると背中が震える。

なぜ、わしはこんなに動揺しているのだ。

「分かっているぞ、分かっているぞ、わらわには、全て、な。お前は、この感情から逃れるために、神の力が欲しいのだろう」

「逃れる、だと？ 違う。わしは、力を手に入れ、完全になるのだ。他者を圧するために」

そうだ、そして、わしが最強になる。不死身にもなれる。全てがわしの思いがままだ。

老人は叫んだ。

しかし、

「ふふ、完全だと、笑わせるな……」

と今度は神の声がそう言ってあざ笑う。

「お前には無理だな」

「何だと！ 神よ、お前はわしに力を与えるために、やってきたのではないのか？」

「馬鹿を言え、どうしてお前に神の力をやる？ いや、そもそも、それ以前の問題だ。お前には、神の力は使えない」  
「使えない？ わしが人だから、か？」

神はその問いには答えなかった。

神は何かを考えているようだった。

しばらくして、暗い闇の向こうから、再び声がした。

「人の子よ、一つ訊ねよう、お前の言う神の力とは何だ？」

「わしが言う、神の力？」

「そうだ、お前は神の力とは何だと答える？ わらわに聞かせてみせよ」

「答えたならば、神の力をくれるのか？」

「さあな、それは、お前の答え次第だな」

「ふん、面白い、ならば……」

と、老人は、一息を吸って、答えた。

「神の力とは、それは、この地上を圧倒する、完全なる力だ。全てを、我が物にして操るための、唯一無二の道具だ。慈悲など、欠片もない、他者を排するための最強の武器だ！」

それ以外に、何の答えがある？

自信満々に、唾を吐きかけるほどの勢いで、老人は言い切った。  
これこそが、自分が長い間追い求めた、神の力に対する真理なのだ。間違っているはずがない。

しかし、神からの返事は無かった。

長い間、沈黙が流れた。

沈黙が、続く、続く、続く。

まさか、神は居なくなってしまったのだろうか。  
痺れを切らした老人は話しかけた。

「どうした、神よ。わしの強き意思に、恐れをなしたか？」  
「……………」

返事はない。

「何だ、掛かって来い、神よ。先程から姿を見せぬまま、お前は、  
わしから逃げているのではないか？」  
「……………」

返事は、ない。

「やはり、わしが怖いのだな、神よ。クヒヒヒヒ……………この、鋼の精  
神を持つわしを、何物にも屈せぬ、不屈の野望を持つわしを……………ヒ  
ヒヒヒ……………」

そう。

「恐れているのだろうかああああああああああああああああああああ  
あああ……………」

「寝言を言つな」

それは、凜然たる神の声だった。

「お前の何が怖いというのか！ 尻尾を見せて、ただぶるぶると震えるだけの、小ねずみが……」  
「何だと！」

真つ暗な空間に、太鼓の音のように、ずんずんと響く。

「お前の答えは、不正解だ」

「ふ……」

長い沈黙を破ったのは、老人の口元から漏れ出た、僅かな吐息だった。

「ふ、ふふふ、ふふ……」

それはやがて、不規則な音の連なりとなり、老人の肩がそれに合わせて小刻みに揺れた。

それは、どこか哀しげで、破滅的な、ユーモアに欠ける、乾いた笑いである。

「ふふ、ふ、ふふ、ふふふふ……」

そして、その不気味な笑いは、この空間のどこかに存在している神への嘲笑となるかと思いきや、しかし、次の瞬間に一変し、急に激に怒りの熱を帯びた。

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふう正解だとおお!!」

と、地面を揺るような絶叫が空気を震わせる。

「ふざけたことを抜かすな!!」

老人は杖を持つ手を強く握り締めていた。体からは、冷や汗がぽたぽたと滴り、喉がからからに干からびていくのが分かった。

これは一体、どういうことなのだ。



わしが、間違っているだと。

老人は、断じて、信じられなかった。すると、闇の向こうから、神が淡々と告げる。

「いや、わらわは間違っていない」

と、一切の迷いも無く宣言した。

「お前には神の力を操るに足る資格など全くない」

「資格がない？ それはどういうことだ！」

老人の強く握りしめた手がぶるぶると震えた。無理もない。もうすぐ自分のその手の内に入るはずだった神の力が、予想外の展開の内に目の前から遠ざかっているのだ。

それが老人にとっては、たまらない恐怖だった。それがないと、自分はどうなってしまうのだろう、という恐怖に晒される。

冗談ではない。この神は何を言っているのだ？

わしこそが、神の力にふさわしい存在だと言うのに、その資格がないというのか？

「人の子よ、お前はそもそも神という存在に対し、大きな誤解を抱いているのだ」

静かに、宥めるような神の声だ。

「大きな、誤解だと？」

馬鹿にするな。一体、何の話だ。老人の濁った目が鋭く、闇の向こうを睥睨した。

しかし、老人のそんな気持ちを読んだ上で、神ははっきりとこう

言う。

「馬鹿などはしていない。お前は純粹に勘違いしているのだ」

「勘違い？」

「お前は、そもそもわらわたち神が、最強の存在だと思っ  
ているのだらう」

「そうだが？」

「この世界を統べる、唯一無二の絶対の存在だと」

「そうだ、お前たちはいつだってそういう存在で、わしたちを頭上  
の世界から見下ろしておるのではないのか？ わしたちを取るに足  
らないか弱き者と、見下してきたのではないか？」

しかし、神は否定した。

「それは違う。神は完璧な存在なのではない。元来はお前たちと同  
じ、いつ消滅してもおかしくない、不安定で非恒久的な存在なのだ」

あまりに突拍子も無い話に老人は呆氣にとられる。開いた口がだ  
らりと垂れた。

「ば、ば、馬鹿なこと言うな。笑わせる。神よ、お前はわしに神の  
力を諦めさせようとそんな戯言を言うのだらう。わしには、分かっ  
ているぞ。そんなことがあるか」

ふざけたことを抜かすな、と老人は身に迫ってきた何かを、吹き  
飛ばすように、突き飛ばすように、笑う。しかし、返ってきた神の  
声は一切、ユーモアの欠片が混じっていないものだった。

「嘘ではない。本当だ。その証拠に、神の力は万能ではない」

「万能ではない……それは、どういうことだ？」

「神の力は、本来の目的として、そもそも何かを破壊するためには存在していないのだ。お前が先ほどいったように、他者を排斥し、自らの都合のよい世界を創り上げるためには、な」  
「な、何？ ならば、何のために、神の力は存在するというのだ！？」

当然、老人は疑問に思った。  
すると、神は落ち着いて静かに答える。

「全ては……世界の存続のためだ」

「せ、世界の存続？」

「そうだ、わらわたちはその巨大な力で以て、この広大な世界のバランスを保っているのだ。お前が言った真逆の力だな」

「な、何い！？」

その発言に驚くと同時に、老人の脳内で、何かがバラバラと崩れ始めた。

慌てて、崩れた部分を持ち直そうとするが、その受け止める手の隙間から、また新たな崩壊が始まる。バラバラ、バラバラと、砂塵が巻き起こる。

ちよつと待て、ちよつと待て、話が違うぞ。

しかし、神は構わず、続ける。

「わらわたちの力は世界を『守る』ために存在している。世界のバランスが一方に傾き過ぎぬよう、いつでも見張っているのだ。だからこそ、窮地に追い込まれた人々の味方にもなるし、時には、逆のバランスを保つため、巨大な自然災害となつて、お前たちに牙を向くこともある」

「……」

「分かったか？ わらわたちの存在している理由が、それが理解出

来ていないお前には、そもそも神にはなれぬし、力を扱うことも出来ぬ」

「馬鹿な……」

「生憎だが、本当だ。お前の考えているような自分本位の使い方などは出来ぬのだ。それが大きい力であればあるほど比例してな」

そこで、神は一呼吸ついて、

「……分かっただろう、わらわたちも所詮、お前たちと同じ、この世界の一部というわけだ」

と告げる。

「極論を言えば、わらわたちは、単なる『システム』だ。この世の仕組みそのものだ。そして、その根っこである世界が失われれば、わらわたちも消滅する」

158 終わった時代、終わらない渴き 3 (後書き)

どうも、ヒロユキです。

今回少し短めですいません。次回はきちんと終われるようにしよう  
と思います。

「神が、消滅する、だと」

馬鹿な、馬鹿な、馬鹿な馬鹿な馬鹿な……。老人は、一気に意識が遠くなるのが分かった。まるで、足元の地面が溶けてなくなってしまうような、そんな浮遊感に晒される。

自分が求めてきたものがなんだったのか、それが分からなくなり、脳内にぽっかり空間が空いた。

ありえない、考えられない！

「人の子よ。信じたくない気持ちは分かるが、事実、現在わらわたちの世界は確かに消滅に向かっているのだ」

「嘘を……嘘を、つけ……」

「いや、真実だ。こちらの世界の人々はわらわたちを、神を、もはや必要としなくなっている。わらわたちという仕組みを不必要なものとして捉え始めている」

世界は、その巨大な存在は、それを感じつつ、今や緩やかに衰退を始めている。

神はそう言っ、その後、何だか意味のわからない言葉を並べ立て、説明をしていたが、それは、老人の耳にはちっとも入らなかった。

老人の中には、ただただ空虚な感情だ。

神が、完全ではないだと。そんな馬鹿な。

しかも、現実はそのだけに留まらず、今まさに、神たちが衰退している？

老人は思わず頭をかかえる。

神が居なくなつてしまえば、当然、神の力も手に入らない。

それは老人が最も恐れていた事態だった。そのままでは、わしは不完全に、脆弱なままではないか。わしは、もっと完璧な強さをこれまで求めていたというのに。

だのに……だのに！

ここで、ここまで来て、わしにそれを全て諦めろというのか。

すると、ひゅうひゅうと老人の喉から冷たく乾いた音が聞こえてくる。

全てが狙い通り進めば……。

そう……そうであったなら、この果てることのない渇きのような欲望も、終わるはずだったのに。

ぎりり、と歯を噛み締める。

すると、

「ふん」

神は鼻で笑った。

「人の子よ、何を思うか。これから終わる終わらないではない。お前はもう最初ハナから『終わっていた』のだ」

「わしが、終わっていただと？」

「そうだ、お前はいつだって孤独だった。誰にもその心を許そうとしなかった。だから、そんな細い杖に齧りついてようやく立っておるだけで、他にすぎりつけるものが無いだろう。分かるか？ お前はいつでも、倒れればそれで終わりなのだ。そうなったら最後、二度と、自力では起き上がれない」

神の声は四方八方から老人を攻め立てるように、圧迫するように、

響いてくる。

「だからお前は、いつだって、歩き続けようとした。それは、立ち止まってしまえばそれで終わりであると、お前が薄々感じていたからだ」

「し、知ったような口を聞くな、神よ」

「知ったような口？ 何を言う、わらわはお前の全てを知っている。いつだって、己のことにしか興味がなく、他者を排し、脅威を取り除くことしか眼中になかったお前は、その運命から逃れられぬ」

まるで、判決を下す裁判官のような重みのある言葉である。

「馬鹿な！」

しかし、神は老人への興味を失ったかのように返事をせず、しばらくして、

「しかし、あの少年は……」

と、どこかしみじみと思い出すように続けて言った。

「あの、少年？」

「そう、あの少年だ。榊、晴臣。ああ、彼は何とも清々しくまっすぐな人間だった」

「あ、あのくそ生意気なガキとも会ったのか！！」

途端、忌々しいあの自身に満ちた表情を思い出し、老人は激高した。一気に頭に血がのぼり、視界が霞む。



「わ、わしを虚仮にしようとした、あのガキを!!」

「ああ、会ったとも。ちなみに、あの少年も、お前と同じ色の絶望を抱えていたよ」

「うん？ 絶望、を？」

「そうだとも、彼は実の多くの悩みをその肩に抱えていた。自分一人では抱えきれないような、苦悩を、な。しかし、少なくとも彼は大丈夫だろう。彼はお前とは違い、彼は倒れても、『何度でも起き上がる』ことができる』からな。何度でも、何度でも」

「何だと、神よ、それはわしがあの青二才よりも劣っているというのか、この、わしが、わしがあああああ！」

「そうだ。それがなぜなのか理解出来ないお前には、永遠にあの少年には追いつけぬだろう」

「ぐうう、くそ、くそ、くそおおおおおおおおお!!」

そんなことがあってたまるかそんなことがあってたまるかそんなことがあってたまるかそんなことがあってたまるか!!

老人はむちゃくちゃに腕を振り回す。

そうしていれば、目には見えない神をでたらめに攻撃出来るのではないかと思っただが、老人の腕はただ虚空を引つ掻いただけで終わった。

荒い、老人の呼吸音。

くそ、本当に、自分はこのまま終わりと迎えてしまうのだろうか。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす……」

と、そこで神の声が朗々と老人の何も無い暗闇に響いた。

かの有名な、平家物語の一節である。

「……それが、何だ？」

「これは人の子の生み出した文章であるが、まさしく、言い得て妙よな。この者は、世の仕組みをずばり言い当てておる。古き時代の慧眼の士だ。わらわは、いつもそう思うのだよ」

「なに？」

「お前も、一時の栄華を極めた者であろう？ 勢い盛んなものはいずれは消え行く。こうなることはお前も、最初から分かっているはずだ。それはわらわたち、神も同じ。いつかは、無慈悲な時の流れの前にただの塵芥じんがいに帰す我らならば、無駄なあがきはやめ、この流れに身を任せようではないか。なあ、人の子よ」

「ふざけるな！」

老人は必死に怒鳴った。勢い良く唾が飛び散る。

「わしは、わしは、そんなものに甘んじたりはしない。最後の最後まで足掻いてみせるぞ……！」

「まあ、それもよいがな」

と神は密やかに笑った。

「しかし、この眼の前に迫っている破滅をどう回避する？」

「破滅？」

「ほれ、聞こえてきただろう。お前を闇の檻につなぎ止めんと、地を駆ける早馬の足音が……」

老人は、ごくり、と生唾を飲み込み、思わず、耳をすませた。すると、どこからともなく、それは聞こえてきた。

「  
」

それは、聞く者を不安にさせる、  
パトカーのギラギラとしたサイレン音だった。

次の瞬間、老人は自身が神社へ続く、森の入口に立っていることに気がついた。

真夏だと言うのに、どこか冷たい風が頬を撫ぜるのが分かって、老人ははっと我に帰る。つい、一瞬前まで、光の一切届かない暗闇にいたせい、太陽の光が妙に眩しい。目がチカチカとして、めまいを感じた。

いや……。

老人は気がつく。

目が眩しいのは太陽だけのせいではない。

老人は目の前に停まった何かに注目する。赤い回転ランプが顔を照らした。白黒の車体のパトカーである。

と、そのパトカーのウィンドーが開き、男の顔が覗いた。

「おお、杉下のじいさんだな。やっと見つかったぜ」

どちらかと言えば、若い印象のある精悍な顔つきをしたその男性警官は、老人の顔を確認し、にやりと微笑んで、パトカーから勢い良く飛び降りた。

次いで、反対側のドアも開き、そこからさらに若々しい警官も姿を表した。まだ仕事に慣れていないのか、キョロキョロと周囲を見回し、先に車を降りた先輩警官から指示を待っているように見えた。老人はその様子をしばし、呆気に取られて見つめていた。

どうやら、この警官たちは自分を探していたようなのだが、それがなぜなのか、事情が分からない。

そもそも、そのことを思考する前に、つい先程まで、老人は神の声とあの真っ暗なだけの空間にいたはずなのに、そこから唐突に抜け出てしまったこの状況も、理解出来ていなかった。

「わ、わしは……」

一体、どうしていたのだ？

どこに、いたのだ？

額を押さえ、倒れないよう、持っていた杖を強く握った。

「おい、じいさん」

と、目の前に立っていた警官が乱暴な口調で老人を呼んだ。

「やっと見つけたぜ。ったく、どこをほっつき歩いているかと思えば、こんなところで何してたんだ？」

警官は、ガムを口の中でクチャクチャと噛みながら、ポケットに手をつ込み、見るからに横柄な態度だった。

他の同僚からはどんな目で見られているのだろうか。少なくとも仕事に対し、真面目なタイプには見えない。

彼は面倒くさそうに警察手帳を取り出しながら、老人に突き出す。

「ああ、ほら、俺たちこういう者だから。状況は分かるな？ あんたに『逮捕状』が出る」

その言葉に、思考の最下層を漂っていた老人の意識がはっと我に帰った。

「な！？」

「うん？ やつと理解できたか？」

「な、な、なんじゃと？」

ありえない。逮捕状、だと。

この、わしに！

予想だにしなかった発言に老人は狼狽し、杖を取り落としそうになった。

「寝言を言うな！　だ、誰に向かってそんな口をきいておる！　こんなことをしてただで済むと思っておるのか！」

そうだ。老人は自分の中で強く頷く。

自分がこの町でどれほど恐れられている存在であるのか、ある程度の年齢の人間であれば、当然のように知っている事実なのだ。

したがって、こんな自分を逮捕しようなどと、訳の分からない妄言を吐く大人が存在するなど、何らかの手違いが発生したとは思えなかった。

しかし、その警官は不快そうに眉間にシワを寄せた程度で、ちっとも怖がっている様子も、何かを勘違いしている素振りもない。

「あん？　別にどうとも思っていないって。ったく、いちいち偉そうな顔してんじゃねえつつうの」

などと言い、老人の怒りなど歯牙にもかけない、余裕の態度だ。

老人は慄然とする。これはどういうことだ。まるで、先程の暗闇の空間を越えて、別世界に来てしまったかのようだった。

おかしい。

なぜ、なぜ……こいつはわしを恐れない！

すると、パトカーの背後に控えていた新人警官らしき青年が、慌ててこちらに回りこみ、その先輩警官の肩を叩く。

「あ、あのう、先輩。もっと老人には丁寧な口調で喋ったほうがよろしいかと……」

と、おそろおそろという感じで、注意した。しかし、そんなことなど知ったことかと、その警官は若い警官の方に向けてこう言う。

「うるせえぞ、新人。先輩のやり方にいちいち口出しすんじゃないよ」

そう言われると、新人警官は「は、ひゃい！」と裏返った声で返事をし、後ろに飛び退く。どうやら、この二人の上下関係はそれなりに厳しいようだ。見る見るうちに新人警官の肩が小さく萎んだ。

「いいから、お前は黙って俺のやり方を見てな」

と、さらに新人警官に対し、そう付け加えてから、悠然とその警官は未だ状況の飲み込めていない老人を見た。ぽりぽりと襟首の辺りを人差し指で掻きながら言う。

「ともかく、ええと、あれ……なんだっけな。あ、そうそう黙秘権がどうのこうのって下り、これって一応やっとかべきだったよな」  
「そ、それはもちろんですよ」

後ろから手を挙げて、新人警官が口を出す。

「ああ、しかしなあ、かつたるいぜ。もういいや。黙秘権以下略、な」

「い、以下略って。そんないい加減な！」

「馬鹿野郎、これは意義あるショートカットだよ、ショートカット。新人、仕事つてのはよお、一から十まで馬鹿正直にやればいいってもんじゃねえ。必要のないところは適度に省略するもんだ。いいか？ 昔の偉人だって言ってるじゃねえか、兵は神速を尊ぶ。物事は

スピードが肝心なんだよ」

そうして、くいくいつと指を動かして。

「お前だって、こんな面倒な仕事終わらして、さっさと酒が飲みてえだろっ?」

などと意味ありげに眉を動かす。

「はあ、先輩はアルコールがあれば何でもいいんですね……」

完全に呆れたようで、新人警官が小声で呟き、肩をすくめた。そして、すぐに何かに気づいたように顔を上げて、

「ていうか、僕達にはその黙秘権の下りを必ず相手に知らせる義務があると思いますが！ それに、そもそも何の罪で逮捕状が出るかも！」

「おい、貴様ら！」

そこで、完全にその場の状況に置き去りにされていた老人は怒鳴り声を上げた。

「わしを逮捕するじゃと？ 冗談も大概にせい。わしが誰なのか、まさか知らぬはずはあるまい。杉下と聞いて、この辺りで震え上がらぬ者はおらぬ。戯言が過ぎると、わしも対処を考えねばならぬ。よいか？」

杖を持ち、その先端を警官の鼻先に向けた。じり、じり、とにじり寄る。



「わしにとつて、お前たちを破滅させるなど小指の先でやれること、それくらいに容易なのだ！」

ドスの利いた声で老人は、そうまくし立てる。

老人は、それだけで十分だと思っていた。なぜなら、これだけ言えば、大抵の者はその首を引つ込め、地面にへなへなと座り込んでしまつのが常なのである。

しかし、その二人の警官は違った。少しも臆する様子はなく、老人をじつと見つめて、立っている。

先輩警官の方が小首を傾げて聞く。

「へえ、破滅ねえ。それってどうやってやるんだ？」

その安穩とした態度に驚きつつも、老人はさらに恐怖を煽る文句を重ねた。

「手などいくらかでもあるわ。お前の息の根を止めるなど容易い。なんならお前だけではなく、お前のその一族に手を出してもいいのだぞ。お前はわしの権力がどれほどのものか、知っているだろう？」

「権力、ああ、権力ね」

すると、ご立派ご立派、と警官は手を叩く。まるで、徒競走で一等賞を取った子供を褒めているようで、そのあまりに軽々しい口調に、老人はいきり立った。

「き、貴様あー！！」

そう叫んで、杖で殴りかかる。しかし、警官はそれを腰を捻って軽くかわした。

「おおっと」

と、なぜか大げさな素振りだ。まるでそれは、老人に自身の無力さを再認識させるためにわざと大きな動きで避けたのかと思わせるほどの白々しい動きにも見えた。

そして、

「っで、一つ聞くんだが……」

と口を開く。

「あんたの権力って、どこにそんなもんがあるんだ？」

「なに？」

「だから、今すぐに目の前に出してみせるよ。あんたの言ってる権力ってさ、どんだけ大層なもんなのか」

「何を馬鹿な事を！ 道理の分からぬ低能が！ 意味の分からぬことを言うでない！ わしを舐めくさりおって、そんなものがおいそれと見せたりできるものか！」

老人の声は怒りに震える。しかし、それはすぐに一転して、狂気じみた笑いに変わった。

「フフフ……しかし、お前が望むのならば良いぞ。わしが一声呼ぶだけで済む。今すぐにでもお前たちの周りを、わしの配下の者たちで包囲させてやる。一步も身動きが取れないほどになー!!」

「……」

「それがわしの権力だ。支配力だ。全ての者達を従える力だ。いいか、その力の前では、お前のような小男一人、道端を這いつくばる一匹のアリに等しい。いくらでも容易く踏みにじってやるだろう。ハッハッハッ……」

しかし、その笑いはその場であまりにも虚しく響いた。

それがなぜなのか分からないが、老人は自身が笑いながらも冷や汗を掻きつつあることに気がついた。

どうしたことだ。もしま、わしは、この者たちに気後れをしているのか？

その間も、警官は揺るぎない鋭い眼光を老人に向け続けていた。

「そうか、それがじいさんの『力』だよなあ」

と、言葉を噛み締めるように、深々と頷く。

「でもさ、それって、こう思えないか？ それをじいさんが自分の力だと『勝手に思い込んでる』って、さ……」

160 終わった時代、終わらない渴き 5 (後書き)

どうも、ヒロユキです。

予定としては、このパートはまだもうちょっとだけ続きそうです。つていうか、正直、僕の中では、じいさんの話とかもつづつでもいい感じですが(書くのがすごくしんどい)。早く最後の春臣と媛子の話に移行したいなあ。

チューイングガムをぶつくりと膨らませながら、警官は余裕たっぷりに繰り返した。

「じいさんは、それが自分の持ち得る力だと勘違いしているかもしれない」

「な、なんじゃと？」

「俺がな、何年前前に、この町で出会った老人がそう言ってたさ。権力なんてそんなもんだって、な」

警官は言いながら、膨らませたガムを口の中に畳もうとして、その拍子に破裂させてしまった。

パチン、とそれが軽い音を立てる。

警官は口の周りについたそのガムを取りながら、悲しげに目を伏せた。

「まあ、どうやら、その老人は最近死んじゃったらしいがな……」

そう、力なく呟いて、

「ともかくよお、力つてのは人を酔わせるんだよな。それには、そういう摩訶不思議な所がある。自分がそれを人より持っていると思つて、他人よりも自分が何十倍も巨大になれた気になっちまってさ、容易に他者を見下すんだ」

「お、お前、何が言いたい」

意味深な男の言い草に、老人は苛立つ。なにより、回りくどいことは好きではないのだ。

すると、そこで警官は先程と同じ妙にギリリとした鋭い眼光を老人に向けた。

「じいさんよお、あんたはさあ、自分が心底馬鹿げた幻想の中にいるのにまだ気がつかないのか？ 神の力だとかよお、他人が聞いてまえば、ドン引きして、虫唾が走るような、その低俗な願望を未だに叶えたいって、本気で思ってるのか？」

「な、何じゃとー！」

老人はその言葉に半ば、気圧されている自分に気づきながらも、精一杯声を張り上げ、言い返した。まだ、自分の中の武器が、牙が、全て失われたわけではない。堂々と立ち向かえば良いのだ。

「これ以上わしを怒らせるとどうなるかお前は分かっているのか？」

「この青臭い小僧が！」

「いやいや、怒って俺を罵るなら好きにしてもらっていいんだがよ」

そう言う警官はやはり、痛くも痒くもなさそうな涼しい顔をしている。

「それより大事なことに俺は気がついて欲しいわけよ」

「いいか？ と指を立てた。」

「あんたにはそりゃあ大勢の優秀で従順な配下がいるんだろう。あんたが右を向けば右を向き、橋になれと言われれば、地面に這いつくばり、山を築けと言われれば、無茶と分かかっていても土を掘る、そんな奴らがよお。しかしだな、果たして、その中に本当にあんたを信頼して付いてきている人間がどれくらいいるんだろうな」

「ああ？」

「どう思っのか、答えなよ。なあ？ 十秒数えるぜ」

十、九、八……。

警官は止める間もなく、いきなり指を追っていく。その様子を見ながら、老人はぎり、と歯を噛み締めた。

また質問か。

先程の、あの不思議な闇の中でも、神がわしに質問をしてきたのだったな。

『不正解だ』

という、神の声が老人の中に蘇る。

「くだらん、貴様の質問にわしが答える義務はない！」

老人はそう言い放って、警官に睨みを利かせた。二度とその手は食わん、という決意である。

しかし、警官は依然、カウントを止めない。

三、二、一……。

そして、

「ゼロ」

警官は静かにカウントを終える。そして、頑なに口を閉ざしたままの老人を見て、

「そうか、答える気はないと……じゃあ、一方的だが、こっちから答え合わせとしよう」

などと言い始める。

「答え合わせだとお？」

「そうだ、すつきりきっぱり言っぜ。現時点で、あんたに本気で忠誠心を抱いている人間は、ほぼ皆無だ」

皆無、皆無、皆無……。

その単語が老人の脳内に銃声のように鳴り響いた。

「かいむう！？」

馬鹿げた事を！

「何を言う。お前たちがわしの配下の人間に逐一聞きまわったでも言うのか？ 笑わせる。そんな情報など聞く価値など」

しかし、

「そのまさかだぜ！」

と、その警官はしてやったりと言わんばかりににやりと笑った。

「俺達の仲間は、あんたの配下の人間に全員を回ったんだ」

「な！？」

「そしたらよお、分かったんだぜ」

あんたの組織ってよお、脆いんだよ。決定的に、な。

「も、脆い？」

「ああ、残念なことに、破滅的にな。仲間と仲間の繋がりがよ、絶望的に薄っぺらいんさ。そう、まるで、子どもが手の圧迫で無理や



り作った泥団子って感じてよ。日光に当たるとすぐにポロポロって感じた」

でも、と警官は言葉を一度止め、

「そりゃそうだよなあ、その長たる人間が『神の力』なんて訳の分からぬもん心酔してるもんだからよ」

「お、お前……」

「だからよお、組織の懐柔は容易だった」

その途端、老人の瞳が驚きでこれ以上ないほどに大きく見開かれる。

「き、貴様、今何と言った!!」

「だから、懐柔だよ。俺達はさあ、あんたが神の力なんてものにつつつを抜かしてる間によ、少しずつ手回しをしてたんだよ、あんたの組織にさ」

正直、すんなり思い通り行きすぎて怖いくらいだったな。あんたを追い詰める準備をするのは。

その決定的な言葉に、老人は生唾を飲み込み、状況を脳内で確認した。

とても、信じられない。

わしが察知しない内に、こいつらは、わしの仲間を準々に抱き込んでいっていただと!

「じいさんよお」

警官はすっかり勝ち誇った表情だ。

「もう、あんたの組織の人間は、誰も本気であんたを信用しじゃないぜ。他人を顎で使うだけで、誰とも解り合おうとしない、それでいて、自分の欲望のことしか考えちゃいないあんたに、皆、失望してんだ！」

警官の鋭い言葉が老人の胸に突き刺さった。

老人の脳裏には、数時間前に、榊春臣から言われた言葉がぐるぐると巡っていた。

『今もこうしている間にも、祖父の行動をこっそり見ていた人たちがあなたたちの大船を転覆させようと虎視眈々と目論んでいるかもしれないよ』

よりによって……よりによって、よりによって、こんなタイミングで。

「ともかくよ、俺たちの仲間があんたの裏の支配なんてもうこりこりなんだよ。もはや、過去の遺物っていうか、時代錯誤っていうかな、そんなレベルの話なんだ。あんたらの一族が過去にどんな偉いことをしたかなんて、正直、もう皆覚えちゃいねえよ。強固な権力だとか、そんなもん、関係ねえ。そう皆で話し合ったんだ。そして

「

もういらぬから、じゃあ、全部、ぶち壊しますかって、な。

「ええ」

そこで相槌を打ったのは、背後の新人警官だ。

老人はすばやくそちらに振り向いた。

そして、その新人警官の、まだ、子供のあどけなさ純粹さの残る

美しい瞳に、揺るぎない決意の光が宿っているのを、老人は見た。

「僕達は、そう決断したんです！」

「そう、そして今日は作戦の最終段階の決行日だったというわけだ。理解出来たか？　じいさん、あんたは作戦の仕上げとして、この町の頂上からいなくなってもらおう。これ以上町の平穏を乱される前に、ここいらでご退場を願うというわけさ」

「

もはや、老人には、言葉もない。

驚きのまま、掠れた声が出るだけだ。

すると、警官の力強い、ごつごつとした手が老人の今にも折れそうな細い腕を掴む。そして、身動きが取れないほど呆然とした老人の両手に、冷たい金属の輪をはめた。

ガシャリ。

と、鋼の錠が落ちる。

老人はもはや、逃げる間もなく、彼らの成されるがままになっていた。

「じいさん、自分がこれまでやってきた悪事なんていくらでも心当たりがあるだろう？　あんたはそれが露見しないよういろいと手立てをしてきたようだが……残念ながら、その証拠は寝返ったあなたの仲間から仕入れている」

そして、さあ乗れ、と警官は老人の背中を押しながら、パトカーを指さした。

新人警官が、神妙な顔つきで、後部座席のドアを開けた。

暗い車内を、見つめて、老人は思う。

そうか……。

そうか、これで、全て、終わったのか。  
あっけないものだったな。

そして、その瞬間だった。

全ての糸が切れたように、力が抜けた老人の体が前のめりになった。ぐわり、と地面に体が近づく。

嗚呼 わしは、倒れるのか。

スローモーションの意識の中で、かろうじて、そう認識する。

『倒ればそれで終わり、そうなら最後、二度と、自力では起き上がれない』

目眩のような感覚と、さざ波のように押し寄せる鐘の音のような声。

まだ、前に足を踏み出せば、立ち上がれる。咄嗟に老人はそう感じたが、あえて、そうはしなかった。

よいではないか。

これで、素直に、倒れてしまおう。

それで、全て終わりならば、それもいい。

攻め寄せるこの空虚な闇に、その身を預けてしまえば、一番楽なのだ。

コノママ、キエサツテシマエレバ、ソレガイイ。

しかし、  
しかし、

老人の体は、地面に激突することはなかった。

その寸前で、しっかりと支えられていた！

老人は太陽を見上げるように、自分を受け止めている新人警官の姿を、目を細めながら、見た。その眩いほどの透明な二つの瞳が、老人の心をぎりぎりのところで引き止めた。

かろうじて、つなぎ止めた！

途端に、老人の萎みかけた胸に、新鮮な空気が入り込む。瑞々しい世界の匂いをいっぱい吸い込む。

救われた、のか、わしは……。

「あのう、大丈夫ですか？」

「あ、ああ……」

激しい鼓動を感じ、倒れていないことに信じられない気持ちを抱きながら、老人の自身の記憶が急速に巻き戻されていくのを、感じた。

まだ、自身がこの世界のことを何も知らなかった、純粹無垢だった頃の気持ちである。

そうだ、自分にも、そんな時代があったのだ。

全ての物事が、ただキラキラと、宝石のように見えていた頃のことだ。

「ふふふ……」

知らぬうちに、老人は自身が笑っていることに気がついた。

それは、自然な心の底から湧き出た笑いで、一瞬前までの絶望が、まるで嘘のようだった。

「何だ、じいさん？ 上手く逃げ出す算段でも思いついたのか？」

態度の悪い警官が怪訝そうに片眉を釣り上げて聞いてくる。

「いいや。そうではない。ただ、な、チャンスを、与えられた気がするのだ」

「はあ？」

「また前を見て歩き出す、そのチャンスを、な」

パトカーのドアが、ゆっくりと閉まり、老人は後部座席に座る。すると、隣のドアが開いて、先程の若い警官が横に座った。どうやら、パトカーの運転は、老人を追い詰めた先輩警官の方のようだ。

「おい、新人。そのじいさんから目を離すなよ」

「は、はい」

緊張しているのか、新人の警官はまたしても変に裏返った声だ。

「心配せんでも、わしは逃げぬ」

「どうだかな。俺は信用してないぜ」

運転席に座った警官はルームミラーから老人を睨んでくる。しかし、本当に老人には逃げるつもりはなかった。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、か。神よ、本当にその通りだな……」

ぼつり、とそう呟く。

「何だつて？」

「いや、何でもない」

ゆつくりと、パトカーが発進する。真夏の砂利道を白黒の車体が真つ直ぐに音もなく駆け抜けていった。

と、隣の新人警官が老人の体をいたわっているのか、手を支えてくれた。

「座席、座りづらくないですか？」

と気遣ってくる。おそらく、先ほど倒れかけたことを心配してくれているのだろう。

「構わん、これでいい」

老人はぶつきらぼうに返した。

「クーラーは効き過ぎじゃないですか？」

「ふん、冷たいくらいでちょうどいいわい」

すると、新人警官は何かを言おうとして、迷って、口を閉じて、また開いて、という間抜け極まりない動作を幾度か繰り返した。

大方、老人に優しくしたい気持ちがあるのだが、また老人に邪魔そうにあしらわれるのではないかと行動の手前で足踏みをしている

のだらう。

「何だ、何か言いたいのか、若者よ」

老人の方から話しかけてみると、彼は少し驚いた様子で目を丸くして、

「いえ、何でも、ありません」

と口を閉じてしまった。恥ずかしいのか、僅かに頬を赤らめ、窓の外に眼をやる。

それが、老人にはとても新鮮な光景に見えた。彼のそのぎこちない動作には、やはり自分がいつの間にか忘れ去っていった大事な何かがあるような気がしたのである。

しばらく経って。

老人は、唐突に、何の前触れもなく、口を開いた。

「……若者よ。君の夢は何だね？」

すると、いきなりで面食らったのか、

「え、ぼ、僕の夢、ですか？」

と新人警官はあたふたと目をキョロキョロさせた。

「ああ、一つぐらいいはあるだらう？ わしが若い頃には、それはたくさんの夢があった。いろいろと夢想し、がむしゃらにそれに向けて努力したものだ。若者は、皆、夢を持つべきなのだ。君だって、



そう思うだろう？」

「え、ええ、まあ」

「では、君のそれを話してみたまえ」

老人が促すと、やはり、その警官は恥ずかしそうにそわそわする。膝の上で落ち着きなく手が動く。

「え、ええと、恥ずかしい、ですけど」

「構わん、警察署に向かうまでの暇つぶしだ。笑わぬから、話せ」

「あの、あの、それじゃあ」

すると、つまずきそうな妙な勢いで彼は話し始める。

しかし、正直、老人は彼の話の中身になど、大した興味などなかった。

彼が必死になって語る、その若者らしい明るさに満ち溢れている横顔を、ずっと見つめ続けていきたかったのである。

ただ、それだけなのだ……。

うむ。どうやらわしは、この若者を気に入ったようだぞ。

老人は今、永遠に近い、時間を感じていた。確かに、実感していた。

永遠の命など、完璧な物など、たった一つもなくとも、何よりも満足した気持ちを感じていた。

そして、いつまでも、いつまでも、若者の横顔を、飽きることなく、眺めていた。

162 黎明の炎 1 (前書き)

どうも、ヒロユキです。

ようやく今回から最終パートに突入です。果たして、夜叉媛と春臣の関係はどうなるのか？ 目が離せない展開、になるといいな。読者の方々、どうか、最後までお付き合いください。

あかい。

……は思う。

ああ、あかい、あかい、あかい。

……は自身が燃えていることに気がつく。

ごうごうと火柱が立ち昇る音がする。

足が、腕が、顔が、胸が、焦がされていくのを、感じる。

……は見つめる。

それは、あかるくて、あかるくて、生きるほどに、あかい。

それは、あつくて、あつくて、死ぬほどに、あかい。

ともかく、あかいのだ。

見渡すかぎり、視界を、『あか』が覆っている。

この世の全てを『あか』混ぜにした、混沌とした、『あか』だ。

……はただ、その『あか』に包まれていた。

為す術も無く、その『あか』を見つめ続け、

そして、

いつしか、

……は流れ、流れて、流されて、

やがて、流れ着いた。

そこがどこかは、……には分からない。

自分がナニモノなのかも分からない。

ただ、……は呼吸し、生きているだけの存在だった。

しかし、やがて、そこに誰かがやってきた。

ただ、息だけをしている……を見て、驚き、拾い上げてくれた。

そして、うつすら微笑んでこう言った。

「お前は、世界の淵から流れてきたのだな」

続けて、

「それも、面白いことに、淵は淵でも、焰ヶ淵ほむらがふちだ」

と言う。

「あそこには、消えない炎がある。何が起こっても決して消えるこ

とのない炎だ」

誰かは言う。

「ふふ、げに面白き奴。お前は、その炎に焼かれながら生まれてきたのだな。あの、新たな世界を築く、『黎明の炎』の中で……」

その言葉を、……は聞いている。

ただ、その透明な眼を開いて、

ただ、じつと。

草むらに抱かれるように、体を丸めて眠りについていた夜叉媛は、はっと目を覚ました。

何だ、わしは、夢を見ていたのか。

起き上がって、頭を揺する。

周囲は深い森である。先ほどまで夜叉媛は、あの千両神社の奥の奥を目指してただひたすらに走ってきていたのだ。

そして、誰にも見つけられそうにないこの草むらを見つけて、腰を下ろして……。

「いつの間にか、疲れて眠っていたのか」

それで、今のような夢を。

夜叉媛は眉間に皺を寄せる。

うんと、うんと古い記憶の夢だった気がする。そう、わしがこの世に生をうけた時の記憶だった。

映像が途切れ途切れで、ずいぶん細切れになっているが、しっかりと夜叉媛はそれを覚えていた。その胸に強く刻み込んでいた。

「焰ヶ淵ほむかがらぎ……」

夜叉媛は、小さく口を動かす。

そう神の世で呼ばれている場所だった。

決して、消えることのない炎が出づる、神の世の聖域である。

そうだ、わしは、他者とは異なる場所で生まれたのだ。

ふいに、さらりと、耳に掛かった長髪が、溢れる。それが、夜叉媛の視界の端に映った。

ああ、あかい。

思わず、ため息が出るほどだった。

その赤々と燃え盛る炎のような髪色は、夜叉媛がそこで生まれたことへの何よりの証拠なのである。

夜叉媛は事実を確認する意味で静かに頷く。

誰も触れたことのない、永遠なる炎。

世界の源泉、黎明の炎の中から生まれた存在。

それこそが夜叉媛である。

世界で唯一の赤髪の自分。

そして、それこそが、他のホカノとは違う、夜叉媛の確固たる意思を形成していた。

ホカノとしての神の世での暮らしは、決して楽しいものではなく、自分を自分として見失うことが多い生活であったが、夜叉媛はその

自慢の髪を見るたびに、何度も自分を取り戻してきたのである。

周囲では、神に仕え働くうちに、魂のない抜け殻の人形のようになっていた者も多くあり、そんな者たちを見るたびに夜叉媛は自身が無になる恐怖に怯えたが、その赤髪が夜叉媛の自我を守ってきたのだ。

ああ、あかい、あかい、燃えるほどに真っ赤な、わしの髪……。

夜叉媛はそれを一掬い、手で掴み取り、そっと頬ずりする。自然と、涙が溢れる。その絹のような美しい髪を雫が伝って、消えていく。

嬉しや、嬉しや……。

ここに、自分がある。確かに、自分がある。

しかし、その時だった。

夕方になり、西に沈む太陽から、体が溶けるような熱い光線が届いてきた。

ちょうど木々の間から挿し込むその赤い光が夜叉媛を照らし出して、その体を全て、赤に染める。

自慢の、赤髪も、赤に染まった。

それが、そのあっけない様が、夜叉媛の絶望を誘った。

涙が、じわじわと溢れ、大粒のそれになって、次から次へと頬に流れ落ちた。

なんじゃ、これは。

はは、なんじゃ、これは……。

この世にはいくらでも、わしと同じような『あか』が満ちているではないか。

これでは、自分がどこにいるのか分からない。自分と他者の区別がつかない。

誰にも、自分を見つけてもらえない！

夜叉媛の最後の砦であったその『あか』はあっという間に、脆く

も崩れ去ってしまった。目の前にかろうじて見えていた喜びの光が、ふ、と掻き消える。

いや、それも当然じゃ。

なぜなら、わしは、最初から存在する価値などないのじゃ。他者に害を与えるだけの、毒なのじゃ。

そんなちっぽけな個性があったところで、意味など皆無だったのじゃ。

そう……最初から知っていたことよ。

ただ、夢によって昔を思い出し、懐かしみ、しばし愛すべき小さな細い糸に縋りつきたかっただけ。

夜叉媛はそこでぐつと涙を拭う。

さあ、一切を諦めるのじゃ。今ならこれで心置きなくこの世からいなくなれる。

誰かに迷惑をかけるだけで、紙くずのようなわしの命など、徹頭徹尾無意味でいい。

それで、全て、諦められる。

夜叉媛は意を決して自身の髪を握った。

今度は、先ほどよりも、もっと多く、ばさりと音がするほどの量である。

ざわり、と不吉な黒い風が吹く。

夜叉媛はおもむろに近くに転がっていた石を掴み取った。

もういい、やっけてしまおう。

「こんな、こんな無意味な髪など、切り取ってやるんじゃ……」

そして、その石を片手に持って、その手を振り上げる。

そうだ、こいつをわしから切り離して、終にしまおう。未練を全て、絶ち切ってしまうおう。



何が、黎明の炎じゃ。  
何が、神の世で唯一の赤髪じゃ。  
笑わせる！

「こんな、ただ、赤いだけの、無意味な髪など……」

いらぬ！

媛子はそう叫んで、一気に、手を振り下ろした。  
振り下ろした。

振り下ろした……つもりだった。

しかし、

しかし、石はなぜか、振り下ろされていなかった。いつの間にか、  
夜叉媛の腕が宙で固定されたいたのである。

金縛り？

いや、違う。

夜叉媛の腕は何者かにしっかりと掴まれていたのだ。そしてそれは、  
まだ自分をこの世に引きとめようとする、少年の手だった。

「待てよ、媛子……」

そこには、一体どれほど夜叉媛を探しまわったのか、全身傷だらけで汗だらけで泥だらけの少年、榊晴臣が、立っていた。

「やっと……やっと見つけたぜ」

間に合った！

媛子の細い華奢な腕をしっかりと握りながら、春臣は深い安堵を感じていた。

良かった、彼女はまだ消えていなかった。

まだ、存在<sup>いき</sup>していた。

その事実が胸の底を新たな希望で揺さぶっている。

春臣は走り回っていた間の荒い呼吸のままだった。

昼間に神社を飛び出し、森の中に走り去った彼女を探し始めて、いったいどれほどの時間が経ったのか、もう春臣は覚えていない。

右の繁みを駆け抜け、左の斜面を上り、いくつかの小川を飛び越え、飛び越え損ねて落ちているうちに、すっかり太陽は傾いていた。その間、春臣は疲労にふらつきながらも、必死に媛子の姿を探していたのだが、彼女の通った痕跡らしい痕跡も見当たらず、さすがに絶望の色が濃くなるのを感じざるを得なかった。

それほどまでに、神社の森は深い。

どこまでも、深く、深く、深々と、深い。

まるで、神の存在の巨大さを投影しているような、その広大な懐に潜り込んでいる気さえ、春臣は感じた。西に向かえば、ひたすら西に広がり、東に向かえば、ひたすら東に長い。終りが見えない……。

途方もなく、ひたすらに、無限。

媛子一人を覆い隠すには、十分過ぎるほどの広さである。誰もが、その困難さに匙を投げるほどの……。

しかし、

しかし、春臣は、ついに見つけたのだ。  
草むらの中で腰を落とし、自身の長い髪に石を振り下ろそうとしている媛子を。

それを見た瞬間に、春臣の中にあつた疲労感や、転げ回つた怪我からくる痛みなどは一気に雲散霧消してしまった。

新たな感情が湧き上がるのを感じ、それが春臣の中に確かな決意を抱かせた。

彼女の腕を掴み、

「もう、逃がさないからな！」

そう、叫んだ。もう決して、永遠に。

そして、今。

その感動の前に、涙さえ零れ落ちてしまいそうになりながら、春臣は彼女の顔をしっかりと見据えた。

すると、彼女の表情にも、驚きと共に、溢れ出してしまうような喜びがあるのが分かった。

「はる、おみ……」

だが、それは一瞬のことで、彼女のそれはさっとすぐに冷徹なものに変わった。

そこには春臣と再び相對したことに對する、戸惑いや恐怖、怒りのような負の感情が入り交じり、歪な形となっているようだった。

そして、その途端、春臣は彼女を掴んだ手が一気に凍りつくような感覚に襲われた。まるで魂を抜かれるような背骨を駆け上がる怖気を感じる。その、弾かれるような、衝動。

彼女が何かをしたのではない。

アレだ！

春臣は直感した。

くそつ、やっぱり、消えているわけがないか。

自身の中に巢食う、媛子を拒絶する黒い力は。

じわり、と嫌な汗が額に滲むのを感じる。胸の底に仄暗い水がじわじわ噴き出すのが分かった。思わず、気持ちが悪発しそうになる。足を挫いてしまいそうになる。

が、そんなことに気を取られている暇も春臣にはなかった。

次の瞬間には、媛子から思わぬ殺気が春臣に飛んできていたのである。思わず、春臣は身構え、背後に数歩飛びすさった。半分ふらつきながら、である。

すると、一瞬前まで春臣のいた空間に、彼女の掴まれている、もう片方の腕が通過する。

その手には、重たい石が掴まれていた。刹那、それを確認して、ひやりとする。

もし少しでも反応が遅れ、それが春臣の脇腹に直撃していれば、さすがに数秒間起き上がれなかったかもしれない。

媛子が凶悪に春臣を睨んだ。

「しつこい奴じゃ」

それは、とても彼女から発せられたとは思えないほどに、どす黒く低い声だった。

「まだ……追ってくるのか」

ふうふう、と息切れをしている。興奮しているのだろう。

どうやら、彼女はこの期に及んで自分の邪魔をされたくないらしい。春臣には分かる。

彼女は今、心底必死なのだ。突如現れた、追跡者である自分から、完璧に逃げきるために。

しかし、それでも春臣は彼女の好きにさせるつもりはなかった。

「ああ、俺の気持ち折れない限りな」

と、毅然とした態度で言い放つ。

「どこまでも、どこまでも、お前を追いかけて行ってやるぜ」

うんざりするほど、な。

すると、媛子の頬が軽く引きつったのが分かる。ふいに、その口元から、血が滴ったかのようにも見えた。

だが、それは違う。

ああ、夕陽の色と見間違えたのか……。

世界は今、黄昏時である。

春臣も媛子も皆、全てが太陽の色に塗りつぶされていた。顔も足も手も胸も髪も瞳も、赤である。

西の山には、その光を投げかけている太陽がある。

直感的に、春臣は、その太陽が沈み切るまでが勝負だと思った。

彼女をこちらの世界に引き止めるまでのタイムリミットである。

それまでに説得を成功させなければ、きっと彼女は永遠に失われてしまう。彼女の背後にある、聳える大山のような、混沌とした渦潮のような、見えない闇に吞まれて、それで終わりだ。

そんな気がしていた。

相対している媛子は、春臣に対し、もはや、敵対の感情しか有していないようだった。自らが遂行しようとする計画の真ん中に仁王立ちし、前進を妨害する厄介者にしか見えていないようである。

彼女はゆらゆらと低い姿勢を保ちつつ、袋小路に追い詰められた

野生動物のような、威嚇の殺気をみなぎらせていた。

「全く、どうしたら諦めてくれるのかのう」

春臣に吐き捨てる言葉がひたすら憎々しげで、厳しい。

つい昨晚、自分と媛子は確かに恋人としての甘美な感情を共有していたのに、この変わりようは何なのだろう。

春臣はその事実には愕然とする。

これではまるで、十年間お互いを憎みつついがみ合いつつ生きてきた宿敵のような対峙である。

しかし、今更仕方がない。

春臣と媛子は、お互いがぎりぎりの綱渡りをして、もう引き返せない場所にまで来てしまったのだから……。

「春臣、言っておこう」

すると、彼女は何かを決意したように重みのある言葉を放った。

「な、なんだ？」

「お前は未だに、わしを引き戻せる、少しでも心に付け入る隙があると思っているのかしれぬが、それは断じて、間違いだ」

厳しい声が春臣の耳の奥に響く。

「わしには、もうすでに覚悟がある」

「覚悟？」

「そうだ、その覚悟を見れば、お前でも、自身の行動が無意味であることを自然と悟るであろう」

一体何をするつもりだ？

春臣は一瞬、戸惑うが、彼女が握ったソレを見て、合点がいった。彼女がその手に握ったのは、春臣の作ったお守りだったのだ。苦労して作ったあの刺繍、が彼女の手の中で揺れている。

そして、彼女は、そのお守りを繋いでいる、首にかけた紐に、持っていた先の鋭利な石を近づけた。

「これが、どういう意味か分かるであろう？」

そう言って、彼女は悲しい笑みを見せた。

「お、お前……」

「これは、わしをこの世に繋ぎ止める最後の鎖じゃ。これがあるからこそ、わしは存在の力を供給され、姿形をこの世に固定化できている。しかし、この鎖を外せば、わしの存在はたちまち、この上なく不安定なものになる。お主なら、当然その意味が分かるな？」

もちろんだ。

春臣は無言で頷く。

そのお守りは媛子がこの世で生きるための命の糸なのである。それが無くなってしまうえば、彼女の命は一気に風前の灯火となって……。

つまり、つまり……。

彼女は、この世から、消えてしまう。

全ての事が、無かった事に、なってしまふ。

それは最悪の事態だ。それだけは、何としても防がなくてはならない！

春臣は慄然とした。

それが、彼女の、カクゴ。

と、ふいに、彼女は何の躊躇いもなく、そのお守りの紐をその石の先で引っ張った。長く、ピン、と張る。

「あー！」

春臣は恐怖に顔が引きつった。

あとほんの少し、ほんのちょっと彼女が力を込めれば、その糸は簡単に断ち切られてしまう。キリキリと細かい糸が干切れていく音が聞こえるようだった。

「春臣、わしはもう、引き返せぬのじゃ。わしには、その覚悟がある」

彼女のその表情は本気である。恐ろしいほどに無表情だ。

「止めるー!!」

「馬鹿春臣……」

彼女の頬に、一筋の涙が伝って、

「最初から、わしのことなど、放っておけばよいものを……この、大馬鹿者が」

途端、張り詰めていた、糸が、するりと緩んだ。ぼとり、とそれが、地に落ちた。

春臣が作ったあのお守りも、音もなく草むらに落下した。

命の糸は、あっけなく、闇に吸い込まれてしまった。



「多めに見積もって、ざっと二、三十分というところか」

彼女は暗闇の色が溶けたような虚ろな瞳で言った。

「わしの『残り時間』は……」

すると、彼女の体から、きらきらと僅かに火の粉のような光が空を目指すようにして、舞い始める。彼女の全身をぼんやりと光が包みこんでいた。

きつとあれが、彼女の内部から具現化した、存在の源なのだろう。それはチラチラと、ホロホロと、仄かに舞い散っていく、命。止まることなく、少しずつ、少しずつ、ほころびていく、魂の火。

あれを、どうにかして止めなくては。

そう思った春臣は彼女にそろそろと歩み寄る。目指すは、彼女の足元に落下した物である。

あの緋桐の刺繍が入ったお守りさえ手に入れることが出来れば、まだ彼女を救える可能性を少しでも多く残しておけると思ったのである。

が、彼女はその春臣の思惑に気がついたのか、じり、と後退しつつ、草むらに手を入れた。

「あー！」

そして、落としたお守りを掴むと躊躇なく背後に放り投げた。

「止めるー！」

しかし、そんな春臣の叫びは虚しく、彼女が放ったそれは放物線を描いて、近くを流れていた小川に落ちる。小さく水しぶきが上がり、そのまま流れに乗って下流に消えていく。あつという間に見えなくなってしまうた。

「春臣、言ったはずだ」

と、くつと強く引き締められた媛子の口元が動く。

「わしには覚悟があると」

やはり、彼女の決意は揺るぎないのだ。

春臣は思わず膝から崩れ落ちてしまいそんな喪失感を感じた。落ちれば最後、何も受け止める物のない、谷底を覗いているような心地である。

嘘だろ。

嘘だと言ってくれ。

春臣は、両手を握って、そう懇願しそうになる。

本当に、これで、彼女を救う方法は無くなってしまったのか？

つまり、それは、自分のここまでの行動が無意味だったということなのか？

自分は、彼女の命が目の前で潰えていくのを、眺めているだけしかないのか？

ただ、この絶望に打ちひしがれる瞬間を味わうしか……俺は、このために……。

首を横に振りたいが、春臣にはその力がない。

「もはや、手立ては無くなつたな、春臣」

彼女の言葉は、まるで、意気消沈した春臣の頭にさらに冷たい水を浴びせかけるようだった。

「わしは、このまま一方通行の道を進むだけだ。後戻りはない。そして、もはや、未来への前進もない」

停止も、巻き戻しもない。  
彼女は言う。

「そう、もはや、為す術がない。わしが生き残る方法はない。運命は決まったのだ。後は消えいくのみよ」

「そんな、嫌だ。俺は……嫌だ……お前が消えるなんて……」

か細い声でそう口にしてから、春臣は後悔する。

何だよ、これ。

我ながら、母親にすぎる三歳児のような、女々しくて、情けない声だな。

すると、そんな春臣を媛子はせせら笑う。

「本当に、馬鹿な男じゃ。ここまで来ると、いっそ滑稽じゃな。最初から何度も希望などないと言っておるのに」

「……」

「そもそもだ、春臣。そもそも、こんなわしなどを救って、一体何の意味があるというのだ？」

生きる価値などない、わしなどを救って。

「第一に、わしは……わしは、そんなにお前にとって、魅力的な存在だったのか？」

ふいに、彼女の瞳に、深い疑問の色が差す。その変化を春臣は見逃さなかった。

彼女の考えが急にかき乱されるのが分かる。

「わ、わしは、いつだって、この上ないほどに醜く、わがままで、馬鹿な奴だった」

「媛子……」

「お前に初めて会ったとき……お主は、知っておるか？ わしは、人の上に立つ存在を気取ってみたいくて、神と名乗ってお前を騙したのだ」

「……」

「わしは、とんだ詐欺師じゃ。その上、度々、どうしようもない不安と望郷の念に駆られて、惨めに泣いたこともあった」

「彼女はしゃくり上げるように言葉を継ぎ足していく。次々と上塗りしていく。」

「そして、拳句に、いつも優しいお前に恋をして、またお前を散々困らせて、お前に嫌われるのが怖くて、重ね続けた嘘を明かせないまま、神の世に去ろうとして、お前をこれでもかと失望させた……」

「一体、一体、どこが。」

「一体、お前は、こんな可愛くないわしの、どこが好きなのだ？」

「わしには、皆目、分からん。」

そう言われて、夜彦は頭を揺さぶられた気がした。雷に打たれたような衝撃に、意識が覚醒した。大げさにもそのまま後ろ様に倒れ

てしまうかと思った。

そうだ、言われてみれば……。

俺は、一体、彼女のどこが好きなんだ？

そもそも、好きなのか？ 嫌いなのか？

いや、

いや、好きだ。全身全霊をかけて、大好きだ。

声の続く限り、何度でも、愛していると叫べるほどに。

その感情に疑い余地は、一切ない。

だが、いざその理由を問われると、途端に、行き止まりに突き当たる。思考が停止する。脳内のエンジンが空転する。

俺は、俺は、彼女の、何が好きなのだ？

漠然とした気持ちで春臣に押し寄せる。

分からない、分からない、分からない……くそう！

歯がゆい思いが春臣の内部を駆け抜け、手足にしびれが生じた。

ふいに、

でも、

と、心の声がする。

でも、

たった今、一つだけ分かることがある。

無言で、春臣は頷く。そう、今だけは分かること。

春臣にとって、今の彼女は、

「……嫌いだ……」

「何だ？」

「少なくとも分かることさ。俺は、今のお前が、大嫌いだ」

拳を強く握りしめつつ、春臣は言い放つ。

「な、何だと？」

「亡者の目になって、ひたすらに卑屈になって、自分の全てをことごとく否定して、生きることを放棄しようとしている、お前が大嫌いだ」

そうだ、そして俺が好きな、媛子は。

「泣いて、笑って、怒ってる、いつものお前が好きなんだ。お前が、神だろうと、ホカノだろうと、悪魔だろうと何者でも関係ない。本当に『生きている』お前が好きなんだ。俺は今、そう自信を持って言えるぜ」

「生きている、わし、が……？」

「ああ、いつもの元気で明るいお前となら、俺はこれからも一緒に暮らして生きたいと思ってる。でも、今のお前はダメだ。大嫌いだ」

そして、

そして、そんなお前は、今朝の俺にそっくりだ。言葉にはしないものの、春臣は思う。

ただ、孤独を背負い、貪りつき、他者を退け、自分一人で勝手に背を向けて消えていこうとしているお前は……俺と瓜二つだ。

ただ、孤独という悪魔に取り憑かれているだけなんだ。目を塞が

れて、毒の匂いがかがされて、体の自由を奪われている。

そう、それならば。

春臣は確信する。

それさえ振りきれれば、また、前に踏み出せるはずだ。この俺と同じように。

「媛子！！」

そこで、春臣は唐突に彼女の名前を大声で叫んだ。こんなにも至近距離にいるのだから、そこまで大声で言う必要はないのだが、春臣は、目一杯の大音声を出した。

当然、彼女は、意味不明な春臣の行動に、一瞬、目を白黒させて、

「な、何だ？」

と、返事をした。

返事、を、した、のだ。

その瞬間、彼女に見出した僅かな隙に、春臣はにやりと笑う。

ようやく、見つけた。

これだけ、これ。

「お前は、まだ生きること捨ててねえよ」

春臣は再び力を取り戻した瞳を媛子に向けた。

「どういう、意味だ？」

怪訝に眉を寄せる彼女に言葉を続ける。

「お前はよ……お前は、この世界で、ただお前にだけ意味のある『名前』に返事をした。俺がつけた名前だ！」

春臣は鮮明に思い出している。

彼女が初めてやってきた時のことを。

彼女が誇らしげに春臣がつけた名前を、自分に与えられた存在の証を、筆で書いている風景を。

「全てを捨てて、この世界への未練を全て断ち切ったつもりでいて、お前はそれを出来ていないんだよ。なぜならお前は、お前の存在を認めるその名だけは捨てていない。だから、俺が呼べば、お前は返事をする！」

「な!？」

動揺に口を歪める彼女。

「媛子！」

そこで、春臣は精一杯の声を張り上げる。



「お前はまだ、お前なんだ！ 消えちゃいない。お前は、この世に生きるホカノであり、ただ一人の媛子なんだよ」

だから。

「戻ってこい。このまま孤独の影に飲まれるな！」

彼女はいきなり盛り返した春臣の勢いに気圧されたのか、頬を引きつらせながら口を開けた。

「な、何じゃ、それは……」

と、明らかに不安そうに目を泳がす。

「それは、わしの揚げ足取りのつもりか？ そんな屁理屈で、わしを言いくるめられるとも思っておるのか？ わしが、首を立てに振るとでも思っているのか？」

「いや、思ってたねえよ」

そこではしっかりと首を横に振った。

先ほどの、お守りを引きちぎった彼女の決意は、相当なものだ。簡単に曲げられるものならば、苦労はしない。

それほどに春臣の認識は甘くはなかった。

「が、もちろん、だからといって、それで敗北を認めただけではない。い。」

春臣は視線を再び媛子に向ける。

「けれど、これで、お前を救えるチャンスが、きつかけがあること

が分かったんだ。それを確認できれば、十分だ」

そう、希望の光は、まだ失われていない。

「わずかでもそれがあるんなら、俺は諦めえぞ。どうあがいてでも、お前をここから連れて帰る！」

そして、

そして、言葉の終わりに、一瞬の隙をついて、春臣は地面を蹴り上げた。

体を屈め、ぐん、と上半身を突き出すように、駆ける。息を止めて、宙を飛ぶ。

春臣は、媛子に向かって、突進したのである。

「春臣!？」

不意を衝かれて、媛子は体を強ばらせ、身動きが取れなくなっているようだった。

それを春臣は瞬間的に確認した。

よし、逃げる気配はないな。そう思いつつ、春臣は全身の意識を集中させ、最後に加速のために大きく跳躍すると、その勢いのまま、彼女に体当たりを食らわせつつ、両腕で抱きかかえた。

瞬間。

例の、あの言葉にしがたい、不快で、吐き気に満ちた怖気が体から這い上がってくる。

しかし、春臣はそれを精一杯意識の外に押しやって、腕の中でもなく媛子を抑えつけ、彼女の自由を奪った。

「きゃあつ！」

媛子の悲鳴が耳元で聞こえ、春臣と媛子はそのままの勢いで、後ろに転がった。

草の上を視界がぐるぐると回転する。空と地面が交互に現れて、消える。太陽の光がやけにきらきらと眩しく、カメラのフラッシュのように映った。

そんな中、春臣は、回転しながらも、彼女に怪我をさせないよう、両腕でかばった。ただでさえ傷だらけの体に、さらに切られるような痛みが走る。もはや、何が起きているのか理解出来ないほどの状態だ。

と、

そこに、

急に冷たさの刺激が加わった。

派手に水しぶきを上げながら、春臣と媛子は背後に流れていた小川に突っ込んだのだ。

冷たい！

ひんやりとした水が春臣の服の上から染みこんでくる。回転する内にぼやけていた春臣の意識が鮮烈な刺激で、一気に覚醒する。

そして、

そして、気がつけば、春臣は、川の底に横たわり、その上に馬乗りの状態で、媛子がいた。

浅い川であつたので、春臣の体は完全に水に沈み込むことなく、顔を出せている。新鮮な空気を吸って、吐いて、吸って、吐いた。

ああ、大丈夫。

俺はまだ生きているみたいだ。

そして、見上げれば、沈みゆく夕陽を背景に、半泣きの顔をした

媛子の姿が見えた。

今にも折れそうな華奢な体をふるふると震わし、すつすつと苦しうに浅い呼吸をしているのが分かる。

そして、長く美しい紅の髪から、水滴がこぼれ落ちている。

夕日色した、水の雫が、透明で澄んだ瞳を、艶やかにふくらんだ唇を、仄かに赤く色づいた頬を、雪のように白い喉元を、体を濡らしている。

春臣にはそれが、恐ろしく美しい光景に見えた。

彼女の体からふわふわと溶け出す魂の火の粉がその様子にさらに神秘的な要素に拍車をかけている。

綺麗だ。

言葉で形容できないくらいに。

この世のものでないとは思えないほどに。

これは……。

神々しい、とでも、言うのかな。

春臣は思う。

けれど、

けれど、彼女はそんな大げさな存在じゃない。春臣は知っている。彼女は、全くもって不完全で、欠けた所ばかりの、少しだけ変わったところのある、少女なのだ。

そして、ただ今は、自分の中の闇に触れ、気持ち揺らいでいるだけの、か弱い少女なのだ。

そんな彼女だからこそ、春臣は救いたいと思う。

彼女の心の闇から、助け出したいと思う。

思う存分、はちきれそうなほど、愛おしいと思う。

全身全霊で守ってやりたい、と思う。

「媛子……」

心臓がそんな熱い想いに、急かされるように、トクトクと急ぎ足で脈打っていた。

「な、何を、する……」

彼女は半分泣いた顔をしながら、酷く驚いているようだった。  
「無理もない。春臣が急に飛びついてきたからだろう。」

「お前を逃がさないように、って思ってな。飛びついてみたんだ」

余裕は全くなかったが、精一杯虚勢を張って苦笑いをしてみせた。  
しかし、それで場が和むはずもなく、彼女は厳しい表情を一切崩さない。

「春臣、お前は頭がおかしいぞ」

「知ってるさ。俺は昔から頭のネジが飛んでるんだ」

そう言い切るか、言い切らないうちに、彼女はその場から立ち上がって、逃げようとした。

しかし、その腕を春臣は掴む。

逃がすわけがない。

が、そうすると同時に生じる、あの感じ。手と腕に、凍傷のような痛烈な痛みが生じ、春臣は苦痛に表情が歪んだ。

「待て、よ……」

すると、彼女は「ひっ！」と驚いて振り向いて、

「馬鹿」

とぶつけるように言ってきた。

「どうしてじゃ……お主はわしに触れると痛いはずじゃろう?」

春臣は軽く首を振る。ここでも余裕を見せるために、薄く苦笑いをしてみせた。

「なに、ちょっと痛い程度だ。大したことはない。それに、少しずつだけど、実は俺、この力をコントロール出来るようになってきているんだ」

「コントロール、じゃと?」

「そうだ。じきに、この妙な力も俺自身の力で完全に封じ込められる日も近いぜ」

だから、お前が、この事を、気に病むことはない。

「そもそも、これは俺の問題であって、お前には関係ないんだよ」

「い、一体何を根拠に、そんなことが出来ると言っているのだ」

「根拠って……そんなもんはない。でも、俺が出来るつつたら、出来るんだよ」

「どういう自信じゃ、それは」

涙に濡れた瞳で、呆れたように見る彼女を、春臣は出せる力を振り絞って、彼女を倒れている自分の方へ引き寄せた。

「な!?!」

必然的に、彼女顔が近くなり、呼吸も聞こえ、瞳の色もしっかりと見えるようになった。

さあ、これで嘘は付けまい。

さあ、全部、全部、俺が、お前を、見抜いてやる。

「お前はよ、ただ怖がってるだけなんだよ」

込めていた力を緩めるように、ゆっくりと、春臣は言った。

「な、何がだ」

「今まで、自分の手にしたことの無い、この、他人と共にある幸福が、だ」

「幸福が、怖い、じゃと？ それは異な事を言うな。意味が矛盾していないか？」

それに対し、春臣は素直に、そうだなと頷く。

「俺が言いたいことはそれとはちょっと違うな。お前は、その幸福を受け取って、それを『手放してしまう』のが怖いんだ」

「手放すのが、怖い？」

彼女の眉間に皺が寄る。全く意味が分かっていないようだ。

春臣は続ける。

「そもそもお前は、きつとこの他人と共にある幸福に慣れていないんだ。何しろ、お前は、俺たちに出会うまで、神たちに使役される存在、ホカノとして生きてきた。それは、きつと、自分の幸福を望みながら生きることとは、かけ離れた生き方だったんだろう。自分を殺して、他者のために命を捧げるような、そんな生き方だったんだろう。奴隷のように、こき遣われたのかもしれない。俺は知らないが、それよりももっと酷いこともあったのかもしれない」

彼女が先ほどから見せている、虚ろな瞳の奥にあるものを、春臣



は敏感に感じ取っていた。それが他者と共にあるはずの環境とは、遠くかけ離れた状況から生み出された、虚無と孤独の色を含んだものであることにも気が付いていた。

「お前の心は、いつも一人だった。分かり合える友もいなかったことだろう。悩みを打ち明ける親もいなかったことだろう。寂しくて、悲しくても、何も無い。他人も自分も、何も無い。何しろ、神に存在の価値を認められていない存在だったんだよな。それはめっちゃくちゃにきつい状態だぜ。想像絶する苦痛だ。でも、そんな中でお前は自分自身に名前をつけ、やっとこさ、首の皮一枚で、自己を繋いできたんだろう。自分自身を失わずに来たんだろう。お前の生き方とはそういうものだったんだ。それが普通だったんだ」

「……」  
「でも、だからこそ、お前は、自分の目の前にふいに現れた、俺たちみたいな何の気兼ねもなく繋がり合える存在が、そこから生まれる自分のための幸福が、急に怖くなったんだよ。初めて見た物をいきなり手渡された子供みたいに、不安でおろおろしてたんだ」

「……」  
「お前は、それが怖いんだ。手にした大切な物がそれがいつか目の前から無くなってしまうんじゃないかってな。その幸せが失われた時に、自分がどうなってしまうのか分からない。今にも足元の地面が崩れ落ちてしまいそうな恐怖だ。もし、そうなったとき、元の一人の自分に戻れるのか、否か。それが分からない。お前はそれを無意識に感じて今まで生きてきたんだ」

「……」  
「でもな。いいか、本当のお前は、俺と一緒に暮らすことを望んでいる。椿や、さつきや、木犀や、他にもたくさん人間や、この世界の中で生きていくことを望んでいる。一人でいるよりも、そっちの方が何億倍も楽しいからな。けれど、けれど、お前はその前で足踏みをしている。そこから引きはがそうとしている影のお前がいる

んだ。そいつは、俺たちと共に生きる中で、お前が今以上の最大の幸福を受け取って、いつか、それを手放すことになるかもしれないことが怖い。だから、だから、それだからこそ、いつそのこと、全てから逃げようとした」

「……」

「簡単なことだ。お前が平静な状態に、孤独だった時の状態に、いつでも帰れるようにするには、その幸福をこれ以上知らなければいいわけだ。後戻りできる位置で、引き返せばいい。ドアに鍵を閉めて、背を向ける。何も見なかったことにする。それで、ベッドに倒れこんでよく眠る。それでいい。ほんと、イージーだよな」

「……」

「そして、内なるお前は知らず知らずの内に、いつ俺達に背を向けて逃げようか、と算段していた。自分が耐えられなくなる瞬間を、今か今かと探していた。そして、その引き金となったのが、昨晚の俺の力の暴走だ」

「……」

「あれは、お前にとって不測の事態であると同時に、これ以上ないほど、都合の良い出来事だったんだ。あの事件によってお前は瞬時に自分の中で、世界が俺たちの関係を拒んでるだのなんだの、自分には生きる価値がないのだのと、そういう余計な理屈をあれこれと考えた」

「……うるさい」

「お前には、ホカノとしての過去があったから、そういうことは考えやすかったんだろう？ とにかく、お前はそれによって、幸せから逃げ出す、大義名分を得た。これで逃げ出せば、自分は幸福を失うことへの永遠の苦悩から開放される。後は自分で勝手に消えちまえばいい」

「……黙れ」

「でもよ、そんなこと、俺が許すかよ。そんなものは、所詮、お前がでっち上げた、いい加減で生ぬるい、建前でしかない、戯言でし

かないんだよ。お前は気がついていないが、本音は違う。お前は俺たちと一緒にいたいんだ。交わったことのない他人との、俺達との繋がりを受け入れたいんだ」

「し、知ったような口を！」

「知ったような口じゃねえよ。お前はそうなんだ。間違いない。大丈夫だ、安心しろ。俺がお前を守ってやる。絶対に不幸にはしねえよ。だから」

瞬間、視界に派手に水しぶきが散った。

「勝手に、決め付けるな！！！」

媛子の絶叫が飛び、そして、一瞬遅れて、春臣は自分が殴られたのだと分かる。頬にじわりと痛みが広がった。

「お前には！！！」

彼女の悲痛な声。

「お前に、お前に、わしの気持ち分かるのか、わしの、わしの壊れそうな気持ちが理解出来るのか！！！」

間髪を入れずに、彼女は春臣の頬をぶった。強く、強く、力の加減もなく、ぶった。

「何が幸せが怖いじゃ、何が逃げ出しておるじゃ、お前は、お前は、神なのか！！ 他者の気持ちをそんなに簡単に読み取れるのか、この、腑抜けが！！！」

目の前で光が弾け、音が飛ぶ。息を吸う暇もない。

「言え、さあ、言ってみろ、わしが今何を思っているのか、お前をお前をどれほど憎らしく思っているのか!」

右に左に、容赦なく世界がぶれる。彼女の声が頭上で爆発する。

「何も知らぬくせに、わしのことなど、何も知らぬくせに、偉そうな顔をするな。見透かしたようなことを言うな!」

春臣は、半濁した意識の中でようやく彼女の声だけを捉える。搾り出すような、胸を締め付けるような、切ない声が聞こえる。

「どうして……どうして、放っておいてくれぬのじゃ。どうして、嫌いになってくれぬのじゃ。どうして、突き放してくれぬのじゃ。どうして、絶ち切ってくれぬのじゃ。こんな、こんな、わしのことなど。もう、たくさんじゃ。もう、たくさんなのじゃ。こんな世界など。わしは、消えてしまいたい。一人でいいのじゃ!」

と、媛子の振り上げた、手が止まる。

持ち上げた春臣の腕が彼女の手を受け止めていた。

春臣は、口の中に入った水を吐き出し、咳き込む。

「な、なんじゃ」

そして、涙をぼろぼろと流し、今にも崩れ落ちそうな彼女に向かって、春臣は言った。舞い散るしぶきを見上げながら、言った。彼女だけではなく、自分自身にも言い聞かせるように……。

「違つよ」

「何が……」

「俺はお前の気持ちを読み取ってたわけじゃない、全然そんなじやない。俺は人間だからな、神様なんかじゃない」  
「な、ならば、なぜあんな風に自信満々に！」

それは、  
簡単なことだぜ。

ただ、俺は、

「お前を……信じてるんだ」

そう、ただそれだけだ。

「お前が、本当は、死にたいんじゃない、どうしようもなく生きてたがってるって」

俺たちは孤独なんかじゃない。

「お前は、自虐的で、死にたがりの、名もなき孤独主義者なんかじゃない。お前は、緋桐乃夜叉媛だって。他の誰でもない、媛子、お前自身だって。そして、俺たちのかけがえのない大事な仲間なんだ

って、な」

そう、信じてる。

もう、俺は一人で、孤独に生きようなんて、全然思わない。

誰かと一緒にいるほうが何千、いや、何万倍も、何兆倍も、心強い。

誰かと一緒に笑って、泣いて、語り合っている方が、世界は美しく見える。

完璧じゃない、不安定で、未完成な俺達はいつだって、誰かとつながり合って支えあって、生きてるんだ。

俺たちは、そっと手を差し出せばいい。

そうすれば、簡単に、

ほら、こうして、俺達は心の中に、『居場所』を得られるんだ。

誰かを『信じられる』んだ。

絶望的な状況にも、いつだって立ち向かえるんだ。

力を、もらえるんだ。

少なくとも、今の俺にはそれが分かる。

だから、戻ってこいよ。

「はる……わしは……」

今にも壊れそうな、彼女の声。

「大丈夫だ、怖くない。お前も、俺を信じればいい」

いや、信じてくれ！

「わ、わしは……」

馬鹿で勘の鈍い唐変木な俺でも、これだけは誓える！

「俺は、お前を二度と、一人ぼっちなんかにほしくない！！」

だから。

そう言って、春臣は媛子を抱きしめた。  
まだぬくもりのある彼女を抱きしめた。

いつの間にか、彼女に触れたときに生じる痛みは、完全に消えていた。

あかあかと、燃える、炎が見えた。

それは、まっかに燃える、圧倒的な光を発する、火の塊だった。

それは、まるで、新しい日の始まりを告げる、温かな太陽の光のような、炎だった。

太陽が発し続ける、無限の力のような、そんな永遠性を感じさせる、炎だった。

それが、春臣の目の前で燃え続けている。

これは何なのだろう。

薄ぼんやりとした意識の中で、春臣は思った。

もしかすると、自分は、夢を見ているのだろうか。

だとすれば、最近によく夢を見るものだなあ。

そう、脳天気と思う。

うん、自分はたくさん夢をみた。

それも、いろんな夢を、だ。

その全てを春臣は覚えているわけではなかったが、なぜか、そのほとんどが、とても、とても、寂しい夢だったように、春臣は思う。たった一人で、真冬の大地に、立ち尽くしているような、そんな



風に悲しくて、冷たい……。

どこにもいけなくて、ただ立ち尽くし、一人で途方に暮れているような、そんな夢だ。

闇に閉ざされ、行くべき道も見えず、凍えた体を温める方法もない。

そこにあるのはただの絶望である。救いのない失望である。

ただ、

ただ、今見ている夢はそれらとは違うと春臣は本能的に感じていた。

今までの、空虚に満ちた悲しさはなく、どこか体の奥から抑えきれない力が湧いてくるような、そんな不思議な夢である。

「炎、か」

それが何を意味するのか、春臣には分からない。

しかし、その燃え盛る炎が、これからの春臣の未来を眩しく照らし出してくれるような、そんなものを象徴しているのではないかと直感した。

「黎明の炎だ」

と、その光の向こうから、誰かの声が聞こえた。

それは一言には形容し難い、男と女、老人と子供、それら全ての声が混ざり合ったような、どこか神秘的な声だった。

「れいめい、の、ほのお？」

春臣は、その言葉を繰り返す。

「それは、一体？」

「……新たな時代の始まりを告げる炎だ」

しばらくして、その声が返事をした。

それは、相変わらず正体不明の声ではあったが、何だか、春臣には、もう死んでしまった祖父が話しかけてくれているような、優しく懐かしい感覚がした。

「お……おじい、ちゃん？」

思わず呼びかけるが、

「お前の身はその炎に焦がされている」  
「え？」

急に言われて、自分の体に視線を落とすと、確かに、春臣の体はその炎にすっぽりと包まれていた。

別に熱くもないし、体が焼けているわけではないのだが、本当に燃え盛る炎の中に自分がいた。

はつとして、髪の毛に触る。

掴んで見ると、それも炎の色に染まっていた。

あかく、めらめらと、光っていた。

これは一体どういうことなのだろう。これではまるで、媛子の髪の色にそっくりじゃないか。

そう思って、春臣は瞬間的に、それまでの記憶を取り戻した。

そうだ、自分はこれまで、媛子と一緒にいて……。死のうとしている彼女を必死に説得して……。？

「あの後、一体俺たちはどうなったんだ？　ここは一体どこなんだ？」

周囲に目を配る。すると、春臣の目はすぐに彼女を見つけた。

媛子はすぐ隣にいたのだ。彼女はまるで、すぐ近く見えない誰かがいるように、虚空を見つめて、ぼんやりとしていた。ふらふらしながら立ち、非常に頼りない。

「媛子！！！」

そんな彼女の肩を揺すぶると、彼女はすぐに我に戻ったようで、目を瞬かせ、ぶるぶると頭を振った。まるで、起きたまま眠っていたような素振りである。

そして、寝ぼけた瞳で、彼女は春臣の方を向くと、

「おお、目を覚ましたか、春臣」

とのんびり口を開く。この不可思議な状況が理解できているのか、ふわふわとした暢気な口調だ。

「お前、今、一体何をしていたんだ？」

「うむ、わしか？　わしは、少しだけ、声を聞いていたのだ」

「こえ……声だって！？」

俺も聞いたんだ。

春臣がたった今自分に聞こえていた声の事を話すと、彼女は、ああなるほどと納得したように頷いた。

「おそらく、それはわしが聞いておったのと、同じ声じゃろう」  
「そ、そうなのか？　じゃあ、そいつはお前に、何を言っていたんだ？」

すると、媛子は、説明するのを躊躇するように、一旦口を閉じ、手に負えない物を預けられて半ば呆れているような、そんなため息を吐いた。

「……どうやらもう、わしらは選ばれたらしいのじゃ」  
「選ばれた？　何だよそれ。どういう意味だ？」

意味が分からない。

春臣の困惑した様子に、彼女は今度はうつすらと微笑み、額の辺りを指で搔くと、困ったような、それでいて、どこか嬉しそうな感じでこう言った。

「わしらは、『世界』に選ばれたのじゃ」  
「世界？」

その単語に、春臣は先ほどまでの媛子との会話を咄嗟に思い出す。彼女の暗く淀んだ瞳がフラッシュバックした。

まだ、世界が自分たちを拒絶しているなどと言っただろうか。

「お、お前、まだそんなこと言ってるのかよ！　いい加減に諦めろ！　お前は俺と一緒に生きるんだ。みんなのいる場所にもどって、それで」

しかし、思わずいきり立った春臣の口元を、媛子は手を伸ばし、焦らず落ち着いた動作でそっと押さえた。

「慌てるな。もう、わしは死のうなどとは思っておらん」

「!?!? つぶはあ! 何だつて!?!?」

「だから、お主を信じることにした、ということじゃ」

「え、え、それじゃ……」

「うむ。共に帰ろうではないか、『わしらの居場所』に」

そうして、彼女はにっこりと微笑む。

その花が咲き誇るような自然な表情には、先ほどまでの魂のない人形に似た、硬質な感情の欠片はなく、彼女本来の瑞々しい生命力がきちんと宿っているように見えた。

それは、つまり……。

そこまで思った途端、幸福の風船が春臣の中でいくつもいくつも弾けたのが分かった。

間違いない、それは、いつもの彼女が戻ってきている何よりの証拠である。

彼女は、背後に横たわる闇に身を落とすのではなく、春臣たちと暮らすことを選んだのだ。

「媛子……」

熱いものがこみ上げ、唇が震える。

良かった。これで大丈夫だ。

その事実が嬉しくて、春臣は彼女に思わず飛びついた。

だが、直前で、その行動は彼女の手によって止められてしまう。

「え?」

「おつおつ、よく染まっている。この炎の色の中」

と、片手で春臣を抑えつけつつ、彼女はなぜかもう一方の手を伸ばし、わしゃわしゃと無茶苦茶に髪を撫で回し始めたのである。

「うむうむ、こうして……よっと」

「お、お前、何してんだよ！」

「いや、ただのう。お主をこう、程良くぼさぼさでくしゃくしゃのブ男にしてやろうと思ってな。くっふふ」

「はあ？ どういうことだ や、止めるよ。せっかくの感動の場面だつてのに」

執拗に頭髪を狙う彼女の手から逃れながら、春臣が詰まらなさそうに口を尖らす。

しかし、そうすると彼女は不思議なことに、むんと胸を突き出し、春臣よりさらに怒った顔をして、睨んできた。

「何を言う、春臣！」

と怒声を飛ばす。

これには春臣も動きを止め、啞然とした。

「こ、今度はどうした？ まさか、怒ってるのか？」

「うむ、そのまさかじゃ」

「ど、どうして！？」

「わしはのう、春臣。こんな絵に書いたような感動のクライマックス的なお涙頂戴のシリアス展開など、すでにお腹いっぱいなのじゃ」

「はあ？」

一体、この少女はいきなり、何を言い出すのだらう。

「のう、聞くのじゃが、春臣。一体いつからわしらはこんなに内向

的で悲劇的なダークキャラクターになったのじゃ？」

「はい？」

「いいか、よく聞け、春臣。わしらは、いつから、こんなに生きるか死ぬかで必死になって、ギリギリの言い争いをするような者たちになったのかと聞いておる」

「え、ええと……」

「どちらかと言えば、わしらは脳天気な、ただただ何も考えずに無為なる毎日を過ごし、こうしてお互いふざけ合っておるほうがお似合いのキャラじゃろう？　そう思わぬか？」

そうして、彼女は急な言葉に呆気に取られている春臣の首筋を、脇腹を、ほれほれとこれでもかとかとくすぐった。

「うひゃあっ！」

思わぬくすぐったさに、春臣は情けない悲鳴を上げてしまう。

すると、その様子を見て、彼女がくっくと笑う。手を叩いて「傑作じゃ、傑作じゃ」とはしゃいだ。

「全く、お主の傍におると飽きぬのう。くふふふ」

一体何がそんなに面白いのかと、いつそ怒ってやるうかと思つた春臣だったが、しかし、彼女らしい、いたずらっぽいその笑顔を見た途端、ふいにはっとして、すぐに肩から余計な力が抜けるのが分かった。

「……ああ、これでいいんだっけ？」

と、彼女に聞こえぬよう、小さく呟く。

そうか、そうだったよな。

全く、このお姫様ときたら、『いつもいつも』こうなのだから。本当にわがままで、気分屋で、泣き虫で、意地っ張りで、新しい物に興味津々で、傍にいれば疲れるばかりだ。

でも、

でも、そんな彼女と一緒に、こんな下らないことを繰り返して、俺達は暮らしてきたんだ。

春臣は今さらながら、思う。

ただ、日々を笑いながら過ごし、たまに喧嘩して、その度に仲直りしながら、俺達は一緒に生きてきたんだ。

そして、そんな愛すべき日常が戻ってきた今、これ以上、何を望むことがあるだろうか。

いや、あるわけがない。

そう、これで、いいのだ。

「まったく、俺をからかうのがそんなに面白いかよ」

そうばやいて、春臣はとても嬉しそうに、ため息をついた。



167 黎明の炎 6 (後書き)

どうも、ヒロユキです。

今回は、このひたすら長いだけの物語もあと数回で終りを迎えるということで、何か面白いことは出来ないものかと考えた結果、主人公の春臣を燃やして、炎属性をつけてみました。読者の方々、いかがでしょうか。草刈りをするときなど、腕を振り回すだけで草を簡単に燃やしてしまえるので、重宝しますよ。しかし、その反面、彼の弱点は水ということになります。つまり、今の彼なら雨の日の水たまりに足を突っ込むだけで溺死できるだけの能力があるということです。うっかりシャワーなどをかけてしまわないように注意しましょう。きつとスライム状になって溶けてしまいます。

「つで、俺を存分にブ男にするのはいいがな……」

赤く染まつてしまった髪を散々いじられながら、しゃがみこんでいた春臣がうんざりしながら口を開いた。媛子になすがままにされ、いい加減、退屈で慥然とした表情になっている。

「そろそろきちんと説明してくれないか？」

「うん？ 何のことじゃ？」

すると、媛子は春臣の髪を触っていた手を止め、頭越しに逆さの顔で春臣を覗き込んできた。

「だから、この意味のわからない状況のことだよ」

「この状況……」

「お前はさっきの『声』から話を詳しく聞いたんだろう？」

「おお、そうじゃったのう」

忘れておった忘れておった、と彼女はお気楽にぼんと手を叩く。全く、こちらが聞かなければ、いつまでこうしているつもりだったのだろう。そう思っただけで春臣はうんざりした。すっかり意味のわからないネジネジヘアになってしまったごわごわの頭を直し始める。

「じゃあ聞くが、お前がさっき口走った『選ばれた』ってというのはどういうことだ？ それに、さっきから俺たちの周りを取り巻いてる、この炎は何だ？ さらにもう一つ、そもそも俺たちはどうしてこんな場所にいる？ お前には分かるんだろう？」

春臣が矢継ぎ早に訊ねると、彼女は嫌そうに目を細めながら、口をすばめて煙たい顔をした。

「そんな風いきなり聞かれても全ては答えられぬ。わしの口は一つだからのう」

「じゃあせめて、その口を動かすスピードを普段の三倍にしてくれ。俺は早く話を聞きたいんだ」

意地悪でそう注文すると、彼女は今度はあからさまに面倒くさそうな顔になった。今にも文句を垂れそんな空気である。

慌てて春臣は首を振る。

「ごめん、冗談さ。媛子が答えられるところからでいいから、話してくれ」

「よし分かった」

媛子は元気に返事をした。

「では、お主が話を存分に楽しめるよう、可能な限り余計な脚色をして、目に余るほどのユーモアで、たんたんとしみじみと長々と語ってやるうぞ。それはそれは退屈過ぎて、ため息も枯れ果てること請け合いじゃ」

「媛子、いらぬ世話をするんじゃない」

すると、彼女はふふふと楽しそうに笑い、しかし、すぐに真顔になって、こう訊いてきた。

「先程の千両神の話を覚えておるか？」

「千両神の？」

「そうじゃ。神の世が滅びかけておるといっ話じゃ」

春臣は記憶の糸をたぐり寄せる。

「ああ、覚えているぜ。確か、世界が縮小してるんだっけ？ けれど、それが何だ？」

すると、彼女は説明がしやすいようにか、隣に座ると、横から春臣を見つめた。春臣に、彼女の美しい瞳の中で光り輝く炎が、ぐるぐると荒々しく渦巻いているのが見えた。その圧倒的なを感じ、ごくりと唾を飲み込む。

「春臣、この炎は世界の始まりを意味する炎じゃ」

「世界の、始まり……」

それは、先程の『声』も言っていたことだったな。

と、その時、春臣は合点がいった。

そうか、と気づく。

「もしかして、神の世が減びていることと、この黎明の炎は、直接的な関連があるのか？」

春臣が勢いこんで訊ねると、彼女はうんうんと頷く。

「そうじゃ」

春臣は勘が良いのう。

彼女が言う。

「先程の声によれば、神の世が減びてから、この炎は人の世界に現れた」

「そ、それは、つまり……」

「うむ。世界は今、一度滅んで、新しく生まれ変わるうとしているのじゃ。そして、この黎明の炎の出現は、その胎動と言っても過言ではない」

「なるほど」

「春臣、世界は生き物なのじゃ。わしらと同じように」

だから、死ぬこともあれば、新たに生まれることもある。彼女は言う。

そして、当然のことながら、

「その意思もあるのじゃ」

「世界の、意思、が？」

媛子は無言で頷く。

「世界は、自らの意思で持って、自身に理を創る」

「……」

「それは、世界を形作る上で、一番重要なことじゃ。海がある。生き物がある。神がいる。大地には陽が照り、風が吹き、雨が降る。おおよそ、こんな具合に理を生み出し、世界は、自身の輪郭を決めていく」

物事に秩序が生まれ、時が世界に変化と循環をもたらし始める。それが世界の安定じゃ。

と、彼女は説明しつつ、炎に向けて手を伸ばす。そして、燃え上がる炎を愛おしそうに撫ぜた。

「そして、この炎はの、そのような世界の理を紡ぎ出すことが出来る、素晴らしい意思の力を持っておる。始まりの炎、黎明（夜明け）

の炎なのじゃ」

そう語る彼女はどこか誇らしそうだった。  
なるほど、と春臣は口を閉じ、そこで、これまでの説明を吟味する。

これで、今の状況を一部把握出来たのは確かだ。  
しかし、それでも依然、説明は不十分な状態である。

「それで、ここから新たな世界が生み出されようとしていることは分かる。でも、それで俺達がここにいる理由は何だよ。それに、『選ばれた』ってのはどういう意味だ？」

すると、彼女は、

「それをこれから説明しようと思っておったのじゃ」

と口を尖らせ、不機嫌そうに言う。

「しかし、今の説明を聞けば、その二つの問いくらい、簡単に分かりそうなものじゃがな」

「え？」

「どうした、いつもの鋭い突っ込みは出来ぬのか？」

「……お手上げだよ。正解は何だ？」

諦めた春臣を見て、彼女は得意げに笑う。

「仕方ない、そんな哀れなお主に、わしが答えを教えてしんぜよう」  
「仰々しい言い回しはいいから、さっさと教えるよ」

すると、彼女は、ごほんごっつんと偉そうに咳払いをすると、

「ふぶん、それはじゃの、春臣。わしらが黎明の炎によって生み出された、理<sup>ル</sup>じゃからじゃ」

オラらりとそう言った。

「ふふん、それはじゃの、春臣。わしらが黎明の炎によって生み出された、理<sup>ル</sup>じゃからじゃ」

これにはさすがに、春臣はずっこけてしまうかと思った。相変わらず、さらりとんでもないことを言っただけの彼女である。

「お、お前は……」

「何じゃ？」

「お前は、俺が少しでも理解しやすいよう、話を噛み砕くと言う事を知らないのか！」

「何を言っておる！」

すると、それを聞いた彼女は怒って拳を振り回す。

「これ以上、簡潔で分かりやすい結論はないぞ。何しろ、たった一言で全てを説明しておるのじゃからな」

「馬鹿言つな、いくらなんでも簡潔過ぎだ。俺たちが世界の理<sup>ル</sup>そのものだ？ そんな無茶苦茶なことをいきなり言われて、『はいそうですか』って頷けるわけないだろうが」

「春臣」

「何だ？」

「それは、無茶苦茶ではないぞ。わしらがここにいることがそれを証明しておる」

黎明の炎は、この世の理を生み出すのじゃ。

彼女は繰り返す。



「これは揺るぎない真実なのじゃ」

それは、

確かに、そうなのかもしれないけれど……。

「でも……でも、だからって、あまりにも話が唐突だ。それにさ、媛子」

「何じゃ？」

「仮に俺と媛子が、その、世界の理だとして、それが、何を意味することになるんだ？」

「うむ？」

「俺たち二人の存在が、この新たな世界にとって、どういう位置づけになるのかってことだ」

そう、そこが分からない。

春臣は思う。

例えば、世界の理<sup>リ</sup>として、『神が存在する』というものがあるとする。この場合、神における世界に対する役割とは、世界の統治であるだろう。その無限に溢れる自然の力を駆使し、地上の平穩を守ることだ。

現状は別として、少なくとも世界が成り立った当時、神はこの世にとつて、無くてはならないものだったのである。

しかし、一方で、春臣と媛子が世界の理とされるにあたり、その世界に対する役割というものが、春臣には見当たらない気がした。自分たちが世界から必要不可欠だと認識される理由が分からないのだ。

「うむ、そのことじゃが……」

と、媛子は深々と頷く。

「重要なのは、わしと春臣の関係性じゃの」

「俺と媛子の関係性？」

「こう言えば分かるか？ わしはホカノであり、お主は人じゃ」

彼女は自分と春臣を交互に指差す。

「ホカノと、人」

「そう、見た目がいくらそっくりでも、本質的に見れば、わしらは別の種族。元々、異世界の存在同士じゃ。新たな世界の理とはつまり、そんな異なる二種族が『共存する』ことなのじゃ。分かるの？」

「……」

「そして、世界はその理の基礎となるべき者として、わしらを選んだ。この世界で最初の一步を踏み出す存在となるべき二人を、な」

「……」

「春臣、分かるか？ そういう理由でわしらはここにいるのじゃ」

「……はあ」

春臣は肩から力が抜ける。

彼女の言わんとするところは分かったが、しかし、なんなのだろう、この現実味のなさは。いきなり、ぽっかりと開いた穴に滑りこんでしまったような感じだ。

いや、それも仕方がないだろう。

先程からの会話では、世界だの、理だの、ひたすらにスケールの多きすぎる言葉が並べ立てられ、春臣の想像を遙かに超えることばかりが議論されているのだ。

そこに、単なる人間である自分がああだこうだと言葉したところで、その実感が伴わないことは必然と言っていい。混乱するのは当たり前なのだ。

自分たちが世界の理になっただって？  
嘘だろ。とても信じられない。

しかし、そんなことなど知る由もない媛子は、急に「むふっ」と  
笑い、

「ふふふ、選ばれし二人じゃのー。ろまんちっく、という奴じゃの  
ー」

と幸せそうに目配せをしてくる。彼女には、自分たちが世界の理  
となってしまう事実など、さほど思い悩むことでもないようだっ  
た。

しかし、もちろん、春臣はそんな彼女に目配せをし返すようなお  
茶目な気分にはなれなかった。

空虚な気持ちのまままで彼女を見つめる。

「……………」

そんな春臣に媛子は額を人差し指で突いてきた。

「なんじゃ、反応が薄いのが」

と詰まらなさそうに口を尖らした。

「嬉しくないのか？」

「いや、よく分かんねえよ、俺」

隠しきれない不安が、口をついて出る。

「何がじゃ。そんな鳩が豆鉄砲食らったような顔をするでない。空気を読めぬ奴じゃのう」

「あんな、媛子。俺にはもうさっぱりなんだよ」

「うむ？」

「今日はどうしてこう、次から次へといろんなことが起こるんだ？」

「こんな奇想天外な展開、誰も頼んでねえよ。俺は、俺は自分の頭がぶつとんで、そのまま宙で破裂して、なんていうか、どうかしちまいそうだけ、なあ」

そうして、春臣は頭を抱えて俯いた。そのまま前かがみになって、膝を抱え、座り込む。

すると、急に、背筋に悪寒が走った。

俺は、俺は、これから一体、どうなっちまうんだ？

世界の理だなんて、そんな途方もないものを俺は背負っていけるのか？

全身が震え出すような恐怖がわいてくる。小さく、カチカチと歯がなった。

「ほれほれ、春臣、なぜ落ち込んでおるのか知らぬが、元気を出せ」

しかし、相変わらず彼女は楽しそうに少々乱暴に肩を叩いてくる。

「わしらはどうやら、あの二人組のようになったようじゃぞ」

「二人組？」

何の、ことだろう。

「ほれ、何と言ったか、あ、あがむ、と、犬？ これは神社の狛犬

のことじゃったか？」

「おい、もしかして、それはアダムとイブのことか？」

「おお、それじゃそれじゃ。それが一番卑近な例かのう」

「いや、そうかもしれないけれど、それでもそれは聖書の中の話だから、全然実感ないって」

言い返しながら、春臣は頭を膝の中にうずめる。

「しかし、お前が言う事が本当なら、もしかして、これから、世界には、お前のようなホカノがやってくるってことか？」

「うむ。その通りじゃ。これから世界がどのように変わっていくかは、まだわからぬが、しかし、近い将来、この世にもホカノが流れ着き始めるじゃろう」

「……」

「神々の代わりに人と共に歩む存在として、わしらは選ばれた。春臣、ホカノがこの世に生み出されたのは、こういう理由だったのじゃ。」

そう語る彼女は、目をキラキラと輝かせて、まるで子供のようにだった。どうしようもない不安を抱えて、暗い気分になっている春臣とは裏腹に、これからの未来を考えて、喜びの感情を抑えられない様子である。

「人間とホカノが生きる新たな世界が始まるのじゃ。そう考えると、わくわくしてくるのうー！」

と、はしゃいでいる。

しかし、そこで、ついにこらえ切れなくなった春臣は、

「あーのなー！」

と刺々しく言葉を彼女にぶつけた。

「俺は……俺は、お前の説明を理解出来ても、この状況を許容出来たわけじゃないんだよ！」

彼女は春臣の怒声に驚いたようで、不安そうに眉をひそめる。

「どうした、春臣。何をそんなに苛立っておる」

悲しそうな彼女の瞳を見て、春臣は我に返った。

「いや、ごめん。いきなり大声を出して。でも、分かってくれ。俺には、全てを受け入れるには少し時間がかかりそうなんだ」

「春臣……」

「少し、考える時間が欲しい。落ち着いて、この状況を考える時間が……」

アダムとイブだとか、春臣にはそんな風に軽々しく言えるほど、楽観的に思える心情ではなかった。

とてもじゃないが、世界の理など、自分に担える自信はないし、そうなったという実感もない。

全く、どこから手をつければいいのか、何から悩めばいいのかすら、皆目分らない。道しるべの何も無い砂漠の真ん中に立っている気分である。

「何だか、怖いんだ。媛子」

「春臣……」

すると、すっかり困惑する春臣に対し、彼女はにっこりと笑い返

した。

「構わぬぞ」

と高らかに笑うように言う。

「え？」

「うむ、それで構わぬ。ゆっくりその恐怖を溶かしていけばよい。確かに、お主が困惑するのも当然の反応じゃ」

彼女はうんうんと頷く。

「しかし、必要以上に、余計なことを考えることはないぞ」

「媛子……」

「全てはなるようになるのだ。もっと気持ちを楽に持て。ほれ、椿が時々言っておった言葉があるじゃろう。ねっといっとびーじゃったか？」

「レットイットビー……」。

「なすがままに、か」

「うむ。事態はお前が思うほど、深刻なものではない。わしらはな、これからもいつも通り暮らしてゆけばよい。なぜなら、それこそが、この『世界の望むこと』だからじゃ」

そうか。

言われて、春臣は、少し気分が楽になった気がした。心を縛っていた見えない糸がほぐれていく。

「そう、だよな……」

何も、心配する必要などないのだ。

「ごめん、媛子。情けない顔してたな、俺」

「むっ、構わぬと言ったじゃろ、春臣」

すると、少し怒ったような声で彼女が言ってきたと思ったら、彼女の顔が目の前まで接近していた。

「お、おい、媛子」

その言葉が届く前に、こっん、と額と額がぶつかる。とても至近距离で、彼女と目があり、鼓動が一気に加速した。

ふわり、と優しい彼女の甘い香りが鼻をくすぐる。

じゃがな……。

彼女は言葉を続ける。

「勘違いするなよ」

そして、今度は、春臣の手を握ってきた。そつと握る。次第に、ぎゅつと……ぎゅつと強く、握る。

「そもそも話として、わしらは世界が望むからこそ、そうするのではないのだぞ」

「あ、ああ」

急にそんなことを言われ、春臣はまごつきながらも返事をした。



「そうだな。そうするのは、『俺たちがそうしたいと望む』からだ」  
大事なことを忘れるところだった。

「そこには、他の誰の意思も必要ない、関係ない」

ここからが、全ての、始まりだというのならば、尚更、必要ない。  
俺達は俺達の生き方で、ペースで歩けばいいのだ。

「うむ」

彼女が力強く頷く。

もう、俺達は、ひとりじゃないんだから。

そして、気がついた時には、春臣たちは先程の神の森、その原っぱの上に横たわっていた。

消えかけていた媛子の体の輪郭は、世界の理が書き換えられたせいか、しっかりと現れており、春臣の手首には、媛子の存在の強さを表すように、彼女が黎明の炎の中で握りしめた痕が、くつきりと残っていた。

169 黎明の炎 8 (後書き)

次回からはエピソードとなります。

どうも、ヒロユキです。言っておきますが、今回は(前にも何度かあったような)半分泥酔しながら、ぶつぶつ言いながら、書きあげた文章です。多少おかしい部分があっても生温かい目で見守ってあげてください。

「おーい、少年！」

うなじがヒリヒリと焼けついてしまうような暑い日差しが降り注ぐ中、家の外壁の前で『ある作業』を行っていた榊春臣の耳に、間延びした女性の声が届いた。

シャツの袖をまくりあげ、周囲に意識を配ること無く、額から溢れる汗もお構いなしに、その作業に熱中していた春臣は、すぐにはその声に意識を持っていくことが出来ず、

「うん？」

という微妙なリアクションになった。

「何か、声がしたかな？」

ふう、と息をつき、作業をしていた手を休めると、緩慢な動きで、声がした方を見る。

その声の主は、すぐに分かった。

どこか修行僧を思わせる白装束に身を包み、道行く人が思わず目を奪われてしまうほど、目が覚める蒼い髪をした女性、時雨川ゆずりである。

「おーい、おーいってば」

彼女は春臣が立っている壁の端のちょうど反対側辺りにいて、手を大きく振っている。

よく見れば、この茹だるような暑さの中で、彼女はひとりだけ、

まるで見えない冷たい空気に包まれているかのように、とても涼しげに佇んでいた。

春臣の方はと言うと、流れ出た汗で濡れた髪が肌にくっつくほどだというのに……。

一体、この差は何なのだろうか。

彼女のベタつきのないさらさらの髪を見ながら思っ。

「何ですか？ 時雨川さん」

その不公平さを少々腹立たしく感じながらも、春臣が返事をする  
と、

「少年少年、もう足らなくなっちゃったんだよ」

彼女は心底困った顔をする。

「足らなくなった？ 何を言ってるんですか」

春臣はそれはおかしいと首を捻った。

「ペンキ《……》ならそこにたっぷり詰まってるでしょう？」

そうして、彼女の横に置いてある缶を指差す。それには、遠い春臣の位置からでも確認が出来るほど、注がれた塗料がたっぷり詰まっていた。

しかし、ゆずりは手に持ったブラシをぶらつかせながら、違う違うと首を振った。

「そうじゃないよ、もう。察しが悪いな、少年は。ペンキじゃなくて、お、さ、け。お酒だったら」

「お、お酒？」

「ほら、さっきの休憩中に注いでもらったんだけど、もうすっかりかなのさ」

と、彼女は片手に持ったカップをふるふると揺すぶる。なるほど、確かに空っぽのようだ。

しかし、春臣は呆れ顔で言い返した。

「何を寝ぼけたこといつてますか。そんなもの、いつまでも飲んでないで、少しは作業をして下さいよ。『これ』を完成させるまで、もう時間はあんまりないんですから」

「ええー！」

すると、彼女は子供のような声を出して嫌がった。

「何がなんでも？」

「何がなんでもです！」

「おかしいよなー。そもそも時雨川は、どうしてこんな面倒な仕事、やってるんだっけ？」

思わずがっくりきて、春臣は肩をすくめる。

「どうしてもこうしても、あなたは僕が壊れた家の修復作業を手伝ったら、この前ご自身が散々消費した、僕と媛子の一週間分の食料代を帳消しにするって聞いて、喜んで首を縦に振ったじゃないですか」

「……そうだったっけ？」

ゆずりはばかんとした顔で頭をポリポリと掻く。どうやら、彼女は相当いい加減な記憶力をしているらしい。

「そうですね」

「ああ、そんなじゃもう、帳消しとかどうでもいいから、お酒だけ持ってきてよー」

「そうはいきません。時雨川さんはその話を一度了解しているんだし、それにこれ以上借金を増やしたら、本当に首が回らなくなりますよ。それでいいんですか？」

「う、うう……」

恨めしそうな目でゆずりは春臣を見るが、春臣は一向に気にしない。

「ほら、嫌ならさっさと作業に戻る」

と容赦なく追い打ちをかける。

「はあ、少年は鬼だな」

彼女は重い溜息をついた。  
すると、

「あ、あの一、時雨川さん」

ゆずりの横から、少し遠慮がちな声があった。春臣が視線を移すと、そこには巫女服に身を包んだ少女、瀬戸さつきが立っている。彼女は相変わらず、礼儀正しい様子で、ゆずりに頭を下げていた。

「少し、お願いがあるのですが」

そして、顔を上げると、申し訳なさそうな面持ちで、控えめにゆ

ずりを見つめる。

「なんだい？ 巫女の少女」

「あの、私、身長が足らなくて、その葉っぱの部分まで手が届かないんです。その、緑のペンキで塗ってもらえますか？」

と壁を指差した。

「へ？」

それに合わせてゆずりの視線が壁の上部をさまよう。

「そ、そこなんですが……」

すると、その時。

説明に指をさしていたさつきの身長が、いきなり、１メートルほどぬるっと伸びた。

「きゃ、きゃあああ！」

訳が分からず、驚きに悲鳴を上げる彼女。それは春臣も同じ気持ちだったが、すぐにその事情を理解する。

彼女はなんと、突如その場に現れた暮野木犀によって、肩に担ぎ上げられていたのである。

「おおっと、変に動かないですよ。さつきちゃん」

彼女を急に肩車した木犀は春臣よりも幾分たくましい体つきをしている少年で、さつきを担ぎ上げたまま、はいはいとその場を動き回った。その度にさつきがゆっさゆっさと揺すぶられ、彼女のポニ



ーテールが前後左右に飛び跳ねた。

「きゃ、きゃああ！ お、下ろしてください！」

思わず、さつきは絶叫する。

「何でさ、ほら、こうすれば楽に壁に手が届いて……」

「いえ、いえ結構ですう。こ、これ以上高いところに行ったら、私、大変なことになり！」

「え、何？ 高所恐怖症？」

「いえ、で、ですからー、もう、無理なんですー！」

「ちょ、ちょっと、さつきちゃん。もう少しじっとしてよ」

少女の絶叫が響き、じたばたと動くため、少年もさすがにふらつき始めた。

これは見ていてとても危なっかしい。

さすがに注意をしようとしたが、その前に、今度は関西弁で笑う別の少女の声が春臣の耳に入った。

「あははは、さつきちゃんはおもろいなー」

春臣の家のごく近所に住む、お隣さん、青山椿だ。何をするにもマイペースで、自他共に認める楽道家の天然少女である。

彼女は脚立の上になり、壁の上部の方でペンキのブラシを持って、壁に色を塗っている。

が、今はその作業を中断し、

「顔真っ赤にしておっかしー」

と口を抑えながら、指をさしている。そして、その彼女の揺れに

対し、脚立が微妙に動いていた。

これは、こちらを先に注意しておいた方がよさそうだ。そう判断した春臣は彼女に声をかけた。

「おい、青山。よそ見するなよ」

「へ？」

「ただでさえ脚立の上は不安定なんだ。気を抜くと落っこちるぞ」

すると、彼女は指をパチンと鳴らし、

「おお、榊くん。ザツツライト、その通りや。人は高いところにおつたら、地面に落っこちるもんやしな」

当たり前すぎることを、うんうんと一人で頷く。

「けれど、大丈夫や。心配あらへん。うちには特別な能力があるんや」

「特殊な能力？」

「せや。どんな時でも完璧な、うちの類まれなるバランス感覚をしかと見ときい」

おいおい、である。突っ込みたくなること、山のごとし、である。

「いや、出来ればそんな根拠不明な能力を發揮するような状況にはなって欲しくないんだがな。っていうか、その、俺が変わるうか？」

春臣はそう申し出た。

「うん？」

「青山が進んで壁の上部の色塗りをしたいと言ったことはさ、その、

できるだけ優先してやりたいけれど、やっぱり、そこはお前には危険過ぎるぜ」

もしも、落ちて骨でも折ったら……。

華奢な彼女の手足を見ながら、春臣は思う。

しかし、彼女はあくまで問題ないと主張した。

「あかんで榊くん。友達のこととはきちんと信用せな。うちが出来る言うたら絶対に出来るって」

「それもまた根拠不明だな」

「あんなー榊くん」

と、彼女は腕組みをする。

「そもそも物事に根拠なんか関係あらへんてこと、うちがこの場で証明したるで！」

そう言う彼女の瞳は決意の炎が燃えていた。  
しかし、

「うーん、でもやっぱり、そこはかたなく不安なんだが……」

と、そこで、春臣はある重大なことに気がついた。

「暮野！」

なんと、さつきを肩車し、ふらついている木犀の足元に、躓いてしまいそうなほどの大きな石を見つけたのである。

「足元が危ない！」

咄嗟に春臣は、警告を叫ぶが、すでに手遅れだった。木犀の足はもはや、石に当たってバランスを崩した状態で、グラと今にも倒れそうになっている。

「きゃああああー!!」

その頭上に乗っているさつきの絶叫が殊更大きく響く。

「こりゃ、まずいぞ!!」

と、

そこで、木犀の手が伸びるのが、春臣には見えた。

おそらく、倒れるのを阻止しようと、何かに掴まるうと考えたのだろうが、しかし、その判断がまずかった。

わらにもすがるつもりで伸ばした彼の手の先にあったのは、不幸にも、今度は椿が登っている、脚立の足だったのである。

「きゃあああああー!!」

今度はその脚立が引っ張られ、大きく傾く。そして、当然のことながら、その上に乗っていた椿は足場を失い、そのまま、地面に落下を始めた。

「青山!!」

春臣は駆け出し、彼女の落ちてくる場所を見定め、先回りした。彼女を受け止めることによって、少しでも衝撃を和らげようと思ったのである。

と、同時に春臣は、自分の目の前から走り寄ってくるゆずりの姿

を確認した。彼女もさつきや木犀の転倒を防ごうと、こちらに向かってきていたのだ。

しかし、それが結果的に仇になることを春臣はその時、推測することは出来なかった。

というのも、椿が脚立から、落下を始めた時、彼女は何と、手に持っていたたつぷりのペンキが入った缶を、空に放り投げていたのである。

彼女の手を離れ、そこから溢れでたペンキが、綺麗に宙に散らばる。

それは、

空に、高く、高く、飛んだ、

赤い色。

空に、高く、高く、弾けた、

赤い色。

太陽よりも赤く、煌く、その色。

それらは当然のことながら、地上の重力に引っ張られ、至近距離に固まっている春臣たち、五人の頭上に落ちてくる。

ということとは、つまり……。

その数秒後、五人の絶叫が、こだまりました。

というわけで、エピソードその一です。次回はその二となるわけですが、おそらく、それが最終話となります。そう思うと、へたくそな小説と言えど、我ながらなんだか感慨深いです。振り返れば、二年近く連載してきたわけですが、その間、僕が頑張つてこれたのは、読者の方々がいてくれたからにほかなりません。本当に感謝しております。次回で、この物語とも、その登場人物たちともおさらばとなると物悲しいですが、どうか最後までお付き合いくださりますようお願いいたします。

まるで水底に宝石を敷き詰めたように真夏の光をきらきらと照り返している楡川。

その穏やかな流れの上へ架かる橋に、一人の少女の姿があった。僅かなそよ風に、その自慢の赤い髪をゆさゆさなびかせて、麦わら帽子を被って歩いていく。

彼女は。

神の世界からやって来た少女、緋桐乃夜叉媛である。

彼女は出かけた先から戻る途中のようで、喉元を伝う汗をぬぐいつつ、蒸し暑く気だるい午後の風が吹き抜ける道を、春臣の家に向かっていった。

何か買い物をした後で、さぞ上機嫌かと思いきや、

「ぶっ……」

と夜叉媛は、手に持っていたコンビニのビニール袋を不機嫌そうに揺らした。

「どっしょっしょ」

と悲しげに呟く。

「どっしょって、わしがこんなことをせねばならぬことになったのじゃ」  
「？」

そして、どこまでも広がる青い空を見上げ、それを恨めしそうに目を細めながら睨んで、顔を落とした。



「うむう、このクソ暑い中、あんな遠いコンビニまで歩かせおつて、春臣の奴、わしになんの恨みがあるんじゃ？」

小石を蹴飛ばし、頬をふくらませる。

そして、今度は虚しくため息をつくとき、コンビニ袋の中身を見た。そこには、現在、春臣の家に集まっている人数分のおいしそうなおアイスクリームが入っている。

なぜ、夜叉媛がこんなことをしているのか、その理由は数十分前に遡る。

大学の夏休み期間中であるこの日、春臣の家には、いつものメンバーが揃っていた。そのメンバーとは、青山椿に、瀬戸さつき、暮野木犀に、時雨川ゆずりの四人である。

彼らは、春臣の呼びかけに応じ、集まったのだが、なぜ、彼がそんな呼集をかけたかというとき、先日、巫女である瀬戸さつきが使用した神の風力によって、壊れた家の修復作業を行うためであった。この作業は数日前から数回に分け実施されているのだが、それほどまでに、先日の事件で負った家へのダメージは大きかったのである。

夜叉媛はさつきが使う神の力を、直接見たわけではない。

しかし、それが相当の威力であったことは、その後の惨状を見れば、大体予想がついた。

なにしろ、床の板は跳ね上がり、両側の壁はボロボロで、冷蔵庫は倒れかけ、扉は閉じることが出来ず、天井には到底覆い隠すことの出来ない大穴が開いているという、散々たる状況だったのである。いくらなんでも、これを無視して生活など出来るわけがない。毎日大量の埃を被った白飯を食うなど、断固拒否する。

という具合いで、今日もその修復のための作業が行われることにあいなったわけであるが、これが炎天下の元で行われるため、夜叉媛は、作業の休憩に差し入れということで、アイスクリームを近く

のコンビニから買ってくるように指示されたのである。

しかし、夜叉媛は最初、その春臣からの指示に疑問を持った。なぜなら、まだこの辺りの土地勘に自信のない夜叉媛にそんなことをさせるのは、少々危険に感じたからである。それならば、天才的な方向音痴の才能を有する椿は除くとして、木犀かさつき、もしくは春臣自身が適任となるのではないだろうか。通常ならば、そう判断するはずである。

だが、そう反論しても尚、春臣は言葉を変えることはなかった。お願いだから、と半分懇願するようなことまでして、わざわざパソコンで入力した細かい土地の地図（明らかな計画性を感じる）をプリントアウトして渡し、夜叉媛をコンビニに向かわせたのである。そこまでされるには、よっぽどの理由でもあるのかもしれない。そう考えた夜叉媛は渋々ながら了解し、こうして真夏の田舎道を歩いているのだ。

しかし、一度了承したこととはいえ、夜叉媛は不満だった。

「全く、わしが炎の中から生まれたといっても、熱に対して耐性があるわけではないのじゃぞ！」

そう空に叫んで、口を尖らせる。

「はっ！ もしかすると、あやつ、神社の森で散々ビンタしたことを、根に持っているのじゃろうか？」

夜叉媛は思い出す。

あの夜叉媛が疾走した事件の後、彼の頬は散々夜叉媛に平手打ちをされたせい、しばらくの間、かなり腫れていたのだ。

彼はその点に関して、夜叉媛に文句を垂れることはなかったものの、夜叉媛に隠れるような形で彼が何度も頬を痛そうにさすっ

た。

その時にはそれほど気にすることもなかったが、彼には相当ストレスに感じていたのかもしれない。

「まさか、まだあのことを怒っておって、それで、わしにこんな嫌がらせを……」

だが、そこで夜叉媛は考え直す。  
違う。それは、ない。

もし、この茹だるような猛暑の中、夜叉媛に不慣れな道を歩かせることが嫌がらせだと言うのなら、この間、外で家の修復作業を行っている春臣たちもそれと同じような辛さを味わっているのではないだろうか。

むしろ、ただ歩いているよりも、体を動かして作業をしている方が、何倍が大変だ。

ううむ。そう考えると、これが春臣からの嫌がらせだという推理の成立は困難になる。

「……そうになると、どうしてわしに……」

それがまた、分からなくなる。

再び考えようとすると、暑い日差しが、むわりと吹いた熱い風が、夜叉媛の集中力を削いだ。同時に、考える気力も萎えていく。

「ああ、暑い暑い」

恨めしく、言葉を繰り返す。手をうちわにして、パタパタと扇いだ。しかし、風は僅かばかりで、夜叉媛にはかえって余計に暑くなつた気がした。

「ふっ……」

待てよ。

そこで、夜叉媛の前にある少女の顔が浮かんだ。

そもそも、じゃ。

そもそも、あの巫女の娘が春臣の家に風を吹かせ、内部をバラバラにしなければ、こんなことにはならなかったのじゃ。

この暑い中、春臣たちが外で作業することもなく、わしがこうして、苦労の上、アイスを買に行くこともなかったはずではないのか。

夜叉媛は事件の後、彼女が言っていたことを思い出す。

「確か、悪者たちを追い払うために仕方なく力を使ったと言っておったが……しかし、それでも場所と加減は慎重に考えて欲しかったのっ」

夜叉媛は思う。

そのせいで、春臣たちはここ数日、壊れた一階部分の修理に明け暮れることになったのだ。一体それが、どれほど大変だったことか。

「しかし、『あの男』は相変わらずお人好しで、あの巫女の娘から一銭も金は取らぬと言っし」

全く……あやつときたら。

しかし、言葉とは裏腹に、夜叉媛は嬉しそうに微笑んでいた。

「いつか思いもよらぬ大損をしても、わしは知らぬぞ」

ふふ、と笑う。

と。

そこで、道の向こうに、ようやく帰宅すべき家が見えてくるのが分かった。あの、竹やぶの近くの小さな青い屋根の家だ。しかし、

「あれ？」

思わず、驚きで夜叉媛は手にしていた袋を取り落としそうになってしまう。口をあんぐりと開けて、棒立ちになった。

「あれは、『緋桐の花』じゃ……」

なんと、道から見える家の白い壁に大きくその花の絵が描かれているのだ。

それは、太陽の光を浴びて、生き生きと輝いているように見えた。綺麗な赤い花びらが風に揺れているように描かれている。

「一体、これは……」

何度か目をこすってみる。  
すると、

「おお、媛子、帰ったか」

誰かが近くに駆け寄ってくる声があった。夜叉媛はその声の主がすぐに春臣であると気づく。  
そして、振り向いて、

「は、春臣、これは……」

問いかけ、その途中で。

「って、なんじゃその格好は!!」

夜叉媛は絶叫する。

無理もない。なにしろ、夜叉媛に近づいてきた春臣は何と全身真っ赤に染まっていたのである。頭の髪の毛も、頬も、シャツもズボンも、靴まで真っ赤だ。

夜叉媛にすぐに彼と判断は出来たものの、もしももう少し遠目に見ていれば、何者かを判断することは難しいことだろう。返り血を浴びた血まみれの殺人鬼にでも勘違いするかも知れない。

「一体、何が……!!」

起きたのじゃ!

「ああ、これさ、事故でペンキの缶がひっくり返っちゃって」

ハハハ、と笑う彼は鼻の頭を手の甲でこする。すると、そこにもまた赤いペンキがついた。これではまるでサーカスのピエロである。

「……このザマさ」

「このザマ、とな……」

夜叉媛は啞然として肩を落とし、彼の背後を指差す。

「もしや、あやつらも……」

「ああ、みんな綺麗に真っ赤なペンキを被っちゃったよ」

すっかり一色に染まってしまっている彼らは、遠くでベタバタの

それをぬぐいながら、夜叉媛が来るのを待っているようだった。

青山椿は、相変わらずの無邪気な笑みを浮かべ、

瀬戸さつきは、なぜか隣の木屋をちらちらと見ながら頬を染め、

一方、彼女に見つめられている木屋は、にやにやしながら、夜叉媛たちを眺め、

さらに、もう一人、自称お守り商人の時雨川ゆずりは、何やら一升瓶を片手に虚ろな目をしてその場に座り込んでいる。

そして、その全員がもれなく真っ赤にペンキの色を被っているのである。

何と、滑稽なのだろう。

夜叉媛はそんな彼らを呆れると共に、新たな疑問が湧いてきて、春臣を見た。

「春臣、どうして、こんなことを？」

今度は家の壁の方を指さす。

「何だよ、変な質問する奴だな」

すると、春臣は怪訝そうに眉をひそめた。

「決まってるだろ。お前がちゃんと俺たちの元に戻ってきたことをお祝いするためだ。俺はこれを準備するための時間を確保するために、お前に買ひ物を頼んだんだよ。どうだ、驚いたろう？」

「それで、あの、花を……」

言いかけて、途端に、きゅつと胸が締め付けられた。  
なにしろ、数週間前、春臣が作ってくれた緋桐の刺繍の入ったお守りを夜叉媛は川に投げ捨ててたいのだ。

自分の覚悟を示すためとはいえ、彼との思い出の品に、酷いことをしたものだ、と、夜叉媛は未だに後悔していたのである。

春臣を、深く傷つけてしまったのではないかと。

しかし、彼はあっけらかんとして、

「ああ。いくらなんでもあれはもう放れないだろ？」

そう言つて、ハハハと明朗に笑う。

そんな明るい彼の姿が、ずんと胸に刺さった。

「はる、おみ」

すまぬ……。

夜叉媛の中に何か熱い物が込み上げてくる。すると、そんな夜叉媛を彼は小突いた。

「馬鹿野郎。辛気臭く謝つてんじゃねえよ。せつかくこれからが始まりだつてのに」

「は、始まり？」

「そうだよ。家が元通りになって、お前も戻ってきた。俺も本当の自分を取り戻したし、失いたくない大事な仲間たちもこの通り、全員無事で生きている」

俺達は困難をまたひとつ乗り越えたんだ。

彼はそう、力強く宣言するように言った。



それは、また新しいスタートに立ったってことさ。

「そして、これからは、お前が言っていた新世界が始まるんだろ？」

「う、うむ」

「だったら尚更、この始まりを祝わないといけないって」

そうして、春臣は何の躊躇いもなく夜叉媛をふわりと抱きしめた。それがあまりにも自然な動きで、夜叉媛は、何の抵抗をする暇もなく、彼に包まれていた。

「お、おい……」

声が、漏れる。

すると、背後でその様子を見ていた仲間たちに、おお、とどよめきが走り、何人かが息を飲み、何人かがやいやいとやし立てた。

あやつらに、み、見られておる。

それを意識すると、夜叉媛は急速に耳が火照るのを感じた。

ああ、誰とも目を合わせたくない。

一刻も早く彼の腕から抜けださなくては。

この状況を打開するために夜叉媛はそう考えるが、なぜか、抵抗する力が生まれなかった。そうしているうちに、春臣と頬が触れ合い、彼についていたペンキの赤色が映るのを感じる。

ああ、もう、何もかもがじれったくて、くすぐりたい。

「や、止めぬか、春臣」

夜叉媛は戸惑いが隠せない。

「どうした？」

「は、恥ずかしいであろう」

と、腕でもがく。

「構わねえだろ、今更そんなこと」

「し、しかし」

すると、彼は急に夜叉媛をまじまじと見つめ、少し悲しげな表情でこう言った。

「もしかして媛子、俺にこうされるの、嫌いなのか？」

「う、む、むっ……」

こやつ、卑怯な言い方を覚えおつて。

そう言われれば反撃が出来ぬではないか。

そのまま何も言えなくなり、夜叉媛は、力を抜いた。しかし、成されるがままというのも癪なので、些細な仕返しとして、夜叉媛の方からもぎゅっと彼を抱きしめ返すことにした。

そうして、どれくらい経ったか。

しばらく抱きしめられた後で、彼は耳元で静かに囁いた。

「この赤はよ、始まりの色だよな」

「始まり、の？」

「そうだよ。俺はあの日見た炎の色をまだ覚えている。黎明の炎の色だ」

そう、それは世界の理をつむぐ、永遠なる炎。彼は言う。

「俺はな、あの炎をさ、『世界一優しい炎』だと思っただ」  
「それは、どういう意味じゃ？」

それはな……。  
彼は続ける。

「炎つてのは、普通、何かを焼き尽くすものだろう」  
「え？」

「何かを燃やして灰にして、その後には何も残らない。全てを粉々の塵に葬っちゃうものが炎だ。人々にとっては便利な道具でもある反面、自らの命を奪ってしまいかねない恐怖の存在でもある。それが炎、それが普通なんだ。けれどな」

けれどな。

彼は力を込めて、繰り返す。

「あの炎は違う。あれは何かを亡き者にするのではなく、何かを、ここにはない物を、生み出すための炎だ」

「……」  
「世界の理を生み出し、全ての生みの親となる、母なる炎さ。そして」

媛子、お前の髪の色は、世界一、優しさに満ち溢れた炎の色さ。

彼は抱きしめた夜叉媛の髪を愛おしそうに撫でながら、言う。

俺達はこれからその世界一尊い炎の色を守り続けなくちゃいけない。  
い。

何があっても。

あの黎明の炎が照らし出してくれる未来を、守らなくちゃいけない

い。

力強く、繰り返す。

「そうか……わしの髪は、世界一、優しいのじゃな」

夜叉媛はその彼の言葉に、自身が心底安心したのが分かった。それは、何か空っぽだったものに、波波と希望が注がれていくようなそんな高揚感にも似ているものだった。

そして、夜叉媛は、彼に甘えるように、子猫のような頬ずりをしてみた。

「では、存分に守っておくれ。お主よ」

それに応じて、彼が頷いた時、今までのぬるい空気が嘘のように新鮮で爽やかな一陣の風が辺りを吹き抜けたのが分かった。

それは、さらりと、肌を馴染む、鮮やかな風だった。

きつと、

きつと、あの風は、今、この世に生まれたに違いない。

夜叉媛はなぜかそう確信した。理由はないが、確かにそう思ったのである。

願わくば、

そう、願わくば、

もっと吹け、生まれたばかりの風よ。もっともっと強く、吹け。

夜叉媛は念じる。

そして、この胸の中で燃え盛る炎を、空まで飛ばしてくれ。どんな飛ばしてくれ。

この世界中に運んでくれ。

見渡すかぎり、遠くまで。

そう、どこまでも、遠くへ。どうか……。

そう願う夜叉媛の目には、緋桐の赤い花が映っていた。その可憐な赤い花は、いつまでも、いつまでも、夜叉媛の瞳の中で、静かに揺れていた。

どうもヒロユキです。

いつか来ると思っていました。ようやく物語が完結いたしました。長いようで短い二年。読者の方々には、こんなにも長期に渡り、お付き合いいただき、本当に言葉もありません。僕個人の気持ちとしては、ここでこの作品に対する考えや想いをいろいろと書き連ねていきたいのですが、いかんせん、本編の後のため、そこまで書く余裕がありません。なので、とりあえずは物語を完結とさせていた。以後で、後日、あとがきとして、一話分を小説の最後に追加させてもらおうと思います(あくまで予定なので、更新しなかったらごめんなさい)。興味がおありな方はぜひともお読みになり、貴重な人生の時間を僕の馬鹿げた幼稚な文章で存分に浪費されるとよろしいかと思えます、はい。

さてさて、名残り惜しくはありますが、早速お別れの時間でございます。悲しいですね。こんなふざけた文章を書きながら何をアホなと思われるかもしれませんが、これで結構僕の心はじゅんと来てます。とつても寂しいのです。まるで、長い長い夏休みが終わってしまふような、そんなどうにもならない切ない感じがあります。登場人物たちが実在しているのであれば、ここで「お疲れ」の一言くらいかけてやれるのですが、残念ながら、彼らは僕の妄想の産物。手と手を合わせて握手、なんてことすら出来ない。ああ、センチメンタル。

しかし、そんな気分にもいつまでも浸っているわけにはいきません。なぜなら、僕は早速次なる作品にとりかからなくてはならないからです。この作品については、まだ計画の段階なので、連載の開始はいつになるのか分かりませんが、早ければ、8月中に始めることが

出来るかもしれません。ご興味がおありの方はぜひ、お読みください。僕が血の涙を流して喜びます。

最後に、こんな下らない後書きを最後まで読んで下さり、本当にありがとうございます。小説書きとしてとことん未熟な私ですが、これからも性懲りも無くまだまだ文章修行にこの身を投じていく所存であります。そんな阿呆な僕を、不幸にもまた見かけるようなことがあれば、読者の方は「またお前か」と文章を指差し、呆れたため息を一つ吐いてくださいね。よろしく願います。

それでは、長くなりましたが、そろそろ店じまいです。明かりを消して、暖簾を下ろします。もう何も言い残すことはありません。読者の方、また会う日まで、どうかお元気で。作者のヒロユキでした。

172 あとがき( +? ??)

ええ、読者の皆様、ごきげんようでございます。

どうも、ヒロユキでございます。

そして、物語の後書きでございます。

後書き、あとがき、アトガキ……。

後に書くを書いて後書き。

うん、いいですね。この上無くシンプルな表現です。余計なものが何も無い。なので、僕も余計なことを言わずに、さっさと後書きを書いて寝てしまおうと思います。

というのも、実はここに到るまで、何度か僕はこの小説の後書きを書くかと試みてきました。何度も何度も、書いて、そして書きなおしてきました。

しかし、その度に、語りたいたことが山ほどあり、どれを書いていけばいいのか、その事柄の取捨選択で大いに迷った挙句、書けば書いたで、非常にまとまりのない文章になってしまったため、止む無く、全てをボツと致しました。すっきりすっぱり全ボツです。

物事、欲張りになりすぎると、大抵失敗してしまうものなのです。

僕がこの後書きを書くに際し、得た教訓はそんなところでしょうか。はい。

さてさて、皆様。

僕のどうでもいい呟きはさておき、ああだこうだと言いつつ、二年もの長期に渡り、書き続けてきたこの作品、「天罰なんて怖くない！」は如何でしたでしょうか。

僕にとってはですね、この作品はまるで、何も用意せず、手ぶらで魔王に挑む大冒険に出かけるような心地がした物語でした。本当に最初はこんな結末になる予定なんて一切なかったのに、一体何を



間違っってこんな物語になっってしまったのでしよう。何度も何度もそう思ったものです。

みなさん、覚えていますか？

僕はですね、物語を書き始めた当初、この小説をコメディ風な作品に仕上げたいと、そんなことを語っていたのですよ。ええ。

さて、それを踏まえた上で、物語の結末を読み終えた皆様、いかがですか？ 僕のその初期の頃の発言に同意していただけの方がどれほどいらっしやるのか、大変見物であります。

おいおい、最終章なんて、どこに笑える場所があった？ なんて言葉が聞こえてきそうでございますね。ふふふ。

おそらく、皆様には僕がどれだけいい加減な人間かということが、嫌というほど理解できたのではないのでしょうか。

しかし、そうは言っても、僕の中には書き始めた当初から変わらない、この物語の軸となるテーマがございました。嘘つけこの野郎と言われるかもしれませんが、いえいえ、本当にあったのでございますよ。

僕がこの物語を書くに際し、決めたテーマは「自分の居場所」というものでした。

今まで慣れ親しんできた故郷を離れ、ただ祖父の家があるからという理由で、見知らぬ人ばかりの町にやってきた少年と、訳もわからないままに、住み慣れた世界の領域を外れ、別世界へとやってきた孤独な少女。

この物語は、そんな孤独な彼らが出会い、互いに助け合い、時にぶつかりあいながらも、新たな仲間たちと、自らの居場所を、強く固い絆を、築いていくお話なのです。

読者の方には、それを意識した上で、もう一度この物語を思い返してみてくださいただけませんか？ すると不思議なことに、少しはこの下しくそな小説がぴかぴか輝いて見えませんか？……ええ、はい。見えませんね。すいません。（笑）

ここで、読者の皆様に僕からの質問です。

皆様には、ここが「自分の居場所」だと言える場所がございますか？

ここが一番心が安らぐと思える場所がありますか？

すぐに浮かんだ人も、浮かばなかった人もいるでしょう。

思い浮かんだ人は、それはどんな場所ですか？

それは、毎日帰るべき場所である、家族がいる家の風景ですか？

いつも馬鹿な話ばかりして盛り上がる、仲の良い友人たちの輪の中ですか？

それとも、この世で一番愛おしい恋人の隣ですか？

まだ見つかっていない人は、いつか、こんな風になりたいという理想像の一つでも考えられるでしょうか。

ふふふ。この質問の答えは今、皆様の中にそれぞれあるのですね。別に言う必要はありませんよ。あなたの心の中でそつと蓋をして、大事に仕舞っておいてください。

そして僕は、読者の方々が今どんなことを思い描いているのか想像して、ニヤニヤしながら今日は眠ろうと思います。はい。

このド変態野郎が。

そう思った方はすいません。二度と言わないので勘弁して下さい。

ともかく、そんなこんなで、この後書きも終盤となりました。いよいよ、読者の方々との惜別の時でございますね。もはや、言い残すことはありません。

名残り惜しいこと、この上ない気持ちではありますが、

こんな僕をつまらない小説が、少しでも読者の方に、いつもは考えない何かを、気付けさせるきっかけとなることを祈りつつ……

僕は今、物語の背表紙を閉じようと思います。

パタリ。

ふう……。

それでは、皆々様。

また会う日まで。

作者のヒロユキでした……………。

っと、ちょい待ってください。ページの戻るボタンはまだ待って。まだ終わるのは早いのです。おいおい、忘れるところだった。

さてさて、ここで、皆様にご報告があります。

先日、物語を完結した際、僕はこれから新しい作品に取り掛かる旨をお話しました。こちらは、全くの新作、オリジナルで、学校生活舞台にした物語になる予定でございます。

しかし、それとは別にですね。

実はですね……………。

もう一つ新たな作品を書こうと、同時進行で進めている物語があります。

それは、この「天罰なんて怖くない！」の続編となるべき作品であります。

はい、ジャジャーン。

驚きましたでしょうか。

もついい加減にしろ、と罵りたいお気持ちは分かります。すいま

せん。  
しかし、もう考えついて設定までいろいろ作ってしまった以上、書くしかありません。

今回、物語の主人公となるのは、青山椿。

そう、皆様ご存知、小説内でのボケの総合担当です。

以前どこかで、「いつか彼女を主人公にした物語を書きたいにやうにやうにや」と、毎度のごとくその場だけの適当な願望を語っていましたが、今回は何故か、それを実現する運びになりました。

簡単にその物語のあらすじをご紹介します。

物語は今作から僅か数週間後、彼女が夏休みで訪れたとある町で事件が起こります。彼女はその町の寂れた神社で奇妙な神様と出会うのですが、その神様は、町の新たな守護者となるために、椿の力が必要だというのです。そう、椿が訪れた町、神霧瀬町は、なんと守護者たる神に見放された町だったのです！

あらすじ文は現時点での作者の勝手なイメージです。本編と大いに違いが生じる場合がございます。ご注意ください。

一応、この作品は、今作「天罰」の続編になるとは言いましたが、基本的には今作との物語上の繋がりはない予定です。これは、今作をお読み頂いていない他の読者の方にも、できるだけ読んでもらいたいと考えたからです（やっぱり、一見さんにも優しい、門戸の広い作品を作りたいのです）。

そのため、当然、椿以外の登場人物は全て、新キャラクターとなります。その中には、なんとですね、椿のこいび……ゲフンゲフン。おっと持病の発作が。すいません。

さて、その作品も僕が書くので例によって、どういう展開になるのか、全く予想が付きません。椿が主人公なので、ほんわかした話にしようかと当初は考えておりましたが、現時点の構想では、かなりミステリアスな雰囲気も強くなりそうです。

彼女のポケとシリアスな空気がふんわか融合しあう作品になればいいな、と思います。はい。

目標としては、8月の終わり頃から連載を始める予定です。もし気になる方がいらっしゃいましたら、お読みいただけると幸甚でございます。

またしても長くなりましたが、それでは皆様。今度こそ、また会う日まで。

作者のヒロユキでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7257h/>

---

天罰なんて怖くない！

2011年8月14日19時51分発行